川島秀二著

國文學女性史

刀江書院刊

序

古來日本女性の活動は、大體からいへば、內面的、依存的であつて、社會の表面に立つて活躍した事蹟は甚だ乏しいので、歷史上に著れた女性の數は、男子に比して極めて少い。然し我が國の女性が、古來種々の方面に活動して、男子と共に、或は男子を助けて、國力を進め文化を發展せしめたことは、見逃すことの出來ない事實である。勿論日本婦人の本質は、蔭の力として、夫を助け子を育む、家庭人としての犧牲的獻身の生活にあつたことは、いふまでもないが、かうした中心使命をはたした外に、或は學問文藝に、或は教育慈善の事業に力を盡して、國力の發展に培ひ、文化の進步に貢獻した點が少くない。

殊に文學上に於ける業績は、その功決して男子に劣るものでない。短詩形としての和歌は勿論、物語、日記、隨筆等に於ても、平安時代だけにしても、「源氏物語」「枕草子」等を始め、幾多の傑作が、皆女流の手によつて成つてゐる。諸外國の文學史上の女性に比べても、日本文學女性の偉大さは、充分に誇り得る資格があると思ふ。

今度川島君の努力により、これら文學上の女性の功績が、系統的に明かにされたのは、寔に喜

ぶべきことである。本書は、一方文學上の女性の功績を闡明すると共に、更に進んで、過去の國文學上に描かれた著名な女性のいくつかの姿を浮彫にし、兩者併せて、過去の日本女性の全貌を描かうとして居る。

君は曩に、「趣味の日本文學史」なる好著を公にし、「國文學を國民の手に」の意圖の下に、吾等の祖先が吾等に遺してくれた至寶であり、貴き遺産である國文學の、平易化と趣味化とを企て、國文學普及の上に、大いに貢獻する所があつたが、其の後更に一層の研鑽を重ね、本書を世に送るに至つたのは、誠に慶祝に堪へない。

君は一方國文學の研究に精進を續けられると共に、一方女子教育の實際にたづさはりつゝ、日本女性の過去及び將來について、思を致すこと多年、遂に本書を產むに至つた。

眞の意味の國民文化の建設は、男女の協力によつて――兩者の全的な理解と信頼とによつて、始めて完成し得られるとの著者の意見には、全く同感である。東亞の盟主としての、帝國の世界に於ける地位の向上は、必ずや國民文化建設の上に、自覺せる女性の助力と協力とを俟つこと切なるものがあらうと思ふ。この意味に於て、本書の出現は、寔に時宜に適した意義深きものと信ずる。

本書によつて、讀者は先づ、過去の日本女性の文學上に於ける、苦心と努力とによる輝しき業績を、充分に知る事が出來るであらう。そして更に、作品の上に描かれた女性の姿の中に、人間として、妻として、母として、誠實、仁慈、犧牲、純眞、貞淑、義烈、勤儉、堅忍、高潔、優雅等の、日本女性本來の面目を、遺憾なく認識し得ることゝ思ふ。そしてこれら日本女性の過去の業績と德操とは、日本女性の將來に確たる自信を與へ、更に進むべき方向への明確な暗示を與へることであらうと信ずる。

昭和十四年八月

永井一孝識

自序

本書は國文學を通しての日本女性の研究であるが、その研究の方面は二つに分れる。一は國文學の上に女性が如何に活躍し、如何に貢獻したかといふ方面で、制作者側から見た女性の研究である。つまり各時代の女流文學者の傳記であり、作品批評であり、その功績論である。一は國文學の作品の上に過去の女性が如何に描かれてゐるかといふ方面で、作品の上に、描き出された女性の姿の研究である。卽ち書く女性と書かれた女性との研究によつて、過去の日本女性の全貌を知らうとするのである。

國文學はあらゆる意味に於て、一國文化の象徵である、といはれてゐるが、それはその國の一般民衆が、その時代時代に於て何を惱み、何を憧れ、何を求めたか、卽ち如何なる生き方をしたかを、最も具體的な姿に於て描き出してゐるからである。いはゞ國文學は、祖先が吾々に殘して置いてくれた傳記であり、寫眞であり、或は祖先自身が描いた自畫像であると考へることが出來る。それによつて吾々は、祖先の眞の姿——善惡美醜隱さず僞らざる眞の姿を知ることが出來る。卽ち過去の文學に現れてゐる思想や感情の姿を時の流に沿うて降つて來る時、そこに國民の辿つ

て來た足の跡、心の跡を明確に捕へることが出來る。そしてその捕へ得た過去の展開は吾々に今日及び將來に生きる正しき道を懇に敎へてくれる。從つて國文學は國民にとつて得難き生命の糧であり、取り出しても取り出しても盡きることなく、絕えず國民の內的生活に反省と刺戟とを與へ、自覺と責任とを感ぜしめる無盡藏の寶庫である。

今日の日本の最大急務は、吾が國民性の本質をよく理解し、それを基礎として吾が國民文化の振興をはかることである。民族的な長所にしても、短所にしても、長所は誇張することなく、短所は隱蔽することなく、冷靜に再吟味、再認識し、以て今日及び將來に處することが、今日轉換期に於ける吾々の責務である。余が非才をかへりみず、國文學を通して過去の女性の姿を究めんとする理もこゝにある。オールト・ホイツトマンは「今日の社會をよりよくすることは、一に懸つて女性將來の向上と伸展と活力との如何に存する。」といつてゐるが、全く當來の新しい文化の創造、新しい社會の建設は、女性の力に俟つことなしには不可能であるといふも過言ではない。この意味に於て、日本女性の覺醒と自覺とが促されなければならないし、又進むべき將來への道が明確に示されなければならない。

今や吾が國は未曾有の非常時局に直面し、國の總力をあげて東亞新秩序の建設に向つて邁進し

つゝある。この聖業を達成せしむべき役割に於て、女子の負ふべき責務は、男子のそれに決して劣るものではない。

この秋にあたつて、國文學により、そこに働ける、又そこに現れたる女性の眞の姿をさぐることによつて、過去の日本女性の赤裸々な姿——長所も短所も、善も惡も、美も醜も、偽らず飾らざる眞の姿をさぐり出し、將來への指針と暗示とを考へることも、亦意義深いことゝ信ずる。

本書出版の主意も亦そこに存する。

終にこの小著公刊を御引受け下さつた尾高豐作先生、竝に、御懇篤なる序文をお寄せ下さつた永井一孝先生に、厚く感謝の意を表する次第である。

昭和十四年盛夏

著者識

目次

第二編　萬葉集を通して見たる奈良時代の女性

第四篇　鎌倉文學を通して見たる女性

目次

〔目　次〕終

第一篇

「古事記」「日本書紀」を通して見たる古代女性

第一章　古代文學の概觀

時代の概觀

古代といふ語は甚だ漠とした語であるが、こゝにいふ古代とは、國初から奈良時代の末迄を指すのである。この時代には、帝都は多く大和の地にあつて、文化の中心となつてゐたが故に、また大和時代とも呼ばれる。神武天皇以前は、年紀を詳にし難いが、それから後だけでも、千五百年に近い長年月を經過してゐる。

大和の國は、上代帝都の地としてまことにふさはしい國であつた。日本武尊は「大和は國の眞秀ろば、たゝなつく靑垣山隱れる大和し美はし」とお歌ひになつたが、この御歌の通り、東には春日・高圓から三輪・初瀨の山々、南には多武・高取から吉野の群山、西には金剛・葛城から生駒の連嶺が、遠く近く靑垣をなしてこの國を圍んでゐる。そして中央の平野は坦々として廣く、明るい日の光は隅々まであまねく照りとほり、地味豐かに氣候は極めて溫和であつた。自然の美を心から愛し、どこまでも快活で明るさを好んだ我が上代人は、この理想鄕に皇室を中心として、平和な樂しい生活を營んでゐた。

この頃の國民生活が頗る素朴純一であつたことは想像に難くない。政治の中心といひ、都といひ、名は大げさであるが、遷都は概ね帝位繼承と共になされたのを見ても、いかに簡單に行はれたかゞ分る。都とは宮廷のある所の意で、多くは丘陵を北にした日あたりの好い南うけの地を選んだ。家は黑木作りで蔦や篠を以て繫ぎ、萱を以て葺いた堀立小屋の類であつた。人々は身には荒妙をつけ、手には弓矢を挾んで山野を跋渉した。

かゝる原始的狀態はかなり長く續いたことであらう。この未開の民をして文化的に自覺めしめたのは、外國文明の輸入であつた。漢文公行、文字の公行は應神天皇の十五年といふ。しかし阿直岐・王仁が傳へる以前に、私の交通によつて漢學が行はれてゐたものと思はれる。佛教の傳來は欽明天皇の十三年といふ。かくて外國文化に刺戟せられた國民が、宴樂と狩獵との外に、新來の文字に對する好奇心をそゝのかされ、國家的觀念の開發から國民の自覺心は大いに喚起され、自國の文化を發展せしめようと努力したのも當然のことである。そして自然に對しても、生活に對しても自覺した民族が、國家の經營と文化の發展とに努力した結果は、こゝに先づ推古朝の藝術となり、更に大化の改新となり、遂に咲く花の匂ふが如き奈良朝の盛大を現出するに至つた。

文學の特色　この時代は時間的に見て極めて長い。その初期は文化風俗未だ開けず、思想は單純、潔白、幼稚で、後期の奈良朝に比すれば著しい逕庭がある。その文學は概して原始的の色彩に富み、純潔素朴の思想に充ち、而も純粹感情が流露し、大和民族固有の國民性を眞率に文學の上に反映してゐる。從つてその作品は形式も内容も野趣を帶び、單純素朴である。

文學の展開　我が國には固有の文字といふものがなかつた。從つて應神天皇の朝漢字の渡來を見るまでは、文學は專ら口から耳へと語り傳へられた。所謂傳誦文學であつて、著しく漂泊性を持ち、歳月の流れに從つて、その形も亦自ら變易せざるを得なかつたが、新來の漢字によつて文學を書記する方法が考案されて、所謂記載文學時代に入ると、新しく創作された作品ばかりでなく、傳誦時代の文學も新たに記錄されて、文字によつて定著するに至つた。かく傳誦の文學が筆錄せられるやうになつたのは、何時の頃とも分らないが、推古天皇の御時に、聖德太子の御撰になつた國史のあつたことを思へば、かなり古い時代に溯ることが出來る。かくて文學はその表出の主要なる媒介としての文字を得ることによつて、著しく普及性を持ち得るやうになり、急速の展開を遂げるが、それと共に文學への自覺も次第に喚起され、奈良朝の盛時を

現出するに至つたのである。

今奈良時代の末迄に制作せられた重な文獻を擧げれば、史籍には「古事記」「日本書紀」地誌には諸國の「風土記」歌集には「萬葉集」詩集には「懷風藻」等がある。なほ次の中古期に入つて筆錄せられた「祝詞」「壽詞」さては「宣命」等も、亦古代文學の貴重なる資料である。

第二章　「古事記」「日本書紀」概說

一　古事記

成立

「古事記」三卷は太安麻呂の撰で、その成立の由來については、序文に委しく見えてゐる。初、元明天皇より四代前の天武天皇が、何々氏と言はれる多くの家々に持つてゐる帝王の日繼、即ち天皇御即位の次第、いはゞ皇室の系譜血統物語といふべきものや、大昔より語り傳へてゐた神話傳說、即ち「古事記」の序文にいふ所の先代の舊辭本辭などが、眞實と違ひ虛僞が加つてゐるから、今に及んでこれを正さないと、眞實の精神が滅びるであらう。これらの血統物語や神話傳說こそ、我が國家主權の基礎そのものであると思し召され、多

くの異説異傳のあるのを正し、統一して後に傳へんとせられ、非凡なる記憶力を有してゐた舍人稗田阿禮に詔して、これらを誦み習はしめ給うたが、御在世中に果すことが出來なかつたのを、奈良時代に入つて元明天皇が御遺志を繼がれ、和銅四年九月十八日に安麻呂に命じて、阿禮の誦した舊辭を編ましめ、功成つて上つたのが和銅五年正月廿八日である。

これに就いて、從來阿禮は男性であるか女性であるかゞ論議されてゐる。本居翁は「古事記傳」に於て男性說をとつてゐるが、平田篤胤は「古史傳」に於て女性說をとつてゐる。男とする證の根據は、「弘仁私記」序に「名舍人姓稗田」とある。舍人といへば男らしく、且國史を編むのは男らしいといふのである。女性說をとる者は、阿禮が「新撰姓氏錄」によれば、天鈿女尊の子孫であるからといふのにある。いづれか斷定は出來ないが、「萬葉集」にも嫗が昔の話をした事もあるから、或は女でなからうか。又阿禮に誦せしめたといふのは、暗誦せしめたのか、訓讀せしめたのか、種々の記錄を統一させたのかに就いて、說が分れてゐる。が、從來「古事記」以前は全く語部によつて語られたと言はれてゐるが、「古事記」以前に記錄のあつたのは、序文を見ても明かであるから、阿禮が二十八歲の頃天武帝の詔を奉じて、諸種の記錄を統一したのを、老年になつて太安麻呂が之を文章として書き續けたのであらう。その時阿禮は六十歲程であつた。

さて然らば、天武天皇の頃に於て何故修史の事業が起され、「古事記」が生れるやうになつたのであらうか。それは一言にしていへば、當時に於ける澎湃たる

編纂の意義

國家的精神、民族意識の産物であると云ふことが出來る。

我が天孫民族は、出雲民族や先住のアイヌや、他の異種族などの間にあつて、武力的或は平和的な國家統一の事業を着々遂行した。そして大體、崇神垂仁兩朝の御代にてそれが完成され、全國的な戰時狀態は漸く去つて、やがて國家の中心としての皇室の御威力が伸長されて行つた。その經過は歴史のよく示すところである。かくて天武天皇の御代の前後には、皇室を中心とする國家的精神が振興し、その當然の結果としてこゝに國史編纂の事業が企てられるに至つた。このやうな時期に際して、皇室の藩屛たる諸貴族と皇室との關係や、貴族相互の關係を說き起す種々の記錄に、矛盾や誤がある事は甚だ遺憾でもあり、又天孫民族とそれに歸服して日本國民を構成してゐる諸民族との關係を合理的に說き明かす爲には、分離した諸傳說を整理し統一する必要もあつた。かうした對內的の事情と共に、對外的な事情、卽ち儒教佛教等新文化の傳來による國民思想の動搖——例へば儒教と共に浸潤しつゝあつた支那の易姓革命の思想等、我が國體といれないやうな思想も傳はり、それらによつて國民思想の動搖を來したので、それらの動搖を鎭め、

國民の從ふべき原理、向ふべき目標を示さうとして、こゝに國史の編纂が行はれたのである。この意味に於て「古事記」は當時に於ける旺んなる國家的精神の産物であると言ふことが出來る。

組織

「古事記」は三卷から成つてゐる。上卷は神代の卷で、天地開闢の雄大な神話を以て始り、神々の系譜を述べ、天照大神の稜威と、天孫降臨の偉業とを讃美するを以つて主眼としてゐる。中卷は神武天皇の御東征に始つて、應神天皇の御代の物語に終り、下卷は仁德天皇から推古天皇に至る迄の事を述べてゐる。卽ち大體に於て、上卷は神話であつて、その間に神話的傳說が織り交ぜてあり、中卷下卷は主として歷史說話であつて、下卷はその終に近づくに從つて、漸く歷史的記述に入つてゐる。

內容

「古事記」三卷の全部を通じて、その主要なる記事は、帝室の日繼、卽ち皇位繼承の順序であるといつても過言でない。卽ち「古事記」から帝室の日繼に關する部分だけを引き拔いて整理すれば、直ちに皇室の御系譜が出來るのである。こゝに注意すべきは、末子相續の盛に行はれてゐた當時に於て、皇位は嫡出の長子に遷し、更に嫡出の長孫に及ぼす長系繼承法を原則とすべきことを力强く主張し、また實現してゐることである。

次は先代の舊辭であつて、その中には天地創成の神話があり、神婚傳說があり、英雄神話があり、征服物語があり、戀愛物語があり、上代民族の農業生活の描寫があり、農民的情調の豐かな歌謠があるなど、素朴純眞な上代人の生活、感覺、氣分、思想、乃至理想が如實に表現されてゐる。即ち上卷を繙く時、我々は神話の霧の中からさしそめる人間の世の曙を仰ぐやうな氣持がし、遠い祖先の底力のある雄大な合唱（コーラス）を耳にするやうな氣持がするが、中下二卷に至るに及んで、曙の霧は次第に晴れて、はつきりとした人間の姿――さまぐ\の喜び、苦しみ、戰ひ、惱みに生きる祖先の姿を見ると共に、國郡の制定、都市の發達、法律の制定、中央政府の確立、國土の擴大等國家行政上の、重大なそして活潑な社會活動の姿を見る事が出來るのである。

二　日本書紀

成　立

「古事記」と並んで上代の文獻の中に最も注意さるべきは「日本書紀」である。「日本書紀」三十卷は、國初から持統天皇の朝迄の事を誌し、漢文を以て綴つてある。撰者については「續（しよく）日本紀」に「養老四年五月癸酉、先是一品舍人親王奉勅修日本紀、至是功成、奏上紀三十卷系圖一卷」とあるので、舍人（とねり）親王の撰たる事が分る。舍人親王は天武帝の

第三皇子で、淳仁天皇の父君であり、太政大臣となられた。また太朝臣安麻呂を撰者の中に加へてある。その點は「弘仁私記」序に、「夫日本書紀者一品舍人親王從四位下勳五等太朝臣安麻呂等奉勅所撰也」云々と記されてある。かくて舍人親王が總裁として事を執り、太安麻呂を始め幾多の學者が集つて之を編輯したのであらうと信ぜられてゐる。

組織、内容

「日本書紀」の組織を考へて見ると、三十卷の中、第一第二は神代紀であつて、第三卷から第三十卷迄は神武天皇から持統天皇迄の歷史が記してある。神代紀は「古事記」の上卷よりも遙かに文學的價値は劣つてゐるが、第三卷即ち人皇紀以後は、「古事記」が單に天皇の系譜を記した如き所が多くあるに反して、極めて詳密である。且「日本書紀」は「一書曰」「一書曰」として種々の記錄の說を擧げて、一つに統一しないところに、その歷史として史實を重んじた點が見られる。說話の大體の根幹は「古事記」と同樣であるが、「古事記」は土地の發展、武力の發揚等を根幹としてゐるが、「日本書紀」はこれと共に、精神的文化的方面、例へば儒敎佛敎の渡來、殖產工業といふ方面にも力をこめてゐるのは、「古事記」の傳說的であるに比して、本書の歷史的である事を立證するものである。

記紀編纂趣旨の相違

かうした內容の相違は一にその編纂趣旨の相違によるのである。卽ち「古事記」は建國の由來、國體の基本を說き、民族意識を强調して、終始國家本位、皇室中心である。取りわけて重要なるは、對內的に國家統治の本道を示されようとした事にある。「日本書紀」も勿論「古事記」と同樣の要素を含んでゐるのであるが、更にこれには他の重要なる目的が加つてゐる。それは「古事記」が對內的に國家統一の基礎概念を規定したに對し「日本書紀」の方は、それに對外的意識が加つてゐるといふ事である。「日本書紀」はひとり日本國民に示さうとしたのみならず、外國人に對しても國家的發展の段階を明かにし、我が民族國家の優位を示さうとしたのである。その爲に、外國との交涉や、外來文化に關する記述などは注意深く取り扱はれてゐるのである。

三　記紀に現れたる祖先の面影

以上の如く記紀の二典は、兩者に一長一短あり、それ〳〵の特徵を持つてゐるので、必ずしも一をあげて他をおとす事は出來ない。兩者ともいづれも神典として、最も貴重すべき典籍であり兩々相俟つて國家の本質を明かにする事が出來るのである。ひとり史書としてのみならず、我が

國文學の始源として、民族精神の故郷として、先づ文學史思想史の出發をこの兩書から探らなければならない。

まことに、記紀二典こそは、我等祖先の僞らざる生活の記錄である。殊に「古事記」には、儒教佛教等といふ外國思想傳來以前の、生れたまゝの、少しもまじり氣のない日本人としての祖先の生活狀態が如實に描かれてゐる。

今試みに關東地方の地圖をひらいて見よう。三國山脈に源を發した利根川は、途中に於て多くの支流を合せ、蜿蜒長蛇の如く、關東の大平野を流れ流れて、遂に坂東太郎の名を辱しめないやうな大河となり、銚子に於て太平洋に注いでゐる。二千五百年の昔に開け始めた我が國の文化も、途中に於て儒教の助けを借り、佛教の流を合せ、ごく最近には西洋諸外國の學問藝術を採り入れて、三大强國の一に恥ぢざる優秀な文化を築き上げた。それ故、今日の我が國の文化を作り上げるに役立つた、儒教や佛教や西洋諸外國の學問藝術は、利根川に譬へて見れば、渡良瀨川、鬼怒川、小貝川等の支流にあたるのである。そして記紀に現れてゐる祖先の生活は、宛も三國山脈に源を發したばかりの、どの支流の水をも入れない、谷間を縫つて流れてゐる、極くさゝやかな流のやうなものである。しかしそのさゝやかな流の中にも、石にあたり岩を碎いて、下流へ下流へと流

れて行く強い力が籠つてゐるやうに、幼稚な祖先の生活の中にも、やがて大國民となるべき立派な素質がひそんでゐた。よく「三つ子の魂百まで」といふ。その三つ子の魂――今日のやうに立派に成長した日本の三つ子の魂がよく現れてゐるのが、この記紀の二典である。

然らばその三つ子の魂はどんなものであつたらうか。我等の祖先はどんな性質を持つてゐたのであらうか。一口に言へば、極めて朗かな、明るい快活な樂天的な國民であつた。陰鬱優柔な所は少しもなく、常に希望を持つて、自分達の現在の仕事に力の限り精出して行く努力的な國民であつた。樂天的、光明的、積極的、努力的、かういふ言葉が吾等の祖先を表す最も適切な言葉である。

これは男女を通じて、共に見られる古代人の特色であるが、これより特に女性について、その生活、思想、地位等に關する赤裸々な檢討を試みてみよう。

第三章　古代女性の地位

男女對等

「古事記」や「日本書紀」に記されてゐる、神話時代に於ける女性を見るに、その地位は今日と全く異り、男子と對等の地位に置かれてゐた。後世の如く男子の

爲に壓迫され、奴隷視されることもなければ、又家に附屬せしめられて、義理の重荷に苦しめられることもなかつた。男女が全く對等の地位にあつて、政治上にも軍事上にもその力を發揮してゐたのである。何等卑下する所なく、全く朗かで萬事に鞅掌して、男子と相伍して行つた。或場合には勢男子を凌ぎ、これを扶養し、支配する關係にあつた者もある。それ故女軍が組織せられ、武器を携へて男子と戰ひ、又一軍の將として女將軍が武名を揚げたことも少くない。これは全く當時の女子の體格が、男子のそれに比して少しも劣るところなく、古來の習慣に從つて、戰爭も生産もその手に引き受けてゐたのによるもので、記紀の上にも、女子が男子と等しく、軍隊を率ゐて戰場に立ち、若しくは兵士として戰鬪に加つた記事は隨所に見ることが出來る。

我が國の始祖であらせられる伊弉諾尊、伊弉冊尊は、殆んど御對立の位置で國土經營に從事されたやうであり、この二尊の御子天照大神は、その御高德の盛なること太陽の萬物を照さざるなきが如く、遂に高天原を統一せられた。又天鈿女尊は天岩屋に於て八百萬の群神が策の施すべきなく、唯憂愁に沈める時、一婦女子の身ながら舞踏以てよく神怒を解き、鬚髯の神々をして、顏色なからしめ、更に天八衢に於ては容貌魁偉の猿田彦命と、堂々たる智辯を以て折衝を重ねられてゐる。又天孫降臨に際しては、幹部にあたられた神々の中には、天鈿女命を始め、石凝姥命等

古代女性を表す埴輪

（上野佐波郡赤堀村出土）

の女神が他の男神に肩を伍してゐるが、これらは諸地方に割據せる女酋と共に、女子の勢力位置が男子の下になかつたことを物語るものである。

女軍　女子が戰場に於て男子と共に戰鬪に從事した例として、神武天皇が御東征の時、熊野の嶮を越えて大和に入らんとせられた時、八十梟師は女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置いて天皇に手向ひした。そこで天皇は椎根津彦の計を用ひて、先づ我が女軍を出し、別に男軍を敵の背後に送り出し、夾擊して破つたといふ記事が「書紀」に見えてゐる。

女將　又崇神天皇が四道將軍を派遣し給はんとされた時、山城國武埴安彦が叛した。武埴安彦は孝元天皇の皇子であつて、崇神天皇の御叔父に當る大彦命の異母弟である。「書紀」によると、その時彼はその妻吾田姫と兵を分ち、自分は山城から、吾田姫は難波から、並び進んで大和の磯城の宮を襲はうとした。そこで天皇は、五十狹芹彦を難波に、大彦命及び彦國葺命を山城に派遣し、夫々叛軍を邀擊させた。五十狹芹彦命は吾田姫を難波に要し、大いにその軍を擊破し、遂に吾田姫を殺した。次いで武埴安彦も誅に服して、この亂は平定した。

女酋　次に女酋について見るに、神武天皇の御東征の折には、豐前に菟狹津比賣、紀州に名草戶畔、丹敷戶畔、大和に新城戶畔等の女酋の居たことが記錄に殘つて

ゐる。景行天皇が熊襲征伐に筑紫に赴かれた時には、女酋神夏磯媛が皇軍を御迎へ申した。景行朝から神功皇后の頃迄に、九州地方には有力な女酋が十四人も居つたらしい。特に耶馬臺國（筑後山門地方）には第三世紀の中葉に卑彌呼なる女酋があつて、非常なる勢力を有し、魏の國と交通して居つた。卑彌呼は九州南部の熊襲と戰ひ戰中に歿し、次には十三歳なる少女壹岐が女王となつたのである。又常陸地方にも油置賣命、寸津毘賣等の女酋が居た。

かく中央に於ても地方に於ても、女性が男性と相伍して政治的勢力を有してゐたが、政治的方面と共に宗教的方面に於ても女性は優越の地位を占めて居つたのである。

宗教的地位

巫、齋姫、祝、彌宜は中世までは多く女であつた。天照大神は親しく天津神を祭られた事は申す迄もない。天鈿女命の子孫は猿女君となつて神樂の事を司り、三種神器に仕へ奉る內侍は女性に限られてゐた。伊勢神宮には豐鍬入姬、大大和神社には停名城入姫、熱田神宮には宮簀姬が初めて齋き奉つた。齋宮として仕へまつる者は凡て皇族の處女に限られ、處女は神に仕ふる淨き者と認められたのである。神憑といふ事も男子にもあつたけれども女子に多く現るゝ現象であつた。

卑彌呼、事二鬼道一、能惑レ衆、年已長大無二夫婿一、有二男弟一、佐治レ國、自爲レ王以來、少有二見者一、

云々（魏志）

と記されて居る處から察すると、卑彌呼が九州に偉力を振うたのは、軍國の任務を自ら裁斷する英略勇武の君主たると共に、祭祀を事とし神意を奉じて民心を收攬する宗教的君主たる故であつたであらう。神功皇后も神憑せられて、金銀を初め目の火耀く種々の珍寶ある新羅國が、歸服するであらうとの豫言を、仲哀天皇に御告げ申したのであつた。上古の神裁政治の時代に於ては、女性が宗教的能力の優越して居つたことは、其の社會的地位を高めて、政治的支配者たるに至らしめたのであらう。次に、

家庭に於ける地位 を見るに、「古事記」では母を指して「おや」といひ、又「おも」と呼んでゐる。「おや」は「老」「大」と關係があり、「おも」は「主」「重」「表」などゝ共通の意味を持つてゐるのであつて、いづれも家庭に於ける最も重き位置を占める人の意である。かやうに母を尊重したのは、上古の結婚制度は後世と違つて、父は外部から訪れて來る習慣であつて、子女は專ら母の手一つで養育せられてゐた爲であるが、當時子女が母の手で育まれ、その名も母が命じたことは、記紀の隨所に散見する所である。「書紀」の神代篇に、豐玉姫が玉の如き男子を產まれた時も、火遠理命は姫に向ひ「この子は何と名づくべきや。」と問はれると、姫はたちどころ

に「彦波瀲武鸕鷀草葺不合命と申すべし。」と答へられた。又垂仁天皇の御代に於ける悲劇の中心人物であらせられた狹穗姫が、兄狹穗彦を始として一族從類盡くと共に燒死せんとした時、帝は使を后の許に馳せて「古より子の名は必ず母の命ずるものぞ、汝の生める皇子の名は何と命ずべき。」と宣給へば、后答へて「今稻城を燒く折しも炎中に生れませば、御名を譽津別（記には本牟知和氣）と稱へ給へ。」と申されたといふ記事が見えてゐるのである。これらを見ても、生れた子の名を母が命ずるのは、當時一般の風習であつたと思はれる。又記紀に散見する皇子皇女の御名には、皇后皇妃の里方に因んだものが多く見うけられる。

かやうな譯で、上古の母親は、家庭に於ても後世の父の如き重き位置と威嚴とを具へてゐたのであるが、他の一面に於て、慈愛に滿ちた優しい母であつた事には變りなかつた。「古事記」に大國主命が、意地の惡い多くの兄弟達に虐待されて、燒石の難に遭はれた時、天つ神の御教によつて母神が赤貝の粉を蛤の水で溶したのを、「母の乳汁」として全身に塗られると、直ちに蘇生されたといふ話がある。この話は慈母の乳汁には愛兒の全身の火傷を治す程の靈力があると信じられてゐた事を現したものであらう。なほこの事件の後にも、大國主命があらゆる危難にお遭ひになつた時、何時も母神が泣き乍ら尋ねて來て救つて居られるのであつて、我が子の身の上を日夜守る慈

母の愛が如何にもよく現れてゐる。

以上のやうに、記紀の神話傳說を通して眺められる古代の女性は、家庭の主婦として一家の中心となつてよく子女の教養に任じたのみならず、農耕生活、社會生活に於てもかなり重要な任務に就き、時としては戰爭にまで參加して、後世の人々の想像以上に活躍してゐたのである。

第四章　古代女性の面影

天照大神　大神は生れながらにして天の麗質を備へられ、光華赫耀として六合に遍照する概があり、その支配權の下にある高天原の諸神は、皆その威德に服して、さながら太陽の如く仰ぎ奉つた。大神は先づ稼穡紡織の業に從ひ、國民產業の興隆を計られ、葦原の中つ國なる保食神から五穀の種子を得て、親ら不毛の地を開き、所謂天狹田及長田を墾して八握穗の垂穗の稻を收穫され、ついで養蠶の法をも授け、繭を口に含んで絲を採り、絹を織り給うたといはれてゐる。かく平生に於ては平和な神、勤勉な神であらせられたが、一旦事ありと見れば、武裝して男たけびなされ、男子も及ばぬ武勇を發揮せられた。御弟素盞嗚尊が父神伊弉諾尊の命

に從はず、根の國へ逐ひやられる時、父神の許を得て、姉神に別れを告げる爲高天原に大神を訪れることになつた。尊が高天原に上られる時は「山川悉に動み、國土皆震りき」(記)天に昇ります時に、溟渤とゝろに鼓ひ、山岳爲に鳴り呴えき」(紀)といふ物凄い有樣であつたので、大神は、聞き驚かして「我が那勢命の上り來ます由は、必ず善はしき心ならじ、我が國を奪はむと欲ほすにこそ」と詔り給ひて、

御髮を解き御角髮に纏して、左右の御角髮にも、御鬘にも、左右の御手にも、各八尺勾璁の五百津の美須麻流の珠を纏持して、背には千入の靫を負ひ、五百入の靫を附け、亦伊都の竹鞆を取佩して、弓腹振立てて、堅庭は向股に踏なづみ、沫雪なす蹶散して、伊都の男建踏建びて待問ひたまはく、何故上り來ませると問ひたまひき。(記)

といふやうな勇壯活潑な有樣で對面なされた。然し尊は異心のないことを誓はれ、携へ給うた十握の劍と大神の勾玉とを取り換へて、互に子を生まんと云はれた。その誓には、若し異心あらば男が生れ、異心がなくば女が生れるといふのであつた。所が十握の劍から生れたのは悉く女であつたので、尊は先の誓に勝てりと喜び增長され、いつしか誓約に背き、姉君の慘澹たる苦心の結果、漸くにして緒に就いた高天原の平和的事業に對して、甚だしい亂暴狼籍を加へた。或時は御

領の田の畔を毀ち、或時は灌漑用の溝を埋め、或時は新嘗宮の境内に屎まりちらして靈域を穢された。しかし大神は寛い慈悲と理解の御心を以て、「屎なすは醉ひて吐き散らすとこそ、あが那勢の命かくしつらめ、又田の畔離ち溝埋むるは、地を惜しとこそ、あが那勢の命かくしつらめ」と善意に解してお赦しになつたが、尊の亂暴は益々募り、遂に或時神の牧場を荒し、天斑馬の皮を生きながら剝いて、姉神の機屋の屋根から投げ込むなどゝ、狂暴の限りを極められた。さすが寛弘の大神も、今や憤怒の餘天磐戸の中に隱遁されてしまはれた。こゝに於て高天原は忽ち常闇となり、萬の禍は悉く起つた。群神は大いに驚き、天安河原に相會して、常世思兼神を議長として種々評議し、前後策を講じたが、大神に代るべき靈異の統治者は他に絶對に求めることが出來なかつた。そこで常世の長鳴鳥を集めて長鳴せしめ、又手力雄神を磐戸の側に立たせ、天兒屋命、太玉命は天香山の五百箇の眞榊を根抜ぎにし、上つ枝に八坂瓊の五百箇の御統玉を、中つ枝には八咫鏡を、下つ枝に青和幣白和幣を懸けて、相共に祈禱をなし、天鈿女命は手に茅纏の矟を持ち、天香山の眞榊を以て鬘となし、蘿を以て手繦となし、火を焼き、槽を伏せてその上で舞つた。神神はこれを見て笑ひどよめいたので、大神は怪しみ給ひ、磐戸を細目に開けて窺ひ給うた時、磐戸の側で待つてゐた手力雄神が、大神の御手をとつて引き出し奉り、再び天位に登せ申すことが

出來た。そこで高天原は再び明るくなつたのである。さうして素盞嗚尊は直ちに之を捕へて、千座置戸を科し、その美髯を斷ち、その手足の爪を剝して、之を根の國に放逐した。

以上の說話より見る時、大神は女性として誠に理想的であらせられた。平生に於ては勤勉な神、平和な神であつて、しかも一旦事ありと見れば、武裝して男たけびなされたのである。その御功業御德操に於て、女性的優美閑雅な所が有らせられると同時に、勇壯活潑な男性的氣質を具備せられた。世に屢々大神男神論が唱へられる所以で、申すも畏けれど、圓滿完全に、人として神として、男として女としての御德を完備し給うたのである。隨つて、大神が如何に當時の人望を集めて居られたかは、天磐戸開きの傳說によつて窺ふべく、又如何に社會統制の才能に惠まれてあられたかは、出雲の國讓の過程を見ても判明する處である。

弟橘姫

日本武尊が東國平定の途に上られた時、妃弟橘姫もお側近く侍つて、御東征のお供をされた。駿河の賊を平げ、相模から上總へ渡らうとして、船が走水の海にさしかゝつた時、暴風雨が吹き起つて、船は進むことも退くことも出來なくなつた。黑雲は隙なく空を覆うて雲は風を呼び、風は雨を呼ぶ。さすがに御心猛き尊も茫然として運を天に任せて居られた。この時、姫は屹と心をおし靜めて、「今風起り浪はやくして、王船沈まんとす。是海神

の心なり。願はくは妾の身を以て王の命を贖ひて海に入らん。」と菅疊八重、皮疊八重、絹疊八重を手早く船から投げて、荒れ狂ふ波も恐れず、その上に飛び乘つた。姫は悲痛な聲で、

さねさし相模の小野の燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも

と尊を思ふ切々の御心を歌はれた。丈なす黑髮はさつと風に亂れて、紅の裾も袂も、白雪と碎け散る波のしぶきに影を亂し、あはれ一輪の名花は波間に消えた。姫の心を神も感じたか、さしも荒狂ふ浪も次第に鎭り、尊の船は無事に岸に着くことが出來た。尊は常に姫をあはれと思召し、碓日坂に立つては、東南の方を望んで三度歎き「吾嬬はや」と思慕の情をもらされた。

神功皇后

神功皇后の御事蹟は既に明白であらう。仲哀天皇が熊襲御征の半に崩御遊されるや、皇后は御懷姙の御身を以て、男々しくも直ちに神意に從つて、新羅遠征の御決心をなされた。熊襲には鴨別を留めて當らしめ、御身は男裝し舟師を率ゐて、黃金白銀を始め、眼に輝く種々の寶多にある新羅に向はれた。その出征に際し、三軍に下し給うた御言葉の如何に勇壯にましましたことよ、

「金鼓節なく旌旗亂るれば士卒整はず。財を貪りて多慾、私を懷きて內を顧る時は、必ず敵の爲に捕虜とならん。小敵たりとも侮る勿れ、大敵たりとも屈する勿れ。則ち奸暴なるは許すこ

となく、降服せるものは殺すこと勿れ。勝つ者は必ず賞すべく、走る者は必ず罪あり。」（書紀）とある。新羅王は大兵の急に來つたのを見て、驚き怖れ白旗を擧げ、自らその身を縛つて御船の前に降參した。皇后はその乞を許し給ひ、御矛を王門の前に樹て、後の世の印とせられ、王は又その子微叱己知波珍干岐を質とし、年毎に金銀綾羅八十艘の朝貢を誓つた。皇后は大矢田宿禰を留め、新羅の國を鎭守せしめて凱旋せられたのである。

忍坂大中姫

反正天皇が崩御になつた時、皇太子は未だ定つてゐなかつた。群臣一同はどの皇子を推戴すべきかと評議したが、その選に當られたのは、仁德天皇の皇子雄朝津間稚子宿禰皇子と大草香皇子との御二方であつた。取りわけ稚子宿禰皇子は御齡も高く、御仁德も深かつたので、やがて評議はこの皇子に定つて、御卽位を願ひ出た。處が、皇子は已如きはどうしてもその任でないとばかり御聞き入れにならない。群臣は今更當惑して、再三再四御心を飜さうとしたが、固い御決心は終に動かすことが出來ない。百官は帝位の久しく曠しくなつてゐるのを悲しんで何事も手につかなかつた。これを御覽になつた皇子の妃忍坂大中姫は、滿廷の歎きを心苦しく思召されて、親ら手洗の水を捧げて（洗手水は大御手水で、これを執るのは飢寒を受くる義）皇子の御前に出て、何卒群臣の望を納れて帝位に卽き給へと心を込めて御諫めに

なつた。皇子は何も御聞き入れがなく、果ては後をお向きになつた儘何事も仰せられない。大方の人ならば、取付く島もないこの様に屈しようが、姫の御心には動かし難い決心があつた。水を捧げた儘慎つて、御心解けずば只何時迄もとお待ち申し上げる。時は過ぎる。四刻五刻、折しも冬のさ中の風は寒く、身の中は氷で切られる思がする。まして下に置かず捧げてゐらせられる。椀の水は溢れてその儘腕に凍り、玉の肌も見る〳〵血の色が失せて來る。荒い風に當らず、高樓の裡にお育ちになつた御身に、どうしてこの上の御辛抱が出來よう。今は御命も危くなつた。けれども姫の御胸には動かぬ決心がある。あの百姓の悲しみを思ひやれば、この身一つの命はものゝ數ではない。もし身が死んだ爲に皇子の御心が解ければ、それで我が願は足りる。只それの叶ふ迄はこの儘にと、少しもその席を御退きにならない。風は寒い。時は過ぎる。健氣な御心根の有難さ、その時皇子はちらと妃の御姿を御覽になると、こは如何に御顏の色も變つてゐる。あゝかく迄堅い決心かと御驚きになつて、すぐ扶け起して「世繼の事は容易ならぬ大事故、今日迄聞き入れなかつたが、その方の樣子を見て、群臣の願の堅きをも思ひ知られた。今はその望を許すぞよ。」と御手をお握りになつた。その時の妃の御喜、すぐに群臣を召して「皇子は今ぞその請を聽し給うた。早玉璽を奉れ。」と仰せ渡された。群臣の喜は又說く迄もない。卽日御位に卽き奉つ

たのが允恭天皇である。

幡梭姫

雄略天皇は御性質勇猛であらせられたが、皇后幡梭姫は溫良の德高く、常に天皇の御心を和げ、又御自身で桑を採り蠶を養つて、人民に模範を示された。天皇が曾つて山に狩せられた時、一匹の猪が天皇に向つて進んで來た。そこで天皇はお供の者に之を射止めるやうに命ぜられたが、お供の者は恐れて逃げ去つてしまつたので、御自ら弓で突き止め、更に足を揚げて蹴殺された。天皇はお供の卑怯を責めて之を殺さうとせられたが、皇后は御言葉を盡して御諫めになつたので、御氣色も和ぎ、「樂しい哉、人は狩して禽獸を得、朕は狩して善言を得た。」と仰せられ、皇后と御車を共にして御還幸になつた。

物部麁鹿火の妻

繼體天皇の時、百濟より上表して、任那の上哆唎、下哆唎、娑陀、牟婁の四縣を賜りたいと申出た。同時に哆唎の國守の穗積押山より、この四縣は百濟に近く日本に遠いから、この際百濟に賜つた方が將來の爲に宜しからうと奏聞した。時の首相の位置にある大連大伴金村も亦この議に賛同したので、天皇は四縣を百濟に賜ることにされた。そこで朝廷では、物部大連麁鹿火を宣勅使として、勅命を傳達せしめんとし、麁鹿火は百濟の使者の宿れる難波館に赴かんとした。これを聞いた麁鹿火の妻は夫に向つて、「昔住吉明神の御計にて、金銀

の國なる高麗、百濟、新羅、任那を胎中天皇（應神天皇）にお授けになつた。さるによつて、神功皇后は武内宿禰と國毎に官家を置いて海外の藩屏となし、以て今日に至つたものであるが、もしその地を割いて他國に賜ふことになると、本來の區域を紊り、末代までも非難を免れますまい。」と條理を盡して諫めた。麁鹿火は妻の言葉は道理と思つたが、勅命辭み難く大いに苦悶したのである。妻は「それならば病氣を申立てゝこの使命をお斷りなされたがよい。」と言つたので、麁鹿火は妻の言ふやうに取計つた。朝廷では詮方なく、更めて他人に勅使を命じたのであるが、後に勾大兄皇子（後の安閑天皇）が「胎中天皇の置かれた官家の國々を、輕々しく蕃國の請に任せて下賜されるのは如何にも失態だ。」と言つて前の勅命を取消さしめられたのである。

大葉子

欽明天皇の御代に新羅は勢益々強く、遂に任那を滅し日本府を倒した。そこで天皇は紀ノ男麻呂を遣して、新羅を討たしめられたが、我が軍は反つて新羅の軍に破られ、遂に失敗した。この時從軍の一將調ノ伊企儺は、武運拙くして捕虜となり、「新羅王吾が尻を食へ。」と罵つて殺され、その子は父の屍を抱いて死んだ。妻の大葉子も亦捕へられて悲しみに堪へず、遙か故郷の空を仰ぎ、領巾を振り、愴然として、

韓國の城の邊に立ちて大葉子は領巾ふらすも日本へむきて

と歌つたので、聞く者皆涙を流したといふ。

上毛野ノ形名の妻

舒明天皇の九年、蝦夷が叛いて來朝しないので、上毛野ノ形名を將軍に任じて征伐させたところ、反つて蝦夷に打破られ、這々の體で城壘に遁げ込んだ。敵は城を十重二十重に取圍み、軍兵は四散して、城内の兵は殘り少なになつてしまつた。形名は採るべき策略もなく、夜に紛れてこつそり垣を飛び越えて逃亡しようとした。共に從軍してゐた形名の妻は、これを見て大いに驚き、夫を諫めて言ふには「御先祖は曾つて萬里の波濤を越えて海外に使し、勇武絶倫、その威名を内外に輝し、今に至つても世人の稱讃する所であるが、今貴方が蝦夷に負け、御退きになるとは、誠に卑怯千萬の極みで、祖先の名を辱しむることゝこれ以上の事はない。どうか御考へ直して下さい。」と言つて酒をすゝめたので、形名は之に氣を勵され、大いに元氣づいて鉾を取つて立出でた。妻はそこで自ら侍女を指揮し、弓弦を鳴らし武者振させ、外にも澤山兵がゐるやうに見せた。蝦夷は之を聞いて、城の兵がなほ多いものと思ひ誤つて退いた。その中に逃げた兵士も歸つて來たので、形名は之を率ゐて蝦夷を打破つた。

第五章　古代の兩性關係

一　戀愛

何れの時代に於ても、戀愛思慕の情はあらゆる文學制作の主な動機であり、文藝の至美である。本居宣長は、「人の情の感ずること、戀にまさるはなし。さればものゝあはれの深く、忍びがたきすぢは、殊に戀に多くして、神代より代々の歌にも、そのすぢをよめるぞ殊におほくして、心ふかくすぐれたるも、戀の歌にぞ多かりける。」（玉の小櫛卷二）といつてゐるが、記紀歌謠も亦その歌はれた思想や感情等の内容の上より觀るに、最も優勢を持してゐるのは戀愛である。記紀歌謠の大半は戀愛の歌であるといつても過言ではない。又物語にしても、神代史の挿話には、素盞嗚尊にしても、大國主命にしても、又忍穗耳命、彥火々出見命にしても、必ず戀物語がある。本筋の物語に於ても、開卷第一の國土生成の段に露骨な描寫を試みてゐるのを見ると、上代に於て、興味ありとせられた物語の題材は、何よりも異性間の關係であつたことが想像される。その他

記紀に採り入れられた上代の挿話、例へば三輪山傳說にしても、春山の霞壯夫（かすみをとこ）秋山の下氷壯夫（したびをとこ）の爭にしても、或は日本武尊の話にしても、又は「風土記」に載せられた乙女の松原でも、比沼山の天女でも、伊香具の漁夫でも、趣味ある物語は皆戀物語である。これらの物語には、古くから行はれてゐた民間說話もあり、後になつて支那の神仙譚から改作せられたものもあらうが、何れも當時の人々の喜んで談じ、喜んで聽いた物語の主題が戀であつたことを示すものである。何れの世、何れの國の物語にも戀愛譚が多く、又多少それが結び付けられてゐないものはないが、我が上代では、多くの上代國民の有つてゐた冒險譚や戰爭譚が餘り見えないだけに、大抵は純粹な戀物語になつてゐる。今これらの歌謠及物語によつて、古代の兩性關係を考へ、古代女性の赤裸裸な姿を描き出して見よう。

スピードを出して、尖端から尖端へと進んで行く二十世紀の今日から暫く逃れ、太古の民の世界に思を馳せてみる。身には荒妙の衣を纏ひ、手には弓矢をたばさんで、山野を馳廻つてゐた素朴雄健な太古の民――これらの人々は、太古自然の境に於て、全く大地から生えぬいたやうな自由自然の生活をしてゐたものと思はれる。道德の束縛等はもとより受けることなく、慣習の支配にも囚はれず、人倫道德の彼岸にあつて、自由にのび〳〵と生活してゐた。そこでは人々は思ふ

がまゝに振舞ひ、その衷心感情はその儘保持せられて、何等外面的に掣肘せられるところがなかつた。從つてかゝる時代に於ける男女の情生活も亦、自由奔放なものであつたことも、自ら頷けるところである。

文化の進展に伴つて、著しく發達した近代思想の支配を受け、且複雜な社會制度の影響等によつて、極めて功利的な傾向を帶び、理智的な樣々の技巧をも多く加味されるやうになつて來た、複雜多彩な近代の戀愛に比較すると、古代に行はれた戀愛は頗る單純なものであつた。純眞、熱烈、赤裸々、そこには全く素朴な人間性の流露があるのみである。人間生活の本然の姿が、極めて自由な立場に於てその行爲の上に現れてゐるのである。從つてその戀愛は極めて自由であるが、それと共に著しく本能的であつて、性慾を對照とした官能の滿足が主であつた。もとより官能以上の戀愛がなかつたといふのではないが、少くとも記紀によると、愛情よりも性慾の方が强い時代であつたと言ふことが出來る。

要するに古代に於ける戀愛は、人間本然の性に立脚して、何等社會的の拘束を受けることなく道德を越え宗教を越えて、極めて自由に行はれてゐた。後世の人々が、道德の規範によつて一々進退を決したのとは、全く趣を異にしてゐたのである。

今この時代の面影を偲ぶものに、歌垣又は嬥歌會といふものがある。嬥歌會と言つたのは東國地方の名稱で、都では歌垣と言つてゐたが、嬥歌會の語源については、橘守部は次の如く論じてゐる。

嬥歌會

「今の世の言に、人の互に物を言ひ、相議論ふことを掛合といひ、又謠曲などを兩人にて相互にうたふを掛合に歌ふといふ。この加氣阿比の氣阿を約めて加我比となれば、加我比は相互に戀の成り成らざるを掛合ふ義なり云々。又この加我比を歌垣ともいふは、歌加我比にて、歌を以て互に掛合をする由なり。そは加我比を約めれば、伎となる故に、歌加我比を又約めて歌我伎とは言へるなり。」（鏡のひゞき、卷三）

と言つてゐるが、これらは一種の公設の男女交際機關であり、結婚の媒介所である。春は花の盛り、夏は月の明るき夜半、都では人の多く集る市廛、鄙では名高い野山の程よき所、或は海邊等に、若い幾組もの男女が群集ひ、互に歌を唱ひ交し、舞ひ戯れて遊ぶといふ習慣で、先づ後世の盆踊と思へば大差なからう。要するに男女亂婚祭の一種で、男女共婚制の名殘とも考へられるのである。

歌垣の記事は極めて乏しいのであるが、「續日本紀」（卷十一）によると、聖武天皇が朱雀門で御覽になつた歌垣は、五品以上の男女二百四十餘人が、長田王等の音頭で歌を謠ひ、市中の男女がこ

れを見て歡を盡したといふ。又卷三十に、

寶龜元年二月庚申車駕（光仁）由義宮に行幸――三月辛卯葛井、船津、文、武、生、藏六氏の男女二百三十人歌垣に供奉す。其服は並に青摺の細布衣を著し、紅長の紐を垂る。男女相並んで行を分ち、徐に進み歌つて曰く、

乙女等に男達そひふみならす西の都はよろづ世の宮

其歌垣の歌、

淵も瀨も淸くさやけしはかた川千歲をまちて澄める川かも

歌毎に曲折して、袂を擧げて節を爲す。云々

とある。然しながら、この歌垣になると、既に奈良朝貴族の遊樂となつてゐて、現今の盆踊を聯想させる程度のもので、前代の歌垣の趣は失はれてゐるのであらう。ところが「萬葉集」卷九には、前代の歌垣を想像させるに相應しい歌がある。常陸の筑波山で行はれた歌垣を詠んだ歌である。

鷲の住む　筑波の山の　裳羽服津の　その津の上に　誘ひて　未通女壯士の　往き集ひ　かゞふ嬥歌會に　他妻に　我も交らん　吾が妻に　人も言問へ　この山をうしはく神の　初より禁めぬ行事ぞ　今日のみは

目ぐしもな見そ　事もとがむな

一年に一度は、神も許したかゝる歌垣が、全國到る所に行はれてゐたと思はれる。この筑波山や、肥前國では杵島山、攝津國では歌垣山といふ山さへあつて、特に顯著なものであつたらしい。これらによつて、上古の自由な男女關係を知る事が出來るが、更に一二の例を引いて見よう。

「萬葉集」開卷第一に次の歌が載つてゐる。

籠もよ　美籠もち　堀串もよ　美堀串持ち　この岡に　菜摘ます子　家聞かな　名乘らさね　空見津　大和の國は　押なべて　我こそ居れ　敷なべて　我こそ居れ　我こそはのらじ　家をも名をも

これは雄略天皇がさる岡の邊で、若菜を摘んでゐる少女の愛らしきをめでゝ詠み給うたので、籠を持ち、ふぐしを持つてこの岡に菜を摘んでゐる乙女よ、汝が家はいづこか聞かまほしい、名のれよ、自分はこの國をおしなべて支配せる天皇であるぞ、吾こそは家をも名をも告らぬが、と歌ひかけ給うたのである。

一國の元首が、岡邊に菜を摘む少女に對して、歌ひかけ給ふといふ一事を以てしても、如何にも簡素にして平和な古代社會の情調が髣髴する。かやうに古代では、野遊びや山遊び、さては若菜摘などで、美しい女に出逢ふと、直ぐにその家を問ひ、名を聞いて交を求めたこともあつたの

である。

記紀に見える活玉依姫と百襲姫の傳說も、古代に於ける自由な兩性關係と、その子女の婚姻に對する母との關係とを偲ぶに十分なものがある。

活玉依毘賣其容姿端正かりき。是に神壯夫ありて、其の形姿威儀時に比ひ無きが、夜半に倏忽來つ。故相感でて共婚住間に、幾時もあらねば、其の美人姙身みぬ。爾に父母其の姙身る事を怪しみて、其の女に、汝自ら姙めり。夫なきに何由にしてかも姙身めると問へば、答曰へけらく、麗美しき壯夫の、其の姓名もしらぬが、夜每に來て、住る間に、自然懷姙みぬといふ。是を以て、其の父母其の人を知らまく欲りて、女に誨へけらくは、赤土を床前に散らし、へそ紡麻を針に貫きて、其の衣の襴に刺せとをしふ。故敎へし如して旦時に見れば、針著けたりし麻は、戶の鉤穴より控き通りて、唯殘れる麻は、三勾のみなりき。爾即に鉤穴より出し狀を知りて、絲のまに〳〵尋ね行きしかば、美和山に至りて神社に留りにき。故其の神の御子なりとは知りぬ。故其の麻の三勾殘れるに因りて、其地を美和とは謂ひける。(古事記・中卷)

名も知らぬ、所も知らぬ、顏も知らぬ、男を引き入れて、これと契るといふ處に、當時の兩性關係がよく現れてゐる。

二　結婚の形式

呼ばひ

前述の活玉依姫の説話によつても知られるやうに、この頃の男女關係は、多く男が女の家に通つた。これを「呼ばひ」といひ、歌垣の中に於て男から女に呼びかけることから起つたのである。即ち呼び誘ふ、或は呼び會ふの意で、意中の男又は女を呼び出して、婚約の申込をなす慣習から起つたものであらう。又女子を探しに行くことを「妻覓ぐ」「妻問ひ」とも言つた。「古事記」上卷にある、大國主命が高士の國なる沼河姫を婚に行かれた時に、互に歌ひ交されたといふ記事は、よくこの間の消息を物語るものである。

八千矛の　神のみことは　八島國　妻覓ぎかねて　遠遠し　高志の國に　さかし女を　ありと聞かして
くはし女を　ありと聞こして　さよばひに　あり立たし　よばひに　あり通はせ　太刀が緒も　未だ解
かずて　おすひをも　未だ解かねば　處女の　鳴すや板戸を　押そぶらひ　我が立たせれば　引こづら
ひ　我が立たせれば　青山に　鵼は鳴き　さ野つ鳥　雉はとよむ　庭つ鳥　鷄は鳴く　うれたくも　鳴
くなる鳥か　此の鳥も　打ちやめこせね　いしたふや　天馳使　この語言も　是をば

かやうに、古代に於ては、男から直接女に婚姻を申込むといふ事實が存してゐたのであるが、之に對して相手方が承諾し、最後にその父兄の同意を乞うたやうである。而して、右の意味の妻問ひに對して、承諾を與へて成立する婚姻豫約を目合（めぐあひ、まぐあひ）と言つた。そのことは「古事記」上卷に、

「かれ（大穴牟遲神）詔命のまに〳〵に須佐之男命の御所にまゐりたりしかば、その女須勢理毘賣出て見て目合して婚ひまして還り入りてその父に、いと麗しき神まゐ來ましつとまをしたまひき。

又、同じく上卷に、

かれ（火遠理命）豐玉毘賣奇しと思ほして、出で見て、即ち見感でて目合して、その父に、吾が門に麗しき人いますとまをしたまひき。こゝに海の神自ら出で見て、この人は天津日高の御子、虛空津日高にませりといひて、即ち內に率て入りまつりて、美智の皮の疊八重を敷き、又絁疊八重をその上に敷きて、その上に坐せまつりて、百取の机代の物を具へて御饗して、即ちその女豐玉毘賣を婚せまつりき。

とあり、又瓊々杵命と木花佐久夜姫との問答中にも、同樣の意義の目合なる言葉があるによつて考證せられる。この目合なる文字の意義についても種々異說があるが、少くとも此處では、男女相許すの私約を意味するであらう。

かやうに婚姻については、豫め當事者同志の合意が存することに關する記事が多く見られるが、眞に婚姻が成立する爲には、父兄の同意といふことも重視された一つである。

ゆるし　前述のやうに、兩性關係が自由なものであり、戀愛が自由に行はれ得る時代には、當然の現れとして、自由結婚が多くある筈であると考へられるが、この時代の結婚が、父兄の承諾を必要とし、形式を相當重視してゐたのは、一見甚だ意外のやうであるが、說話によつて充分窺はれるのである。

大國主命が根堅洲國に赴いて、須佐之男命の女須勢理姫に逢つて、そこに相互の間に戀愛關係が生じて結婚の許しを乞うた時、須佐之男命は許容に先だつて、大國主命に數度の難行を敢へてせしめられてゐる。即ち須勢理姫は大國主命を一目見て「いと麗しき神來ませり」と戀ひ慕つて父命の許しを乞うた。處が父命は容易に許されない。先づ命を呼んで蛇の室屋に入れ、ついで次の夜は吳公と蜂の室屋に入れた。しかし姫が與へた蛇の比禮（うち振つてはらひ除くもの）吳公の比禮によつてその難を逃れた。次には鳴鏑矢を大野に放つてその矢を取らしめ、命のは入つたところに火をかけた。大野火の燃ゆるさ中に鼠が來て「內はほら〲（洞穴）外はすぶ〲（入口は狹い）」と告げたので、足を踏みならすと、落ち込んで洞穴の中に入り、野火の難をのがれると共に、矢は鼠が啣へて來てくれた。次には大室で父の頭の虱をとらせられる。

その頭には呉公があつたが、これも姫の機轉で難なくのがれ、最後に姫を負つて逃走を試みようとしたが、父命も終に「吾が女須勢理毘賣を嫡妻としてよく國を治めよ」とお許しになつた。

これは戀愛の自由に比して、親の許しを得るといふことが、相當に重視されてゐたことを物語るものであり、又之に對する男女の眞劍さを語る實例である。

尙もう一つの例を擧げて見よう。それは邇々藝命と木之花佐久夜姫とである。

天津日高日子地能邇々藝能命、笠沙の岬に麗き美人の遇へるに「誰が女ぞ」と問ひ給ひき。答申して給はく「大山津見命の女名は神阿多都比賣、亦の名を木之花佐久夜比賣」と謂し給ひき。又「汝兄弟有りや」と問ひ給へば「我が姉石長比賣在り」と答申し給ひき。爾詔り給はく「吾汝に目合せむと欲ふは奈何に」と詔り給へば「僕は得白さじ、僕が父大山津見神ぞ白さむ」と白し給ひき。(古事記、上卷)

贈　物

かやうに妻覓ぎをし、呼ばひをし、男子から求婚すると、女子は父の同意を求めて、こゝに正式の婚儀が行はれるのであるが、その時女子の方から結婚の禮物として、百取机代物を贈つた。これは飲食物を多く机に載せて贈ることで、前述の瓊々杵尊と大山祇神との時、彦火々出見尊と豐玉姫との時、雄略天皇と赤猪子との時等に同様に見えるが、恐らく一般の例であつたのであらう。安閑天皇記には、大日下王が妹の禮物として押木の玉縵を

出したのを根臣が途中に於て之を盗んだなどのことを載せてあるから、假令百取机代物でなくとも、相當貴重なる物品を贈つて、今の結婚の如くにしたものと思はれる。

結　婚　式　結婚の式は、女の家に於て擧げられるのが普通であつた。そして結婚後も女は尙その家にあり、男は女の家に通ふ風習になつてゐた。この事は「古事記」中諸所に見られる處である。

以上が古代に於ける婚姻形式の大體であるが、之を要約するに、先づ求婚男子が意中の女を訪れて、之を呼び出し(よばひ)婚約を求め(つまどひ)女が承諾の意志を表示する(めぐはす)ことによつて、兩者間に婚姻の豫約が成立し、然る後、女子の父兄の同意を求めるのが、普通の順序であると解すべきであらう。然し、勝本正晃博士もいはれる通り、右の諸語が、必ずしも單一明確なる意味を有してゐなかつたこと、又その字義についても疑あること等により、古代の婚姻手續につき、常にかゝる明確なる階梯が存すると考へることには、多少疑があると思ふが、如上の考證によつて、少くとも婚姻に關して女子の意志が尊重されたこと、否寧ろ當事者同志の合意が前提となつて婚姻が成立したことは、之を認めなければならない。而して、一般に原始社會に特有なものと考へられてゐる掠奪婚、又は古代バビロンに於て盛に行はれた女市等に於て見ら

れる賣買婚の如き、女子の意志を全く無視し、女子を物的視したやうな例證は見當らないのである。かの女子の自由意志を無視し、女子の父兄と直接に取引せらるゝが如き婚姻は、總ての事象が、權勢と傳統維持に向けられた武家時代に起つたものと考へられるのである。

三　貞操

以上述べた如く、結婚の形式は相當重んぜられてゐるが、結婚後の夫婦生活に於ては、一夫多妻が公然と認められてゐた。男性は多くの妻を持つことが公然と許されてゐるのに反し、女性は一人の夫を守らなければならないものであるとされてゐた。

一體記紀の數多い戀物語では、殆んど男性が能動的であり、女性は受動的である。この男の能動と女の受動とは、そのまゝに發展して男女の情生活を成り立たせてゐるのであるが、その結果男は著しく我儘となり、女はどこ迄も服從となつてゐる。尤も如何に態度が異つてゐるといつても、男女の情生活が、基調を官能中心に置いてゐることはいふ迄もないが、殆んど官能に始終したかのやうにさへ見える男の情生活に比すると、女の情生活がより多く愛情に生きたものであることは見逃すことが出來ない。あれほど數多い戀物語の中に、女といふ女は如何なる場合でも悉く

愛情の眞實に生きてゐる。ところが、男の方は多くの女を愛するが故に、その愛人を苦しめる場合が少くないのである。かゝる中にあつて、須勢理姫の大國主命に對する純情は、上代女性に既に強い貞操の觀念のあつたこと示すものとして推賞されてゐる。

元來大國主命は、到る所に美しい姫を求めて歩いて、既に因幡の八上姫、高志の沼河姫等に通つた程であるが、今度は大和に麗しき女ありと聞かして出立せんとした。その時、須勢理姫は大御酒杯を取らして、立ちよりさゝげて、

八千矛の　神の命や　吾大國主　汝こそは　男にてゐませば　打ち見る　島のさきざき　かき見る　磯
の岬落ちず　わか草の　妻持たせらめ　吾はもよ　女にしあれば　汝をきて　男はなし　汝をきて　夫
はなし　綾垣の　ふはやが下に　むしぶすま　柔やが下に　栲ぶすま　さやぐが下に　沫雪の　わか
やる胸を　栲綱の　白き腕　そだたき　手抱拱り　眞玉手　玉手差纒き　股長に　寢をしなせ　豐御
酒獻らせ

と歌つてゐる。どうぞ後生ですから大和行だけは思ひ止つて下さいといふので、二人の間の戀の歡びは再び復つてゐる。「吾はもよ女にしあれば、汝をきて男はなし、汝をきて夫はなし」といふ處に、強い貞操觀念の現れを見るのである。

尙次の說話は、女性が生命である貞操を疑はれて、身を以てその疑を晴した健氣な物語である。木之花佐久夜姬は、九州の南なる吾田の國の大山祇命の娘である。高天原から瓊々杵尊が降臨された時、笠沙崎で、尊のために見出され、やがて結婚された。ところが姬は一夜にして懷姙されたので、尊は「そは我が子に非ず、必ず國つ神の子にこそあらめ。」と言はれた。そこで姬は「吾が姙める子、若し國つ神の子ならむには、產むこと幸くあらじ。若し天つ神の御子にまさば、幸くあらむ。」と誓つて、產屋を土にて塗り塞ぎ、その御殿に火をかけてしまつた。炎々として燃ゆる火の中に、火照命(海の幸彥)火遠理命(山の幸彥)を安々と產ませられ、その疑は全く晴れた。身を犧牲にしてまでも、貞操の純潔を示さうとした古代女性のこの意氣、これこそは日本女性が、とことはに失つてはならぬ眞實心である。

四　純　情

上代婦人の純情を物語るものとして、狹穗姬、引田部赤猪子、松浦佐用姬のあはれにも美しい物語を語らう。

最初に、兄君と夫君との板挾みに惱まされ、遂に胎內に宿つて居られた皇子だけをお助けし、

その身は兄君に殉ぜられた、思慮深く聰明で、且純眞な狹穗姬の、あはれにも健氣な物語をして、素朴にして、純情なる古代女性の面影を偲んで見たいと思ふ。

狹穗姬

垂仁の帝御卽位の二年、崇神の帝の御庶弟、日子坐王の女狹穗姬が選ばれて后位に備り給うた。帝は后を深く愛し給うたので、后も亦その恩愛に報い給うて、春の如き睦しき御仲は續けられた。ところが、皇后の御兄狹穗彥王はかねてより野心を抱き、皇位を覬ひ奉らんとし、后の許に來り、「卿は夫の帝と兄といづれを大事と思ふぞ」と訊ねられた。狹穗姬は兄君の陰險なる企あらうなどとは夢にも知らず、且又面と向つて夫が大事とも申されず、何氣なく「兄君をこそ」と答へられた。狹穗彥は得たり賢しと妹君を說きふせて言ふには「容貌を以て人に愛せられる者は、色衰ふれば寵愛薄らぐは自然の道理である。見渡すところ天下には佳人仲々に多く、いづれも寵愛を受けんと願つてゐる。卿の寵も何時衰へんも計り難い。吾若し天津日嗣に上らば、卿と共に天下に君臨し、何時迄も幸福を分けんと思ふ故、恐れ多いこと乍ら、兄の爲、つまりは卿のため、天皇を害し奉れ。」と一振の紐小刀を與へた。后は餘りの事に呆然として言葉もなく、うち震へてゐたが、兄君の決心堅く、諫めてもとても止みさうもないので、そのまゝ刀を受けて衣服の中に隱し、兎も角もその場は退つた。

か弱き女性におはします后は、御兄君の非道なる頼みを拒むお力もなく、まして背の君を害し給ふが如き邪なるお力のあるべき様もなく、たゞ迷ひに迷ふばかりであつた。

程立つて、天皇が久米の高宮に御幸なされた時に、皇后の膝を枕にとせられ、晝寢をなされたことがあつた。皇后は兄君よりの依頼を果すは今なりと心を鬼にし、日頃隱し持つたる紐小刀を取出したが、忽ち忍び難き悲しみに襲はれ、不覺の涙はふり落ちて、帝の御面を濡した。帝は驚いて目覺め給ひ「われは今不思議な夢を見た。狹穗の方より驟雨沛然として注ぎ、わが面を濡した。又錦色をした小蛇、よぢ〳〵とわが頸の邊に纒るを見た。」と宣うた。后は今は包み果すべき術もなく、恐懼して御前を二三歩退り、流れる涙を拭ひもあへず「告げざれば帝の御身の上や如何ならむ。告ぐれば兄の身や亡びなん。妾が日夜の悶え凝りて御夢にや入りけむ。金色の小蛇とあるは、正しく妾が衵に藏し持てる匕首なり。雨は即ち妾の涙なり。」と泣く泣く事の次第を具に申し上げた。帝は后の告白を聽かれると、御腹立斜ならず「憎むべき狹穗彦かな。」と怒り給うたが、泣き沈む后の肩に手をやり給ひ、「汝の罪にあらず。」と慰め給うた。

かやうにして狹穗彦の逆謀は發覺して、豐城入彥の子八綱田は帝の命を奉じ、軍を催して直ちに討手に向つた。狹穗彥も稻城を作つて防戰怠りなく、兩軍はやがて對陣の形勢となつた。狹穗

姫はこの時御懷姙中であられたが、御自らの告白によつて、肉親の兄を死地に陷れたるを悲しく思召して、隙を盜み皇居より逃れ出で、兄の許に身を寄せ給うた。

帝は美しき后の上と、その胎なる皇子のことを覺して、眷戀の情止み難く、八綱田に命じてその攻擊を延期させた。かゝる間に、后は城中にあつて、玉の如き皇子を擧げ給ひ、使を帝の許に馳せて「我が大君、生れし子を寔に皇子と思召さば、收め納れて愛しみ給へ、城外に出し奉らん。」と聞え上げた。帝は狹穗彥をこそ惡しと思ひ給へ、后を愛しみ給ふことは尙切であられたので、軍中から敏捷にして力業强き兵を撰んで「皇子を收めん時、后をも掠め取れ、髮にても、手にても、衣にても、用捨なく摑みて引き來れ。」と命ぜられた。しかし、后は豫めこの事あるをさとり、髮を剃つて鬘を冠り、手玉の緖も衣も、古く腐されたのを召されたので、兵士が摑んで引出さうとした時、鬘は落ち、手玉の緖も衣も切れて、掠め取ることが出來なかつた。兵どもは御子だけをお供申して事の由を帝に奏した。帝の御悲しみは綿々として盡きないものがあつた。八綱田も今はこれ迄と稻城に火をかけて、總攻擊を開始した。狹穗彥を始めとして、その一族從類盡く城中に燒死せんとした時、帝は使を后の許に馳せて、「古より子の名は必ず母の命するものぞ、汝の生める皇子の名は何と命すべき。」と宣給へば、后答へて「今稻城を燒く折しも炎中に生れませば、

御名を本牟智和氣(記には本牟智和氣)と稱へ給へ。」と申された。帝は更に「母なき子を如何に育つべきか」と問はしめ給へば「乳母と大湯、若湯(湯をつかはせる女正副二人)を置きて、お育てなさるべし。」と答へられた。最後に帝は「汝世になくば、わが世話を誰にさせようぞ。汝の堅めしみづの小佩は誰か解くべき。」と怨み宣給はせば、后は答へて「丹波彦の女、兄姫弟姫こそ淨き公民なれ、迎へて使はしめよ。」と申し畢りて、兄と共に燃ゆる炎のたゞ中へと駈け入らせ給うた。

以上は記紀に見える后狹穗姫の悲しき物語である。かよわい女性らしい、人間性豐かな姫の御性格は、素朴にして純情な古代日本女性の面影をそのまゝ傳へてゐると思ふ。

引田部赤猪子

雄略天皇が美和川の邊に行幸あつた時、川邊で衣を洗つてゐる美しい娘があつた。天皇はその名をお尋ねになつて「今に宮中に召すから他へは嫁がずに居れ。」との勅命が下つた。赤猪子は辱さに勅命を畏んで、今か今かと待つて八十年といふ永い年月を待暮した。最早見る影もない老媼となつて、或る日多くの獻上物を持參して宮中に伺候した。天皇はもとよりお忘れになつてゐたので、「何者ぞ」と仰せられた時、しかじかと言上すると、天皇は大いにお驚きになり、御後悔なすつて樣々お勞りになつた。そして老女の誠の愛情に酬いるため、

宮中で召使はうとも思はれたが、餘りにも老い過ぎてゐるので、それもどうかと慮られた末、叡感の趣を御製として赤猪子に下賜せられた。

　御諸の嚴白檮が本白檮か下ゆゆしきかも白檮原處女

　引田の若栗栖原若くへに率寢てましもの老いにけるかも

この光榮に浴して、赤猪子は感涙に咽びながら恭しく奉答歌を詠んだ。

　御諸に築くや玉籬築き餘し誰にかもよらむ神の宮人

　日下江の入江の蓮花蓮身の盛人ともしろきかも

青春は去つた。老いの身の詮方もない。赤猪子は今更涙に濡れながら、恩賜の數々を戴いて故郷に歸つた。

勅語を辱しと承つて、壯齢から八十年も貞節を守つて一言の怨聲を發せずに居つたといふ優しい心掛は、如何にも素直な上代人の氣質を表してゐる。

松浦佐用姫　肥前國松浦の縣主の娘佐用姫は、大伴金村の子狹手彦と契り、淺からぬ仲であつた。宣化天皇二年、新羅が叛いて任那の地を犯した時、狹手彦は一方の大將として松浦潟より船出することになつた。狹手彦は別れに臨んで佐用姫に向つて「軍の習とて何

時討死するかも知れぬ。これがこの世で相見る終かも圖られぬ。」と言つて、さすがの武人も目に淚を浮べて乘り込んだ。佐用姬はかねて覺悟はしてゐたものゝ、これが今生の別れになるかと思ふと、胸はり裂ける思ひに居ても立つても居られなかつた。殆んど夢中で後を慕ひ、後の小山に上つて別を惜しみ、夫の名を呼び、領巾(ひれ)打振つて泣き倒れ、戀しさ悲しさに遂々その場に石となつてしまつた。後世その山を名づけて領巾振山といふと傳へてゐる。

このあはれにも美しい物語を、萬葉人は次のやうに歌つてゐる。

遠つ人松浦佐用姬夫戀(つまごひ)に領巾振りしより負へる山の名

海原の沖行く船を返れとか領巾振らしけむ松浦佐用姬

行く船を振り止みかね如何ばかり戀しくありけむ松浦佐用姬

(萬葉集、卷五)

五　嫉　妬

一夫多妻制度が認められて、男性が極めて自由な境地に活躍し得たに反して、女性は結婚後の戀愛範圍を著しく狹められてゐたといふことは、勢そこに嫉妬の念を湧かしむる一つの原因とな

つた。

戀愛の理想は無論一夫一婦にあるが、「汝こそは男にいませば、打見る島のさき〳〵、かき見る磯のさき落ちず、若草の妻持たせらめ」（須勢理姫）と歌はれてゐるやうに、一夫多妻であつた當時に於ては、

前妻(こなみ)が乞はさば、立柧棱(そば)の實の無けくを、後妻(うはなり)が乞はさば、柃實(いちさかき)の多けくを、こきだひゑね

といつた工合に、男の愛は多くの妻の中の一二の者に偏り勝であつた。從つて、所謂「嫉妬(うはなりねたみ)」の起るのも止むを得ない事であつた。男は情の赴く儘に自由に新しい妻を次から次へと娶つたが、女は「われはもよ女にしあれば、汝をきて男はなし、汝をきて夫はなし」と、よく一夫を守り貞操を立て通した。それだけに男の愛を要求する念も強く、その要求が滿されない場合、勝氣な女性は、必然的に嫉妬の情を制することが出來なかつた。大國主命の嫡后須勢理姫にしても、仁德天皇の皇后磐之姫にしても、允恭天皇の皇后忍坂大中姫にしても、皆この意味に於ける勝氣な女性として傳へられてゐる。又勝氣な氣象でないにしても、女子の男子に對する愛情が純眞であり、熱烈であればある程、これを獨占しようとする情念が起るのは當然であつて、こゝに愛の反面としての嫉妬が起るのである。

第二篇　萬葉集を通して見たる奈良時代の女性

第一章　萬葉集概說

「萬葉集」二十卷は、現存する我が國最古の歌集であると共に、質量のいづれから見ても、永久に光輝を放つべき最もすぐれた歌集である。記紀の歌に端を發した詩歌が、こゝに至つて抒情詩として行くべき極點に達したといふ事が出來る。わが上代文學は、此の集あるが故に、世界に誇るべき文學を持つ、その質實純美なる作品は、諸外國のいかなる詩歌に比しても、劣らぬ最高至醇の境に入り、長く後代の文學界に範を垂れてゐる。

成立、組織　撰者については古來多くの說があり、その勅撰か私撰かに關しても定說がないのであるが、必ずしも全卷を同一の撰者が編んだものではなく、大伴家持や橘諸兄が何等かの形で關係した歌集であると言へようと思ふ。全二十卷は短歌四千百七十餘首の外に、長歌二百六十餘首と旋頭歌六十餘首とを含んでゐる。作者も製作年代も判らない歌が數多くあるが、それらの明かなものに就いて見れば、仁德天皇の御代から淳仁天皇の天平寶字三年迄、約四世紀半の長年月に亙つて居り、その中で、天武天皇以前の歌は少く、主として持統天皇から

淳仁天皇の頃迄約七十年の作を含んでゐる。

作　者

作者の名は記載されてゐない者も多いのであるが、その明瞭なものだけに限つても、上は天皇より下は東北地方の農夫、軍人、少數ながら乞食や遊女に亙る迄の殆んどすべての階級を含んでゐる。作者の土地も、大和の諸地方を中心として、陸奥、東國、北陸、九州に亙つて、その土地々々の人の歌がその地へ旅した人の作と共に收められてゐる。この作者の階級、郷土の廣範圍な事が「萬葉集」の作品をして後の勅撰集のやうに作品を狹く固定せしめないで、多種多様の美を現さしめ、その價値をして藝術的に極めて高いものとした。

その作家の主なものは、皇族では雄略、天智、天武、持統、聖武の諸天皇、志貴、大津、弓削、有馬の諸皇子、大伯、但馬の諸皇女、長田、湯原、市原の諸王及額田王。臣下では柿本人麿、山部赤人、大伴旅人、同家持、山上憶良、高橋蟲麿、高市黑人、笠金村、中臣宅守等の男子、坂上郎女、茅上女郎、石川郎女等の女子である。

中について名ある者は、藤原時代の柿本人麿、奈良時代前期の山部赤人、山上憶良、同後期の大伴家持等である。就中人麿と赤人とは後世併稱された歌人で、人麿は特に長歌に秀で、その熱烈な國家精神は、祝詞風の雄渾莊重なる格調と相俟つて、所謂歌聖たる面目を持し、又傷亡の歌、

回顧の歌等は、いづれもその漲溢せる感情は洗煉せる技巧と共に群作家中獨歩の概がある。赤人は人麿に見るやうな雄大さはなく、自然愛に卽した短歌に秀歌をとゞめてゐる。憶良は赤人にやや先だつて歿したが、その晩年は貧困と老病とに悩みつゝ、人類愛に立脚した歌を殘してゐる。家持は當代棹尾の歌人で、その纖細幽寂の歌境は次代への推移を豫示するものとして注意される。

價　値

「萬葉集」は我が國に於ける最古の歌集であり、同時に最大の歌集である。從つてその興味は限りなく多くの方面に見出されるが、その最も主な一つは、眞情を磨いて現した點にある。「萬葉集」以前の歌は眞情が強く現れてゐるが、生のまゝ投げ出されたといふ形で、未だ藝術的に洗煉されない傾がある。いはゞ土から掘出されたまゝの粗玉（あらたま）の美である。又「萬葉集」以後の歌はよく洗煉されてはゐるが、內容に生々として所がなく、心に強く感じないことを、調子のよい美しい言葉に現したといふ嫌がある。ところが「萬葉集」は丁度この二つの中間にあつて、一方には眞情が生々と現れて居りながら、それが生のまゝに投出されないで、立派に藝術的の洗煉が加へられてゐる。よく歌を作る程の人は、誰でも「萬葉集」の心を以て心とすべきであるといはれてゐる。「萬葉集」の心は、我々が歌に入る第一步の心であり、同時に最後の心である。それ程「萬葉集」には、歌の生命が正しく、深く、豐かに盛られてゐる。そ

の歌の生命とは何であらうか。それは前に述べた眞情である。眞實なる感動である。歌が眞情から離れたら、いかに美辭麗句を並べても、それは美しく飾りたてた人形と同じである。いかに美しくとも、人形を以て人となすことが出來ないやうに、上べはどんなに美しくとも、眞情のかけた歌を以て、生きた歌とすることは出來ない。

「萬葉集」の歌は、どの歌をとつてみても、實に生々としてゐる。それは詠む人の心が、ごく自然に飾氣なく、卒直に正直に、或は熱烈に生一本に、純一に表されてゐるからである。喜びの歌は小躍するやうに、悲しみの歌は心もしほれるやうに、自分の持つ感情をそのまゝ思ひのまゝに歌ひあげ、自分の生活をごく自然に正直に歌つてゐるので、いついかなる時代にも、生きとし生ける人の心に迫り行く強い力を持つてゐる。そこに「萬葉集」の歌の尊さがある。

次に「萬葉集」は、我が國民の思想、精神の表明の上に於てすぐれた内容を持つてゐる。わが國民の、最も純粹にして眞髓とすべき精神が遺憾なく表されてゐる。それは尊皇愛國の精神、敬神崇祖の觀念、或は明朗快活な積極的精神等であるが、これらの純日本的な道義心が、他から教へられて然るのではなく、自然に流露され、しかも表面的な美しい修飾をもつて飾られてゐるのではなく、眞心より發動してゐるのである。この意味に於て「萬葉集」は日本人の寶典といふ感

じが特に深い歌集である。

その上、「萬葉集」は上代國語研究の上に貴重な資料を提供してゐるし、又上代文化研究の上にも缺くべからざる重要な典籍である。當代の社會狀態、風俗習慣等は他の史籍にも記されてゐるが、本集によつて具體的に例證の示されたものや、本書によつてはじめて知り得るものも少くない。その他地理學や動植物の如き博物學に關しても、本書によつて知り得る事が多く、宗教、哲學的思想等の精神文化に關する方面の事も、本書によつて幾多の明かにせられる點がある。およそ上代文化に關する萬般の事物、百科事典的な知識を本書の中から引き出す事が出來るのである。「萬葉集」こそは、實に我が國上代を研究する上に、必要缺くべからざる寶庫である。

第二章　萬葉女流歌人の本質

日本文學史上に於て、女性文學の確かなる發生は、萬葉時代に始るといふことが出來る。勿論萬葉に先行した記紀の歌謠、及びそれを周る物語に於て、女性の心理、女性特有の感情を描き出した場面を見出すのは、さして困難でないことは前述の如くである。しかし嚴密な意味に於て考

へる時、これらは女性自らの手によつて作られた作品であるか否かについては、幾多の疑問が殘されてゐる。故に文字通りの女性の作品――即ち女性自らが、己の感情の經緯を言ひ出した女性文學の確かなる發生期は、先づ萬葉時代と目するが妥當であらうと思ふ。

「萬葉集」の女歌人は、男歌人五百六十一人に對して七十一人に達してゐる。而してこれらの女流歌人の中には、樣々の階級の人々が網羅されてゐる。皇族を見ても、齊明、持統、元明、元正、孝謙等の女帝を初として、皇后では仁德帝の皇后であらせられる、磐之姫皇后、天智帝の皇后、光明皇后などが見え、大伯皇女、但馬皇女、額田王、紀女王を初め、皇女や女王の方々も多く現れてゐる。臣下に屬する女歌人では、官女としては采女や命婦などがあり、又吹黄刀自や志斐嫗の如く老女と思はれるものもあるが、多くは娘子、郎女、女郎といふ年若さを思はせる名の下に呼ばれて居り、尼も數人ある。是等は名の見える女歌人であるが、無名の女歌人も多いのであつて、防人(さきもり)や東の國の耕人の女や妻、漁師の妻なども數多く、また遊行女婦も存在してゐる。要するに、上は天皇皇后皇妃より、下は防人の妻、商人の妻、はては麻を刈りほす東國の貧しき農婦の歌にまで及んでゐる。而してこれら多くの女歌人の歌を大觀するに、その歌の殆んど總てが、感情生活を對象とした戀愛の歌であるといふことが出來る。尤もこれを仔細に見ると、それらの女

歌人はそれ〴〵階級も異つてゐるし、又境遇も違つてゐるのであるから、必ずしも同一の歌境に生きてゐたといふことは出來ない。

　丈夫(ますらを)の鞆(とも)の音すなり物部の大まへつぎみ楯たつらしも　（卷一）

と元明天皇が、世の事繁きを氣遣はれたのに對して、姉君の御名部皇女が、

　わが大君ものな思ほし皇神(すめがみ)の嗣ぎて給へる吾なけなくに　（卷一）

と勵まされたといふやうな、特殊な階級の人によつて詠まれた特殊の歌境もあるし、

　稻つけばかゞるあが手を今宵もか殿のわくこがとりてなげかむ　（卷十四）

　きはつくの岡のくゝみらわれ摘めど籠にもみたなふせなとつまさね

といふやうな、階級も低い東國の田舍女の、素朴な中に純粹な心持があらはれ、耕人としての面影を偲ばせる歌もある。

又中には、額田王の「そこしたぬし秋山われは」と詠まれた歌を初め、

　かりかたの高圓山を高みかも出でこむ月の遲く照るらむ　（卷六、坂上郎女）

　ぬば玉の夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見ればかなしも　（同）

などのやうに、自然を觀照した清澄な歌境もある。

然し乍ら、「萬葉集」の女性の歌には、この靜かに自然を觀照するといふ心持に專念し得たものは、極めて少ないのであつて、男性が自然觀照に優れた歌を殘してゐるのに對して、女性の自然に對する歌は極めて少い。

又國家的感情、乃至は複雜な社會的感情を歌つたものを見るに、萬葉男性の歌にかゝる方面が相當多く含まれてゐるのに對して、女性の歌には殆んどそれが見られないのである。又、家祖先等の觀念、神佛天地山川に對する觀念を歌つたものも殆んど見當らない。大伴坂上郎女に「神を祭る歌」があるが、これは親の如く親しみ思ふ氏の神を祭つて、吾が戀の破れた嘆きを訴へたものであり、その外の神によせて詠まれた二三首の歌も、悉く戀の逢瀨や成就を願つたものである。佛教に關しても同樣のことが言へる。

男性の生活が概して公的であり、國家社會的であり、しかも積極的であるに反して、女性の生活は私的であり、家庭的個人的であり、しかも沈潛的であると言はれてゐるが、このことは、萬葉女性には誠によく當はまるもので、高揚した國家的感情、乃至は複雜な社會的感情を歌にしたものは殆んど見當らない。卽ち、國家社會に當面する女性の強い精神は殆んど現れてゐないのである。奈良朝の男の世界では、國家や國家の政治のために生きた生活があつた。それは人麿や家

持の歌に見える皇室中心の國民思想を詠んだ歌が、明かに示してゐる。又奈良朝の男歌人が、强い功名の心に生きた趣は、「萬葉集」の隨所に見えてゐるし、儒佛思想の影響を多分に受けて、一種の道義生活を强調してゐる歌も少からずある。かやうに複雜多樣に亙つてゐる男歌人の心境に比較して、女歌人の心境は誠に單純一律なものである。

しかしこれは獨り萬葉時代のみならず、あらゆる時代を通じて、男性作家に對する女性作家の持つ著しい傾向と言はなければならない。男性に比較して、體驗見聞の乏しい女性が、その創作の材料、範圍の狹く乏しいのも亦當然なことである。卷十一の少女は、

丈夫は友の騷ぎに慰もる心もあらむ我ぞ苦しき

と嘆いてゐるが、旅や政治や外交等、外の事件に關係してゐる男性に比して、それらの體驗を有せず、狹い家内の事、戀愛のことのみに關心した當時の女性の作が、男性の歌材とした旅や宴遊や、戰等を離れて、相聞戀愛の一方にのみ傾注したことは、正に當然の歸結といふべきであらう。

かくて「萬葉集」の女流歌人の生活は、極めて狹い範圍内に極限せられたもので、彼等は外來文化に眼を向けようともせず、社會の樣々の事象に對しても唯一顧を與へるのみで、狹い生活の境地に跼蹐しながら、小さい自己の感情の中に入つて、その世界の中に於て、愛人を慕ひ、夫を

思ひ、子を愛しつゝ他を顧る餘裕もなく、愛情を以て生命となし、專らこれがために生きてゐたのである。

然し乍ら、女性の歌は、そのやさしい感情と至純な愛情とを盛つてゐる點に於て、又男性の有し得ない別の領分を持つてゐる。そして「萬葉集」の歌を價値づける上に於て、これら女性の作が、大きな役割を演じてゐることも、亦見逃すことの出來ない事實である。人麿のやうな大自然の征服はなく、憶良のやうに生活に沒入した哲人的の歌はなかつたが、

いまさらに何をか思はむうちなびき心は君によりにしものを　阿部郎女

吾が背子は物なおもひそ事しあらば火にも水にもわれなけなくに

思ふにし死にするものにあらませば千度ぞ我は死にかへらまし　笠女郎

夕闇は道たづたづし月待ちていませ吾が背子そのまにも見む　大宅女

凡ならばかもかもせむを畏みと振りたき袖を忍びたるかも　娘子兒島

草枕旅行くせなが丸寢せば家なるわれも紐とかず寢む

これらの歌は、如何なる天才歌人があつて、どんな歌才を弄し得たからとて、男性にはのぞくことの出來ない女性獨特の境地である。

又萬葉時代の女性が、その心境作品共に抒情詩以外に出なかつたのは、後世の女流作家が小說、日記、隨筆と多方面にその才能を發揮したのに比べると、その文學活動の範圍に於て遙かに狹いものと言はなければならない。若し藝術形式の廣狹を以て、直ちにその藝術能力の範圍を定めるものとするならば、萬葉時代の女性は、文學的に劣等の列に置かるべきものかも知れない。然るに彼等は、活動範圍の狹小であつた代りに、その狹い範圍內に於て、深い〱深處に到達することが出來たのである。いはゞ生命の祕奥ともいふべき深處に到着し得たのである。そこに理窟を絕し、千年の歲月を一蹴して、讀者の胸に迫る强さがあるのである。

第三章　女流歌人の研究

持統天皇

天皇は天智天皇の第二皇女にましまし、天武天皇の皇后となられたが、帝の崩ずるに及んで皇位に上り給うた。人皇第四十一代にあたらせられる。

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山　（卷一）

天皇が藤原の都のほとりから、東に程近く立つ香具山の初夏の景色を見渡されて、御心爽かに詠

み出された御歌である。瑞々しい初夏の山景を叙して、白妙の衣を點綴したところ、實に印象的である。季節の變化に對する作者の驚きも看取される。一種の調極めて朗かに、清新の氣滿ち溢れ、而も女性の歌とは思はれない程の、悠揚たる格調が具つてゐる。

　不聽といへど強ふる志斐のが強語このごろ聞かずて朕戀ひにけり（卷三）

天皇が志斐の嫗といふ近侍の老女に與へられた御歌である。この嫗は非常に話好きで、人を捉へては無理に話を聞かせるのが常であつたらしい。天皇は常に煩くおぼされたが、それも暫くお聽きあらせられないと、聽きたくおぼされるといふ情を詠まれたのである。しの音を頭韻として三度重ねたのも、志斐に與へる歌としては極めて面白い。これに對して嫗は、

　いなといへど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強語りと言る

と答へ奉つてゐる。ふさはしい諧謔を以てお答へしたところに、嫗の才のひらめきも見えて面白い。

　安見しし　我が大君の　夕されば　見給ふらし　明けくれば　問ひ給ふらし　神岳の　山の紅葉を　今日もかも　問ひ給はまし　明日もかも　見給はまし　その山を　ふりさけ見つゝ　夕さればあやに悲しみ　明けくれば　うらさび暮らし　荒妙の　衣の袖は　ひる時もなし（卷二）

天武天皇が、在位十五年にして崩御ましました時、后持統天皇がお詠みになつた御歌である。抽象的假定的な悲しみを述べたものでなく、大和神奈備の神岳（雷岳）を中心とし、天皇が朝夕御覽になつて慰まれ、今居らるれば、定めし今日も明日も樂しまれるであらうところの神岳の紅葉を、今自分一人で眺めやりつゝ、朝夕涙にくれるといふ意で、同じ詞や同じ句を巧みに反復して、對句聯句の形式のうちに、綿々たる思慕の情を述べられたところに、誠に純にして深い哀情の妙味が味はれる。天武天皇への眞情も、その優れた歌作の御手腕も、この一首に充分看取し得られる名歌である。

もゆる火もとりてつゝみて袋にはいるといはずやも知るといはなくも

同じく天武天皇を偲び奉つた御歌である。當時役小角の輩で、火を袋に包みなど怪しい術をなすものがあつた。この歌はその事を下にふまへて、かの燃える火でも、これを取つて裹んで袋に入れ得るといふではないか。そのやうな出來ないやうな事でもすれば出來るのに、どうして我が大君は崩御になつたのであらうか、それが分らない、と御歎きのあまり宣うたのである。悲しみを述べさせ給うた中に、時代相の一面も現れたあはれな御歌である。

光明皇后

皇后は藤原不比等の御女で、御年十六にして聖武天皇の妃となり、天平元年皇后となられし由續紀に見えてゐる。高德の譽高く、種々の逸話を留められてゐるが、歌は集中僅に三首を殘すのみである。

吾が夫子と二人見ませば幾許かこの零る雪の懽しからまし　（卷八）

聖武天皇に奉られた御歌である。たまく雪のおもしろく降つた朝、別宮においで遊ばされてお詠みになつたものであらう。何處といつて別に飾氣のない、それでゐて眞情の流露してゐる御歌で、巧みを求めない處に却つて深い味ひがある。そしてどこか稚拙な尊さがあつて、それが今日の吾々の胸にも強く響いて來るのである。この御歌を通して考へられる皇后は、如何にもやさしく溫なしく、そして柔かな御心の方のやうに思はれる。誠に素直な優にやさしき御心の窺はれる御作である。

朝霧のたなびく田居に鳴く雁を留め得むかも吾が宿の萩　（卷十九）

吉野の離宮に行幸のあつた時、皇后のお詠み遊されたものである。折しも秋の頃で、離宮の庭には萩が一面に咲いてゐる。邊を御覽になるとすべて稻田で、朝霧のたなびいてゐる中に雁が鳴いて渡つて行く。わが庭の萩の美しさは、あの鳴き行く雁をとゞめ得るであらうか。とお詠みにな

つてゐる。雁の聲のおもしろさ、あの雁を我が宿にしばらくとゞめて置きたいものである。といふお歌である。萩の花の美しさによつて、雁をとゞめ得ようかと歌はれた處に趣がある。

　大船に眞楫繁貫き此の吾子を韓國へ遣る齋へ神たち

皇后の甥にあたる藤原清河が、遣唐使として出發せんとするに際して、大和の春日神社でお祭をして一行の無事を祈られた時、皇后のお詠み遊ばされた御歌である。清河は天平勝寶四年に出發したが、途中暴風雨に遭つて唐の南方に漂着し、歸朝することが出來ずして、遂に彼地に歿した。大船に眞梶を多く着け、この愛兒を遠い唐國へ遣るのである。神々よ、途中無事であるやう冀くば加護を垂れさせ給へ。といかにも深い心情の躍つた御歌である。聖武天皇が節度使藤原宇合に酒を賜つて詠まれた、

　丈夫の行くとふ道ぞ凡ろかに念ひて行くな丈夫の伴

といふ御製と好一對の御歌で、共に赤子をいたはる大御心の現れた御作である。

光明皇后といへば、吾々は直ちに藥師寺の吉祥天女を思ひ出す。その像が示すやうな豐麗優雅な御容姿は、圓滿な感情と、ありあまつた才氣とを物語つて餘すところがない。以上三首の御歌は、その才藻の一端を示すものとして、貴い御作である。

あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

上右――弟橘姫の入水（菊池武保筆）

上左――光明皇后（増田牧山筆）

下――標野行（柳生鹽億筆）

額田王

女らしい情熱と、氣高い氣品とを以て、萬葉女流歌人の代表と稱せられてゐる額田王は、その傳記を詳細に知らうとするには甚だ材料に乏しく、「日本紀」天武天皇のくだりに、「天皇初娶鏡王ノ女額田姫王生十市皇女云々」とあるばかりで、事蹟が正史の上に記されてゐないから、「萬葉集」に收められた歌によつて、考察の歩を進めるより外に道がないのである。

鏡王を父とし、鏡王女を姉とした女王は、大和の額田の里に住んでゐたのでこの名があつた。天武天皇の未だ大海人皇子でましました頃、御寵愛を受けて十市皇女をお生みした。然るにどんな事情があつたのか――當事者の間に愛の變化のなかつたことは、後の贈答の歌によつて分るが――この結婚は破綻して、女王は大海人皇子の御兄君にして、當時の東宮たる、中大兄皇子（天智天皇）の妃として宮には入られることになつた。

大海人皇子の寵を受けて、十市皇女を儲けた程の御仲でありながら、天智天皇に召されると、何故皇子の許を去つて、天皇の御寵愛を受けるやうになつたのであらうか。それには何か込み入つた事情が伏在してゐたことであらうが、この事が女王の一生の運命を悲痛なものにし、その悲痛な感情が歌に表現されて、不朽な名作となつて現れたのである。

あの悲しむべき壬申の亂の原因についても、この麗人を中心としての感情の縺れが、事態を一層深刻ならしめた事であらうといはれてゐるが、戰終つて後、女王は再び昔の戀人である大海人皇子、卽ち時の天武帝に召しかへされて、その宮中に起居する身となられた。然し後期の御生涯は、前期の才華輝くばかりのそれに比して如何であつたか、その終をさぐる史料とてもないのである。

女王の御歌は、疑問のものも總て入れて、長歌三首短歌十首であるが、はつきり殘つてゐるのは、長歌三首短歌九首と見てよい。今それら殘された數々の御歌の一首々々を味ひながら、その風貌に接して見よう。

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし兎道(うぢ)の都の假廬し思ほゆ　（卷一）

女王の「萬葉集」に於ける最初の御歌である。思ひ出すまゝに單純に、面白く樂しかつた旅の追憶を詠んでゐるのであるが、「秋の野のみ草刈り葺き宿れりし」といふ言葉などは、實によく要を得て無駄がなく、その光景を躍如たらしめてゐる。澄みとほつた秋の萱原の、風の吹くまゝに銀白色に光る感覺的な美しさも感ぜられるやうである。

熟田津(にぎたづ)に船乘りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな　（卷一）

當時韓土に事多く、齊明天皇の七年正月に、天皇親しく御船に乘じて、新羅征伐の途につかせられた。時に額田王も供奉の中にあつた。御船は途中伊豫の熟田津に碇泊し、石湯の行宮にお止りになり、やがて御出帆の時となつた。その時の御歌である。月明の夜の朗かな感じと、出船の喜びとを併せ述べたもので、技巧の跡は少しもなく、實感實情をその儘詠じ、單純であるが引きしまつた句法の中に、よく充實した感情が詠み込まれてゐる。今眼前の海が明るくなり、彼方の海上に月が現れて來た。銀光が波に長くきらめき、潮はひた〳〵と寄せてゐる。そして月光に、そこに立並んでゐる人々の顔の輝きが見えるやうである。月も出た、潮もよくなつた。さあ出發しようといふのである。滿ち來る月、さし來る潮、その氣運に棹さす征伐の御船出のきほひ——その想の雄渾なる、その調の堂々たる、所謂萬葉歌風の眞髓を傳へたものである。

味酒（うまさけ）　三輪の山　青丹によし　奈良の山の　山の間ゆ　い隱るまで　道の隈　いつもるまでに　つばらかに　見つゝ行かむを　しばしばも　見さけむ山を　情（こころ）なく　雲の隱さふべしや　（卷一）

反　歌

三輪山をしかも隱すか雲だにも情（こころ）あらなむ隱さふべしや

女王が住みなれた大和國を後にして、天智天皇が新しく造營せられた、さゞなみの志賀の都へと

向はれる時の作である。女王の御住居からは何時も三輪山が見えてゐたのであらう。いよ〳〵旅立つて奈良山を通り過ぎると、もう三輪山は見えなくなる。故里を離れても、なほ三輪山の姿の見える中は、力強くもあらうが、いよ〳〵その三輪山も見えなくなつてしまへば、如何に心細いことであらう。それで、ずつと見つゝ行かうと考へてゐたのに、無情にも雲が蔽つてしまつたのである。その折の心の底からの叫びが、凝り固つてこの歌となつた。

一說には、この歌は前に述べた如く、女王が大海人皇子との切なる戀を裂かれて、君命もだし難く近江の宮廷に召されて行く時の、悲痛極りなき御心を述べられた歌であるといふ。三輪山に寄せる哀切な名殘惜しさは、必ずや山にのみ寄せる名殘惜しさではないやうに思はれる。一人の女性が、何か堪へきれぬ悲痛の心を、山や雲を通して天に訴へてゐるやうな感をうけるのである。

反歌に於ても、激切綿々の情を內にみなぎらし、そして初め強く、「しかもかくすか」といひ、それを抑へて隱さふべしやと結んだこの表現の味ひ、興奮の心を一縷の雲の情に賴んで、はかなき期待に自ら慰める。この自問自答正に深刻といはねばならない。哀切人の淚をさそうて餘ある。

天皇內大臣藤原朝臣に詔して、春山萬花の艷、秋山千葉の彩を競はしめ給ふ時

冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　もみちをば　取りてぞしぬぶ　靑きをば置きてぞ歎く　そこし恨めし　秋山我は　（卷一）

春秋の優劣を論ずることは、古くから支那に行はれてゐた詩的遊戯であつて、我が國でも、それに倣つて、歌人の間に屢々試みられたのであるが、文獻に見えてゐるのはこの歌を以て最初とするのである。この歌には、技巧の方面に於て、女王の優れた技倆が認められるのであるが、更に春秋の優劣の判斷には、作者の優秀な才智が遺憾なく現れてゐる。この歌にも寓意があるといはれてゐる。してみれば、春山を今を我が世と榮え給ふ天智天皇に、秋山をうら淋しい大海人皇子になぞらへての歌であらうか。

あかねさす紫野ゆき標野(しめぬ)ゆき野守(ぬ)は見ずや君が袖ふる　（卷一）

天智天皇が、近江國志賀の里に都を遷された翌七年五月五日、天皇は御弟の大海人皇子、その他諸王內臣及び群臣を從へて蒲生野に遊獵せられた。その中に女王も交つてゐた。か行きかく行く人の中に大海人皇子の燃えるやうな熱い眼ざしが、鋭く女王を射てゐた。燃え上る心を抑へる術ないやうに、皇子は輕やかな衣の袖を頻りに振つてゐた。「御心は嬉しいと思はぬではないが、傍(はた)

の人目があるではありませんか。」と、警衛の人の見るであらうことをハラ〳〵思ひつゝ、皇太弟にひそかに注意せられたのがこの歌である。これに對して皇子は、

紫のにほへる妹をにくゝあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも　（卷一）

「さばかりとがめ給ふな、紫草の匂へる如く美しい御身を憎しとならば、いかで戀ひむ。御身は今は人妻にておはするものを、一方ならず思へばこそ、しか知りつゝもかくは戀ふなるを。」と答へられてゐる。

吾々は女王の行動に對して非難めいた批評を加へる前に、女王の負はれた大きな運命の痛ましさに、先づ思を致すのである。これらの歌の中には、女王の悲痛な一生の縮圖が示されてゐるやうに思はれる。

君待つと吾が戀ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く　（卷四）

此の歌は年代未詳であるが、「近江天皇を思ひて」とあるからは、大體近江の宮廷に入られた後と解してよいと思ふ。一讀楚々たる戀心に胸打たれる。調といひ、心といひ、いかにも自然で、少しもたくんだ處がなく、優しいしかも迫つて來る女心が感じられる。上代ぶりのおほらかな中に測々として迫るものがある。秋風の靜かに簾を動かす音が、まことに間をおいて聞えるやうであ

る。平易に歌はれてありながら、初秋の感覺と、それにもつれて醸し出される思慕の情とが、淡々と流れて來る佳作である。

女王は先に大海人皇子に、そして今は天皇に侍してゐる。この運命に從順な、そしてさうした境遇にゐて、やはり純な眞實な心を失はない女の弱さを持つて居られたやうに思ふ。一體歌を通して考へられる女王は、容姿美しく才學優れ、その上心やさしく淑かで、遠慮深い、それでゐて感激性の純な方であつたやうに思はれる。この歌にも、女王の淑かさ、從順さ、しほらしさがよく現れてゐる。この歌の如きは、迫り壓し來る力のものではなく、引きつける力の歌である。

額田王のこの歌を見て、御姉君の鏡女王が、

風をだに戀ふるは羨し風をだに來むとし待たば何か嘆かむ　(卷四)

と詠まれた。鏡女王は内大臣藤原鎌足の夫人であつたが、この時は鎌足が世を去つて、未だ間もない頃であらう。

かうしてお仕へしてゐた天智天皇が崩御遊ばされた時、

かゝらむと豫て知りせば大御船はてし泊にしめ結はましを　(卷二)

と悲痛な聲をしぼり、又山科の御陵から退散の際には、

やすみしし　わが大君の　かしこきや　御陵つかふる　山科の　鏡の山に　夜はも　夜のことごと　晝はも　日のことごと　哭のみを　泣きつつありてや　百磯城の　大宮人は　去き別れなむ（卷二）

と泣き濡れて居られる。

天智天皇崩御の後、天武天皇天下の權を握り給ふに及んで、女王は再び天皇に召しかへされて、明香淸見原の宮に御起居遊ばされる御身となり、天皇崩御の後、その正妃にましますす持統天皇の御代となるまで、生存なされてお歌が殘されてゐる。

要するに女王の一生は、實に變轉極りなき悲痛の一生涯であらせられた。しかしその悲痛な中にあつて、女王の歌才は一層磨かれて、數々の名歌が殘されたのである。

大伯皇女

大伯皇女は、非業にして死なれた、詩人にしてしかも武に秀でられた、大津皇子の同母の姉君である。父君は天武天皇であらせられたが、天皇の三年、十四歳で伊勢の齋宮となつて降られた。

わが夫子を大和へ遣るとさ夜更けて曉露に吾が立ち霑れし（卷二）

皇女が伊勢の神宮に奉仕しておられた時、大津皇子が御心に思ひ立たれる事あつて、ひそかに伊勢の皇女をお訪ねになり、夜更けて大和へお歸りになる時、弟宮の心中を思ひやられつゝも、御

身の上を案じ給うて、お詠みになつたものである。夜はまだ明けやらずして、曉の露の漸く降る頃である。一人大和に向つて立たれる弟君の後を見送られて、皇女は家の外に物思ひに沈んで立つておいでになつた。弟の身の上を思つて、何時迄立つてゐたか覺えない。ふと氣がつくとしつとりと曉の露に濡れてゐたのである。「曉露に吾が立ち霑れし」は單なる說明でなく、悲しみ淋しみの心のこもつた詠歎である。悲しいと主觀を現はさず、狀況を述べて、そこに無限の哀感を湛へてゐる。

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ　（卷二）

二人親しみ合ひ、助け合つて行つても、なか〳〵容易でないのに、今弟は一人であの秋山を越えて行くのだ。どうして越えるのだらう。いたはしいことだ。と、皇子の御出發になつた後を見送つて、お姿の見えなくなるまでたつてからこの歌が詠まれたのであらう。前の歌と共にいひしれぬ悲調があふれてゐて、皇子の御身の異變を、豫め感じて居られたやうに思はれる。肉身の愛情がかうした悲歌をうんだのである。

神風の伊勢の國にもあらましを何しか來けむ君もあらなくに　（卷二）

大津皇子は都に歸られると、御謀叛の罪によつて、御成敗を受け世を去られた。都で待つてゐた

ものは冷い死の手であつた。都に上られると、直ぐ殺されたものと思はれる。その後から、皇女はその事あるを知らずに上京なされたのである。

見まく欲り吾がする君もあらなくに何しか來けむ馬疲るゝに（卷二）

逢ひたく思ふ君もおいでにならぬのに、何で伊勢の國からはる〴〵都まで來たことであらう。たゞ馬を疲らしたに過ぎないのに――といふので、お疲れになつて居られるのを馬に托して、馬の方に同情された歌ひ方をなされてゐる。疲れておいでになるのは、皇女御自身なのだ。然るに、「馬疲るゝに」と、馬の疲れをいはれてゐる所に、如何にも女らしい優しさがこめられてゐる。

うつそみの人なる吾や明日よりは二上山を兄弟と吾が見む（卷二）

世に生きて哀れな吾は、明日よりあの墓のある二上山を、弟と見て慰めとしよう、といふのである。仰げば二上山は壯高な姿で立つてゐる。そこに弟が永久に眠つてゐる。そのみ墓のある二上山を弟と見るとは、何といふ心細く悲しいことであらう。哀切極りない作である。

磯の上に生ふる馬醉木を手折らめど見すべき君がありといはなくに（卷二）

今しも春の初である。磯山の間には、馬醉木が盛に花をつけてゐる。その美しい花を折りもしようが、しかし折つたところで、これを見せて語るべき吾が弟はもうこの世の人ではないといふの

である。

以上の六首が皇女の作として、「萬葉集」に見える御歌の全部であるが、これら一聯の御歌を見ても、皇女は如何に御心の素直な優しい、然も文學的才能を持つた御方であつたかゞ察せられる。六首とも、いづれも歌詞が強く、調は張りみちてゐる。それは非運な御弟に關した作のみだから、當然ともいへようが、その堪へ難い悲歎を外面に強く現さず、深く內に湛へてゐる所に、その特色が認められるのである。

大津皇子も御幼少の時には天智天皇に愛せられ、長じては、才學、殊に文筆に秀でられた。「詩賦之興、自大津始也」と書紀にも記されてある。

大伴坂上郎女

「萬葉集」二十卷の中、夫々の名歌を殘してゐる歌人の中には、異色ある女流歌人も幾人かあるが、その中でも特に光つて見えるのは、大伴坂上郎女であらう。郎女は燃えるやうな情熱と、輝く才能と、明るい美貌との持主であつた。その上、他の女流に比べて、作歌の年月が長かつた爲もあらうが、歌の數も非常に多いのである。その點からいつても、男性歌人に劣らぬ力量を持つてゐたといふことが出來る。

郎女は天武天皇の御代の初頃、飛鳥京の片ほとり、佐保山の麓に生れたのである。父は大納言

大伴安麻呂卿、母は石川内命婦といふ人である。この安麻呂には、郎女の外に、赤人、田主、宿奈麻呂、稻公と四人の男子があつた。時は大伴家の全盛時代、彼女はその少女時代を、佐保川の流淸きほとりに、權貴を誇る貴族の娘として、美しく豐かに成長したのである。

郎女は最初、天武天皇の皇子穗積親王の妃となり、非常に寵愛されたらしいが、親王は靈龜元年に薨去遊されてゐる。その後、藤原不比等の第四子、麻呂大夫と關係のあつたことは、その贈答の歌によつて明かである。

をとめらが玉櫛笥なる玉櫛の神さびけむも妹に逢はずあれば　（卷四）

よくわたる人は年にもありとふを何時の間にぞも吾が戀ひにける

これらは麻呂が郎女に贈つた歌であるが、郎女は之に答へて次のやうに歌つてゐる。

佐保川の小石（さゞれ）ふみわたりぬば玉の黑馬の來夜（くよ）は年にもあらぬか　（卷四）

千鳥鳴く佐保の河瀨のさざれ波止む時もなし吾が戀ふらくは

來むといふも來ぬ時あるを來じといふを來むとは待たじ來じといふものを

千鳥鳴く佐保の河門の瀨を早み打橋渡す汝が來と思へば

佐保川の岸の司の柴な刈りそね在りつゝも春し來らば立ち隱るがね

しかし、二人の交情は永くは續かなかつた。彼女は程なく、異母兄大伴宿奈麻呂の妻となつてゐる。さうして大孃、小孃の二人を生んだ。この關係は何時迄續いてゐたか明かでないが、神龜年間の末の頃には、兄旅人の任地である筑紫の大宰府に滯在することになつた。それは旅人卿が筑紫に赴いてから足掛三年といふに、十一になつた家持を頭に、三人もの愛兒を遺して妻が亡くなつたので、弱り果てゝ、妹の郎女に下向してくれるやうにと頼んで來たからである。郎女は取敢へず二人の子供に留守居させ、遙々筑紫まで下り、母のない三人の子を世話することになつた。

筑紫の旅の空で愛妻に死別した旅人卿は、漸く齡も傾き病氣勝であつたので、俄に都戀しくなつて、妻に別れた翌々年の、天平二年の暮も押しせまつてから、筑紫を引き上げて歸京することになつた。郎女も勿論、母なき家持達の世話をしながら共に歸つたのである。京に歸つてから數月の後、兄の旅人は遽に逝去した。これからの彼女の生涯は、淋しい頼ないものであつたらしい。娘の大孃を甥の家持に嫁せしめて、この未來ある青年と我が愛娘との行末を祝福したが、天平十八年の秋、家持は越中守として任に赴き、一二年の後、大孃も亦夫に從つて任地に下つてゐる。彼女が京の淋しい生活に堪へかねて、大孃に歌を贈つたのは、天平勝寶二年であつた。これを最後として、その後の消息は惜しいことに傳つてゐない。

以上のやうに、郎女は變化の多い薄倖な生涯を送つてゐるが、歌人としては立派な足跡を遺してゐる。萬葉女流作家としては、その歌數の多いこと、その素材の多方面なこと等に於て、正に第一人者であるといはなければならぬ。

先づ相聞の歌から評釋を試みてみよう。

夏草の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ戀は苦しきものを（卷六）

「夏の野の草の繁みの中に埋れて咲いてゐる姫百合のやうに、思ふ人に知られず、唯獨り心の中でお慕ひ申してゐるのは、隨分苦しいものです。」といふのだ。青々と繁つてゐる夏野の中に咲いてゐる赤い姫百合は作者の象徵である。姫百合は花莖の短い可憐な花で、草叢に咲いてゐることが多いから、風でも吹いて草が靡かない限り、人目にふれることもないものである。さうした花を譬喩に用ひたのも氣が利いてゐるばかりでなく、何となく作者の美しい顏や姿までも想ひ起させる効果がある。恐らく作者の少女時代の作であらう。

押照る　難波の菅の　ねもころに　君がきこして　年深く　長くし云へば　眞十鏡　磨ぎし心を　許してし　その日の極み　浪の共　靡く玉藻の　かにかくに　心は持たず　大船の　たのめる時に　ちはやぶる神やさけけむ　うつせみの　人か禁ふらむ　通はしし　君も來まさず　玉梓の　使も見えず　なり

ぬればいたもすべなみ　ぬば玉の　夜はすがらに　赤らひく　日もくるゝまで　嘆けども　験をなみ
念へども　たづきも知らに　手弱女の　言はくもしるく　手童(たわらは)の　音のみ泣きつゝ　たもとほり　君が
使を　待ちやかねてむ

反　歌

はじめより長くいひつゝたのめずばかゝるおもひにあはましものか　（巻四）

この歌は、多分宿奈麻呂の薄情を憤つたものであらうか。憤懣の情が眼に見えるやうである。眞十鏡磨ぎし心を　許してしその日のきはみ　浪のむた靡く玉藻の　かにかくに心は持たず　大船のたのめる時に」の句々に滲んでゐる血を吐くやうな思ひ、作者の純粋な情熱感が迸り出てゐる。

今は吾(あ)は死なむよわが背生けりともわれによるべしといふといはなくに　（巻四）

思ひ迫つた歌である。激切な感情がよく表れてゐる。

戀ひ戀ひて逢へる時だに愛(うつく)しき言つくしてよ長くと念(おも)はゞ　（巻四）

女性らしい、そして愛人に甘へる戀心の現れた歌である。郎女の甘へる姿さへ見えるやうである。

青山を横ぎる雲の著(いちじ)ろく吾と咲(ゑ)まして人に知らゆな　（巻四）

「青山を横切る雲」は、「いちじろく」と言はんがために用ひた譬喩的の序詞であつて、一首の内容

には直接關係のない叙景的要素であるが、この清く爽けく、そして鮮明なしかも快い景を持つて來たところに、この歌が一段とひきたつてゐる。「吾と咲まして」には、作者の嬉しくうけ入れる心が内に籠つてゐる。

われのみぞ君には戀ふる吾が背子が戀ふとふことは言のなぐさぞ（卷四）

思はじといひてしものを翼酢色のうつろひやすき吾が心かも

思へどもしるしもなしと知るものをいかにこゝだく吾が戀ひわたる

この頃は千歳や往きも過ぎぬると吾や然思ふ見まくほれかも

いづれの歌にも、熱烈至純なる情熱の奔騰が見られるのである。

次に郎女の母性としての生活を覗いて見よう。彼女は戀愛生活に於ては、思ひ切つて開放的な女性であつたことは、その歌のよく示すところであるが、又一面には、強い母性愛の持主でもあつた。母としてその女の生長を見守り、愛護することも亦厚かつたのである。

久方の天の露霜置きにけり家なる人も待ち戀ひぬらむ（卷四）

郎女が兄旅人卿に從つて、筑紫の大宰府に起居した頃、都に殘して置いた娘を思ひやつて詠んだものである。露霜は露から霜にかはる頃のこと、秋もやゝ深くなり、身にしむ思ひのいや増す頃、

我が子懐しさの念にかられて詠んだものであらう。

玉主に珠は授けてかつがつも枕と吾はいざ二人寢む　（卷四）

愛娘を嫁がせた母の心を詠んだものである。愛娘を玉といひ、婿を玉主といふ。愛する娘をよき婿にやつた安心はあるが、さてどこか淋しい、奪はれたやうな心もないではない、といふ母親の複雜な心の動きを歌つたもので、實に人情の機微にふれた優れた歌である。

次の長歌は、跡見庄に滯在してゐた時、家に留守居してゐる娘の大孃に贈つたものである。

常世にと　吾か行かなくに　小金門に　物悲しらに　思へりし　吾が子の刀自を　ぬば玉の　夜晝いはず　思ふにし　吾が身は瘦せぬ　嘆くにし　袖さへぬれぬ　かくばかり　もとなし戀ひば　故鄕に　この月頃も　ありがてましを

反　歌

朝髮の思ひみだれてかくばかり汝姉が戀ふれぞ夢にみえける　（卷六）

又、竹田の庄から大孃に贈つた歌、

うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間なく時なし吾が戀ふらくは　（卷四）

早河の瀨に居る鳥のよしをなみ思ひてありし吾が兒はもあはれ

の如き、或は大嬢が夫家持の任地越中に赴いた後で、都に淋しく取殘されて、

海神の　神のみことの　御櫛笥に　貯ひおきて　齋くといふ　珠にまさりて　思へりし　吾が子にはあれど　空蟬の　世のことわりと　ますらをの　引のまに／＼　しなさかる　越路をさして　這ふ蔦の　別れにしより　沖つ波　とをむ眉引き　大船の　ゆくらゆくらに　面影に　もとな見えつゝ　かく戀ひば　老づく吾が身　蓋し堪へむかも

反歌

かくばかり戀ひしくあらば眞鏡見ぬ日時なくあらましものを（卷十九）

といつた如き、いづれにも／＼、濃かな母性愛が滲み出てゐるのである。

しかし、彼女の愛情は、異性と我が子とに對してのみではなかつた。天平七年、永年父の安麻呂の家に寄寓してゐた新羅の尼の理願が、遽に病んで死んだ。その時、母の石川命婦が、有馬の溫泉に療養に行つてゐたので、葬儀萬端一人で取り計つた後、長歌を作つてその死を悼み、併せてそれを母に通告した。

栲角の　新羅の國ゆ　他言を　よしと聞かして　問ひさくる　親族兄弟　無き國に　渡り來まして　大君の敷きます國に　內日さす　京繁盛に　里家は　多にあれども　いかさまに　思ひけめかも　連も

なき　佐保の山邊に　嘆く兒なす　慕ひ來まして　布細の　家をも作り　荒玉の　年の緒長く　住ひつゝいまししものを　生るれば　死ぬちふことに　免ろえぬ　ものにしあれば　憑めりし　人のことごと草枕　旅なる間に　佐保川を　朝川渡り　春日野を　背に見つゝ　足引の　山邊をさして　暗闇と　隱りましぬれ　言はむ術　せむ術知らに　俳徊り　たゞ獨して　白妙の　衣手干さず　嘆きつゝ　吾が泣く涙　有間山　雲居棚引き　雨に降りきや

反歌

留め得ぬ壽にしあれば敷妙の家ゆは出でて雲隱りにき（卷三）

この異鄕の人の死を悲しんだ言葉には、博く愛し、普くいつくしむ女性らしい純情がよく見えてゐる　そして終の數句には、才藻豐かな作者の技倆がよく發揮されてゐる。

かうした情の歌人としての外に、郎女は又自然鑑賞に優雅な態度を持つてゐた。

ぬば玉の夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しも（卷六）

霞や霧が天地を蔽うてゐる夜の光景を眺めてゐると、誰でも氣のはれない氣分に誘ひ込まれるものである。作者はさうした夜霧の中に、ぼんやりと照つてゐる月を仰ぎ見て、泣きたいやうな一種言ひ知れぬ哀愁を感じたのである。

山の端のささら愛壯子天の原門渡る光見らくしよしも　（卷六）

「山の端から出て來た可愛いゝお月樣が、廣い大空を渡つて行く光を眺めてゐるのは誠に快いものである。」といふので、前の歌が夜霧の中におぼつかなく照る月に對する感傷的な氣分を歌つてゐるのに對して、この作は晴れ渡つた大空を過ぎ行く澄みきつた月を眺め入つて、微笑ましい氣持で歌つたのである。その外、

隱口の泊瀨の山は色づきぬ時雨の雨はふりにけらしも　（卷八）

打ちあぐる佐保の川原の靑柳は今は春べとなりにけるかも

よ名張の猪養の山にふす鹿の妻よぶこゑを聞くがともしも

かうした歌などを見ると、黑人、赤人等の持つてゐるやうな自然を深く鑑賞する態度は見られないが、又捨て難い味を持つてゐる。

ともあれ、以上の諸歌によつても知られる如く、郎女はその歌のその內容の多種多樣なこと、長歌を多く作つたこと、歌數の多いことなどによつて、萬葉女流歌人中の頭梁たるに恥ぢないものである。

づぬけた豐かな歌才の持主とは認められないにしても、わが和歌史上の才媛の一人と言はなけ

ればならぬ。

大伴家持を廻る女性　名にし負ふ名門の出、しかも眉目美はしく、才藻豐かな大伴家持は、多くの女性に取り圍まれてゐたやうである。彼の從妹で、後に正妻となつた坂上大孃をはじめ、やんごとなきわたりの方らしい山口女王、紀女郎、それから平群女郎、中臣女郎と多勢あるが、その中で最も熱烈な情を披瀝してゐるのが、笠女郎である。

笠女郎　女郎の歌は集中二十九首殘されてゐるが、すべてが家持に贈る戀歌で、卷三、四、八に出てゐるところを見ると、家持がまだ地方長官となつて、都を離れない若年の頃の戀人であらう。しかし後には、家持と離別して、己の遠い故郷――故郷は古い土地の意で、奈良に對して、飛鳥、藤原の地方を指したものだらうか――に歸つたことは確である。その後の作品が見えない故、家持との關係は多分復することなく、その土地で世を絶つたのであらう。

彼女の歌は、全體として甚だ哀愁に充ち滿ちてゐる。その戀愛が圓滿にゆかなかつた爲か、本來の性格によるものか不明であるが、讀む者をして、綿々たる哀愁の中に引き込む性質の歌のみである。

天地の神しことはりなくばこそ吾が念ふ君に逢はず死にせめ　（卷四）

天地の神に感應がないなら、私はあきらめてあなたに逢はずに死にます、といふ意で、その裏には神に感應がある以上、あなたに逢はずに死ぬやうなことは、決してありませんといふのである。思ひ切つたいひ方である。調のさし迫つたところに、熱誠と眞情とが汲み得られて、誠にあはれ深い。

わが宿の夕かげ草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも　（卷四）

わが家の庭の、夕日のほのかな光を受けてゐる草の、葉末に宿つてゐる白露――その白露のやうに、私はわけもなく消え入つてしまひさうに思はれてなりません。といふので、女郎が家持を戀うて、庭前の夕闇の中に、草の葉末の白露を眺めながら詠んだものであらう。頼りなさ、心細さを訴へて纖細巧緻、前の歌と別人の如き感がある。

君に戀ひいたも術なみ奈良山の小松が下に立ち嘆きつゝ　（卷四）

奈良山には松が多かつたであらう。その小松の間に立つて、佐保の里あたりにゐた家持の家を見下して詠んだものらしく思はれる。胸奥から湧き出た哀愁の嘆聲が人に迫るやうである。と同時に、綠の丘の上に鮮かな紅の裳の裾を曳いて、うち沈んだ面持で、松によりかゝつて立つ、作者の優艷な姿が眼前に見えるやうである。

八百日行く濱の砂もわが戀にあにまさらじか沖つ島守　（卷四）

多くの日數をかけて行く程の、際限もなく遠く續いてゐる濱邊の眞砂の數も、恐らく自分の戀の繁さにはまさるまい。さうではないか、沖の島守よ、といふので、島守に呼びかけたやうになつてゐる。磯傳ひ行く旅の途上に、堪へ難い戀しさの心を思ひよそへて詠んだものであらう。

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへに額づくごとし　（卷四）

佛を拜んでこそ利益はあるが、よしなき餓鬼の後に禮拜したとて何の益もない。自分を思つてくれぬ人を戀ふのは、丁度餓鬼の後を額き拜むやうなもので、何の甲斐もない事だ、と片戀の苦しさを訴へた歌である。餓鬼の後は、勿論家持にあてつけたのであらうが、餓鬼などの語を用ひたところに、急迫した感情が強く現れてゐる。隨分思ひきつた歌ひ方である。

これらの歌を見ると、郎女は家持に對して、餘程の愛を注いでゐたやうである。しかしその戀は不幸にして、遂に成功しなかつたものと見える。

朝ごとに吾が見る屋戸のなでしこの花にも君はありこせぬかも　（卷八）

といふやうないぢらしい歌も殘してゐる。全く氣の毒な片思ひの人であつたやうに思はれる。

わが命の全けむ限り忘れめやいや日に異には思ひ益すとも　（卷四）

夕されば物思ひまさる見し人の言問ふ姿おもかげにして　（卷四）

以上數首の解說を試みたやうに、郎女の歌は、何れも切なる戀の苦しみを歌つたもので、切實可憐の情は、誠に同情に堪へないものがある。

殘されてゐる歌は、抒情歌ばかりであるが、歌人としての天分技倆に於ては、右の數首によつても知られる通り、女流歌人中屈指の人であるといへよう。

狹野茅上娘子　天平時代の女流歌人として、世に高く評價せられるものに狹野茅上娘子がある。その傳は全く明かでない。卷十五の後半には、この人と中臣朝臣宅守との間に贈答せられた一團の歌が集錄せられてゐるが、その內娘子の作は二十三首である。卷十五の目錄に、

中臣朝臣宅守娶藏部女嫂狹野茅上娘子勅斷流罪配越前國也。於是夫婦相嘆易別難會各陳慟情贈答歌六十三首

と記されてある。右の文中「嫂」の一字には、頗る問題があるのであつて、これを「娉」の誤とするか、「嬬」の誤とするかによつて、全文の解釋の上に大いに差異を生じて來るのである。今假に「娉」說によつて讀んでみると、「中臣朝臣宅守藏部女に娶ひて狹野茅上娘子を娉へる時云々」

となるのであつて、宅守は藏部女といふ妻があるのにも拘らず、更に茅上郎子と戀に陷つたため、重婚の罪に問はれたことになる。しかし今日の學者間では、「新考」を初め「燼」說による人が多い。それによれば、茅上娘子が藏部の女孺であつて、それに通じたがために、宅守が罪に問はれたことになる。藏部は齋寮十二司の一で、女孺はその下級女官、中臣氏は神事を掌つてゐたから、自然齋宮司にも出入し、この娘子と親しくなり、その戀愛が神事を冒瀆するといふ罪に問はれたものであらう。この二人が何時頃の人であつたか、勿論詳しくは分らないけれども、「續記」によると、聖武天皇の天平十二年の夏と、淳仁天皇の天平寶字七年の處とに、宅守に關する記事が見えて居り、殊に前者は、茅上郎子との戀愛事件のために、流罪になつて越前にゐた宅守が、その年の大赦にもれた旨を記してあるから、天平十二年を遡る幾何もない頃に、處罪せられたのであらう。

さて宅守はいよ〳〵配流と定つて、雪深い越前へ赴かねばならぬことになつた。奈良の都に住む者にとつては、越前は雪山萬里を隔てた遠い異國である。娘子は悲痛な心その儘を歌にして宅守に贈つた。

足引の山路起えむとする君を心に持ちて安けくもなし

君が行く道の長手を繰りたゝね燒き亡ぼさむ天の火もがも

郎子の心の叫びはかうであつた。あはれ天變地異あつて、越前の國も、そこへ行く萬里の道も滅び果てよと祈つたのである。熱烈火の如き作である。娘子は天に訴へ、地に叫んでも、わが思ふ男を都から離したくなかつたのである。

吾背子しけだし罷らば白妙の袖を振らさね見つゝしぬばむ

奈良の都を離れて行く時は、白い袖を振つて下さい。それを見ながら名殘を惜しまうといふのである。

この頃は戀ひつゝあらむ玉匣あけて後よりすべなかるべし

今はかうして戀ひながら過して居られるでせうが、明けて明日になつたら、私はどうするでせうか、と嘆いてゐる。

かうした悲しい別れの中に、宅守が旅立つてから幾日、近江の高島から娘子の許に贈られた歌は悲しかつた。

塵ひぢの數にもあらぬ吾ゆゑに思ひわぶらむ妹が悲しさ

靑によし奈良の大路は行きよけどこの山路は行きあしかりけり

うるはしと吾が思ふ妹を思ひつゝ行けばかもとな行きあしかるらむ

坦々たる都大路に比べて、旅の山路はどんなに嶮しかつたらう。しかも後に娘子を殘してあれば、一步一步に斷腸の思ひがしたであらう。

畏みと告らずありしをみ越路の峠に立ちて妹が名告りつ

勅斷流人の身故、愼んで妹戀しともいはでゐたが、越路の山上峠で、つい妹が名を呼んでしまつた。峠は視界の變る所、手向して別れる所だ。宅守もこゝで故鄕の空の見納めかと思ふ時、愼しみも、憚りも、遠慮も一切忘れて、妹が名を呼んでしまつたであらう。勅斷の畏さを思ひつゝも、宅守の心は尙妹を呼ぶ心に負けたのである。

配所である越前の味眞野に着いてからも、宅守の心はたゞ娘子の上にのみ飛んでゐた。

思ふゑに逢ふものならば暫しくも妹が目離れ吾れあらめやも

吾妹子が形見の衣なかりせば何物もてか命つがまし

わが愛人の形見の衣を、唯一つ命の糧として生きてゐるといふのだ。

遠くあれば一日一夜も思はずてあるらむものと思ほし召すな

天地の神なきものにあらばこそ吾が思ふ妹に逢はず死にせめ

逢はむ日をその日と知らず常闇に何れの日迄吾れ戀ひ居らむ

かうした烈々たる思慕の歌に答へる娘子の歌も、亦見る人の心をも燒きつくすほどの情炎に燃えてゐた。

わが宿の松の葉見つゝ吾れ待たむ早歸りませ戀ひ死なぬ内に

他國は住み惡しとぞいふ速やけく早歸りませ戀ひ死なぬ内に

天地のそこひのうらに吾が如く君に戀らむ人はさねあらじ

逢はむ日の形見にせよと手弱女の思ひ亂れて縫へる衣ぞ

それに答へる宅守の思慕の思ひも、亦情熱をつくしてゐる。

愛しと吾が思ふ妹は山川を中にへなりて安けくもなし

吾が身こそ關山越えて玆にあれど心は妹に依りにしものを

立ち返り哭けども吾れは効なみ思ひ侘ぶれて寢る夜しぞ多き

さ寢る夜は多くあれども物思はず安く寢る夜は實無きものを

山川を中にへなりて遠くとも心を近く思ほせ吾妹

これらの悲歌に對して、郎子も矢繼ぎ早やに次の歌を送つた。

魂は朝夕に鎭魂れど吾が胸いたし戀の繁きに

この頃は君を思ふとすべもなき戀のみしつゝ音のみしぞなく

ぬば玉の夜見し君をあくる朝逢はずまにして今ぞくやしき

味眞野に宿れる君が歸り來む時のむかへをいつとか待たむ

かうして、愛人同志は、都と越前とにあつて戀ひつゞけてゐた。かくて天平十二年六月の事である。國運長久を祈られる帝の思召によつて大赦が行はれ、近く諸國の流人達が、赦されて歸るといふ噂が都の町々に傳つた。娘子はそれを聞いて、夢かとばかり狂喜した。待ちに待つたその日が來た。しかし赦されて都に歸つた人達は、下總の國に流されてゐた人が二人と、但馬の國から歸つた男が一人とであつた。娘子は悲しさの餘り、殆んど死なんとした。

歸りける人來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて

が、しかし娘子はその悲しみの底から起き上つた。元來が激しい氣性を持つ彼女である。自らは慘めにうちひしがれて、細々と生きる身でありながらも、やはり自分以上に絶望的な暗い思ひに陷つてゐるであらうところの、愛する人への心づかひをするだけの、毅さと餘裕とがまだ殘つてゐたのである。そこで彼女は、相手の氣持を引き立てると同時に、自らの悲壯な決心を次の

歌に表してゐる。

わが背子が歸り來まさむ時のため命殘さむ忘れ給ふな

いかにもして命永らへ、今生に於てたゞ一眼なりとも相見むといふ悲壯な決心である。しかし二人はその後會ふことが出來たであらうか。文獻に徴すべき何物もない。唯中臣朝臣宅守は、淳仁天皇の天平寶字七年、再び朝廷に仕へて、從五位下を賜つてゐる。それ故、赦されて奈良の都へ歸つて來たことは確である。しかし天平寶字七年といへば、娘子が流人歸るの噂に狂喜した天平十二年から二十三年の後である。それまで娘子は健在であり得たであらうか――。

「萬葉集」中悲歌多しといへども、凡そこの贈答の歌ほど悲しきはない。これらの歌を通して考へられる娘子は、決して品格の高い淑女でもなく、學問修養をつんだ才媛でもなかつたやうである。唯火の如き情熱の持主であつた。從つてその歌風は、悠揚迫らない調べの中に、一種の風格と情味とを兼ね備へてゐた額田王の歌風、或は、才氣縱橫その技巧手腕に於て、題材の廣範な點に於て、女流歌人中斷然ぬきんでゝゐる大伴坂上郎女ぃ歌とも趣を異にするものである。大體、內容形式共に、前二者の作品に比して、廣さと豐かさの點に於て見劣りがするやうであるけれども、彼女はそれに代るに類稀な情熱と純眞さとを持つてゐた。

そこに彼女の歌が、千古に輝く力を持つてゐる所以があるのである。

安部女郎

女郎の傳は明かでないが、僅に殘された數首の作によつて見ても、萬葉女歌人中の白眉とすべきものである。

わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれなけなくに（卷四）

萬葉時代に於ける、女性の一氣な純情を直接に表現した代表的な歌である。愛し敬ふ夫のためには、火にも水にも身を以て殉ずる心は、やがて日本女性の自らなる眞實心であらう。恰も武人の君命に對する覺悟のやうな力强さがある。女性の表現とも思へぬ程の思ひ切つた叫びである。

今さらに何か思はむうち靡き心は君によりにしものを（卷四）

平明な、而も力のこもつた眞情の歌である。女性の貴い純一性が直線的にあらはされてゐる。

吾が背子が著せる衣の針目おちず入りにけらしな吾が心さへ（卷四）

あなたの着ていらつしやる着物の一針目毎に、私の熱い情がは入つて居ります。といふので、女郎が自ら仕立てた着物を、男に贈る時の歌であらう。「針目おちず」は女性でなければ詠み得ない境地である。一針毎に自分の魂を縫ひこんだ、全身的な熱烈な戀が痛ましい。

讀人知らずの歌

敷島の日本(やまと)の國に人二人ありとし念はゞ何か嘆かむ　（卷十三）

天にも地にも、唯一人あるのみといふ女性の嘆きであらう。太々しい歌柄の中に、古人の熱情が感得される。

劍太刀もろ刄の利(と)きに足踏みて死にも死になむ君によりてば　（卷十一）

何といふ强烈な表現であらう。一句として緊張してゐない所はない。平安朝の歌には到底見られない風格を備へてゐる。

事しあらば小泊瀨山の石城(いはき)にもこもらば共にな思ひ吾背　（卷十六）

密かに逢つてゐた男が、親の怒にふれて躊躇する心があつた時、女の詠んだものである。思ひつめた男のため、戀のために殉じた女の心懷である。

吾命は惜しくあらずさにづらふ君によりてぞ長くほりせし　（卷十六）

年永く己を棄てた男に、今はの際の息の下に詠みかけて、絕命したと傳へられる車持氏の女の歌である。戀に女の强くなるは、萬葉の世も、淸姬の時代も變りないものである。

馬の音のとゞともすれば松かげに出でゝぞ見つるけだし君かと　（卷十一）

戀人を待ちかねての女性の作であるが、躍る胸のときめきさへ聞えるやうな歌である。敦厚純眞

さわやかな歌調である。

馬柵越しに麥はむ駒の罵らゆれど猶し戀しく忍び難なく　（卷十二）

男に叱られる己が身を馬にたとへて、それでも猶且戀しさが已まぬと絕叫する村乙女の聲である。

東歌の女性

東歌は「萬葉集」卷十四に集められてあるが、歌數は全部で二百三十餘首である。東國人の素朴な心情を歌つた民衆の歌で、作者は全然未詳であり、民謠的香氣の頗る高いものである。

一口に東歌と稱へてゐるが、仔細に見ると、純粹に東國人の口から出たものと、それが幾分京の人の口ぶりに化せられて傳はつたものと、更に又京から赴任した官人などが、東國人の口ぶりに眞似、或は單に東國の地名風物を採り入れて詠んだものとがある。しかし全體を通じて一種の野趣が橫溢し、殊に單純素朴、粗野强直な東國人の氣分感情の窺はれるところに、言ひ知れない面白味がある。

東歌二百三十餘首中、女性の作と思はれるものは約七十六首である。勿論これは歌の內容から推定して數へ擧げた結果であるが、見方によつては、そこに多少の異動を免れないであらう。そしてこれらの歌は、民謠に特有な愛を中心としたもので、單純な野人達の僞りなき眞情の高らか

な叫びを聞くことが出來る。その中にあつても、無名の田舍女が、純粹な感情を以てひたむきに詠み出してゐる歌には、特に深い味ひを見出すことが出來るのである。

稻舂けば皸る我が手を今宵もか殿の稚子がとりて嘆かむ

終日稻舂き暮して、そのために皸だらけになつた我が手を眺めて、餘りの見苦しさに驚き且恥らひつゝも、宵の逢瀨を面影にしての少女の詠歎であらう。つゝましやかな可憐な乙女の感情が生々と流動し、乙女の脈搏吐息をさながらに聞きとり得られるやうな心地がする。しかもその牧歌的生活の片影までがまざまざと看取し得られる處に、いひしれぬ面白味がある。

靑楊のはらろ川門に汝を待つと淸水は汲まず立所平すも

靑楊の芽ぐんだ川邊に來て、貴方を待つてゐて、淸水も汲まず、待ちくたびれて、足で踏んでゐる地面の土を搔きならしました。といふので、作者は勿論可憐純情の乙女で、水汲にかこつけて河邊に出かけて、男の來るのを待ちくたびれての歌であらう。來べき人は待てども來ない。いらいらするやうな退屈なやうな所在なさだ。そこの柳に背をもたせてゐると、いつしか足はそこの地面の土を搔きならし搔きならししてゐる。「立ち所平らすも」の結句、實によく作者の待ちあぐんでゐる心と光景とを現してゐる。

信濃路は今の墾道刈株に足ふましむな履著け我が夫

信濃の道はまだ新開道故、木の根が出てゐる。それで踏貫なさいますなよ、履をはいていらつしやい、我が夫よ、といふのである。朴訥粗野なリズムではあるが、そこに眞情が流露してゐる。濃やかな愛情に根ざした深い思ひやりの心が、色濃く現されてゐる。恰もその夫に物言ふ妻の言葉を聞き、姿を見るやうな氣がする。

都武賀野に鈴が音きこゆ上志太の殿の仲子し鳥狩すらしも

都武賀野から鷹の尾鈴の音を聞えて來る。あれは上志太の御屋敷の若さんが、鷹狩をやつていらつしやるのであらう、といふのであつて、作者は恐らくうら若い志太の少女であらう。年齢もまだ若く、初心なやさしい乙女ではなからうか。さりげなく歌つてあるけれども、一讀して鈴の音に聞耳を立てゝゐる少女の姿が眼にちらついて來てなつかしい作だ。

筑波嶺の新桑蠶の絹はあれど君がみ衣しあやに著欲しも

筑波山でとれる新しい山繭の絲で織つた着物は持つてゐるけれど、いとしいあの方の着ていらつしやる着物をほんとに着てみたうございます、といふので、恐らく東乙女の詠であらう。醇朴な氣持で、對者にひたすら思慕の情を寄せてゐる可憐な歌である。

鴉といふ大をそ鳥の眞實にも來まさぬ君を子ろ來とぞ鳴く

鴉といふ大うそつき鳥が、本當に來もせぬ君のことを、如何にも本當に來るらしく、「子ろく／＼」と鳴く、憎らしい鳥だといつて、鴉に事よせて「來さうなものだ」といふ催促を男に訴へて言つてゐるのである。一面から見れば戯れに似て、その戯れの中に親しみと眞實とがある。待ちきれないで男に送つた歌であらう。

　鳰鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも

今日は葛飾で採れた早稲を神樣に供へる大切な日で、忌み愼しんで居るべきだが、あのいとしい人が訪ねて來たのに、どうして外に立たして置けようといふので、まことに東歌らしい民謠風な感じのする作である。熱情は作者を驅つて、神事の日をも顧みる餘裕なからしめたのである。

防人の妻の歌

防人は、天智天皇の頃から始り、筑紫、壹岐、對馬等に置かれた邊土防衛の兵士である。大寶年間に至つて、諸國の兵士を分遣交番せられたが、奈良朝時代に至つては、專ら東國の兵士を遣されてゐた。卽ち遠江以東、常陸以西の國々から徴發せられた兵士達は、難波から乘船して九州へ送られたのである。

　八十國は難波につどひ船かざり吾がせむ日ろを見も人もがも

交通の不便な昔のことゝて、宿舍の設備もなく、草を枕とし、野に臥し山に臥すことも多かつた一行の途中の辛苦は、今日の人の想像も及ばぬものがあつたであらう。上野の防人の一人は、

我が家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げやらまくも　（卷二十）

と旅の苦しさを訴へてゐる。

集中の歌は、出發前の作と、旅行中の作と、筑紫での作とに大別することが出來るが、いづれも素朴な若い男子や、その妻の心持が、ありのまゝに歌はれてゐる。

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は

一身を犧牲にして、大君の御爲に微々たるながらも御楯とならうといふ忠勇の情は、防人の總てが持つてゐた僞らざる心情であつたであらう。しかし乍ら、住みなれた家鄕を出て、最愛の妻子を殘し、懷しき父母に別れて、雲烟萬里異鄕の地にはる〴〵旅立たうとするに際しては、丈夫といへ、別離の情の誠に堪へ難いものがあつたであらう。

大君のみことかしこみ磯に觸り海原わたる父母をおき

畏きや命被り明日ゆりや草か共寢む妹なしにして

今日迄は、父母妻子と共に樂しく日を送つて來たが、いよ〳〵明日からは家を離れ、草を枕とし

て寢ることである。さればこそ、

　わが妻も繪に書きとらむ暇もが旅行く吾は見つゝしぬばむ

吾が身と共に妻の繪姿を持つて行つて、常に見るよしもがなと願ふに至るのである。殘された妻は妻として、

　おくれゐて戀ひば苦しも朝狩の君が弓にもならましものを

出來ることなら御弓となつて、明暮にお傍を離れたくないと願つてゐる。又、

　草枕旅行く夫が丸寢せば家なる我は紐解かず寢む

と、純情を傾けてゐる。更に又、

　草枕旅の丸寢の紐絶えば吾が手と附けろこれの針持し

と、素朴ないひざまの中にも、やさしい女心の細さを現してゐるものもある。

　今年行く新防人の麻ごろも肩の紕は誰かとりみむ　（卷七）

これは又新防人の妻の心づかひである。着物の肩のよれ〳〵になつた時は誰がこれを繕うてやることであらう、とその身のまはりを心細く世話してやる妻の心の微に入つた表現で、眞情の一徹萬世の後迄も人の心を動かすものがある。

赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山歩ゆか遣らむ　（巻二十）

出立の際、せめて馬でと願つたものゝ、山野に放し飼ひにしてあるので、捕へかねて、多摩の横山を徒歩で越えさせたことの口惜しさよ、といふので、馬が旅行の唯一の便宜であつた時代に、これを利用することも出來ず、せめてもの別の心を滿足させ得なかつた妻の物足らなさである。徒歩であの山道を歩かせることか、何と情なく申譯ないことかと、詠歎はやがて涙となつて行く。

防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しさ物思ひもせず

自分の夫が防人となつて出て行くのを見て、路行く人が何のかゝはりない人事とて、あれは何處の誰の夫でせうなどと、思ひなげに問ふのを見聞きした時の、羨しくも悲しい妻の心持を歌つたものである。防人に召されて行く人を見送るとて、人々がうち群れて行く街路に、その中に交る可憐な妻の姿が髣髴として眼前に浮ぶやうな氣がする。

中には夫の袖に取り縋つて、別れを惜んだものもあつたであらう。防人の一人はかう歌つてゐる。

道の邊の荊の末にはほ豆のからまる君を離れか行かむ

如何に別れを惜しんだとて、遂には別れねばならぬ身である。せめて姿の見えなくなるまで見送

りたい。かうした心持は次の歌となつて現れてゐる。

色ふかく夫が衣は染めましを御坂廻らばま清かに見む

足柄のみ坂のあの曲角の處へ行つて、袖を振つて下さる時はつきり見えるやうに、夫の着る着物は色濃く染めて置かうといふのである。夫は夫として、

蘆垣の隈所に立ちて吾妹子が袖もしほゝに泣きし思ほゆ

と歌つてゐる。去り行く夫には、袖振る妻の可憐な姿が、眼底に強く燒きつけられて、忘れる事が出來なかつたであらう。

かうした親しい人々との惜別の涙をはらつて、防人の一行は、大君の命かしこみ、邊要の守にと出帆するのである。

行こ先に波な音搖らひ後方には子をら妻をら置きてらも來ぬ

行手には波の音荒き海が待つてゐた。後には引き留める妻子の面影がちらちらく。眼交にもとなかゝりて忘れ得られぬは、父母のこと、妻子の上であつた。

防人には子供のあつた者もある。

吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦す我が妻かなしも

母なき子を殘して來た者もある。

　　唐衣裾にとりつき泣く子らを置きてぞ來ぬや母(おも)なしにして

男手で育てた子の、衣の裾に取りついて泣くのをふり切つて出て來たのである。

　防人の任期は三年であつたが、彼等は任地にあつて、繁劇な軍務に心を碎きながらも、絶えず故郷のことを思ひ出してゐる。

　　わが妻はいたく戀ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘られず

　　常陸さし行かむ雁もが我が戀を記して附けて妹に知らせむ

　　父母が頭かき撫で幸くあれといひし言葉ぞ忘れかねつる

　　時々の花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出來ずけむ

　以上で防人の作を終へる。こゝに紹介したのは、全體の十分の一にも足らぬ數ではあるが、防人の作が一團をなして、如何に集中の一異彩をなしてゐるかは、これだけでも窺ひ知ることが出來るであらう。上代の我等祖先が、これらの歌に現れてゐるやうな、濃やかな情性と、忠勇な信念とを持つてゐたことを、心から喜ばずにはゐられない。

遣新羅使に關する女性の歌

「萬葉集」卷十五には、新羅への使節が時につけ、所に從つて歌つた歌百四十五首が殘されてゐる。新羅への使節は、天平八年四月任命があつたので、大使には阿倍朝臣繼麻呂、副使には大伴宿禰三中等が任命されて、同年の六月、一行は名譽の選任を光榮と感激しつゝ、一葉の片舟に乘つて、波濤萬里の旅に赴いたのである。出帆は難波の御津からであつた。

大伴の御津に船乘りこぎでてはいづれの島にいほりせむ吾

その船出の時、親子夫婦の別れの苦しさ悲しさは、それこそ聲をあげて泣く響、胸をおさへて慰め合ふ息づかひさへ聞えるやうに思はれる。

君がゆく海邊の宿に霧立たばあが立ち嘆く息と知りませ

わが夫の君よ、君が行き給ふ海邊の宿に霧が立ちこめたなら、それは殘された私が、あなたを思うて嘆く溜息であるとお考へ下さいまし、といふのであつて、純眞玉の如くあはれ深い一首である。か弱い女の胸から吐き出す熱い吐息を、朝の湊に漂ふ霧になぞらへたのも、さすがに上代人らしい素朴でしかも雄大な着想である。

武庫の浦の入江の洲鳥羽ぐくもる君を離れて戀に死ぬべし

武庫の浦の入江の洲にゐる鳥が、親鳥の羽につゝまれて大事にされてゐるやうに、慈まれてゐたわが夫の君に別れて、これから私は夫戀しさの爲に死にさうに思はれます、といふのであつて、夫が武庫の浦を船出する際に、妻が夫の胸にとりすがつて、名殘を惜しんだ歌であらう。眼前に睦じく遊んである洲の鳥を見るにつけても、あの親鳥のやうに自分を愛護してくれた夫が、旅立つた後の佗びしさを想像すると、立つても居てもゐられない氣持がしたのである。殊に今度の夫の旅は、蒼海萬里の波濤を凌いで異國に渡るのであるから、生別やがて死別とならぬとも限らない。さうした場合の妻の心情が切實に歌はれてゐて哀れである。

妻はかういつて夫の手を執つた。夫は强ひてさりげない顏をしながら、

秋さらば逢ひみむものを何しかも霧に立つべく歎きしまさむ

わが故に思ひな瘦せそ秋風の吹かむその日あはむものゆゑ

かう慰めて、なほ胸の底に流れる涙をとめかねたことであらう。

別れなばうら悲しけむあが衣下にを着ませたゞに逢ふまで

妻はかうしてその肌の移り香に夫を包んで、離れ難い心をこめたのである。

吾妹子が下にも着よと贈りたる衣の紐をあはれ解かめやも

おまへ一人を心に守つて行く――この誓言を頼みに、妻は獨り淋しい留守居についたのである。かうした悲しい別れをして、一行は旅立つたのであるが、この船旅は「秋さらば」再び都へ歸つて來る筈のところ、途中意外な疫病が乗組の人々を襲つたり、海上で烈しい暴風に逢つたりしたため、辛くも使命を果して都に歸つたのは翌年正月で、しかも大使の繼麻呂は途中で死に、副使の三中も病氣で都に入れず、散々なことであつた。

なほ以上の外に、天平五年癸酉、遣唐使の船が難波を出帆せんとする時、その一行に加つた或る少年の母が、その子に贈つた長歌がある。

秋萩を　妻どふ鹿こそ　一子を　持たりといへ　鹿兒じもの　吾が一人子の　草枕　旅にし行けば　竹珠を　密に貫き垂れ　齋瓮に　木綿取りしでて　齋ひつゝ吾が思ふ吾子　眞幸くありこそ

反　歌

旅人の宿りせむ野に霜ふらば吾が子はぐくめ天の鶴群

當時幼稚な航海の時代に於て、遣唐使に行く別れといへば、殆んど生別即ち死別である。この危險な旅に一人子をやる母の心中は如何であつたらう。この歌は、旅行く愛子の身の上を案じ煩ふ女親の切なる愛が、その美しい表現と相俟つて、波むに盡きせぬ味ひを見せてゐる。眞情切々子

を思ふ親心の、そゞろに讀者の心に迫つて來るのを覺える。

遊女の歌

「萬葉集」には遊女の歌がかなり多い。遊女は即ち遊行女婦で、初は國々に多かつたが、次第に京に上つて來たものゝ如くである。國々にあるものは、國司、郡司等の交替、又は往來の時、宴席に侍つて興を添へたものである。

庭に立ち麻を刈り干ししき慕ぶ東女を忘れ給ふな　（卷四）

藤原宇合が、任地常陸より遷任されて上京する時、相親んでゐた常陸娘子が、別れを惜んで詠んだ歌である。「庭に立ち麻を刈り干し」はその少女の日常の生活である。その生活を序として、「しき慕ぶ」と續けたのであつて、それ程にして頻りに慕ふ東乙女を忘れ給ふな、といふいひ方が甚だ率直であつて、東人の可憐を思はしめるに足る。一首の音調がつゝましい甘さがあつて、心をひかれるものがある。

君なくばなぞ身よそはむくしげなる黄楊の小櫛も取らむと思はず　（卷九）

石河大夫が、任を遷されて京に上る時、播磨娘子が詠んだ歌である。播磨娘子はよく分らないが、やはり遊行女婦であつたと思はれる。一首よく婦人の眞情を歌つて、千古の後迄も人の胸を打つものがある。

大宰帥大伴旅人は、天平二年十二月大納言に任ぜられて、筑紫から奈良へ歸ることになつた。旅人は馬を水城驛に駐めて、人々に別れを惜しんだ。見送りに集つた府吏の中に、遊行女婦兒島も交つてゐた。兒島は群集の中から、

凡ならばかもかもせむを畏みと振りたき袖をしぬびたるかも（卷六）

大和路は雲隱りたり然れどもわが振る袖を無禮と思ふな

といふ二首の歌を贈つて、つゝましい哀惜思慕の情を示した。別れ行く人の地位、身分、場合を思つた、いぢらしくも可憐な歌だ。旅人はこれに答へて、

ますらをと思へる我や水莖の水城の上に涙拭はむ（卷六）

と歌つてゐる。

天平八年夏、新羅に使する人々が、肥前國狛島に船泊した夜、旅情を歌つた歌の中に、その地の娘子であらう、一首萬綠叢中の紅一點をなしてゐる。

天地の神をこひつゝ吾待たむはや來ませ君待たばくるしも（卷十五）

同じ時、船が竹敷の浦に泊つて、人々が心を述べた十八首の中に、娘子玉槻の歌が二首ある。

黄葉の散らふ山邊ゆこぐ船のにほひにめでゝ出でゝ來にけり（卷十五）

竹敷の玉藻なびかし漕ぎ出なむ君が御船を何時とか待たむ

又左大臣橘家の使者田邊福麻呂が、都から來たのを、越中守大伴家持が布勢水海に案内し、舟遊をした時、遊行女婦土師が一首を詠んで興を添へた。

垂姫の浦を漕ぎつゝ今日の日は樂しく遊べ言ひ繼ぎにせむ（卷十八）

又、葛城王が陸奥に遣はされた時に、國司の饗應の手順が遲れたので、王は非常に不興で、杯を上げようともされなかつた。その時、前の采女が杯を捧げつゝ、

あさか山かげさへ見ゆる山の井の淺き心を吾が思はなくに（卷十六）

と歌つたので、王の御心もうち解けて、宴飮に興ぜられたといふのである。

以上はいづれも名もなき遊行女婦の歌であるが、これらを通して見るに、當時の遊女は、もとより卑しいものであつたに違ひないが、その中には、才藻あり、品位あつて、士人の間に伍して恥しくない教養を持つたものが少くなかつたやうである。

物語歌に現れた女性　「萬葉集」に詠まれた女性に、愛情の奇しき運命に逢着して、うら若い身を、自ら殺した一群の處女がある。

葛飾の眞間の娘子、葦屋の菟原處女、耳梨の鬘兒、大和の櫻兒等がそれである。これらはいづ

れも、二人又は二人以上の男に思はれた處女が、いづれにも貞操をとげることが出來ないのを悲しんで、純な處女心から終に身を投げるといふ、傷ましい戀の悲劇を取扱つたものである。

眞間の手兒奈は可憐な美少女であつた。その望月のごとみち足りた天成の美しさと優しさとは、火に入る夏の虫のごと多くの人の慕ふ所となつたが、心弱い彼女は、人々の好意に報いることの出來ないのを悲しんで、眞間の入江に身を投じて、美しい花の姿を浪にまかせ、短い生涯を我と自ら斷つてしまつたのである。

葦屋の菟原處女は、智奴壯士と宇奈比壯士との二人に戀ひ慕はれたが、二人に操を立てることの出來ないのを悲しんで、葦屋の浦に寄せる波に身を投げた。その死を夢に見て、智奴壯士もその後を追つたので、宇奈比壯士も天を仰いで共に死んだ。親戚の者はそのあはれさを悼んで、處女塚を中に作り、男塚を兩側に作つて、亡き三人の後を弔つたといふのである。

櫻兒は二人の男に戀慕されて、いづれの男にもより難きを悲しんで死んだので、二人の男は悲しんで一首づゝの歌を詠んだ。

鬘兒は三人の男に戀慕されたが、同じく悲しんで死んで了つたので、三人の男はそれ〴〵に追悼の歌を詠んだといふのである。

これらの處女の惱んだ惱みは、「萬葉集」以前にはまだ現れてゐないのである。愛情が本能的肉體的であることから、精神的情緒的であることへの展開と見るべきである。これが一歩進展すると、平安時代の少女の有つたやうな、情趣的な愛情が現れるのである。そしてそれが縺れた場合の清算には、「かしらおろし」といふことが行はれて、自殺といふやうな殺伐なことが見えなくなる。いづれも純情の行動であるが、萬葉時代は、殺伐で、然し眞摯で、可憐で、而も強さがあり、只管に洗煉された弱さを感ぜしめるものと比べて、著しい相違が認められる。

第四章　萬葉女性の一生

以上、上は天皇皇后より、下は農婦遊行女婦の歌に至る迄、萬葉女流作家の代表的な作品について、評釋を試みたのであるが、今これら作家の作品を通して、萬葉時代の女性の辿つた「女の一生」について考へて見よう。

いづれの時代に於ても、女性の辿る道は、處女、妻、母の三階段であるが、萬葉女性も亦、戀愛生活に始まつて、結婚によつて妻としての生活となり、更に母としての生活に至る過程は、都

會に於ける貴族の女性も、田舍の耕人の女も同じことであつた。

萬葉女歌人の歌の大部分は、相聞戀情の歌であることは前に述べた。而して、男性の歌に比して女歌人の歌は、純粹なる感情の直接的な表現に於て、優れた特色を持つてゐることも、前に述べた。尤も一概に戀愛の歌といつても、歌人のそれ〴〵に應じて、内容の異つてゐることはいふ迄もない。卽ち處女である場合には、主としてその愛人に逢はんとする憧憬の歌が多く、妻である場合には、寧ろ逢つた後の別れの歌や、夫に對する別離の情を歌つたものが多いのである。

先づ萬葉女性の處女としての戀愛生活を見るに、そこには戀人を待つ張り切つた心持、或は戀人と逢つた瞬間の喜び、或は裏切られた悲痛、片思ひの切なさ、又は別離の情等、直接胸から胸に感じられる歌が眞珠の如く輝いてゐる。

君に戀ひいたもすべなみ楢山の小松が下に立ち嘆きつゝ　（卷四）　笠女郎

馬の音のとゞともすれば松かげに出でゝぞ見つるけだし君かと　（卷十一）　讀人知らず

靑揚のはらろ川門に汝を待つと淸水は汲まず立所平すも　（卷十四）　東歌

これらはいづれも、純な乙女心の、逢瀨を待つ焦慮の心である。しかしかうして戀ひ戀うて逢うたところで、初心な乙女心は胸内のすべてを語りつくせるものでない。

あひ見れば面隱さるゝものからにつぎて見まくのほしき君かも（卷十一）

可憐な姿が目に見えるやうである。

思ふ人こむと知りせば八重むぐらおほへる庭に玉敷かましを（卷十一）

これには突然訪ねられた喜びが言外にあふれてゐる。しかし待てど暮らせど、待つ人の姿を見せないこともある。

來むといふも來ぬ時あるを來じといふを來むとは待たじ來じといふものを（卷四）坂上郎女

は、來ない男への恨み言である。

しかし逢へば又すぐ別れねばならぬ。人目を避けての逢瀨は短い。さればこそ、

戀ひ戀ひて逢へる時だに愛しき言つくしてよ長くと思はゞ（卷四）坂上郎女

のやうな可憐な歌ともなる。

かくして戀情の高潮の赴くや、身も命も捨てゝ顧みざる熱烈至純な叫となつて行く。

直に逢ひて見てばのみこそたまきはる命に向ふ吾が戀止まめ（卷四）中臣女郎

劍太刀もろ刃の鋭きに足ふみて死にも死になむ君によりてば（卷十一）

かにかくに物は念はず飛驒人の打つ墨繩のたゞ一道に（卷十一）

敷島の大和の國に人ふたりありとし思はゞ何か歎かむ（卷十三）

なかなかに死なば安けむ君が目を見ず久ならば術なかるべし（卷十七）　平群女郎

しかし、又、

この世には人言繁み來む世にもあはむ吾背子今ならずとも（卷四）　高田女王

人言を繁みこちたみあはざりき心あるごとな思ひ吾が背（卷四）　高田女王

と、「垣穗なす人言」を憚る心境にまで達してゐるものもある。尤もそれも、

我が背子しとげむといはゞ人言は繁くありともいでゝあはましを（卷四）　高田女王

と、相手の純情のためには、人目の關を破つても悔いない情熱の所持者である。

なほこゝに注目すべきは、少女の戀愛に對する母親の位置である。萬葉時代は現代と異り、父母別居の時代である。父が母の許へ通つたのである。かやうに父が母の許へ通つて行くやうな習俗の時代には、子供の教養に最も關係の深いのは母である。母の眼のみが彼等の全行動を監視し、時には安全な防波堤の役目もすれば、時にはうるさくつきまとふ妨害者の役割をも演ずるのである。母の慈愛のもとに靜かに生活した「うなゐはなり」のあどけなき頃を過ぎて、戀に目覺めて來るやうになると、母の目を忍んで異性の愛に向つて行く。

たらちねの母にしらえずわが持たる心はよしゑ君がまにまに　（卷十三）

「母に知らせない心を、あなたに一切お任せします。」と、母よりも異性に心ひかれて行く。そしてある場合には、男の心を頼んで母に背くことさへあつた。

　駿河の海おしべに生ふる濱つゞらいましを頼み母にたがひぬ　（卷十四）

駿河の海の磯邊の濱葛のやうに、何時迄も絶えないといふあなたの言葉を信じて、母に背いてしまつたといふのである。

　戀し合はゞ相寢むものを小山田の鹿猪田禁る如母し守らすも　（卷十二）

　筑波嶺の彼面此面に守部する母し守れど魂ぞ逢ひける　（卷十四）

の二首は、共に母が女を守つてゐることを示してゐる。しかし、

　足引の山澤ゑぐを摘み行かむ日にだにも逢はむ母は責むとも　（卷十四）

と、たとへ母に責められようとも逢はうといふ、切迫した感情をぶちまけてゐるものもある。又、

　玉垂の小簾の隙に入り通ひ來ぬ垂乳根の母が問はさば風と申さむ　（卷十一）

と、母に僞つてまで逢はうとするものもある。

　たらちねの母に障らばいたづらにいましもわれも事成るべしや　（卷十一）

たらちねの母に申さば君も吾も逢ふとはなしに年ぞ經ぬべき（卷十一）

これらは、母に知られたなら、二人の逢瀨は斷たれるであらうと、二人の戀愛遂行にあたつて母が如何に邪魔物であるかを、逆にいつたのである。

誰ぞこの吾が屋戶に來喚ぶたらちねの母に嘖ばえ物思ふ吾を（卷十一）

母に叱責されてゐる折も折、當の男が訪ねて來て、自分を呼んでゐるのを咎めた歌であるが、

汝が母に嘖られ吾は行く靑雲の出で來吾妹子相見て行かむ（卷十四）

は、いよ／＼母に咎められ、逢ふ瀨を斷たれた時の男の歌で、前の歌の「逢ふとはなしに年ぞへぬべき」といふ女の心配が事實となつてあらはれたのである。

かやうに「萬葉集」の中には、若い女が戀愛について、その母親を憚り怖れた歌がなか／＼多いのであるが、しかし若い女性にとつて、母親はかゝるこわいものだけだつたわけでなく、後世の樣に、賴るべく親しむべきものであつたことは、

たらちねの母が手離れかくばかり術なきことは未だせなくに

と、戀の破綻に直面して、方法に迷ふや、その慈母の手の溫さを思ひ起して、懷しんだことなどで知られる。

次に妻としての生活の上に現れる、夫への愛の感情を見るに、その感情の表出に於て、戀愛感情と餘り相違ないのを感じる。これは一面に於て、結婚した後も同棲しないで、夫が妻の許へ通つて行くといふやうな場合が、多かつた爲であらう。

わが背子はいづく行くらむおきつ藻の名張の山を今日か越ゆらむ　（卷一）　當麻麿妻

わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれなけなくに　（卷四）　安部女郎

な思ひそと人はいふとも逢はむ時何時と知りてかわが戀ひざらむ　人麿妻

あひだなく戀ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にも見ゆる　（卷四）　佐伯東人妻

吾背子が歸り來まさむ時のため命のこさむ忘れ給ふな　（卷十五）　茅上郎子

これらには、いづれも夫を思ふ眞情が現れてゐて、一種の嚴肅な生活をさへ形成してゐるのである。

なほ夫婦の愛情の濃かに現れたものに次の歌がある。

つぎねふ　山城路を　人夫の　馬より行くに　おの夫の　徒歩より行けば　見るごとに　音のみし泣かゆ、そこ思ふに　心しいたし　たらちねの　母が形見と　わが持たる　まそ鏡に　あきつ領布　負ひ並めもちて　馬買へわが夫

わびしい田舍家の門を、貧しい旅商人は今旅立たうとしてゐる。送り出したのはうら若い妻で、その手には古い鏡と、蜻蛉羽(あきつば)のやうな薄い領布(ひれ)とを捧げて、夫に渡さうとしてゐる。夫は妻の心は嬉しいと思ひながらも、

馬買へば妹徒歩(かち)ならむよしゑやし石はふむとも我(あ)は二人行かむ（卷十三）

と詠んで「それには及ばぬ、よしや石は踏んでも二人で踏まう」と答へてゐる。後代の山内一豐の妻が、鏡匣から黄金を取出して、夫の爲に馬を買はうといつた話と好一對なうるはしい物語である。妻の眞心、夫のやさしい心、相並べて共に、我國上代の民の淳朴な情をしのぶことが出來る。

かうした妻としての生活から母となる時、女性の愛情は子への愛となつて現れるのであるが、母としての生活の見られる歌は、餘り多くない。中でも坂上郎女の歌には、前述の如く母性愛の強く現れたものが多い。故鄕なる娘の大孃に贈つた長歌、都より越中へと贈つた長歌等には、しみじみとした親心が感じられるのである。更に又遣唐使の母の詠んだ、

旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子はぐくめ天の鶴群(たづむら)

には、子を思ふ母の情がいかにも強く現れてゐて、その至純熱烈な母性愛の前には、額きたいや

うに思ふ。

以上概觀したやうに、娘、妻、母の生活を通じて常に見られるものは、愛人、夫、子に對する愛の感情である。卽ち娘としては愛人に、妻としては夫に、母としては子に捧げられた愛の感情である。而して、多少の例外を除いて、その愛情は常に至純であり、可憐であり、而も美しい。この點よりして「萬葉集」に見えた奈良時代の女性は、愛情を以て全生命とし、專らこれがために生きてゐたかの觀がある。隨つて、その愛情はどこまでも眞摯であり、純潔であつて、全人格的になされたのである。所謂「まこと」の心を以てなされた。この「まこと」の心こそ、萬葉女流歌人の感情生活の核心をなすものであつて、そこに我が上下三千載を通じて、まことに得難い尊い心境が見られるのである。

第三篇　平安朝文學を通して見たる女性

第一章　平安時代の概觀

桓武天皇が平安京に都を奠め給うたのは、延暦十三年、紀元一四五四年である。それより源頼朝が鎌倉に幕府を開いた建久元年、紀元一八五〇年迄、約四百年を平安時代といふ。是は政治上の區劃であるが、又文學史に於てもかやうな一時期を劃し、且かやうな名稱を用ひる事が一般に認められてゐる。

人類に限らずあらゆる生物の生活は、之を繞る環境によつて支配される。總ての思想、總ての藝術は、その生活と離れて存在しない。故に平安朝の文學を研究するに當つても、その背景となるべき時代の相を研究する事は缺くべからざることである。

平　安　京　日本武尊は「大和は國の眞秀ろば、たゝなつく青垣山こもれる大和しうるはし」と大和の地を讃美して居られるが、青垣山に圍まれてゐるとはいふものゝ、平野の坦々と開けた大和の國に較べると、平安京の地勢は遙に變化に富んでゐる。蒲團着て寢たる姿とうたはれた東山三十六峯が、優美な曲線を描く背後には、比叡が眉にせま

り、これに對して、北には鞍馬、貴船、高雄の翠巒が波濤の如く聳え立ち、西に連る愛宕、嵐の山々は、その間を縫つて流れる賀茂、高野、大堰の諸川と共に、桓武天皇の御言葉通り、全く山河襟帶の自然の城をなしてゐる。一體に山は紫に水は清く、水蒸氣の多い爲に、朝夕の趣四季の眺めに變化があつて、春の霞秋の時雨の趣はいふまでもなく、花に、月に、雪に、夫々繪の如き詩の如き趣を見せてゐる。まことに京の山水は生きた藝術そのものである。かうした自然の詩味は、審美意識に富んだ京の貴族を動かし、その詩興をそゝらずにはをかなかつた。そこに文藝勃興の一因がある。

政治的狀態

次に政治方面より見るに、この時代に至つて、外韓地は既に問題外に置かれ、新羅との外交關係は殆んど絶え、渤海との交通は行はれてゐるが、それは交聘と、進物贈答との名義の下に、多少の貿易を營むのか、但しは習慣上の禮問に過ぎず、文化の採訪と奢侈品輸入を目的としてゐた遣唐使すら、文德天皇以後は行はれなくなつた。

中葉以後の唐は殆んど國家としての勢力がなく、半島の新羅も漸く衰運に向つてゐて、列國はいづれも政治的に頽壞の時期に入つてゐた。それ故我が國は外國に對して國家的活動をなすべきことがなく、從つて對外關係に刺戟せられて、國家經營の策を講ずるやうなことは毫もなかつた。

又平安朝の初迄、散々東國を侵した蝦夷は、名將坂上田村麿等の力によつて漸く鎭定せられ、國內略々平定し、當時の政府がしなければならないと考へる事業はもはや何もなくなつた。それ故建國以來幾多の辛い經驗を味得した昔は忘れ去られ、武具は徒らに粧飾に供せられるに至つた。政府に事業がなければ、政府を形づくつてゐる貴族官僚は、政治的にその力を用ひる場所がなく、從つて事業欲もなく、活動の氣も起らぬ。彼等の仕事は、唯政府が存立するといふことを、具體的に示すために行はれる種々の儀式のみである。儀式は實務に關係のない點に於て、一種の遊戲である。かくして貴族の「あそび」の生活が出現する。彼等の政務といふのは、要するに煩瑣な儀禮に過ぎなかつた。その煩瑣さは、彼等に暇があればある程發達するわけで、終には儀禮そのものが、複雜な「あそび」にまで變形したといつてよい。しかもその儀禮には、更に詩歌管絃などの純然たる「あそび」が附隨する。かやうな次第で、朝廷の公務は「あそび」と化し、宮廷は貴族の「あそび場所」と化したのである。

貴族の生活

當時の貴族の生活ぶり、これは「源氏物語」などに實によく活寫されてゐる。

今一つの例として、紅葉賀の華かにも風流な模樣を引いて見よう。

行幸には皇子たちなど、世に殘る人なく仕うまつり給へり。春宮もおはします。例の樂の船ども漕ぎめぐ

りて、唐士高麗と盡したる舞ども種多かり。樂の聲鼓の音世を響かす。（中略）垣代など、殿上人も地下人も心殊なりと世の人に思はれたる、有職の限り整へさせ給へり。宰相二人、左衞門督、右衞門督、左右の樂のこと行ふ。舞の師どもなど、世になべてならぬをとりつゝ、おの〳〵籠りゐてなむ習ひける。木高き紅葉の蔭に四十人の垣代、いひ知らず吹きたてたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞えて吹迷ひ、いろ〳〵に散りかふ木の葉の中より、青海波の輝き出でたるさま、いと恐しきまで見ゆ。插頭の紅葉いたう散り過ぎて、顏のにほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて、左大將插しかへ給ふ。日暮れかゝるほどに、けしきばかりうち時雨れて、空の景色さへ見知り顏なるに、さるいみじき姿に、菊いろ〳〵うつろひえならぬを插頭して、今日はまたなき手を盡したる入綾のほど、そゞろ寒く、この世のことゝも覺えず。物見知るまじき下人などの、木の下、岩隱れ、山の木の葉に埋もれたるさへ、少し物の心知るは涙落しけり。（紅葉賀の巻）

花の宴の際なども、「日いとよく晴れて、空の氣色、鳥の聲も心地よげなるに、親王たち上達部よりはじめて、その道のはみな探韻たまはりて文作り給ふ」にぎ〳〵しさ、その夜に入つての披講の趣の深さは一通りのものではなかつた。しかも宴はつれば、その翌日あらためて後宴のことあり、その後宴にもまた音樂が、むしろ「昨日の事よりもなまめかしう、おもしろく」奏せられる。

そしてそれも又深更まで續くのである。宴の行はれる日の前に、試樂が行はれたことはいふまでもないが、その試樂が極めて大がゝりなもので、宴の當日のそれと變るところはなかつた。

かうして威儀正しい公事や、由緒深い行事、乃至佛事供養等の如きも、舞樂遊宴の機會に利用され、文學も亦遊戲化されて、詩合、繪合等が盛に行はれた。

かくて平安朝四百年の文化は、山紫水明の京の都に、太平に馴れ、意志と理智とを缺き、感情にのみ偏した大宮人によつて、溫和に、軟弱に、優艷に育まれた。宮廷をめぐる公卿は、連日連夜太平の惠を樂しんで、春の朝、秋の夕、自然の風物に對して、心行くまで纖細微妙な思を寄せ、悲喜哀樂の情を歌に托して我を忘れてゐた。花を眺め、月に歌ひ、詩歌管絃、鞠、小弓の遊、歌合、繪合の樂しみ、歌ふ、舞ふ、奏でる、囀く、遊ぶ、實にのどかな悠揚たる歡樂の日々であつた。服裝といひ、建築といひ、室內の調度といひ、實用を目的としたものはなく、美と調和とがその制作の標準であつた。白粉、頰紅、黛、鐵漿による化粧、十二單衣、五つ重、七つ重の服裝、四季の色彩の限りをつくしたるが如き襲色、染色の色目——例へば春は紅梅、柳、櫻、夏は卯の花、躑躅、秋は萩、女郞花、白菊、黃菊、紅葉、冬は朽葉色、松等、又出衣出袿等の色彩の對比、香壺、火取、硯筥、草子筥、唐匣、泔杯、茵、衣架、厨子、几帳等の室內調度、さては寢殿造の

内部に於ける彫刻、蒔繪、螺鈿の裝飾、糸毛、檳榔毛、網代等の牛車及輿等、いづれも目をうばふばかり華美絢爛を極めたものであつた。かくして人々の心持も、殺伐は忌まれ、腕力は卑められ、極端は廢せられ、勇猛果敢の風も亦喜ばれず、「あて」に、「めやすく」、上品で奥行かしく、優美でやさしくあることのみが理想とされてゐた。

然し乍ら、表面華かに、遲々たる春色の如き優美なる色彩を以て蔽はれてゐた貴族の生活も、一歩裏面に立ち入つて見ると、そこには、文學的社交生活から生ずるところの弊害の山積してゐるのを見のがすことは出來なかつた。蓋し文學藝術を通しての男女交際は、必然そこに戀愛の相互發生を防ぐわけにはゆかなかつた。その上當時の性的道徳は、殆んど壞廢的に近かつたので、男も女も戀愛生活に於ては、極めて不束束な我儘に過ぎた態度を執るやうになつてゐた。それがため淫蕩なる風習を招來し、醜い情事が屢々演出さるゝに至つたのである。

當時に於ける貴族の戀愛、それは本質に於ては、勿論現代人のそれと同じものであるに相違ないが、一面から見ると、總てが趣味的の戀愛であり、社交的の戀愛であつたといふことが出來る。女にとつては必ずしもさうでないものもあつたらうが、男にとつては殆んど總てが趣味的のもの、社交的のものとして取扱はれてゐた。社會制度や結婚制度が然らしめたとはいふものゝ、戀を自

由に求め、自由に捨てることは容易い日常茶飯の事であつた。歡樂に喜悦する若い男女にとつては、歌合や繪合、圍碁雙六を弄ぶ間にも、自由に戀愛の成立する機會は至る所に見出されたのである。さうして彼等は、それを反省し自責する良心を持つてゐなかつたのみならず、彼等の中には、自己の戀愛を喜んで告白する風さへあつたのである。和泉式部の「和泉式部日記」がその一例であるが、清少納言の「枕草子」にもさうした事實を敢へて隱さうともしなかつた。

然し乍ら、この社交的戀愛の謎が解けて、行く末遠くと賴んだ夢が覺めた時、無限の悲しい淋しい運命を托するものは、どうしてもやはり宗教の世界であつた。「源氏物語」の女性の中、藤壺や、空蟬や、朧月夜内侍や、女三宮や、浮舟の如き、そのうら若い日の、最も華かに見えた美しい婦人達は、皆淋しい尼僧として後半生をみ佛に捧げてゐる。紫式部も、「蜻蛉日記」の著者も、「更級日記」の著者も、いづれもこの宗教と現實との間を彷徨する淋しい心境を、如實に夫々記錄に留めてゐる。この思潮はやがて平家時代に入つて一層濃厚となつた。「平家物語」に描き出された佛御前や、小督の局、橫笛、建禮門院などが皆その美しい例である。

又貴族の生活は、一面に於て權力追求の暗闘史たるの觀があつた。外交上の難事件もなく、著しい内亂もなく、格別彼等を刺戟することがない平靜な時代に當つては、每日遊戲三昧の生活を

送る外に、自己の榮華を熱求する心が絶えず燃えてゐた。それは一面彼等が豐富なる生活を維持して行くには、權勢ある地位を得なければならぬ點もあつて、關白や左右大臣の地位は、何時も烈しい競爭を以て獲得するやうになり、獨りさうした重要な地位のみならず、大納言中納言の地位さへも、暗鬪の目標となつた。かくして、兄弟相鬩ぎ朋友相爭ふ醜を敢へてしてまで、權力に執し榮華に憧れたのである。即ち彼等は宮廷を唯一の世界として、官位の榮達と權力の把握といふ「望」に向つて突進し、それを獲得せんとしてあせり、爭ひ、鬪くのであつた。而して一方に於ては、甘き苦き樣々の戀を味つて、或は喜び、或は悲しみ、或は悶え、或ははかなみつゝ、その戀の世界に彷徨してゐたのである。「望と戀」これこそは、宮廷を唯一の舞臺とし、優麗典雅なる有閑生活に、雲の上近く侍ふ光榮を喜びつゝ、我が世の春を讃へてゐた平安貴族の奏でた一大交響樂であつた。

地方の狀況　かやうに平安朝の文化は華と榮えたが、その文化は總て貴族社會の文化であつて、一般民衆はおよそ文化の光から緣遠いものであつた。京都では公卿貴紳悉く夢のやうな生活をしてゐたが、足一度地方に出づれば、その反對に全く疲弊してゐた。都には詩合繪合の會を中心に、聖代謳歌の聲が聞えて、花の宴、月見の會、管絃の集ひなどの隆盛は、

平安の都が何時も春のやうな氣分に包まれてゐることを思はせたが、他面に於ては地方に大亂の徴候があり、都鄙至る處に盜賊が跋扈してゐた。所謂櫻かざしての貴族社會から、一度眼を轉じて地方を見ると、そこには至る處に海賊の跋扈があり、群盜の横行があつた。その上地方には、農民の田地を强制的に捨施せしめる寺院の暴慢、林野を擅有して飽くことなき國司の私曲があつた。それ故農民の疲勞困憊はその極に達し、地方の荒涼たる有様は「昌平」などゝいふ言葉とは全く緣の遠いものであつた。

第二章　文學の特色

以上のやうに、山紫水明の京の樂土に、生活の苦しみ知らぬ多情多感の王孫公子によつて育まれた平安朝文學が、あくまでも貴族的であり、靜止的であり、女性的であり、優美婉艶であつたことは、自ら頷けるところである。しかしその反面には、短所としてなよ〳〵と弱々しく、纖細柔弱の風のあつたことも否むことは出來ない。即ち平安時代の文學は、華麗絢爛な情感の輝きはまぶしいほどであるが、その反面優柔纖弱に流れ過ぎ、思想の單調にして變化に乏しい憾みがあ

るのである。この長所と短所とを合せたところに平安朝文學の特色がある。

上古文學に見えた素朴雄健の趣は今や消えて、新に生れ出でたものは、正に優美であり、纖細であつた。而もこゝに一つ注意すべきは、その優美纖細の中に、一脈の悲哀無常の空氣の浸み渡つてゐたことである。

奈良時代に隆盛を極めた佛教は、平安奠都後は京都に榮え、宮廷をめぐる大宮人の間には、佛教思想はくまなく浸潤してゐた。その佛教の感化によつて、人々は先づこの世は假の宿り、はかなきもの、思ふにまかせぬものと教へられてゐた。そしてその上、この思想を實際に示すやうな事柄がその生活の上に次々と起つて來た。藤原氏專横の時代には、榮華の道は極めて限られて居り、功名を立てる舞臺も極めて少かつた。幸運と陰謀と情實とによつて、僅にその狹い範圍內で踠き爭つてゐたのが、當時の狀態であつた。そして、それらによる榮枯浮沈の激しさ、或は權貴を得るための嫉視排斥、或は親子、兄弟、叔甥等肉親の間の醜い爭、さうしたものは、自然に人々の胸に、この世のはかなさ、醜さを強く感ぜしめた。それと共に、榮華の生活を送る人々も、「歡樂極つて哀愁多し」の言葉通り、歡樂の後に來る倦怠と物足らなさ、或は享樂淫靡の眞中にあつて、ふと自己を反省した時に起る一種の物淋しさ、さうしたものが一つになつて、この時代の人々

の生活には、華かな中にも、常に一種の昏い物淋しさがつきまとつてゐた。享樂生活の蔭に始終涙つきせず、ともすれば物思ひ勝のことが多かつた。

この華かな中に漂ふ一種のものさびしさ！　それは、とある大きな寺院の春の夕ぐれ、入相の鐘の音に、咲き亂れた櫻の花の一片二片が、音もなく散るのを眺めるやうな趣であるが、この華麗と哀愁との交錯した趣が、平安時代の人々の心の中に流れてゐた特殊な氣分であり、更に平安朝文學の中に漂ふ一種獨特の趣である。嫋々として絕ゆるが如く絕えざるが如き纖細流麗の文體をもつて綴られた「源氏物語」を中心とする諸物語、及び女流日記の類に共通なる情緒は、實に闌け行く春の惱しさであると同時に、その底を深く流れてゐるものは、實に暮れ行く夕空のもののさびしき趣である。

文學の展開

文學の展開の上から見れば、當代は凡そ三期に分つことが出來る。前期は平安奠都の當初から醍醐天皇の延喜頃迄の百數十年間で、嵯峨天皇の弘仁頃を中心とする前半期は、漢文學の隆盛に壓せられて、國文學は一時影を潜めたが、後半期に入り、主として日本的自覺と假名文字の弘通とによつて再び勃興しはじめ、先づ和歌は「古今集」の編纂となつてこの機運を導いたが、他方「竹取物語」「伊勢物語」が、夫々假作物語、歌物語として相前

後して現れ、次期に於ける物語文學發達の前奏曲をなした。

中期は醍醐天皇から白河天皇の御代に至る約二百年間で、道長時代をその中心とする。この期は王朝文化の爛熟期であるが、文學史上でも黄金時代で、その中心をなすものは物語であつた。「源氏物語」は實にこの物語文學の完成を示す逸品であつた。和歌は概ね前期を踏襲したに過ぎなかつたが、隨筆では「枕草子」が出て、「源氏物語」と共に中古文學の最高峯を示し、燦然として後代を光被してゐる。

後期は所謂院政時代から平家時代を包容して、鳥羽天皇から後鳥羽天皇の治世の初年迄の約百年間で、舊文學衰へてしかも新文學なほ興らず、殊に物語文學はたゞ强弩の末勢を保ち、纔に歌は多少の新味を帶びて漸次活氣を見せ、「千載集」の如き特色ある歌集が現れ、やがて「新古今集」の生れる素地を作つた。

第三章　女流文學隆盛の原因

藤原氏と宮廷

平安朝四百年の政治を左右し、國民を率ゐて日本國を荷つたものは、いふまでもなく藤原氏の一門である。古來政治上に格別の勢力もなかつたこの一門が、鎌足に至つて急に名聲をあげ、次で皇室との姻戚關係を生ずるに至るや、その威望は宛も旭日の天に昇るが如く、遂には人もなげなる僭越過分の振舞をもなすに至つた。

この世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることのなしと思へば

とある御堂關白道長の詠によつても、藤原氏の勢力の大體を察知することが出來るが、藤原氏は遂に「藤氏に非ざれば人に非ず」とまで豪語し、藤原の姓を名のるに非ざれば、如何に才幹技倆あるも、高位高官に就くことは出來なかつた。

初、藤原氏の他族排斥は、橘氏、菅原氏、或は在原氏などとの間に行はれたが、藤原氏が全く勝利者となつて、その一門が政權を左右するに至るや、遂には一門同族の間に政治的暗闘を繰返すに至つた。所謂同族相討ち、叔甥相嫉視し、兄弟牆に鬩ぐの醜を演ずるに至つたのである。かくて名聞利慾のためには、骨肉の愛情も無視され、唯徒に醜い利己主義、自我主義が跳梁するのみとなつた。而もその爭闘は、男性的な實力による堂々たる闘爭ではなくて、實に女性的にして陰險なる嫉視と中傷によつてのみ行はれる卑劣な爭であつた。蓋し當時人臣として何人も憧憬し

たのは、攝政關白の地位であらう。藤原良房が一度皇室の外戚となり、攝政の地位を占めてからは、誰もが第二の良房たらんことを熱望した。それがため、藤原氏一門は女を後宮に入れ奉り、外戚として攝關の地位に起つ場合の光榮を熱心に希求した。そこで彼等は女を儲けることを爭ひ、而も女を美しく立派に育てあげて、他日の榮進に資せんことをはかつたのである。蓋し政權の爭奪は、後宮に勢を確立することによつて決定したからであらう。こゝに於て藤原氏一族は、女を女御更衣に入れ奉り、更に中宮に進め參らせるためには、あらゆる競爭を敢へてした。それがためには、同族の者が互に詐略を用ひて、互に醜惡なる鬪爭を續けたのである。關白兼通は弟兼家と爭ひ、道隆、道兼、道長も亦骨肉相食むの醜を演じた。

かくの如く藤原氏は女を宮中に入れ、それによつて己の榮達をはからんとした爲、出來うるだけ女子の容姿をつくろひ、才藝を磨き、且その周圍をも能ふ限り美しく華かに整へる必要があつた。一體平安朝歷代の天皇には文雅の嗜に長ぜさせ給ふ方が多かつた。殊に一條天皇は在位二十五年に及び、寬弘八年三十二歲を以て崩ぜられたが、文藝に對して深い興味を有せられ、神樂歌の散佚するのを惜しんで三十八曲を定められた程であり、又絲竹の技にも精通してをられた。當時知名の詩人、文人、美術家、學者等が輩出したのは、一に天皇が藝術に共鳴せらるゝことが深

かつたからである。

天皇の御代に、中將實方卿が一時の感情に激して、藤原行成卿の冠を打落したことがある。行成は少しも騷がず、笄を取出して冠を直した。天皇は御簾の隙からこれを御覽遊されて、「行成は心優なる者である。實方は陸奧の歌枕見て參れ。」とて陸奧へ遣されたといふことである。左遷の人に對して歌枕見て參れとの仰、なんといふ寛弘優雅な御言葉であらう。

上の好む所下之に傚ふの言葉に背かず、かゝる天皇の風化は自然に後宮にも及んだ。かくして後宮の主たるべき女性は、「大鏡」や「枕草子」に見える宣耀殿の女御の受けられたやうな、特殊な藝術教育を受ける必要があつたのである。

村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御女におはしましければ、誰かは知り聞えざらむ。まだ姫君におはしける時、父大臣の敎へ聞えさせ給ひけるは、一つには御手を習ひ給へ、次にはきんの御琴を、いかで人にひきまさらむとおぼせ、さて古今の歌二十卷を、皆うかべさせ給はむを、御學問にはさせたまへとなむ聞えさせ給ひける。（枕草子）

しかしかやうな習字、音樂、和歌等は、ひとり後宮の妃にとゞまらず、當時に於ては、總ての貴婦人に通ずる必須な敎養の課目であつた。而して、かゝる好學の風は、やがて滿廷の子女を風靡

して、後宮に分屬せる彼女達も、常に相對立するものに向つて自ら教養を怠らず、博識、機智、心ばへの總てに於て、些も他に遜色を見せないやうに努力した。一條天皇皇后定子の方の許には、「枕草子」の淸少納言や馬內侍が女官となつて居り、中宮彰子の方の許には「源氏物語」の紫式部や和泉式部、伊勢大輔、出羽辨等が奉仕してゐた。かくして後宮は教養豐かな才女、天才藝術家を集めた樂園のやうな觀を呈し、こゝに名實共に美の殿堂が實現せらるゝに至つたのである。

こゝに於て、藤原氏の採つた後宮政策は、間接的に宮廷の女性文學を發生せしむる原因となり、後宮は文學の淵叢、女房は文界の粹となり、彩華爛漫たる女流文學時代はこゝに現出し、巾幗者流にしてよく有髯男子をして後に瞠若たらしむる者も續出するに至つた。

宮廷と女子

されば當時に於ては、才學ある女子は好んで宮仕せんと願つた。後宮は彼等にとつては、美のみに充たされた世界であつた。宮仕、それは當時のうら若い女性にとつては、何よりの憧れの對象であつた。されば後宮に行はれる行事は、彼等女性にとつては誠に詩の如く、繪の如く美しくめでたいものであつたらしい。「枕草子」に、

淑景舍東宮にまゐり給ふほどの事など、いかがはめでたからぬことなし（中略）北に少しよりて南向にておはす。紅梅どもあまた濃く薄くて、濃きあやの御衣、すこしあかき蘇枋の織物の袿、萠黃の固紋のわか

やかなる御衣奉りて、扇をつとさし隱し給へり。いといみじげにめでたく美しと見え給ふ。（中略）綸にかきたるやうに美しげにて居させ給へるに、宮いとやすらかに今少しおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣に匂ひ合はせ給ひて、なほたぐひはいかでかと見えさせ給ふ。

とあるが如きはそれである。又宮廷の有樣を垣間見ては、

殿守司女官などの行きちがひたるこそをかしけれ、いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむ。

とゆかしがり、物見車の立ちならぶところに、

よき所の御車、人だまひ引き續きて多く來るを何處に立たむと見るほどに、御前どもたゞ下りに下りて、たて車どもをたゞのけにのけさせて、人だまひつゞきて立てるこそいとめでたけれ。

と、人もなげなる權家の横暴を讃美してゐる。又關白道隆が伊周に沓をとらせるを見ては、

まづあなめでた、大納言ばかりの人に、沓をとらせ給ふよと見ゆ。

と、淸少納言は「枕草子」に感歎してゐるが、これらは正に當時に於ける一般の人々の、宮廷讃美の思想を代表したものと見る事が出來る。それ故女でも「さるべからむ人の女などは、宮廷生活に「さし交らはせ、世の中の有樣をも見せ習はさまほしう、內侍などにても、しばしあらせばやとこそ覺ゆれ」といひ、「千歲もあらまほしき」美の殿堂に立ち交る我が身の幸福を誇つてゐる。

そしてなまなかに家庭生活を得て滿足してゐる人は「いぶせくあなづらはしく思ひやらる」といやしんでゐるのである。而して、その宮仕に於ては、主の宮が貴ければ貴い程、女房達は花に月に、詩に歌に、殿上人上達部との應待に忙しかつた。彼女達は、殿上人達が有明の霧の中に吟ずる「松高風有二一聲秋一」の趣味も解せば、「蘭省花時錦帳下」と書いて、末は如何にと差出された文に對して、「草の庵を誰か訪ねむ」と薄墨の色ほのかに書き送つて、殿上人をアツと言はせる器量も持ち合せてゐた。かやうに相手の出樣に應じて、何時如何なる場合にも應酬の出來る機智と教養とが要求されてゐたのである。そして主の宮にとつては、上達部殿上人にもてはやされ、彼等を感服させるほどの女房を多く持つてゐることは、自分の名聲をいよいよ添へることになり、一方では主の宮の御威勢が大きければ大きいほど、女房達の生活も高まりもし、價値づけられもするのであつた。

「榮華物語」からやく藤壺の卷に、

大殿の姫君十二にならせ給へば、年のうちに御裳著ありて、やがて内に參らせ給はむと急がせ給ふ。よろづしつくさせ給へり（中略）長保元年十一月一日のことなり。女房四十人、童六人、下仕六人なり。いみじく選り調べさせ給へるに、やんごとなきをば更にもいはず、四位五位のむすめといへど、殊に交らひわ

るく、なり立ち淸げならぬをばあへて仕うまつらせ給ふべきにもあらず。物きらゝかに、なりいでよきを

選らせ給へり。

これは道長の姫、後の上東門院彰子の方の入內の有樣であるが、如何に附添ふ女房に注意したかゞ窺はれるのである。女房の教養程度の如何がその主の宮の盛衰にまで關係があるとされた、當時の女房の位置といふものがこれで分る事と思ふ。

さてそれならば、當時の女性の憧れの的であつた宮中に、宮仕する女性達は、一體どんな階級の人々であつたらうか。中には建禮門院右京大夫の如き沒落貴族の女(藤原伊行の女)二條院讃岐の如き新興武士の子女(源賴政の女)もあつたけれど、最も多かつたのは、所謂受領階級の子女であつた。卽ち平民階級と貴族階級との中間にある第二階級、官位でいへば男子は槪ね地方官になり、京官として榮達しても、辛うじて四位に叙せられるか叙せられぬかの間にあり、到底上卿格にはなれないといふ階級に生れた子女であつた。平安朝初期の小野小町にしても、伊勢にしても、中期の右大將道綱の母、馬內侍、淸少納言、紫式部、赤染衞門、和泉式部、大貳三位、菅原孝標の女にしても、悉くこの第三階級に生れた婦人達であつたのである。「源氏物語」帚木の卷に、

受領といひて、人の國のことにかゝづらひ營みて、品定まりたる中にも、又きざみありて、中の品のけしうはあらぬ、擇り出でつべき頃ほひなり。なま〳〵の上達部よりは、非參議の三四位どもの世の覺え口惜しからず、ものの根ざし賤しからぬが、安らかに身をもてなし振舞ひたる、いとかはらかなりや。家の中に足らぬ事などはたなかるめるまゝに、省かず眩きまでもてかしづける女などの、貶しめ難く生ひ出づるも數多あるべし。宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬ幸ひ取り出づる例ども多かりかし。

とあるやうに、この受領階級は官位こそ藤原氏などの第一階級に及ばず、常にそれに隸屬してゐたが、當時地方官の物質的收入は豐富であつたから、その點で餘裕を持つた階級であり、又第一階級第二階級を通じて學問藝術宗教を尊重した時代に、殊にこの階級の男子は、仕官の資格として學問を修めなければならなかつたから、併せて知識階級でもあつた。學問上の專門家は大抵この階級から出た。當時大學は第一階級の子弟も學んだが、この階級の子弟が學生の大多數を占めてゐた。かうした男子の好學の風につれて、女子も亦競つて高等教育を修めたのである。

女性と教養

平安朝貴族の教育目標が、漢學と詩歌管絃と書道と有識故實とにあつたことは、當時の文學の記載から充分に察せられる處である。「わざとの御學問は然るものにて、琴曲の音にも雲居をひゞかし」「いとあはれなる句を作り給へる」を高麗人の相人から愛で

られたのは光源氏の幼時であつた。「わざとの學問」は漢學であり、「句」は聯句である。「朝は書傳を讀み次に手跡を學び、其の後に諸遊戲を許す。」と「九條殿遺誡」にあり「宇津保物語」俊蔭の巻にも、「琴を彈き文を誦す」とも見えてゐる。吉田兼好の「徒然草」の中にも、平安時代に倣つて、簡明に男子の學ぶべき教養の範圍を、

ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならむこそいみじかるべけれ。手なんど拙からずはしりがき、聲をかしく拍手とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

と說いてゐる。右の中飲酒の項を除いて見れば、前記の五科に一致するのである。

さて次に女子の教養についてゞあるが、以上の五科目のうち、漢文こそは學ぶ者は少かつたであらうが、習字、琴、歌などはその教養の重なものであつたことは、「蜻蛉日記」の「小さき人には手習歌よみなど教へ」(下の上)や「枕草子」の宣耀殿の女御の例などでも充分窺ひ得られる。

尚「今昔物語」卷十三から例證して見よう。

今昔、西ノ京ニ住ム人有ケリ、品不賤ヌ人也、一人ノ女子有リ、其ノ女子形貌端正ニシテ心性柔和也、然レバ父母此ヲ愛シテ、年十四歲許ニ成ルニ手ヲ書ク事人ニ勝テ和歌ヲ讀事並ビガタシ。亦管絃ノ方ニ心ヲ

得テ筝ヲ彈ズル事極メテ達レリ。

「枕草子」の例は村上天皇の御時宣耀殿の女御になられた小一條左大臣師尹の娘であり、右の例は中流の市民の娘の例であるから、上は貴族から下は市井の庶民に至る迄、ほゞ女子は右の三科を主として學んでゐたことが推斷される。而して右の三科は平安時代女子の正科であり、一般的教養であるが、尚この外に、個人の趣味なり嗜好なり、或は境遇なりの差によつて、或は繪畫を學び、或は手藝を學ぶこともあり、佛學を學ぶこともあつた。「更級日記」には「この頃の世の人は十七八よりこそ經讀み行をもすれ」とある。勿論女子は以上の外に、尚女子特有の機織、染色、裁縫を學ぶ風習であつて、貴族出の女でも熱心に學んだ。貴族の妻妾でも、夫の着物は妻妾自ら裁縫する習はしで、時としては機織、染色までも妻が行つた。妻が自ら色を染める歌は「萬葉集」にも多い。「源氏物語」帚木の卷にも、裁縫、染色が巧みで「立田姫と言はむにもつきなからず、棚機の手にも劣るまじく」と賞められた女もあつた。「落窪物語」の女主人公は繼母に虐待されたが、裁縫に巧であつたから、遂に太政大臣の北方にまで出世した。これほど裁縫が女子に大切な教養であつたのである。

そしてこれらの教養は、多くはその家庭にあつて積まれたのである。男子にはいくつかの官立

の大學、國學があり、又學者の私塾のやうなものもあつて、自由に門を出て學ぶことが出來たが、今のやうな女學校の制度のなかつた當時の女子は、一人々々家庭に於て學ばなければならなかつた。それは今日の女學校で學ぶよりは困難の多かつたことであらうが、しかし今日の一般の家庭よりも、この階級の當時の家庭は、色々の條件がよかつたやうに想はれる。第一親兄弟自ら教育があつて、學問藝術の價値と必要とを知り、同時に好學の大勢に促されて、女子の教育を奨勵し、父兄が自ら教へもした。紫式部は兄惟規が父爲時から漢籍を學ぶ傍に侍してこれを聽き、兄よりもよく記憶したといふ。「源氏物語」で、明石は父源氏から、雲井雁は祖母の大宮から、宇治の姫宮達は父八の宮から、「宇津保物語」で、俊蔭の女はその父から、「落窪物語」の落窪の君は母からそれ〳〵音樂や書を學んでゐるが、これらは正に當時の上流の家庭が寫實されてゐるのであらう。

以上が平安朝女性の教養の大體についてゞあるが、與謝野晶子氏はこれについて、「彼女等の學んだ科目の數は、決して今の女學校の科目の數に劣らず、その教育の質の高さに於て、今の女子大學以上だと思ひます。」と述べて居られる。そして更に、「人々は當時のこの階級を漫然と想像して、有閑階級であつたやうに思ふでせうが、それだけの複雑な教育を家庭でするには、非常に周倒な用意をもつてせられ、ぶら〳〵して暮らすやうな弛緩した生活はなかつたのです。法華經や

般若經を幾部も寫すといふやうな修業さへ、若い女子もしたのです。」と、九百年前の平安女性の精神生活を懐しんでゐる。

彩華爛漫たる女流文學隆盛の背後には、かうした女性の教養のあつたことを忘れてはならない。かうした教育によつて高められ、深められた處から、幾多の傑れた作品が生れ出たのである。

假名の發明

以上に於て、女流文學隆盛の社會的原因について述べたが、今一つこゝに文學的原因として注目されなければならないことがある。それは假名の發明である。

漢字を用ひて國語を表記する方法は、既に奈良時代に於て案出されて、所謂萬葉假名として弘通してゐたが、表音文字でないことゝ字劃の多いことゝは、種々の點に於て不便を感ぜしめた。然るに何時の頃からか、漢字の草體、或は漢字の點劃を省いて略字を作ることが行はれ始め、遂に之を極度に省略して簡易な表音文字を作り上げるに至つた。かうして出來上つた新字が假名である。これには片假名平假名の二種があつて、いづれも長い年月に亙つて漸次考察されて來たものであつて、その成立を見るに至つたのは、平安時代の初期に屬してゐる。この新字の出現は、我が文化史上最も注意すべき事實の一つであつて、その習得の容易と、使用の便利との爲に、文學者、特に女流作家の間に急速に弘通し、文學の展開の上に一新紀元を劃するに至つたのである。勿論

この假名もその初めに於て、漢文學を以て文學の正道と考へてゐた當時の人々には、なほ蔑視せらるべきものであつたことは、「土佐日記」その他の物語日記に發見するところである。貫之は「土佐日記」の卷頭に「男もすなる日記を女もしてみむとてするなり」」と述べてゐるが、これは當時の日記はすべて漢文で書くべきものとされてゐたので、女性に假託して書いたものである。又「源氏物語」繪合の卷に「草の手に假名の所々書きまぜて、まほの委しき日記にはあらず、あはれなる歌などもまじれる」とある如く、漢文の日記は本式とされ、假名の日記は略式のものとされた。かゝる時代であつたがために、男性は未だ假名文字を用ひることを潔しとしなかつた。然るに當時の女性は勇敢にこれを驅使して、當時の男性作家の達し得ない所にまで文學を引き上げて、文壇の覇權を握るに至つたのである。

第四章　紫式部と源氏物語

一　紫　式　部

家　系

紫式部の家は、閑院左大臣冬嗣六男の良門を遠祖とする名門であつた。同門の中には、文人歌人として名ある者が少くなく、曾祖父兼輔は堤中納言と稱せられ、延喜時代に歌人として令名あり、家集一卷を殘してゐる。祖父の雅正、その弟清正、叔父の爲朝等は、皆優れた歌人で、その歌は「拾遺集」以下の勅撰集に載せられてゐる。父爲時は歌人としてよりは、寧ろ詩文に長じ、又儒學の造詣が深く、當時の碩學文章博士菅原文時に學んで文名一世に高く、その作詩は「本朝麗藻集」に數十首載せられてゐる。又兄惟規も歌人として有名で、如何にも文人的熱情に燃えた風流人であつた。母は右馬頭藤原爲信の女で、冬嗣の一男長良を遠祖とする名家であり、式部の家系とは、遠くその祖を同じくしてゐる。定めて優秀であつたらうことは想像せられるが、その事蹟に至つては、湮滅して全然傳つてゐないのは殘念である。同胞は「尊卑分脈」及び「紫式部歌集」を綜合するに、兄三人と、少くとも一人の姉があつたらしい。そして、この長兄と次兄とは官に仕へ、三兄は出家して阿闍梨となつた。

以上判明してゐる所のみによつても、式部は名門の末葉として、自ら氣品の高いものがあり、父祖累代文人としての血液が濃厚に流れてゐて、傳統的に文學的素質を、多分に傳承してゐたであらうことが推測される。

閲　歴

式部の生年は、未だ明かにされてゐない。圓融天皇天元元年に生れたのであらうとする說（紫家七論）と、同天皇天延三年とする說とがあるが、式部には兄と姉があつたことは確であるから、今それらと父爲時との年齡關係から考へてみると、前說が有力らしく思はれる。

式部の幼年時代のことについては、「紫式部日記」に、兄惟規が「史記」を學習するのを傍で聞き習つて、兄よりも早く覺え、よく記憶してゐたので、父爲時が「口惜しう、をのこにて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」と歎息したといふことを、自ら書いてゐることが殘つてゐるだけである。これは固より一場の斷篇に過ぎないが、これによつて見ても、幼年時代から既に秀れた頭腦の持主であつたことが知られる。又これによつて、家庭に於て相當早くから敎養をうけたことも、推測されるのである。式部の父祖兄弟には、文筆に秀れた人が多く、遺傳として文人の素質を惠まれてゐたことは既に說いたが、その家庭内に溢れてゐた文藝的雰圍氣が、式部の敎養に少からざる影響を與へたことも、見のがすことは出來ない。かくて式部は和漢の文學、儒佛の二敎に精通するに至つたが、外に和歌、管絃、殊に箏曲、香道、繪畫等に堪能であり、又是等の諸道に關して、一隻眼を備へてゐたことは「源氏物語」を通してよく知られるところである。これらも、そ

の家庭の感化が大いに影響したであらうことは、明かなことである。

かやうにして、その學問に對する造詣は、幼少の時から深かつたが、敏り深い彼女は、あらゆる機會に於て、世俗の話題に耳を傾け、眼に觸れる書籍に直ちにこれを繙き、有職故實に至る迄通ぜざる所はなかつたと思はれる。

又式部は、幼時何れかの宮か公家へ仕へたことであらうといはれてゐるが、十九歳の時、越前守となつた父爲時に伴はれてその任地に赴き、翌年迄逗留したものゝ如くで、家集にこの間に詠んだものと思はれる歌が數首ある。しかし、越前への旅を、式部は餘り好まなかつたであらう。途中都を戀しがり、道中の難儀をこぼしてゐる。

みをの海に網ひく民の隙もなくたちゐにつけて都戀しも（近江にて）

越前に於ても、式部はその地に居るを好まず、何時も都を慕つてゐたらしい。

長德三年の秋頃には、父の任滿つるを待ちかねて、一人都へ歸つてゐる。

式部と、後に夫となつた藤原宣孝との戀愛關係が始つたのは、彼女が越前から歸つた、翌長德四年の、彼女が二十一歳の春頃からであらう。式部は初めのうちは、宣孝の熱烈な求愛にも拘らず、容易にこれを受け納れようとはしなかつた。それには種々の理由があつたであらう。性格の

相違、年齢の差、又宣孝に他に二三の妻妾があつた事なども數へ擧げられよう。しかし兩者の關係も、その年が暮れ、やがて長保元年になると漸く接近し、秋には結婚するに至つた。この頃宣孝は四十餘歳、式部は二十二歳位であつた。妻としての式部は、時としては、世の常の妻がさうであつたやうに、夫の夜離れを數つこともあつたであらうが、宣孝の愛をうけて、概して平和な生活を送つたと思はれる。それは夫の死後、夫を偲ぶ情の綿々として盡きず、絶えず哀愁に包まれてゐた式部であつたことによつて知られる。二人の間に、女賢子が生れたのは、長保二年のことであつた。この賢子は後冷泉天皇の御乳母越後の辨とある人で、後に正三位太宰大貳高階成章に嫁してから、大貳三位と改めた。しかし、式部の結婚生徒は餘りにも儚いものであつた。結婚の翌々年、長保三年四月二十五日には、最早夫宣孝に死別しなければならなかつた。

宣孝の死は、式部にとつては非常な打撃であつた。その結婚生活が幸福であつただけに、その淋しさは又深く切なるものがあつた。本來の內氣な氣質と相須つて、世の無常を感ずることも、殊に痛切なものがあつたやうである。

世のはかなきをなげくころ、陸奥に名ある所々かいたるを見て、塩釜の浦

見し人の煙となりし夕より名もむつまじき鹽釜の浦

と嘆き、又みどり兒の生ひ先を氣づかつて、

世を常なしなど思ふ人の、をさなき人のなやみけるに、から竹といふ物の瓶にさしたる、女房の祈りけるを見て、

若竹の生ひ行く先を祈るかなこの世をうしと思ふものから

などゝ悲歎にくれたのである。これが式部の二十四歳の頃であつた。人の世のあまりのはかなさに、式部は幾度かこの世を捨てようとした。しかし頼りない可憐な幼兒を見る時、子のためには雄々しく生きねばならぬと決心した。

そして、この淋しさ頼りなさを脱れるため、式部はふと一つの物語を書き上げようと思ひ立つた。世の中の様々の人物、様々の事件を描いて、自分の心の底深く沈み動いてゐるものを、書き表さうと思ひ立つた。そして、父なき子を守り育てながら、靜かに筆を運んだのである。これが「源氏物語」である。かうして、寛弘四年十二月末、三十歳で上東門院彰子の方に宮仕するまでの、凡そ六ケ年間の寡婦生活の間に、この物語の大部分は書かれたのである。愛の細やかであつた夫宣孝に死別して、滿し難き人生の淋しさ、儚さを痛感した式部は、そのあはれに儚き人生の姿を、自分と共にある平安貴族の生活の上に、細やかに深く微妙に描き出さうとしたのであらう。

さうして、飽迄もつゝましやかな、眞面目な、同情と理解のある眼で、自分の周圍を見廻して、書くべき材料を捜し出したのであらう。かくして「源氏物語」は書かれるやうになつたのであるが、寛弘五年の頃には、少くともそのある部分は世に流布してゐたことは、「紫式部日記」寛弘五年の條によつて推定される。

宮仕の後、式部は一條天皇、中宮彰子及道長夫妻からはかなり愛され、又同輩殿上人からは崇敬の眼を以て眺められたことは、日記の示すところであるが、式部は宮仕に出ることは、餘り好まなかつたらしい。夫に別れてから、殊に引き籠り勝であつた彼女は、他の多くの女性が理想とした、華かな宮廷生活を送る氣にはなれなかつたのであらう。進んで宮仕の如き一種社交的氣分の濃厚な環境に入つて行けない氣持であつたことは、家集に、

はじめて内わたりを見るにも、物のあはれなれば

身の憂さは心のうちにしたひきて今九重に思ひみだるゝ

とあるのでも、察することが出來る。日記に、

憂き世の慰めには、かゝる御前をこそたづね參るべけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなく、よろづ忘るゝにもかつはあやしき(寛弘五年の秋)

又、

目に見ずあさましきものは、人の心なりければ、今より後のおもなさは、たゞなれになれすぎ、ひたおもてにならむも、ことやすしかしと、身の有樣の夢のやうにもおもひつゞけられて、（同年の冬）

などゝあつて、多少宮仕の爲に心を慰められたやうにも見えるが、總じて彼女が豫想してゐた如く、宮仕生活は彼女の寂寥と苦惱を取り去つて與れるものではなかつた。又宮廷生活に於ける彼女の人望が高まるにつれて、同輩の嫉妬や敵愾心が、相當式部を惱したことも事實である。

寬弘五年四月十三日、中宮彰子は御懷妊御修法のため、土御門殿へ出御なされる。式部もこれに從つて、土御門殿に出て三十講に列席した。「紫式部日記」はこの頃から書かれてある。中宮の御產が近づくに從つて、人々はその準備に忙殺された。この頃の式部はまだ新參者であつた。九月十一日後一條天皇が御降誕になり、九月十五日道長の御產養の日には、式部は祝歌を詠んでゐる。十月十六日の行幸に次いで、十一月一日には若宮（後一條天皇）の御五十日の祝儀が行はれ、その日の宴に醉つた藤原公任が「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ。」と、式部に戲れかけた話は有名である。この記事から考へて見ても、「源氏物語」は、この頃すでに相當廣汎な範圍に流布されてゐたものと思はれる。十一月十七日には、內裏に歸られる中宮に從つて宮廷に移つ

た。十二月二十九日には、去年始めて宮仕に出た時の事を回想して、現在に及んでゐる。
寛弘六年正月三日、若宮の御戴餅の事があつた。「源氏物語」が、お前にあるのを見て、歌ひ挑んで來た道長と歌の贈答をしてゐるのは、この頃の事であらう。

すきものと名にしたてれば見る人の折らですぐるはあらじとぞ思ふ

といふのが道長の歌である。これに對して式部は、

人にまだ折られぬものを誰かこのすきものぞとは口ならしけむ

「めざましう」と返歌してゐる。道長の餘りの戯言であつた爲でもあらうが、この歌には身の潔白を強く主張した彼女の心がよまれると思ふ。
又この年の夏、御堂殿で式部が渡殿に寢た夜、ほと〳〵と局の戸を叩く者があつた。恐しさに返事もなくてゐたところ、翌朝道長から歌があつた。

よもすがらくひなよりけになく〳〵ぞまきの戸口にたゝきわびつる

しかし、式部は、

たゞならずとばかりたゝくくひなゆゑあけてはいかにくやしからまし

と答へたのみで、道長の誘惑には從はなかつた。

この道長と式部との關係については、これら日記の贈答歌を中心にして、種々の揣摩臆測がなされてゐる。或る者はこの日記にある程度のものとして「その貞節たふとむべし。あはれむべし。」(紫家七論)とし、或る者は更に想像を加へて、「道長の妾」と見なすものさへある(尊卑分脈に引く所の或本)或はさまでなくとも、式部の女性としての心理につき入つて評を加へ「言葉でない言葉で、道長を誘ふものがなかつたかも頗る疑ひなきを得ない。」(源氏物語新研究)といふ說も出てゐる。

しかし、日記に現れたところによつては、兩者の間が何處迄進展してゐたかは、知り得ないのである。式部が當代の權勢者たる道長の一顧を得たことは、その動機が如何なる點にあつたにせよ、女性の身として、流石に榮譽の感に打たれたことは事實であらうが、火のない所には煙は立たぬの道理から、「御堂關白妾云々」と、定めし幾分の關係はあつたらうと說く說は、餘りに穿ち過ぎた臆說であらう。式部が道長に許さなかつた理由に至つては、固より何等知る由もないが、藤岡博士の「國文學全史」に「式部がその夫を重ねざりしは、後も遂げざる契に捨てられて、世の物笑ひとならん事を恐るればなり。節義よりも深慮なり。」とあるは、蓋しその眞相に觸れた言であらう。想ふに、式部の容色はさまで拔群といふ程でもないらしく、早晩破鏡の嘆を仰つこと

は、當時の幾多の例を見ても明かであるから、寧ろ世人の嘲笑を招かぬを以て、勝れりとした彼女の深慮がかくせしめたのであらう。

寛弘七年正月十五日には、二宮後朱雀帝の御五十日の祝儀があつた。現存の「紫式部日記」はこの日の記事で終つてゐる。

寛弘八年二月一日、父爲時は越後守に任ぜられ、四月頃赴任した。同年六月二十二日には、一條天皇が崩御あらせられた。一條院の法事の過ぎた後、枇杷殿に移られる中宮に式部も從つたが、この時に詠んだ哀傷の歌が「榮華物語」岩蔭の卷に載つてゐる。長和元年二月十四日には、中宮彰子は御歳二十五にて皇后宮に上らせられ、式部は續いてこれに出仕した。とはいへ、寛弘八年の秋には父爲時をその任國越後に送り、長和二年には更に父を訪れる兄惟規を越後國に送るなど、まことに空虚な淋しい日々を過してゐた。而して長和三年には、兄惟規は越後で歿し、遺骨となつて、任期の滿たないうちに官を辭した父に守られて、都に歸つて來た。兄の遺骨を迎へて、式部はどんなに悲歎の涙にくれたことであらう。かうした重なる傷心に、式部は四年の半頃からとかく藥餌に親しむ身となり、しみ〴〵と物思ふことの多い病勝ちの日が續いた。

六月ばかり撫子の花を見て

垣根あれ寂しさまさる床夏に露おきそはむ秋までは見じ

物や思ふと人のとひたまへる返事、九月つごもり

花薄葉分の風やなににかくかれゆく野邊にきえとまるらん

などには、病者のやるせない心境が窺はれる。かうした悲歎と寂寥との中に、その年の暮か、翌五年の春かに世を辭したものと思はれる。出生を天元元年と假定して數へてみると、その死は三十八歲の暮か、三十九歲の春といふことになる。

性格　紫式部の人物については、古來幾多の說がなされてゐる。「やまとには似る人もなく、才德兼備の賢婦なり。」といふ「紫家七論」(安藤爲章)の說は、少しく贔負の引倒しの感があるが、芳賀矢一博士は「國文學史概論」の中に次の如く述べてゐる。

「自己の境遇を叙して、極めて謙遜の風を裝ふといへども、裏面には巨大なる自負心をほのめかせり。安藤年山はこの書を根據として『紫家七論』を作り、爾來紫式部は貞淑溫良の婦人として、殆んど日本婦人の模範と目せらるゝに至れるは、全く年山が七論の力によれり。紫式部の人と爲りは、もとより當時の女流の浮華の風を備へず、貞節を守りし點はありしなるべけれども、日記の一節人の惡口をいふべからずといふ口の下に、直ちに同輩を貶評して苛酷を極む。前院中將をはじめて、和泉式部、江侍從等を罵倒せるこ

と最も甚し。而して自己の高慢は亦其の上に躍如たり。決して完全なる人格と稱すべからざるは、この書に於て認むべし。年山先入爲主より崇拜の極に達せしは、笑ふべき過誤なりといふべし。」

と罵倒的貶隲をなし、手塚昇氏も亦これに同意して、「源氏物語新研究」に僞善的似而非謙遜家と貶しめてゐる。しかしこれらの說は、爲章の說の過褒に過ぎたると同じく、又餘りにかたよれる所論と言ふべきであらう。

卽ち式部の人物については、古く爲章の「紫家七論」出でゝその學德性行を稱揚するに及んで、殆んど典型的な貞操堅固の賢婦人とせられて、定說となつたかの觀があつたが、近代に及んでは、式部の性格が一層深刻に觀察檢討せらるゝに及んで、人間式部の全貌を白日の下に見るの感じを受けるに至つた。

式部が決して凡庸の婦人でなかつた事は、我が國の國寶とまで言はれてゐる「源氏物語」を大成した、その才と意志の强固さからでも容易に斷定されるのであるが、圓滿無碍、完全無缺の代表的婦人として崇めることも、亦當を得てゐまいと思ふ。

式部は確かに敎養ある謹直な婦人であつた。しかし乍ら、一面又かなり複雜な心の生涯を生きてゐたやうである。この點が式部の性格について樣々な意見が行はれる所以であらうと思はれる。

式部の性格を考へて見るに、先づ第一反省的であるといふことが著しく感じられる。彼女は常に自己に對して、嚴正な批判を加へることを怠らなかつた。このために、彼女は何時も自己を忘却することはなかつた。勿論他人の言動も直ちに眼にもつき、かなり峻烈な批評をも加へずにおかないが、同時に以て自己を批判し、反省することを忘れるやうなことはなかつた。中宮彰子が後一條帝を生み奉る折なぞに、女房達があさましくくれまどふを見て「ましていかなりけん」と己の姿をかへりみてゐる。又月明るき夜、中宮に參る時、體裁もかまはず騷ぎ立てゝ車に乘る女房達の無作法を眼にしては、「我がうしろを見る人はづかしくも思ひ知らるれ」と直ちにうつして以て自己を顧るのであつた。かうした反省的な態度は、人との交際に於ても、淡白に振舞ふことが出來ず、常に消極的な態度しかとり得ないことは、今日の社會にもよく見るところであるが、式部にもさうした傾向・多分にあつたものと思はれる。日記に同僚の女房が式部を評した言を載せて、

いと艶に恥かしく、人に見えにくげに、そばそばしきさまして、物語好み、よしめき、歌がちに、人を人ともおもはず、ねたげに、見おとさむものとなむ、皆人々いひ思ひつゝにくしみしを、見るにはあやしきまでおいらかに、こと人かとなむおぼゆる。

とあり、又中宮の言として、

いとうちとけては見えじとなむおもひしかど、人よりけにむつまじうなりにたるこそ、

とあるなどによつて見ても、式部には一面親しみ難い點があると、一般に認められてゐた事は確かなやうである。

又かうした反省的な消極的態度は、勢ひ身を持するに謙抑主義をとるやうになる。

すべて心に知れらむことをも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過すべくなむあんべかりける。

と帚木卷の女性觀の中にも述べてゐるが、式部自身も、幼くして兄の學習する「史記」を横合から聞き覺えたり、「なでふ女が眞字書は讀まむ」と後言(しりうごと)いはれても、古厨子から引出して讀んだり、門院に「樂府」を教授し奉つたりしながら、その學才を「故里の女の前にてだにつゝみ」「一といふ文字をだに書き渡さず」「御屏風の上に書きたる事をだに讀まぬ顔をし」門院への御教授も「人の侍はぬものひまひまに」申上げて「隱し」てゐたといふ日記の記述を見ても謙抑のほどがよく知られよう。

しかしかうした謙抑主義の反面に、式部は一面多少のユーモアを持つてゐたことについて、池田

池鑑氏は次の如く言つてゐる。「辨の宰相の晝寢してゐるのを『繪に書きたるものゝ姫君の心地すれば、口覆を引きやりて、物語の女の心地もし給へるかな』（日記）と書いてゐるあたり、華かではないが、どこか淚ぐましくなるやうな愼ましやかなうかれがある」と。又氏は言葉をついで、「しかし表面優しい式部にも、自尊心を守らんとする反抗的精神のあつたことは否まれない。『人の中にまじりては、いはまほしきことも侍れど、いでやとおもほえ、心うまじき人には、いひてやくなかるべし。物もどきうちし、我はと思へる人の前にては、うるさければ、ものいふことも物憂く侍る』（日記）など言はんとする自己を持ちながら、相手を輕視してゐる傾がある。」

　この自尊心については、少女時代に「史記」を兄より早く暗記した爲父から賞められたとか、一條天皇から「源氏物語」について、「この人は日本紀をこそよみたまふべけれ、誠にざえあるべし。」と賞められたことなどを、得意をこめて書いてゐるところなどに充分うかゞはれる。これは一見謙抑主義と矛盾するかのやうに見えるが、一面彼女が、やはり眞の人間、生きてゐる女、そして自信の强い藝術的天才であつたことを語るものである。

　以上式部の性格については、色々な觀點から眺めることが出來るが、要するに、「源氏物語」及「紫式部日記」を通して見られる式部は、既に島津久基氏も言はれる通り、「聰明な悟性と豐かな

情念と、鞏固な意志の持主であり、人生を深く廣く裏の裏までも見透し味つてゐる苦勞人であり、人生批評家であり、人生鑑賞家である。自己批判は嚴正で、――無論外部の些細な點にも冷徹な觀察批評を怠らないが、同時に移して以て自己を反省し、他人を理解する氣持は充分持つてゐる人間味の濃かな女性」であつたやうに思はれる。

紫式部の名號　式部の實名は明かでないが、紫式部といふ名の謂れも亦明かでない。「河海抄」の說によれば、式部は始め藤式部といつた。これは女房の呼名であるから、宮仕をしない間はかくの如き名はなかつた事と思はれる。宮中生活をして賜はる名は大抵父兄の姓や官位よりその名をとつた。彼女は藤原氏であり、且兄の惟規は式部丞（後に藏人となる）であつたから、藤式部と言つたのであらう。而して藤式部が紫式部となつたに就いては、古來幾多の說があるが、「袋草紙」卷四に、

紫式部云名有ニ二說一一此物語紫卷作ニ甚深一故得ニ此名一。一一條院御乳母之子也。而上東門院令レ奉トテ吾ユカリノ物ナリアハレト思食セト令レ申給故有ニ此名一武藏野義也。

とあり。「河海抄」には、

一部の中に紫の上の事をすぐれて書きたる故に、藤式部の名をあらためて紫式部と號せられけり。一說に

云藤式部の名幽玄ならずとて後に藤の花の色のゆかりにあらためらるゝと言ふ。（清輔朝臣の說也）

凡そ古來の說はこの四つに盡きる。なほ近來に至つて、「紫式部は紫野雲林院の境內のほとりに住みしゆゑの名なるべし。」といふ櫻井秀氏の說がある。それ〴〵理由はあるが、現在の研究の範圍では、「紫の上云々」の第三說が有力に行はれてゐる。

二 源氏物語

著作の動機及時期 著作の動機については古來傳說がある。「無名草子」に、大齋院（村上帝十宮選子內親王）が上東門院彰子に何か珍しい物語はないかと尋ねられた。そこで門院が式部に命じて作らせたのがこの物語であるといふ。

「河海抄」では更にこれを敷衍して、式部は上東門院の命を受け、石山寺に祈願をこめた。折柄八月十五夜の月美しく、式部はそれを見て靈感のより來るまゝに、佛前にある大般若經の料紙を請ひ受けて、先づ須磨明石から書き始めた。それ故、須磨の卷には、「今宵は十五夜なりけり。」とも書かれてゐる。と說いてゐる。この說は爾後多く行はれて、室町時代以後に、源氏の研究書でこの說を揭げないものはない位である。石山寺では源氏の間を設けて、式部の用ひたといふ机墨

の類から式部自筆の須磨の卷までも展覽するが、今それを信ずるものは誰もゐまい。

蓋し源氏著作の動機は、長保三年四月、式部が夫宣孝に死別して、そゞろに人生の無常に憂愁を感じ、それが式部の藝術的感興を刺戟したものであらうと思はれる。即ち夫に對する飽かぬ別れの淋しい心、亡夫に對する痛々しい追憶の心が、安住の隱家を求めんとして、この物語に着手せしめるやうになつたのであらう。その體驗によつて得た、人生の深い味はひに對する愛着の情が、自ら彼女をして物語の創作に向はしめたことであらう。桐壺の更衣の死と、それに對する桐壺の帝の憂愁は、夫宣孝の死とそれに對する式部の憂愁の反映ではなからうか。なほ桐壺の卷の、

　父の大納言亡くなりて、母北の方なむいにしへの人の由あるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方々にも劣らず、何事の儀式をももてなし給ひけれど、取立てゝはかばかしき御後見しなければ、事とある時は、なほ據り所なく心細げなり。

この一節を讀むと、夫宣孝に死別して後に殘された一人娘大貳三位を、女の手一つでもり立てて行かうと、頼りない中にも雄々しく決意し實行して居りながらも、はかばかしき後見なき身には、ともすれば頼りなさに、人知れぬ涙を拭つたであらう作者の姿がしのばれるやうな氣がする。素材はいづれもありふれた世上の事件であるけれども、作者式部の實感が、まざまざと胸に迫つ

て來るやうな氣がする。

最初はかうした動機で書き出されたにしても、境遇が變り、痛ましい追憶の傷も次第に癒えるにつれて、創作の興味や平生抱懷する人生に對する持論も加つて、次々に書き續けられたものであらうと思はれる。從つて創作の時機も、夫宣孝に死別してから、寛弘四年の末、式部が宮仕する迄の、寡婦時代の約五六年の間に、その大部分は創作されたものであらうといふのが定說となつてゐる。

作者の抱負

「源氏物語」は作者の如何なる抱負の下に作られたか、卽ちその著作の主意は如何なるものであつたかについては、古來諸說紛々たるものがあり、何れの註にも殆んど論じてゐないものはない程である。「源語奥旨」の著者近藤芳樹の如く「王室の衰微を憂ふる大志」からこの物語を作つたと、式部を慷慨の烈婦と判定した奇拔な意見もあれば、「伊勢物語童子問」の著者荷田春滿の如く「好色不義の作物語」といひ、又「好色淫亂、不義非禮を書きたる書なれば、父子君臣同座して其の口釋を聞きにくきものなり。」(安齋隨筆)と、前者と正反對の意見を立てゝゐるものもある。然し乍ら、古諸註を大別すれば、略々次の如く三種類に分たれる。卽ち、

一、佛教的に附會するもの
二、儒教的に解釋するもの
三、史的作意と判斷するもの

大體右の如くである。

古く鎌倉時代のものといはれる「無名草子」は、佛教的見地から源氏を見たものであるが、その中に、

さてもこの源氏物語作り出したることとこそ、思へば〳〵この世一つならず珍らかにおぼゆれ。誠に佛に申請ひたりけるしるしにやとこそ覺ゆれ。それより後の物語は、思へど〳〵易かりぬべきものなり。これを才覺にて作らむに、源氏にまさりたらむ事を作り出す人ありなむや。僅にうつぼ、竹取、住吉などばかりを物語とて見けむ心地、さばかりに作り出でけむ。凡夫の仕業とも覺えぬ事なり。

などの言葉が見える。

江戸時代に出た熊澤蕃山の「源氏外傳」は、儒教的解釋を施せるうちの重なものであつて、源氏は上代の美風を說き、人情を描き、風化を基とせるがその本意であつて、風教政道に便あるものとしてゐる。

安藤爲章の「紫家七論」もこの流を汲むもので、その「作者の本意」の條には、次の如く述べてゐる。

この物語專ら人情世態を書いて、上中下の風儀用意をしめし、事を好色に寄せて美刺を詞に現さず、見る人をしてよしを定めしむ。大旨は婦人の爲に諷諫すといへども、自ら男の戒ともなること多し（中略）物語をすべて作り事とのみいふべからず。みな其世にありし人の上を述べて、勸善懲惡を含みたり。此の本意を知らずして、誨淫の書とのみ見る輩は無下の事なり。又詞花言葉のみを弄ぶ人は、劍の利鈍を言はずして、たゞ柄室の飾りを論ずるが如し……云々

これは儒教道德といふ嚴重な規範によつて、それとやゝもすれば矛盾するこの物語に、道德的の意味を與へようとした苦しい說明である。

然るに、本居宣長の「玉の小櫛」出づるに及んで、從來の佛教又は儒教に偏した僻見は見事に破碎され、「源氏物語」の本質眞髓は、確實に把握さるゝに至つた。宣長の評論の根據は所謂「もののあはれ」にあり、「源氏物語」の本旨は、「愛情の種々相を描いて、人々に『もののあはれ』を知らせんとするものである。」と論斷してゐる。「小櫛」の論は、決して單に「もののあはれ」論の一語を以て蔽ひつくされる底のものではなく、もつと複雜な深みを持つ立派な小說論であり、色

々大切な問題を含む、堂々たる文藝批評論であるが、その卷一「おほむね」、卷二「なほおほむね」の二個所に亙つて、引例豐富所論正確に、諄々として又堂々と論陣をはり、從前の儒佛に偏倚した僻見を打破して、よく「源氏物語」の眞髓を傳へてゐる。

宣長は先づ、「もののあはれ」の意義から說き起してゐるが、卷二「なほおほむね」の中に次の如く述べてゐる。

人は何事にまれ、感ずべき事に當りて、感ずべき心を知りて感ずるを、もののあはれを知ると言ふを、必ず感ずべき事に當りても、心動かず感ずる事無きを、もののあはれ知らずといひ、心なき人とは言ふなり。物の辨へある人は、感ずべき事には、自ら感ぜではあらぬ業なるに、さもあらぬは、何とも思ひわく方なくて、必ず感ずべき心を知らねばぞかし。

と論じてゐる。卽ち宣長の解する「もののあはれ」は、「人の心の眞實」を根元とする純正な感情であつて、單なる喜怒哀樂の自然的感情ではない。寧ろ或る程度に自然的感情を克服した、寬い豐かな人間的感情である。複雜な人間關係を、たゞ表面的でなく、底の底までも立入つて深く味はうとする、寬い豐かな同情と理解の心である。而もそれが外面に表れる場合には、複雜な相をとるのであるが、大體に於て「感傷」「感動」「同情」「人情」「風雅心」「趣味性」「美を愛する心」「詩を

解する心」といつたやうな語で言ひあらはせるのである。そしてそのいづれにも亙り、いづれをも含むといへよう。そして「源氏物語」は、

殊に人の感ずべき事の限りを樣々書き表して、あはれを見せたるものなり。

と言つてゐる。そして、この「もののあはれ」の、最も深く、最も切に、最も細かに現れたのが戀愛である。それ故「源氏物語」が戀愛を主想としてゐるのは、このためであると說いてゐる。

人の情の感ずること戀にまさるはなし。さればもののあはれの深く、忍びがたきすぢは、殊に戀に多くして、神代より世々の歌にも、そのすぢをよめるぞ殊に多くして、心ふかくすぐれたるも、戀の歌にぞ多かりける。又今の世の賤山がつの歌ふ歌にいたるまで、戀のすぢなるが多かるも、おのづからの事にして、人の情のまことなり。さて戀につけては、そのさまにしたがひて、うきことも、かなしきことも、恨めしきことも、はらだゝしきことも、おかしきことも、うれしきこともあるわざにて、さまざまに人の心の感ずるすぢは、おほかた戀の中にとりぐしたり。かくてこの物語は、世の中のもののあはれのかぎりを書きあつめて、よむ人を深く感ぜしめむと作れるものなるを、この戀のすぢならでは、人の情のさまざまとこまかなる有さま、もののあはれのすぐれて深きところの味ひは、あらはしがたき故に、殊にこのすぢをむねと多くものして、戀する人のさまざまにつけて、なすわざ思ふ心の、とりどりにあはれなる趣を、いともいともこまやかに書きあらはして、もののあはれをつくして見せたり。……

源氏の君の上にて、空蟬の君のこと、朧月夜の君のこと、藤壺中宮のことなどの如し。戀の中にも、さやうのわりなくあながちなるすぢには、今一際ものゝあはれの深きことある故に、こと更に道ならぬ戀をも書き出て、その間の深きあはれを見せたるものなり。

などは、特に得難き珠玉の文字である。

なほ現代に至つて、藤岡作太郎博士は、その名著「國文學全史、平安朝篇」の中に、「源氏物語」の本意は「婦人の評論にあり。」と言つて居られる。即ち、

著者が深く儕輩の態度進止に注意して、自らその見聞を筆にせるは、紫式部日記これを證す。著者は觀察を積み、考察を重ね、こゝに一篇偉大の小說を作りて、婦人に對する意見を發表せり。

と說いて居る。そして、博士に親しく敎を受けられた吉澤義則博士も、その說をうけて、

源氏は婦人を中心にした人生觀察と、當然それに伴はなければならぬ批判とが目的であつた。即ち式部がこの物語を書かうとした目的は、婦人を中心とした人生を批判したいためであり、その批判を發表する樣式として物語を選んだのである。

と述べて居られるのも注目すべき所論である。

文學的價値　次に「源氏物語」の文學として優れた點についてゞあるが、これについて、宣長は同じく「玉の小櫛」の中に論じ盡してゐる。

宣長の言ふ所を掻いつまんで言ふならば、源氏は空前にして恐らく絶後の、日本にも支那にもない大傑作で、在來の物語に描かれた人物が皆類型的なのに反して、男女各その個性を充分に書き分け、在來の物語が事件趣向の奇を狙つたのに對して、人情を寫し、平凡自然の事柄を寫した中に、漢文等の粗漫な形式的文章でなく、細々と人の心の奥まで殘りなく描き出してゐるのが、その特色であるといふのである。

從來の評家が、源氏は教訓を目標として書かれたとか、教理を説かんがために綴られたとかいふ功利的な見方を説破して、源氏の主情文學としての價値、藝術作品としての眞價を高揚して、「もののあはれ」を寫し出した物語詩、戀愛の種々相を描破した彩色畫、人生を如實に映し取つた明鏡であると論斷した宣長の論説は、言葉こそ古けれ、誠に時代を超越した卓見であるといはなければならぬ。

式部の物語觀　さてかくその藝術的價値を賞讃されてゐる「源氏物語」は、作者の如何なる見識によつて作られたものであらうか。「螢の卷」より式部が物語の本質を論じた

一說を引いて、作者の物語觀を檢討してみよう。

(物語は)神代より世にあることを記しおきけるなんなり。日本紀などはたゞ片そばぞかし。これらにこそ道々しく委しき事はあらめ、その人の上とてありのまゝに言ひ出づることこそなけれ、善きも惡しきも世に經る人々の有樣の、見るにもあかず聞くにもあまることを、後の世にも言ひ傳へさせまほしきふしぶしを、心に籠めがたくて言ひおき始めたるなり。善きさまに言ふとては、善き事の限りを選り出で、人に隨はむとては、また惡しき樣の珍らしきことを取り集めたる、皆かた〴〵につけて、この世の外ならずかし。

これは竹取その他從來の物語に對する解釋であるが、無論作者自身の作品にも適用すべきものである。卽ち物語といふものは、神代の昔より世の中にあつた事を記しておいたものである。歷史などといふものは、その最大なる日本紀ですらが、唯僅に一部分の片側を記したに過ぎないので、物語どもにこそ、人の世の眞の姿、人の心の奧底、卽ち人間道の人間道たる所以のいはれ、消息が委しく書いてあるといふのである。

こゝに「神代より世にある事」と言つたのは、人々が互に相愛し、相樂しみ、相悲しむ情の生活、愛の生活、賢愚あらゆる人々がこれが爲に生き、これが爲に死んだところの生活、人間あつて以來、そしてあらん限り、彼等總ての最大の興味を引くべき、親子夫婦、兄弟朋友相親しみ、

相いつくしむ情愛の生活である。この情の生活を歴史のやうに表面的抽象的でなく、具體的に委しく、目に見え耳に聞えるやうに描いたのが物語であるといふのである。即ち人間の外的生活を記錄した正史に對し、その裏を綴る內面生活の、捨て難く默し難い味を傳へるのが物語だといふ見解である。卓拔な見識ではないか。しかもこれが架空の議論でなく、此の宣言通り、或はそれ以上の物語として「源氏物語」を作り上げたのである。

さて「源氏物語」は以上の如き作者の優れた見識の下に作られたのであるが、既に宣長が道破した如く、一種の寫實小說である。「おどろ〳〵しきさまの事」もなく「初より終りまでたゞよのつねの、なだらかなる事」を描ける寫實小說である。宮廷生活を中心とせる平安世相の縮圖であり、活寫である。卷を開けば　そこに現れるのはさながらの御道殿時代、宮廷を中心とした、華かな、しかも淋しい貴族の情趣生活、場面は時には須磨、時には宇治と、多少の變化はあるが、大體に於て京洛の地を出です、悠揚たる平安城裡は、この物語の背景として鮮明に描き出され、帝城を訪るゝ四季折々の風物は巨細に寫されて、かの人事とこの自然とは、渾和融合されて、王朝時代の大宮人の體驗を如實に物語つてゐる。式部自身の言葉で言へば、

「善きも惡しきも、世に經る人の有樣の、見るにもあかず、聞くにも餘る事を、後にも言ひ傳へさせまほ

しき節々を、心に籠め難くて、言ひおき始め」

た「この世の外ならぬ」實人生の描寫である。しかし式部の寫し出した人生は、社會は、彼女の見聞した世界のそのまゝの世界ではなかつた。善惡につけて世間の人の有樣の中で、見るにもあかず聞くにもあまる事を、後の世に傳へさせまほしく筆を執つたといふ處に、描寫の素材が現實の事實の上に立つてゐる事は明かである。卽ち個々の場面や、個々の性格や、個々の葛藤や、個個の境遇等には、夫々モデルがあるであらうが、現實そのまゝの事實小說ではない。

「その人の上とて、ありのまゝに言ひ出づることこそなけれ」

と斷つてゐる上に、

「善きさまに言ふとては、善きことの限りをえり出で、人にしたがはむとては、又惡しきさまの珍らしき事を取り集めたる」

と述べてゐるやうに、現實そのまゝの姿ではなくて、現實の上に感動せられたものであつて、「枕草子」にいふ「えりいでたもの」を描くのである。卽ち善き事を描く時には善き事を特にえり出し、反對に惡しき事を描くには、惡しき樣の珍らしい事を描くのであつて、現實そのものゝ中の特殊な感動された事を描くのである。それによつて、現實そのものに全く無關係のものでないが

この世ならぬものが現れるのである。即ち光源氏の如き人物は、これを分解すれば、全然架空の人物でなく、現實の上に存するのであるが、現實の中からえり出でたものであつて、現實そのままの人物ではないのである。

即ち源氏は、一面に於ては女を漁つて歩く大の漁色家であつた。かゝる漁色は、一夫多妻の當時の世態としては、むしろ當然な事として行はれてゐたのであつて、そこに平安世相に卽した現實の姿がある。しかし源氏に於て注意しなければならないのは、彼の持つあらゆる女に對する溫情である。彼は一度關係を結んだ女は、それが如何なる缺點を有してゐたにせよ、見捨てる事なく、又その長所をも同時に見出して、末長く精神的にも物質的にも好意を示してゐる。「普賢菩薩の乘物」と間違へられる程の醜い末摘花でも、たゞ一度の契で素氣なく自分から逃げ隱れた空蟬でも、最後はやはり源氏が同情の念を以て引取つた。

要するに、源氏の女達に對する溫かさと優しさ、その女の自分に與へた最上のものを何時迄も忘れ得ずに、女を愛し慈しんで行かうとする態度は、當時の他の漁色家に見られない長所であり美點であつた。當時の男は、一度女の無上の愛を得て後は、ともすればその態度が冷淡となり、他の美しい花にと浮れ歩く蝶の如き輕薄さが多かつた。この故に、思慮深い女は、男の眞實の愛

な徹底的に認める迄は、我が前に膝まづかせてやまなかつたのである。かくて當代のすぐれて理想的の男子は、絕世の美男子であり、卓越した才學藝能を持ち、女に對する魅力に富むと共に、何よりも心の溫さ、女に對する眞實の、而して變らざる愛情が必要であつたのである。源氏の君は、この點に於て當代理想の男子であつた。この源氏の君の對異性態度は、或意味で、時代の男性に投げた作者の皮肉ともいへようが、一面作者の異性に向つて、最も望ましく思つてゐた重要な點であつたらうと思ふ。この意味で、源氏の君こそは、紫式部が求めてゐた理想的人物であつたといへよう。式部はかく源氏の君に於て理想的男子を描き、更にそれに配するに、理想的女性紫の上を以てした。それ故源氏の君も紫の上も、作者によつてかなり理想化されてゐる。しかしそれと共に、そこに幾多の人間的凡人的の煩悶をともなつてゐるのであつて、決して單なる非人間的理想化された人物とはなつてゐないのである。そこには脈々たる血の通つた人間の姿が認められる。即ち理想的人物を描きながら、平凡なる人間的精神活動を逸しなかつたところに、「善きことの限りをえり出でゝ」描き乍らも、「この世の外ならぬ」實人生を描寫せんとする作者の物語に對する本質觀が窺はれるのである。この理想と現實とが微妙に融和する處に、「源氏物語」が優れた寫實小說であると共に、一面理想小說であると稱せられる所以があるのである。

三　式部の女性觀

——雨夜の品定めを主としたる——

「源氏物語」は、式部が己の周圍に「ある」現實の世界を描くと共に、「あらまほしき」理想の世界をも描いた、理想的寫實小說であることは、已に論じたところである。而も、その理想と現實とが微妙に融和混合するところに、又源氏のすぐれた一面があるのである。

この「あらまほしき」世界を希求する心の現れの一つとして、作者は作中の人物に假托して、屢々自己の意見を述べてゐる。假托してと言つては餘りに功利的過ぎるが、やはり充分意識して論じさせ語らせてゐる場合が少くない。それは、物語論（螢卷）技藝論（帚木卷）音樂論（若菜下卷）妻室論（帚木卷）婦人論、女性觀（帚木、螢卷）子女教育論（螢卷）男性批評（帚木卷）等種々の興味深き所論として表れてゐるのであるが、中にも妻室論、婦人論は最も興味深く、且最も普遍安當性を有する所論として、古來評家の注目をひいて來たのである。

既に述べた如く、藤岡博士は「源氏物語の主意は婦人の評論にあり。」と述べてゐるし、その衣鉢を繼がれた吉澤博士も「源氏物語は婦人を中心とした人生の觀察と、當然それに伴はなければならぬ批判が目的であつた。」と論じて居られるが、更に博士は、

「式部はその日記の中に、淸少納言、和泉式部、赤染衞門等の同僚その他を、痛快にしかし正確にこきおろしてゐるが、愼み深い式部をしてかうした激越な批評を敢へてせしめたのは、その婦人の觀察に持つてゐた興味が、おさへきれない衝動が、知らず〳〵式部を驅つて、そこまで筆を運ばせたと解釋しなければならぬと思ふ。この式部の興味が雨夜の品定めとなり、更に『源氏物語』一篇となつたのである。婦人觀察に對する式部の興味はそれほどに深いものであり、强いものであつた。然も當時にあつては、みち〳〵しき事、理窟がましき事は、かりそめにも婦人の口に上すべきものではなかつた。人生批評などは婦人の噯氣にも出すべき時代ではなかつたのである。さうした女は鬼よりも恐ろしがられた時代であつたことは、雨夜の品定め中の博士の女の記述によつても察せられるのである。けれども式部は、婦人を中心とした人生の道が說きたかつた。そこで式部は、その批判を發表する樣式として、當時に於て婦人に許された、唯一の言論發表の樣式である物語を選んだのである。この意味に於て『源氏物語』は一種の方便小說である。たゞその寫された實生活が餘りに巧妙に描かれてある爲に、方便小說と觀破されないで今日に及んでゐるのである。またそれが式部の望む所でもあつたであらう。けれども行爲の一つ一つに批判を加へてある點に明らかに式部の目ざしてゐた意圖の存する事を、見のがす事は出來ないのである。」云々

と述べて居られる。

而してこの婦人論の中樞をなすものが帚木卷の雨夜の品定めであるが、今この品定めを中心と

して、式部の抱いてゐた婦人論、女性觀をさぐつて見たいと思ふ。

品定めは、深い人生鑑賞家であると同時に、眞摯な人生批評家であり、博い人間愛の所持者である式部が、その類なき觀照眼と深い思索とを以て描き出した源氏五十四帖の序とも言はるべきものであり、又周到な用意の下に婦人の種々相を描き出し、索いては彼女の女性觀を述べるに至つた女性についての總論とも言ふべきものである。實にこゝに論じたことは、後に現れて來る總ての卷々と關係深く、渾然とした繋がりをなすものであつて、或る意味に於て「源氏物語」全篇は、雨夜の品定めの延長であり、その小說的展開であるとも考へられるのである。その內容には、婦人論、戀愛論、情育論、音樂論、和歌論、處世論等を織り混ぜてゐるが、中にも婦人論は品定めの中樞をなすもので、その精密周到さは、驚歎に値するものがあるが、その所論の妥當正鵠なるに至つては、九百年後の我々をして尙充分に共鳴同感の念を起さしめるものが少くない。

品定めは光源氏十七歲の夏の夜の事で、宮中の御物忌に於ける源氏の御宿直所を舞臺として、源氏及その本妻葵の上の兄にあたる頭中將、通人の馬守及藤式部等が集つて、外では朝から降り續いてゐる雨が、しと〳〵と草木を濡らす、如何にもしめやかな殿上の宵に、つれづれなるまゝに夜更くる迄互に話に花を咲かせるのである。

自分の本妻に滿足して居ない源氏及頭中將は、境遇の似てゐる故もあつたらう、お互に心許した友であつた。その上好色道の仲間、否競爭者であり、いづれも北の方を外にして餘所歩きに忙しい人々であつた。今宵は源氏の宿直所に於て、御厨子の中の戀文を見たい等と互に遠慮なく話し合つて、遂に一部の文を見せられる處に、品定めを引き起すべき端緒が現れる。先づ、

女のこれはしも難つくまじきは難くもあるかなとやう／＼なむ見給へる。

と難癖のない女は求め難いものであると歎息をもらすのをきつかけに、頭中將の女人觀が始る。

「唯表面だけのお世辭愛嬌で、手もすら／＼一通りは書けるとか、その時々の應待も旨く呑み込んで、調子を合せるとかいふだけなら、それ相當かなりにやれるのが澤山あるやうに思ひますが、それだつていざその點を審査の目安に嚴選する段になると、大抵は怪しくなつて、合格保證附といふのは滅多にないものですよ。」

かうして頭中將の完全女性物色難に品定めの端緒は開かれた。折もよく左馬頭と藤式部が連れ立つて御物忌の籠りに上つて來た。これが又當世斯の道の玄人で、辯は達者、素敵に話せる方なので、話の花は益々咲かうとする。やがて通人馬守が中將の話を讓り受けて滔々と辯じ立てるのである。

人の種姓を上流中流下流とに分けて見る。上流に生れた女は多くの人々からちやほや崇められて、缺點があつても人目につかず、非常にすぐれて見える。又下層階級の人は格別注意もされないから問題にならない。中流階級の女はその各々の性質、主義、藝能、容姿の程も偲ばれて、その善し惡しが注目され、多くの人々にゆかしく思はれる。上流の女はたとへうちあひてすぐれてゐても、あたり前のことゝ驚きもしないし、又そんな上の上の女等は「なにがしの及ぶべき程ならねば」とて、上流下層の婦人を措いて、中流の婦人を問題とした。その中流に屬する者にも、なり上り者、元は高い身分であつて今は零落した者、受領で暮しのよい者、非參議の四位あたりの者等あると、痒い所に手の屆くやうな分析が試みられて行く。そしてこれらの受領階級の女などは、家の暮しも豐かだから、思ふ存分眩しい程に磨き上げるので、宮中奉公に出して思ひがけぬ幸運の主になる例も少くない。さて、

大方の世につけて見るには咎なきも、わが頼むべきを選ばむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。

單に一個の女性として觀るには結構無難でも、いざ自分のものとしようと眞劍に搜してみると、數多い中にも、これはと思ふ女はゐないものである。さればとて、女は男が國家の柱石となつて

働く如く、否それにも增して家の中の獨裁政治をやらなければならないのだから、よく選ばなければならぬ。しかし「とあればかゝり」こゝが善ければあそこが惡し、一つ叶へば一つが足らず、帶に短し襷に長しで、曲りなりにもこの程度で我慢の出來るといつた人すら少いものである。別段すき〴〵しい遊戲氣分から、あゝでもないかうでもないと、いつ迄も選り好みをするわけではないが、兎に角これから一生苦樂を共にしようといふ妻であつてみれば、同じことなら自分で骨を折つて缺點を矯正せずに濟むやうな、稍々理想に近い女が若しやゐるのではないかと、最初から嚴選するので愈々決定がむつかしい。しかし必ずしも自分で滿足してゐるといふのではなくとも、何も緣あつての事と、馴れ初めの昔を忘れずに辛抱してゐる男は、細君孝行と感心に見え、かうして捨てられずにゐる女にしてもが、あれでやはり何處か善い處があるのだらうと、世間體もよからうといふものだ。それ故思ふやうにならなくとも、諦めて連れ添うたがよいと、理想は高く揭げるけれども、その理想は仲々實現する事は出來ないから、ある程度で滿足するがよいといふ、一種の諦めに近い思想を現してゐる。又理想と現實とのある程度までの妥協とも見られると同時に、世の中は萬事不如意である。充ち足りないものであるといふ一種の歎息もふくまれてゐる。評論は益々細くなつて行く。

美しい女で、非常に上品ぶつて、つゝましやかなしな〳〵した樣子をして、誠に女らしい女だと思へば、さういふ女はともすると餘りにセンチメンタルで、下手に出れば附け上つて甘つたれ放題の我儘、全くどうにも手におへず、今更悔んでも後の祭、何といつてもこれが女性通有の最初に上げなければならない缺點である。

さて又一家の主婦としては、折節の風流氣はなくともよいやうなものだが、さりとて餘りに型通りの世話女房式で、明けても暮れても甲斐々々しいおさんどん姿で、額髮を耳にはさみ、夫に對するまめやかな後見には手ぬかりはないが、世間の出來事の話相手も出來ず、勤めから歸つた夫の顏色でその日の氣持を察するデリカシイもなし「公私の人のたゞずまひ、善き惡しき事の目にもとまる有樣を」聞きわけて理解してくれる才量もない悲しさ、夫たるもの私憤公憤の數々胸一つに疊んでおけない事も隨分多いのを、妻に話したとて何にならうと、思はず横を向いて溜息の一つももらすと「何事ぞとあはつかに仰ぎゐたらむ」誠に「如何は口惜しからぬ」である。

結局「ひたぶきに兒めきて柔かならむ人を、とかくつくろひてはなどか見ざらむ。心もとなくとも直し所あるべし。」と子供らしい柔かな女性に目をむける。しかしかゝる女は、何かにつけて賴りにならない。柔順そのものは嬉しいが、何となく物足りない。夫に食ひつく心配はないが夫

を支へる力は弱い。男に引きづられて生きて行くのが全生命で、夫の代理など夢にも望まれない。留守も安心して托されない。反對にしつかり者は、心づきない時もあるが、折節につけて旨くやつてのける事もあると、彼此比較を續け、決しかねて、流石物定めの博士馬守も困り拔いてしまふ。そしてその歎息の末、

今はたゞ品(しな)にもよらじ、容貌(かたち)をば更にも言はじ、いと口惜しく拗けがましきおぼえだになくば、たゞ偏へに物眞實(まめやか)に靜かなる心のおもむきならむ寄邊(よるべ)をぞ、つひの賴所には思ひ置くべかりける。餘りのゆゑよし心ばせ打添へたらむをば喜びに思ひ、少し後れたる方あらむをも、強ちに求め加へじ、後やすく長閑けき所だに強くば、うはべの情はおのづからもてつけつべき業をや。

如何に求めても際限がないと斷念した擧句に、種姓(階級)を否定し、容貌を否定し、才藝その他の諸性質を否定して、たゞひとへに「ものまめやかに靜かなる心のおもむき」といふ性質をぬき出してゐる。この性質さへあれば何もいらぬ。「專心夫大事に仕へてくれるやさしい氣立」「實直で靜かな氣立」これさへ確かりしてゐれば、これが先天的な性質であるから、うはべの技巧、表面の情味の如きは、自らにつける事が出來るのである。女性として誰でも持つてゐなければならぬ普遍的なかうした性質さへ備へてゐたならば、それで滿足すべきで、それ以外の藝能などのう

ち添うてゐるのは、これは意外の掘り出し物を見つけたと思ふべきであるといふ。

これが雨夜の品定めの中心であり、最後の歸結であり、式部の結局言ひたい處であり、式部の女性觀であつたと思はれる。何よりも人間の本質、人格基礎になる處を大切にする考である。

そしてこの論を基として、益々分析比較を續けて行くのである。馬守は「靜かなる心のおもむき」に反する二つの性質を擧げて、これを明瞭にしてゐる。

一、强い嫉妬を心に包んで、山里や世離れた海岸に隱れたり、又おだてられると尼にもなりかねない女

二、放任主義の女

前者は强い狹い愛、後者は廣い弱い愛、この二つを擧げて、そのどちらもいけないと諄々と說いてゐる。

第一一寸の事に物怨じをして尼になつたり、遁れたりする事は、自分としても不幸な事であり、相手に對しても氣の毒なことである。夫婦の間といふものは、

惡しくも善くも相添ひて、とあらむ折もかゝらむきざみも、見過したらむ中こそ、契深くあはれならめ。

どうせお互に缺點のない者は望まれないもの、我慢して添うてゐる方があはれであるといふので

ある。

次にあまり放任主義にしておくのも、繋がぬ舟が波に任せてあちこち浮き漂ふ如くに、男は「輕き方に思ひなして」浮氣をして歩くものであるから、

すべて萬の事なだらかに、怨ずべき事をば見知れる樣にほのめかし、恨むべからむ節をも憎からずかすめなさば、それにつけてあはれもまさりぬべし。多くは我が心も見る人から治りもすべし。

というて、餘り放任にならぬ樣よい程に嫉妬も必要であるとして、夫君操縱法、夫婦生活の妙諦ともいふべきものを敎へてゐる。

次に風變りな特殊の才藝のある樣な女よりも、素直な優しい女の方にやはり心が引かれるといつて、

手を書きたるにも、深き事はなくて、此處彼處點長に走り書き、そこはかとなく氣色ばめるは、打見るにかどかどしく氣色立ちたれど、なほまことのすぢ細やかに書きたるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一度取り並べて見れば、猶實になむ寄りける。はかなき事だにかくこそ侍れ、まして人の心の、時にあたりて氣色ばめらむ、見る目の情をば、え賴むまじく思ひ給へて侍り。

と、人間の心情の中樞ともいふべきものゝ、穩健實直なることを要求してゐる。

以上で抽象的な論議を終へ、馬守は更に進んで、それらの觀念を樣々の程度に混有してゐる具體的な女の經驗談に進んで行く。今迄を品定めの總論として、いよ〳〵これから品定各論にうつるのである。

一、まめやかな方面にかけては申分ないが、非常に嫉妬深い女（指喰の女）

二、各種の藝能が勝れてはゐるが、まめやかでなく色好みの女（木枯の女）

前者はそのまめやかな性質から、夫の意には「つゆにても違ふことはなくもがな」と「無き手を出し、後れたる筋の心をも猶口惜しくは見えじと思ひはげみつゝ」努めてはゐるが、嫉妬の焰を胸に包んで世を早くした。只嫉妬の一點あるのみで、遂につれなき關係になつたのである。後者は一寸は心がひかれるが、心をかけて深く賴むべきではなかつたのである。次に、

三、頭中將がどんなつらい事も、表面には出さずに、靜かな心に忍んで、決して嫉妬をしなかつた弱々しい女の例として、夕顏の回顧をしてゐる。

「親もなくいと心細げにて、この人こそはと事につれて思へるさまもらうたげ」に、餘りに穩かな氣質なのに氣を許して、杜絕え勝になつてゐる中に、本妻の方から威嚇されて、行方も知れなくなつてしまつた。

あはれと思ひし程に、煩はしげに怨みまつはす氣色見えましかば、かくもあくがらざらまし、こよなきとだえ置かずさるものにしなして、長く見る樣も侍りなまし。

と、夕顏に對する盡きざる戀慕と、いひ知れぬ愛着とに顏を曇らすのである。最後に、四、藤式部が賢き女のことを話すことによつて品定めの座談會は終ることになる。

「ざえの際なまくの博士恥しく、すべて口あかすべくなむ侍らざりし」といふ實に珍しい女性で、消息文も眞名で書くといふ。然しこんな女は全く興ざめてしまふと笑殺し去るのである。

かく色々な女性を擧げて、理想的なものを追求してゐる氣持が現れてゐるが、求めてもく矢張充ち足らぬ世の中である。「とあればかゝり」なかく人選の困難な事に困窮して、

いづれと終に思ひ定めずなりぬるこそ世の中や。只かくぞとりぐにくらべ苦しかるべき。このさまぐのよき限りをとり具し、難ずべきくさはひまぜぬ人はいづこにかあらむ。

と、歎息を漏してゐる。一つよい處があると思へば他方に障りがある。實に定め難きが浮世である。

かく色々な性質を取り出して考へ、理想的なものを見出さうとしても困難な事となり、結局は馬守が求め出した人としての本質、即ち「偏にものまめやかなる心のおもむき」に到達するので

ある。今迄論じ來つたことも、只この言葉によつて一括されるに至つたもので、この心が即ち雨夜品定めに述べたい根本的な思想であつたらうと思はれる。

尙品定めについて全體として思ひ當つた一二の事について述べてみよう。

（一）　卷を通じて浪漫的傾向の上に立つてゐるといふこと

この傾向は品定め全體を通じて至る處に見出される。即ち「あくがれ」——完全なるものへの無限の思慕と追求とである。この心が、式部に分析する智慧を目覺めしめた。あらゆるものに疑を投げかけて缺陷を見出し、缺陷なきものへと無限に進んで行くのである。しかし「あくがれ」をどこまで追ひ求めても、理想と現實とは合致する事は出來ない。そこに一つの惱みがあり、歎きがあり焦燥がある。然し如何に焦燥つても、求め得ないものはどうする事も出來ない。式部はその事を勿論よく自認してゐる。最後にはあらゆる外面的副次的なものを否定して「偏にものまめやかに靜かなる心のおもむき」さへあればよいといふ。「しづかなる心のおもむき」とは、強い感情の葛藤を内に持つた惱しい靜けさである。これが眞實の人間力を追ひ求めて浪漫的思惟の窮極に見出された結論である。

（二）　この品定めは式部の人となりより流れ出たもので、從つてこれは又よく式部自らの人と

なりを示してゐる。

この書を女誡の書の如く言ふ學者もある。しかし式部にかゝる氣持が動いてゐたか否かは解しかねるが、その樣に解されなくもないと思ふ。彼女は品定めに於て、「あだ〳〵しきこと」「さがなきこと」「しふねきこと」等を頻りに誡めてゐる樣に見え、まめやかなるを一番たのみにしてゐるが、彼女自身は如何なる女性であつたか。その性格については既に檢討した處であるが、謙遜であり物事に控へ目でつゝましやかであつたことは充分知られるのである。彼女が品定めに於て、木枯の女の如きあだ〳〵しきを惡んだのも、その點から領かれると思ふ。但し「紫家七論」の所說に就いては、近時反對の見方もされてゐる事は前述の如くで、その婦德を疑ひ、又似而非謹愼と見る人もないではないが、それらの說も必ずしも妥當とは認め難い。固より爲章の如く、儒家の道德を以て式部を律して稱讚する事は、時代を考へぬ說であるが、只時流にあつて最も思慮深く、且謹愼な女性であつたらしいことは是認せねばならない。譬へ式部論の歸結が如何にあらうとも、ものまめやかで靜かなる心のおもむきに價値を認め、かくあらむと望み、かくあらむと努めてゐた事は明かである。卽ち雨夜の品定めの論結が、よし萬一式部自身の相でないにしても、彼女自身が望む所の相であり、その點に於てあくまで式部の人となりを示してゐるといふ事が出來よう。

四　物語に描かれた女性群

吉澤義則博士は「源氏物語は婦人を中心とした人生の觀察と、當然それに伴はなければならぬ批判が目的であつた。」と述べて居られるが、この物語に現れてくる女性は、女院、宮々、后、中宮、さういふやんごとない御方々から、女房、童、さては樋清(ひすまし)、御厠人(みかはやうど)などいふ半者(はしたもの)の末々に至る迄、無慮二百數十人の多きに上つてゐる。而もその各が、それぐ\特異の個性を持つて、その場面場面に應じて、役割を果してゐるのである。

これらの女性について、「源氏の女性」の著者は、

「源氏物語の中に描かれてゐる數多の女性の中から、どの一人を拔き出してみても、現在の自分達の周圍に居る女性の、誰かに似てゐる。かりに個々の女性のもつ色彩、持ち味等の一から十まで等しい女性を見出すことが難しいとしても、その容姿か、性情か、身分敎養かの一部分の似通ふ女性を思ひ出す事は決して難くない。勿論、言語と云ひ、衣服といひ、その他のあらゆる風俗、習慣は、著しい變遷の跡を、現代に至る年月の間に見せてゐるけれど、人間の本質や、女性の本質といふものは、千年や二千年では、どうにもならないものと見える。その證據に、源氏物語の中の女性の思考感情は、すべてその儘現代の女性の

胸に響き傳つて來る。この物語に現れて來る女性を、繪に描かれた姫君か何ぞの樣に、千篇一律の個性も取柄もない女性の樣に考へたり、或は明け暮れ相聞歌の應答を事として、一生をたわいなく過す女性ばかりの樣に考へるのは全く當らない。」

と述べて居られるが、誠に肯綮に價する文字であると思ふ。なほこれによつて見ても、紫式部が同性に對して、如何に盡きざる興味と關心とを持つてゐたかを知ることが出來るし、又式部が作家として、如何にすぐれた手腕力量を有してゐたかを察知することが出來よう。

さて、これら百花繚亂の花苑を思はせるやうなきらびやかな女性群を大別してみると、大體、源氏をめぐる女性、夕霧柏木を中心とする女性、及び宇治卷薫君匂宮をめぐる女性の三群とすることが出來る。

源氏をめぐる女性にしても、藤壺、紫の上をはじめ、葵の上、明石の上、空蟬の君、槿（あさがほ）の姫君、六條御息所、朧月夜內侍、末摘花の君等十五六人の多きに及んでゐる。これら多くの女性について、悉く詳細に說くことは、もとより紙數の許すところでないが、今はその代表的なもの二三について述べてみよう。

女御更衣あまたさぶらひけるなかに、帝の御恩寵を一身に集めた桐壺の更衣こそは、げにめで

たきことの極みであつた。されど數多の人の妬みの積りの病に、なよなよとわれかの氣色に里下りなされたが、やがて草葉に置く朝露のごとく、はかなくあひはてなされた。更衣逝去後の帝の御歎きは、見奉る人さへいたいたしく心苦しいものであつた。その歎きを慰め奉るよすがにもと、懇望されて宮仕したのが藤壺の宮である。げに怪しきまで亡き更衣に覺え給へる御容貌有樣、帝の御心もおのづから移らうて、こよなく思し慰むもことわりに、光君と相並んで輝く宮と御覺えもとりどりながら、光君とのはかなき事のあやまりも、それが世に漏れ出でずにすんだゞけに、一入世を悶え通して、遂に佛門に歸せられたその苦しい御生活は、あまりにいたはしく、のがれがたい宿命の程に、却つて限りない同情を寄せざるを得ないのである。女御は美しく、心弱かりし女性の代表である。數多い女性の中で、源氏の眞の配偶であり、こよなき半身であつたのは、勿論紫の上ではあるが、源氏の心の中に久遠の女性として、常に刻みつけられてゐたのはこの藤壺の女御である。

葵の上は、源氏の初元結からの妻である。源氏には四歳の年長であり、葵の上自身はそれを恥ぢてはゐたが、さういふことは夫婦愛の上に大した問題ではなかつた。結婚後十年を經て漸く一子夕霧を擧げ、やがてあへなく死に行くまで、嘗て夫を快く迎へたことなく、一度も笑顔を見せ

た例がない。たま〳〵いふ事とては「問はぬはつらきものにやあるらむ」などいふあてこすりばかりであつた。その犯し難い氣品と落付きと、どこか冷然と見える位に整つた容姿の美しさと、一分の隙も見せない態度の美しさ等は、深窓の中に世間を知らずに育つた上流の婦人によくある一の型ではあるが、そのあまりに端麗な人間味のない性格は、到底源氏に氣に入るべくもなかつた。まことに「繪に畫きたる物の姫君」の如き葵の上の態度は、源氏にとつてはこよなく物足らぬもの丶一つであつた。

紫の上は源氏がその生涯を通じて最も深く愛した女性であつた。葵の上も、女三の宮も、ある時期には歴とした源氏の北方であつたが、眞の意味で源氏の妻になり得た女性は紫の上であつた。紫の上は源氏の生命であり、魂を摑める生きた妻であつた。

紫の上は藤壺の女御の御兄式部卿宮の女である。母は宮の正室でなかつたので、紫の上は父君と共に住んだことはなかつた。母の死後は母方の祖母に育てられ、北山の某寺に祖母と共に籠つてゐた。その童女の頃に、源氏に見初められたのである。源氏は種々に手を盡して、辛うじて童女の紫の上を二條院に迎へ入れることが出來た。それは永久に自分のものにはなりさうにも見えない藤壺の代りでもあり、そして又幼い頃から自分の好みに合ふやうに教育しようといふ計畫で

もあつた。さうしてまだ十七八の源氏は、紫の上の父とも母とも師とも友ともなつて、その成長を見守り乍ら、思ふがまゝの養育をしたのである。この計畫は紫の上のすぐれた素質と、源氏の教育的才能によつていみじくも完成された。源氏の一言一行は盡く紫の上に反映し、源氏のすぐれた知識才藝は、餘すところなく紫の上に植ゑつけられた。その容貌風姿は「春の曙の霞の間よりおもしろき樺櫻のさき亂れたる」を見るやうな匂はしさで、その人となりは、所謂「かど〳〵しう、らう〳〵じう」(幻卷) 無邪氣で柔和で、しかもその中に自らなる氣品も備つてゐた。全身の愛を源氏に捧げ、且努めて自己を謙虚に保ち、他人をいつも理解しようとし、同情し愛しようとし、決して源氏の行動を束縛せず、寧ろ自分の愛を讓り分けて、源氏の他の愛人達にも自由の時を許してやりたい寛容な心にならうともし、明石の上の生んだ姫を手許に引取つて、自分の子として養育し、又その母君とも仲よく融け合ひ親しまうとし、或は義理を辨じて女三の宮を見舞はせに自分から源氏を勸めて出してすらやつたりする一面には、「怨ずべき事をば見知れるさまに仄めかし、恨むべからむ節をも憎からずかすめ」などして、源氏の浮氣を柔かに封じるといふ風であつた。されば源氏も、「樣々なる人の有樣を見集め給ふまゝに、取り集め足らひたる事は誠に類あらじ」(若菜下卷)「など萬づの事ありとも、又人をば並べてみるべきぞ」(若菜上卷) と、眞實

思ひ入つてゐたのである。又、「すべて何事につけても、もどかしくたど〳〵しき事まじらず、有難き人の御有樣なれば」(若菜下卷)、いとかく具しぬる人は、世に久しからぬ例もあなるを」と、源氏も心密に憂懼する程の完全な――殆ど人間以上の――人間として寫してある。

古來、紫の上を以て「源氏物語」作者の理想を如實に描き示さうとして創出した女性と目せられてゐる。それは誤ではなからう。「源氏物語」の一名を「紫の物語」と呼ばれるのも(更級日記)これが爲である。公任卿が「若紫やさぶらふ」と戯語したのも(日記)紫の上の生ひ立ちに關聯して作者に呼びかけたのである。其作者藤式部の女房名が紫式部と變つたのも、この物語の主人公たる紫の上の名に基因するといふ「河海抄」の說も恐らく正しいであらう。要するに紫の上は紫式部がかくありたいと願つてゐる理想の女性を描いたものである。

源氏の君のすき心は、蓬生の中に閉ぢこめられてゐる末摘花をも見過ぐす事は出來なかつた。居丈の高く小背長なその姿は、まづ源氏の心をはつとさせたのであるが、更に驚かしたのは御鼻である。普賢菩薩の乘物も思ひ出される程あさましく高くのびらかな、而も先の方は垂れて色づいてゐるといふ珍らしい鼻、數へたてれば醜い事だらけのその容貌はまだしも、家の掟から身のもてなし、振舞心構へに至るまで、一切萬事が鄙びて古めかしく、歌をよみかけられては、むむ

とロごもるだけで、漸くひねり出した苦吟も、只「からごろも」の五文字に縋はれた同じ趣味の歌ばかりである。源氏は苦笑しながらも、自分ならぬ人は片時も見てゐる事は出來まいと、我ながらわが心長さに驚歎しながらも何時迄も眼をかけてやつた。その接觸の動機は好奇心と空想とがその大部分を占めてゐたのであるが、幻滅の哀愁をそゞろに感じた後は、却つて憐憫の情に轉化して、須磨から歸つてからも、化物屋敷のやうな蓬生の宿を通りすがりに思ひ出して訪れた以後は、遂に引とつて扶持してやつたのである。

「宇治十帖」は、宇治八宮の姫君、大君、中君、浮舟といふ美しく淸らかな三人の姫君達が、匂宮、薫君といふ才色兼備の貴公子の思慕の對象となられて、夢み、喜び、悲しまれた、惱ましくもはかなき靑春圖譜である。その三人の中で、最も悲しい宿命に生きねばならなかつたのが浮舟である。

源氏の息薫君は、亡き戀人宇治の大君を慕ふ餘り、今は友匂宮の妻となつてゐる中君にしきりに思を寄せたが、中君はそれに對して、姉君によく似てゐる異腹の妹の話をした。四月の末、薫君は所用あつて宇治を訪ねた。そこで中將の君腹の姫君――浮舟の姿を垣間見たが、それは宇治の大君にそつくりであつた。薫君の胸は、どうして今迄この様な人を知らなかつたのかと、戀慕

の想に燃えた。その後浮舟の母中將は、中君に浮舟のことを頼んでゐる所に、薫君も來合せ、その立派な姿を見て、萬事を中君に托した。或日匂宮は西の對に見馴れぬ姫がゐるのを怪しみ、その部屋に忍んで心を打あけたが、浮舟は中君の事を思つて胸をいためた。その後、薫君は思ひ通り、浮舟を宇治の御堂の近くに住まはせて、幸福な日を送るやうになつたが、一方匂宮も、かの夜ほのかに見た浮舟のことを忘れなかつた。匂宮は浮舟が今は薫のものとなつてゐることを知ると、遂に一夜薫に裝うて女に近づき、一夜の契を交してしまつた。この事があつてから、浮舟の女心は、俄に我と責められ、悶えはじめねばならなかつた。薫君の淋しいまめやかさに見馴れたのに比べて、戀の相手には、はでに快活な宮が珍しく、そして一段と美しくて、女の心をとるにも手慣れた樣子に、知らず／＼惹きつけられる心、今まで賴もしく世話してくれてゐる、鷹揚でまじめで親切な薫君への恩と義理と情愛と、もしかひよつとこの過失を知られでもしたらといふ恐しさ恥しさ、それから姉の中君へ對しての氣兼ね、罪深さ、しかし弱い意志の、しかも自分からもあだつぽいうき／＼した心持のないではない彼女は、匂宮の愛も嬉しく、亦薫の君の情も捨てがたく、心二つを身一つに定め兼ねて、空しく惱み苦しむのであつた。その惱みのはては、進退極つて遂に死を決するやうになつた。或朝宇治の山莊では浮舟がゐないので大騒ぎとなり、浮

紫式部
（尾形光琳筆）

清少納言（香爐峰）
（上村松園筆）

舟のこの頃の煩悶の事情を知る人々は、遺された品々によつて、泣く〳〵葬儀を行つた。しかし浮舟は死んではゐなかつたのである。投身しようとして、森蔭でうち倒れてゐた彼女は、横川の僧都にたすけられて連れ歸られたが、宿命の恐しさに戰く彼女は、遂に無理に願つて尼になつてしまつた。この事はいつか薫の耳には入つた。驚き且喜んだ薫は、浮舟の弟小君を使に浮舟の下にやつた。しかし今は總てを諦め、罪深い身を法の世に住み通さうと願ふ浮舟は、燃ゆる思慕の心を押へて、「お人違ひでございませう。」とすげなく歸すのであつた。千萬無量の思ひを涙にのみこんで――。風にもまるゝ川柳のそれにも似た浮舟のはかない運命はその後どうなつたであらうか。戀路をつなぐ「夢の浮橋」はそれで杜絕えてゐる。薫の君の物惱しき動搖のうちに、五十四帖の大幕は靜かに下されてゐるのである。

第五章　淸少納言と枕草子

一　淸　少　納　言

閱歷

清少納言は清原元輔の女である。この清原家は天武天皇より出た名門で、彼の「日本紀」の撰者として有名な舍人親王は、その始祖にあらせられる。親王から四代目通雄の時に始めて清原の姓を賜はり、三十六歌仙の一人にして「古今集」の撰者の深養父は、實にその孫にあたる。この深養父の孫が卽ち清少納言の父元輔であつて、天曆中には和歌所寄人となり、「萬葉集」に訓點をつけ、「後撰和歌集」を撰び、村上天皇天曆五年には所謂梨壺の五人の一人に列し、天元中從五位上に進み、寬和二年肥後守に任ぜられ、正曆元年六月八十三歲の高齡を以て卒去したのである。その高齡にあやからんとして、當時出産のあつた貴族の家庭では、元輔に詠歌を請うてその長久を祝うたとの事である。

たらちねも皆ながらへて住吉の二葉の松の千代をこそ見め

田鶴の子の雲井に遊ぶ齡こそ空に知らるゝものにはありけれ

はその祝歌の一つである。その他「百人一首」に、

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　深養父

ちぎりきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波こさじとは　元輔

の歌の載せられてあるのは、人のよく知る處である。

淸少納言の事蹟については、その本名を始めとして生歿の年月日等一切不詳である。又その幼少の頃の事蹟も甚だ明かでない。「女房作者部類」六に「淸少納言七歲にして手をよく書き、十三歲にして令義解を講じ、廿歲にして歌人の間となれり。」とあるが、盡くこれを信じ得ないにしても、若年の頃よりすでに才智にすぐれ、その銳鋒を現してゐたことが知られる。又「枕草子」にある「まかりぬるもよし」の逸話も、彼女の才能を物語るに充分である。

それは彼女が二十歲前後の或日の事であつた。小石川に八講があつて、彼女も說敎を聽聞に參つてゐたが、中途所用があつて歸らうとした時、花山中納言が「まかりぬるもよし」と呼びかけたのを、彼女は「さ言ふ君も五千人の中には入らせ給はぬ樣もあらじ。」と答へたといふことである。これは或日釋尊が說敎し給ふに、五千人の聽衆一時に法座を退きたるも、如來は之を制し給はず、「退くも亦佳矣」と仰せられたといふことが、法華經方便品の中にあるので、中納言はこれをとつて「まかりぬるもよし」と言つたのである。それに對して淸少は「君も五千人中の一人ならずや。」と應酬したので、彼女の博識にして當意卽妙の機才は、既にこの頃から現れ、秀才兒の名は早くより知られてゐたものと思はれる。

淸少納言がどうして宮仕をするやうになつたかは明かでないが、多分深養父、元輔等の歌の方の

交友關係から、時の權門の中の關白家にその才學を知られ、その上父元輔死後の女ばかりの淋しい生活が同情を惹いて、中の關白家から進めた中宮の光を添へる爲めに、引かれて宮中に入つたものであらうといはれてゐる。史によると、一條帝の正暦元年、帝十一歳にあらせられる年の正月に、藤原道隆の女定子の方が十五歳にして入内せられた。而して二月には女御となり、十月に中宮とならせられた。この年の五月に道隆が關白となり、同じくこの年に淸少納言の父元輔が八十三歳で歿くなつてゐる。而して淸少納言の初宮仕が翌々正暦三年頃――天皇十三歳、中宮十七歳の年であつたらしいのを合せて考へると、恐らく關白道隆が、父を喪つた遺孤の才女を救ひ上げ、同時に之を利用して、我が娘の中宮に光を添へ、かねて我が家に重みを加へようとして彼女を擧げたのであらう。草子の中の記事によれば、宮仕をはじめた頃は、「身のほど年にはあはすかたはらいたし」ともいひ、「わかゝらん人はたさもえかくまじきことのさまにや」といふ反省もあり、「いとさだすぎふるぶるしき人の」といふ氣おくれもあつた。これらによつて察するに、既に三十歳近くにもなつてゐたかと想像されるのである。なほその初の頃のことを、草子の中に自ら次のやうに記してゐる。

宮にはじめて參りたる頃、物の恥かしきこと數知らず、淚も落ちぬべければ、夜々參りて三尺の御几帳の

後にさぶらふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手も得差し出だすまじうわりなし。是はとあり、彼はかゝり。」など宣はするに、高杯にまゐりたるおほとの油なれば、髮のすぢなども、なかなか晝よりは顯證に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたき頃なれば、さし出ださせ給へる御手のわづかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、限りなくめでたしと、見知らぬさとび心ちには、いかゞは、かゝる人こそ、世におはしけれと、驚かるゝまでぞまもり參らする。曉にはとくなど急がるゝ。葛城の神もしばし。」など仰せらるゝを、いかで筋かひても御覽ぜられむとて臥したれば、御格子もまゐらず。女官參りて「これはなたせ給へ。」といふを、女房聞きてはなつを「待て」など仰せらるれば「おりまほしうなりぬらむ。さばはや、」とて「夜さりはとく、」と仰せらる。

後になつて、男まさりの氣性を發揮して、男を男とも思はないやうな振舞をした淸少納言も、宮仕の初にはこんな初心なつゝましやかな所があつたのである。宮仕の數年以前に、「五千人の中には」の名言を吐いて朝紳を驚かした才媛にも、九重の雲深いあたりは、流石にいひ知れぬ一種の神祕的威嚴を感ぜずには居られなかつたことであらう。從つて、主殿司や女官でも、半神半人のやうな氣がして、「いかばかりなる人」(二段、白馬の頃)と、嘗てその果報を羨んでゐたが、こんな別天地に、現在自分が奉仕することとなつては、かねて覺悟の前ではあるが、見るもの聞く

もの觸れるもの、一々尖り切つた神經を刺戟して「物の羞しき事數知らず」と感激に涙もこぼれて來るのであつたらう。しかしこの羞恥屋（はにかみや）も間もなく宮中生活に馴れて、やがて宮廷の男女を片端から翻弄する皮肉屋となつたのである。そしてその間始終これを御し、これを懷け、これを養つて、同心同味の友に作り上げられたのは中宮であつた。淸少納言も亦宮仕の初以來、常に變ることなく中宮に盡し、同時に中の關白家に盡した。彼女が才氣に任せて高貴の公卿殿上人を翻弄する間にも、中の關白一家に對しては、常に謹愼恭敬の態度を取つてゐたやうに見える。

淸少納言は草子の中で、鶯といふ鳥がよく下民の草屋の庭などで鳴くくせに、內裏の御苑で鳴かないのがにくらしい。私が宮仕の十年間に、曾つて一度も御苑にその聲のするのを聞いたことがないと言つてゐる所を見ると、彼女の宮仕は凡そ前後十年に亙つたのであらう。而して長保二年の十二月に皇后がかくれさせられた頃迄宮中にゐた事が「榮華物語」に出てゐる所を見ると、彼女の宮中生活は凡そのところ、正曆三年前後から、長保二三年の頃に及んだものと見て大差がなからうと思はれる。この十年の間に、中の關白一家、從つて中宮の御身の上に驚くべき浮沈があつた。勿論淸少の宮仕の初の頃は、中宮一家には榮耀の日々が續いてゐた。

――とある春の一日、盛りの櫻の大枝があをき瓶に活けられて、淸涼殿の高欄のもとにこぼれ

咲いてゐた。お書時、上の御局には天皇皇后さし並び給ひ、皇后の御兄大納言伊周公が祗候なされてゐた。その御有様は「たゞ何事もなく、よろづに目出度きを、侍ふ人もおもふことなき心地する」のであつた。時に伊周公は、

月も日もかはり行けどもひさにふるみむろの山のとこ宮所（新刻撰集）

といふ古歌をゆるやかに吟じ出された。清少は感歎のあまりに、「げにぞ千とせもあらまほしげなる御ありさまなるや」と考へられた。そこへ天皇の仰言で、彼女に硯をおすらせになつた。そして白紙を賜ふと、御側の女房達に、今すぐと覺えてゐる古歌を一つ二つ書けとて、お書かせになつた。彼女は思ひ出すまゝに、

年ふればよはひは老いぬしかはあれど

「花をし見れば物思ひもなし」といふのを、丁度折にあはせて、

君をし見れば物思ひもなし

と記し奉つたのである——。

然るに、長德元年（天皇十七歲、中宮二十歲）に關白道隆が薨去した。これに續いて同族の間に、暫く勢力爭の暗鬪があつて、やがて道隆の弟の道長が關白となり、これと同時に道長方、所

謂御堂關白家の勢力が隆々として上つて來た。これを見て道隆の子の伊周、隆家が勢力を挽回しようとあせる中に、先帝に對する不敬事件が突發し、それが因となつて、やがて兄弟共に都を追はれて配流の身となつた。その原因については、誤つて花山法皇の從者に弓を引いたといふ事もある。呪咀をしたといふかどもある。しかし何處迄が事實であるか誰に分らう。要するに力と力との爭で、力の强い者が弱い者を負かしたといふに過ぎない。

ともあれ、かくの如くにして、中宮は變り果てた生家の有樣に絕望して、手づから御鋏もて尼となられたのである。その後長德二年（中宮二十一歲）に、中宮が皇女（修子内親王）を產ませられた御悅びの爲に、伊周、隆家の兄弟が許されて都に召し還され、又長保元年（中宮二十四歲）に一宮敦康親王を產ませられてから、帝の中宮に對する御待遇が一段厚くなつたが、その間にも道長方の壓迫が段々加つて來て、悲しい事が年と共に多くなり、殊に長保元年に道長の女彰子（上東門院）の方が十二歲で入内されてからは、一層世を狹く感ぜられるやうになつた。その中に彰子の方が中宮となると同時に、中宮が皇后とならせられ、同じ年の十二月十五日に第二皇女媄子内親王を產ませられたが、翌日遂に歸らぬ人とならせられた。

夜もすがら契りしことを忘れずは戀ひむ淚の色ぞゆかしき

知る人もなき別路に今はとて心細くも急ぎ立つかな

烟とも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれと眺めよ

などいふ淋しい怨めしげな歌を御帳の紐に結びつけなどして――。

この榮枯十年の間、清少納言は常に變ることなく中宮に仕へた。たまには御堂關白家に內通してゐるといふ噂など立てられて、里邸に遠慮したこともあつたが、中宮の優しい機轉の利いた招請は、やがて彼女を宮中に呼び戻し、彼女をして更に深く中宮に傾倒せしめたのである。

當時中宮の左右には、宰相の君、中納言の君等新時代の教育を受けた名家の才媛も多かつたけれど、眞に中宮の話相手となるのは、清少納言を措いて他にはなかつた。彼女は中宮の絕對の信任と愛顧とを專らにし、彼女も亦中宮の人となりを深く崇敬し、十年榮枯を共にし、互に知り合ひ信じ合ひ、慰め合ひ樂しみ合うて、變らない知遇の生活が續けられたのである。

中宮は道隆を父とし、高內侍を母とせられたが、その素質には母方の血を多くうけた。內侍の父成忠は、博學高才を以て當時雷名をとゞろかした人であり、長兄積善は詩人として、又「本朝麗藻集」の撰者として世に聞え、次兄清昭は歌人として有名であり、內侍自身も亦學識豐富で、その上能文達筆の才女であつた。かゝる素質をうけつぎ、その家庭に教育をうけた中宮は、和漢

の學によく通ぜられ、才學に於ては清少の如き悍馬をもよく御する資格を有せられ、その上美しい容色と、心の寛い物優しい德とを具へられてゐた。吾々は「枕草子」の中に、人間の心の隅々までも見渡しつゝ、微笑みながらそれを見守つてゐるやうな、心の寛い、賢い、敏感な、そして心優しい中宮の御姿を屢々見出すのである。中宮は清少のすぐれた才能と、臨機應變の心にくいばかりの機智と、さつぱりした性格とをこの上もなく愛され、相識る十年、その間常に齢を忘れ、地位を忘れて、君臣とか主從とかいふ堅苦しい隔を取り去つて、よく自分を知る親しい友として、互に交つたのである。二人の君臣は、やがて朋友であり、姉妹であり、同時に愛人であつたのである。

かく知遇をうけた皇后が、不遇のうちに世を空しくせられた後は、鬱々として里に籠り、敢へて他に出仕しようとしなかつた。「扶桑拾葉集作者系圖」に「清少納言初仕皇后定子後爲上東門院侍女云々」とあり、塚本「枕草子」の奥書に、「深養父孫元輔の御娘にて、上東門院に供せしとぞ云々」とあつて、上東門院にも仕へたやうにも見えるが、これは誤であらうといふのが、今日の定說となつてゐる。而して皇后崩粧後の少納言の動靜については一切不明であるが、「古事談」に、清少納言が零落の後、尼となつて住んでゐた所、若い殿上人どもが通りかゝつて、「清少納言もひ

どく落ちぶれたぢやないか。」といふと、鬼女のやうな面相の清少納言が、簾をかきあげて、「駿馬の骨を買つた人のあることを知らぬか。」と罵つたといふ說話が殘されてゐる。「無名草子」に「はかばかしきよすがなどもなかりけるにや、めのとの子なりける者にぐして、はるかなる田舍にまかりて云々」とある。「はるかなる」とあるのは、加藤元位の說のやうに、文の修飾で、やはり京近いといふ意味であらうといはれてゐる。「續千載集」に、

老の後こもりゐて侍りけるを、人の尋ねまうで來りければ

とふ人にありとはえこそいひ出でねわれやはわれとおどろかれつゝ

とあり、「新古今集」に「元輔がむかし住みける家のかたはらに、淸少納言が住みけるころ云々」とあるのは、やはり皇后崩御後のことであらうから、これによつて考へると、晩年は出家して都近い處に住んでゐたらしい。

その歿した處については、一說に讃岐象頭山の鐘樓の傍に古墳があるともいはれ、又近江にあるとも、阿波國撫養郡に五輪の塔があるともいはれてゐる。この外恐らく各地に淸少納言の遺蹟といふものがあるには違ひないが、歿した場所は、その年月と共に、今もつてはつきり分らないのである。

人　物

清少納言は才學機智共にすぐれた博覽强記の婦人であつたことは、「枕草子」を見る誰もが驚歎する處である。彼女は「史記」「漢書」「蒙求」「文選」「白氏文集」等當時舶來の支那の文學書は、悉く之を讀破してゐたらしい。草子の中には、或は于定國の故事を引き、或は孟嘗君の故事を含ませ、或は九品蓮臺云々と法華經の詞を用ひ、或は香爐峯の雪、廬山の夜雨等漢籍の故事詞章を自由に驅使し、その當意卽妙、機智縱橫にして臨機應變の妥當なるは、誠に彼女が稀に見る才女であつたことを思はせるに充分である。又彼女が少納言と稱せられた源俊賢、藤原公任、同行成、同齊信等を始めとして、當時の著名なる貴紳と交り、堂々として縱橫の奇才を發揮した事は、「枕草子」の至る所に見えてゐる處であるが、「悅目抄」「公任集」「實方朝臣集」「和泉式部集」「赤染衞集」等にも、その交友の歌が數多く載せられてある。

かやうに彼女は、和漢の學に通じた才氣煥發の才媛であつたが、一面に勝氣な强情な性格を持ち、自恃の念に富んだ女であつた。從つて自己を中心とする記述には、學才を衒ふ自讃が多く、又人事や事物の觀察には機智のひらめきがあり、奇警な着眼があるが、生昌や方弘のやうな無才愚直の人を揶揄嘲笑するやうな驕慢な點があつた。然しその半面には、屢々幼兒の可憐な動作に心を索かれ、犬猫のやうな弱い者には同情を寄せる程の女らしい感情もあつたのである。「とくゆ

かしきもの」の中に、

人の子產みたる、男、女、疾く聞かまほし。よき人はさらなり。えせもの、下種の分際だにきかまほし。

といふのがある。子供が生れたのを、男か女か早く聞きたいといふのは、極く單純な好奇心的興味を含んだ一般の人間的な情であり、

いかならむと夢を見て、恐ろしと胸つぶるゝに、ことにもあらずと合せなどしたるいとうれし。

恐しい何だか氣になつて爲樣のない夢を見て心配してゐると、なあにそれは何でもないと誰かゞ夢合せをしてくれると、まあよかつたと胸を撫でおろすといふなども、まことに幼い單純な女性の心理である。

「淸少納言は何等の深い惱みも持たなかつた。たゞ男まさりの理窟屋で、裏もなく表もない、見たまゝの單純な性格の持主であつた。」といふやうな批評を屢々聞く。又同情のない辛辣な批評家であるといひ、又好んで人の缺點弱點を擧げて嘲笑する皮肉屋であるといふのは、楯の兩面を觀る用意を缺いた見方といふべきであらう。本來彼女は虛榮好きの氣取屋ではあるが、又一面單純卒直で、無邪氣な正直者であつたやうにも思はれる。まづい歌を無理に作つては負け嫌ひの氣性を遺憾なく發揮するやうな所もあり、興に乘つては無遠慮に人の惡口を言つて、人に譏つたと

同じ缺點が自分にあるのも意に介しないやうな點もあつたが、決して憎むべき人ではなく、腹の底からの皮肉屋でなく、又奥底のある人ではなかつたやうに思はれる。むしろ趣味の高い、わかりのよい氣のおけない稚氣滿々の正直者だつたかもしれない。しかし克己復禮の道德屋ではなかつたのだ。いはゞ餘りに單純卒直で、苦勞のし足りないといふ譏はまぬかれない人であつた。それ故、思つたことを思つた通り述べるが、たゞ述べるだけで、前後の矛盾撞着などには殆んど介意しなかつたのである。よく引かれる文であるが、紫式部はその日記の中に、

清少納言こそ、したり顔にいみじうし侍りける人、さばかり賢しだち、眞字書きちらして侍るほども、よく見ればまだいと堪へぬこと多かり……云々

と批評してゐる。即ち清少納言こそは、高慢ちきな氣取つた顏をしてゐる人である。女相應の假名書きでなく、上手を振りまはして漢字を書きちらす小面憎さ、しかもよく〳〵見ると、どうもやはりまづい所がかなりあるといふのである。しかし、これは和泉式部などに下した批評と合せて考へると、やはり式部の女らしい嫉妬心の雜つた競爭意識から出た評語であらうと思はれる。たゞこゝに注意すべきは、清少は明るい朗かな人ではあつたが、決して暖い人ではなかつたといふことである。自分から大きな博い愛に環境を抱擁して行くといふ人ではなかつた。例へば、

一かたはらいたきもの」として、「旅立ちたる所にて、下衆どものざれかはしたる」と共に「憎げなる乳兒をおのれが心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみ遊ばし、これが聲の眞似にて言ひける事など語りたる」と數へた如きを見ると、彼女がいかに子を愛する母の心や態度に對する同情すら缺いてゐたかゞ分る。これはその子が憎げであり、その母が賤しかつた故に、美を求めめづるに專らな心に、同感する事が出來なかつたであらうが、こゝにも清少の性格の冷たさの一面が現れてゐるやうに思はれる。しかしながら、かくの如き冷徹は、彼女をして單なる享樂家ともならしめず、又戀愛の如きに於てさへ、我を忘れてそれに溺れることなからしめ、又一切の感傷からも超越せしめた。彼女はあくまでも自己の奥深く、理智の明珠を藏して曇らされず、また動かされなかつた。

然るに、「源氏物語」を通して考へられる紫式部は、女らしい女である。すべてが智的であるといふよりは情的である。思ふに式部はあらゆる事象に對して無限の同情を持ち、豐かなそして穩かな感情を抱いてゐたに相違ない。それ故我々がかの物語を讀んで先づ感ずるのは、作者の內容に對する好惡批判といふ點でなく、作に同化される一種の柔かい溫かい氣分であり、優美哀愁の情緒である。卽ち卷をひらけば、そこに現れるものはさながらの御堂殿時代、宮廷を中心とした

華かなしかも淋しい貴族の情趣生活が、豐けくも靜かに人生に見入つてゐる作者の胸臆の淨かな美しい涙にとけこんだまゝ、或は繪卷となつて表れ、或は詩となつて流れてゐる。

然るに、「枕草子」に見えてゐる世界は、全然これと反對の傾向を持つてゐる。草子に於て作者の感興を動かした主題の性質の多くは、深い人生の觀照から來たものでもなく、又深い學問の研鑽から出たものでもない。いはゞ一つの「機智」によつてキヤツチされ、且生かされた人生の片鱗、又は學問の斷片である。これらは決して反省と思索との中からにじみ出たものでなく、むしろ非常に動き易く敏活な才氣によつて掴まれたものである。この動き易い才氣は、彼女をして靜かな落ちついた思索に沈潛することを許さなかつた。ぢつと靜かにうつり行く世相を凝視し、その中に詩を見出し、生の意義を發見することを許さなかつた。それ故、彼女は多くの女流が物語にゆき、歌にゆき、日記にゆくのを冷かに見やつて、彼女獨自の世界——隨筆に赴いたのである。

「枕草子」にも歌はある。しかしこれを十年の宮中生活の歌と見ると、如何にもそれは貧しい。それに又その歌は、全部挨拶贈答の歌である。作歌慾を起して、獨り靜かに詠んだ歌は一首もない。多くは才氣と口拍子とで作つたもので、感情で歌つたものは一首もない。「世にあふ坂の關はゆるさじ」の雞の虚音は著名だが、それは頓才と學問との融合で出來たものである。

二　枕草子

著作の年代及動機

「枕草子」の出來た年月については、草子の最後の一節に、左中將源經房卿がまだ伊勢守と言はれた時に、自分の家を訪ねられた事がある。その折にこの筆すさみを見つけ出し、持つて歸つて久しくして返された。それから、この草子が流布されたのであるといふ事が書いてある。經房が伊勢守になつたのは、長德元年(淸少が宮仕してより四五年目)であるが、この草子の中には長德三四年、卽ち皇后崩殂後二三年の事が書いてあるので、この草子は多分長德元年の少し前、正曆の末頃から長保の三四年に至る八九年の間に出來たものであらうといふことになつてゐる。長保三年は紫式部が夫を失つた年で、それから三四年の間に「源氏物語」を書いたといふことであるから、丁度淸少納言が「枕草子」を書き上げた時分に、紫式部が「源氏物語」を書き始めたのであらう。國文學を飾る二大雄篇が、十年前後の間に相接して出來たのは、誠に面白いことである。

「枕草子」の名の起りは、これもこの草子の最後の一節の記事によつたのであるといふ。或時中宮の御兄の內大臣伊周公が、中宮に御冊子を獻上された。淸少は一種の趣味狂で、殊に紙好き、

筆好き、手習好きであつた。腹が立つてむしやくしやして生きてゐたくもない、どうでもなれといふやうな時でも、綺麗な紙や良い筆を手に入れると、すぐに氣が變つて、「やつぱり生きて居てよかつた。」と思ふといふ女である。中宮はそれを知つて仰せられたのであらう。「これに何を書かまし。」と仰しやると、淸少は「枕にこそはし侍らめ。」と答へた。「枕のやうに身を離さず、座右に控へて、思ひ出を書く備忘帳に致しませう。」といふ意味である。そこで中宮は「さば得よ。」とその冊子を淸少に賜つた。喜んだ淸少は「目に見え心に思ふ事を、人やは見むとするとて、つれ〴〵なる里居のほど」に書きあつめたといふのである。勿論この名は筆者が自ら命じたのではない。古くは「淸少納言記」とも、「淸少納言枕草子」とも呼ばれたのである。

內　容　「枕草子」は、淸少納言が宮仕してゐた時に、見聞した人事、又は自然の風光、或は感興追憶などを、筆に任せて錯雜混淆して一篇とした隨筆である。しかし見樣によつては、主觀的な日記に對する客觀的傾向を帶びた日記と見ることも出來る。尤もその記述は年月を追つたものでなく、思ひ出したまゝに記したので、執筆の年代も一樣ではないが、內容によつて判斷すれば、大部分は筆者が約十年の宮仕の間に記し、又宮廷を退いた後にも宮中生活を回想して書きついたものであると思はれる。中には宮廷奉仕以前の記事も雜つてゐるが、記

事の最も多いのは長德年間である。

全體は凡そ三百餘段の長短樣々の章段から成つてゐるが、その過半數を占めてゐるのは「ものはづくし」である。「ものはづくし」には、「山は」「海は」「家は」のやうに、單に物の名を列擧したものと、「すさまじきもの」「心ゆくもの」「うつくしきもの」のやうに、折に觸れて心に浮んだ事象を、類別的に列記したものとあるが、量に於てこの草子の三分の一を占めてゐるのみならず、その鋭敏なる觀察、犀利なる用筆は、その奇警なる批評と相俟つて、眞にこの草子を代表する文字といふべきである。その他年中行事や家庭生活に關するものもあり、貴族社會や文學者間の物語もあり、過去の追憶や現在の功名話もあるが、何れも天稟の主觀力と鑑賞眼とを以て、觀察批評を試みてゐるのである。唯その觀察が、感覺的に事物の外面を撫でるに留つて、內省に入らず、洞察に及んでゐないから、事物を描いてその眞實に滲透しない憾みがあるが、その官能は實に群を拔いて潑溂清新である。

而してこの鋭敏なる感覺は、色彩、光線、音の觀察に異常にデリケートで、而も鋭い特色を發揮してゐる。この感覺の中でも、色彩に對する官能が特に秀でゝゐるやうである。これは時代人に共通してゐたところのものであるが、その中でも清少納言は、やはり獨自の境地を持つた色彩

鑑賞家であつた。草木でも、人物でも、之を描寫するのに先づ、そして最も細かに眼につくのは、その花葉の色、着物の色合であつたやうである。一例を引けば、「扇の骨は」とあるところに、「あを色は赤き、紫はみどり」と言つてゐるなどは、いかにも色の配合に關する的確な考を示してゐる。扇（蝙蝠扇）の青い地紙には赤い色の骨が似合はしく、紫の地紙には綠の色の骨がふさはしいといふのであつて、巧に對照美の骨髓を道破してゐる。さういふ色彩の好みは左の短い文章の上にも表現せられてゐる。

指貫は、紫の濃き、萠黃、夏は二藍、いと暑きころ夏虫の色したるは凉しげなり。狩衣は、香染の薄き、白きふくさ、赤色。（下略）單衣は、白き、日の裝束の紅の單衣、袖などかりそめに着たるはよし（下略）下襲は、冬はつゝじ、かいねりかさね。夏は二藍、しらがさね。女のうは着は、薄色、葡萄染（下略）色紙は、白き、紫、赤き（下略）火桶は、赤色、青色（下略）

その他自然美に於ける色彩の觀察として、卷頭に春の曙を叙して「やう〳〵しろくなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」といひ、暮色を記して「入りはてぬる山ぎはに光のなほとまりて、明う見ゆるに、薄黃ばみたる雲のたなびきたる」といひ、秋の野の寂しさを叙して、「秋の野のおしなべたるをかしさは薄こそあれ、穗さきの蘇枋にいと濃きが、朝

霧にぬれてうち靡きたるばかりの物やはある」といひ、梨の花について「花びらのはしに、をかしき匂ひこそ心もとなくつきためれ」と幻のやうなはかない色彩をも敏感に捕へてゐるのである。なほ自然と人事との調和した情景として、「雪高く降りて今もなほ降るに、五位も四位も色うるはしう若やかなるが……紫の指貫も雪にはえて、濃さまさりたるを着て、あこめの紅ならずはおどろ〳〵しき山吹を出してからかさをさしたる」美しさを描いてゐる。

次に自然の光線に對する描寫であるが、「三月三日はうら〳〵とのどかに照りたる」「うら〳〵とのどかなる日のけしきなどいみじうをかしきに」等うら〳〵と照りたる日光を叙して、駘蕩たる春色を描いてゐるものもあるが、清少の最も得意とする處は、月の光である。清少は作中に「すべて月影は如何なる所にてもあはれなり。」と述懷してゐるが、「有明の月のありつゝもとうちいひさしてのぞきたる髮のかしらにもより來ず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月の光」「夜ふけて月のまどよりもりたりしに、人の臥したりしどもが、衣の上に白うてうつりなどしたりしこそ、いみじうあはれとおぼえしか。さやうなる折ぞ人歌よむかし。」等は實に月光の描寫として出色のものである。なほ光線の描寫として「おほとなぶらはまゐらで、長すびつにいと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいと艶やかに見え、御簾の帽額のあげたる鈎のきはやかなる

も、けざやかに見ゆ。」といふ精緻な筆つきはどうであらうか。

又音に關するセンスも鋭敏であつた。「冬の夜いみじう寒きに、おもふ人とうづもれ臥して聞くに、鐘の音の、たゞものゝ底なるやうに聞ゆるいとをかし。」「物のうしろ障子などへだてゝ聞くにおものまゐるほどにや、箸匙など取りまぜてなりたるをかし。」「夜いたく更けて……人々皆寢ぬる後、外の方に殿上人などに物いふ、奥に碁石の笥に入るゝ音あまたゝび聞ゆる、いと心にくし。」更に音よりも一層かぼそいね「かたはらにいとよく鳴る琵琶のをかしげなるがあるを、物語のひま〳〵に、ねもたてず爪彈きにかき鳴らしたるこそをかしけれ。」に至つては、最もよく清少の特色を發揮したるものといへよう。

文　章

「枕草子」の文學的價値の一半は、又その文章にある。その記述の中には「雪の山」や「積善寺の供養」のやうに數千語を連ねたものもあるが、概ね短篇であつて、中には數語又は一二行で盡きてゐるものもある。或は簡勁に、或は纖細に、題材に從つて變化するのはいふ迄もないが、主として暗示的印象的の筆法を用ひて、含蓄に富み餘韻を籠め、よく人の肺腑に徹する力を具へてゐる。而してその簡潔なるものも、一句にしてよく複雜なる情趣を描破したところが多く、例へば「月は有明、東の山の端に細う出づるほどあはれなり。」といふ

如きで、その簡潔の極に達したものは、「檜扇は、無紋、唐繪」といふやうに、たゞ名詞が擧げられてゐるばかりである。又稍長い敍事文を見ると、秩序が整然としてゐて冗漫がなく、巧みに省略法を用ひて、簡勁にして流麗である。

なほ着眼の警拔なことは、例へば「あてなるもの」に「うつくしき兒の覆盆子くひたる」を擧げ、「きよしと見ゆるもの」に「水を物に入るゝ透影」を擧げ「うつくしきもの」に「二つばかりなる兒の、急ぎ這ひ來る道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる」を擧げ、「むつかしげなるもの」に「猫の耳の內」を擧げてゐる如きである。

第六章　紫式部と淸少納言の比較

さて以上の如く、「源氏物語」と「枕草子」とは、我が國女流文學中の最大傑作、國文學中の双璧ともいふべきものである。從つてその作者たる紫式部と淸少納言とは、多くの女流文學者中にあつて、明星の如くに輝いてゐる。もし紫式部を明の明星に譬へるなら、淸少納言は宵の明星に

譬へようか。同じく明星でも、明と宵との違ひのある如く、式部と淸少とは、同じ時代に生れ、同じ朝廷に仕へながら、性質から物の觀方、著作の內容から文章の調子に至る迄、盡く正反對な相違をなしてゐる。

紫式部がやさしく愼み深く、圓滿冷靜に、その上夫に對しても貞淑溫雅、まことに女らしい女といはれるのに對し、淸少納言はその性質熱し易く感じ易く、才氣縱横、明朗活潑にして多分に男性的傾向を持つてゐる。それ故式部が人をたて己を抑へ、溢るゝばかりの才學を深く藏して、外に現さうとしないのに對し、淸少は好んで自己の學識を外に現し、才能を誇らうとし、或時は男をやりこめて得々としてゐたこともある。

從つてその著す所の作も著しく異つてゐる。「源氏物語」が主尾一貫した物語に、優美婉曲の筆を用ひ、人生の祕奧人情の機微を描き、讀者をして深く人の世のあはれを感ぜしめる一篇の物語詩を形づくつてゐるに對し、「枕草子」は何等の組織もなく、隨筆風な斷片的短文の中に、簡潔明快な文章を以て、宮廷生活に於ける己の見聞感想、自然美の眞髓などを精細緻密に寫し出して、流るゝ如き文章の美しさはないが、簡明な筆致はよくその情景をとらへ、銳敏な觀察はよく物の核心をつかみ、時には寸鐵よく人の胸を射すが如き銳い趣を持つてゐる。一は堂々たる長篇の大小

說、一は小册の短篇隨筆集、量に於ては「枕草子」は「源氏物語」の七八分の一に過ぎないが、「枕草子」の價値はその質にある。「源氏物語」が滿々と湛へてその大を誇る湖水であるならば、「枕草子」は淸冽掬すべき溪流である。壓し迫るが如き雄大さは無くとも、彼になき芳醇快適な香味がある。「枕草子」を以て、左右なく「源氏物語」の上に置かんことは躊躇されることではあるが、然もこれを以てかれに劣つてゐるものと斷定する事は出來ない。かれとこれとは、それぞれに特色を持つた不朽の生命ある雙美の傑作といふべきであらう。

第七章　日記文學と女性

物語文學と並んで、平安朝文學の一要素をなすものは日記文學である。しかも日記文學の作者は概ね女性であつて、こゝにも平安女性の活躍を眺めることが出來る。日記の魁である「土佐日記」の作者は紀貫之であるが、その後に出た「蜻蛉日記」を始めとして、「和泉式部日記」「紫式部日記」「更級日記」「成尋阿闍梨母集」「讃岐典侍日記」等は、皆女性の手になつたものである。これら女性によつて作られた日記文學が、實に平安文學の一つの大きな特色をなしてゐるのであるが、

何故かく多數の日記がこの時代に作られたのであらうか。それを說く前に、日記が全盛を極めたと見てよい平安時代の中期後期といふ時代が如何なる時代であつたかを考へなければならない。

平安遷都以來次第に生長して來た藤原氏を中心とする文化が、道長の時に至つてその頂點に達した時には、已にこの藤原氏に代るべき新しい勢力を持つもの——武士が地方に確乎たる地盤を持つてゐた。それにもかゝはらず、形だけ整つて內容のくづれはじめた藤原氏を中心とする人々は、新しい飛躍もなし得ず、なしくづしに無聊な不安な日を送らねばならなかつた。人々は飽滿しきつた現實に滿足することも出來なかつたが、さりとて明日への出發を新にするといふ事も勿論出來なかつた。そこに爲すこともなき倦怠を如何にもてあましたかは、想像以上のものがあつたらうと思はれる。殊に後宮の女性を中心とする嫉妬と陰謀の宮廷生活には、年中行事と遊戲と社交とより外には何物もなかつた。すべては概念の形骸で、何等新しい精神の顯現はみとめられない。ブルジョア文化はかくして次第に爛熟し、腐敗し、人心を統率する權威を失ひ、大いなる倦怠を招くのであるが、その混亂の半ばに於て、全一なる魂の原鄕に復歸せんとする詩的憧憬が生れて來た。

この自然的精神の萌芽は、先づ第一に後宮天才の間に認められる。一は我に沈潛し、我を內省

批判する哲學的思索の態度であり、二は形式的因襲的文化に對し、自我の解放を求める憧憬的、浪漫的態度である。前者は諸家の日記隨筆をもつて代表せられ、後者は式部集に於ける和泉式部の抒情的、戀愛的生活であり、「源氏物語」に於ける紫式部の理想生活であり、「更級日記」に於ける孝標女の夢幻的美化の生活である。これらはいづれも崩壞の半ばにある舊文化を包む不活潑な姑息に堪へないで、より新しい戀愛、より新しい規範、より新しい原理を求める焦慮と苦惱の所產である。かくして平安朝宮廷女流日記文學は生れたのであるが、吾々はこれらの日記を通して平安女性の內面生活に端的に躍り込むことが出來るのである。

即ち「和泉式部日記」に於ては、熱烈奔放な戀愛生活を見ることが出來る。そこには女性に於ける情熱と、媚と、純眞と、可憐と、娼婦的なるものとが大膽に告白されてゐる。

「蜻蛉日記」には妻としての生活を中心とした女性生活を見る事が出來る。この日記の著者は、家庭に於ける愛の破綻の苦惱を率直に告白し、女性に於ける嫉妬と、執拗と、母性的なるものとの一面を勇敢に表現してゐる。そこには處女から妻へ、妻から母へとうつり行く女性のいたましい懊惱の叫びがある。

又「紫式部日記」には夫を失つた寡婦の寂寥を感ずる事が出來るし、「更級日記」に於ては、夢

多き少女の時代から、妻となり夫に別れる迄の約四十年の長い女性生活を見る事が出來る。そこには腐敗と倦怠の生活に堪へられないで、積極的に夢幻に生きようとし、生活を美化し、魔化しようとする神秘的、象徴的傾向が見える。

更に「成尋阿闍梨母集」は、八十歳の老母が、入宋する我が子を思慕する涙の記録であつて、そこには熱烈なる母性愛を感得することが出來るのである。

今それらの一つ一つについて簡單な解說を試み乍ら、平安女性の辿つた內面生活の跡を考察してみよう。

蜻蛉日記

「蜻蛉日記」三卷は藤原倫寧の女の著である。倫寧の女は、藤原兼家の妻となつて、右大將道綱を生んだ人であるが、その名は傳つてゐない。系圖によると、冬嗣の流を汲む家柄であり、兄弟には四納言の一人で有名な歌人い長能がある。「尊卑分脈」に「本朝第一美人三人也」と記してゐるのは俗說であるが、才色兼備の貞淑な婦人であつた事は、此の日記の記事によつても明かである。又當時世に知られた歌人であつた事は、「枕草子」にもこの作者の歌をあげて賞揚し、「大鏡」卷五太政大臣兼家の條にも、

この母君きはめたる和歌の上手におはしければ、この殿の通はせ給ひけるほどのこと歌など書きあつめ

て、かげらうの日記と名づけて世にひろめ給へり。

と云つてゐる。又淸輔の「袋草紙」卷三には、郭公の秀歌五首也として、貫之、公忠、兼盛、實方等の歌と共に、道綱母の歌をあげてゐるし、勅撰集にも隨分多くこの人の歌がをさめられてゐる。

日記は、主として夫兼家との間の家庭生活を記したもので、天曆八年兼家が二十六歲の頃通ひはじめてから、道綱を生み、天延二年兼家が四十六歲になる頃までの二十一年間の記錄である。

平安時代の結婚生活は、夫が妻の許に通ふため、一旦契が結ばれてからは、女の立場といふものは、非常に受動的な賴りないものになつてしまふのであつた。たとへ夫の足が遠のいても、積極的にそれを自分の方へ向けることは難しかつた。一夫多妻であつた當時では、權門の出である妻に愛が集つて、勢力のない家の出である妻は、夫の離れ行くのを常に悲しむのであつた。兼家にも多くの妻があつた。殊に仲正の女の腹には道隆、道兼、道長等の子を得て勢力があつたが、倫寧の女であるこの日記の著者には、道綱があつたのみで勢力もなかつた。その上、兼家は快活な信仰などのない人物であり、從つて感情に粗い所があるのに反して、道綱の母はあくまでも、眞面目な、沈み勝な信仰深いといふ性格で、その性格の相違からも夫婦の愛は薄くなつて行つた

と思はれる。さうした方面から生れる家庭生活の淋しさと惱みが、主としてこの日記に書かれてゐる。而も彼女は貞淑なつゝましやかな性格の上に、佛教に對する信仰心も深かつたため、その日記はしめやかな眞率な氣分があふれてゐる。

なほこの日記の題名は、

「かく年月はつもれども、思ふやうにもあらぬ身を嘆けば、聲あらたなるもよろこばしからず。なほものはかなきを思へば、あるかなきかの心地する。蜻蛉の日記といふべし。」

とあるにもとづいてゐる。

〔梗概〕　夢のやうな戀愛が深まつて、彼等の結婚の成立したのは天暦八年の秋の頃である。結婚した最初の生活は、至極平和な幸福なものであつた。ところが、結婚後間もなく、彼女の父は遠く陸奥國に赴任することになつたので、彼女はそれについて小さい胸を痛めた。といふのは、兼家と接近してまだ間もない頃の事であるから、何日秋の扇のやうに忘れ捨てられるかもしれないと心を痛めたのである。幸ひ心配した程のこともなく、父が陸奥へ出かけてからも、兼家は始終彼女の許へ通ひ、熱い心を示してくれた。ほつと小さい胸をなで下したが、時々訪ねて來ることが遠のくと「もう捨てられるのではなからうか、飽かれたのではなからうか。」と淋しく思ふことさへあつた。

その年も明けて彼女が妊娠すると、兼家は限りなく喜んで、色々と親切に世話をしてくれた。やがて健かな男子が生れた。それが道綱である。この目出度い出來事によつて、彼女は一時明い氣持になり、喜びに浸つたが、その幸福な時も束の間、兼家の訪れて來る足は間もなく杜絶えがちになり、昔ほどの愛情を示さなくなつた。

それは九月の頃のある日のことである。兼家の出たあと、何心なく箱の中を手まさぐりにあけて見ると、そこに思ひがけなく見出されたのは、兼家が他の女のもとに送らうとしてかくして置いたらしい懸想文である。その時の失望と、驚きと、嫉妬とは、彼女の全生涯に亙る深刻な惱みのいたましい誕生であつた。

十月晦のことである。三夜ばかりひきつゞいて兼家の見えない時があつた。純な女性にあり勝ちな無邪氣な嫉妬は、男の秘密をあばき出さないではすまされなくなる。そつと人をつけてさぐらせて見ると、男はある町の小路のかくし女の所に泊つたといふ。それから二三日ばかりの後に、曉方になつてしきりに門をたゝくものがある。さうだなと思ひながら、若い女性らしい嫉妬と片意地とから、彼女はどうしても門をあけようとしないので、兼家はやむを得ず歸つて行くのであるが、女は片意地の後の寂寥に堪へかねて、

歎きつゝひとりぬる夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る

といふ哀訴の怨言を送らないではゐられなかつた。かうして兼家の心は、次第に彼女から離れて行くのであつたが、時には彼女の家の前を通り乍らも立寄らぬこともあつた。「こんなことなら、いつそ綺麗に別れ

てしまひたい。」と悶え乍らも、自分から進んで兼家と別れる心持にはまだなれなかつた。

それにつけても、彼女にとつて一番力となつたのは一子道綱であつた。その愛らしい樣子を見ると、いつも慰められ、力づけられた。次第に四つ五つになつて、內裏交りが出來るのを見るにつけ、有力な後援者が欲しいと、子煩惱な心には胸一ぱいになる折も多かつた。

その頃彼女の母が世を去つたので、ひどく力を落し、しばらく山寺に籠つて子の道綱と一緒に暮した。さうなると、兼家は又彼女を懷しみ、山寺へ屢々訪ねて來たけれど、少しのいさかひがあつてからまた來なくなつたりした。

一喜一憂のうちに月日は早くも流れて、道綱は十五歲になつた。その頃彼女はとかく病氣勝ちで、世をはかなみ尼とならうとまで思つたけれども、子の愛にひかされてそれも出來なかつた。が、心細さや不安は容易に去らず、「私の亡き後もどうぞ道綱を可愛がつて下さい。」といふ手紙を書き、それを淚のうちにそつと唐櫃の底に入れたりした。その中に道綱は十六歲となつて元服した。淋しさの中にも大きな喜びであつた。それにしても道綱の將來を深く考へると、彼女は又憂鬱になり、その上兼家の心持が始終變るので、心細い日を重ねてゐた。二月の間兼家が來ないので今はとあきらめて、偏に佛の御手にすがり精進を續けてゐた。その時兼家から手紙が來て、「ひどく御無沙汰をしてゐるので一度訪ねたい。」といふ旨が書いてあつたけれども、彼女は佛にお仕へしてゐる最中だからといつて來訪を斷つた。そして一時、西山の鳴瀧の

邊にある寺に籠ることにした。もう兼家に見捨てられたのも同じやうな生活を續けてゐるのに堪へられなくなり、一切世の中からかけ離れたら、せめて少しは平靜な心を保てようと思つたからである。

初夏の山寺は青葉に包まれて、見る目もすがすがしい快い眺めであつた。しかし、憂持つ身には先立つものは涙である。夫兼家と共に訪れた樂しい昔の記憶が胸によみがへつては、心は悲しみに痛むのであつた。やつと身を起して初夜の勤をしてゐると、夜遲く大門の方が急に騷しく、木の間に灯がちらちら見える。兼家が訪ねて來たのである。兼家は彼女に向ひ、都に歸ることをしきりにすゝめた。けれども彼女の決心は固かつた。「どんなことがあつても都へは歸りません。」と思ひつめ、「折角ですが、どうぞこれだけはお許し下さい。」と詫びた。兼家はなほ強く歸京をすゝめたが、道綱のことなどを考へると、都に歸る氣にはなれなかつた。兼家は仕方なく山寺を去ることにして車に乘つた。その音が次第に遠ざかつて行くのを聞くと、彼女はたまらなくなつて泣きくづれるのだつた。

山寺に籠つて佛に仕へてゐるうちに、京の叔母や、任國から歸つた父などが訪ねて來た。兼家も亦時々山寺へ車を寄せて、根氣よく都へ歸ることをすゝめた。女心のさすがに弱く、人々の情を思ふと何時迄も山寺にゐたくないが、また都では、彼女はもう尼になつてしまつたと噂をしてゐることをほのかに聞き、歸るにも歸れないやうな氣がした。唯道綱が山寺へ來てから、次第に元氣なくなつて瘦せて行く姿を見ると、愛兒のためには、やはり都がよいと思ひ、それに出世をするには、山寺に籠つてゐると萬事不都合の

多いことも知らぬではない。しかし歸つてよい事もあれば、惡い事もある。退いてよいのか進んでよいのか、ひとりそれを定めかねてひどく心が亂れた。しかし浮世の絆にひかされて一度は都に歸つたが、思はしいことがなく、すべて失望に近く終つたといふので筆を擱いてゐる。

以上のやうに「蜻蛉日記」は貞淑溫良な一女性——道綱の母の、愛と憎しみ、惱みと嫉妬の二十一年間の多難な家庭生活の記錄である。戀愛に失敗し、結婚に破れた彼女は、愛、にくしみ、嫉妬、怨恨、焦燥、反抗など、樣々の心の苦しみを體驗するのであるが、つひには超人間的な實在の力に賴らうとして、なほそこに安住することを得ず、最後に一子道綱に對する母性愛に目覺めて、長く續いた胸中の苦惱から脫脚することが出來るのである。卽ち、彼女の半生の苦惱は、最後に「母性」なるものゝ發見によつて、はじめて「愛」に救はれるに至るのであるが、これは單に道綱の母一個人の體驗に止まらず、平安朝の女性の一生を具體的に物語つてくれてゐるやうな氣がするのである。否平安朝の女性のみに止まらず、それ以來今日に至る迄、この日記にあらはれてゐるやうな生活の經路を繰返してゐる女性が、如何に多いことであらうか。「蜻蛉日記」の惱みこそは、女性の永遠の惱みであるといふことも出來る。この意味に於て、「蜻蛉日記」は、今日の吾々にも、樣々の興味と暗示とを與へてくれる人生記錄であるといふことが出來る。

和泉式部日記

和泉式部の傳記は、平安朝の他の女流作家と同様に殆んど不明であつて、式部傳の研究は、考證に始り考證に終る有樣である。

式部は大江雅致の女であるといはれてゐる。雅致は正四位下木工頭越前守に迄至り、道長にその實力を認められた人である。母は冷泉院皇后昌子内親王の御乳母介内侍平保衡の女であると歌仙傳に見えてゐる。式部に「はらから」のあつたことは、その家集によつて知られる。それも二人以上あつたらしい。殊に妹の一人が赤染衛門の息の愛人であつたことは、赤染衛門集によつて明かである。

式部は童女時代及びそれ以後を、多くの受領階級の女の如く、母の仕へてゐる昌子の宮に過したらしい。昌子内親王は勅撰歌人であらせられたが、式部も亦その感化を受けて、早く歌人として名聲があり、加ふるに美貌の持主で、多くの男性の注視の的であつたことは、

わが宿の櫻は甲斐もなかりけり女主人(あるじ)がらこそ人も見に來れ

の歌によつてもよく知られる所である。

長じて和泉守橘道貞の妻となつて、一子小式部をあげた。式部が和泉と呼ばれるのもこのためである。

岩躑躅折りもてぞみる良人が着し紅染の衣に似たれば

の歌は、道貞が和泉に赴任した後、京に留つてゐて、良人戀しさの念に堪へずして詠んだものと言はれてゐるが、華麗な中に强い情熱のこめられた可憐な歌である。この歌は當時も隨分人口に膾炙したらしく、淸少納言も「折りもてぞみると詠まれたる流石にをかし」とその友の才を讃へてゐる。しかし夫の後を追つて和泉に下つたことは「後拾遺集」九旋に、

和泉へ下り侍りけるによる都鳥のほのかになきければよみ侍りける

こととはゞありのまにまに都鳥都のことを我に聞かせよ

とあるのによつて知られる。しかし田舍の生活は彼女にむかなかつたと見えて、再び誘惑多き都に歸つた。それから花山院や、藤原公任の家などの歌會に出席したりして日を送つてゐた。美貌で才藻のある式部の周圍には、異性が多かつたであらうが、やがて冷泉院の第三皇子彈正宮爲尊親王をお慕ひ申す仲となつた。

しかし、この宮は長保四年六月、疫病が天下に暴威を逞しくして物騷しい頃、終に瘍を發して薨ぜられた。

かひなくてさすがに絶えぬ命かな心を玉の緒にしようらねば

寢覺めする身を吹きとほす風の音を昔は袖のよそにきゝけむ

かうして式部は宮の薨去を心から悼んでゐる。彈正宮に死別して、式部は「夢よりもはかなき世の中を歎きつゝ明し暮し」(日記)こゝしばらく獨居の生活を續けてゐた。その獨居生活中にも、艶しい情事は絶えず、源雅通その他の人々とも關係があつたらしいことは、歌集の示すところである。やがて長保五年四月十日餘りの頃に至り、宮の同母弟太宰帥宮敦道親王と契が結ばるゝに至つた。その間の事情を記したものが「和泉式部日記」一卷である。

しかし式部と宮との仲は、式部が身分の賤しい女であり、放縱である爲、周圍の反對を受けねばならなかつた。宮は周圍への反抗と、源少將雅通や、治部卿俊賢その他式部に群るすき人から隔離してその愛を獨占しようとして、遂にその年の十二月十八日、式部をその宮に伴はれたので、正妃は止むを得ず、翌寛弘元年正月、御姉東宮妃娍子の宮の勸めに從ひ、兄弟に伴はれ、南院を出て小一條の祖母の許へかへられた。

道貞との關係は、この長保五年末頃は全く絶えてしまつたらしい。夫大江匡衡に從つて尾張に在國してゐた赤染衞門は、式部の親友として親ら書を寄せて式部を諫める所があつた。

みちさだ去りて後、帥の宮に參りぬと聞きて

うつろはで暫ししのだの森を見よかへりもぞするくずのうら風

これに對して式部は、

秋風はすごく吹くともくずの葉のうらみ顏には見えじとぞ思ふ

と答へてゐる。

しかし帥宮とのはかなき交りも長くは續かなかつた。寛弘四年十月二日、宮は薨ぜられた。宮の薨去は式部にとつては大きな精神的打擊であつた。藝術趣味も豐かで、その愛情も熱烈であつた親王に全心を捧げてゐた式部にとつては、その薨去を悼む思ひも亦痛切であつた。式部は思ひ亂れて、幾多の哀傷の歌を詠んでゐる。

すてはてむと思ふさへこそ悲しけれ君になれにし我が身と思へば

つれ〴〵と空ぞ見らるゝ思ふ人天降り來むものならなくに

鳴けや鳴け我が諸聲に呼子鳥呼ばゞ應へて歸り來ばかり

やがて一年の喪を過して、寛弘六年の葵祭にちかい頃、中宮彰子に出仕した。式部が藤原保昌に再嫁したのはそれから間もなくである。保昌は已にこの頃五十餘歲であつた。二人の結婚が如何にして成立したかは不明であるが、外部の强制、又は物質的好條件が作つた爲でもあらうか。

しかし一方では、式部も己の年齢を顧みる時、そゞろに淋しくなるので「誘ふ水」に引かれたのかもしれない。寛仁四年正月、保昌は丹後守となつた。式部が夫れに從つて任國丹後に下つたことは、かの有名な大江山の歌の傳説によつてあまねく世に知られてゐる。丹後に下るに際し、上東門院よりは扇と歌とを餞別に賜り、道長からは「尼になりなむといひしは如何」とからかはれたが、式部は中宮に對しては「思ひ立つ空こそなけれ」とお答へ申し上げ、道長には、

あまぶねに乘りぞ煩らふ與謝の海に生ひやはすらむ君をみるめは

といらへた。

翌々年丹後より歸京して、上東門院には練糸を獻り、

白糸のくるほどまでに外にても戀に命をかけてへしなり

といふ歌を添へたのであつた。それから間もなく、萬壽二年十一月、小式部内侍が左兵衞の子を産んで歿した。小式部の死は母式部にとつては、彈正宮、帥宮の死以上の大打撃であつたらうと思はれる。式部が悲歎にくれた樣は次の歌によつて想像される。

内侍のうせたるころ雪のふりてきてきえぬれば

などて君むなしき空に消えにけむあは雪にだもふればふる世に

つねにもたりし手ばこをおたぎに誦經にせさすとてかきつくる

こひわぶときくにだにきけ鐘の音にうち忘らるゝ時の間ぞなき（以上式部集）

小式部なくなりてよみ侍りける

あひにあひて物思ふ春はかひもなし花も霞も目にしたたねば（玉葉集）

小式部内侍うせて後、上東門院より年ごろ賜はりけるきぬをなき跡にも遣したりけるに、小式部内侍

とかきつけられたるを見てよめる

もろともに苔の下には朽ちずして埋もれぬ名をみるぞかなしき（金葉集）

以上の歌を見ると、式部母子の愛情がいかに濃かであつたかゞ知られる。今は亡き小式部が形見の衣、手箱などを見ては、母式部は眞に斷腸の思ひがあつたことであらう。なほ小式部が殘した若君達をしのんで、

とゞめおきてたれをあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけり

とうたつた心中を察すれば、そゞろに涙を禁じ得ない。「小式部は親の自分とその子とを留おいて遠く逝つてしまつたのであるが、その留めた人の中で誰をあはれと思ふのであらうか。自分は子の事であるから小式部を思ふのであるが、小式部は自分の子であるから、又その子を思ふので

あらう。すなはち小式部は自分の子の方を親の自分よりもあはれと思ふであらう。まことに子を思ふ心は、親を思ふ心よりも勝つてゐるのである。自分には小式部ほど深く思はれるものはない。」といふ複雜な心理を詠み出して、亡き式部を悼む痛切な心を歌つたのである。「子はまさるらむ」と推測し了つて、反轉して自己の所懷を突如として述べたところに、嘆きもあり、涙もあり、しかも力がある。

小式部の死以後は式部の晩年時代である。晩年の事を知るべき何らの確かな資料とてもない。唯晩年の傳説については、出家説と遊行説との二つがあるが、そのいづれを取るべきかといふに、恐らく出家説をとるべきであらう。晩年出家して清少納言と交友の厚かつたことは和泉式部集に見えてゐる。そして長元年間に七十位で歿したであらうといはれてゐる。

『和泉式部日記』は一名を「和泉式部物語」と呼ばれてゐる。その內容はその日その日の事を記し留めたのでなく、筆者自らが第三人稱で記した感情生活の記述であるから、一名を物語の名で呼ばれたのである。併し、文章よりも寧ろ和歌を主としてゐる點から言へば、歌日記といひ得るのである。

この第三人稱で書かれてゐるといふことは、作者が和泉式部であるか否かの疑の種ともなつて

ゐる。しかしこれが式部の作であらうと推定される理由について、池田龜鑑氏は次の如く述べてゐる。「先づ日記の中に引かれた歌が、式部自身の歌であることが明瞭であること、次に第三人稱で書いてはあるが、自叙的のもので、和歌をもとにして後人が小說的構想のもとに書いたものとは思はれないこと、第三に文章も古雅で、決して平安朝以後のものとは思はれないこと等である。」と。反證のあがらない限り、和泉式部の作と推定してよからうと思ふ。

この日記に記す所は、長保五年四月十日あまり、帥宮敦道親王が和泉式部の家を訪はれて、和歌の贈答のある所から筆を起し、寛弘四年一月の頃、式部が親王の家に至るあたりまで二ケ年に亙ることが書かれてゐる。

長保四年六月、式部は彈正宮爲尊親王に先立たれて、夢よりもはかない世の中を歎きわびつゝ何すとなく一年は過ぎて、また四月十日ばかりとなつた。植込の樹々も暗欝に生ひ繁つてゆく。緣先をながめてゐると、築土の上の草のみどりであるのも、他人はそれほど目にとめないのを、式部はとりわけ哀れにながめて、そこはかとない深い物思ひにふけつてゐる時、近い透垣のもとに人のけはひがするので、誰かしらと思ふうちに、つと出て來たのを見ると故宮に仕へてゐた小舍人童であつた。過ぎ去つた昔がなつかしくいろ〳〵訊ねてみると、宮の薨去後山寺などにあるき

まはつてゐたが、今は御弟宮の敦道親王にお仕へしてゐるといふ。さうして今日は親王から式部への橘の花の枝を托されて來たのであつた。式部はつまらないことだと思つたが、宮の好意も默しがたく、

かをる香をよそふるよりはほとゝぎす聞かばや同じ聲やしたると

といふ歌を書いて持たしてやつた。さうしてこの歌が緣になつて、終に帥宮と式部との間は結ばれた。宮は二十三のお若い、ひたぶるな心で式部を愛せられ、物議を憚らず、その年の十二月十八日南院にお迎へになつた。それは式部には源少將雅通や、治部卿俊賢その他すきごとする人多いときかれ、その愛を獨占しようとなさつての企であつた。そこで正妃は止むを得ず翌年正月、御姉東宮妃綏子の勸めに從ひ、兄弟に伴はれ、南院を出て小一條の祖母の許に歸られた。式部の南院入りは式部にとつて決して好ましい事ではなく、世を遁れて「巖の中」にも住みたいのであるが、唯「宿世（すくせ）」に任せたものであつたと自ら言つてゐる。

以上のやうに「和泉式部日記」は、長保五年四月十日あまりに、宮から橘の枝を賜つたことに筆を起し、寬仁五年正月式部が南院に迎へられる頃に終つてゐる。文章は時に優艷の趣がないでもないが、概ね率直に眞情を表現したものである。しかしこの日記の見るべき所は、文章にあら

ずして、その和歌にあるのである。熱情的な作者が、現實的生活の中に美的情趣を求めた心境は窺はれるけれども、その頽廢的な愛慾生活は、いかに男女關係が寛大な時代であつたといへ、世の非難をうけるのも當然と思はれる。しかし、それだけに又、眞實の人生にふれてゐる點もあるのである。

紫式部日記

「紫式部日記」は紫式部が夫宣孝に死別して後、上東門院に仕へてゐた頃の日記であるが、その內容は二つの部分から成立してゐる。その第一は純粹な日記文であり、その第二は消息文である。消息文の混入については、はじめ「紫女手簡」の著者木村架空氏によつて論證せられたが、後「紫式部日記精解」の著者關根正直博士によつて、更に考證確定せられ、今はも早や疑ふべき餘地の存しないところであらう。卽ち關根博士は「紫式部日記精解」の總說の中に、中根香亭翁が著者に語つた說として、「寛弘六年正月三日の次に、同輩宮人を評し、自己の所懐を漏せる數節は、必ず式部より他人に送りたる消息文なるべし。元來この日記は數十卷ありけむを、式部その中より數節を抄出し、別に彼の消息文を添へて他に寄せたるものならむ。」といふ說を引き、更に木村架空氏がその編著「紫女手簡」中に、中根翁の此の意見に基づいて、この日記は抄錄でなく脫漏であつて、消息文は式部がその女に與へたものであるとする

說を揭げた後、次の如き意見を述べて居られる。

そもそも此の書抄錄か脫漏か。按ふに日記の名あれども、日次を逐うて錄し行きたるものならず。或は當時に筆とりたるもあり、後日に追記したる所もありし短篇零册に過ぎざるべし。元來數十卷を重ねたるものならば、今少しは殘れる部分も、他書に引用せられたる文句などもあるべきに、聊もさることなきにて察すべし。彼の消息文はた別に寫し傳へたるものゝ、日記の中にさしはさまれたる儘に、彼處ここに轉傳し、いつしか本文と共に寫しとられて、一つに綴られたるものと見ゆ。

この考察の正否はもとより速斷は出來ないが、少くとも原本が今の通りのものでなかつたことは想像に難くない。かなりひどい散佚があつたであらうことは想像が出來るのである。

次にその內容について見るに、日記の部分は、寬弘五年七月、秋の土御門殿の情趣に筆を起し、當時の道長邸の樣を記し、次に中宮御産の模樣、御産後の儀式等について述べ、更に交友のこと、道長のこと、五節その他の公事の事など記し、翌六年正月の御戴餅のこと、翌七年正月の公事節會、三宮御五十日の御祝の事などが細かに記されてゐる。所謂消息の部分は、同僚宮女を批評し、齋宮の中將、和泉式部、赤染衞門、淸少納言、左衞門內侍等に及び、處世又は藝術の諸問題について、教訓を述べたものである。

以上のやうに、この日記には、當時に於ける公事節會の模樣、服裝調度などが、精到な觀察によつて記述されてゐるので、文明史、風俗史、或は有職故實等を研究する者には好資料を提供してゐるのであるが、彼女は單に客觀的にこれら宮廷生活を觀察するばかりでなく、それに對する主觀を敍してゐるので、全篇に一種いふべからざる人生そのものゝ哀愁が漂つてゐるのである。卽ち、この日記によつて味はれる所は、夫を失つた女性の人生に對する寂寥である。夫に死別れてから間もなくの日記であるためもあらうが、こゝに現れた式部は、過去に於ける夫の愛の中に生きて居つたやうに思はれる。華かな宮廷生活の間にあつて、靜かに過去の家庭生活を思ひやり、何となく哀愁にひたつてゐたやうな式部の姿がよく表れてゐる。

次に人物評論についてみるに、その忌憚なき批評は容姿性格才藝にまで及んで居るのであつて、多くの女房の面目がありありと想像せられる。併し和泉式部、江侍從、淸少納言などの文才に對して加へた批評と、自己に關する記述とを對比する時には、筆者の性情も亦讀者の眼前に躍如たるものがあるのである。歌人として令名ある和泉式部を評しては、「はづかしげの歌よみやとは覺え侍らず」と難じ、或は才學を以て著れた淸少納言を論じては、「したり顔にいみじう侍りける人」などと罵つてゐると同時に、交友に對する自己の態度を表明して、

「心にまかせつべき事をさへ、わが仕ふ人の目に憚り、心につゝむ。まして、人の中にまじりては、いはまほしきことも侍れど、いでやとおぼえ、心うまじき人には、いひてやくなかるべし。物もどきうちし、われはと思へる人の前にては、うるさければ、ものいふことも物憂く侍る。」

「をのこだに、ざえがりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみ侍るめるよと、やうやう人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに、書きわたして侍らず。」

「かゝること（ざえがるとの評）聞き侍りしかば、いかに人も傳へきゝてにくむらむと、はづかしさに、御屏風のかみにかきたることをだに、讀まぬがほをし侍りし。」

などゝ言つてゐる。是等の言を以て、一部の評者の如く、悉く冷酷陰險なる虚僞的性格の發露とのみ言ふは餘りに早計の論と思ふのである。何となれば、是等の言を載せてゐる個處が、子女へ の私信とも見らるべき疑のあることである。若し果して子女への內訓であるとすれば、自己の周圍同輩に對して忌憚なき觀察批評を試み、以て子女の處世上の教訓となさしむるが如きは、公開を豫想せざる私信に於ては、往々にしてあり得る事で、聖賢に非ざる限り、かゝる事を取り上げて手ひどく非難するにも當らないと思ふ。要するにこの日記は、紫式部の閲歷、言行、性格等の研究資料として極めて貴重なる文獻である。

文章は元より洗煉推敲を極めて、「源氏物語」には比すべきものではないが、自然と人事の融合した敍事にはすぐれた所がある。

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿の有樣いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつゝ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲にあはれまさりけり。

開卷第一、秋の土御門殿の情趣を述べた一節であるが、自然に對する作者の愛が、如何に深く朗かに澄みきつてゐるかを示す美しい一節である。

「和泉式部日記」「紫式部日記」にやゝ遲れて「更級日記」がある。著者は菅原孝標の女である。

更級日記

系圖によれば、彼女の父方は菅原道眞の系統で、代々學者の家であり、兄定義の如きも大學頭文章博士となつた人であるなど、父方には學問に秀でた人が多かつた。又母方を見るに、母の兄弟の中には、右大將道綱の母は「蜻蛉日記」の作者であり、長能は「拾遺集」以下の作者であるなど、歌才文才を以て聞えた人々が多かつた。かくの如く、彼女はその天分に於て、又その環境に於て、文學的には極めて惠まれた運命におかれたのである。

この孝標の女は、極めて溫順な、常に處女のやうな心を以て、憧れを抱いて居つた女性と思はれる。彼女の父孝標が上總介となつて任に赴く時、伴はれて上總に下り、こゝに四年の春秋を送つた。靜かな田舍の朝夕、母や姉の聞かせる物語に耳傾けた彼の女は、幼くして既に夢見ることの多い少女であつた。寛仁四年の九月、十三の歳、都に歸る父と共に東を後にしたのであるが、この日記はその時分から筆を起してゐる。幼き彼女が憧れに充たされて、富士山を眺め、京に接し、而もその夢と憧れとが一つ一つ破れて行く心持が、つゝましく描かれてゐる。東路をのぼる道々、或はまのの長の昔の跡の門柱を河中に見て、人の世の榮枯盛衰を嘆き、武藏野の原の竹芝寺の故事を聞き、在五中將の「いざ言問はむ」と詠じて都をなつかしんだあすだ川を渡り、唐土が原に大和撫子の咲き殘つてゐるのを見て打興じ、足柄山に遊女の歌を聞き、富士の山の煙を眺めつゝ、田子の浦を船で渡り、富士川のほとりで里人の奇しき物語を聞き、濱名の橋、八橋、鳴海潟、墨俣、野上など打過ぎて、雪降り荒れまどふ程に不破の關、厚見の山を物の興もなくて打越え、近江の國の息長といふ人の家に滯在すること四五日、時雨霰の降る中を漸く粟津にたどりつき、師走二日夕暮方京に入り、一條院の皇女修子內親王の御所なる三條の宮の西の邊に落着いた。「更級日記」の一段はこの旅日記を以て終るのである。後、人に勸められて、關白賴通の高倉

殿なる祐子内親王の許に宮仕したこともあり、三十を過ぎて橘俊通の妻となつて、仲俊といふ子を儲けたが、五十一才にして夫に死別れてゐる。日記はその頃で終つてゐるが、恐らく夫に死別れた後、憂愁と寂寥とのなかに、靜かに過去の自己を顧み、なつかしい追憶をその筆端にたどつたものであらう。謂はば告白小說、乃至心境小說とも稱すべきものである。

彼女の周圍を見ると、父孝標は官吏として順調でなく、とかく不遇の中に世を終つたやうである。その上實母は先妻であつたのであるが、離別されて、上總へ行く時は繼母と共にあつた。然るにこの繼母も都へ歸つて間もなく離緣されて、又以前の實母と共に住むやうになつた。かやうに父母の關係は圓滿でなく、その影にいつも薄暗い氣分が流れてゐた。彼女は父母から盲目的な愛を受けたが、嗾い理解には缺けてゐたやうに思はれる。宮仕もしたが、自分を一日も側から離したくない古風な不遇な父の爲に、それも數ケ月で退いてゐる。彼女の結婚生活も亦幸福でなかつたやうである。

かやうにこの著者の生活は、家庭的には不幸なものであつたが、このまゝならぬ生活の苦しみの中から、その文學的素質は一層磨かれ、光を放つて行つたのである。そして彼女はかうした不遇な現實生活を送つて居り乍らも、心は常に苦しい現實の生活から遁れて、よりよき世界に憧れ

てゐた。この憧れの心は、先づ物語の世界への思慕となり、物語の世界から更に宗教の世界へと進んでゐる。

彼女は田舍にあつて、物語を讀まうとして、藥師佛を作つて、早く都に上らせて物語を讀むことの出來るやうにと祈願してゐる。

あづまぢの道のはてよりも、なほ奥かたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものゝあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなるひるま、よひゐなどに、姉まゝはゝなどのやうの人々の、その物語、かの物語、ひかる源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど、わが思ふまゝに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に藥師佛を作りて、手をあらひなどして、人まにみそかに入りつゝ、「京にとくあげ給ひて、物語の多く候なる、あるかぎり見せ給へ」と身をすてゝ祈り申す。

このやうな物語への憧れは、やがて京に上つて、田舍の叔母の土産として「源氏物語」を手にするや、晝はひねもす夜はよもすがら讀み耽り、后の位も何にかはせんと、唯物語の世界に入ることのみを樂しみにしてゐた。そして、物語の中の「浮舟」を愛し喜び、「浮舟」のやうな境遇に我が身を置きたいと憧れてゐた。

物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一度びにても通はし來りて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花紅葉月雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを、時々まち見などこそせめ。

かうして自らを物語の主人公になぞらへ、少女らしい可憐な空想を以つて自らを包み、獨りむやみに悅に入つて微笑むことがあつた。又、

われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちも限りなくよく、髮もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顏、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめ。

と、美しい、そしてはかない希望にひたり、己が胸に問ひ且答へて、限りなき喜びにひたるので、あつた。

ところが宮仕をするやうになり、物語の中に描かれてゐる美しい生活を實際に生活するやうになり、美しく想像してゐた生活と違つて、樣々のはかない醜い現實の出來事にいくつも出合ふやうになると、憧れの心も次第に消え失せて行くのである。

光る源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは。薰大將の宇治にかくしすゑ給ふべきもなき世なり。あなものぐるほし。いかによくなかりける心なり。

かやうに、物語に憧れてそこに安住の境地を求めた可憐な少女は、月日立つにつれて次第に現實へと眼をさまして行くのであるが、そこに又生活の矛盾をしみじみと感じないではゐられなくなつた。つまり、現實は夢のやうに華かな美しいことばかりではなかつた。そこにはいくつもの幻滅の悲哀があつた。そしてその悲哀も、彼女の幻想が美しかつただけに、一層大きいものであつたであらうと思はれる。そしてその悲哀を味はつた心に甦つて來たものは、宗教の生活、信仰の生活であつた。そして最後には「昔からつまらない物語や、歌のことばかりに心をむけないで、夜晝佛の勤行をしたならば、こんな夢のやうなはかない世にも出合はなかつたであらう。」と言つてゐるやうに、物語の世界から離れて宗教の世界には入つてゐるのである。

そして、天喜三年十月十三日の夜の夢に、庭に阿彌陀佛の降られた夢を見て、迷へる心がはつきりした道に達したと思はれる。御佛は蓮華の座の上に立ち給ひ、金色に光り輝き、片手は擴げたやうで、今片方は印を作り給ひ、それが霧一重を隔てたやうで、誠に寂光淨土の莊嚴を呈してゐる。彼女は溫い慈悲の光に浴して、身も心も淨められ、疑なく佛の世界に導かれるやうに尊く思はれたのである。

かくて、苦しい現實の世界から文學の世界に憧れ、更に宗教的な信仰の世界には入つたのが、

著者の心境の展開であつたやうに思はれるが、「更級日記」が永久に吾々の魂をふるはせる強い魅力は、作中の至る所に見える、ある和かな憧れである。夢幻への思慕である。そして、そこから生れる女性らしい靜かなロマンチツクな情調であり、氣分である。

讃岐典侍日記

「更級日記」に次いで現れたのは「讃岐典侍日記」(二卷)である。作者を沖の石の讃岐(源頼政の女)とする說は時代が合はないから、藤原顯綱の女とする說に從ふべきである。顯綱は道綱の孫で、其の女なる筆者は、堀河天皇の御乳母を勤めた伊豫三位兼子で、後に典侍となり、天皇の崩御の後には鳥羽天皇に仕へ奉つた。(最近玉井幸助氏は作者を兼子の妹長子とする說を發表せられた。長子も堀河天皇に仕へ、後更に鳥羽天皇にも奉仕したのであつて、日記の內容と符合するのである。)

上卷は嘉承二年(一七六七)六月二十日頃から堀河天皇が御惱み遊ばされた事に筆を起し、七月十九日遂に崩御になるまで、作者が親しく御介抱申し上げた事をこま〲と記し奉つてゐる。御惱みの御痛はしい御樣子、作者の眞心、作者を賴みに思召された事、作者を勞らせ給ふ事、さては御加持御讀經の事、御髮悟の事、御讓位の事、御受戒の事、御臨終の事、上下慟哭の事、御神璽御寶劍渡御の事等を始め、院中にみなぎる不安の空氣が、自ら文面に躍如としてゐて、恐懼

に堪へない節が多い。下卷は十月再び鳥羽天皇に奉仕した事から筆を起し、十二月一日の御卽位、翌年十一月の大嘗會に至る迄、月を追うて奉仕の事を記し、新帝の御あどけなき御樣子と、折にふれて催される先帝御追慕の事で滿されてゐる。終は一旦文を閉ぢて、更に十月十餘日香隆寺に詣でた事を書き添へてゐる。

この日記の中心的存在は、一見作者であるやうに見えるが、實は堀河帝である。鳥羽帝に奉仕するやうになつてからも、鳥羽帝を通じて堀河帝の御事を記すといふやうになつてゐる。何かきつかけがあると、直ちにそれが先帝と結びついてしまふのである。或時、鳥羽帝のお相手をしてゐた時の事「抱いて障子の繪を見せて」と言はれたので、朝餉の障子の繪などを御覽に入れてゐる中に、夜の御寢の壁に先帝の御好みになつた笛の譜があつた。不圖昔を思ひ出して悲しく、つい淚が出て袖を顏におしあてた。それを帝が不思議相に御覽になるので、おしらせしまいと思つて何氣ない樣な樣子で欠伸して「まあこんな風に淚が出ました。」と申し上げると、「皆知つてゐるんだよ。」と仰せになるので、何といふことなしに悉くなつて、「どんな風に御存じなのですか。」と申し上げると「ほゝ文字のり文字（堀）の事を思ひ出したんだらう。」とおつしやつた。私が堀河帝の御事を思ひ出して泣いたのだとよく御存じになつてゐるのだと思ふとほゝゑまれた。と自分で書

いてゐる事ではあるが、これなどによつても、如何に堀河帝を忘れる事が出來なかつたかゞ分るのである。

全篇これ悲歎の記錄であると言つて差支へない。悲歎は上下萬民に共通の事であるが、たゞ作者に於ては「聲たてられぬ」程切なるものがあつたのである。それ故、作者の嚴肅なる感情は全篇に漲つて居り、深刻なる點については、他の日記類に見られないものがある。しかし、全體の記述がやゝ冗漫で、表現上の技巧にも物足らない點があり、文學的價値は他の日記類に比して劣つてゐると言はなければならない。

成尋阿闍梨母集

「成尋阿闍梨母集」は、成尋阿闍梨の母が書いた家集である。成尋阿闍梨の傳記も、その母の傳記もこの集以外に分つてゐる事は極めて僅かである。成尋阿闍梨は、姓は藤原氏といふだけで詳細は不明である。寬弘長和の頃生れ、密教を受け、延久四年渡宋し、天台に登り、五台に遊び、汴京に入り、太平興國寺の傳法院に館した。翌年大旱あり、神宗の勅を奉じて祈雨の密法を修し、大いに雨ふり、ために善慧大師の號を賜り、宋に於て寂した。母の傳記に關する事は、勅撰集にのつてゐる我子渡宋の別れを悲しむ歌があるばかりで、詳しい事は更に分つてゐない。

この集は「成尋阿闍梨母日記」ともいはれてゐるが、名前としては日記と稱する方が適當かと思はれる。但し、平安時代の女流日記は、或る事件が起つてから、數ケ月又は數年數十年の後に、往時を回想して書き記したものが多いが、この日記もその選にもれないものである。

內容は、延久年中阿闍梨が「唐に五台山といふ所に文殊のおはしましけるあとのゆかしく拜まほしく」思つて入宋し、後に殘つた母が年八十を過ぎて、吾が子に別れた悲歎を縷々と記したものである。

> たかきもいやしきも、はゝのこをおもふこゝろざしは、ちゝにはことなるものなり。はらのうちにて、みのくるしう、おきふしもやすうせねど、我身よくあらむとおぼえず、これを見るめよりはじめて、人よりよくてあれかしと思ひねんじて、うまるゝおりのくるしさもものやはおぼゆる。

げに子を思ふ母の心は、何時に變らぬ人間性の至情である。ましてかうして慈んだ我が子がすげなく老いたる自分を置いて渡宋の決意をして行つてしまつたのである。身は宗教に關係あるものといへ、如何なる母でもこれを悲しますには居られないであらう。老母の思慕の情は、やがて阿闍梨の入宋を恨めしくさへ思ふやうになり、入宋を思ひとまらせなかつたことを後悔し、はては身の老衰を歎じ、長命をうとましく思ひ、寧ろ死が願はしいことを縷々と述べ、釋迦傳や三河

入道の話を思うて我が身によそへ、西の空を眺めては心を痛め、折ふしの草木鳥蟲を眺めても、常に眼が涙でふさがることを述べてゐる。すべては年老いた母の、涙脆い感情で滿されてゐるが、母としての悲しい思慕の情を克明に描き、端的に母性愛を强調してゐる點は、この時代の作品としては注目すべき一つである。

第八章　女流歌人の群

宮廷を中心とする女流の文藝が、咲く花よりもうるはしく榮えた時代に、なつかしい作家、美しい作品は夜空の星のやうに輝いてゐるが、和歌の方面に於ても、前後四百年の間には、小野小町、伊勢、和泉式部等の如き幾多の傑れた歌人が輩出してゐる。殊に和泉式部の如きは、平安歌人の中で、その純粹さに於て業平と相比すべき歌人であるが、その他の歌人に於ても、男子の歌に對して遜色を見ないものが多く、寧ろ男子にまさる業績を殘してゐるとさへ言ひうるのである。この時代にどれ程の女流歌人があつたかは、到底明確に知り得ないが、勅撰作者部類によると、八代集の女流歌人は約三百六十人に達するといはれてゐる。其の中古今集に始めて名の見えるもの二六、

後撰集八〇、拾遺集四四、後拾遺集八四、金葉集四八、詞花集一三、千載集三三、新古今集三三といふ數であるが、新古今集を除いても猶二百三十人といふ多數になる。

其の中、古今集以後の勅撰集を通じて、五首以上の歌を採られてゐる者を擧げると、

古今集　小野小町、伊勢、閑院

後撰集　中務、本院侍從、右近、土佐、俊子

拾遺集　和泉式部、赤染衞門、齋宮女御、馬內侍、右大將道綱母、選子內親王、三條院女藏人左近、小馬命婦

後拾遺集　相模、伊勢大輔、小辨、康資王母、大貳三位、周防內侍、辨乳母、紫式部、上東門院、祐子內親王家紀伊、出羽辨、淸少納言、江侍從、加賀左衞門、小式部內侍、下野、東三條院、一條院皇后宮、右大臣北方、上東門院中將

金葉集　待賢門院堀川、京極關白家肥後、二條太皇太后大貳、堀川院中宮上總、郁芳院安藝、花園左大臣家小大進、前齋宮河內、二條太皇太后宮攝津　法性寺入道前關白家三河、皇后宮美濃、前齋宮內侍、花園左大臣家越後

式子內親王、二條院讃岐、殷富門院大輔、皇太后宮小侍從、宜秋門院丹後、上西門院兵衞、二條院內侍三河、成尋法師母、皇嘉門院別當、八條院六條、六條宜旨。

千載集

等である。今これらの女流歌人の中、主なものについて簡略に述べることゝする。

有智子內親王

有智子內親王は嵯峨帝の皇女にまします。當時は漢學の全盛時代で、嵯峨帝を始めとして源弘以下の皇子も皆詩文をよくした。然し漢學はひとり男子の獨占する處であつて、婦人にして漢詩文を讀むことは、女子にして英學を學ぶことの忌避された明治初年の如く、いむべきことゝされてゐた。卽ち舶載の知識の門への出入を、女性は固く禁止されてゐたのが、平安朝初期の社會狀態であつたのである。かゝる時代にあつて、內親王は夙に經史を涉獵し、兼ねて詩文をよくし「本朝女中無雙之秀才」(本朝一人一首)と推奬され給うた方である。然し乍ら全く孤立した天稟であつて、當代に並ぶものなく、その後を繼ぐほどの閨秀は更に存しなかつた。

弘仁元年御歲四歲にして加茂齋院となられたが、同十四年二月、帝は此齋院の花の宴に行幸あつて、これに侍した文人に春日山莊の詩を作らせ、各韻を探らしめられた事があつた。其時內親

王は塘光行蒼の文字を得られたが、元より文辭思想湧くが如き才女であらせられたから、直ちに筆を採つて、

寂々幽牀水樹裏　山輿一降一池塘
棲林孤鳥識春澤　隱澗寒花見日光
泉聲近報初雷響　山色高晴暮雨行
從此更知恩顧渥　生涯何以答穹蒼

と賦せられた。天皇は歎稱せられて「忝じけなく文章を以て邦家を著はす。榮樂を將て煙花に負く莫れ。卽今長へに抱く幽貞の志。無事終に須らく年華を送るべし。」と御製を賜ひ、三品に叙し、又文人を召す料として、封戸百戸を賜つたといふ。時に正に芳紀十七。天長八年二十五歳にして齋院を辭して嵯峨の西莊に居られた。承和十四年十月四十一歳にして薨するや、遺言して葬を薄くし葬使を受けなかつた。

小野小町

小町は「古今集」の撰進よりも早く、貞觀期の歌人で、平安朝女流歌人としての先驅をなすものであるが、その傳記は明かでない。その生涯は在原業平と同じやうに、甚しく傳說化されて、根據とすべき定說は未だないやうである。小町の傳記について

深くいはうとすれば、勢ひ傳說を語らねばならない。それほどに彼女に關しては紛々たる說が行はれてゐて、その歸趣を辨ずるに困難な程である。

小野氏系圖は多少の相違があるが、大體次のやうに見えてゐる。

敏達天皇―春日皇子―妹子王―毛人―毛野―永見―峯守―┬葛絃―道風
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└篁―良眞―┬女子
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└女子(小町)

しかしこの系圖は果して信すべきか否かは疑はしい。小町の二字は後人の書き入れかとも云はれてゐるが、本居內遠は小野小町の考に於て「これ誠の傳にや」と述べてゐて、後世これによるものが多い。「大日本史」もこれによつて「その所出本末を審かにせず。或は曰ふ參議篁の孫、父は良眞」と述べてゐる。或は家系を記さず單に「出羽の郡司の女」とあるものがかなり多い。或は又小町には數人あつて、その中でも良實の娘は其の名が高かつたから、遂に一人のことになつて仕舞つたとも言つてゐる。或は良實の養女であるといふ說もある。

「玉造小町壯衰書」中の小町は、天成の美人で、父母の寵愛を受け、榮華を盡し、王妃となることを理想として、多くの求婚を斥けた。然るに父母兄弟に死別して俄に零落し、或る獵師に嫁して一子を儲けたが、夫や子に先立たれ、見る影もない乞食となつて路頭に匍匐し、心中たゞ諸佛

の救濟を願つたといふのである。

最近に於て、黑岩涙香氏は小野小町論に於て、次の如き極めて創見に富んだ考證をしてゐる。

「小町は本名比右姫、出羽の國の少野族の出で、出羽の郡司の女（弘仁三年以後に生れた）である。十三四歲にて姉と共に采女となつて朝廷に仕へ、姉は小野の町といはれ、妹はこれと區別して小野小町と呼ばれてゐた。仁明天皇から光孝天皇の頃までゐた人である。絕世の美人であつて、三千の粉黛もために顏色なき觀があつた。が、小町は志操堅固で、自ら持する處が高くして多くの人のいひよるのをさけて、ひたすらに、正良親王、後の仁明天皇を慕ひ奉つたが、藤原氏のために退けられ、比叡山の麓小町の莊に住んでゐた。再び宮仕する機いたらず、嘉祥三年仁明天皇はおかくれになつたので、寺まゐりなどに日を送つてゐた。後綴喜郡井手村に住んで六十七歲にて歿した。それは天慶七年か仁和元年らしい。骸は井手寺に葬つた。」

といふのである。

彼女に就いての先人の觀方を一括してみると、多くは烈女、貞女、節婦といふカテゴリーの女性としてとりあつかはれてゐるやうである。傳說的な彼女を視つてみても、あるひは神泉苑の雨乞ひであるとか、或は大友黑主の一件だとか、深草少將の百夜通ひであるとか、一に彼女を人間

以上のものにしようとする形跡が見える。しかし、後撰集（雜四）の歌の作者に、小町の孫とみえてゐるのによると、小町には子があつたらしく、親房の古今集序註に「大江惟章が妻となりし時心かはりして藤原朝行が聟に成る時」とみえてゐる。その外、

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなくあけぬるものを（古今集戀三）

などの歌を見ても、明かに男に逢つた歌である。小町貞女説も、俄に信をおきにくい。勿論、引く手あまたの男を斥けたといふ歌もあるが、さういふ折もあつたといふ位に過ぎぬではあるまいか。

一方歌人としての小町は、康秀、遍照、躬恒、業平、安倍清行、小野貞樹等多くの歌人と歌を贈答してをり、その中には戀愛關係のあつた者もあることが想像され、「小町集」によれば、或る高貴の方とも關係があつたことが分る。

家集に小町集があり、勅撰集に入つてゐる歌は、古今集十七、後撰集四、新古今集以下凡そ四十二、合計凡そ六十二首、私撰集に入るものは新撰和歌集五、その他傳說的に小町の歌とされてゐるものが數首ある。

小町の歌風について紀貫之は「古今集」の序に「あはれなるやうにて强からず。いはばよき女

の惱めるところあるに似たり、つよからぬは女の歌なればなるべし」と述べてゐるが、これは概括的ではあるが、婉柔纖弱な小町の歌風を評して誠に適評であると思ふ。その歌風は業平に似て情熱的ではあるが、稍々技巧的であつて、優麗にして哀婉の趣に富み、どの歌にも女性らしい優しみが流れてゐる。その題材は主として戀愛の世界である。而もそれは多く感傷的な悲觀的なものであつて、戀愛の勝利よりも寧ろ破滅を歌ひ、戀愛の歡喜よりも寧ろ悲哀を歌つた歌が多い。

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

思ひおもひして寢たからか、戀しいひとが夢に見えたのであらう。あのとき夢と知つたなら覺めずにゐたでもあらうに——といふ意味で、女の心の優しさ美しさをあらはして餘蘊がない。この一首も貫之の所謂「あはれなるやうにて强からぬ」趣のよく見える歌である。表現の上からいふと決してそんなに弱々しい表現でもなささうだが、內容自體になまめかしさがあり、そのなまめかしさのうちに、ものゝあはれを漂はせてゐる。

うたゝ寢に戀しき人を見てしより夢てふものは賴みそめてき

賴みにもならぬ夢をせめての賴みとするといふ處に傷さがある。いかにも相手に夢より外に會ふよしもないはかない戀であつたことが察せられる。又、

いとせめて戀しき時はうば玉のよるの衣をかへしてぞぬる

も同じく夢を歌つてゐる。

現にはさもこそあらめ夢にさへ人目を守ると見るがわびしさ

限りなき思のまゝに夜も來む夢路をさへに人は咎めじ

夢路には足をやすめず通へども現に一目見しこともあらず

も同樣である。はかないものを頼む心はまことにあはれである。「萬葉集」に見えるやうな、大膽な告白ではないが、やはらかな表現の中に女性らしい深い感情がこめられてゐる。これらによつてみれば、小町にもまゝならぬ戀が多かつたと思はれる。多くの男に慕はれて、高く矜持してゐたといふ傳說は、これらによつて破られさうである。

色見えでうつらふものは世の中の人の心の花にぞありける

草木の花は、色變つてうつり行く樣がよく見えるが、變る姿も見せないで、何時の間にか知らないうちに變つてしまふのは人の心である。まことに人は花よりも頼み難いものである。と思ふ人に裏切られに時の頼りない心を歌つたものであらうか。哀音まことに同情に價するものがある。

花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

樂しみに待ちわびてゐた櫻の花は、降りつゞく春雨に、心ゆくばかりみる時もなくて、自分のむだに年をとつたことを歎いてゐる中に、早くも散り方になつて了つた。といふので、「ながめ」に「長雨」をかけ、「經る」に「降る」をかけた纎細な技巧の見える歌である。

わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞおもふ

「古今集」のこの歌の端詞に「文屋康秀が三河の掾になりて、あがた見にはえいで立たずやと、いひやれりける返事によめる」とある。文屋の康秀が掾になつて三河に下るのに、田舍見物にはお出でにならぬかといつて來たので返事したのであるが、何となく哀れな歌である。さすがに都で榮えたものが田舍落も出來ない。さればといつて、都の佗住もつらいと思ふが、さて行かうか行くまいか、どうしたものであらうと按じて、行くとも行かぬとも決着せぬ返事をしたところが、女らしい情趣を遺憾なくあらはして、味甚だ饒かなものがある。

小町物の謠曲　小町に關しては、古來種々の說話傳說等の非常に多いことは、前述の如くであるが、これらを敷衍して、謠曲の材料となつたものも少くない。謠曲に取扱はれた小町は、所謂七小町として、草子洗小町、通小町、卒都婆小町、關寺小町、鸚鵡小町、雨乞小町、淸水小町等である。勿論その內容は傳奇的な物語で、小町の歷史的硏究の材料とすること

は出來ないが、たゞこれによつて、小町が如何に疑問の女性として、多くの問題を後の世に投げかけてゐるかを知る一斑ともなるのである。

伊勢

小町と並んで寛平より延喜へかけての女流歌人に伊勢がある。父の藤原繼蔭が伊勢守在任中に生れたのでその名を得たらしい。數奇な運命を辿つた女性で、始め敦慶親王に愛せられて中務の君を生み、次いで藤原仲平と契つたが棄られて五條に詫居した。その心の傷手を醫やすため大和を經巡つてゐる間に、やがて七條の后に召されて宮仕へした。その皇后が薨じた後は、これまでお仕へしてゐた官女達は、或は髮を下し、或は御暇を願ひ、皆散々と別れ分れて、さしも華かであつた宮の中は昔に變るさびしい樣となつた時、或人が伊勢の安否を問うてやると、その答は、只、

沖つ浪荒れのみまさる宮の內に、年經て住みし伊勢の海女も、舟流したる心地して、よらむ方なく悲しきに、淚の色の紅は、我等がなかの時雨にて、秋の紅葉と人々は、己がちりぢり別れなば、たのむ蔭なくなりはてゝ、とまるものとは花すゝき、君なき庭に群れ立ちて、空を招かば初雁の、鳴きわたりつゝよそにこそみめ。

とあつた。これを聞き傳へた人々は、その哀れ深い言葉に心中の悲しさを思ひやつて皆淚を流し

たといふ。やがて宇多天皇の寵を受けて女御となつた。そして行明親王を生み奉り、我が身の幸福を喜んだ甲斐もなく、親王は八つにて薨じ給ひ、ついで天皇も退位遊ばし、自分も暇を賜つて再び五條に閑居した。宮中を出ようとした時、弘徽殿の壁に、

別るれどあひもをしまぬ百敷を見ざらむことのなにか悲しき

と書きつけたことは有名である。

伊勢は速吟を以て聞えてゐた。屏風の歌を命ぜられるや咄嗟に筆を執つて、

散り散らず聞かまほしきに故里の花見てかへる人もあはなむ

と詠じて人々を驚かした。且その筆蹟も亦道風にも劣らぬとさへ思はれたといふ事である。紀貫之は遲吟の人であつたが、貫之に誂へた歌が間にあはぬ時は、伊勢に依頼せよと時の人が云つたといふ。

なには潟短き蘆のふしのまも逢はでこの世を過してよとや

も才智と技巧の見える伊勢の特色をよく發揮した歌である。なほ、梅の木の傍の竹の子を抽かうとして、

竹の子に散りかからなむ梅の花雪の中のを掘ると見るべく

と詠み、家を賣るに當つて、

　飛鳥川淵にもあらぬわが宿も世に變りゆくものにぞありける

と詠んだ如きは、いづれもその天分の豐かなるを示すものである。

中　　務

　中務は伊勢が敦慶親王に寵せられた時に出來た女である。伊勢に次いで歌の名があつた。伊勢の生んだ御子がなくなられたと同じく、中務の子も早く死んだ。そのために東山に籠つて、

　さけばちる咲かねば戀し山櫻思ひたえせぬ花のうへかな

と、花に事寄せて我が子の死を悲しんでゐる。表面は花、裏面は子、よく寄托し、よく譬喩し、しかも一意十分に透徹してゐるところは凡手でない。

　忘られてしばしまどろむほどもがないつかは君を夢ならで見む

これも同じ時の歌である。素直な詠みぶりの中に沁々とした哀愁が湛へられてゐる。

　下くゞる水に秋こそ通ふらしむすぶ泉の手さへ涼しき

晩夏の歌であるが、聲調もよく、意義も穩かで、眞に穩當な作である。

　都人まつらむものを逢坂の關まで來ぬとつげややらまし

「源信明朝臣、陸奥守にてまかりけるに伴ひて、任果てゝのぼり侍るとて、逢坂の關にてよみ侍りける」といふ端詞が「玉葉集」に見えてゐる。この歌は「大鏡」には「みやこにはまつらむものを」となつて載つてゐるが、同書によると繁樹の妻の仕へた北の方が中務であるといふことになつてゐる。次の歌は信明に贈つた歌である。

さやかにも見るべきものをわれはたゞ涙にくもる折ぞ多かる

總じて中務の歌は温雅である。そして風韻の高いものが多い。伊勢の子たるに恥ぢない歌人である。

和泉式部

和泉式部の傳記は、既に「和泉式部日記」の條に於て述べてあるので、こゝでは直ちに歌人としての式部について說くことにする。歌人としての式部の名聲は、その存生當時既に時代の先達藤原公任に認められてゐたが、今樣歌にさへ「和歌にすぐれてめでたきは、人丸、赤人、小野小町、躬恒、貫之、壬生忠岑、遍照、道命、和泉式部」と謠はれ、勅撰集に採られてゐる歌數から言つても、第一流の歌人であつた。紫式部はその日記の中に、和泉式部の文才を揭げて歌才を貶してゐるが、この評は當つてゐるといひ難く、むしろ平安朝女流歌人中では、彼女を以て第一等に推すべきである。勿論多作家の通弊として凡作も少くないが、

技巧にすぐれ、强烈純粹な情熱の流露した佳作の甚だ多いことは、王朝女流歌人中での異數といふべきである。されば明治に至つては、藤岡博士（平安朝文學史）により、業平、西行と共に、平安朝の三大歌人とまで評價せられるに至つた。

式部の性格は不羈奔放で、感情の赴くまゝに行動したことは、その一生の經歷がよく物語つてゐる。しかしその天賦の豐富なる感情は、あく迄も純眞であり明澄である。その何物をも厭倒しなければ止まない强烈な熱情は、他に求めることを得ないものである。式部が愛人に贈り、又我が子小式部について詠んだ歌は、いづれも眞率で情熱のこもらざるはない。從つて表現は端的であり、直線的であり、盛られた感情は生新であり、赤裸々であり、遺憾なく眞情が流露してゐる。これを小町に比すると、小町には心情の弱々しさがあり、自己の感情を貫かうとする所が現れてゐないが、和泉式部には奔放な情熱のまゝに進まうとする所がある。

人の身も戀にはかへつ夏蟲のあらはに燃ゆと見えぬばかりぞ

戀のためには人は身を捨てゝしまふ。丁度夏蟲が火に飛び込んで命を失ふやうに、たゞ蟲のやうにあらはに燃えると見えないだけで、蔭では身もこげる程に燃えてゐるといふのである。

ともかくもいはゞなべてになりぬべし音に泣きてこそ見せまほしけれ

此の歌には「歎くことありと聞きて人の如何なる事ぞと問ひたるに」といふ題言がついてゐる。まことに眞の悲しみは、言葉でいふべくあまりに微妙であり、あまりに幽奥である。それ故、どんな悲痛な心持で極度に歎き沈んでゐるかといふことは、唯「わつ」と悲泣してお見せするより外はないといふのである。人のいはうとしていひ得ない處をよく道破した歌で、こゝにも彼女の才氣を見る事が出來る。

黑髮の亂れも知らず打臥せば先づかきやりし人ぞ戀しき

哀れにも聽ゆなるかな曉の瀧は淚の落つるなるべし

物を思へば澤の螢も我が身よりあくがれ出づる珠かとぞ見る

これらは第一の夫道貞に別れた後の歌であるといはれてゐるが、いづれも奔放な情熱を歌ひながら、底に一脈の哀愁を湛へてゐる。多情多恨の天性を持ち、その一生を次から次へと男性を求め乍ら、或は不滿に終り或は死別して、結局自らの情熱を以て自らを燒いたであらう彼女には、當然愛慾の悲愁を歌つた歌が多かつた。その愛慾に關する歌は、戀の歡喜を高らかに歌つたものは絕無であつて、多くは哀怨悲愁の物惱ましくあはれな歌である。これは戀ならぬ歌にも、厭世的哀傷的な歌が多いのと共に、式部集の一大特色である。

しのぶべき人もなき身はある時にあはれあはれといひやおかまし

孤獨を歎き、知己のないのを歎く哀愁が、奔放に歌はれてゐる。

あしびきの山ほとゝぎす我れならば今泣きぬべき心地こそすれ

五月雨の降る夕暮の悒欝な中で、戀のはかなさを思ひ、人生の寂しさを思うて、孤獨の哀愁にひたつてゐる作者の面影がしのばれる。一體燃ゆる情熱に身をまかせた詩人肌の式部には、人の世の寂しさはかなさを感ずることも人一倍烈しく強かつたことであらう。

こよひさへあらばかくこそおもほえめけふ暮れぬ間の命ともがな

ゆふぐれは物ぞ悲しき鐘の音を明日も聞くべき身とし知らねば

のやうな歌も少くない。まして晩年の作かと思はれる詠には、隨分寂しさうなのがある。

かぞふれば年ののこりもなかりけり老いぬるばかり悲しきはなし

年末に際して、今更に人生の老を自覺して悲しんだ作である。眞情をそのまゝに詠んで、切々として人の胸に迫る悲痛の聲がある。

以上の外、家集七卷を繙くと、その波瀾重疊の生涯と、多彩多角な性格とが、珠玉のやうな作品となつて燦然と輝いてゐる。

要するに、式部は熱情情痴の詩人であつた。愛慾の權化ともいふべき生涯を送つた人であつた。男女關係が如何に寬大な時代であつたとはいへ、好色者たる非難は避けることの出來ないところである。しかし乍ら、式部の生涯の行動を、浮華淫蕩の一語を以て評し去ることは、餘りに早計ではないかと思ふ。彼女の全集を通讀して見ると、式部は身を持ちくずすことを決して肯定してゐるのではない。さういふ運命と境遇とを悲しみ、常に人知れず自責の念に打たれてゐる趣が見える。又離別後の道貞を愛慕し、薨去後の敦道親王を追慕する諸作を見ても、作者の純情は充分に知り得るのである。

式部が男から男への旅を續けたのは事實である。しかし彼女にして見れば、絕えず何物かにしつかりと縋つてゐなければ、心の落付きを得られなかつたのではなからうか。自ら進んで男から男へ巡禮を續けたのではなく、常に眞實なるものを求めて、絕えずあがいてゐた一個の人生の求道者ではなかつたらうか。然らば式部の求めてゐた眞實とは何であつたか。それは恐らく眞實の戀であつたであらう。しかもその理想は、あやにくにも次々に失はれ、或は破れて行つたのである。その悲痛な體驗こそは、彼女の藝術の原動力であるが、かく考へて來る時、男から男へ戀の放浪を續けた式部も、決して戀の勝利者ではなく、一生涯理想の戀を求め、理想の配偶者を求め、

而もそれが得られず、不滿、寂寥、悔恨のうちに、人生を惱み續けた戀の敗者ともいふ事が出來る。彼女こそは眞實の戀を求めて、無限の戀愛巡禮をつゞけた一個のロマンチストであつたのである。

小式部內侍　和泉式部が橘道貞との間に儲けたのが小式部內侍である。母と同じく上東門院に仕へ、道長の子、二條關白敎道に愛せられて、一男を儲けた。出家して靜圓と稱するのが其の子である。曾て敎道が永らく病氣をしたのに、彼女が一度も見舞はなかつたといふので、病氣が治つてからその事をせめると、彼女は、

死ぬばかり歎きにこそは歎きしが行きて問ふべき身にしあらねば

といふ歌を以て答へた。敎道もこの當意卽妙の歌に心中のわだかまりを解いたといふことである。敎道の外に頭中將藤原公成にも愛されて一男を儲けた。出家して賴仁と稱するのがその子である。內侍はとかく病弱なたをやめで、美人薄命の例に洩れず、母を殘して先立つて了つたが、「古今著聞集」には彼女について次のやうな逸話が載せられてゐる。

和泉式部が女小式部內侍、この世ならずわづらひけり。かぎりになりて、人の顏なども見知らぬ程になりて臥したりければ、和泉式部傍にそひゐて、額をおさへて泣きけるに、目をわづかに見あげて、母が顏をつくづくと見て息のしたに、

いかにせむ行くべきかたもおもほえず親にさきだつ道をしらねば

と弱りはてたる聲にていひければ、天井の上に、あくびさしてやあらむと覺ゆる聲にてあらあはれといひてけり。さて身の煖さもさめてよろしくなりてけり。

又母が丹後に下つてゐる時、偶々京で歌合が催されることになつて、人々はどういふ歌を作らうかと工夫をこらしてゐた。彼女は母が老練な歌人であるから、母に代作して貰ふか、添削して貰ふかだらうと邪推した中納言藤原定賴は、彼女の局に來て「今度の歌合の歌はどうされますか、丹後に使を出されたことでせうが、使は歸つて來ましたか。使が歸るまでは心配でせう。」などと戲言を言つて立ち去らうとすると、彼女は定賴の袖を捕へて、

大江山いく野の道の遠ければまだ踏みもみず天の橋立

といふ卽席の歌をよんで、定賴をあつといはせた。

赤染衞門

和泉式部と並び稱せられ、その優劣の判斷に惑はしめたものに赤染衞門がある。衞門は赤染時用の子で、時用が右衞門の志尉であつたからかく呼ばれた。然し「袋草子」には、實は平兼盛の女であると說いてある。卽ち、母が兼盛と離別後間もなく生れたので、兼盛は吾子として引取らうとしたと記してあるが、これは歌人としての兼盛につながりを付けよ

うとしたのであらう。

長じて名儒大江匡衡に嫁して、擧周と江侍從とを產んだ。擧周は詩文に長じ、東宮學士となり、大學頭式部權大輔に累進した人であり、江侍從は女流歌人としてその名を知られてゐる。初め上東門院の御母倫子に仕へてゐたが、その關係からやがて上東門院にも仕へたものと思はれる。夫匡衡と共にその任地尾張や丹後にも下つたこともある。

越えはてば都も遠くなりぬべし關の夕風しばし凉まむ

匡衡は正暦中尾張權守となつた。衞門はそれに伴はれて都を出た。この歌は「七月ついたちの頃わりなう暑かりしかば、逢坂の關にて淸水のもとにて」詠まれたものである。然るに匡衡は後丹後守となり長和元年にはなくなつてしまつた。衞門の悲しみはまことに甚しかつた。

君とこそ春來ることも待たれしが梅も櫻も誰とかはみむ

夫に別れた後は、梅が咲いた、櫻が咲いたと人のいふのもたゞ〳〵悲しかつた。

あさ日さす山下つゆの消ゆる間もみしほどよりは久しかりけり

山かげの露を見ても、それより儚い契であつたやうに思はれたのである。その外、

淚のみしぐるゝやどの梢には外よりさきに紅葉しにけり

去年の春ちりにし花はさきにけりあはれ別のかゝらましかば

ひとりこそ荒れゆく床はなげきつれ主なき宿はまたもあれけり

等數々の悲歌は「後拾遺集」「家集」等に多く殘されてゐる。

一子擧周が和泉守に任じた時も同行して下つた。任果てゝ上る時、擧周が不思議な病に犯されて今は危く見えた。人々は住吉神社の祟であらうと言つたので、三首の歌を添へて幣を奉り、我が身を以て之に代らうと祈願した

かはらむと祈る心はをしからでさても別れむことぞ悲しき

はその中の一首である。するとその夜白髮の翁があらはれて、幣を取ると見えて病が癒えた。擧周は我が身が助つても身代りになつては不孝になるとて、元の如く我が命を失ひ給へと祈願して、母子共に無事であつたといふ傳說がある。(今昔物語、古今著聞集)この傳說の眞僞はしばらく措いても、この歌は眞情が溢れておのづから優秀なものとなつてゐる。又夫匡衡の在世中、藤原公任が中納言を辭するに當り、紀齊名、大江以言をしてその辭表を草せしめたが、その意に副はずして匡衡に依囑した。衞門は夫に勸めて言つた。公任は自ら持する事が高い。故にその辭表には門地の高きを述べ、暗に官位の進むこと遲きを書くべきであると。そこで匡衡は妻の云ふ通り「臣

は五代大政大臣嫡男也、亡祖忠仁。云々」と滔々と門地の高きを書き立て、その後に公任卿の身分の沈淪した趣を述べた處、案の通り非常に公任の感歎を博し、その文を辭表としたといふ。

やすらはで寢なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな

此は道隆に愛せられた妹に代つて詠んだ歌である。

ふめばをしふまでは行かむ方もなし心づくしの山櫻かな

この歌も前者と同じく人口に膾炙されてゐるが、流麗平靜、よく衞門の特色を發揮した歌である。

一體、大江匡衡の妻であり、且一代の碩學匡房の曾祖母であつた彼女は、當時の他の才媛よりは、その家庭生活に於てははるかに幸福であつたらしい。その上性質も亦穩和であつたと見えて、彼女の作は一體に溫雅であり、整齊である。奇拔な語もなく輕妙な調もない。故に時には極めて平板に見え、單調に思はれることもあるが、その穩健雅馴な歌風は、又誠に愛すべきものがある。

衞門が歌の贈答をした女性には、淸少納言、伊勢大輔、辨内侍がある。和泉式部とは子の學周が式部の妹に通つてゐた關係もあつて、特に親しかつたやうで、式部が夫道貞の許を去つて敦道親王に心を寄せた時、諫の歌を送つて式部の反省を促したことは前述の如くである。當時にあつて衞門は歌人として和泉式部と並び稱せられ、時には式部を壓する程の世評をとつてゐた。しか

しその實力から云つては、到底式部に及ぶべくもない。然し衞門が比較的好評であつたのは「無名抄」に、

人は仕業はぬしのある世にはその人がらによりて劣り優りある事あり。歌の方は式部双なき上手なれど、身の振舞もてなしの心用ゐなどの赤染には及び難かりけるにや。かゝれば其の時は、人ざまにもて消たれて、歌の方も思ふほど用ゐられねど、まことの上手なれば秀歌も多く、事に觸れつゝひまなくよみおくほど撰集どもにも數多く入るこそ。

と述べてゐる如く、その生活態度や性格が、式部に比較してはるかに貞淑醇厚であつたのによるものであらう。

齋宮女御　齋宮女御は醍醐天皇の御孫で、重明親王の御子である。徽子女王と申し、承平六年齋宮となられ、元曆元年村上天皇の女御となられたが、齋宮女御集がある。

「松風入夜琴」に、

琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをよりしらべそめけむ

は殊に知られてゐる。しかしそれよりも、村上天皇が久しく御出にならなかつた頃、女御が琴をおかしく御彈きになつたので、急いで御出があつたが、女御は傍に人あることも知らぬ顏で、

猶御彈きになる。それを御聞きゝになると、

さらぬだにあやしきほどの夕ぐれに荻ふく風のおとぞきこゆる

といふ御歌であつたといふ話は、眞に興趣深い逸事である。

紀　内　侍　村上帝の御時、淸凉殿の御前の梅樹が枯れたので、帝はこれに代るべきものをと思召して、諸方を探がさせられた。その内に西の京のさる所に、見事な紅梅があると申した者があつたので、さらばそれをと人を遣はされた。見れば餘り富めりとも見えぬ家の庭の中に、枝振面白い梅が時を得顏に咲いてゐる。御使の者はこれこそ御申付のものと、直ちに掘りにかゝると、一人の姿美しい女房が立ち出でゝ、その樹だけはと掘る事を拒んだ。御使の者はしかぐの譯で帝の召されると申すと、女房は今更に詮方なく心よく仰せに從つたが、いざ運び去るとなつた時、一片の紙を枝に結んで、見馴れた樹の掘り去られた庭をいと悲しげに眺めてゐた。御使の者は直ちにその樹を禁中に運んで帝の御覽に入れた。成程聞きしに勝る名木に御喜も深く、尙その樣を御覽じて、端なくも先きの紙片が御目にとまつた。あれは何ぞと召してお讀みになると、

勅なればいともかしこし鶯の宿はととはゞ如何が答へむ

と一首の歌が記してある。帝はそのやさしき心に感じさせ給ひ、如何なる人の宿かと人をして名を問はしめられると、紀貫之の女紀内侍の家と知れた。帝はかほどまで愛したものをと、今更に御後悔遊ばされたといふ。

伊勢大輔

伊勢大輔も上東門院に仕へた才女の一人で、三十六歌仙の中に數へられてゐる。父は大中臣輔親で、輔親が伊勢の祭主であり、神祇官の大副（大輔）であつたのでかう呼ばれてゐる。曾祖父頼基、祖父能宣、父輔親等は累代歌人として知られた人で、わけても能宣は「後撰集」の撰者として名高い。大輔の中宮彰子に召されたのは寛弘五年の春であらう。出仕したばかりの頃、奈良から僧都が八重櫻を進上した時、「今年のとり入れ人は今參りぞ。」と言つて紫式部が大輔に讓つた。すると、傍から道長が「たゞにはとり人れぬものを」と言つたので、

いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重ににほひぬるかな

と詠じて一座の人々を驚歎させた。それによつて歌人としての名は一段と高まつた。

紫式部が清水に籠つてゐる時、一緒になつて院のおんために御あかしを奉つた。式部から「心ざし君にかゝぐる燈火（ともしび）のおなじ光にあふが嬉しき」と樒（しきみ）の葉に書いて來た。大輔は、

いにしへの契もうれし君がためおなじ光にかげをならべて

と答へた。同じ時同じ人と松の雪に寄せて、露の命の儚さを述べた贈答もある。和泉式部が出仕したのは、大輔より一年程後であつた。その始めての夜、中宮から「逢ひてものなどいへ」と仰言があつて、二人はお互に年來心にかけてゐた事を、夜一夜語り明かした。大輔から、

思はむと思ひし人と思ひしに思ひしかどもおもほえしかな

と豫て思つてゐたことの滿たされたのを喜んでやると、「君を我思はざりせば我を君おもはむとしも思はましやは」と返しがあつた。

大輔は高階成順の妻となつたが、思はしくなくて別れ、成順は石山に籠つた。そして、

「久しうおとし侍らざりければ」

みるめこそあふみのうみにかたからめ吹きだに通へ滋賀の浦風

の歌を贈つてゐる。後成順が出家した時麻の衣を贈つて、

けふとしも思ひやはせし麻ごろもなみだの玉のかゝるべしとは

と詠じた。その歿後經供養をした時の詠も遺つてゐる。白河天皇が御降誕になつた時、傅もつとめてゐる。

作品は後拾遺集の廿七首を始め、五十一首が勅撰集に採録されてゐる。外に家集がある。才情流るゝ如しといはれてゐるが、和泉、赤染に比べては一籌を輸してゐる。頓才機智の作の多いことは「八重櫻」の歌に於てもその一端を知り得るのであるが、或人が茄子を猿に造つて枯れた木の枝につけて「思はざる事のさまかなもとなすび枯木の枝にならむものとは」といつたのに答へて、

珍らしや枯木の枝のもとなすびつくらざるにはいかでなりけむ

と詠んだといふ話や、また人の「人の世も我世もけふかあすか川」といつたのに「水のあわよりげにぞはかなき」とつけたなど、皆大輔の頓才機智の凡ならぬを示す逸話である。

大貳三位

大貳三位は藤原宣孝の女で、母は紫式部である。太宰大貳高階成章の妻となり、後冷泉帝の御乳母であつた。「狹衣物語」の作者と稱せられるが疑はしい。

有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

戀しさのうきにまぎるゝものならばまた再びと君を見ましや

などは人口に膾炙した歌であるが、

梅の花何匂ふらむ見る人の色をも香をも忘れぬる世に

は、奉仕してゐた上東門院が遁世せられた春、庭前の紅梅を見て、昔ながらの梅の花につけても、

にも「相模は赤染衞門紫式部などとともに古に恥ぢぬ歌よみなり」と仰せられてゐる。

恨みわびほさぬ袖だにあるものを戀に朽ちなむ名こそをしけれ

は永承六年內裏歌合の歌である。

きかでただ寢なましものを時鳥なかなかなりや夜半の一聲

見わたせば波のしらゆふかけてけり卯の花咲ける玉川の里

曉の露も涙もとゞまらで恨むる風のこゑぞ殘れる

第三首は「風從昨夜聲彌怨、露及明朝淚不禁」の句によつたものであるが、凝滯の跡を留めぬ所に手腕が見られる。

第四編　鎌倉文學を通して見たる女性

皇室の外戚として思ふこと遂げざるなく、世をわがものと振舞つた平家一門の榮華も、僅に二十年にして、西海の波の底にもろくも沈みはてゝしまつた。驕る平家を滅して之に代つた源氏の大將頼朝が、大磐石と据ゑた鎌倉幕府も、僅三代二十八年にして源氏の血統は絶えてしまつた。しかも頼家といひ、實朝といひ、その最後の何と悲慘なこと！　更に承久の變に及んでは、後鳥羽、土御門、順德の三上皇は、異郷の地に心ならぬわびしい幾年月を過させ給ひ、しかも涙を呑んでその地に崩御遊されてゐる。文永弘安の元寇は、誠に國家にとつて前古未曾有の一大事、上下老幼國を擧げて之にあたり、幸に擊退することを得て、心からなる歡呼の聲をあげた。この壯烈な勝鬪の響が未だ津々浦々に消えも終らぬうちに、勤儉尙武の礎の上に建てられた鎌倉幕府は倒れて、柱石たる執權北條氏は滅びることになる。

述べ來れば、まことに目まぐるしい事件の連續である。それ故人々は、老若男女、貴賤貧富を問はず、動搖と不安の落付かない心を以て、朝夕を送り迎へねばならなかつた。

従つて學問文藝は自然に衰頽に向ひ、たゞ過去の文學を模倣するに留つてゐた。

文學の特色

そして、この間にあつて僅に文學界を維持し、新文學を樹立するに力あつたのは僧侶達である。それ故この時代の文學には、概ね宗教的色彩が濃く、平安時代の文學に見るや

うな情趣本位の遊戯的氣分は殆んどなく、眞摯にして切實なる欣求淨土の思想と、談理的、教訓的の傾向とを豐かに持つてゐる。このやうな内容の變化につれて、その文體も亦、平安時代の後期から發達した剛健莊重なる和漢混淆體が完成され、内容形式共に獨特の鎌倉文學を形づくつてゐる。

平安朝の大宮人の手によつて作り上げられた公卿文化が、花鳥風月と戀愛とを基調とした情趣生活の中に磨き上げられ、纖細華麗なのに對して、新興階級たる武家の手によつて作り上げられた武家文化は、弓馬刀槍を事とする剛健生活の中に生れ出た、荒削りの、線の太い、輪廓の大きい素朴雄健なものであつた。

文學は僞らざる時代の姿の反映である。平安時代の物語小說は、壯麗な平安城裡を背景とし、そこに繰りひろげられた、多情多感な王孫公子の風流と戀愛の情趣生活を描き出せるに反し、鎌倉時代に作られた物語は、兵馬劍戟の間に躍る健くも勇ましき武人の合戰記である。この戰場に於ける武人の華かな合戰記と、それにともなふ哀別離苦の悲しみとを巧みに組み合せ、之を貫くに陰鬱沈痛な厭世的思想を以てし、時代の姿をさながらに描き出したのが、この時代の軍記物語である。

和歌は此の時代の初、後鳥羽天皇及びその院政の頃が一番盛んであつて、當時の藤原定家以下の諸名家に勅して撰せしめられた「新古今和歌集」を始めとして、萬葉までには九度の勅撰集が現れたが、前期の末から出て來た新舊二派の爭論は、愈々激烈化し、歌道の生命を稀薄ならしめて行つた。此の時代の文學の特色は、隨筆としての「方丈記」、紀行文としての「十六夜日記」「東關紀行」等の上にも味はれるが、特によく代表せられるものは「保元物語」「平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」等の軍記物語である。猶又「石清水物語」「苔の衣」等の小說、「水鏡」等の歷史物語、說話文學としての「十訓抄」「古今著聞集」等も數へられる。漢詩文に於ては特に見るべきものなく、記錄、律令、消息文等として、特有な和臭を帶び、日本化せられた漢文を生じたばかりである。

文學の展開

女流文學

前代平安時代は、宮廷女流が、物語に日記に詩歌にその活躍を恣にし、所謂女流作家の黃金時代を現出し、女性が文學のあらゆる方面にそれ〴〵個性を鮮明に發揮した作品を多く出したのであるが、鎌倉時代に至つては、前述の如き社會狀態は女性の社會的進出を抑へ、從つて女流文學はいたく衰微した。平安時代に於ては、女性が根本的に解放されてゐなくとも、少くともその情緒の世界に於て解放されて居り、而もその屬する階級が文學の中

心地帶であつたところに、女流作家輩出の因由はあつたのであるが、鎌倉時代に入ると、文學一般が往時の盛況を見せなかつた上に、貴族社會はすでに沒落沈滯の時期に入つて、美しい花を咲かせる溫床でなくなつて居り、その社會に屬する人々も、もはやその氣力を持ち得なかつたのである。かくて女流文學は衰微し、女性作家は物語その他の世界から姿を消して、僅かに歌人として、又日記の作家として存してゐるのみである。即ち日記としては、「十六夜日記」や「中務內侍日記」「辨內侍日記」等があるが、中古の日記のやうな個性味は乏しい。「十六夜日記」には母性としての愛が見られ、子の愛のためにははるばる鎌倉へ下る所には、新時代の女性の面影が現れてゐるが、中古の日記のやうな個性的描寫は多く見られないのである。

歌人としては、「新古今集」の女流歌人として、式子內親王、俊成卿女、宮內卿等があり、玉葉、風雅集に於ては永福門院、篤子、雅子その他數多の女流歌人の名が數へられる。新古今時代の女流歌人の歌は、俊成の幽玄體を中心として、溫雅な中に靜寂な情趣をたゞよはせてゐる。式子內親王の歌などにはよくその趣が現れてゐる。また「建禮門院右京太夫集」には、平氏滅亡に際しての悲痛なる境遇から來た心境がよくうたはれてゐる。玉葉、風雅集の女歌人は、寫實的の立場をとり、その中に新しい感覺をもらうとしたことが見られる。これは爲兼によつて唱へられた傾向で

あるが、玉葉、風雅集の代表的女性歌人といふべき永福門院の御歌などにはこの傾向が著しい。

かやうに和歌史の上ではすぐれた女性作家を出してゐるのであるが、文學史を通じては、女性が活動した時期とは言ふことが出來ないのである。

第二章　日記文學と女性

阿佛尼と十六夜日記

阿　佛　尼

阿佛尼の傳記は、明かではないが、現に見る事の出來る資料を綜合して考へて見ると、左衞門尉平度繁の養女で、若い頃に安嘉門院に仕へて右衞門佐と呼ばれた。その頃戀人に忘れられた恨めしさに、髮を切つて西山の知るべの尼の許に住み、更に愛宕の邊に移り、後また都の家に歸つた。その年の冬、愛宕から歸京してなほ憂鬱であつた頃、養父の度繁が濱松から上京し、田舍住ひをすゝめたので、伴はれて濱松に下つたが、間もなく彼女を幼少から養育した老人が重病といふのでまた京に歸つた。その後奈良の法華寺に入り、後又松尾の慶政上人の許に居たが、龜山院の後宮大納言典侍に召されて「源氏物語」の書寫をした。それ

は建長四五年頃の事である。それから暫くして定覺律師を生んだ。定覺が生れる前に一男一女があつたが、これら三人の父は不明である。この「源氏物語」書寫の頃から爲家と親しくなり、やがて室となり、弘長三年に爲家の子爲相を生み、次で三年目の文永二年に爲守を生んだ。建治元年に阿佛尼は爲家に後れ、十三歳の爲相と十一歳の爲守を抱へて寡婦となつた。そして爲家が生前に爲相に傳へることを遺言しておいた播磨の細川の庄を、爲相の義兄爲氏が押領したといふので、その訴訟の爲に、建治三年十月十六日帝都を立つて鎌倉に下り、足かけ四年滯在してゐたが、嬉しい判決も聞かずに弘安六年旅寓に客死した。然しその後爲相もまた鎌倉に下つて、この訴訟は結局彼の勝となつた。

作品

阿佛尼の作として確認されてゐるものに「十六夜日記」があり、その外安嘉門院四條百首、權大納言爲家卿五七願文、勅撰集中の四十四首の和歌、夫木抄中の五十三首の和歌等も阿佛尼の作であることは疑を要しない。外に「夜の鶴」「乳母の文」「轉寢記」の三つは、疑の眼をもつて見られてはゐるが、眞僞の決定的斷案を下し得る資料に缺けてゐる爲に、今日では阿佛尼の作として推斷されてゐる。

十六夜日記

本書は阿佛尼が關東へ下つた時の紀行文である。彼女が女性の身を以て異境の空に志したのは、止み難い悲憤の情を晴らさんが爲であつた。我が子に對する純愛の至情と、本來具有してゐた男まさりの勝氣とは、彼女をしてこの旅立ちを決意せしむるに至つた動力ではあるが、その根柢には忌むべき家督爭ひが横たはつてゐた。

爲家の家は祖父俊成の代から和歌を以て宮中に仕へ、斯道の名門として聞えてゐた家柄である。殊に父定家の如きは「定家を難ぜん輩は冥加もある可らず。罰を蒙るべき事なり。」とまで崇められ、その稱讃の聲は一世に喧しかつた。この藤原家には、俊成の頃から播磨國細川庄と近江國小野庄とが、領地として代々傳はつてゐた。阿佛尼が爲家の室となつた時には、爲家には先妻宇都宮頼綱の女やその他の女との間に、既に爲氏、爲教、爲顯、源承、慶融、隆俊及び女、大納言典侍があつた。阿佛尼に爲相が生れたのは、爲家六十七歳で、長男の爲氏はこの時四十二歳であつた。爲相についで爲守が生れ、その連子に紀内侍があつて、その家庭は相當複雜を極めてゐた。

最初爲家が年五十九で出家した折、細川庄は當然長子爲氏に讓つたものと想像される。勿論此時爲相はまだ生れてゐなかつた。その後十九年を經て爲家の死ぬ時、彼は遺言して當時十三になる爲相に細川庄を與へたのである。然るに爲氏はこの遺言に背いて所領の分割を履行しない。茲

に領地の爭が起つた。阿佛尼はこの訴訟の爲遠く鎌倉に下つたのである。その時の紀行文がこの「十六夜日記」である。

さてその內容は、誰も認める如く四つの段から成立つてゐる。第一段は序で、鎌倉下りの理由と出立前の事がらが書いてある。「昔壁の中より求め出でたりけむふみの名をば、今の世の人の子はゆめばかりも身の上のことゝは知らざりけりな」と、劈頭先づ爲氏が亡父の遺命に背くことを難じ、「道を助けよ子をはぐくめ、後の世をもとへとて深き契を結びおかれし細川の流も故なくせきとめられしかば、あととふ法の燈も、道を守り家を助けむ親子の命も、もろともに消えを爭ふ年月を經」ては、「をしからぬ身一つはやすく思ひすつれども、子を思ふ心の闇はなほ忍びがたく、道をかへりみる恨みはやらむかたなく」「ゆくりなくいざよふ月にさそはれていでなむ」と決心したことを述べ、幼き爲相、爲守等と別れを惜み、父祖の遺著に奧書して殘し、彼等の異父姉紀內侍に子等の後見を托したりしてゐる。殊に五人の子との訣別の一齣は、綿々の情を盡してゐるが、この序の部分に感じられるのは、緊張した筆力であり、ひたむきな心情である。こゝには阿佛尼の生命が打ちこまれ、阿佛尼の情熱化した精神の力が波打つてゐる。

第二段は、「粟田口といふ所より車はかへしつ」にはじまつて、十月十六日（建治三年）に京を

出て、同月二十九日に鎌倉に着くまでの十四日間の旅の記録である。その旅程は「東關紀行」の旅と同じく、不破の關を越えて美濃路を辿り、濱名湖口を渡らずに湖北を迂回し、「足柄は道遠し」とて「箱根路にかゝ」つて鎌倉に着くのであるが、その地勢形勝を叙して、簡明なる間に所々旅情をのべ、怨恨の念を洩らし、子を思ふ親の心を寫せるうちに、深い趣を味ふことが出來る。

第三段は鎌倉到着後、翌年（弘安元年）八月二日迄約十個月間に京都の知人と往復した手紙、特に贈答の和歌を主として記したもので、その中に自ら鎌倉に於ける阿佛尼の樣子が窺はれる。鎌倉では月影の谷に宿りを求めたが「浦近き山もとにて風いと荒く」「山寺の傍なればのどかにすごくて、浪の音、松の風たえず」旅愁をそゝること切なる住居であつた。かくて都からの消息をせめてもの慰めとして、焦慮の中に幕府の裁斷を待つてゐたが、折からの非常時に、事件の進捗も意の如くならない中に年を越えた。翌年三月には瘧を病んだが、御讀經のしるしに病は癒えた。八月には京なる子ども等から歌を寄せて批點を求めて來た。爲相からの五十首の旅の歌の中に、

かりそめの草の枕の夜な〳〵を思ひやるにも袖ぞ露けき

とある傍に小さく、

秋ふかき草の枕に我ぞ泣くふりすてゝ來しすゞむしの音を

と書き添へた母心のやさしさ。爲守からも三十首を寄せて「これに點あひて、あしからむこと細かにしるしたべ」といつて來たのにも涙ぐまれる。「これも旅の歌にはこなたを思ひてよみたりけりと見ゆ。下りしほどの日記をこの人々の許へ遣したりしをよまれたりけるなめり。」など思ふ。これで見ると、日記はまづ旅の記が書かれて、京なる愛兒のもとへ送られたらしい。鎌倉滯在中の京との消息は、その後折にふれて整理されたものらしい。

第四段、最後の長歌は、阿佛尼が訴訟の勝利を鎌倉八幡に祈願したもので、さすがに繫爭多年未解決のまゝ捨てられてある焦燥を歌ひ、爲政者の怠慢を非難し、わが方に有利な判決あらむことを希つてゐる。

文章は平安朝式の假名文ではあるが、「蜻蛉日記」や「紫式部日記」とは大いにその趣を異にしてゐる。かれが冗漫軟弱の風あるに對し、これは假名文としては著しく簡潔であり、率直であり、平明である。

平安朝の女流が、何事も「さるべき宿世」と觀じて、悲しい境遇にもあきらめの心をもつてつゝましく處したのに對し、これは現實に强く生きんがために、飽くまでも戰はうとする心である。文章が平安朝式でありながら、しかも簡潔で近代的趣致のどことなく感ぜられるのは、この心の

所産であるからである。

要するに、「十六夜日記」は、作品としての價値はさまで高いものではないが、子を思ふ心の闇に、苦しみ且鬪ふ女性の傷ましい表白には心をうたれるものがある。

乳母の文　はその女紀內侍に與へたものと傳へられてゐるが、まづ二十にもならぬ少女ながらも、賢明なるを見込んでよろづ申し送るとて、內侍の自尊心に訴へ、次に、

まづたゞ人は心にて候なり。いかにみめかたちうつくしく、うきよにならびなくきこえ候へ共、心さだまらず、うつゝとしも候はねば、いたづらごとにて候ぞ。御心に心をそへて、いかにあらまほしくおぼしめし候御事にて候とも、をのづから世にもれ聞して人のにくみそしりぬべからむことをばふるまはせおはしまし候ましく候ぞ。

とて、精神修養の第一なるを說き、それより書、歌、繪、琴、宮仕、住居、佛事等を述べ、

はねをばうづめども、名はうづまずと申ぞかし、なからむ後のうき名をば、今のはぢよりも心うかるべきと思召し候へ。

と、人は一代名は末代と內侍の自重を望み、最後に佛の道に精進の要を說いてゐる。

辨內侍日記

辨內侍は土佐繪の開祖で、且有名な歌人である藤原信實の女で、後深草天皇の內侍であつた。信實は父隆信と共に歌人として名があり、似繪の名手として知られてゐる。「水蛙眼目」(頓阿)に、信實の女子三人共歌人であることを述べ「辨內侍は老の後尼になりて、阪本の北に仰木といふ所にこもりゐて侍りけり。龜山院きこしめして、七夕御會の時題をつかはされければ、七夕衣に、秋來ても露おく袖のせばければたなばたつめに何をかさまし、とよみてはべりけるを、げにさこそとあはれがられおはしまして、つねに御とぶらひなど侍りけるよし、仰木に行宣法師とてふるきものの侍りしが語申りき。」と書いてある。「辨內侍日記」(二卷)は一名を「後深院辨侍集」又は「辨內侍寬元記」と呼ばれてゐる。上卷には寬元四年正月二十九日に、富小路殿で後嵯峨院が御讓位になつた事から、後深草天皇の建長元年九月に至るまでの事を記し、下卷には、建長元年十一月冷泉殿で行はれた五節に始つて、建長四年十月十三日迄の事を記して居る。此の日記は辨內侍の和歌とその詞書とを基にして、後の人が書き上げたらしいともいはれてゐるが、現存のものには文章に錯簡脫落が多く、又年月や事實の誤も少くない。

作者は才氣煥發の人で、此の點に於て淸少納言を聯想する。「枕草子」に餅粥の日の尻打のことが面白く書いてあるが、此の日記にも頭中將爲氏の尻を打たうと女房どもが大童になつて立騷い

た樣子を面白く書いてゐる。また建長二年の秋のこと、御所には人も少くて淋しかつた或日、當時八歲の御幼帝は御つれづれのすさびに、面を作つて人々ををどせと仰せになる。內侍は鬼の面をかぶつて袴を胸まで搔きあげ、濃い單衣を頭からかぶつて臺盤所の戶口に立つてゐた。さあ大變、鬼が出たといふので臺盤所の者どもが弓を持つて走つて來る。此の騷ぎに鬼の方が怖氣づいて逃げ出す途端に、溝に陷つて笑はれたといふやうな無邪氣な話も書いてある。

要するに、この日記は、いかにも少女らしい素直な魂の表現である。その心境は、苦惱をへて來た個性に比べて、やゝ深刻味をかくかも知れないが、無邪氣であり、正直であり、淡白であり、快活であり、そして乙女らしい一種の若さがある。それ故、池田龜鑑氏は「日記の本文を熟讀するに、着眼の焦點といひ、叙述の態度といひ、そこには青春の若々しさは見えても、中年女の惱みは如何にしても見ることが出來ないから、多分十七八歲頃に出仕したものであらう。」と言つて居られるが、書中には殆んど陰欝な空氣はなく、後宮の才媛を取卷いた陽氣な場面が次か次へと現れて來る。池田氏が「微笑の文學」といはれたのは誠に適切ないひ方である。

中務內侍日記　內侍は藤原永經の女で、伏見天皇が春宮であつた頃から仕へた。その宮廷生活は、後宇多天皇の建治から伏見天皇の正應の頃に及んでゐることは、日記によ

つて知られるが、それ以前の明細な閲歴は知る事は出來ない。

日記は、弘安三年伏見院の御儀法のことから始まり、正應五年病重くして里にさがつた迄の事をのせてある。主として宮廷の公事に關する記述で「辨内侍日記」より筆づかひが詳密である。作者はや、老境に入り、且病弱な人であつたやうに思はれる。日記の冒頭に、

いたづらに明しくらす春秋は、たゞ羊の歩みなる心地して、末の露もとの雫に、後れ先だつ例の儚なき世を、且思ひながらも、得達の緣には進まず、皆生々世々に迷ひぬべき人間の八苦なるぞあさましき。

とはしがきを書いてゐるが、日記の全體が此の心持で彩られてゐる。種々な體験をした中年者の心の惱みを愬へたといふ趣が一卷を貫いてゐるのであつて、そこには現實と理想との矛盾に泣く中年の婦人の淋しき苦惱があり、焦慮がある。

要するにこの日記は作者の內面生活の苦惱から生れ出た作品であつて、樣々の人間苦に遭遇して、もがきあえぎながら、しかもなほどうすることも出來ない沈痛な人生苦の一面を示してくれるのであつて、一種陰森な瞑想的な表現の文學といふことが出來る。

第三章　女流歌人

建禮門院右京大夫

建禮門院右京大夫は、その名の示すごとく、「平家物語」の女主人公中宮建禮門院に仕へて、平家沒落の哀史にその生涯を織り込んだ薄命の女歌人である。由來我が國の歴史の中で、平家の盛衰の一幕ほど詩的な時代はない。右京大夫はその運命を平家の盛衰と共にしてゐるが、その閲歴は「平家物語」にも「源平盛衰記」にも現れてゐない。又その歌は「新古今集」にも載つて居ない。その爲に餘り人に知られて居ないのである。彼女は能書の家として代々その譽の高い世尊寺家に生れ、「源氏物語」の最初の註「源氏釋」の著者であり、「山路の露」の作者に擬せられてゐる藤原伊行を父とし、千載新勅撰の作者伊經を兄とした。母は笛の名人大神基政の女で、琴の名人で夕霧と云つてゐた。甥の行能も亦歌の上手である。かやうに藝術的教養に惠まれた環境に生ひ立つた彼女は、やがて宮中に上つて、時の帝なる高倉天皇の中宮建禮門院に仕へたのである。彼女の宮廷生活は、彼女にとつては一生の春であつた。而してこの宮仕の間に、小松内大臣重盛の次男で、かの三位中將維盛の弟なる右近の中將資盛に想はれた

のである。しかも樂しくはた悲しい物思ひに沈んだ日も多かつた。かゝる間に世は戰亂の巷となつて、驕る平家は滅亡の淵に沈み、遂に元暦二年の壇の浦の戰には、その愛人の死をさへ聞かねばならなかつた。彼女の悲しむべき生涯の閲歴は、こゝにその絶頂に達したのである。それから以後、大原山の奥深く建禮門院をお訪ねした事もあつた。又、叡山の麓坂本に資盛の遺兒を見るべくさまよつたりなどして、幾年かの後、再び宮仕する身となつた。かくて變りはてた大内山のうちにあつて、そのかみのことども思ひ出でつゝ、貞永の頃に至るまで齡を保つてゐたものと思はれる。

彼の集は、その晩年に時の歌壇の巨匠藤原定家が「新勅撰集」を撰ぶべき勅命をうけ、その料にとのもとめによつて、忘れ難く覺ゆることどもを思ひ出づるまゝに書きとゞめた由が記されてある。家の集とは云ひながら、その詞書をたどると、まさにこれ一自叙傳を成して居つて、その美しく憐れな閲歴が、美しく又哀れな筆で記されてある。

歌數は約二百首、ほゞ作年代順に編次されてゐる。巻初の部分は、比較的ゆつたりとした調の歌が多く、建禮門院に奉仕中、重盛、時忠、成親の妻、知盛、忠度、通盛、維盛、資盛との交渉や贈答の歌などが見える。

彼女の追憶はまづ承安四年の春にはじまる。

高倉院の御位の頃、承安四年などいひし年にや、正月一日中宮の御方へ内のうへわたらせ給へりし御引直衣の御姿、宮の御もののゝぐ召したりし御さまなどの、いつと申しながら目もあやに見えさせ給ひしを、もののゝほとりより見參らせて心に思ひしこと

雲の上にかゝる月日の光見る身のちぎりさへうれしとぞ思ふ

その頃は平氏の世の盛り、一門の公達は、やがて來む沒落の悲運を知らず、嘗ての藤氏華かなりし頃にも似て、堂上に花を競うてゐた時である。若い男女の間には、甘美な戀愛がさゝやき交されたであらう。若くして美しかつた彼女を繞つて、どれだけの公子達がいひよつたことか。彼女が戀せじと心一つに思ひきめたのも、さうした男達の心のつれなさをいくらも見てゐたからのことであつたらうが、その堅い心の戸も、新三位中將資盛の切なる求愛の前には開かれずにはゐなかつた。

何となく見聞くごとに心うちやりてすぐしつゝ、なべての人のやうにはあらじと思ひしを、朝夕女どちのやうにまじりゐて見かはす人あまたありしうちに、とりわきてとかくいひしを、あるまじきことやと人のことを見聞きても思ひしかど、契とかやはのがれ難くて……

互に想ひ想はるゝ身となつた。しかも「思ひの外に物思はしき事」などあつて、樣々に思ひ亂れる事も多かつた。

散らすなよ散りなばいかにつらからし忍ぶの山の忍ぶ言の葉

のやうな少女らしい歌もあるが、

夕日うつる木ずゑの色のしぐるゝに心もやがてかきくらすかな

もの思へば心の春も知らぬ身になに鶯のつげに來つらむ

の如きあはれな歌もある。彼女が資盛を思ふ心は常に涙ぐましい眞心から出てゐたが、資盛はとかく花に戲れる胡蝶の如き浮かれ心であつた。それ故「人の心思ふやうにもなかりしかば、すべて知られず知らぬ昔になしはてゝあらむ」と思へど、

つねよりも面影に立つゆふべかな今やかぎりと思ひなるにも

よしさらばさてやまばやと思ふより心よわさのまたまさるかな

清く忘れて昔の心にかへらうと思へば、あやにくにその人の面影は常よりも深く胸に刻まれ、心弱さ一入まさり、とかく物を思うて泣きあかせば、花田の枕紙は涙に色あせてゐる。

初のほどは、人に知られたならば、如何に恥しからうと、つゝむ心に色々と思ひ惱んだが、今

は我が心一つに包みかねて親しい友に、

さきの世の契にまくるならひをも君はさりとも思ひ知るらむ

と言ひおくる。かくて、彼女の物思ひは日と共に增すばかりであつた。折から資盛には正妻が定る事になつた。かねて豫期したことながら、さすがに心細さの堪へがたくて、馴れし枕の傍に硯のあるを引きよせ、

誰が香に思ひうつると忘るなよ夜な夜な馴れし枕ばかりは

と書きつけて見る。妬まず恨まず、せめて此の枕ばかりは忘れ給ふなと願ふ心の、いかにやさしい事であらう。その時資盛の返しは、

心にも袖にもあまるうつり香を枕にのみやちぎりおくべき

といふうれしいものであつた。しかし資盛に正妻が定まつた後は、昔通りの交は續かなくなつた。

かうして物惱ましい中にも樂しい日を送つてゐた右京大夫の前に、終に平家滅亡といふ悲劇の幕は切つて落されたのである。榮華の春は壽永の兵火に亂されて、平家の一門は蒼惶として西海に走ることになつた。

壽永元暦などの頃、世のさわぎは、夢とも幻とも哀とも何ともすべて〳〵いふべききはにもなかりしが、よろづいかなりしとだに思ひわかれず。中々思ひも出でじとのみぞ今までも覺ゆる。見し人々の都別るゝと聞きし秋ざまのこととかくいひても思ひても、心も言葉も及ばれず。まことの際は、我も人もかねていつと知る人なかりしかば、ただ言はむ方なき夢とのみぞ、近くも遠くも見聞く人みな迷はれし。……つく〴〵と思ひつづけて胸にもあまれば、佛にむかひ奉りて、泣き暮すよりほかのことなし。されどげに命はかぎりあるのみにあらず、さまかふることだに心にまかせで……

又ためしたぐひも知らぬ憂きことを見てもさてある身ぞうとましき

資盛は無論一族と共に西に下つた。

いづこにていかなる事を思ひつゝ今宵の月に袖しぼるらむ

月明き今宵、今は何處の土地に如何なる事を思ひながら嘆いてゐることであらう。雲のたゝずまひ、風の音につけても、思ひやられるのは愛する人の身の上である。しかしその中に、

恐ろしき武士どもいくらも下る。何かと聞くにもいかなることを何時聞かむと悲しう心うく、泣く〳〵寢たる夢につねに見しまゝの直衣姿にて、風の夥しく吹く所に、いと物思はしげにうちながめてあると見て、さわぐ心にさめたる心地いふべきかたなし。唯今もげにさてもやあるらむと思ひやら

れて
浪風のあらき騒ぎにたゞよひてさこそはやすき空なかるらめ
と思ひやられた。やがて資盛の叔父なる重衡は捕はれて東へ下るといふ噂を聞いたり、又資盛の兄なる維盛が熊野の浦で入水したといふ事も聞いた。そして最後に悲しい便は都にある大夫の許に届けられたのである。平家滅亡の最後の幕は開かれて資盛も壇の浦の藻屑と消えた。かねて一度はかういふ便を聞くであらうと覺悟はしてゐたものゝ、尚その悲しい便を聞いては、悲しさの餘心もぼんやりとして、數日間寢てのみくらして泣いてゐた。
ためしなくかゝる別れになほとまる面影ばかり身に添ふぞうき
いかで今は甲斐なき事をなげかずて物忘れする心にもがな
かばかりの思ひに堪へてつれもなく猶ながらふる玉の緒も憂し
など切々として胸をうつあはれな歌をうたつた。又ある時は、形見の消息の反故をかき集め、それを料紙にすかせ、自ら經文を書き、その背面に地藏六體をゑがき奉つて故人の魂を供養したが、それは「人めつゝましければ、疎き人にも知らせず、心一つに」なされた營であつた。又見るともなく目にふれた亡き人の筆のあとに、

悲しさはいとゞもよほす水莖の跡はなか〳〵消えぬとぞおもふ

と紅涙をしぼることもあつた。

忘れがたき日迭るまゝに、或時は北山なる亡き人の別莊を訪ひ、又或時は煙となつた平家の邸址に車をとゞめて、暫し懷古の涙に咽んだ。かくて一日、大原の奧深く寂光院に建禮門院を訪ひ奉ることになつた。

女院大原におはしますとばかりは聞きまゐらすれど、さるべき人に知られてはまゐるべきやうもなかりしを、深き心をしるべにてわりなくたづねまゐるに、やう〳〵近づくまゝに山路のけしきよりまづ涙は先だちていふ方なきに、御庵のさま御すまひ事がら、すべて目もあてられず　昔の御ありさま見まゐらせざらむだに、大方の事がらいかゞ事もなのめならむ。まして夢現ともいふかたなし。秋深き山おろし近き梢にひゞきあひて、筧の水の音づれ、鹿の聲、虫の音いづくもの事なれど、ためしなき悲しさなり。都ぞ春の錦をたちかさねてさぶらひし人々六十餘人ありしかど、見忘るゝさまに衰へたる墨染の姿して、はつかに三四人ばかりぞさむらはるゝ。その人々にも、さてもやとばかりぞわれも人もいひ出でたりし。むせぶ涙におぼほれて、言もつゞけられず。

今や夢昔や夢とまどはれていかにおもへどうつゝともなき

あふぎ見し昔の雲の上の月かゝるみ山のかげぞ悲しき

見る物聞く事すべて涙の種である。夜深き冬の黑い空に大きな星が一面に光り輝くを見ても、亡き人の魂ではないかと怪しい心もちがする。日吉の山路に吹き散る雪の面白き景色を見ては、見せばやと思ふ人のなきが悲しく、志賀の浦邊にさすらうては、その浪風に戀しき人の沈んだ海を思ひやり、時鳥を聞いては死出の山路のたよりなつかしく、春の小鳥の歌を聞いては「晴れたる空もかきくらしつゝ」と悲まれる。

かやうな年月を送る彼女は、姿こそ變へぬけれど、心は既に世を捨て果てゝゐたのである。然るに「さるべき人々さりがたくいひはからふことありて、思ひの外に」再び宮仕する身となつた。此の後彼の女は一生を宮仕で終へたやうであるが、その間に於て見聞く事が、又すべて昔の人を思ひ出す種であつた。彼女はその人を呼ぶに「さめやらぬ夢と思ふ人」「はかなかりし人」「とかく物を思はせし人」などいろ〳〵の言葉を用ひてゐる。何れも彼女の胸に深く刻まれた資盛の姿である。

以上は右京大夫集のごくあらましを語つたに過ぎないが、右京大夫の一生は、實に「平家物語」十餘卷の縮圖とも言ふべきものである。その歌三百餘首は、何れも平家時代の女性に通じた悲痛

の聲である。右京大夫の悲しみの歌は、どの歌も皆沈痛を極めたもので、その眞にして切なる情は、平安時代の才女の間には到底求められないものである。

式子内親王

式子内親王は王朝の末期、爛熟せる王朝文化が源平武士の馬蹄に踏み荒される頃、後白河院の皇女として生れ給うた。御母君は大納言藤原季成の女、高倉三位局成子の方である。母系はすべて文雅の道にすぐれ、公實、實行、公教、實房等の如きは、いづれも有數の勅撰集の作者であるが、内親王も亦天性の麗質にめぐまれ、並ぶものなき當時女流の第一人者であらせられた。然し乍らその御華かなるべき御生涯も、時流の前にはあまりにも御痛はしい限りであつた。

内親王は二條天皇（御兄）の平治元年十月、賀茂齋院となられたが、高倉天皇の嘉應元年七月病を以て退下せられた。それより後は、淸くもつゝましい獨身の生活を送らせられ、ひたすら御感懷を歌に托せられてゐたのであるが、源平爭亂による世相の推移、公家より武家へと移り行く世の相は、内親王の御身にも、時運に殉じ給ふ御血緣の方々を、次々へと見つめて居らなければならなかつた。保元の亂に引續く平治の亂は、御父君御幽閉の悲運さへも生み出したのであるが、やがて御叔父崇德院や、御兄以仁王、圓惠法親王、さては御甥安德天皇に至る迄、相次いで悲壯

な犧牲となられた。その二三十歳に亙る御成年期の精神は、生々として「千載集」或は御家集の中に寫されてゐる。ついで頼朝が鎌倉に幕府を開いた建久三年には、後白河法皇の崩御があつた。内親王はその遺領大炊御門院を受けて移り住まれたが、こゝは當時歌人として時めく良經の嘗ての邸宅であつたので「古里の春を忘れぬ八重櫻これやみし世にかはらざるらむ」と述懷せられてゐる。御長姉殷富門院の御出家もこの年である。

かく痛ましき時流の犧牲者として、わびしき日々を送つて居られたが、苛酷な運命の魔手は尙もその答を緩めようともせず、思ひがけない疑は内親王の御身に投げかけられた。鎌倉からの使が齎した知らせは、藏人橘兼仲、僧觀心の陰謀事件に、内親王も御關りあらせられるとの恐しい言葉である。何たる暴言！　それが武家の專橫に出た策に過ぎない事は明白に分つてゐた。しかし内親王はこの宿命に逆はうとはされなかつた。そして御姉殷富門院と同じくみぐしを下し、承如法と號せられた。正治二年、高倉院(御弟)の孫皇子(後の順德天皇―時に四歲)を御猶子とせられたが、その前年頃より病が重つて、翌三年正月二十五日に薨ぜられた。その病狀の委曲は、内親王に親交あつた藤原定家の「明月記」につくされてゐる。あの一代の傑作正治初度百首は、この大患の第二年目の八月、やゝ小康を得られた間の御作で、その御疲勞によるか、作り終へて

定家にお示しになつた二三日後より又々御發熱、遂に薨ぜられたのである。その百首中の、

曉(あかとき)のゆふつけ鳥ぞあはれなるながきねぶりを思ふ枕に

あともなき庭の淺茅に結ぼほれ露の底なる松蟲のこゑ

などの御歌を拜誦して、その詞句の間にうかゞはれる病床の御生活と、淋しき御一生とを想ふとき、到底涙なしには鑑賞申し上げられないのである。

內親王の御歌には、初め神に仕へられ、後に剃髮してお過しなされたその御生涯にふさはしい、つゝましやかな氣稟と品位があり、更に纎細な感情と洗煉された技巧とがある。そしてそれが錯綜して洵に微妙な格調の美しさをなしてゐる。「後鳥羽院御口傳」には、

ちかき世によりては、大炊御門前齋院、故中御門攝政、吉水僧正これら殊勝也。齋院は殊にもみもみとある樣によまれき。

とある。この御評にある「もみもみと」は、恐らく纎細巧緻な技巧を用ひながら、氣品ある御歌を成し給ふた內親王の歌風を指して仰せられたのであらう。

山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかゝる雪の玉水

山ふかく閑居した身の、雪どけの水によつて春の音づれを聞くといふ、さびしい中に情趣の深い

境地である。言葉の表には、遲い山家の春と、庵の木戸のあたりと、キラ〳〵する玉水とが描かれてはゐるが、しかも歌全體として感受するものは、かうした世界の中に、靜かにそれをながめてゐる女性の姿である。神に仕へた美しい皇女の面影は、この一首に髣髴として想像される感がある。

はかなくて過ぎにし方を數ふれば花にものおもふ春ぞ經にける

夢の如き過去の忘却のうちに、花に心を盡くした春のあはれの記念のみが殘るよしを述べた、いかにも女歌人らしい優しい心境である。

花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる

花は散りはてた、それとはなしに茫然とうち眺めてゐると、何の色彩もなくむなしい空にしと〳〵と春雨が降つてゐる。花でなくて春雨が……。しづかな哀傷である。春のくれ方のさびしくも美しいおもむきがしんみりと味はれる。

玉の緒よ絕えなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

戀愛に命をかけた情熱を詠じた御歌である。「百人一首」にある有名な御歌であるが、その外戀の歌として、

わすれてはうちなげかるゝ夕かな我のみ知りてすぐる月日を

わが戀はしる人もなしせく床のなみだもらすなつげの小枕

などがある。對象をなす具體的事實については勿論知る由もないが、かの謠曲「定家」にもあるやうに、內親王に關する戀愛說話も存在する程で、何等かの事實が存したかもしれない。その御身分から申せば、極めて自由を束縛せられてゐたので、外見は極めて單調な御生活であつても、心の內ではかうした御歌そのまゝの氣持を味はれたことがないとは申せない。

俊成女

新古今集時代の代表的女流歌人の一人として異彩を放つ俊成卿女は、源通具の室、卽ち具定の母である。出家して中院禪尼、嵯峨禪尼、越部禪尼などゝ呼ばれた以外には餘り知られず、古來俊成卿女と呼ばれ、「尊卑分脈」「御子左家系圖」等にも俊成の女となつて居り、一般にその儘信ぜられてゐたが、最近に至つて、それは誤で、實は俊成の孫であることが明かになつた。

若狹守忠親の女は、もと藤原爲隆の妻で、隆信を生んだ。ところが爲隆に死に別れたので、俊成の後妻となつて、定家や家成などを生んだ。四十歲餘になつても子供のなかつた俊成は非常に喜んだ。併し俊成には女の子がなかつたので、もの足らなく思つてゐたところが、爲隆との間に

生れた隆信が才能があつたので、俊成は愛してゐたが、隆信には女の子があつた。即ち俊成の妻の孫女である。この孫女が非常に才藻豐かであつたので、俊成は殊の外鍾愛した。そして俊成が出家して釋阿と名前を變へてからは、その孫を養女とした。これが俊成女として知られてゐる有名な女歌人である。

彼女は成人の後源通具の妻となつて一男一女を生んだ。通具は新古今集撰者の一人であり、且名門であつたので、その點では非常に幸福な結婚といふべきであつたが、間もなく夫通具は他の權勢ある女房と婚し、彼女を省みないやうになつた。彼女の否運はこれから訪れたのである。そこで彼女は押小路の家に、心變りした夫を恨みつゝ佗しい月日を送つてゐたが、遂に意を決して、女房として院の御所に奉仕することになつた。「明月記」によると、彼女が院に召されたのも、歌藝によつてのやうであるが、歌人として世に知られるやうになつたのはこの前後からのことで、爾後二十年近くの間行はれた歌合などには、殆んど名を列してゐないことはない。歌作者として最も油ののつた時代である。然し乍らこの華かなるべき女官生活、歌人生活のかげには、女として、妻として、母として堪へ難い悲憤怨恨のやるせなさがあつたことゝ思ふ。

むさし野の草のゆかりに鳴く雉子春はむかしのつまならねども

の歌は、この頃の作者の心境を詠んだものであらう。夫に別れ、生みの子を殘して女官生活をして居り乍ら、子ゆゑの情愛に心が引かれて、春野に鳴くきゞすの思ひであるといふので、母としての作者の痛切な悲哀を歌つたものである。

歌人としての經歷を見るに、建仁元年の「千五百番歌合」に加へられ、其の後禁裏の御歌會にも召されること屢々であつたらしい。建仁二年の十首歌合、建仁三年歌合等に作者として列り、同三年俊成九十賀の屛風歌に、

秋をへてやどりし水のこほれるをひかりにみがく冬の夜の月

の秀歌を遺してゐる。その翌年、俊成の歿後、彼女の運命は寧ろ不遇に傾いて行つた。「新古今集」の編纂により、その歌人的地位は確立されたが、實父隆信はついで世を去り、建保三年五首歌合の中にある「行路秋」と題された、

蟲の音もわが身ひとつの秋風につゆわけわぶるをのの篠原

といふ詠は、當時の彼女の薄命を表象したものの如く感ぜられる。安貞元年通具に死別し、寛喜中出家して尼となつた。暫く母の墓所である嵯峨の中野附近にゐたと思はれる。嵯峨禪尼とか中野禪尼とかいはれるのはこの故であらう。かくて後越部鄕に赴き、建長六年歿した。

彼女の作は「新古今集」以下の勅撰集に百餘首が入り、群書類從所收「俊成卿女集」には二百四十餘首があつめられ、他に歌合等にあるものを加へると約五百七十首傳へられてゐる。

その歌風については源通光が「續歌仙落書」の中に、

風體こまやかに面白きさまなり、萩をみなへし花さきみだれたる野邊の夕ぐれに、蟲の音をきくとやいふべからむ。

と評してゐるのは、よく卿女の歌風を理解した言であるが、その歌は優艷である。一口に優艷といふが、單なる優艷でなく、上品な沈靜のある趣であり、華麗でなく優美である。優艷な情趣を女性的纖細美を以て表現してゐるのが彼女の歌といふことが出來る。なほ鴨長明の「無明抄」に、

人々の語りしは俊成卿の女は、晴の歌よまんとては、まづかねてもろもろの集どもくりかへしよくよく見て、思ふばかり見終りぬれば皆とりおきて、火かすかに灯し、人音なくしてあんじける。

とあるが、これは彼女の歌風を知る上に、誠に面白い記録であると思ふ。

風かよふ寢ざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

美しい春夜の夢と、ねざめの床に通ふ花の香、その中にゐる麗人、すべてこれ優美艷麗の情趣である。

いそのかみふるのわさ田を打かへし恨みかねたる春のくれかな

うらがれて下葉色づくあき萩の露ちる風に鶉なくなり

すまの浦や天とぶ雲の跡晴れて波より出づる秋の月かげ

二條院讃岐

讃岐は平清盛を討滅しようとして敗れ、遂に平等院に自刃した源三位頼政を父として生れた。母は東四郎源忠清の女で、兄に伊豆守仲綱があり、従姉妹に宜秋院丹後がある。父頼政は武略を以て知られてゐるが、和歌をよくし、風流の才に富んでゐた。近衛天皇の御悩の種であつた怪鳥鵺を退治して恩賞にあづかつたことは、餘りに有名であるが、「上るべきたよりなければ木の本に椎（四位）を拾ひて世を渡るかな」と詠んで三位を賜つたことも人のよく知る處である。兄仲綱も亦歌人としてすぐれた人であつた。かうした環境に人と爲つた讃岐が、才媛として世に出たのも偶然ではない。二條天皇に御仕へしたのは、何時からであつたかくはしい事は分らないが、家集を見ると、二條天皇の御製に對して御答へ申し上げた讃岐の歌が所々に見えてゐて、御信任の厚かつたことが知られる。

二條院御時月のあかゝりける夜、終夜南殿の花御覽じて曉ちかくなりてさとへ出て、次の日まゐらせたりし

花ならず月も見をきし雲の上に心ばかりは出すとをしれ

御返し

出でしより空に知りにき花の色も月も心に入りぬ君とは

花の盛に、心ならず里へ出でしにまゐらせける

あかずして雲井の花にめかるれば心空なる春の夕暮

御返し

いつとても雲ゐの櫻なかりせば心そらなることはあらじな

二條天皇の崩御の後に、建久六年の頃には中宮にも奉仕してゐたやうである。なほ「玉葉集」にある善信法師との應答歌によると、讃岐が伊勢に所領があつたこと、その所領について問題が起つたので、京都から鎌倉に下り、源實朝に訴へたことなどが分る。

二條院の讃岐、伊勢宮にしる所侍りけるに、わづらひあるによりて、鎌倉右大臣に愁へむとて、あづまにくだり侍りけるに、ほゞのごとくなりて、歸りのぼりければ申しつかはしける　善信法師

をはたゞのいたゞの橋のとだえしを踏み直しても渡る君哉

返し　二條院讃岐

朽ちぬべきいたゞの橋のはし造り思ふまゝにも渡しつるかな

讃岐の歌は「二條院讃岐集」として一百首の歌が集められてゐるが、土御門天皇の建仁元年には、定家、家隆、雅經、有家等碩學名流の間に伍して千五百番歌合に列し、女流歌人として奮鬪し、或は民部卿家經房の歌合にも出座し、正治二年院五百首にも出詠してゐる。「讃岐集」の歌は、平明流暢で着想に巧な歌が多く、抒情味は豐かであつて、純叙景歌はあまり見えないが、「新古今集」や千五百番歌合に入つたものは、家集の歌に較べると、一段と微妙巧緻なるものとなつてゐる。

山高み嶺の嵐に散る花の月に天ぎるあけがたの空

あとたえて淺茅がすゑとなりにけり賴めしやどの庭の白露

などは纎細巧緻、よく後期の作風を代表するものである。

なほ讃岐は或る時「石に寄する戀といへる心を」といふ題で、

我が袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかはくまもなし

といふ歌を詠じ、これが世間にひろまつて絶唱として賞讃され「沖の石の讃岐」といふ異名を得たと傳へられてゐる。

小侍從

待宵の小侍從とは、元は阿波局といつて、高倉院の御位の時、宮仕してゐた女房である。眉目姿人に勝れ心優しき女性であつたので、主上の御慈みも深く、心通はす大宮人も數多くあつた。中でも德大寺實定卿は特別の御執心で、常々御忍びで小侍從の許へ通つて居られた。嘗て皇后より、「待宵と後朝と何れかあはれまさる」と問はれて、

待つ宵に更け行く鐘の聲聞けば歸る朝の鳥はものかは

と詠じて、「待宵の侍從」と呼ばれてゐた。間もなく平家の人々は新都を福原に遷し、德大寺左大將實定卿も新しい都へ住居を遷してしまはれたが、舊都を偲ぶ情は待宵戀しさの思ひと共に日に日に深くなりまさり、遂に八月十五日の夜、福原より上り給うた。ところが、

何事も皆變り果て、稀に殘る家は、門前草深くして庭上露滋し、蓬が杣淺茅が原、鳥の臥戸と荒果てゝ、虫の聲々怨みつゝ、黃菊紫蘭の野邊とぞ成にける。今故鄕の名殘とては、近衛河原の大宮ばかりぞましましける。大將御所へ參り、先隨身を以て、惣門を叩せらるれば、內より女の聲にて、誰ぞや蓬生の露打拂ふ人もなき所にと咎むれば、是は福原より大將殿の御上り候と申す。左候はゞ、惣門は鎖のさゝれて候ぞ、東の小門より入らせ給へと申ければ、大將さらばとて、東の小門より參られける。大宮は御徒然に、昔をや思召出させ給ひけむ、南面の御格子開させ、御琵琶遊されける所へ、大將つと參られたれば、暫く御琵

琶をさしおかせ給ひて、夢かや現か、是へ／＼とぞ仰せける。待宵の小侍従と申す女房も、此御所にぞ候はれける。大將この女房を呼出て昔今の物語共し給て後、小夜も漸く更行けば、舊き都の荒行くを、今樣にこそうたはれにけれ。

舊き都を來て見れば、淺茅が原とぞ荒れにける。月の光は隅なくて、秋風のみぞ身にはしむ

とおし返し／＼三返歌ひ澄されたりければ、大宮を始め奉て、御所中の女房達、皆袖をぞ濡されける。さる程に夜も漸く明行けば、大將暇申つゝ、福原へぞ歸られける。供に候ふ藏人を召て、侍從が何と思やらん、餘りに名殘惜げに見えつるに、汝歸て兎も角も言てこよと宣へば、藏人走り歸り、畏て、是は大將殿の申せと候とて、

物かはと君が言ひけん鳥の音の今朝しもなどか悲しかるらん

女房とりあへず、

待たばこそ更け行く鐘もつらからめ歸る朝の鳥の音ぞうき

藏人走り歸りて、此由申たりければ、さてこそ汝をば遣したれとて、大將大に感ぜられけり。それよりしてこそ、物かはの藏人とは召れけり。

彼女の歌は、群書類從所收「小侍従集」には、百二十一首の作を收め、別に勅撰集にないもの三

小侍從

待宵の小侍從とは、元は阿波局といつて、高倉院の御位の時、宮仕してゐた女房である。眉目姿人に勝れ心優しき女性であつたので、主上の御慈みも深く、心通はす大宮人も數多くあつた。中でも德大寺實定卿は特別の御執心で、常々御忍びで小侍從の許へ通つて居られた。嘗て皇后より、「待宵と後朝と何れかあはれまさる」と問はれて、

待つ宵に更け行く鐘の聲聞けば歸る朝の鳥はものかは

と詠じて、「待宵の侍從」と呼ばれてゐた。間もなく平家の人々は新都を福原に遷し、德大寺左大將實定卿も新しい都へ住居を遷してしまはれたが、舊都を偲ぶ情は待宵戀しさの思ひと共に日に日に深くなりまさり、遂に八月十五日の夜、福原より上り給うた。ところが、

何事も皆變り果て、稀に殘る家は、門前草深くして庭上露滋し、蓬が杣淺茅が原、鳥の臥戸と荒果てゝ、虫の聲々怨みつゝ、黃菊紫蘭の野邊とぞ成にける。今故鄕の名殘とては、近衞河原の大宮ばかりぞましましける。大將御所へ參り、先隨身を以て、惣門を叩せらるれば、內より女の聲にて、誰ぞや蓬生の露打掃ふ人もなき所にと咎むれば、是は福原より大將殿の御上り候と申す。左候はゞ、惣門は鎖のさゝれて候ぞ、東の小門より入らせ給へと申ければ、大將さらばとて、東の小門より參られける。大宮は御徒然に、昔をや思召出させ給ひけむ、南面の御格子開させ、御琵琶遊されける所へ、大將つと參られたれば、暫く御琵

琶をさしおかせ給ひて、夢かや現か、是へ〳〵とぞ仰せける。待宵の小侍從と申す女房も、此御所にぞ候はれける。大將この女房を呼出て昔今の物語共し給て後、小夜も漸く更行けば、舊き都の荒行くを、今樣にこそうたはれにけれ。

舊き都を來て見れば、淺茅が原とぞ荒れにける。月の光は隅なくて、秋風のみぞ身にはしむとおし返し〳〵三返歌ひ澄されたりければ、大宮を始め奉て、御所中の女房達、皆袖をぞ濡されける。さる程に夜も漸く明行けば、大將暇申つゝ、福原へぞ歸られける。供に候ふ藏人を召て、侍從が何と思やらん、餘りに名殘惜げに見えつるに、汝歸て兎も角も言てこよと宣へば、藏人走り歸り、畏て、是は大將殿の申せと候とて、

物かはと君が言ひけん鳥の音の今朝しもなどか悲しかるらん

女房とりあへず、

待たばこそ更け行く鐘もつらからめ歸る朝の鳥の音ぞうき

藏人走り歸りて、此由申たりければ、さてこそ汝をば遣したれとて、大將大に感ぜられけり。それよりしてこそ、物かはの藏人とは召れけり。

彼女の歌は、群書類從所收「小侍從集」には、百二十一首の作を收め、別に勅撰集にないもの三

十三首を附載してある。源頼政、源雅實、平經盛等との交渉を示す數多い作があり、殊に頼政との戀愛生活を語る一聯の贈答は、頼政の家集にも載つてゐて、對照して見ると興味深いものがある。

歌風は、修辭技巧をこらした時流とやゝ異り、眞率な情が詞となつて、自ら清新な調をなしてゐる趣があるが、「待つ宵」の歌のやうな巧な言ひざまよりも、寧ろ情感の發露した點に特徴があるやうに思はれる。

朝ごとにかはる鏡のかげ見れば思はぬかげのかひもなきかな

石清水清き流の末々に我のみにごる名をすゝがばや

宮内卿

上には吟詠を好ませらるゝ後鳥羽上皇がおはしまし、下には俊成、定家、家隆などの名匠が輩出して、互に錦心繡腸を鬪はし、瑰麗な辭句をつかつて幽玄の韻を謡ひ、所謂新古今風の一體を詠み出でた時代には、歌道は實にその極盛に達して、和歌所の設置されたのもこの頃である。從つて、勅命で歌合の一人にでも選ばれた者の名譽はどれ程であつたか、今からは考も及ばないことであらう。建仁元年、千五百番の歌合の催された時、世に許された歌道の達人どもの中に、未だ年若い宮内卿が、後鳥羽院の仰せによつて、特にその人數に

加はる事が出來た。

院の上宣ふやう、

「こたみは皆世に許たるふるき道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。構へてまろが面起すばかり、よき歌つかうまつれ。」

とおほせらるゝに、面うち赤めて涙ぐみて侯ひけるけしき、限りなきすきの程もあはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとり〴〵なる中、

薄く濃き野邊の緑の若草にあとまで見ゆる雪のむら消え

草の緑のこきうすき色にて、去年のふる雪の遲く疾く消えける程を推しはかりたる心ばえなど、まだしからむ人は思ひよりがたくや。この人年經るまであらましかば、げにいかばかり目に見えぬ鬼神をも動しなましに、若くて亡せにしいといとほしくあたらしくなむ。(増鏡)

その作は「新古今集」(十五首)の外、諸勅撰集にも多く採られてゐる。

柴の戸をさすや日かげの名殘なく春くれかゝる山の端の雲

いよ〳〵春は限り、ことにその日も夕べとなつた。柴の戸を閉して置かうと見ると、入日の光も消え〴〵となつて、山の端に雲の色も心細う靡いてゐる。今年の春も遂に終となつた。無限の寂

しみ、無限の恨み、餘韻また絕えむとして絕えぬ感がある。

花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく舟のあと見ゆるまで

鏡の如き水面、なべて落花のたゞよふ中を、舟があとつけて行くといふ、湖上の靜かに美しい景色を髣髴たらしめる。

心あるをじまの海士(あま)の袂かな月やどれとはぬれぬものから

「海邊の月」といふことを、八月十五夜の和歌所の歌合に詠んだものであるが、白波の花と碎けるところに、月光を浴びて立つ海士の姿も想像されて、趣向のうちに印象の鮮かさを含んだ非凡な作である。宮廷女歌人の美しい想像も偲ばれる。

宜秋門院丹後　丹後は源三位頼政の弟頼行の女である、後鳥羽院の中宮宜秋門院に仕へた。建仁二年の新宮撰歌合、或は元文詩歌合等に、宮內卿や俊成女と相伍して秀歌を殘してゐる。新宮撰歌合の際「海邊秋月」といふ題で、

忘れじな難波の秋の夜半の月こと浦にすむ月は見るとも

と詠んで、判者俊成卿から「こと浦にすむめづらしくをかし」と賞讃され、それより「こと浦の丹後」と呼ばれるやうになつた。

作品は「千載集」「新古今集」「新勅撰集」等に採られてゐる。

山里は世のうきよりも住みわびぬことの外なる峯の嵐に

袖のうへの涙ぞいまはつらからぬ人に知らるゝはじめと思へば

永福門院

永福門院は西園寺大納言實兼の第一女で、名を鏱子と呼ばれた。母は内大臣通成の女顯子である。正應元年六月八日、時の帝伏見天皇の女御として入内し、同八月二十日、御年十八歳を以て中宮に立たれた。當時ときめく大相國の姫君として、御入内の行列の美しかつた事は、「增鏡」の作者の筆によつて殘りなく寫し出されてゐる。

唐廂の御車にたてまつりて、上達部十人、殿上人十餘人、本所の前驅二十人、つい松ともして御車の左右に侍ふ。出車十輛、……(中略)わらは下仕、御雜仕はしたものに至る迄、髮かたちめやすく、親うち具し、少しもかたほなるなく整へられたり。

然し門院には御子がなかつたので、經氏の宰相の女經子が生み奉つた若宮(後に後伏見天皇)を御子として養ひ給うた。永仁六年七月には天皇は位を親王に讓つて太上天皇となり、中宮もその八月永福門院と號せられた。

門院は和歌を善くし、嘉元二年七月、後深草天皇の崩御を以て大喪に服された時、

思はざりしふぢの袂の秋の露かかる契のあはれをぞ知る

と詠まれた。法皇は伏見上皇に遺詔して、愛琴「玉章」などを門院に讓られたので、上皇はそれを門院に傳へ、

玉章のその玉の緒のたえしより今はかたみのねにぞ泣かるゝ

と詠み添へられ、門院は、

いにしへをかくる涙の玉づさのかたみの聲に音をぞ添へぬる

と御返しがあつた。

かくて門院は正和五年、御年四十六歳を以て落飾遊され、興國三年七十二歳の長壽を保つて薨ぜられた。その晩年は天下は亂れ果て、都大路は坂東武士の馬蹄の塵を蒙り、月卿雲客の金殿玉樓は東國武士の土足に荒され、世の亂れ、政治の葛藤の間に悲喜さま〴〵の波を潜ぐられた。

歌人としての門院は、天皇が二條爲氏、爲世等の舊調を好ます、專ら京極爲兼の新調を善ばれたので、門院も同じくこの風に親しみ、その作品は清新艶麗の趣があり、健かな自然描寫に秀でゝゐる。その自然を描寫する態度は、伸び〳〵と素直で、第一に感ぜられるのは、對象に對する眞實な見方である。然もその後に潜む澄んだ靜かな境地を見のがすことは出來ない。

山風の吹きわたるかときく程に檜原に雨のかゝるなりけり

ざつと音がして來た。また山風が吹いて來たかと思ふと、山の檜原に雨があたつて音を立てゝゐるのであつた――、山の靜かな中に眺めた自然觀照のたしかさが見られる。

花の上にしばし移ろふゆふづく日入るともなしに影きえにけり

花の上に入日の光がうつつてゐる。その中ふと氣づくと、入日はもう山の端に入つてしまつて、その夕映の光も消えてしまつた――、ほんのしばらくの間の出來事、靜中の動ともいふべき夕ぐれのある情景を巧にとらへてゐるが、「入るともなしに影きえにけり」は、よく自然を凝視して、その眞實をつかんでゐる。

まはぎ散る庭の秋風身にしみて夕日の影ぞかべに消え行く

秋の夕日の壁にうつつてゐたのが消えて行くといふ所に、わびしい秋の情緒が感ぜられるが、そこには近代的感覺美がたゞよつてゐる。

むら雀こゑする竹にうつる日の影こそ秋の色になりぬれ

竹林に深くさし透つた日の光に、幽かに漂うてゐる秋の氣分を感ずるとは、何といふ纖細な感受性であらう。季節の自然的推移を、鋭くしかも靜かに見守られた御歌である。

あれぬ日の夕べの空はのどかにて柳の末も春近く見ゆ

これも亦作者の感受性のたしかさを語る作である。冬も終りに近づいて春來らんとする頃、ふと氣づいてみると、柳の枝などまだ小さい芽をふかぬながらに、何となく枝にはりが見えて、枯木に生氣がついてゐるのが分る。殊にのどかな日などは――、作者の觀照のたしかさはそれをとらへたのである。

第四章　軍記物語に現れたる女性

一　軍記物語

王朝の盛時花と榮えた貴族文化は、その末期に爛熟の頂點に達し、やがて衰へはじめ、外觀の美しさは保ち乍らも、その精神は潑剌さを失ひ、四海の波はなほ靜かに見えたが、天の一方には一團の黑雲が現れ、今にも急雨が襲うて來るやうな不安な氣分が漲つてゐた。やがてその黑雲は滿天を覆うて、いよ〳〵暴雨は沛然として至り、世は平和の天地から大動亂の巷となり、安らかさ

を食つてゐる人々は太平の夢を破られ、その動亂爭闘に驚きの目を見はつた。この時に當つて、榮華の夢に耽り、優美柔弱を誇つてゐた公卿達は、狼狽して爲すところを知らず、その細腕にはこの動亂を鎭めることはもとより出來ず、ひたすら武士の鎧の袖にすがつて救助を求めた。こゝに於て、武士は今まで公卿の從者として、お供であり侍ひであつたが、漸くその實力と使命とを自覺して、多年の間鍛へ來つた鐵腕を振つて中央に活動し、時代の花形役者となり、爭亂を鎭め紛爭を解決した。これら公卿の沒落から新興武士階級の興起より活躍に至る歷史上の事實を基として、更にそれを作者の脚色により、理想化し空想化したのが、この時代の軍記物語である。

保元平治の亂から源平時代にかけての約三十年間は、まことに闘戰と爭亂の動搖時代であつた。これらの勇壯なる戰闘と、それに伴ふ哀別離苦の悲しみとを巧に組み合せ、而もそれを描くに、力强い文體と優雅な文體とを入り交らせ、剛健悲壯なる輪廓のうちに優麗高雅なる情味をたゝへ、或は强く或は優しく、明暗二つの姿を描き乍ら、そこに僞らざる人生の相を示さうとしたのが軍記物語である。

それ故軍記物語は、決して合戰描寫に始終してゐるものでなく、「力」と並んで「愛」を强調し、禮讃してゐる。そしてこの愛は義理と結び付いて、君臣親子夫婦の間に强烈豐潤に發動し、深刻

なる闘戰の叙事と相對峙してそれを和げ、そこに一脈の優しく明るく淸い情調風味を齎してゐるのである。卽ち殺伐陰慘なる合戰記の中に、優美可憐なる情話を隨所にさしはさんで、「雄々しさ」と「ものゝあはれ」「力」と「愛」の兩要素を、或は對抗させ、或は混淆させ、一種の對照美をあらはしながら、爭鬪と愛慾の人間生活そのものを描いてゐる。而も、この爭鬪と愛慾の交錯する人生そのものを統一するものは、現世無常、欣求淨土の佛敎思想である。それ故、戰亂の世界を寫したこの軍記物語には、痛快豪壯の場面も多々あるが、それらの底には常に悲觀的な悲哀無常の空氣が流れてゐる。

二　保元、平治の女性

「保元物語」と「平治物語」とは、二つとも體裁も內容も文章も大變似てゐる。作者と考へられる人に、葉室時長、中原師梁、源喩僧正の三人がある。しかし、何か有力な材料でも出ない限りは、作者について確定した意見を立てることはむづかしく、現在では作者未詳といふより外はない。

「保元物語」は三十七段に分れ、保元の亂を中心に、前後二十八年に亙る事變を記してある。「平

治物語」は、保元三年八月、後白河天皇の御讓位に始り、正治元年正月、賴朝が歿する迄、約四十一年間に起つた事件を物語つてゐるが、特に詳しく述べてあるのは、信賴、義朝が兵を擧げて以後、義朝が殺された後、遺兒の處分に至る迄の二ケ月ばかりの事である。

軍記物語は何處迄も軍記物語である。作者の目的は、當時の花形役者たる源平二氏の消長を記すにある。それ故女性に關する記事は頗る少い。殊に保元平治は、軍物語が主要な記事であつて、時に平安朝の物語の餘波として情的記述があるにしても、それは曉天の星の如く、光は誠に淡いものである。

「保元物語」に現れた女性として見るべきものは、爲義の北の方だけである。卷三に「爲義の北の方身を投げ給ふ事」の一條がある。爲義は一敗地に塗れて七條朱雀の露と消え、六條堀川の宿所にあつた、乙若（十三）龜若（十一）鶴若（九つ）天王（七つ）の四人の子が、母の物詣に出た留守の間に捕へられて、船岡山で殺されてしまつた。物詣の歸途、これを知つた母が、この儘をめ／＼生き延びて、爲義入道の妻が……と生恥さらすのも恥かしい。さればとて出家してみても幼い子供等を見ると、殺された愛兒の事どもが思ひ出されて念佛の障になる。といふので桂河へ身を投げたといふ悲しい一篇の物語である。

「今朝八幡へまゐりつるも、判官や子供の爲ぞかし、氏神にておはしませば、憑みを懸けてぞまゐりしに皆々失せぬらん。神ならぬ身の悲しさよ。かゝるべしと思ひなば、なにかは物へ參るべき、今朝しも彼等に添はずして、最後の姿を今一目見ざりしことの悔しさよ。夜べ此等が面々に、我等も來らむといひしを、樣々に、賺して、寢入りたる間に、賢顏に詣でたれば、定めて下向したらば、口々に恨みんこと、いかゞと答へましと、今迄も案じたるに、いかに大菩薩のをかしく思召しつらん。せめては一人なりとも具したらば、終には失はるゝとも、今迄は身に添へてまし。夢にもかく知るならば、なにしに八幡へ參るべき、妾小供に打ち連れて、舟岡とかへ行き、失せにしひとつ所にて兎も角もなるならば、かほどに物は思はじ。」

と思ひこがれて氣絶するのである。これらの言動によつて知られる爲義の北の方は、全く平安朝時代の女であつて、そこに武士的女性の面影を見出すことは出來ない。畢竟平安朝式の情の女であつて、意志の人ではなかつたのである。

然るに「平治物語」の源義朝の女に於て、始めて武士的女性の出現を見るのである。いはゞ義朝の女は、鎌倉女性の先驅をなすものと言ふことが出來よう。

義朝の女は義朝と江口の君との間に出來た女である。義朝が六波羅の合戰に敗れ、落ちのびんとした時、彼女は都に殘されて六條堀河館にゐたけれども、父義朝は居なくなつた後の不憫さを

見かねて、之をなきものにしてその苦しみを除いてやらうと、その役を鎌田政家に命じた。政家は好まぬところながら、君命もだしがたく涙を呑んでその館に向つた。

鞭を擧げて六條堀河の宿所に馳せ來りて見ければ、軍に恐れて人一人もなきに、持佛堂の方に人音しければ、行きて見るに、姫君佛前に經打讀みておはしけるが、政家を御覽じて「さてそも軍は如何に」と問ひ給へば「頭殿（義朝）は打負けさせ給ひて、東國の方へ御落ち候ふが、姫君の御事をのみ悲しみ進らさせ給ひ候ふ。」と申せば、「さては我等も只今敵に搜出され、是こそ義朝の娘よなど沙汰せられ、恥を見んこそ心憂けれ。あはれ高きも卑しきも、女の身程悲しかりけることはなし。兵衛佐殿は十三になれども、男なれば軍に出で、御供申し候ふぞかし。わらは十四になれども、女の身とて殘置かれ、我が身の恥を見るのみならず、父の骸を穢さんことこそ悲しけれ。兵衛先我を殺して、頭殿の見參に入れよ。」と口說き給へば「頭殿もこの仰にて候ふ。」と思せば「さて嬉しき事かな。」とて、御經を卷納め、佛前に向ひ手を合せ、念佛申させ給へば、政家つと參り殺し奉らんとすれども、御産屋の中より抱き取り奉りし養君にて、今まで有立て進らせたれば、いかでか哀になかるべき、涙に昏れて、刀の立所も覺えずして泣きゐたり。姫君「敵や近付くらん。疾く〳〵。」と勸め給へば、力なく三刀刺して御首を取り、御死骸をば深く收めて馳歸り、頭殿の見參に入れたりければ、只一目御覽じて涙に咽び給ひけり。

何といふ健氣さであらう。十四の少女にして男も及ばぬ落付きと雄々しさ、これこそ確に新時代の女である。情念偏重の平安時代には到底見る事の出來なかつた雄々しい姿である。

敗殘の將義朝は、尾張の國野間に長田父子に迎へられたが、間もなくその兇刄に斃れた。鎌田政家も殺された。政家の妻は長田忠致の女であるが、夫が父の手に斃れたと聞いて、

「我は女の身なれども、全く二心は無きものを、如何に恨しく思ひ給ふらん。親子の中と申せども、我もさこそ思ひ侍れ。飽かぬ中には今日既に別れぬ。情なき親子添ふならば、又も憂目をや見んずらん。同じ道に倶し給へ。」

とて、しばらくは涙にくれてゐたが、やがて夫の刀を拔く儘に、胸元に差當て、俯伏し樣に伏し、自刄して相果てた。しかしそれは取り亂しての自殺ではない。義理と貞節とのために自ら刄に伏したのである。武將の妻として、男子も及ばぬ決行である。

又、延壽が生んだ姫君の夜叉御前は、賴朝が捕へられて都へ上つたと聞き、

「我も義朝の子なれば、女子なりとも、終にはよも助けられじ。一人々々失はれんよりは佐殿と同道にこそせめてならめ。」とて、伏沈み給ひけるを、大炊延壽色々に慰めて取留め奉りけり。その瀨過ぎければ、さりともと思ひ、心緩しけるにや、二月十一日の夜、夜叉御前只一人靑墓の宿を出で、遙隔りたる杭瀨川

に身を投げてこそ失せ給へ。十一歳とぞ聞えし。武士の子はなどか幼き女子も猛かるらんとて、哀を催さぬ者もなかりけり。

僅か十一の少女にしてこの態度、實にこれも亦武士的氣質のあらはれであらう。

次に「平治物語」には常磐御前の話が出てゐる。常磐は九條院の雜仕、義朝の妾となつて、今若乙若、牛若の三子をあげたが、義朝が尾張に刺された後　女の身には詮方なく、忘れ形見の三兒を抱いて「身一つだに隱し難きに、三人の子供を引具して誰かは暫宿すべき」と途方にくれた。さうしてひそかに京をのがれて伏見なる伯母の家に行かんとした。けれども「習はぬ旅の朝立ちに、露と爭ふ我が涙、袂も袖もしほるゝばかり、」であつたが、殊に「二月十日の事なれば、餘寒猶烈しく、嵐に氷る道芝の氷に足は破れつゝ、血に染む衣の裳、子故餘所の袖さへ萎るゝ」程であつた。然るに淸盛は常磐の行衞をたづねんため、遂に常磐の母を囮として六波羅に捕へたのである。しかし淸盛の前に召し出された母親は、

「我六十に餘る身の命、今日明日も知らぬ老の身を惜しみて、未だ遙なる孫共の命をばいかで失ひ侍るべきなれば、知りたりとも申すまじ。まして知らぬ行末、何とか申し候はん。」

と凛然と言ひ放つてゐる。健氣な老女は、行先長い孫の身の上を思うては、よし彼等の居所を知

つてゐても、決して口外すまい。たとひ我が身は如何なる攻苦にあつても、孫や我が子常磐の安泰をはからうといふ男々しい決心をあらはしてゐるのである。然るに常磐は母の苦難を看過することが出來ず、六波羅に自訴して出て、

「母はもとより科なき身にて侍れば、御釋し候ふべし。子供の命を助け給はんとも申し候はず。一樹の下に住み、同じ流を渡るも此世一つのことならず。あはれ高きも卑しきも親の子を思ふ習こそ皆さこそ侍らめ。妾この子どもを失ひては、甲斐なき命片時も堪へてあるべきとも覺え侍らねば、先づ妾を失はせ給ひて後、子どもをば兎も角も御計ひ候へ。」

と泣く〳〵清盛に訴へたのである。清盛は之を憐み、且つその容色を愛して三子の死を宥さうと思つた。一族の者達は皆これに反對したのであるが、已に頼朝を許してあるのだから、その弟に當る此等の幼兒を許すのは當然だと云つて三兒を殺さず、常磐を納れて之に和し、一女を生ますに至つたといはれてゐる。

三　平家物語の女性

平家物語概説

平家一代の榮華の華かさと、沒落の哀れさとを美しく謠つた「平家物語」は、軍記物語中の第一といはれ、同時に鎌倉時代文學の隨一に擧げられ、日本文學の最も主な代表作の一に數へられてゐる。

作者については諸說があり、保元平治と同じく葉室大納言時長といひ、或は信濃前司行長ともいひ、その他菅原爲長の名もあげられてゐるが、いづれとはつきり定めることは出來ない。唯僧侶の手になり、謠物として多くの人々の手によつて、次々と改刪もされ、增補もされたものであらう。

之を內容の上から見ると、二大部分に分つことが出來る。前半は平氏の隆盛期で、强烈な自我をあくまでも押し通さうとした淸盛の思ふがまゝの振舞と、その一門が權勢に驕つて、平氏に非ざれば人に非ずとまで豪語して、天下の政令を一手に掌握した榮華陶醉の記錄、後半は、さしもに誇つた平氏の一族も、豪放なる新興源氏の彈力ある壓迫に堪へかねて、遂に悄然として都を逋れて西海に漂ひ、八島壇浦の戰に苦戰を續け、遂に海底の藻屑と消え果てる迄の、慌しくも哀れな沒落の記錄である。

まことに平家一門の榮華は、いみじくも華かなものであつた。平安朝四百年に於ける藤原氏の

榮華を煎じつめても、これ程ではなからうと思はれる程の豪勢さであつた。然るに盛者必衰の理に漏れず、流石に猛き入道相國も、恐しい熱病にかゝり、風の前の塵の如くにはかなく悶死すると、天下の形勢は忽ち急變して、二十年間驕りを極めた平家一門も、今は天の果地の極みにも身を置く所がなく、慌しく東西に漂泊の果は、終に一門をあげて西海の波の底に沈みはて、男子たる以上は如何に幼くとも探し出されて、むごたらしく殺されてしまひ、最後に一人はかなき露の命をながらへて、淋しい日を送つてゐた入道相國の御女建禮門院も、花の顔未だ衰へさせ給はぬ二十九のうら若き御身を以て出家し給ひ、洛北大原の奥の寂光院にわびしき幾春秋を送り迎へて、はかなくもあひはて給ふことになる。その一代の興亡起伏、榮枯盛衰の有様は、何とあわたゞしく、はかなく、めまぐるしいものであつたであらう。その榮枯盛衰の事實そのまゝが既に絶好の戯曲をなしてゐる。作者はその上に、更に多分の空想を配して、これを一層劇化し詩化して、榮枯當なく盛衰掌を反すやうな、哀れにはかなく痛ましい人生の相を如實に現してゐる。

物語に現れた女性

「平家物語の女性は」と問はれた時、誰しも先づ小督、横笛と即答するであらう。又妓王、小宰相、千手、巴、靜をも思ひ出すであらう。殊に大原御幸の女院を欽慕しない人はありますまい。試みに「平家物語」の目次を見れば、そこには女性の名や、女性

關係の事件を題目にしてゐるのが十數章もあり、女院の御爲には特に一卷が設けられてさへある。

これら物語に現れた女性は、多くは平家の一門であつて、殆んど總て平安朝式の色彩を帶びて居り、而もそれは急角度に降下する悲しい運命に引摺られ、境遇の逆轉によつて捲き起された、はかなき愛の破綻、主從、親子、兄弟、夫婦の間における哀別離苦、一家一族の分散流離など、さまざまな苦しい現實に痛めつけられ、もがきつゝ淪滅の淵に沈んで行くのであつて、殆んど總てが、はかない殉情的薄命者の面目を具へてゐる。妓王といひ、二代后といひ、葵の前といひ、小督といひ、維盛の北の方といひ、小宰相といひ、內裏の女房といひ、千手といひ、横笛といひ、いづれも皆この例にもれぬ薄命の女性たちなのである。もとよりその贏ち得た運命のさまざまはとりどりに異つてはゐるが、あのやさしを命の、なさけを命のとでもいふべき、王朝式の女性の面影は、そのいづれにも通じて、ありありとこれを見ることが出來るのである。

そして又、この物語に描かれた薄命の佳人の多くは、やがては浮世の醜さ儚さを厭ひ、彌陀の淨土の美しさに憧れて、墨染の衣に彿の道をたどる者が多い。

「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず。唯春の夜の夢の如し。」

これは此の物語の最初に書き出された名文句であるが、この一文は最後の灌頂の卷、「小原御幸」の建禮門院を結ぶ「皆往生の素懷を遂げけるとぞ聞えし」と相對して、全篇を貫いてゐる根本思想であつて、之を見ても、この物語が如何に佛教思想の影響を受け、讀む人をしてそゞろに哀愁の念を湧かしむる悲劇的傾向を帶びたものであるかを窺ふ事が出來るのである。然し此の哀愁の色の濃厚であつたのは、單にこの物語のみに現れた傾向ではなく、事實に於て平安朝最盛期から一轉した當時の時代的風潮であつて、これは佛教思想の影響による世相の變化でなければならない。

この意味に於て「平家物語」に描かれた薄命の女性達は、急角度に降下する悲しい運命にもだえるあはれな姿といひ、現世のはかなさを來世に求める欣求淨土の宗教的心情といひ、いづれも時代の姿を、最もよく身に現してゐる時代的女性といふことが出來よう。

妓王妓女と佛御前

平家一門の榮枯の因緣をさながら己が身に受けて、當時天下を掌に弄び、單純で無頓着な太政入道淸盛の寵愛を一身に集めた妓王は、とぢといふ白拍手の娘に生れて、その頃京中に聞えの高い白拍手であつた。これがために妹の妓女も一方ならず世にもてはやされ、母刀自も每月百石百貫の仕送りを受けて、京中の白拍手の羨望の的となつた。榮華を極めたその幸は、京中の白拍手が、妓王の「妓」の字を名に附けて、あやかるやうに願つたと

云ふ程である。

ところが三年ばかり經つて後、加賀から佛といふ白拍手が都に現れ、その評判を一身に集めることとなつた。佛は「我れ天下に弄ばるゝと雖も、當時めでたう榮えさせ給ふ平家太政の入道殿に召されぬことこそ本意なけれ。」とて西八條の館に推參した。淸盛は之を聞いて大いに怒り、早々追ひ返させたが、妓王の情あるとりなしによつて、御前に一さし舞ふことになつた。

その歌に、

君を始めて見る時は千代も經ぬべし姬小松
御前の池なる龜岡に鶴こそ群れて遊ぶめれ

とあつたが、佛御前は、固より天の成せる麗質、眉目姿世にすぐれ、聲もよく、節も上手であつたから、舞も見事に舞ひすました。淸盛は今はすつかり佛に心を奪はれて、その儘御殿に留めようとした。佛御前は驚いて、自分を取なしてくれた情ある妓王に對しても心苦しく、只管暇を願つたが、一徹な入道は却つて妓王に暇を出してしまつた。妓王は今は仕方なく、泣く〳〵障子に一首の歌を書き殘して館を去つた。

萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはで果つべき

翌年の春になつて、淸盛から妓王の許へ使者があつた。佛御前が餘りにつれ〴〵に見えるから、參つて今樣をも歌ひ、舞などをも舞うて慰めよとの御綻である。妓王は餘りの事にとかくの返事にも及ばず、只泣くばかりであつた。その間にも淸盛からは再三の催促である。これを聞いて母刀自は妓王に細々と事理を說いて諭したので、妓王も切なる母の勸めもだし難く、泣く〳〵西八條殿に伺候した。やがて今樣を一さし舞ふとて、

佛も昔は凡夫なり我等も終には佛なり
何れも佛性具せる身を隔つるのみこそ悲しけれ

と身を託ちながら御前を退出して、世をはかなみ、遂には嵯峨野の奧なる山里に柴の庵を結び、二十一歲で尼となつた。妹の妓女も姉の後を慕つて十九歲で剃髮し、母も亦二人の娘の後を追うて出家し、母子三人一つの庵に行ひすまし、只管後世を願つて念佛三昧に日を送つてゐた。

かくて春過ぎ夏たけぬ。秋の初風吹きぬれば、星合の空をながめつゝ、天の戶わたる梶の葉に思ふこと書く頃なれや、夕日の影の西の山の端にかゝるを見ても、日の入り給ふ所は西方淨土にこそあんなれ、いつか我等もかしこに生れて、物も思はで過さんずらんと、過ぎにし方の憂きことども思ひつゞけて、たゞつきせぬものは淚なり。

と、寂しく葎すその柴折戸をほと〳〵と叩くものがある。絶えて尋ねる人もない庵に、誰であらうと窺ふと、紛ふ方なき佛御前であつた。佛御前は此の朝清盛の邸を脱け出し、妓王母子の行ひすます庵を慕つて尋ねたのであつた。驚いて事の由をたづねる妓王に答へて彼女は、

「まことにつく〴〵ものを案ずれば、娑婆の榮華は夢の夢、樂はてゝ何かせん。一旦の榮華にほこつて後世を知らざることの悲しさに、今朝まぎれ出で、かくなりてこそ參りたれ。かくなりたる上は日ごろの科は許したまへ。許さんとだに宣はば、諸共に念佛して一つ蓮の身とならん。それにも心行かずば是より何所へも迷ひ行き、如何なる苔の莚松が根にも倒れ伏し、命のあらん限り念佛して往生の素懷をとげんと思ふなり。」

とさめ〴〵と搔き口說くのであつた。やがて祇王も淚おさへて、

「わごせには恨もなく歎きもなし。今年はわづかに十七にこそなりし人のそれ程までに穢土を厭ひ、淨土を願はんと思ひ入り給ふこそ誠の大道とこそはおぼえ侍らひしか、うれしかりける善智識かな。いざ諸共に願はん。」

とて、四人は一つ庵に住んで、朝夕共に佛前に香花を供へて、他念なく祈願を捧げて後世を願つてゐたが、やがて皆極樂往生の素懷を遂げたといふことである。

小督

小督も「平家物語」に描かれた可憐な女性である。高倉天皇ははじめ葵の前といふ女房を寵愛せられたが、世の聞えを憚つて御側に召されず、獨り物思ひに沈んで居られた。そしてある時、

忍ぶれど色に出にけり我が戀は物や思ふと人の問ふまで

と書いて葵の前に賜つた。葵の前はこれを受取つて懷に入れ、顏うちあからめたが、間もなく病氣に罹つてうち臥すこと五六日ではかなくなつてしまつた。天皇はいたく戀慕の情に沈ませられ、御惱みとて供御も召されない有様なので、中宮の御はからひで小督といふ女房を參らせた。小督は櫻町中納言の女で、禁中第一の美人といはれた上、琴の雙びなき名手でもあつた。冷泉大納言隆房が少將の頃、彼女に思を寄せ、その情にほだされて彼女も靡いてゐた。しかし、天皇に召されてからは少將が如何に言寄つても聽かなかつたので、少將は生きて人戀ふよりはいつそ死んで了はうと迄思ひ焦れた。これを聞いた清盛入道は、

「中宮も御女(清盛の女、建禮門院)冷泉の少將も又婿なり。小督に二人の婿とられては世の中よかるまじ。」

と激怒したので、彼女はおそれをなし、「我が身の上はともかくにもなりなん。君の御ため御心苦しと思ひて」或夜ひそかに內裏を紛れ出て、行方知れずとなつてしまつた。天皇はいたく嘆かせ

給ひ、大弼仲國に命じて、その行方を探させられた。仲國は仰せかしこみ、寮の御馬に跨つて、この月の夜に必ず彈かん琴の音をたづねて、明月に鞭をあげて嵯峨の里へと急いだ。

小鹿なくこの山里と詠じけん嵯峨のあたりの秋の比、さこそはあはれにも覺えけめ。片打戸したる家を見つけては、この内にも坐すらんと、ひかへ〳〵聞けれども琴ひく所はなかりけり。御堂などへも參り給へることもやと、釋迦堂を始めて堂々見まはれども、小督に似たる女房もなかりけり。かくて龜山のあたり近く松の一村ある所に、幽かに琴ぞ聞えける。峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、覺束なくは思へども、駒を早めて行く程に、片折戸したる内に琴をぞ彈きすまされたる。控えて之をきゝければ、少しもまがうべうもなく小督殿のつま音なり。樂は何ぞと聞ければ、夫を想うて戀ふといふ、想夫戀といふ樂なりけり。仲國さればこそ君の御事思ひ出でまゐらせて、樂こそ多けれこの樂を彈き給ふことの優しさよと思ひ、腰より横笛ぬき出し、ちつと鳴いて門をほと〳〵敲けば琴をはやがて彈き止み給ひぬ。

仲國はいろ〳〵慰めてその返事を君に捧げ、改めて又小督を召す使をやつた。小督は再び主上に仕へて姫君さへもうけられたが、心なき清盛のために遠ざけられ、又嵯峨野の奥に淸き尼僧の生活に入ることゝなつた。

小宰相

小宰相は藤原範方の女で、上西門院に仕ふる麗人であつた。十六の歳、女院に供奉して花見に行つた時、同じく供奉してゐた三位平通盛に見染められて、

吹きおくる風のたよりを見てしより雲間の月に物おもふかな

の歌を贈られたが、その儘返歌もせず徒らに三年を過した。その間歌に文に思ひの數々は贈られたが、玉章の數のみ積つて一向に靡く氣色さへなかつた。ある日彼女が宮中に參る途中、乘つてゐた車の中へ戀文を投げられたが、都大路の人繁き中を棄てることもならず、袴の腰に挾んでゐたのを御前で取落した。女院がそれを開けて御覽遊ばすと、綺爐の香深く筆の運びも世の常ならぬ有樣で「あまりに人の心强きもなか〳〵嬉しくて」など細々と書いて、

わが戀は細谷川の丸木橋ふみかへされてぬるゝ袖かな

と添へてあつた。女院は「是は逢はぬを恨みたる文や。あまり人の心强きも中々今は怨となんなる者を」と御自ら筆とつて、

たゞ賴め細谷川の丸木橋ふみ返しては落ちざらめやは

と認めて通盛につかはし、女院のはからひによつて二人は夫婦となつた。妹脊の契淺からず暮してゐたところ、通盛は一の谷の戰に出て戰死をした。彼女も、

南無西方極樂世界の教主彌陀如來、本願あやまたず、あかで別れしいもせの仲らひ、必ず一つ蓮に、
と念じつゝ、妊娠の身を屋敷に渡る船中から身を投じて夫の跡を追うたのである。

乳母の女房打驚き、傍を捜れ共おはせざりければ、唯あれよあれよとあきれける。人數多下りて取上奉らんとしけれ共、さらぬだに春の夜は習に霞むものなれば、四方の村雲浮かれ來て、潛け共潛け共月朧にて見え給はず。遥かに程經て後取上奉りたりけれども、早この世になき人となり給ひぬ。白袴に練貫の二つ衣著給へり。髮も袴もしほたれて、取上けれども甲斐ぞなき。乳母の女房手に手を取組み、顏に顏押當て、などや是程に思召立つ事ならば、妾をも千尋の底迄も引こそ具せさせ給ふべけれ。恨しうも唯一人留めさせ給ふもの哉。さるにても今一度物仰せられて、妾に聞させ給へとて、悶え焦れけれども、早此世に亡人と成給ひぬる上は、一言の返事に及給はず。纔に通ひつる息もはや絕果ぬ。去程に春の夜の月も雲井に傾き、霞める空も明け行けば、名殘は盡せず思へ共、さてしもあるべき事ならねば、浮もや上り給ふと、故三位殿の著背長の一領殘たるを引纏奉り、終に海にぞ沈めける。乳母の女房、今は後奉らじと續いて海に入らんとしけるを、人々取留めければ、力及ばず、せめての心の在れずさにや、手づから髮をはさみ下し、故三位殿の御弟中納言律師忠快に剃らせ奉り、泣々戒を保て、主の後世をぞ弔ひける。昔より男に後るゝ類多しといへ共、樣を替ふるは常の習、身を投ぐる迄は有難きためしなり。

千手

千手は手越の長者の女、頼朝に仕へた侍女で、眉目姿心様優にわりなき者であつた。嘉永三年、捕はれの身となつて鎌倉に下つた平重衡は、工藤宗茂のもとに預けられた。宗茂は情ある者であつたので、重衡を様々にいたはつた。頼朝も亦重衡の心を慰める爲に、千手の前を遣していたはらせた。重衡は千手の前を通じて、出家したい由を頼朝に乞うたが、頼朝は私の敵ならばともかく、朝敵として預つたのであるから、叶ふまいとて許さなかつた。その夕、雨が少しく降つて物淋しき折節、千手の前は琵琶、琴を持たせて參つた。宗茂は家の子郎黨十餘人と共に重衡に酒をすゝめ、千手の前が酌をしたが、重衡は興なげに見えるので、宗茂の勸めで千手の前が朗詠今樣などを謠ひ、又琴を彈じて興を添へた。重衡も漸く興に乘つて自ら琵琶をとつて彈じた。かくて夜もやう〳〵更け心も澄んで來た時、重衡は「東國にも斯樣な優美な人があらうとは思ひよらなかつた。何をでももう一聲」と所望したので、千手は「一樹の蔭に宿りあひ、同じ流をむすぶも、皆是れ先世の契り」といふ白拍子歌を誠に面白う歌ひ、重衡も、「燈暗うして數行虞氏が涙」といふ朗詠をした。この朗詠は、楚の項羽が漢の高祖に敗れ、最愛の妃虞氏と別れねばならなくなつた時、燈の暗くなる儘に虞氏が心細さに涙を流した趣を作つた朗詠で、重衡が自分と千手とを之に擬したものであつた。その中夜が明けたので、千手の前が歸つ

て來ると、頼朝は、

「平家の人々は、この二三年は合戰の外他事あるまいと思つたのに、さても三位中將の琵琶の撥音、朗詠の口ずさみも夜もすがら立聞したが、優にやさしい人であつた。」

と感歎した。その後千手は、重衡が南都で斬られたと聞いて、その夜の事が物思の種となつたが、やがて樣をかへ濃き墨染に窶れ果て、信濃國善光寺に行ひ澄して、重衡の後世菩提を弔つたのは哀れであつた。

横　笛

横笛は建禮門院に仕へた雜司の一人であつた。齋藤瀧口時頼は西八條の花見の宴に「雲をとゞめ、雲をめぐらす」横笛の妙なる舞の手振を見てより、その美しい姿にいたく心をうばはれて、妻に貰ひ受けようとしたが、武骨一邊の父は到底許すべくもなかつた。そこで時頼は、

「老少不定の境はたゞ石火の光に異らず。夢幻の世の中に、みにくきものを見て何かはせん　おもはしき者見んとすれば父の命に背くに似たり。しかじ憂世を厭ひまことの道に入りなん。」

と、遂げざる戀をはかなんで、あたら十九の男盛りを嵯峨の奥往生院に捨て、朝夕行ひすましてゐた。

横笛はこの由を傳へきいて、我をこそ捨てめ、樣をかへけんことの恨めしさよ。たとひ世をばそむくとも、などかはかくと知らせざらん。人こそ心强くとも尋ねて恨みんと思ひつゝ、ある暮方に都をいで、嵯峨の方へぞあくがれける。比は二月十日あまりのことなれば、梅津の里の朝風に、餘所の匂もなつかしく、大井の河の月影も、霞にこめて朧なり。一方ならぬ憐れさも、誰故とこそ思ひけめ。往生院と聞きつれども、定かにいづれの坊とも知らざれば、こゝにさまよひ、かしこにたゝずみ、尋ねかぬるぞ無情なる。

やうやく住み荒した僧房に念誦の聲がしたのを、瀧口が聲と聞き澄して「御樣の變りはておはすらんをも、見もし見え參らせんが爲に、わらはこそ是迄參て候へ。」とお供の女房をして告げさせた。

瀧口入道胸打騷ぎ、淺ましさに障子の隙より覗きて見れば、裾は露、袖は涙に打萎れつゝ、少し面瘦せたる顔ばせ、誠に尋ね兼たる有樣、

は如何なる大道心者も心弱うなりぬべきほどであつたが、瀧口は人を出して「全く是にはさる人なし、若し門違ひにても候らん」と言はせたので、横笛は情なう恨めしげに涙を抑へて立去つた。

その後瀧口は同宿の僧に語つていふには、

「是も世に閑かにて、念佛の障碍は候はね共、あかで別れし女にこの住居を見えて候へば、たとひ一度は

心強くとも、又も慕ふ事あらば心も動き候はん。」

と嵯峨を出で高野に上り、清淨心院に行澄して、未だ三十にもならざるに老僧姿に痩せ衰へて、高野の聖とあがめられた。横笛は「やがて樣をかへ、奈良の法華寺にありけるが、思ひのつもりにや遂にはかなく」(平家)なつたともいひ、「桂川の水上大井川の早瀨御幸の橋のもとにゆき、かづきたりける朽葉色の衣をば柳の朶にぬぎかけ、思ふことども書きつけて同じ枝に結びがき、歳十七と申すに川のみくづと」(盛衰記)なつたともいはれてゐる。

建禮門院

建禮門院平德子は、時めく入道相國清盛の長女として生れ、榮枯の變轉あわただしき一生を送られたのであるが、その一生は全く平氏一門の盛衰と步を一にされてゐるのであつて、平氏一門の榮華と沒落とを述べた平家全曲の趣は、女院の一代の經歷中に明かに見る事が出來るのである。女院は十五の春、玉の輿に乘つて入內なされ、高倉帝の女御となり、やがてその翌年には中宮となられた。淸盛は外戚として早く皇子御降誕を願つたのももつともの事であるが、「平家物語」には「此御娘后に立せ給ひしかば、入道相國夫婦共に、哀れ如何にもして皇子御誕生あれかし、位に卽奉りて外祖父外祖母と仰せられむと願はれける。」としるし、更に嚴島に月詣をさへ始めたと記してある。されば治承二年中宮御懷姙より御產まで、平氏一

門の騷ぎは一通りではなかつた。中宮は六波羅池の殿に居られたが、天皇には使を四十一社七十四寺に使はされ、僧侶及び陰陽博士を禁中に召されて安産を祈られ、中宮も亦使を清水、平野、日吉へつかはされた。法皇は自ら産室に臨んで千手經を誦せられた。なほ天下には大赦の令が發せられた。かくて安德天皇が生れ給うたのであるが、平氏一門の榮華は安德天皇の御降誕御卽位に至つて、その頂上に達し、一族は宮廷に出入して、かつての藤原氏の如く遊興にふけり、建禮門院を中心として、華かな生活は續けられてゐた。然るに盛者必衰の理に漏れず、さしもに誇つた平氏の榮華も束の間、壽永二年の秋には既に落日の悲運をうけて、悄然として西海に漂ひ、やがて壇の浦の戰に門院は主上の跡を追ひ奉つて、波の下なる都に住まはれようとしたが、源氏の兵により助け上げられ、やがて都へかへられることになつた。女院はこゝにその背景たりし平氏一門を失はれ、高倉天皇はすでに養和元年に崩ぜられ、京は安德天皇御西下の後は後鳥羽天皇の踐祚となつてゐて、京へかへられても其身を入れ給ふ所なく、やがて東山の麓吉田のあたりなるわびしき僧房に入らせられる事になつた。この僧房はもと奈良法師の坊で、住み荒して年久しい所であつたから、簾絕え閨あらはで、雨風も入るが儘なる所であつた。花は色々に匂ひはするが、主と賴む人もなく、月は夜な〳〵さし入るけれど、眺めて明す主もなかつた。昔は玉の臺を瑩き錦の帳

にまとはれて明し暮させ給うた身が、今は縁ある人々にも皆別れ果て給うて、あさましげなる朽坊に入らせ給うた御心のうちは、推し量るもあはれの極みであつた。かくて女院は、文治元年五月一日御落飾遊されたが、その頃のものあはれに亙らせらるゝ御心をうつし奉れば、

女院は桃李の御粧なほ濃やかに、芙蓉の御形もいまだ衰へさせ給はねども、翡翠の御簪附けても何かはせさせ給ふべきなれば、遂に御樣をかへさせ給ひてけり。浮世をいとひ、眞の道に入らせ給へども、御嘆は更につきせず、人々今はかくとて海に沈みし有樣、先帝二位殿の御面影、ひしと御身に添ひて、如何ならん世に忘るべしとも思し召さねば、露の命何しに今までながらへて、かゝる憂目を見るらんとて、御淚せきあへさせ給はず、五月の短夜なれども、明しかねさせ給ひつゝ、おのづからうちまどろませ給はねば、昔のことをば夢にだにも御覽ぜず、壁にそむけん殘んの燈の影かすかに、よもすがら窓うつ暗き雨の音ぞ冷たかりける。上陽人が上陽宮に閉ぢられたりけん悲も、是には過ぎじと見えし。昔を忍ぶ妻となれとや、故の主の移し植ゑおきたりけん花橘の風なつかしく、軒近く薫りけるに、山時鳥の二聲、三聲音づれて通りければ、女院ふるきことなれども、思し召し出でて御硯の蓋にかくぞ遊されける。

郭公花たちばなの香をとめてなくは昔の人ぞこひしき

かくて吉田の里にものあはれなる朝夕を送られたのであるが、「この御住居も猶都近くて、玉鉾の

道行人の人目も絶けれは、露の御命の風を待たん程、憂き事聞かぬ深き山の奥の奥へも入なば
や。」と、やがて大原山の奥寂光院に移り住ませ給ふことになつた。その寂光院は、

舊う造りなせる泉水木立、由あるさまの所なり。甍破れては霧不斷の香をたき、扉おちては月常住の燈を
かゝぐとも、かやうのところをや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲をみだりつゝ、池の浮草波間に漂
ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかかれる藤波の、裏紫にさける色、青葉まぢりの遲櫻、初花
よりも珍らしく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。
緑蘿の垣翠黛の山、繪をかくとも及びがたし。さて女院の御庵室を御覧あるに、軒には蔦朝顔はひかゝり、
忍まぢりの萱草、杉の葺目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざ
りけり。後は山、前は野邊、いざさ小笹に風騒ぎ、世に立たぬ身の習とて、憂節しげき竹柱、都の方の言
傳は、間遠に結へる猿垣や、僅に言問ふものとては、嶺に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、是等が訪れ
ならでは、薜の葛青葛、來る人稀なる所なり。

かゝる所に住居して佗しき餘生を送られたのであるが、周圍に侍ふ人とても「都で春の錦をたち
かさねてし人々六十餘人ありしかど、みわするゝさまにおとろへはてたるすみぞめの姿にて、わ
づかに三四人ばかりぞさぶらはるゝ」(建禮門院右京大夫集)のみであつた。かくて念佛三昧の生

活に空しく年月を送らせ給ふ中に、御病氣になられて打臥し給うたが、日頃から思ひ設けられたことなれば、御佛像の御手に懸けられた五色の絲を控へ持たれながら、必ず來迎引攝し給へと御祈念あつて御念佛を唱へられ、その御聲のやう〳〵弱らせ給うた時、西に紫雲たなびき、異香室に滿ち、音樂空に聞え、建久二年二月中旬といふ時、遂に往生の素懷を遂げさせられたのである。

四　軍記物語と武士的女性

武士道と婦道

賴朝は平氏を滅して兵馬の大權を握るに及んで、鎌倉に幕府を開き、武家政治を斷行するに至つたが、その開創に當つては、藤原氏、平氏の覆轍に鑑みて、公家主義を廢して、武家主義を以て諸般の振肅を圖つた。卽ち藤原氏の衰運も平家の滅亡も、いづれも優柔惰弱に流れ、浮華放縱に溺れての結果であることを痛感し、常に家人を戒飭して華美柔弱の風を抑け、武藝を修めて心身の鍛錬を奬め、質實剛健、儉素勤勉を美德とし、禮儀廉恥を重んじ卑怯未練を戒め、自ら率先して武士道的精神の鼓吹に努めた。それ故當時の武士階級は、己の死生の巷を馳驅した際の體驗と、此の鎌倉幕府の政策とに加へて、當時武人に入り易つた禪宗の影響等によつて、大いに武士道の振作を見るに至つた。

さて武士道の第一義的要素は、忠節の精神、即ち犠牲的精神であることは云ふまでもないが、次で武勇の精神が不可缺なものとして養成されたのは理の當然である。尙此の外に前述の如き種々の道德が涵養されたが、かゝる思想は自然の勢として、武家社會のみならず、その圏內に屬する者に對してまでも滲透し、感化を及ぼすに至つた。されば當時に於ける武士階級の女性は、この武士的教養の感化の下に、意志的、倫理的、道德的な、ある鞏固な精神を以て生ひ育つやうになつて、平安時代の情念一點張りの女性とは著しく趣を異にするに至つた。

かくて鎌倉武士が犧牲的精神に富み、忠節の精神に生きた如くに、當代の女性もつとにその感化を蒙り、武士道に對して婦道を完成し、貞操觀念に富み、貞節以て夫に仕へ、時には一死以てその義に殉ずるの勇氣を持すると共に、家庭に於ける母性を自覺し、その夫を助け子を勵して、武人の面目を損せしめない様に努むるといふ意志的女性が續出するに至つたのである。

今その一班を云へば、吉野山の峯の白雪を踏み分けて入りにし人の後を戀うて、烈々たる思慕の情を示した靜御前の節操、或は曾我十郎祐成の妾虎が、夫祐成が本懷を遂げて誅せられてからは、その跡を慕ひ、亡夫の三七日の忌辰を迎へ、箱根山で佛事を修し、総つて出家を遂げ、信濃國善光寺に赴き、その菩提を弔はんとするに至つた如き、假令身は藝を賣る白拍子と雖も、武士

の情に生きる時、その心は雄々しい限りであつた。

又、富士の狩で頼家が鹿を射たので、頼朝は喜びの餘り、梶原景季をして政子に報ぜしめた處、政子は、武將の嫡嗣として鹿を獲たとて何も珍しくはない、當り前ではないかと云つてのけた稜々たる氣骨、或は巴御前が木曾義仲に粟津に侍し、鎌倉武士をして後へに瞠若たらしめた如き、乃至は城小太郎資盛が叛亂を企てた時、姨母であつた板額御前が勇戰奮鬪して敵を惱まし、遂にその捕へられるに及んで資盛の軍が潰えたといふが如き、勇猛果敢な女性の躍出は、當代女性の優れた一面を表現してゐるものである。この自力的武斷的な精神は、平安朝女性の他力的厭世的な思想とは、月鼈雪泥の差を示すものであつて、こゝに時代相の一面をまざ／＼と見る事が出來るのである。

かくて鎌倉時代の女性は、他の點は暫く措き、貞節の精神に富み、自力的武斷的意志的な雄々しい性格の持主であつた點に於て、歴史上最も生彩を放つものであるといふことが出來よう。

靜御前

平家は壇の浦の一戰によつて完全に滅び盡きて、世は源氏の旗風に靡き、頼朝の勢望は四海に輝いたが、彼はその弟義經を忌み嫌ひ、あらゆる方法を設けてこれを失脚せしめようとした。そこへ梶原景時の讒言があつて、頼朝の猜疑は極度に煽られて、

源氏の再興に辛苦の限りを嘗めつくして來た兄と弟は、全く仇敵のやうになつた。そしてその果は、義經は兄賴朝のために官位を剝奪され、武名嘖々たりしその榮譽も今は空しく、草の搖ぎにも心をとめる一落人となり果てゝ、僅かの恩顧ある士に護られ、都を去らねばならなくなつた。昨日に變る落人の身となつた義經は、西國へ落ちて後途を計らんとしたが、大物浦の風波に船は破られ、止むなくそこから吉野へ逃れた。寥々たるその主從一群の中には愛妾靜も交つてゐた。

都に春は來れども、吉野は未だ冬籠る。いはんや年の暮なれば、谷の小川もつらゝゐて、一方ならぬ山なれども、判官あかぬ名殘を捨てかねて、靜をこゝまで具せられたりける。（義經記）

しかし落人の身となつてなほ愛妾を伴ふことは、生死を共にする家臣の手前を憚つてか、吉野の奥深く杉の壇と云ふ所で、つひに靜にも暇を與へようとした。死なば諸共にと思つた靜も、正妻の身に在らねば、義經が事を分けての離別の言葉にうなづいて、はかなくも袂を別つたのである。

今は何と思ふとも、留るべきにあらずとて、是非を二つに分けけり。判官思ひ切り給ふ時は靜思ひ切らず。靜思ひ切る時は判官思ひ切り給はず。互に行きもやらず、歸りては行き、行きては歸りし給ひけり。峰に上り谷に下りて行き給ふ程に、姿の見え給ふ程は、靜はるばると見送りけり。（義經記）

かくて悲しい離別をしたのであるが、靜を守るためにと伴につけられた五人の雜色は、かへつて義經が靜に贈つた財寶を悉く奪つて逃げ失せた。雪深い山中にたゞ一人さ迷つてゐた靜は、つひに惡僧どもの手に捕はれて、鎌倉へ送られることになつた。

母磯の禪師と共に鎌倉へ送られた靜は、やがて賴朝の家人から義經の行衞について訊問された。しかし靜がそれを知るわけもなく、又知つてゐても答へるわけもなかつた。再三の訊問にも、たゞよゝと泣きぬれながら手痛く打ち消すばかりであつた。賴朝は之を聞いて、「靜可憐に見ゆれども心强し。靜判官の子を宿してゐるとの事なれば、梶原預つて出產を待ち、女子ならば母に與へ、男子ならば取つて失へ、思慮深き靜なれば、出生の男の子助けんこと心もとなし。」と命じたのである。生れた子が男の子であれば殺されるといふ宣告の下に、出產の日を待つ靜の心はどんなに悲しかつたであらう。靜は、母の禪師もろとに、ひたすらに生れ出づる子が女なれかしと祈つた。

かうした不安な日を重ねてゐるうちに、偶々鎌倉八幡宮奏樂の舞に、靜は無理に召し出されて舞ふことになつた。靜は「たとひ身は卑しきものなりとも、判官殿の寵愛を受けたる身の、今更諸人の前に歌舞の姿を晒さんや。」と、容易に聽き入れなかつたが、賴朝のたつての命に、捕はれの身のさまで拒むことも出來ず、遂に決心して鶴岡の社前に美しい舞の袖をかへすこととなつた。

源氏の再興に辛苦の限りを嘗めつくして來た兄と弟は、全く仇敵のやうになつた。そしてその果は、義經は兄頼朝のために官位を剝奪され、武名嘖々たりしその榮譽も今は空しく、草の搖ぎにも心をとめる一落人となり果てゝ、僅かの恩顧ある士に護られ、都を去らねばならなくなつた。昨日に變る落人の身となつた義經は、西國へ落ちて後途を計らんとしたが、大物浦の風波に船は[illegible]

都に春は來れども、吉野は未だ冬籠る。いはんや年の暮なれば、谷の小川もつらゝゐて、一方ならぬ山なれども、判官あかぬ名殘を捨てかねて、靜をこゝまで具せられたりける。（義經記）

しかし落人の身となつてなほ愛妾を伴ふことは、生死を共にする家臣の手前を憚つてか、吉野の奥深く杉の壇と云ふ所で、つひに靜にも暇を與へようとした。死なば諸共にと思つた靜も、正[illegible]身に在らねば、義經が事を分けての離別の言葉にうなづいて、はかなくも袂を別つたので

[illegible]ふとも、留るべきにあらずとて、是非を二つに分けけり。判官思ひ切り給ふ時は靜思ひ切らず。[illegible]判官思ひ切り給はず。互に行きもやらず、歸りては行き、行きては歸りし給ひけり。峰に[illegible]き給ふ程に、姿の見え給ふ程は、靜はるぐ＼と見送りけり。（義經記）

かくて悲しい離別をしたのであるが、靜を守るためにと伴につけられた五人の雜色は、かへつて義經が靜に贈つた財寶を悉く奪つて逃げ失せた。雪深い山中にたゞ一人さ迷つてゐた靜は、つひに惡者どもの手に捕はれて、鎌倉へ送られることになつた。

[illegible]禪師と共に鎌倉へ送られた靜は、やがて賴朝の家人から義經の行衛について訊問された。[illegible]が、それを知るわけもなく、又知つてゐても答へるわけもなかつた。再三の訊問にも、た[illegible]ぬれながら手痛く打ち消すばかりであつた。賴朝は之を聞いて、「靜可憐に見ゆれど[illegible]の子を宿してゐるとの事なれば、梶原預つて出產を待ち、女子ならば母に與へ、[illegible]へ思慮深き靜なれば、出生の男の子助けんこと心もとなし。」と命じたのであ[illegible]子あれば殺されるといふ宣告の下に、出產の日を待つ靜の心はまことに悲[illegible]。母の禪師もろともに、ひたすらに生れ出づる子が女なれかしと祈つた。

[illegible]ねてゐるうちに、偶々鎌倉八幡宮奏樂の舞に、靜は無理に召し出されて[illegible]は「たとひ身は卑しきものなりとも、判官殿の寵愛を受けたる身の、今更[illegible]を晒さんや。」と容易に聽き入れなかつたが、賴朝のたつての命に、捕はれの[illegible]も出來ず、遂に決心して鶴岡の社前に美しい舞の袖をかへすこととなつた。

白小袖一重ねに、唐綾の紅色華かなるを上にひき重ねて、雪白の袴踏みしだき、わりびし縫つたる水干に、ぬば玉の髪を後に束ね、判官戀しの歎きにやせたる面に、一沫の哀愁を漂はした姿は、雨になやめる芙蓉の如く、楚々として氣高く美しかつた。やがて工藤祐經が鼓を打ち、畠山重忠が銅拍子を執り、「しんむしやう」といふ秘曲を舞つたが、その終りに、

吉野山峯の白雪ふみ分けて入りにし人のあとぞ戀しき

と三度繰返して夫を偲ぶ情を訴へ、更に又、

しづやしづしづの小田卷くりかへし昔を今になすよしもがな

と、哀切の聲に無量の恨をこめて、離別の悲しさに咽び泣いた。滿座は動搖した。

「何たる振舞ぞ。鎌倉殿の御前にて、御敵判官に切なる情を寄するとは！」

しかしその騷然たる非難のどよめきもやがて靜まつて行つた　靜の至情に打たれたのである。別離の悲哀を綿々たる情緒に寄せ、今は行方も知らぬその人を追慕し、過ぎにし方を回想してやまない哀切極まりなき悲戀の情は、並居る人々の心を打ち、人々は感動し寂として一語も發するものもなかつた。

しかし、簾中の賴朝は色をなして赫怒した。「かの白拍子あくまで不敵なり。鎌倉の御代萬歳を

歌ふべきに、昔を今に返して判官の世とならむことを祈るとは、何事ぞ！」

と、激怒して嚴罰に處しようとしたのであるが、御臺政子は、靜が薄幸をあはれんで、

「君流人となりて豆州にいまし給ふころ、吾に芳契ありと雖も翁君に和順し、暗夜に迷ひ深雨を凌いで君の所に到れり。亦石橋の戰場に出で給ふの時、獨り伊豆山に殘留して君の存亡を知らず、日夜魂を消せり。その愁を論ずれば靜の心の如し。豫州多年の誼を忘れ戀慕せざれば貞女の姿に非ず。枉げて賞翫し給ふべし。」（吾妻鏡卷六）

と頼朝を宥め賺したのであつた。

かくて鎌倉に逗留すること半歳餘りにして、玉の如き男子を出産したが、不幸それが男子と名のついただけに、幕吏のために奪はれて殺されてしまつた。靜の悲しみはどんなであつたであらう。

その後靜親子は、身の暇を賜うて、恐しき鎌倉を後に京に還ることが出來た。そして、嵯峨の龜山の邊に淋しく住み、あけくれ亡き夫の後世を弔つて、二十七の花の盛りに儚くなつたといはれてゐる。

靜は藝を賣る白拍子である。しかし、その義經に對する烈々たる節操は、壯絶を極めてゐる。鎌倉殿を前にしてその心の丈を云ひ得た、その心の强さと鋭さとは、武士的女性の典型といへよ

う。

巴御前

旭將軍木曾義仲には、四天王といつて樋口次郎兼光、其の弟今井兼平、根井幸親、楯親忠の四人の勇將があつた。この中兼光、兼平の二人は共に信濃權守中原兼遠の息であつた。義仲に寵愛された巴御前は實にこの兼平の妹である。

義仲は賴朝と共に以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、北陸道より連戰連勝、平家は戰はずして西海に走り、義仲は遂に賴朝に先だつて京都に入り、從五位下となつて京師守衞の任に就いた。されど田舍武士の禮に疎く、朝廷の忌諱に觸れ、あはれ逆徒の汚名を着て、宇治川に鎌倉方の追手を對へねばならなかつた。しかし既に衰運に向つてゐた木曾方は、此の一戰に脆くも大半の勢を失ひ、この時都に居た義仲は、倉惶として六條河原に戰陣を敷き、此處で義經の軍を對へ討つたが、全軍遂に潰滅して、義仲は命からがら大津に向けて落ちて行つた。時に從ふ者只六騎。いづれも物具はうち破れ、髯はのびにのびて、昨日に變る落人の姿であつたが、その中に只一騎、顏色玲瓏として月を欺く異樣の風態の者があつた。それが巴である。

巴は色白く髮長く、容顏誠に美麗なれど、幼少の頃から力優れ剛の者であつたので、義仲も深くこれを愛し、且賴みとした。されば今度も多くの者、落ち失せ討たれた中に、六騎の中までも

生き殘り、最後のお供せんとつき從つたのである。

巴は都を出でける時は、紺村紅に千鳥の鎧直垂を著たりけるが、關寺の合戰には紫陽子を織付けたる直垂に菊閉滋くして、萠黃絲威の腹卷に袖付けて、五枚冑の緒をしめ、三尺五寸の太刀に、二十四指いたる眞羽の矢の射殘したるを負ひ、重籐の弓にせき弦かけ、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍置きてぞ乘りたりける。七騎が先陣に進みて打ちけるが、何とか思ひけん冑を脫ぎ、長に餘る黑髮を後へさと打越して、額に天冠を當て、白打出の笠をきて、眉目も形も優なりけり。歲は二十八とかや。爰に遠江國の住人內田三郞家吉を名乘つて、三十騎の勢にて巴女に行逢うたり。內田敵を見て、「天晴武者の形氣哉、但女か覺束なし」。とぞ問ひける。郞等よく〳〵見て女也と答ふ。內田聞敵す、「さる事あらん。木曾殿には葵、巴とて、二人の女將軍あり。葵は去年の春礪並山の戰に打たれぬ。巴は未だ在りと聞く。是は強弓精兵、あきまを數ふる上手、岩を疊み金を延べたる城なりとも、巴が向ふには落ちずといふ事なし。さる癖者と聞召して、鎌倉殿彼女相構へて虜にして進らすべき由仰を蒙りたり。巴は荒馬乘の大力、尋常の者に非ずと聞く。如何すべき。」と思ひ煩ひけるが、郞等共に云ふ樣は「女強しといふとも、百人が力によも過ぎじ。家吉は六十人が力あり、殿原三十餘人、既に百人にあまれり。殿原左右より寄せて左右の手を引張れ、家吉中より寄せてなどか巴を取らざらん。」と云ひけるが、內田又思返す樣、「まて〳〵暫く、槿花の朝に咲きて夕に萎むだに

も、已が盛は有る物を八十九十にて死なん命も、二十三十にて亡びん命も同じ事、女程の者に組むとて、兎角計ごとを出しけるよと、殊に後陣に控へたる甲斐の一條の思はんことこそ恥しけれ。殿原一人も綴ふべからず。家吉一人打向うて巴が頸とらん。」と云ひければ、三十餘騎の郎等は、日本第一に聞えたる怖しきものに取組むまじき事を悦びて、尤々と云ひければ、内田只一人駒を早めて進む處に、巴是を見て先敵を讃めたりけり。「天晴武者の貌哉。東國には小山宇都宮歟、千葉足利歟、三浦鎌倉歟、覺な誰人ぞ、かく問ふは木曾殿の乳母子に中三權頭兼遠が娘に巴と云ふ女也。主の遺の惜しければ、向後を見んとて御供侍る。」と云ふ。「鎌倉殿の仰を蒙り勢多の手の先陣に進るは、遠江國の住人内田三郎家吉。」と名乘りて進みけり。巴は一陣に進むは剛の者、大將軍に非ずとも、物具の毛の面白きに、押並て組み、しや首ねぢ切つて軍神に祭らんと思ひけるこそ遲かりけれ、手綱かいくり歩せ出す。されども内田が弓を引かざれば女も矢をば射ざりけり。互に情を立てたれば、内田太刀を拔かざれば、女も太刀に手を懸けず。主は急ぎたり馬は早りたり。巴内田馬の頭を押並べ、鐙と〳〵蹴合するかとする程に、寄合せ互に音を揚げ、鎧の袖を引違へ、えたりやおうとぞ組んだりけり。聞ゆる沛艾の名馬なれども、大力が組合ひたれば、二匹の馬は中に留つて働かず、内田勝負を人に見せんと思ひけるにや、弓手を後へ指廻し、女が黒髮三匝にからまへて腰刀を拔出し中にて首をかゝんとす。女是を見て「汝は内田三郎左衞門とこそ名乘りつも、正なき今の振舞哉、内田にあらず、その手の郎等か。」と問ひければ、内田「我が身こそ大將よ、郎等には非ず。行跡

何に。」と申せば、女答へて云く「女に組む程の男が、中にて刀を拔き目に見する樣やは有るべき、軍は敵によつて振舞ふべし。故實も知らぬ内田哉。」とて拳を握り、刀持ちたる臂のかゝりをしたゝか打つ。餘りに強く打たれて把る刀を打落さる。「やをれ家吉よ、日本一と聞えたる木曾の山里に住みたる者也、我を軍の師と憑め。」とて、弓手の肘を指出し、甲の眞顏取詰めて、鞍の前輪に攻付けつゝ内冑に手を入れて、七寸五分の腰刀を拔出し、引あふのけて首を掻く。刀も究竟の刀也。水を掻くよりも尙安し。馬に乘直り一あふりあふりたれば、身質は下へぞ落ちにけり。（源平盛衰記）

かくして、六十人力の剛の者内田家吉は遂に巴に殪された。やがて巴はその首を持つて、義仲の實檢に供へた。義仲はしばし憮然として居られたが、やがて巴に向つて、坂東に聞えわたつた勇士も、一女子の手に死すかと思へば、我も亦、何人の手に死するか知られぬ運命。後日世の人から、義仲は最後の際までも女子を連れて居つたといはれては、我が武名の疵となる故、そなたはこの場より何處へなりと落ち延びよと懇ろに說き諭した。巴は死なば共にと頻りに希つたけれども、義仲の名折になるといはれて、重ねて强ひることも出來ず、身を裂れる思を殘して、生國さして立ち去り、尼となつて義仲の跡を弔つた。

北條政子

鎌倉の女性の中で、誰しもが先づ第一に指を屈するのは、頼朝の妻政子であらう。我が國の武士道が頼朝によつて建設されたと同時に、日本婦道の基礎を創設したものは政子であるといふとも過言ではあるまい。政子は頼朝の妻として內助の功多く、其の子頼家等の教育にも細い注意を拂ひ、頼朝の死後或時は父北條時政と、或時は義時と力を協せて遺業を守り、實朝歿後は簾中にあつて、諸國武將の取締、京都公卿の監視等を怠らず、政務をその手一つで捌いて、所謂尼將軍と稱せられた稀に見る女丈夫であつた。「吾妻鏡」は神功皇后の再生せられて、我國を擁護し給へるに似るといひ、「愚管抄」は女人入眼の日本國と評してゐる。

政子は北條時政の長女で、容姿人に優れて美しく、天性剛毅にして果斷に富み、父時政の寵愛も一入厚かつた。頼朝が配謫せられて北條家に身を寄せた頃、頼朝の意に適つた政子は、頼朝の人となりを見極めて自ら斷ずるところがあつた。父時政も頼朝の家柄といひ、人物といひ、よく知つてゐるところからして、つひに兩人の請を聞き容れるやうになつた。しかし乍ら、頼朝はいつまでも流人の生活に滿足し、政子と安閑たる夫婦生活を送つてゐる程世の中は平和ではなかつた。源三位頼政の擧兵についで、各地に於ける源氏は旗あげの準備に忙しく、以仁王の令旨は處々方々の源氏に下され、頼朝も亦拜受した。彼は遂に伊豆に兵を擧げ、韮山城の攻擊に成功した

が、石橋山の敗戰、房總への逃避となり、政子の苦難は並々でなかつた。賴朝が上總下總武藏の地を從へ鎌倉に入る頃から、政子も漸く鎌倉に落着くことが出來た。後賴朝が征夷大將軍となり、鎌倉で暮すやうになつてからの政子は、主として家庭を守り、其の子の教育に專心し、一門の奢侈を戒め、遊惰を抑へることにつとめたのである。

政子は賴朝との間に賴家、實朝の二子を擧げたが、この二子の教育については、母として獻身的の努力を拂つてゐる。嘗て賴家が未だ若年の頃、父賴朝に從ひ富士山麓へ狩に赴いたことがある。その時大鹿一頭を見事に射止めたとのことで、賴朝は非常に喜んで、直ちにこの由を政子に傳へた。すると政子は武府統領の嫡子が狩場で獲物を仕止める位のことは當然であるといつて、その使をあまり喜ばなかつたと傳へられてゐる。

正治元年正月、賴朝がその業未だ半ばにして薨ずるや、政子は四十三歳で落飾したが、二代將軍賴家は武府統理の器でなく、形勢は俄然一變して政子が政治家として登場するに至つた。賴家は十八歳で將軍職に就いたが、客氣多く、まゝ常軌を逸するものがあつたので、政子は早くもこの年の四月十二日、訴訟事件について將軍の專決を停止し、以後北條時政、同義時、大江廣元等十三人の合議によつて裁決することに定めた。その七月、賴家が安達景盛の妾を奪ひ、更に景盛を

殺さんと謀つて大事を招かんとした時、政子は百方賴家をなだめて思ひ止まらせたが、この時彼女が賴家に傳へさせた言葉の中に、「景盛は先君賴朝憐愍の人である。若し罪科あらば我早く尋ね成敗するであらう、事を究めず誅戮を加へる如きは、後悔を招くことである云々」と諫めたいふことが「吾妻鏡」に見えてゐるが、罪科あらば我早く成敗せんとは、政子が將軍の母たると共に、政治上の實權をすでに握つてゐたことの證左である。建仁三年の秋、賴家の病は次第に重くなつたので、遂に彼を廢して弟の千幡（實朝）を將軍とした。賴家には一幡といふ子があつたが、その母は比企能員の女であつたので、比企氏の勢力增大を恐れてこの擧に及んだのである。賴家能員は大いに憤慨し、北條氏擊滅を策したが、政子時政等は機先を制して比企氏を仆し、一幡また死し、賴家は落飾して伊豆に幽せられ、後殺された。こゝに於て實朝十二歲にして將軍職を襲ぎ、北條氏は依然將軍の戚里たる地位を保持し、一層その權威を增大した。やがて、時政の後妻牧の方といふのが、實朝を暗殺して女婿平賀朝雅を立てようといふ陰謀を企てた。彼女は牧の方を父時政と共に北條に幽し、所謂大義親を滅すの策を立てた。所が承久元年に、實朝は鶴岡八幡の社前に於て、賴家の子の公曉の爲に暗殺されるといふ容易ならざる事件が起つた。しかし彼女は京都より藤原道家の子の二歲になるのを迎へて繼嗣として、幕府の秩序は少しも亂れることなく、事

變後の始末は遺憾なき迄に廻らされてゐた。幕府では、新主の幼稚な間は尼將軍垂簾の政であることを宣示し、今まで裏面で活動してゐた彼女が、これからは表面の尼將軍となつて權威をふるふこととなつたのである。やがて承久の亂起り、承久三年には公武の二大勢力は旗鼓の間にその實力を爭ふことになつた。けれども彼女はこの期に及んで決して狼狽しなかつた。義時、泰時、時房等の一族や、廣元などの謀臣を一座に集めて軍議を凝してゐる所へ、政子は凛然として嚴かに言ひ放つた。

「日本一州の中に、女房の目出たき例には、この尼をこそ申すなれども、尼程に物思ひしたるは世にあらじ。故頼朝公に逢ひ初め參らせし時は、世になき振舞するとて親にも疎み惡まれ、その後平家の軍始まりしかば、手を握り心を碎きて年が程は打ち暮し、平家亡びては世治まるかと思ふ所に、大姫君におくれて同じ道にと悲しく思ひながら、月日を重ねし間に故殿に後れ奉る。左衞門督（頼家）いまだ幼稚なれば、見立て參らせんとせしかども、又督殿にさへ遲れて、誰を賴むかたもなく、鎌倉中に恨めしからぬ人もなく、思ひ沈みしを故右大將實朝公、人となり世にも靜かに侍りしに、思ひの外のことありて大臣殿失せ給ふ。是こそ浮世の鑑なれ。何に命を存へてかゝる難にたへぬらん。いかなる淵河にも身を投げばやと思ひ立ちしも、權太夫義時が樣々申すことありて、三代將軍の御あとを誰か弔ひ奉るべきと思ひし程に、今日まで

空しく長らへて、かゝることを見聞くこそかなしけれ。日本國の傳達、昔は三年の大番として一期の大事と出立ち、郎從一族までこゝを晴と上りしも、力盡ぬれば、下向には徒跣にて歸りけるを、故殿あはれみ給ひ、六ケ月に約め、分際に應じて諸人の助を計らひおかせ給ひ、今はいづれも榮耀におはすらん。よろづにつけて情深き御恩を忘れて京方へ參らんとも、又留まりて味方に奉公仕らんとも、只今確かに承れ。」

（北條九代記）

と、事を分けて義理と人情の兩方面から縷々と述べたので、並みゐる武士は皆衣の袖をしぼり、

「拙き鳥獸さへも人の恩は忘れずとこそ承れ。況して代々御恩深く蒙りし我等、此の度罷り向ひ候都を枕に、屍を禁中に晒さんとこそ存じ候へ。誰々も一人としてこの志を背くものは候はず。御心安く思召し候へ。」

と、命に應ぜんことを誓つたのである。

承久の變亂一過して鎌倉幕府の礎は全く成つた。尼將軍の政治は至公至平であつて、その方針は幕府創業の精神と全く一致してをり、見る所は頗る廣く、心を傾けるところは國家全體であつて、その北條氏に對する態度には兎角の批評はあつても、全く稀に見る大器であつたことは、諸種の記錄がこれを證してゐる。

後堀河天皇の嘉祿元年六十九歲を以て死したが、民部大夫行盛をはじめ舊恩を懷うて出家したものが多かつた。實に鎌倉の女性として偉大なる典型であるといつてよからう。（吾妻鏡、大日本史、愚管抄）

大　姫　公

賴朝の長女大姫公は、嘗て政略結婚の爲に、木曾義仲の嫡子志水冠者義高の夫人となつたが、やがて賴朝義仲の不和から、壽永三年四月、義高はその犧牲となつて無殘な最後を遂げた。姫はそれを漏れ聞いて、愁歎の餘り漿水さて斷つて、只管亡夫の冥福を祈り、健康も勝れず味氣無き年月を送つてゐた。「吾妻鏡」にはその狀を寫して、

志水殿有事之後、御悲歎之故、追日御憔悴、不ㇾ堪二斷金之志一殆爲二沈石之思一給歟、且貞女之操行、衆人所美談也

と見えてゐる。そこで母の政子は心配して、親族である一條高能に再嫁させ、心氣を一轉させようと內々取計らつたが、姫君は斷然之を拒み、たつてと云ふならば、寧ろ身を深淵に沈めたいと云つて、亡夫を偲ぶ情が益々深かつたので、賴朝は再嫁させることを斷念し、人をして陳謝させた。

地頭と女性

鎌倉時代には地頭として社會的地歩を占めた婦人が少くなかつた。當時の地頭は、後世の地頭とは趣を異にし、土地を所有し、土地を支配する力を備へ、財政事務の方に携つたものである。又地頭の監視を受けつゝ土地を有する本所たる婦人もあつた。例へば承久の亂の起る誘因の一つを作つたといはれるところの龜菊といふ婦人は、攝津國長柄・倉橋の莊園の持主であつた。又蒙古來寇の時、肥後北山室の地頭に眞阿といふ尼があつた。文永十一年蒙古の來寇を擊退した後、鎌倉の幕府は、逆に此方から兵を出して朝鮮卽ち高麗を征伐しようとする計畫を立て、九州の諸大名から兵を徵したのである。その時肥後北山室の地頭であつた眞阿といふ尼は寡婦であつたが、女の身であるため自ら出征することが出來ず、老後の力と賴む子息三郎光重、聟久保二郎公保を差出して、夜を以て日に繼いで馳せ參ぜしめますと申出たことがある。

かやうに婦人ですらもよく時代を理解し、進んで國家の爲に力を盡さうとするやうな、社會的の大きな思想を持ち得たのである。況んや彼の「吾妻鏡」や「太平記」を繙くと、婦人にして地頭であり、或は本所であり、社會的に色々仕事をした事蹟が尠からずある。

第五編　室町文學を通して見たる女性

第一章　室町時代の概觀

室町時代といへば、普通足利義滿が京都室町に幕府を開いてから、足利氏が滅び織田信長が天下を統一する迄を指すのであるが、こゝでは廣義に解して、吉野朝時代から室町幕府時代を經て、安土桃山時代に至る迄前後二百七十年間を包括して考へる。

この時代は戰亂相次ぎ、國史上空前の暗黑時代であつた。後醍醐天皇の建武中興の御偉業は一度成つたが、それも束の間で、天下は再び武家である足利氏の手に歸し、義滿義政の榮華の世を現出して、暫く無事平穩な日が續くかと思ふうち、やがて應仁の大亂が起り、安土桃山時代に至る迄、天下は全く戰亂の中に沒してしまつた。花の都は動亂の巷と變り、數十回の爭奪戰が行はれ、榮耀華美を盡した伽藍殿堂も、重寶も、藝術も、或は踏みにじられ、或は燒失せられて、さしも華美を盡した玉敷の都は、見る影もない荒野と化してしまつた。

汝や知る都は野邊の夕雲雀あがるを見ても落つる涙は

これは應仁の亂の後、飯尾彥六左衞門が都の荒廢を歎いて詠んだ歌である。

文學の特色　かやうに動亂と紛糾の世の中であつたから、文學も從つて衰微し、時には五山僧侶によつて僅に命脈を保つてゐるやうなみぢめな狀態の時もあつた。然し乍ら、文學の芽はかうした動亂の中にも除々に萠え出でゝ、種々の方面に時代精神を現した作品を相當に殘してゐる。謠曲が作られ、狂言が生れ、連歌が新興し、世相を正直に反映したお伽草子が作られるなど、注目すべきものも相當ある。しかもこれらの作品は、何れも次に來る江戶時代文學の源をなしてゐる點に於て、注目すべきものがある。卽ち謠曲狂言が江戶時代の演劇の源となり、連歌から俳句川柳が生れ、お伽草子は絢爛を極めた江戶時代の小說の魁をなすものである。つまり百花絢爛たる江戶文學の源は、かうした戰亂の世に除々に培はれてゐたのである。かく考へて來ると、この時代の文學は、暗黑時代などとは云へない特殊の意義が考へられるのである。

女流文學　女流文學は前代に引續いて益々衰微し、女性作家の出現は、寥々たること誠に曉天の星の如き有樣である。これは全く時代の然らしむる所であつて、また止むを得ないことゝ思ふ。唯「玉葉集」の歌人として、宮廷后妃皇女及びその女房達、公卿殿上人の母、娘、妻等十數人を擧げることが出來るが、その作品は又文學的に高い價値をおくことは出來ない。

唯この中にあつて美濃の人小野お通が十二段草子を作り、淨瑠璃の源を開いたといはれてゐたが、最近諸家の研究によると、十二段草子はお通の作でないことが明かにされた。かうなると、女流文學界は益々寂寥を加へるのである。

第二章　吉野朝の女流歌人

後醍醐天皇によつて企てられた公家一統の御政治は、北條氏の滅亡によつてめでたく實現せられた。しかしその輝しい中興の帝業も、やがてはかなき夢と消えて、延元元年には天皇はじめ月卿雲客は、幾重の雲路を分けて、吉野の奥に移り住まはれねばならなかつた。それより後醍醐、後村上、長慶、後龜山の御四代の天皇は、南風競はぬ旦暮を、雲深き吉野の奥に送られたのである。この間のいたましき御消息は、「新葉和歌集」によつて最も切實に知ることが出來る。

「新葉和歌集」は、後醍醐天皇の皇子宗良親王の編纂されたものである。親王が諸國轉戰の後、齡七十に餘り、多少の落付きを得られてから、吉野朝君臣の歌の空しく深山木の露と消えはてゝ了ふことを惜まれて編まれたもので、長慶天皇の弘和元年十二月三日に奏上せられてゐる。

吉野朝御歴代の御事蹟は、今更申上げるまでもなく、一日も早く四海の浪を鎭めて、國内を安穩にせんとの思召に終始一貫遊され、日夜叡慮を惱ませ給うた御事と拜察される。又親王の御方々は、尊き御身を以て、西に東に征討の軍を起して王事に盡し給ひ、具に艱苦を嘗め給ひ、諸臣も亦奉公の至誠、憂國の熱情を傾けて王事に盡瘁し、四方に流浪して世路の辛酸を嘗めたのである。されば「新葉集」は他の勅撰集とは趣を異にし、御歴代の忝く尊き御叡慮、親王の御方々の御艱苦の程を偲び奉ることが出來、又諸臣の慷慨悲憤の熱情を窺ふことが出來る。

歌は千四百餘首、二十卷になつてゐるが、その歌人は吉野四天皇を始め奉り、皇族及その公卿を主としてゐる。女流歌人としては、宮廷后妃皇女及その女房達、公卿殿上人の母、娘、妻等十數人を擧げることが出來るが、その中で新待賢門院、嘉喜門院、新宣陽門院などは勝れた歌人である。

新待賢門院

新待賢門院は後醍醐天皇の妃で、御名は廉子、藤原公廉の女であらせらる。才色兼備の故を以て、天皇の御寵愛を專らにし給うたことは「太平記」卷一に次の如く述べてゐる。

君一度御覽ぜられて、他に異る御覺あり。三千の寵愛一身に在りしかば、六宮の粉黛は顏色無きが如く

なり。すべて三夫人九嬪二十七の世婦、八十一の女御、曁後宮の美人、樂府の妓女と云へども、天子顧眄の御心を附けられず。啻に殊艷尤態の獨能是を致すのみに非ず、蓋し善巧便佞叡旨に先て、奇を爭ひしかば、花の下の春の遊、月の前の秋の宴、駕すれば輦を共にし、幸すれば席を專にし給ふ。

元德三年に從三位に叙せられ、元弘二年、天皇隱岐御遷幸に際しては、只一人の女性として供奉申し上げ、道中の困難より島中の艱難を共に嘗めつくされ、心をこめてお仕へ申された。亂平ぎて御還幸後は、威權益々加つた。

吉野朝となつてからは、うら寂しい行宮にまめ／＼しく奉仕された。後醍醐天皇崩御の後は、御腹なる義良親王が後村上天皇として立たれたが、之に奉仕して正平十九年五十九歳を以て病歿された。

歌は「新葉集」に十九首收錄せられてゐるが、後醍醐天皇崩御の後に作られたものに哀深い歌が多い。

み吉野は見しにもあらずあれにけりあだなる花はなほ殘れども

この歌には「つはものゝ亂によりて、吉野の行宮をも改められて、次の年の春、塔尾の御陵に詣で給はむとて、かの山に登らせ給ひけるに、藏王堂を初めて、さならぬ坊舍どもゝ皆煙となりに

けれど、御陵の花許りは昔にかはらず咲きて、よろづ哀に覺え給ひければ、一房折りて」宗良親王に贈られた枝に添へられたといふ詞書があつて、

今みても思ほゆるかなおくれにし君がみかげや花に添ふらむ

といふ親王の返歌も出てゐる。

九重の玉のうてなも夢なれや苔の下にし君をおもへば

引きつれし百の司の一人だに今はつかへぬ道ぞかなしき

寂しさもつひのすみかと思ふには心ぞとまる峯の松風

これらもやはり、同じ天皇の御陵に詣でられた折の歌であるが、門院にとつては、神去りまして後の吉野の里は、如何に悲しい思ひ出の數々に滿されてゐたことであらう。なほ、

今日ははや荻の上葉に音たてゝ昨日にも似ぬ秋の初風

呉竹のいくよもあらじもの故に身のうきふしは數かずもがな

などは心のとまる作である。

嘉喜門院

門院は後村上天皇の女御であらせられるが、その姓氏については詳でない。「大日本史」にはその所生を詳にせず、關白某家の女としてあるが、「歴朝坤德錄」

には諱勝子、藤原經忠の女となつてゐる、長慶天皇及び後龜山天皇はその御所生である。後村上天皇は、延元四年八月十五日後醍醐天皇の禪を受け、同十月吉野行宮に於て卽位なされたが、その御一生の間は終始南朝の興隆に力められ、行宮も亦或は賀名生に、或は天野金剛寺に轉々し、具に艱苦を嘗め給うた。門院は幼少より琵琶と和歌の名手として知られてゐたが、御多難なる天皇の御傍に日夜奉仕して、琵琶に歌に眞心こめて叡慮を慰め奉つたのである。然るに天皇は在位二十九年、正平二十三年三月十一日、攝津住吉行宮に於て崩御遊された。門院は、

かきくらす涙ときくにいとゞまたほさぬ袂をぬらしそへぬる

かたみとて手折る櫻の花だにも散りてあとなき色ぞかなしき

せきあへぬ涙の程をおもひ知れおなじ眺めの秋の夕ぐれ

と、天皇追慕の悲歌を詠つて居られるが、それより後門院はたえて御みづから琵琶を彈ぜられることがなかつた。ところが、たま〳〵天授三年七月七日、吉野の行宮に於て樂を催され、その夜長慶天皇が頻りに請はれたので、門院は一たびこれを彈ぜられた。天皇は御感慨極つて、

かくてのみ斷えずきかばやそのかみの秋おもほゆる峰の松風

と御製あり、門院はこれに和して、

あはれとも君ぞきゝける今ははや吹き絶えぬべき峰の松風

と詠ぜられた。宗良親王が「新葉集」を撰ばれた時、和歌を門院に乞うたので、大納言實爲をして百餘首を認めて贈られたところ、親王は特に「この松風の御贈答まめやかに、目を駭かし、心をまどはし候ひぬる。代々の集にも、恐らくはかゝるたぐひぞ少く候はむずらむと覺えさせおはしまし候。」と消息せられてゐる。その作歌を集めたものは「嘉喜門院集」である。

櫻花さきてとく散るならひこそ我が身の春のものおもひなれ

尋ねつゝわけ入るまゝに咲く花の匂もふかしみよしのゝ奥

詳子內親王　內親王は後醍醐天皇の皇女、新待賢門院藤原廉子の御腹で、元弘三年十二月二十八日、伊勢齋宮に卜定せられ、野宮に入られた。專ら潔齋の間に、夢に靈告を得て百首の歌を詠じて大神宮に上つた。

五十鈴川たのむ心は濁らぬをなど渡る瀬のなほ淀むらむ

はその一で、「新葉集」に見えるものである。當時天下が亂れて、人心の不安動搖に苦しむのを歎かれたのであらう。延元四年、後醍醐天皇は吉野宮に崩御遊ばされ、後村上天皇の踐祚があつたが、內親王は遙かに吉野の宮を望んで、

名にしおふ花の便にことよせて尋ねやせましみよしのの山

と詠ぜられた。正平七年二月の頃には、吉野の御父君の塔尾陵に詣でて、

咲く花のちる別れにはあはじとてまだしきほどを尋ねてぞみる

と詠ぜられた。その後落飾して保安寺に入り、専ら佛門に歸せられた。内親王の歌は多く「新葉集」「新千載集」に見えてゐる。初め齋宮として神に仕へられ、後剃髪せられた御境遇は、式子内親王によく似てゐる。歌も何處かその面影を傳へてゐるやうな所も見えるが、淋しい御生涯であつたからか、いづれも感懐を漏らされたものでないものはない。

たちのぼる煙の末をよそに見ばさびしかるべき柴の庵かな

遙かなるふもとをこめて立つきりの上より出づる山のはの月

何をして過ぎつるかたの月日ぞとさらに驚く年のくれかな

以上の後宮の方々を外にして、女流作家はなほ十餘人を數へるが、特に抽でゝ目立つのは、權中納言經高母と、右近大將長親母とである。いづれの歌も、女性らしい素直さを持つてゐたことが感ぜられると共に、その子息達が優秀な歌人となつた因由も自ら察せられるものがある。

君があたり幾重の雲か隔つらむ伊駒の山の五月雨の比　　經高母

吹き送る嵐の末の浮雲やとをちの里にまたしぐるらむ　同

見し人のなきが數そふ春を經て花もあだなる世をや知るらむ　長　親　母

何ならぬ草木の色もあはれなり思ある身の夕暮の空　同

第三章　小野お通と十二段草子

お通の父系は諸說あるが、美濃國の北部を領してゐた小野政秀の女といふのが事實らしい。その經歷も所傳區々で、甚だ明かでない。或は幼にして孤となり、京都に行き、後豐臣氏の臣鹽川氏に嫁し、琴瑟和せずして離別したが、家康その名聞を聞いて駿府に招き、婦女に禮式を敎へしめたといふ。秀忠の女千姫が秀賴に嫁するに從つて大阪に赴き、城中に留つて淀君の信任を得た。後廣瀨某に嫁して女を生む。寬永八年歿したと傳へられてゐるが、年齡葬地等は詳でない。或は織田信長に仕へたともいはれてゐる。

「十二段草子」は淨瑠璃姬物語、淨瑠璃御前十二段等の名によつて呼ばれてゐるが、源義經を主人公として、三河矢矧の長者の娘淨瑠璃姬のことを脚色したものである。淨瑠璃節の名はこれを

語る曲節から出たのである。淨瑠璃本の嚆矢であるが、果してお通の作であるか疑問になつてゐた。然るに今日では諸家の研究により、室町中期の作であるとは推定されるが、作者はお通でないことは明かにされてゐる。

第四章　太平記に現れたる女性

太平記と平家物語の女性の比較　「太平記」四十卷は、一言にして言へば南朝の哀史であり、鎌倉幕府の滅亡から足利幕府の開設に亙る、所謂南北朝時代を舞臺とする戰記物語である。當時の世相が、すでに複雜紛糾して、殺伐陰慘な氣分に支配されてゐたので、之をあの華かな源平時代を寫した「平家物語」「源平盛衰記」に比べると、詩的の趣味が乏しく、全體としての統一を缺いてゐる。卽ち右の二書が、源平の興亡を記し、殊に哀婉を極めた平家の沒落を歌つて、悲痛な中に詩的な美しさを見せてゐるのに對して、「太平記」は、その描く所の時代が、殺伐陰慘な戰亂時代の爲でもあらうが、全體として散文的で、夢幻的な美しさに缺けてゐる。然し「平家」「盛衰記」は、勤王思想や勤王運動のことには殆んど觸れてゐないが、「太平記」は勤王問題が中

心であり、全文の悲調となつて、正成、義貞等南朝の忠臣の奮闘や戰死に對して萬斛の淚をはらひ、無上の感慨をもらしてゐる。要するに、「太平記」は「平家物語」に見るやうな統一渾成の妙味や、優雅流麗の詩味は乏しいけれども、時代的の色彩が添つて、深刻な人生の相を現し、剛壯堅實なる國民性情を發揮して、飽くまでも男性的、意志的、道德的の傾向を帶びてゐる。

從つてこゝに描かれてゐる女性も、「平家物語」の女性とは自ら趣を異にしてゐる。「平家物語」は、優美柔弱なる平安朝貴族の風を範として學んだ平家の一族を中心として叙寫せられてゐるだけに、その中に現れた女性の性格も亦殆んど平安朝式の色彩を帶びてゐる。維盛の北の方、小宰相の局、內裏女房（重衡の）、重衡の北の方、橫笛、忠盛の女房、待宵の小侍從、宮腹の女房（忠慶の）等いづれもやさしを命の情趣本位の女性である。唯妓王、妓女、佛御前、千手前、靜御前などのやうな遊女には、却つて意氣あり張ある新時代の風格を帶びてゐるものがあるし、又武士の妻妾には、巴御前のやうな勇敢な女性も見えてゐるが、「平家物語」には、武士的精神の發露した女性は、未だ一人も見當らない。槪していふと、舊思想に支配せられ、情愛を生命としてゐるものが大部分を占め、作者も亦これに對して滿腔の同情を注いでゐる。

然るに「太平記」の方になると、民部卿三位局、一宮御息所、左衞門佐局、勾當內侍、基久の

娘等、平安朝式の女性を主材とした情話も見えてゐるが、此等の話は、大抵作者が架構潤色したもので、その描寫の態度も同情がなく、頗る冷淡なのが常である。そして作者が好んで寫してゐるのは、理智に富んだ賢婦か、さもなくば、貞烈なる武士道的の婦人である。

楠正行の母

武士的良妻賢母の典型的女性としては、先づ第一に楠正成の夫人久子を擧げなければならない。久子が夫の死後よくその子正行を教養して、父の遺業をつがせたことは、普く知られてゐる所であるが、「太平記」の中よりその一節を引用する。

尊氏卿楠が首を召されて、朝家私日久しく相馴れし舊好の程も不便なり。跡の妻子共、今一度空しき貌をも、さこそ見たく思ふらめとて、遺跡へ送られける情の程こそ有難けれ。楠が後室、子息正行是を見て、判官今度兵庫へ立ちし時、樣々申し置きし事共多かる上、今度の合戰に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限りの別なりとは、兼ねてより思ひ設けたる事なれども、貌を見ればそれながら、目塞り色變じて、變りはてたる首を見るに、悲しみの心胸に滿ちて、歎きの泪せき敢ず。今年十一歲になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有樣、母が歎きのせん方もなげなる樣を見て、流るゝ泪を袖に押へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、則ち妻戸の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふとき、形見に留めし菊水の刀を右の手へ拔持ちて、袴の腰を押しさげて、自害をせんと

ぞ仕居たりける。母急ぎ走寄つて、正行が小腕に取附いて、泪を流して申しけるは、「栴檀は二葉より芳しといへり。汝をさなくとも、父が子ならば、是程の理に迷ふべしや。小心（をさなごころ）にも能々事の様を思うてみよかし。故判官が兵庫に向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めし事は、全く跡を弔はれん爲に非ず。腹を切れとて殘し置きしにも非ず。我縱（たとひ）運命盡きて戰場に命を失ふ共、君何くにも御座有りと承らば、死殘りたらん一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して、君が御代にも立進らせよと云置きし處なり。其の遺言具に聞きて、我にも語りし者が、何の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合進らせん事有るべし共覺えず。」と泣々諫留めて、拔きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切得ず、禮盤の上より泣倒れ、母と共にぞ歎きける。其の後よりは、正行、父の遺言、母の敎訓、心に染み、肝に銘じつゝ、或時は童部（わらんべ）共を打倒し、首を取る眞似をして、「是は朝敵の首を取る也」と云ひ、或時は竹馬に鞭を當てゝ「將軍を追懸奉る」なんど云ひて、はかなき手すさみに至る迄も、唯此の事をのみ業とせる、心の中こそ悲しけれ。（卷十六　正成首送二故鄕一事）

この母にしてこの子あり、楠氏二世の忠烈は、この夫人ありて史上の花と咲いてゐるのである。

瓜生保の母

瓜生保は吉野朝の忠臣脇屋義治の部下で、四人の弟と共に新田義貞を援けるために金ケ崎に赴いたが、武運拙く弟義鑑と共に討死した。殘つた三人がやつと兵をまとめて歸つて來たが、その時の母の態度はまことに健氣なものであつた。

さる程に、敗軍の兵共杣山へ歸りければ、手負死人の數を註すに、里見伊賀守、瓜生兄弟、甥の七郎が外、討死するもの五十三人、創を被る者五百餘人なり。子は父に別れ、弟は兄に後れて、啼哭する聲家々に滿ち滿ちたり。されども瓜生判官が老母の尼公有りけるが、敢て悲める氣色もなし。此の尼公、大將義治の前に參つて、「此度敦賀へ向うて候者共が不覺にてこそ、里見殿を討たせ進らせて候へ。さこそ無念に思召され候らめと、御心中推量り進らせて候。但し是を見ながら、判官兄弟、何れも恙なくしてばし歸り參りて候はゞ、如何に今一入うたてしさも遣方なく候ふべきに、判官が伯父甥三人の者、里見殿の御供申し、殘りの弟三人は、大將の御爲に生殘りて候へば、歎の中の悦とこそ覺えて候へ。元來、上の御爲に、此の一大事を思立候ひぬる上は、百千の甥子が討たれ候共、歎くべきにては候はず。」と涙を流して申しつゝ、自ら酌を取つて、一獻を進め奉りければ、機を失へる軍勢も、別を歎く者共も、愁を忘れて勇をなす。（卷十八、瓜生判官老母の事）

敗北の悲しみ、死別の涙に一座はとかく濕りがちであつたが、老母が雄々しき一言に、女々しき欺きは弓矢の神にも恐れありと、城中再び勇しく奮ひ起つたのである。

那須五郎の母　正中十年、足利直冬南朝に味方して東寺に據つた時、寄手の將軍尊氏の勢旗色甚だ振はず、時に撰ばれて後詰に向つたのは那須五郎である。智勇すぐれた五

郎には、敵と味方の勝敗は火を見るより明かであつたが、素より猛き武士の身、討死は覺悟の前、たゞ心にかゝるは故郷なる老母の事、それとなく別れの音信を送つた。

那須は此の合戰に打出でける始、故郷の老母の許へ人を下して「今度の合戰に若し討死仕らば、親に先立つ身となつて、草の蔭苔の下までも、御歎あらんを見奉らんずる事こそ、想像も悲しく存候へ。」と申遣したりければ、老母泣々委細に返事を書いて申送りけるは「古より今に至るまで、武士の家に生るゝ人、名を惜しみて命を惜しまず、皆是、妻子に名殘を慕ひ、父母に別を悲しむといへ共、家を思ひ嘲を恥づる故に、惜しかるべき命を捨つる者也。始め身體髮膚を我に受けて殘ひ傷らざりしかば、共の孝已に顯はれぬ。今又身を立て、道を行ひて、名を後の世に揚ぐるは、是孝の終たるべし。されば、今の度合戰に、相構へて身命を輕んじて、先祖の名を失ふべからず。是は元暦の古、曩祖那須與一資高、八島の合戰の時、扇を射て名を揚げたりし時の母衣也。」とて薄紅の母衣を、錦の袋に入れてぞ送りたりける。さらでだに、戰場に莅みていつも命を輕んずる那須五郎が、老母に勸められて、彌々氣を勵ましける。

（卷二十三、東軍事）

やがて將軍より特別の選拔。これさへ武士の面目であるに、今又母のこの言葉、今は何をか思ひ置くべきとて、兄弟三人、一族三十六騎、背面に傷は一筋もなく、物の見事に戰死を遂げた。

淡河時治の妻

元弘の時、北條方の淡河右京亮時治は、北陸の押へとなつて越前の牛原に出陣した。一度六波羅の敗報來つてよりは、四面の楚歌は增すばかり、殊に平泉寺の衆徒が、得たり顏に犇々と牛原に攻寄する軍勢は雲霞のやう。時治もはや最後なりと、殘れる征矢の數を盡し、さてその妻を招いて、

「二人の子供は男子なれば、稚しとも敵よも命を助けじと覺ゆる間、冥途の旅に伴ふべし。御事は女性にておはすれば、縱敵かくと知るとも、命を失ひ奉るまでの事は非じ、さてもこの世にながらへ給はゞ如何なる人にも相馴れて、憂を慰む便に附き給ふべし。亡き跡迄も心安くておはせんをこそ、草の陰、苔の下までもうれしく思ふべけれ。」

と泪の中にかき口說て聞えければ、女房いと恨みて、

「水に住む鴛、梁に巢くふ燕も、翼をかはす契を忘れず。況や相馴れ進せて、覺えず過ぎぬる十年餘りの情の下に、二人の子供をそだてゝ、千代もと祈りし甲斐もなく、御身は今秋の霜の下に伏し、小き者共は朝の露に先立て、消えはてなん後の悲を堪へ忍びては、時の間もながらふべき我が身かや、とても思に堪かねば、生きてあるべき命ならず。同じくは思ふ人と共にはかなくなりて、埋れん苔の下までも同穴の契を忘れじ。」

と泪の床に伏沈む。さる程に、防矢射つる郎等共、已に皆討たれて、来徒箱の渡を打越え、後の山へ廻ると聞えければ、五と六とに成ける幼き人を、鐙唐櫃に入れて、乳母二人に前後を舁せ、鎌倉河の淵に沈めとて、遥かに見送りて立たれば、母儀の女房も、同じく其淵に身を沈めんと、唐櫃の緒に取附いて歩み行く、心の中こそ悲しけれ。唐櫃を岸の上に舁据ゑて、蓋を開けたれば、二人の幼き人顔を差擧げて、

「是はなう母御、何くへ行き給ふぞ。母御の徒歩（かち）にて歩ませ給ふが、御痛はしく候。是に乘らせ給へ。」

と何心もなげに戯れければ、母上流るゝ泪を押へて、

「此河は極樂淨土の八功德池とて、幼き者の生れて、遊び戯るゝ所也。我が如く念佛申して此河の中へ沈まれよ。」

と敎へければ、二人の幼き人々、母と共に手を合せ、念佛高らかに唱へて、西に向つて座したるを、二人の乳母一人づゝ掻抱いて、碧潭の底へ飛入りければ、母上も續いて身を投げて、同じ淵にぞ沈まれける。

其の波紋の未だ消え果てぬ頃、時治も亦陣中に討死を遂げた。

名越時有の妻

六波羅滅亡の時、越中に官軍を防ぎし大將は、名越遠江守時有、弟の修理亮有公、甥の兵庫助貞茂の三人であつた。旗色一つで西又東するのは何處も同じ雑

兵の習、此處も亦其の數に漏れず、二塚の城中に殘るは僅か百足らず、時しも寄せ來る攻太鼓、時有等三人は、なまじいの合戰に一人にても生擒られては末世の恥辱、女房は船にて落し、我等は城を枕に自害せんと、評議はこゝに一決した。

遠江守の女房は、偕老の契を結びて、今年二十一年になれば、恩愛の懷の内に、二人の男子をそだてたり。兄は九、弟は七にぞ成ける。修理亮有公が女房は、相馴れて已に三年に餘りけるが、唯ならぬ身に成つて、早月比過ぎにけり。兵庫助貞持が女房は、此四五日前に、京より迎へたりける上臈女房にてぞ有ける。其昔紅顏翠黛の世に類無き有樣、ほのかに見初めし珠簾の隙もあらばと心に懸けて、三年餘戀慕せしが、兎角方便を運らして偸出してぞ迎へたりける。語ひ得て纔に昨日今日の程なれば、逢に替んと歎來し命も今は惜しまれける。

さる程に、敵の早寄來るやらん。馬煙の東西に揚て見え候と騷げば、女房幼き人々は、泣々皆船に取乘つて、遙の沖に漕出す。うらめしの追風や、しばしもやまで、行人を波路遙かに吹き送る。情なの引潮や、立も歸らで、漕船を浦より外に誘らん。彼松浦佐用姫が、玉島山にひれふりて、沖行船を招きしも今の哀れに知られたり。水手梶をかいて、船を浪間に差留めたれば、一人の女房は、二人の子を左右の脇に抱き、二人の女房は、手に手を取組んで、同じく身をぞ投たりける。紅の衣絳き袴の暫浪に漂ひし

は、吉野龍田の河水に、落花紅葉の散亂たる如くに見えたるが、寄來る浪に紛れて、次第に沈むと見はてし後、城に殘留たる人々、上下七十九人、同時に腹を搔切て、兵火の底にぞ燒死ける。

佐介貞俊の妻

北條高時誅に服して、王政一たび復古となり、世は泰平を謳歌したが、玆に哀れをとゞめたのは、北條の家臣佐介貞俊の身の上である。貞俊は文武の道にすぐれし武士、さるに、主高時の覺えよからず、金剛山の寄手の陣にありながら、鬱々として樂まなかつた。折から主上より御味方し奉るべき綸旨があつたので、貞俊は仰せ畏み直ちに都に馳せ上つた。然し一度我が名に染めし賊徒の汚れを拭ふの機さへなく、今は早命旦夕に逼つた。

とても心の留る浮世ならねば、命を惜とは思ねども、故郷に捨置きし妻子共の行末、何ともきかで死なんずる事の、餘りに心に懸りければ、最後の十念勸めける聖に附て、年來身を放たざりける腰の刀を、預人の許より乞出して、故郷の妻子の許へぞ送ける。聖是を請取つて、其行末を尋ね申すべしと領狀しければ、貞俊限無く喜びて、敷皮の上に居直つて、一首の歌を詠じ、十念高らかに唱へて、閑に首をぞ打たせける。

皆人の世にある時は數ならで憂にはもれぬ我身なりけり

聖形見の刀と、貞俊が最後の時著たりける小袖とを持て、急ぎ鎌倉へ下り、彼女房を尋出し、是を與へ

ければ、婁女閑もあへず、唯涙の床に伏沈みて、悲に堪兼たる氣色に見えけるが、側なる硯を引寄て、形見の小袖の袂に、

誰見よと信を人の留めけん堪てあるべき命ならぬに

と書附、記念の小袖を引かづき、其刀を胸につき立て、忽にはかなく成にけり。

辨の内侍　辨の内侍は、後醍醐天皇の股肱の臣として、北條のために横死を遂げ、今も「太平記」中の壓卷として知られてゐる東下りの一條に、讀者の哀感をそゝる俊基卿の忘れがたみである。父に似て才學あり、和歌の道にも秀れ、國步艱難の時南朝の帝へ宮仕したが、世は刈菰と亂れて主上は行方定めぬ御さすらひ、かくても内侍は父の志を思ひ、何處までも御供と、遂に吉野の山深く分け入つた。

歌書よりも軍書にかなし吉野山、吉野の奥の行宮に、暗き影おふ南朝の御末の程は御痛しかつた。一夜憂を拂ひ給ふ爲御酒一獻と、中納言隆資卿、洞院實世卿を初め數多集うて、さゝやかな御酒宴があつた。御土器を持出づる役の辨の内侍は、いかなるはづみにか、御前にて御土器を取り落して眞二つに割つてしまつた。折も折とて龍顏は見る〳〵曇つた。はつとした内侍は、おのが過ちに平伏してゐたが、暫くして面を上げると、おそる〳〵、

さかづきの割れてぞ出づる雲の上

と申し上げた。帝は内侍の卽妙に御氣色を和げられ、「誰ぞ下の句をつけよ」と仰せられたので、宗房卿が、

星のくらゐのひかりそへばや

と奏すると、主上はいよゝ興ぜさせ給ひ、夜の更くるまで御酒傾けられた。ふと山烏の聲がきこえたので隆資卿、

くわん幸となくや吉野の山烏かしらも白しおもしろのよや

と詠じて、感興はいよ〳〵加つたといふ。

高師直は彼女の姿色をきいて、腹臣の者に命じ、途に之をおびき出して奪はんとした。折も折、楠正行は之に出會ひ、奪ひ返して共に行宮に伴ふと、深く軫念あらせられてゐた後村上天皇は、殊の外に御歡びあつて「正行なかりせば、いと口をしからましを、よくこそ計ひつれ。」とて、内侍を正行に賜ることになつた。正行は聖恩の忝さに感泣したが、戰雲急を告ぐる折から、家庭を作る氣持などは少しもなかつた。そこで、歌一首を作つてお答に替へた。

とても世に長らふべくもあらぬ身のかりの契をいかで結ばむ

やがて正行は、四條畷に高師直の大軍を迎へ撃つて、花々しく戰死を遂げた。內侍はたとひ妹脊の契は結ばずとも、正行は勅命に依つて、自分の良人と定められた人である。此の人ならで、再び何人にか見えんと、黑髮を剪り落し、正行の菩提を弔ふべく、大和國龍門の里に、一生を行ひ澄して送つた。

以上は「太平記」に描かれた武士的女性の重なものであるが、いづれも武士道精神の感化を受けて、理義に富み、貞婦烈女の面目が躍如として現れてゐる。

かやうに「太平記」の作者は、武士的女性に對して、萬腔の同情讃美の情を以て、その德行を讃美力說してゐるが、一面又女子を卑しみ、之を以て禍亂の根源と見做し、或は信頼し難いものとし、戀愛などを罪惡視する傾向の著しいことは注目すべきである。一體この戀愛否定の精神は、ひとり「太平記」のみに限らず、室町期を通じての時代思潮であつて、戰場に馳驅する武士にとつては、恐るべきは女であり、戀である。それ故謠曲に於ても、女は五障三從の罪業深いものであるといひ、戀に惱んだものは、すべて死後地獄道に墜ちると說いてゐる。「太平記」にもその傾向が著しく看取される。

土岐賴員が陰謀をその妻にもらしたところから、遂にその身を滅し、一族の災禍を招いたとい

ふ次第を記して、女性を信頼した輕卒を責めてゐる。

六波羅奉行齋藤太郎左衛門利行の女は、眉目姿(みめかたち)も美しく、才智の秀でた賢女であつて、左近藏人土岐頼員に嫁し、伉儷いと睦まじかつた。正中元年後醍醐天皇鎌倉を滅すの御計畫を廻らし、密に重賞を以て武勇の士を募られたが、頼員も亦之に款を通じた。或夜の寢物語に、之を愛する妻に洩すと、妻の配慮は一方ならず、胸の中でとつおいつ、叡慮不幸に不首尾に終らば、夫の死は必定、若し又鎌倉滅ぶる時は我が親類は全滅である。いざ父に之を語り、夫に返り忠を說いて貰へば、夫も無事親類も無事と、直に父を訪うて之を告げると、利行は大いに驚いて、直樣頼員の邸に馳けつけ、かゝる無謀の擧を行ふは、石を抱いて淵に入る類と、只管利害を說き込むと、頼員は無明の醉の覺むるが如く、同族頼兼多治見國長の勸めるまゝに、つい承諾したばかり、身に禍の及ばぬやう、然るべく御取計ひをと悔悟の色を見せたので、利行は直ちに之を六波羅に密告し、頼定と國長には時を過さず追手を向けられ、事は未發に、敗れてしまつたのである。

大塔宮が流罪に處せられ給うたのは、足利尊氏が、宮の繼母たる准后に取り入つて、宮のことを帝に讒奏したのによるものとし、驪姬の故事を引いて「牝雞晨するは家の盡くる相なり、と古賢の云し言の末、げにもと思ひ知られたり。」と婦人の干涉が禍亂を招く基であることを痛論して

ゐる。

又諏訪三郎盛高は、左近大夫入道の命により「時至りぬと見ん時、再び大軍を起して素懷を遂げん」ため、一度は龜壽を落さんとした時「女性は淺はかなもの故、信用し難きもの」として、龜壽の母が熱望したにも拘らず、その眞の事情を打明けなかつた。

又加茂の神主が屢々改補せられて世の物議を釀したのは、基久の娘に原因してゐるといふ次第を論じ、鹽谷判官が一身一家を滅したのも、その妻の美貌に原因してゐる次第を記して、戀愛の齎す結果の恐るべき次第を論じてゐる。

これらの例によつて、「太平記」の作者が、武士道又は儒教的の思想に支配せられてゐる點が多く、女性又は戀愛に對して同情を缺いてゐるかゞ知り得るのである。

第五章　曾我物語に現れたる女性

「曾我物語」はいふまでもなく、曾我兄弟の仇討について、その顚末を記した文學である。その作者及び作られた時代については異說があるが、佛教に直接かゝはりのある人の作と見られ、

大體鎌倉時代の末か、南北朝の初に作られたものといはれてゐる。物語としての性質は、戰記物語の系統に屬するが、「義經記」と共に、英雄崇拜に基づく個人的傾向を强くあらはしてゐる所に、この種の小說として進步した一つの樣式を示してゐるのである。

曾我兄弟は十八年の間、具さに辛酸を嘗めて、漸く復讐の本望を達したものゝ、將軍幕下幾百の勇士を殺傷して花々しい最後を遂げるのであつて、その境涯は雄々しく、而も亦はかなくあはれである。敵役が將軍賴朝を笠に着て、權勢に驕れる工藤祐經であるだけに、孤貧の中に隱忍奮鬪する主人公兄弟の境地は、一層悲壯であり、孝子として勇士としての面目がいよ〱發揮せられ、世人から所謂曾我贔屓として、白熱的の渴仰讃歎と同情とを以て迎へられるのである。

物語の主人公はいふまでもなく十郞五郞の兄弟であるが、この兄弟をめぐる女性として、兄弟の母、大磯の虎、五郞に馴染みを重ねた遊君等がその重なものとして擧げることが出來る。卽ち物語は、孤獨貧困の中に奮鬪する兄弟を廻つて、敵味方幾多の將士主從、老若男女がとり〲に活躍してゐるが、その中に、恩愛と義理とにからまる母親や、純情と意氣とに燃ゆる遊女などを巧みに取り合せて、頗る配合調和の妙を得、劇的興趣を一段と深くしてゐる。

兄弟の母

兄弟の母は、或る意味に於て、封建時代に於ける女性的運命を最もよく代表してゐるやうに思はれるが、その子等と共に最も痛ましい悲劇的な運命に虐げられた人物だけに、烈婦的女丈夫といふよりは、むしろ悲運に泣く弱々しい女として描かれてゐる。時には泣けるだけ泣いて自ら慰めてゐる事もあつたが、理智よりも感情が勝つた、平安朝式の分子を多分に持つた情の女であつたやうに思はれる。しかし、母性愛が極めて強く、一面に於ては時代思潮の影響を受けて、可なり理智的な態度を示し、兄弟へも義理を說いて庭訓を垂れ、また五郎に勘當を申しつけなどしてゐる點は、やはり時代の女性であつたことを頷かせる。

河津三郎祐康が討たれた時、兄一萬は五歲、弟箱王は三歲の幼少であつた。母はあまりの事に二人の子を左右の膝にかき抱き、髮かき撫でて、

「腹の中の子だにも母のいふ事は聞き知るものを、まして汝等は五つや三つになるぞかし。十五十三にも成らば、親の敵を討ちて妾に見せよ。」

と、泣く〳〵說いたが、弟は何も分らず、手なぐさみして遊んでゐるばかりである。兄は死んだ父の顏をつく〴〵と眺めてゐたが、やがてわつと泣き出して、

「いつか大人しくなりて、父の敵の首とつて、人々に見せまゐらせん。」

といふけなげな姿もいぢらしく、並みゐる人は涙を誘はれ、袖を絞らぬ者はなかつた。名殘惜しさは盡きぬながら、一度去つては再び歸らぬ死出の旅路である。泣く泣く野邊の送りを濟ませ、夕の煙と泣き別れた。その時母も一つ煙にと悲しんだか、

「恩愛の別夫妻の歎、いづれか劣るべきにはあらねども、憂き世の習力及ばず候。親におくれ夫妻に別るゝごとに命を失ふものならば、生老病死もあるべからず。別は人毎のことなれど、思ひすぐれば自ら忘るゝ心のあるぞとよ、と憂きにつけても身を全くして、後世菩提を弔ひ給へ。」

と義父祐親に慰められては、誠に道理は道理なれども、さし當つての悲しさを思ひ諦めることもならず、悶え焦れてゐた。

「夫の別は昔も今も多き所なり。別の涙袂に留まりて乾く間もなし。あと先をも知らぬ幼きものどもにうち添へて、身さへたゞならず、樣をかへんと思へども、尼の身にて過ぐさんところの體も見苦し。また淵河へ沈まんと思ふにも、この身にて死しては罪深かるべし、と聞けば、とにもかくにも、女の身ほど心うきものはなし。」

と、明けても暮れても涙の乾くひまもなく、一日片時も悲しみが忘れられず、出家遁世の心を思ひ立つたが、父入道に諫止され、その上嚴重に監視されては、尼になるべき隙もなく、子供を誰

に預けて育てるかの言葉に、遂に意を決し、相模の國曾我の太郎と申す入道所縁の者の後妻となつた。唯、子供の將來といふ事の爲に、自己を犧牲にしたといふ點は、義朝の妾常磐のそれに似てゐる。

兄一萬が十一歲、弟箱王が九歲の時、梶原源太景季の進言によつて、二人は鎌倉由井濱邊に召し出され、あはや蕾の花は打挫かれんとした時、出發に際しての母の態度は、「情の人」「情の母」としての面目を遺憾なく現してゐる。

「二人の幼き者どもをまゐらせよとの御使に、梶原殿の來れり。」といひければ、母は聞きもあへず、「心憂や、是は何となり行く世の中ぞや。夢とも現とも覺えず。實に夢ならば覺むる現もありなまし。憂き身の上の悲しきも、彼等二人を持ちてこそ、萬の憂も慰みつれ。身の衰ふるをば知らで、何時か成人して大人しくもなりなん。と月日の如く賴もしく、後の世かけて思ひしに、斬られまゐらせて其後、憂き身は何とながらへん。たゞ諸共に具足して、とにもかくにもなし給へ。」と泣き悲しむその聲は、門の邊まで聞えけり。實にや閨生に植ゑし紅の、焦るゝ色のあらはれて、他所に見えしぞ哀なる。絕えぬ思の餘にや、母は子どもを左右の膝に据ゑおき、髮かき撫でゝ口說きけるは、「祖父伊藤殿、君に情なくあたり奉りし故に、その孫とて汝等を召さるゝぞや。如何なる罪の報にて、人こそ多けれ、御敵とはなりぬ

らん心憂さよ。さりながら汝等が先祖、當國に於て誰にかは劣るべき。知らぬ人あるべからず。君の御前なりとも、恐るゝ事なく、最後の所にていひがひなくして叶ふまじ。さしも勇みし親祖父の世にありし故にこそ、御敵ともなり給ひしか。幼くとも思ひ切りて、臆する色あるべからず。健氣に」と申せども、涙にこそ咽びけれ。「實にや叶はぬ事なれども、汝等を留めおき、その代に妾出でゝ、いかにもなりなば、心安かりなん。」と泣きければ、二人の子どもは聞きわけたる事はなけれども、唯泣くより外の事ぞなき。卑しき賤に至るまで、泣き悲むこと、叫喚大叫喚の悲も、これには過ぎじとぞ覺えし。時移りければ景季、使を以て母の方へ申しけるは、「御名殘理と存じ候へども、御恩は盡くべきにあらず。疾く疾く」と責めければ、祐信「承り候ふ」とて、嬉しからざる出立を急ぎける。母も今を限りの事なれば、介錯するぞ哀なる。一萬が裝束には、精好の大口顯紋紗の直垂をぞ著せたりける。かやうに介錯せんことも、今を限りにてもや、と後に廻り前に立ち、つく〴〵とこれを見るに、一萬が著たる小袖の紋こゝろえぬものかな。さてもあだなる朝顔の、花の上露時の間も、殘るためしはなきものを、さて箱王が小袖の紋、濡れてや鹿の獨り啼くらんも、憂き身の上の心地して、いよ〳〵袖こそ濡れまされ。古はなにとも見ざりし衣裳の紋、今は眼に立ちて、思ひのこせる事もなし。やがて歸るべき途だにも、さしあたりたる別は悲しきに、歸らんことは不定なり。見えんことも今ばかりぞ、と思へば、氣も魂も身にそはず。一萬おとなしやかに「あまり御歎き候ひそ。御恩を見たてまつれば、冥途やすかるべしとも覺え

す。若し斬られまゐらせば、前世の事と思し召せ。」といひければ、箱王「兄の仰せらるゝ如く、御歎き候ひそ、我々手を出して御敵つかまつる身にもなし。その上いまだ幼く候へば、御許もや候ふべき。佛にも御申し候へ。」と誠にげに〴〵しく申すにつけても、いよ〳〵名殘ぞ惜しかりける。さりともとは思へど、正しき御敵なり、歸らん事は不定なり。留りゐて物思はんことも悲しければ、一所にて如何にもならん、と出でたちけるぞ哀れなる。母は梶原が見るをも憚らず、事の斜の時にこそ、恥も人目も包まれ、誠の別になりぬれば、徒歩跣にて乳母ともろ共に、庭上に迷ひ出で、「暫くや殿一萬、止まれや箱王、我が身は何となるべき。」と聲を惜まず泣き悲みければ、上下男女もろ共に、今暫くと泣き悲しむ有樣、譬ふべき方もなし。或は馬の口に取りつき、或は直垂の袖をひかへければ、景季も猛き武夫とは申せども、涙にせきあへず「よしなき御使を承つて、かゝる哀を見ることとの悲しさよ。」とて直衣の袖を顔に押しあてゝ泣きけり。母はなほ留まりかねて、門の外まで惑ひ出でて、彼等が後姿を見送り、泣く〳〵より外の事ぞなき。子供も後のみ見返りしかば、駒をも急がず、後に心は留りけり。互の思さこそと推し測られて哀なれ。母は子どもの後も見えず、遠ざかり行きければ、即ち倒れ伏しにけり。女房たち急ぎ引き立て、やう〳〵介錯して、泣く〳〵内にぞ入りにける。

子を思ふあまり、情に亂れた點もないではないが、その熱烈至純な母性愛は、鬼神をも泣かしむるものがある。

次に武士の妻としての兄弟の母の面影を見るに、彼女が五郎を勘當した時の言葉と意氣とは、鎌倉女性としての面目をよくあらはしてゐる。五郎が寺を出て元服したのを見て、

「これは夢かや現かや、心憂や、今より後、子とも思ふべからず、見もせず音にも聞かざらん方へも迷ひゆけ。」

と言ひ放つたこと、又仇討に出發する暇乞、重ねて勘當をゆるされよう、且は小袖の一つを形見にもと、十郎と共に母を訪うた時の言葉、

「誰ぞや、來りて小袖一つといふべき子こそ持たね。十郎は只今取りて出でぬ。京の小次郎は奉公の者なり。二宮の女房は又かやうにいふべからず。禪師法師とて乳の中より捨てし子は、叔父養育して越後にあり。又箱王とて惡者のありしは、勘當して行方知らず。是はたゞ、武藏相模の若殿原の、貧なる姿を笑はんとてかく宣ふと覺えたり。然も留守居の體見苦し。早門の外へ出で候へ。」

と、現在いとしの五郎を据ゑて、逢はうともしない處に意地がある。義理がある。

「その箱王が參りて候。」

と五郎がいへば、

「それは誰が許しおきたるぞ。女親とて卑しみ候か。左樣には候ふまじ。とても斯樣に侮らるゝ身、七

代まで不孝するぞ。對面思ひもよらず。」

と言ひ放つた態度、これは平安朝時代の女性には見ることの出來ない毅然たる態度である。

要するに兄弟の母は、運命に泣く平安朝式の情の女で、理智にたけた女性ではなかつたが、後の夫曾我に對して義理を重んじ、兄弟に對して熱烈なる愛情を示し、而もその中に義理を說いて敎をたれる等、新時代の女性の面影も充分に見る事が出來る。

大磯の虎

「曾我物語」中、意氣と張とに萬丈の氣を吐き、よく鎌倉女性の代表と目されるのは大磯の遊君虎である。彼女は一面權威に屈せず、利害に捉はれざる氣慨を有しながら、而も十郎との間に結ばれた純情に生き、十郎の死後は出家してその後世を弔ひ、專念修行して世を終り、飽くまでも新時代の代表的女性の面目を發揮してゐる。その十郎に對する關係は、恰も靜の義經に對するそれに酷似し、その境遇といひ心情といひ、正に一脈相通ずるものがある。

虎は大磯の長者の女で、人を魅する靨、情こもつた唇等、その玉の顏は恰も楊貴妃を繪に書いたやうな美女であつた。祐成は一日一日と通ふうち、定めた妻といふではなかつたが、その熱い情にひかれ、互に志も深くなり、千代萬代と契を重ねた。虎の父は、一年東に流された伏見大納

菅實基卿である。虎の心様の素直さも、和歌の道に秀でてゐることも、故ないことではなかつた。

二人の交情は餘所の見る眼もいたくしい程であつた。祐成が虎を二なき者に思へば、虎も祐成をかへがたい命とたのみ、祐成の姿の見えぬ日が續けば、定めぬ世の中の移り變りも怨めしく、頼み少い人心と、怨み泣きに涙に咽ぶ夕もあつた。

富士の裾野の卷狩に、諸國より集ふ武士の美々しいよそほひを見て、

「まことや孔子の言に、耳の樂しむ時には愼むべし。心の驕る時には恣にすべからざれとは申せども、あはれ、げに、この殿原の馬、鞍、鐙、腹卷を妾にくれよかし。」

と獨言する。朋輩達が「あはぬ願物、なにの御用にや」といふのに答へて「祐成に參らせ、思ふことを」といつて涙を浮べたのは、祐成の意趣をそれとなく察してゐたのであつた。

和田義盛が一門百八十騎を打つれて下野へ歸る途中、大磯の虎を招いて遊ばうと酒宴を張つた。折から祐成の席に侍つてゐた虎は、その宴席へは出ないといふ。義盛は「御心に背くことあらば罷り立ちて重ねて參るべし。」といきまく。母は仲にはいつて困惑、「嫌な客を相手にするのも遊び女のならひ、母のこれほどの頼みも聞かれないならば、七生までの勘當」と叱れば、虎は涙に咽びながら、

「流を立つる身ほど悲しきことはなし。夫の心を思ひ知れば母の命に背き、又母に從へば、時の綺羅にめづるに似たり。」

と、彼女はたとひ遊君としても、自分を曲げて權勢の前に屈するのは、意氣に對してすまない。況して十郎のゐる身として、他人の宴席に氣嫌氣づまをとらぬといふ。母は困つて、曾我十郎がゐるために出かねるであらうと口を辷らしたが事の起り、「心得ぬ十郎が振舞かな。流の遊君を塞ぐべきか。朝比奈はなきか、迎に參れ。」と義盛が怒る。祐成は手にとる樣に聞える暴言に、意地とあつては刀にかけてもと迄覺悟をしたが、場面は轉回して、朝比奈が取なし、身を屈しての依賴によつて圓滿に解決し、十郎と虎と一緒に宴席に出て酒をくみかはすことになつた。義盛は虎をつくづくと見て、

「聞きしは物の數ならず、かゝる者もありけるよ。十郎が心をかねて出でざるさへ優しく覺ゆるにや、それそれ。」

とほめたゝへ、盃を先づ彼女の前におく。義盛盃をうけて呑み、之を十郎に、さてその次は朝比奈義秀以下順次に盃はめぐつて虎の前にをさまる。虎に一杯うけさせて、

「如何に御前、その盃何方へも思し召さん方へ思ざしし給へ。これぞ誠の心ならん。」

と義盛の言葉、七分にうけた盃、さて何としたもの、義盛にさせば時の賞玩、皆の異議もなからうが、それでは祐成にすまない。たとへこの身は流れの遊び女にもせよ、言ひ交した人をさし措いて、他人の座敷へ出るのさへ本心でないのに、ましてこの盃を義盛にさしたら、義盛に心あると思はれるのも口惜しい。といつて祐成にさせば、一悶着起るは必定。こんなことになると知つたなら、初めからこの座敷へも出なかつたものをと、心を千々に苦しめてゐた。えゝまゝよ、これも前の世からの約束ごと、若し事件が起つたなら、和田の刀を奪つて一刺彼をさし、反す刀に身も死ぬなら本望と、

「許させ給へ、然りとては思ひの方を、」

と打笑ひ乍ら十郎にさす。男でも出來ないこの放れ業、鎌倉女子の意氣は實に虎に現れてゐる。此事あつて後、祐成は虎を伴つて曾我に歸つた。仇討のことは母にも虎にも知らすまいと、髮をすかせながら、よそながらの暇乞、

「祖父は斬られ、本領は手に入らず、亡父供養の經卷書寫のこともせず、面目もない我身の上、この巻狩がすめばそのまゝ出家しようと思ふ、飽かぬ別のつらくして……」

といふ十郎の言葉に、

「怨めしや、問はずば知らせじと思食すかや、まことわらはゝ大磯の遊君、あさましき者の子なれば、誠の道をも思食さじなれども、女の身のはかなさ、身にかへてもこそと思ひ奉れ、見え初めしより何とやらん、思の色の深草よ、忍の袖の摺衣、忘れ奉る便もなし。御志は知らねども、御豫言（かねごと）の違ふをば、僞に又なるらん、と心を盡し待たれしに、さやうに思ひ立ち給はゞ、妾も同じく髪剃りおろし、墨の衣に身をやつし、一つ庵にあらばこそ、外に庵室引き結び、衣を濯ぎて參らせん。香を供へ給はゞ花を摘み、薪を拾ひ給はば閼伽の水を掬ひ、一つ蓮の緣をも願はん。その睦をも否と宣はゞ、山々寺々を修業して、他所ながら見奉らん。それも憚り思し召さば、聞き給へ、身を投げ一日片時もなかるべし。」

と、その赤心の深さも言葉の上にあふれてゐる。彼女にはかうした意氣と貞操とがあつた。

虎は十郎の死を聞いて、身を佛門に入れて亡き人の後世を弔つた。建久四年九月の上旬、一人の尼が、濃き墨染の衣に同じ色の袈裟かけて、蘆毛の馬に貝鞍おいて曾我の家に來た。

「此人々（兄弟）の百箇日の孝養、大磯にても形の如く營むべけれども、箱根の御山にて有るべしと承り候へば、此の御佛事をも聴聞し、我身の營みをもその序にして、一つ諷誦をも捧げばやと思ひ參りて候。」

と使に言はせたのは、大磯の虎の變れる姿であつた。その蘆毛の馬こそ、嘗て十郎が形見と残し

た愛馬であつた。かくして箱根の山に兄弟の母と共に供養をし、百ケ日の佛事を勤めて、寺々山々の順禮を終へて後は大磯に歸つて、一向專修の行をつんで往生したといふのである。

以上のやうに、虎は一婦人の身でありながら、心は鐵石に似て、威武も富貴もその志を奪ふことが出來なかつた。「吾妻鏡」に「見聞せる緇素、悲涙を拭はないものはない。」と書いてあるが、身は卑しき手弱女にして、節操を二三にせざるは、誠に感歎に値する者である。男子は氣節を尚び、卑怯未練を此上もない恥辱とし、名譽の爲には生命をも犧牲にした鎌倉時代に、靜といひ虎といひ、いづれも時代思潮の影響をうけた武士的女性といふべきである。

第六章　謠曲に現れたる女性

謠曲は能樂の詞曲である。古來神前で演じた滑稽な猿樂が、鎌倉時代に盛になつた田樂の趣向を取入れ、その他當時の歌舞の類を巧に包含して、遂に猿樂の能卽ち今の能樂に大成したのである。その文章は概ね前代文學の美辭麗句を補綴したものであるが、莊重な漢文調と典雅な國文調とが巧に調和され、よく絢爛優雅な趣致が釀し出されてゐる。作者も作られた時代も分明には言

はれないが、室町時代から近世の初め頃までに多くの人の手になつたものであらう。中にも觀阿彌、世阿彌父子の手になつたもの、或はその手を加へたものがかなり多いやうである。

謠曲の種類

謠曲の作られた數は、觀阿彌以來今日迄のものを含めると、實に多數に上るのであるが、現在傳つてゐるものは八百餘で、その中今日、觀世、寶生、今春、金剛、喜多の五流で實際演じてゐるものは、二百五十番である。これ程多數であるから、その内容容色も亦種々樣々であるが、これをその内容の種類によつて、脇能、二番目、三番目、四番目、尼能の五つに分け、その五つを一組として演ずるやうになつてゐる。

脇能はその日の最初に演ずるもので、目出度い祝言の意をあらはし、「高砂」「老松」のやうに、神樣があらはれて、神舞などを舞はれ、國家を祝福するやうな仕組になつてゐる。

二番目は一名を修羅物といつて、戰爭に討死した武士は、修羅道に墮ちて苦しむものと考へ、旅僧の回向を受けて、修羅の巷での苦しみを免れたいために、その亡者が現れ、旅僧に戰爭の有樣を語るといふ筋のものである。その材料は「平家物語」「保元物語」「平治物語」などの軍記物語からとつて、その主人公が、舞臺でカケリ、働などゝいふ戰の凄じい模樣をあらはした舞を舞ふ。「田村」「八島」などがその例である。

三番目は鬘物といつて女性を主人公としてゐる。こゝに出て來る女性は、いづれも平安時代、或は平安朝風の優雅な人達で、「伊勢物語」や「源氏物語」から材料をとつて、その主人公に、序の舞、中の舞など優美な舞を舞はせる。「井筒」、「夕顔」、「松風」などがその例である。

四番目は現在物といつて、その主人公は故人の亡靈でなく、現在生きてゐる人物で、普通の劇と同じ形である。そしてこれには時代物と世話物の二種があつて、時代物では、「鉢の木」「安宅」などのやうに、源平時代の武士を主人公としてよく男舞などを舞はせる。世話物は當時の世の中の出來事を材料としたもので、その多くは、子供が人買にかどはかされて行方不明になつたのを、遙に尋ねて行く母を描いた哀れな物語である。これは狂女物といつて物狂を演じる。「三井寺」「隅田川」などがそれである。

五番目は鬼畜物といつて、この能の主人公になる鬼畜には、性質の善良なものと、兇惡なものと、善惡二種類ある。そしてその鬼畜が兇惡なものであると勇士に退治せられ、結局目出度い結果となる。「紅葉狩」は、兇惡な戸隱山の鬼女を、平惟盛が八幡大菩薩から授かつた神劍を以て切伏せる物語。「鞍馬天狗」は、牛若に兵法を授けて將來を祝福する意味で目出度く終つてゐる。

以上の順序で演ぜられるが、神男女狂鬼、これを能の五種別とも稱する。先づ一番目には率直

に祝言の心持を述べ、二番目はやゝ細かな演出を加へ、三番目には最も優婉な趣を見せ、四番目には劇的な面白い場面を演じ、最後に急迫した演出に終るのである。

謠曲の思想

謠曲の高唱してゐる重な思想について、佐成謙太郎氏は(一)尊王愛國、(二)忠君友愛、(三)親子愛、(四)戀愛否定、(五)技藝尊重、(六)宗教思想等を擧げて居られるが、中にも親子愛については、東西古今の文藝を通じて、謠曲ほどこれを讃美してゐるものはあるまいと言つて居られる。

親が子を思ふといふ情は、子が親を思ふといふ情と共に、人間の本質的なるものゝ一つであつて、古來我國の文學には強く表現せられてゐる。然し古代に於ては、何といつて異性間の情愛が文學の中心をなしてゐたから、親子の情愛も文學の素材としてそれに對立する程の領域を持つてゐなかつた。それが時代の遷るに從つて、社會生活が複雜になり、家族制度が緊密になり、道德的要求が人間生活を規正して、親子の情愛及び道といふものが、文學の世界にもくつきりと一つの領域を作つて來た。その歷史的段階に一つの時代を劃するものが、謠曲に於ける親子關係である。「記紀」にも親子の愛情を描いてゐる。「萬葉集」にも親を慕ひ子を愛する歌が少くない。しかし室町文藝、殊に謠曲は特に親子愛を強調讃美してゐる。

今この例を謠曲に求むるに、母子の別れを惜しむものに「小袖曾我」「大佛供養」があり、父子將に別れんとする悲しみを描いたものに、「唐船」「鶴若」があり、永く相別れてゐたものが、大事起つてその情の俄に切なるものに「熊野」がある。

永い間行方を尋ねて、漸くに再會し得た喜びを描く趣向は、親子物の大部分を占めてゐるが、その中子が親を尋ねるものに、「景淸」「木賊」「藍染川」「歌占」「土車」「刈萱」等があり、父が子を尋ねるものに「花月」「雲雀山」「弱法師」「稻舟」などがあり、母が子を尋ねるものに、「三井寺」「柏崎」「櫻川」「百萬」「敷地物狂」「隅田川」等がある。

親がわが子のことを思ふ如く、子はまた親の爲に身を顧みないのが孝行の道である。宇治橋の合戰に敗れて誅せられようとした父に代つて、わが命を棄てたのが「鞆」の正氏であり、病母を養ふ爲に、春日禁獵の魚を捕つて死刑に處せられたのが「佐保川」の女であり、萬葉集撰集の勅命を蒙つてゐるので、妻の危篤の病を顧みることの出來ないのを見て、母の命を轉じて身を殺したのが「家持」の姫である。

かやうに親子の愛を强調讃美してゐる謠曲の作者は、その反動として男女の戀愛を極めて排斥してゐる。本居宣長は「人の情を感ずること戀にまさるものなし。さればものゝあはれの深く、

忍びがたきすぢは殊に戀に多くして、神代より代々の歌にも、そのすぢをよめるぞ殊におほくして、心ふかくすぐれたるも、戀の歌にぞ多かりける。」(玉の小櫛卷二)と言つてゐるが、凡そ文藝作品といへば、東西古今を問はず、最も多く戀愛を主題としてゐるのであるが、謠曲は却つてこれを斥けてゐる。謠曲作者の見解に從へば、女は何の用にも立たない。(景清)心のはかない(女郎花)思ひの深い(梅枝)愚痴つぽい(鞠)五障三從の罪業深い(佛原、夕顔、誓願寺等)ものである。嫉妬の一念には丑の刻詣りをして「戀の身の浮ぶ事なき賀茂川に、沈みしは水の青き鬼、我は貴船の川瀬の螢火、頭に戴く鐵輪の足の、炎の赤き鬼となつて、ふしたる男の枕により」添つて行くのが、(鐵輪)あさましい女の業因である。謠曲三番目鬘物に描く所は多くは「よしなき戀路に侵されて、長く惡趣に墮し」た樣である。例へば、九州芦屋何某の妻は、京に上つた夫の歸りを待ち兼ねて、恨み死をしたが故に、

さりながら我は邪淫の業深き、思ひの煙の立ち居だに、安からざりし報の罪の、亂るゝ心のこと責めて獄卒阿防羅刹の標の、數のひまもなく、打てや〳〵と報の碪、恨めしかりける因果の妄執、因果の妄執の思ひの涙、碪にかゝれば、涙は却つて火焔となつて、胸の焰にむせべば、叫べど聲が出でばこそ、碪も音なく松風も聞えず、呵責の聲のみ恐しや。(碪)

と、このやうな責め苦を受けるのである。

かやうに謠曲の作者は、大體佛說に從つて、女性を五障三從の罪深いものと見てゐるやうであるが、それは戀愛の妄執を戒める詞として用ひてゐるのであつて、女性そのものを卑しんでゐるのではない。否、他の文藝に殆んど例のないほど、女性の純潔を尙んでゐるのである。「戀重荷」「綾鼓」の女御は、身命を抛つて思ひを寄せた男の戀を斥けてゐる。「羽衣」の天女は、同型の他の文藝傳說が、いづれも一度地上の人となり夫婦の契を結ぶものとしてゐるのに反し、謠曲では優雅な歌舞を奏して、そのまゝ天上界に歸り去るといふやうな、最も淸純な趣に脚色してゐるのである。

謠曲の女性

今謠曲に現れた女性についてみるに、前述の如く謠曲五種別神、男、女、狂、鬼のうち、神、男は序、女、狂は破、鬼は急で、三段の能の根本的發展型式であるが、女の仕手の能は、序なる神、男にはなく、破と急にのみ見出される。

三番目「鬘物」は舞の美を中心とするのであるが、その舞の基になる文學、殊に詩歌に依據するものが多く、女流作家の榮えた平安朝の歌人等は、頗る好材料となつて扱はれてゐる。そしてその女主人公は、ワキ旅僧の質問に應じて、昔の技藝譚戀愛譚を物語り、それに聯關して「序舞」

「中舞」などの舞踊を演じ、結局僧の供養によつて成佛するといふのである。

「誓願寺」「東北」の和泉式部は、前者では歌舞の菩薩としての式部の靈が、天智天皇の御願の、この寺に詣でる一遍上人に現れて、六字名號の額を揭げさせ、法樂の美に舞ひ、「東北」でも、式部の愛撫した軒場の梅に現れ、「門の外か法の車のおときけば我も火宅を出にける哉」の名歌を基に、法三昧を通して梅花の美を描き出してゐる。

小野小町は傳奇的な女性であるから、謠曲の中にも數番作られてゐることは、旣に歌人としての小町の作に述べた所であるが、それも波瀾を經た晩年のものが多い。

紫式部を主題としたものに「源氏供養」がある。「源氏物語表白」の著者安居院法印が石山詣の折、式部の靈が現れて、現世に物語を書いて狂言綺語の戒を破つた爲、苦患を受けたが、安養淨土に救ひ給へと回向を受けるといふ筋である。

「源氏物語」の女性の葛藤は四番物に多いが、三番物の中にも、「半蔀」「夕顏」「野宮」「住吉詣」等があり、四番物として、「葵の上」「玉葛」「浮舟」等がある。

他の歌人では、式子內親王の靈が「定家」に現れる。定家は式子內親王と情交あり、後定家の執心葛となり、內親王の石塔にはひまつはる。よつて內親王の亡靈が現れて、旅僧の回向を受け

るといふのである。檜垣の姫は「檜垣」で、「年經ればわが黑髪も白川のみづはぐむまで老いにけるかな」の歌に、老女として現されてゐる。「井筒」は、業平が有常の女と契り、後又、河内の國の高安の女に通つたことなど、「伊勢物語」の說話を骨子として、筒井筒の歌と、風吹けばの歌とを組合せ、可憐に純美に描き出したものである。

平家の一族及びこれに關係ある人々を主人公とした謠曲は、現在刊行せられてゐるもの三十有餘あるが、女性を主人公としたものに、「妓王」「佛原」「熊野」「小督」「千手」「大原御幸」等がある。中でも「熊野」は最も著名である。

遠江の國池田の宿の長熊野は平宗盛の愛妾であつたが、國の老母が病氣なので、屢々暇を乞うたが許されない。今度は又國から朝顏が老母の文を持つて來て暇を願つたが、やはり許さないでそのまゝ淸水へ花見に連れ出した。やがて酒宴が開かれる。熊野が舞を舞つてゐると村雨が降つて來た。咲き亂れた花がハラ〳〵と散る。熊野はそれを見ながら「いかにせむ都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらむ」と母を懷ふ歌を詠んだ。さすが宗盛もその心根を憐んで、暇を與へて歸へらしめたといふ趣である。そしてこれは偏に觀音の御利益なる意を含め、叙するに都の春色と、老母を懷ふ情と、信仰の念とを以てし、文章の優麗なるは謠曲中の白眉である。

三番目に屬する戀慕物として「松風」「釆女」を擧げることが出來る。「松風」は「源氏物語」須磨の卷に、在原行平の佗住居のことを記してゐるのに基いて、新に松風、村雨の二女を假作したものである。諸國一見の僧が、西國行脚の途次、攝津國須磨に立ち寄り、松風村雨の舊跡を弔つて、海士の鹽屋に一夜の宿を求めたところ、宿の主は松風村雨の亡靈で、行平がこゝに流されてゐた三年の間、その寵を受けた姉妹の海女であつた。二人は行平の都に歸つた後の戀しさを語つたが、そのうちに松風は心も狂ほしくなり、舞を舞つて行平の幻影を追ふ、と見るうちに僧の夢は覺めて、あたりにはたゞ松風が吹くばかりであつたといふ曲である。

「釆女」は同じく諸國一見の僧が奈良春日の社に參詣すると、折柄來合せた里女が春日明神の縁起を語つて聞かせた後、僧を猿澤池に導き、昔天の帝の御時、釆女が御寵の衰へたことを歎いて、この池に身を投じたことを話し、私はその釆女の幽靈ですと、回向を乞うて池に入る。それで僧が佛事をしてゐると、釆女の靈が現れ、葛城王の心を和げた釆女の昔物語をして舞を舞ひ、なほも回向を乞うて又池の底に入るといふのである。「大和物語」に據つたことはいふまでもない。

靜御前に取材したものに「吉野靜」「二人靜」がある。「吉野靜」は、義經を遠く落ち延ばしめんと、佐藤忠信と共に吉野に居殘つて、衆人を牽制する爲に舞を舞ひ、「二人靜」は亡靈が二體とな

つて、昔語りをして舞を舞ふといふ趣である。

なほ、三保の松原に殘る天人傳説を取扱つた「羽衣」は、舞の美しさを以て知られてゐる。

狂女物　女性の物狂を主題とした狂女物の中、子の行方が分らなくて心の亂れたものに、「三井寺」「百萬」「櫻川」「柏崎」「隅田川」があり、夫を慕つて心の亂れたものに、「花筐」「班女」「水無月祓」「賀茂物狂」があり、身の不幸から狂亂したものに「蟬丸」があり、狂亂を裝ふものに「籠太鼓」がある。

三井寺　一人の女性が京都清水觀音に參り、「憐み給へ思ひ子の、行末何となりぬらん。枯れたる木にだにも、花咲くべくはおのづから、いまだ若木のみどり子に、再びなどか逢はざらん。」と我が子の行方を敎へさせ給へと祈つてまどろむと、「わが子に逢はんと思はゞ三井寺へ參れ。」との靈夢を蒙つたので、喜んで三井寺の方へ出て行く。三井寺では、住僧が稚兒を伴つて庭に出で、八月十五夜の月を眺めてゐる。そこへ心の亂れた彼女が、

「かやうに心あり顏なれども、我は物に狂ふよなふ。いや我ながら理りなり。あの鳥類や畜類だにも、親子のあはれは知るぞかし。ましてや人の親として、いとほし悲しと育てつる子の行方をも白糸の、亂れ心や狂ふらん。」

と、辿りつき、月に興じて寺の鐘をつく。僧が叱ると、狂女は月夜に鐘をついて詩狂と答へた故事などを擧げて、なほもうち興ずる。稚兒はその狂女がわが母であることに氣がついた。母も、

母「あら不思議や、今の物仰せられつるは、正しく我子の千滿殿ござめれ。あら珍しや候。」

僧「しばらく、是なる狂女は庇忽なる事を申す者かな。さればこそ物狂にて候。」

母「なう是は物には狂はぬものを。物に狂ふも別れ故、逢ふ時は何しに狂ひ候ふべき。是は正しき我が子にて候。」

僧「さればこそ我が子と申すか、條なき事を申し候。急いで退き候へ。」

子「あら悲しや、さのみな御打ち候ひそ。」

僧「言語道斷はや色に出で給ひて候。此上はまつすぐに御名のり候へ。」

子「今は何をか包むべき、我は駿河國、清見が關の者なりしが、人商人の手に渡り、今此寺に在りながら、母上我を尋ね給ひて、かやうに狂ひ出で給ふとは、夢にも我は知らぬなり。」

母「又妾も物に狂ふ事、あの兒に別れし故なれば、たまたま逢ひ見る嬉しさのまゝ、やがて母よと名のる事我が子の面伏なれど、子故に迷ふ親の身は、恥も人目も思はれず。」

と、母子は不思議の再會を喜び、うち連れて故郷に歸り、やがて富貴の家になつた。

櫻川　東國方の人商人は日向で櫻子といふ子を買ひとり、その文と身代とを母に屆けて立去つた。櫻子は貧困な母の苦衷を察して、みづから人買の手に身をゆだねたのである。それを知つて我子のしほらしい心に泣いた母は、

「ひとり伏屋の草の戶の、明し暮して憂き時も、子を見ればこそ慰むに、さりとては我が頼む、神も木華開耶姬の御氏なるものを、櫻子留めてたび給へ。さなきだに、住みうかれたる故鄕の、今は何にか明暮を、堪へて住むべき身ならねば、我子の行くへ尋ねん。」

と、泣く〳〵も故鄕を迷ひ出た。そして三年は過ぎた。常陸國磯邊寺の住僧は、自分を賴つて來た稚子を連れて、櫻川へ花見に出かけた。そこへ櫻子を尋ねあぐんで氣の狂うた母親が現れる。里人達は、

「花は今が盛にて候。又こゝに面白き事の候。女物狂の候が、美しき抄ひ網持ちて、櫻川に流るゝ花をすくひ候が、けしからず面白う狂ひ候。これに暫く御座候ひて、幼き人にも見せまゐらせられ候へ。」

と、我が身にかゝはりのない狂女の素振を、面白可笑しく眺め興じてゐる。狂へる母親は、

「いかにあれなる道行人、櫻川には花の散り候か。何散り方になりたるとや。悲しやなさなきだに、行く事やすき春の水の、流るゝ花をや誘ふらん。花散れる水のまにまにとめくれば、山にも春はなくなりに

けり、聞く時は、少しなりとも休らはゞ、花にや疎く雪の色、櫻花、櫻花散りにし風の名殘には、水なき空に波ぞ立つ。思も深き花の雪、散るは涙の川やらん。是に出でたる物狂の、故郷は筑紫日向の者、さも思子を失ひて、思ひ亂るゝ心筑紫の、海山越えて箱崎の波立ち出でゝ、須磨の浦、又は駿河の海過ぎて、常陸とかやまで下り來ぬ。實にや親子の道ならずば、遙けき旅を如何にせん。こゝに又名に流れたる櫻川とて、さも面白き國所あり。別れし子の名も櫻子なれば、形見といひ、折柄といひ、名もなつかしき櫻川に、散り浮く花の雪を汲みて、自ら花衣の、春の形見殘さん。花鳥の立ち別れつゝ親と子の、立ち別れつゝ親と子の、面忘れせば如何ならん。うたてや誓こそ、冬ごもりして見えずとも、今は春べなるものを、我子の花はなど咲かぬ。我子の花はなど咲かぬ。」

と、川に流れる花を網に掬つてはなつかしみ、木の花の散るを見ては、面白う狂ふ。その仔細ありげな樣子に寺僧は狂女の身の上を尋ねると、伴つてゐた櫻子の母なることが分り、たえて久しい親子の邂逅となる。

「何をか今は包むべき、親子の契朽ちもせぬ、花櫻子ぞ御覽ぜよ。」

「櫻子と、櫻子と、聞けば夢かと見も分かず、いづれ我子なるらん。」

三年の日數程ふりて、別れし遠き親と子の、もとの姿は變れども、さすが見馴れし面だてを、よく〳〵

見れば、稚子の顏ばせの、こは子なりけり鶯の、逢ふ時も鳴く音こそ、嬉しき涙なりけれ。

かくて母子はこゝに再會を得て、故郷に歸り佛道に入つた。まことに「二世安樂の緣深き、親子の道ぞありがたき。」ことである。

隅田川　武藏國隅田川の畔で、今日この在所で大念佛があるといふので、人を集めてゐる。そこに旅人が來て渡舟に乘る。その後から都の狂女が謠ひ乍ら現れる。

「げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行人に言傳てゝ、行方を何と尋ぬらん。聞くや如何に上の空なる風だにも、松に音する習あり。眞葛が原の露の世に、身を恨みてや明け暮れん。是は都北白河に年經て住める女なるが、思はざる外に獨子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷子なり。千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、もとより契假なる一つ世の、契假なる一つ世の、其中をだに添ひもせで、こゝやかしこに親と子の、四鳥の別れ是なれや。尋ぬる心の果やらん。武藏國下總の中にある隅田川にも著きにけり。」

そして船頭等にからかはれ乍ら舟に乘り込む。舟の中で渡守は、旅人の尋ねるがまゝに、今日の大念佛の謂れを語る。

「さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候が、此幼き者、いまだ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、此河岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、此幼き者をばそのまゝ路次に捨てゝ、商人は奥へ下つて候。さる間此邊の人々、此幼き者の姿を見候に、よし有げに見え候程に、さまざまに痛はり候へども、前世の事にてもや候ひけん、たゞ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某と申しゝ人の唯ひとり子にて候が、父には後れ母ばかりに添ひ參らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人の足手影もなつかしう候へば、此道の邊に築き籠めて、しるしに柳を植ゑて給はれと、おとなしやかに申し、念佛四五返唱へ遂に事終つて候。」

今日はその一周忌で回向するのだと語る。狂女がその子の名を尋ねると、京都北白河吉田何某の子梅若丸で、年は十二と答へる。狂女はそれこそわが尋ねる子よといつて泣く。

「なう親類とても親とても、尋ねぬこそ理なれ、其幼き者こそ、此物狂が尋ぬる子にては候物かな。なう是は夢かやあらあさましや候。」

渡守は驚き憐んで、狂女をその墓所に連れて行くと、その塚には丁度梅と柳が咲き、里人が供養

の大念佛をとなへてゐた。

「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さても無慙や死の緣とて、生所を去つて東のはての、道の邊の土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、此下にこそ有るらめや。」

と打ち歎き、餘りの悲しさに念佛をさへ申さず泣くのであつた。が、渡守にすゝめられるまゝに夜念佛をとなへると、その子の面影が幻に現れ、夜の白むと共にはかなく消え失せ、後にはたゞ塚の上に草が茫々と生えてゐるばかりであつた。

班　女

美濃國野上宿の遊女花子は、この春、都から東へ下る途次立寄つた吉田の少將と深い契を結んだ。そして、別れに臨んで互に扇を取替へたが、花子は明暮その扇を眺めては少將を戀ひ慕つて、他の客に出ないので、宿の長は怒つて花子を追ひ出してしまつた。花子は、

「げにやもとより定めなき世といひながら、うきふししげき河竹の、流の身こそ悲しけれ。分け迷ふ、行くへも知らで濡衣、野上の里を立ち出でて、近江路なれど憂き人に、わかれしよりの袖の露、そのまゝ消えぬ身ぞつらき。」

と、少將を慕つてさまよひ出た。少將は秋にもなつたので都に歸らうと、野上に立寄つたが、もはや花子は居ないので、そのまゝ都に歸り、賀茂の社に參詣した。そこへ狂亂した花子が、

「春日野の雪間をわけて生ひ出でくる、草のはつかに見えし君かも。よしなき人に馴衣の、日を重ね月はゆけども、世を秋風のたよりならでは、ゆかりを知らする人もなし。夕暮の雲の旗手に物を思ひ、うはの空にあくがれ出でて、身を徒になすことを神や佛も憐みて、思ふことをかなへ給へ。それ足柄箱根玉津島、貴船や三輪の明神は、夫婦男女のかたらひを、守らんと誓ひおはします。此神々に祈誓せば、などか驗のなかるべき。」

と狂ひ出て、少將と取交した扇から班女の故事を思ひ起し、曲舞を演ずる。

「さるにても我夫の、秋より前に必ずと、夕の數は重なれど、あだし言葉の人心、頼めて來ぬ夜は積れども、欄干に立ちつくして、そなたの空よとながむれば、夕暮の秋風嵐山颪野分も、あの松をこそは音づるれ。我待つ人よりの、音づれをいつ聞かまし。せめてもの、形見の扇手にふれて、風のたよりと思へども、夏もはや松の窓の、秋風冷かに吹き落ちて、團雪の扇も雪なれば、名を聞くもすさまじくて、秋風怨あり。よく思へば是もげに、逢ふは別れなるべし。其報なれば今さら、世をも人をも恨むまじ。たゞおもはれぬ身の程を、思ひつゞけて獨居の、班女が閨ぞさみしき。」

ところが少將はその扇を見て、その狂女が花子であることを確め、こゝに二人は樂しい契に歸ることが出來た。

籠　太　鼓

九州松浦の何某は、召使關淸次が、他鄕の者を討つたので、入牢させて置いたところ、牢を破つて逃げてしまつたので、その妻を召捕つて夫の在所を糺したが、

「是は仰せとも覺えぬものかな、たとひ夫(つま)の有所を知りたればとて、あらはし夫を失ふべきか。その上夫の在所を、夢現にも知らぬものを、」

と、頭として口を開かないので、牢に入れ、從者に命じ、一時每に鼓を打つて嚴重に番をさせた。ところが妻は夫戀しさの餘り、

「偕老同穴と、契りし夫のゆくへも知らで、のこる身までも道せばき、なほ安からぬ籠の內、思の闇のせんかたなさに、物に狂ふは僻事か。」

と、遂に心も狂うてしまつた。しかしこれは、夫を救はんが爲、狂氣を裝う狂言であつて、

「あら戀しわが夫の、面影に立ちたり。うれしやせめてげに、身かはりに立ちてこそは、二世のかひもあるべけれ、此籠いづる事あらじ、なつかしの此籠や、あらなつかしのこの籠や。」

と狂の中で佯狂をつゞけてゐる。松浦もその心情を憐んで、夫婦ともに助けてやらうといふ。妻はその詞を聞いて喜び、始めて夫の在所を明かし、すぐさま夫を尋ねて、もとの住家に歸ることが出來た。

以上は「狂女物」として、子の行方を尋ね、夫の後を慕うて、心も狂うた女の眞心を寫したものであるが、その他「藤戶」「鳥追船」「接待」「小袖曾我」「筍之卷」「昭君」「松山鏡」「谷行」「藍染川」「海人」等にも濃厚な母性愛が現れてゐる。中でも最も氣の毒なのは、「藍染川」の中に出て來る梅千代の母である。

藍染川　京都一條今出川の女梅壺侍從は、一子梅千代を連れて、在京の節契を結んだ太宰府の神主を尋ねて行く。そして宿主左近尉に神主へ文を屆けさせたところ、折惡しく神主は留守で、後妻がその文を見て嫉妬を起し、京女を離別する僞手紙を作つて宿主に渡し、且つ宿から主に追ひ出せと命じた。その僞手紙に、

「御下り珍らしく候へども、男の身なりとも、遙々遠國に一人は下り難し、いかさまめづらしき人に誘はれて御下りかと思ひ候へば、對面申す事はあるまじく候。是は梅千代が方へ申し候。本よりこの身は不肖なれば、親ありとも思ふべからず、はや〳〵都へ歸り給へ。」

とあつた。母はこれを見て歎き悲しみ、

「筑紫人、虚言すると聞きつるに、頼みけるこそ中々に、はかなかりける心かな。かきくらす、心の闇のひたすらに、夢現なき道のべの、便と頼む木陰さへ、今は亡き身となるべしと、思ふにつけて獨子を、殘し置くべき悲しさよ。」

と悲歎の餘、蘆染川に身を投げてしまつた。神主は宅に歸る途中、女の死骸を見て大いに驚き、その遺書を讀んで深く悲しみ、神前に跪いて女の蘇生を祈つた。すると、天滿天神が現れて、女を蘇生せしめ給ふといふ戯曲的構成である。

「海士」に現れる海人は、賤の女ながら我が子を藤原不比等の世嗣としたいばかりに、「わが子のため捨てん命、露程も惜しからじと、千尋の繩を腰につけ」て、龍宮に寶珠を取つて献ずるのであるが、その行爲は悲壯といふより外はない。

その外、「箙之卷」に於ける常盤の教訓にも、「昭君」に於ける老父母の追憶にも、「谷行」に於ける母の慟哭にも、「藤戸」に於ける母の悲歎にも、「竹の雪」「鳥追舟」「接待」等に於ける母の苦衷にも、皆永遠に變らない崇高な母性愛が強く現れてゐる。なほ「竹雪」は繼母に虐待される少年が、雪の中に斃れるのを、實母が來合せて悲歎し、「雲雀山」は、少女時代に繼母に雲雀山に捨てられ

た中將姬を、侍從の乳母が小屋を作つて、花を取つて町に賣りつゝ育てゝ、遂に父親の許に歸參をさせるといふのであるが、何れも哀切極りなく、觀客の淚をしぼらざるはない。

「狂女物」以外に夫婦の愛を描いて著名なものに「砧」「錦織」「芦刈」「錦戶」等がある。

「砧」は淒い靜けさを持つた哀曲で、都からの夫の歸りを、砧打ちつゝ待ち佗びて死んだ妻の亡靈が、夫に現れて歎き悲しみ弔はれるといふ筋である。

又「錦戶」に出て來る泉三郞の妻は、錦戶泰衡が泉の城へ押寄せると、彼女は、

「實に〳〵敵は寄せ來る。いかに心は猛くとも、女の身にて候へば、思ひ切らせ給ひたる。御身の障りとなるべきなり。まづ〳〵妾はともかくも、自害に及び候べし。御心安く御覽じ置きて、討死めされ候へ。」

と、夫に先立つて自害してゐる。

なほ、かやうな武士的女性としては、「富士太鼓」「望月」「安犬」の妻を擧げることが出來る。これらはいづれも我が子と協力して夫の敵を討つてゐるのである。

五番目は鬼畜物であるが、女性を主人公とした所謂鬼女物には、「安達原」「紅葉狩」「山姥」「鐵輪(かなわ)」「道成寺」等がある。その中「安達原」「紅葉狩」「山姥」には眞の鬼女が現れ、「鐵輪」「道成寺」等は、初は普通の女人であつたものが、嫉妬の餘り鬼形と化するのである。

第六篇　江戸文學を通して見たる女性

第一章　江戸時代の概觀

我が文學史の中で、最も光彩絢爛たる隆盛を極めたのは、平安時代と江戸時代で、この兩時代は、その中間に鎌倉室町の四百年間の溪谷を隔てゝ相對してゐる高山のやうな觀を呈してゐる。鎌倉室町時代は、戰亂が續いて人の心が落付かず、文學は一般に衰微し、又そこに生れた文學も、佛教思想を根柢とした暗い感じのするものであつたが、德川幕府が成立してから明治に至る迄の二百五六十年間は、吹く風も枝を鳴らさぬ太平の日が打續いて、人心も安定し、文運は益々發展し、幾多の新鮮な文學作品が生れ出るやうになつた。

文學の花は常に平和の園でなければ開かない。戰國時代は文學の暗黑期であつた。社會が混亂と動搖と不安に戰いてゐる時は、文學の花は凋んでしまふ。それは人々がさうした餘裕を持たないからである。ところが、戰爭がすんで平和が來ると、文學の花が柔い春の風と共に、その華かな姿をほゝゑみかける。久しく不安と動搖とのうちにゐた國民は、江戸時代には入つて、はじめて平和の空氣の中に、その生活を樂しむことが出來るやうになつた　そしてその平和は、我が國

史の上に於て、空前といふべき程長い間續いた。その多年の平和の風に育まれて、文學はあらゆる方面に絢爛たる色彩を現したのである。

江戸文學の三つの流

儒　學

家康は海内を一統するや、武力を以て天下を平定するも、武力を以て天下を治むべからざるを知り、國民生活安定策として、學問を盛に奬勵して、文化事業に力を注いだ。それには儒教が最も健全な思想と考へ、それを根柢とした道德主義を以て國民思想の中心とした。それ故、この時代に於ける著しい思想界の特色は、儒教が佛教に代つて新にその勢力を占めたことである。現世を否定して、來世の淨土を欣求した薄暗い近古の世は、現實を謳歌し、泰平に陶醉する華かにも亦明るい世界と變つた。それ故、藤原惺窩が家康に拔擢され、次いでその弟子林道春が登用されるに及んで、儒學は德川氏の官學となり、人倫道德は一に儒教の教に從ふやうになり、代々の將軍や補佐の人々も、概ね家康の意を體して學問を奬勵し、漢學者、漢文學はこの時代を通じて尊敬の中心となつた。綱吉、光圀、家宣、定信等いづれも學問を好み、漢學を保護し、儒學の教を以て政治の中心と考へたので、漢學者の數も極めて多く、惺窩、道春

以外に、木下順庵、山崎闇齋、新井白石、室鳩巣、中江藤樹、熊澤蕃山、伊藤仁齋、荻生徂徠等の有名な人々が現れ、その興隆に努めたので、儒教の精神である修身齊家の上の道德的敎訓は、上下の間に遍く行きわたつた。

國學　ところが、かうして漢文學が隆盛を極めたその反動として、茲に勃然として國學が復興し、古代文學の研究から得た純粹な日本精神の發揚を叫び、又國文學に對する新しい研究の數々を發表した。僧契沖をはじめとして、荷田春滿、北村季吟、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤、橘千蔭、村田春海、小澤蘆庵、塙保己一といふやうな人達がそれで、これ等の人々は、「古事記」「萬葉集」「源氏物語」「枕草子」「徒然草」等の古典に關する註釋や評論をなし、或は國語の濫れてゐるのを正し、或は日本の古道、皇道、神ながらの道を發揮宣傳しようとし、或は又古風な優美な歌や文章を次々に發表した。そして、漢學者が支那的儒學的の敎訓と智識とを世に廣めようとしたのに對して、純日本的な精神と知識と趣味とを、人々の心に甦らせようと努めたのである。

俗文學　以上の漢文學と國學、この二つは江戸時代の文學の中に、重要な地位を占めてゐる二大潮流であるが、これらのものは多く上流の人々、即ち貴族階級の人々

の間に作られ、又それらの人々の間にもてはやされた、所謂貴族文學であつた。ところが、この貴族文學に相對して、一般民衆の手に作られ、一般民衆の間に喜ばれた平民文學のあつたことを忘れてはならない。否この平民文學こそ、江戸時代の特色を最もよくあらはす代表的文學といはなければならない。

平安朝文學は公卿生活を取扱ひ、鎌倉室町文學は武士生活を主題とし、その作者も多くは公卿、武士、僧侶といふやうな特殊な階級に獨占され、大多數の民衆は之に與らなかつたのであるが、江戸時代に入つてからは、平民の手によつて、平民の爲に、平民の感情、生活を描寫した文學が續出するやうになつた。

この平民文學を種類の上から大別すると、三つに分けることが出來る。

その一は連歌、俳句、俳文、川柳等を含む俳諧系の文學であつて、その代表的作家は、松永貞德、西山宗因、松尾芭蕉、谷口蕪村、小林一茶等である。

その二は淨瑠璃及脚本系の文學であつて、代表作家として、淨瑠璃では近松門左衞門、紀海音、竹田出雲、近松半二等をあげることが出來るし、脚本では並木五瓶、鶴屋南北、河竹默阿彌等が著名である。

その三は小說系の文學であつて、假名草紙、浮世草紙、八文字屋本、草雙紙、洒落本、滑稽本、人情本、讀本等を含み、この時代の文學の中で最も分量の豐富なものである。作家として、淺井了意、井原西鶴、戀川春町、柳亭種彥、山東京傳、十返舍一九、式亭三馬、爲永春水、曲亭馬琴等を數へることが出來る。

文學の展開

前後三百年の文學を時間的に區分する時、前に元祿時代があり、後に文化文政時代があつて、互に特色をもつて相對立してゐる。

元祿時代は、國學漢學より小說戲曲に至る迄、總て皆京阪地方を中心にして榮えた時代、文化文政時代は、中心が江戸に移り、あらゆる文學がこゝに華かさを競つた時代である。つまり江戸時代の文學は、元祿を中心とする前後百五十年間の上方時代と、文化文政を中心とする約百年の江戸時代との二つに分けることが出來る。前期中の初期は、古書の刊行や古典の註釋が出て、世人の目が次第に讀書に向ひ、歷史物や敎訓の假名草紙が漸く現れて、次で來るべき純文學の豫備となり、それから浮世草紙、淨瑠璃、俳諧の全盛時代となつて、西鶴、近松、芭蕉等の文豪が轡を並べて現れ、所謂元祿文學に燦然たる光彩、爛漫たる美觀を呈した。その末期は、西鶴の風を受けた八文字屋、近松の後繼者、芭蕉の門人等が繼承して、創始者の意氣精神が漸く衰へ、潑剌た

前期の文學は、粗大で荒削りではあるが、創意に富み、生氣に滿ち、自由奔放の快味に溢れてゐる。

後期は文學が江戸に榮えた時代である。その初は田沼意次の惡政で、一般に風俗は頽廢し、人心は弛緩し、世の中を面白をかしく茶化して暮さうといふ風は、川柳、狂歌、狂詩の流行となり、更に人生に對する遊戲的頽廢的氣分は、黃表紙、洒落本となつて現れて來た。松平定信が幕府の要職に就くと、この柔弱な風俗〻嚴しく取締り、文武奬勵の結果、文化文政の盛運をもたらし、學問藝術は上下一般に普及すると共に、一方には國學漢學の大家續いて現れ、一方には江戸小說の全盛を見るに至つた。京傳、馬琴、一九、三馬、種彥、春水などがこの期に活躍した人々である。然るに一時隆盛を極めた江戸期の文學も、その末期に至つて、外國船が頻りに日本に訪れて海防問題が起り、外交上の困難も生じて、世の中が次第に不安な氣に包まれ、幕府の勢も衰へるに及んで、文學も亦以前のやうに鑑賞されもてはやされなくなつて、衰微に赴くことになつた。

第二章　女流歌人

近世の和歌は、和歌史の上では萬葉時代や新古今時代に比して、多少獨創的な點は乏しいにしても、なほ萬葉派や古今派や新古今派の歌人が入り亂れて、夫々作歌に歌論に活躍した時期であつて、極めて注目すべき時代である。女流歌壇も亦これに伴うて潑剌たる活動ぶりを示し、幾多の優れた歌人が現れて、近世歌壇錦上花を添ふるの觀があつた。勿論近世の女性は、社會制度の關係上、上古中古の女性の如き生活とは、全く異つた生活樣式をもつた爲に、自然その歌の材料も局限され、千篇一律の感がないとはいへないし、その歌も男性の歌と同樣類型的たるを免れなかつたが、寶暦安政兩歌壇の女流歌人の如きは、そのめざましい活躍に於て、遙に上古中古の女流歌人にも比肩すべきものがあつたといはねばならない。今その盛衰消長の跡を迹つてみるに、大體男性のそれと平行してゐたやうである。

近世初期の歌は細川幽齋によつて辛うじてその傳統を保つてゐた。幽齋は二條家の正系を承繼ぎ、これを堂上家や武士の間に傳へたが、またその門下である松永貞德によつて地下にも傳はつた。しかし當時の歌風は大體に於て傳統の繼承であり、たゞ纔に木下長嘯子の歌に傳統を破らうとする曙光がほの見えたに過ぎなかつた。從つて女流歌人としても殆んど擧ぐべき人がない。

元祿時代に入ると、時代の趨勢に促されて革新運動が起され、歌壇も面目を一新するに至つた

が、その基調をなしてゐるのは、和歌の自由檢討と民衆化とであつた。そしてこの潮流に棹さした歌人は、下河邊長流・僧契沖・戸田茂睡等である。しかしこれらの人々は結局歌論家であつて、眞に新しい歌を作つた歌人といふことは出來なかつた。この時代の女流歌人中にもあまり優れた人は出てゐない。

女流歌人

然るに、民衆化して自由檢討の域に入つた歌壇は、寶暦天明期に至るや、あたかも國學が勃興し、復古思想が盛になつた機運に際會したので、活氣が横溢し、歌人が雲の如くに輩出して、多くの分流を生じ、それ〴〵特色ある歌を詠んだ。そのうち主なものは、雄渾蒼古な風調を皷吹する加茂眞淵・楫取魚彥・田安宗武等の萬葉派、「古今」「新古今」を折衷して穩健淸雅な風調を持する加藤千蔭・村田春海等の江戸派、洗煉の極致を理想とする荷田在滿・本居宣長等の新古今派、眞情を率直に歌ふことを旨とし、技巧を極力排した小澤蘆庵の一派などである。この風調に刺戟され、又これらの人々の薫陶愛育によつて、女流歌壇も亦頗る活氣を呈し、その數と質とに於て男性歌人と拮抗し得る程度の進出を見せた。

井上通女は女流歌壇全盛の前驅をなすものであるが、繚亂目を奪ふばかりの全盛振りを發揮したのは縣門の人々であつた。眞淵が縣門三百といふ多數の門人を擁してゐたのは、國學界空前の

レコードであつたが、門人錄に記されてゐた人々だけで、四十名の女流歌人がゐたといふことも、從來その比を見ざる壯觀であつた。就中縣門三才女、油谷倭文子・土岐筑波子・鵜殿餘野子の歌才は、今日迄永く謳はれてゐる。國學の祖荷田春滿の一派には、その母貝子、その姪蒼生子、蒼生子の門人菱田縫子等があつたが、就中蒼生子は、女性には珍しい聰明と博識と女丈夫的意氣とを以て、荷田派の學問勃興の爲に萬丈の氣を吐いた。

かくて歌壇には、以上の諸歌人に續いて香川景樹が現れた。景樹は蘆庵の說を祖述して、眞情を率直に歌ふべきことを唱へると共に、更に歌意と聲調とを合致せしむべきことを强調し、桂園派を起して歌壇を風靡し、その門下から熊谷直好・木下幸文・八田知紀等の名手を出した。なほこの外、越後の僧良寬、福井の橘曙覽、備中の平賀元義、福岡の大隈言道等、獨自の歌風を以て一家をなしてゐた。この期に於ける女流歌人としては、良寬の許にゐた貞心尼、桂園の流を汲む柳原安子、千種有功卿の門人稅所敦子、言道の門下野村望東尼、蘆庵に私淑した太田垣蓮月尼等があり、いづれも幕末から明治へかけて活躍した人々である。中でも野村望東尼は、松尾多勢子と共に、幕末國家多事の際に、憂國の情禁ずること能はず、自ら起つて勤王の志士と交り、或は之が保護者となり後援者となつて、その憂國憤世の至情は凝つて熱烈なる三十一文字となり、千古

の下人々をして感銘せしむる名歌の數々を殘してゐる。

井上通女（つうちよ）　通女は京極の家臣井上儀右衞門元固の娘で、萬治三年六月讃岐丸龜に生れた。父儀右衞門は若い時京に上つて經書・易を學び、歸國後は目付、町奉行を勤めたが、通女は早くから父に就いて聖賢の書を學び、十六歳の時には、「處女賦」「深閨銘」を作つて素志を述べてゐる。それは儒教的な女德を述べたものに過ぎないが、なほ天稟の才華の大いに見るべきものがある。

かくて通女の文名は藩中に高く、遂に江戸の藩主の知るところとなり、高豐公の母堂養性院は通女を江戸に召し寄せるに至つた。それは通女の二十二歳の時である。「天のやはらぐ始のとし、霜をふみて、かたき氷にいたる比ほひなれば、年ふる丸龜を舟よそひして、あづまの方におもむく」云々と書いてゐる「東海紀行」は、この旅行に際して出來上つた名文である。冒頭の、

しるべせよ浪間をわけてゆく舟の心しられぬ八重の潮風

は浪の立騷ぐ日、始めて船に乘つた時の心細さを詠んだものであらう。又十六夜の月が浪に映じて碎けるのを見ては、

風吹けば月にみがける白玉も碎けて波の立つにぞありける

と歌ひ、逢坂の關や雪の鈴鹿越で、

へだてこし古郷人をこふる夜の夢路は許せ逢坂の關

あらし吹く谷の岩間にむせびつゝ音も鈴鹿の山川の水

と詠んでゐる。

江戸にあること九年、その間主家の家事を司つて大いに信用を博したが、文人として、歌人として、はた詩人として優れた彼女は、文化燦然たる元祿の世に逢つて、幾多その方面の盟友を得た。卽ち藤堂家の儒臣雨森徂陽、林大學頭、或は水戸の儒臣等は、いづれも詩歌文章に於ける通女の友人であつた。室鳩巢は彼女について次のやうに云つてゐる。

井上氏紀行三見申候處、偖々珍敷事に奉レ存候、才女共申して餘ほど見識も有レ之事驚入申候、先日新井氏など參會の砌咄候而、其の時に承及候、且右紀行は江戸にて方々傳へ申候由にて御座候、其外不レ存もの無レ之候、是程の才識にては名も高き筈に御座候、横山重藏と申尾州の儒者、只今常の侍にて相勤申候、此の人の母尼了然と申候、今は最早相果申候、此尼は江戸にても噂申候て、豁達才辯、天然の禪機を得申候、美尼にて色々かよひ申心出來候とて、額に燒かね三つあて申ものにて候、其時詩も有之候。此了然と右井上氏と共會候て、儒佛の會議いたし、卽時に井上氏よみ申候、

常に行道なくばこそ世をうみのあまの流せる船もたのまめ

此歌人の口に膾炙いたし候由、始而承申候、男子に候はば英雄に可ニ相成一ことをしきことに候。

併し通女の江戸逗留は、養性院の他界と共に終を告げねばならなかつた。元祿二年二月養性院が歿したので、公侯の母堂や夫人の中に彼女を招くものもあつたがこれを辭退し、その六月故山丸龜へ歸臥するに至つた。時に通女年三十、此の時の紀行文はこれ又名文として「東海紀行」と並び稱せられる「歸家日記」である。出發に際し、故主の御靈を祀れる墓に詣でゝ永生の別を告げた。その時の感想を、

故君の御はかに參りて、是やかぎりと御いとま申す程のいと悲しさ、物にも似ず。この御國にたに侍らましかば、かくかひなき御跡にもたえず詣でまゐりてなほそのかみ御前に侍ひし心地のし侍るべきを、女にてさへあれば、一つ心にまかせぬぞかなしき。

といふ詞書を附けて、

泡雪のきえにし君があとをだに來つゝ見むとは思ひかけきや

苔の下にあはれとや見る今はとてかけはなれ行く袖のしづくを

の二首と、

靈魂何處去遊衍　仰見二蒼穹一俯見レ泉　今別二高墳一歸二舊里一　空留二涕涙一石碑前

といふ詩を賦してゐるが、その何れにも、通女の肺腑より迸り出づる堪へがたき悲歎の情が深く織り込まれてゐる。

歸郷後は同藩の三田宗壽に嫁し、三男二女を擧げた。家が貧しかつたので、紡績裁縫に暇なく、孜々として勵んだが、夫に死別後は家事を長子に任せ、己は閑をぬすんで和歌を詠み、典籍に親しむのを樂しみとした。中風症が重つて、元文三年六月二十三日七十九歳で歿した。辭世は、

われも亦正しきを得て斃れなば是のみなりと思ふばかりぞ

一氣終時萬事休　樂レ天委レ命又何憂　子孫有レ孝能思レ我　勤向二聖賢書裏一求

といふのである。以てその氣慨をしのぶ事が出來る。彼女には前記「東海紀行」「歸家日記」の外に「江戸日記」及び多くの詩集、文集、歌集がある。

さて次に通女が生存してゐた頃の歌壇の狀況を考へて見るに、彼女が盛名を擅にして江戸を去つた元祿二年は、契沖の「代匠記」漸く成り、北村季吟が幕府に召された年で、荷田春滿、賀茂眞淵の時代は未だ來らず、況や名歌人の出た時代は遙に後の事であるから、男性歌人の中にも、通女の在世當時彼女程の歌才を持つてゐるものはなかつた。眞淵が江戸に來つて帷を垂れたのは

元文二年、即ち通女の歿する前年であつた。それ故通女はやがて來るべき繚亂たる縣門女流歌人輩出時代の前驅をなしたのである。

縣門三才女

元文二年濱松在より江戸に出た賀茂眞淵は、帷を下して國學を教へたが、時あたかも好學の將軍吉宗の治世にあたり、かつ國學勃興の氣運に會したので、彼自身の書簡によると、その縣居の門下は千人に餘つた。(淸水濱臣の縣門略傳に姓名の擧げてあるのは二百數十名である)彼以前の契沖にも、その師春滿にももとより門下はあつたが、かく多くはない。それは一は上述した時勢にもよるが、一は彼自身の熱誠なる指導によつたのである。

縣門には女弟子も少くなかつた。眞淵が自筆で「當時所有門人也」と記した縣居門人錄には、牧野駿河守隱居明仙院路子をはじめとして、四十人の名が見えてゐる。

抑々眞淵は極端なる尙古主義者、國粹保存者であつた。從つて、儒佛の如き外來思想を斷乎として斥けた。佛敎殊に儒敎に對する眞淵の攻擊論は「男女有別」となす儒敎に對し、「男女無別」に迄說き及んで、

「こゝに皇朝の古への、女の手振をいはむ、かけまくも畏き、伊邪那美の大御神は、男の御神と並びて國つち萬の物を造り始め給ひ、後に事あるに及びては……」(にひまなび)

「皇朝の古へ萬に母を本として貴めり、兒をひたすより始めて、其功父にまさればなり。から國も上つ世はここに均しかりしを周といふ代より萬を强ひ改めて父を尊しとす。こは人の理といふものにて天地の心にあらず。故は理は理の如くして世の治らざるなり。」（にひまなび）

「しかありて、平けき時には、にきびて事をとるを專とすべく、天地の父母の、なしのまにまに、女は姿のあらびぬものにあれば、いひ出づる言葉も和びたる事、などかなからむ、さはあれど、後の世にはすべてぬえ草のしなびうらぶるを、わざのごとく思ひ誤り、それが上も、所せくならはするまゝに、はてはくねくねしくさへ成ゆきぬるは、本の大和魂を我も忘れゆきしなり。」（にひまなび）

といふ堂々たる女性支持論を發表してゐるのである。かゝる眞淵の門下に女性の數多きも亦當然のことであらう。それら多くの女弟子の中で、特にその名の聞えたのは、縣門諸家を傳ふることに最も力のあつた濱臣が、その隨筆「泊洦筆話」にしるした、油屋倭文子、土岐筑波子、鵜殿餘野子の三人、所謂縣門の三才女である。

今この三才女の評傳と作風とを說かうとするが、その前に眞淵が女弟子に敎へた作歌の態度について述べる。

眞淵が女弟子に敎へるのは、男性の門人に敎へるとは趣を異にしてゐた。即ち、

「女の歌はしも、古へはよろづの事丈夫にならはひしかば、萬葉の女歌は、男歌にいとも異ならず、そが中によく唱へ見れば、おのづからやはらびたる事あるは、もとよりしかあるべきなり。男は荒魂女は和魂を得て生るればなり。しかはあれど此國の女は、他國に異なれば、其高く直き心を萬葉に得て、艶へる姿を古今集の如くよむ時は、まことに女のよろしき歌とすべし。」(にひまなび)

「古今集の中によみ人しらずてふ歌こそ、萬葉につゞきたる、奈良人より、今の京の始めまでのあり……なだらかににほやかなれば、まことに女の歌とすべし。」(歌意考)

と教へてゐる。要するに、萬葉の精神と、古今の形式とを兼ね備へたものが、女性の詠むべき歌の標準であると主張してゐるのである。

油屋倭文子

倭文子は京橋弓町御用達伊勢屋の主人油谷平右衛門の女である。父平右衛門は町人乍らも歌文に興味を持つてゐた人なのであらう。彼女がまだ幼少の頃から歌文を習はしめた。又倭文子も幼い頃からいたく歌文を好み、既に其の當時より天才的閃光を放つてゐたものゝ如く思はれる。倭文の名も眞淵が改めさせたもので、姓をも弓屋と書かせなどした。延享四年十五歳には某侯夫人の侍女となつたが、寛延三年(十八歳)には家に歸り、母と共に伊香保に遊んだ。その時の紀行を「伊香保の道行きぶり」といふのであるが、

うらくと明くるあしたよりしも、四方のけはひあらたまりて、大路もはるかにかすむものから、きよう見渡さるゝに、ふりはへつゝ行きかふめる袂どもの、とりぐになまめかしう覺えて、先づこそ野邊の遊はゆかしけれ。

と書きおこして、流麗な文章の間に、十數首の歌を挾んで居る。殊に、

露深きささ野のおくにわけ入りて今日はた袖をぬらしつる哉

などは優れてゐる。又彼女の母も、

春の夜の花に映へる月かげの妙なるひかり今こそは見れ

よそにのみ見てやすぎなむつくばねの神の御前にたよる白雲

といふやうな歌を詠んでゐるが、これによつても、母も亦文學のたしなみのあつたことが知られる。

右の紀行文はたしかに名文であるが、「濱臣も一道行きぶりなどはおほく翁の筆くはへられしものなり。」(泊酒筆話)と云つてゐる通り、師眞淵が大分加筆したものであらう。しかし若くてあれだけのものをまとめたことは、並々の才ではなかつたことが頷ける。上田秋成は「只うちいづることに文にも歌にも、いとあやしきまでみやびかなるをなん、言靈のさち人といふは、このをと、

めがうへなりける。あはれ人のおほせ言をしも賜はらば、野べ這ふ柴のすさみ草いそち四巻の跡なし言をも、やすくとまなび出でましものを、」等と賞讃してゐる。

彼女の歌は、歌集「文布」の中の「散のこり」の中に收められてゐる九十餘首に過ぎないが、それもこれを編纂した橘常樹が「若くまだしきほどのわざとはいへど、心はいたりぬるもはたあれば、あしびきの山ぐちしるかりけるをと、あが賀茂のうしの悔い惜しまるれば、おのれあづかりて拾ひたるなり。いでやことなる色なりしもありつらむを、いづちいたりけむ、嵐の後のさ枝にのこれることの葉ぞこれ。」と書いてゐる通り、才氣はみえながら、習作程度の作も多いのである。期待さるべき才をもちながら、餘りにも若くして逝つたがために、十分な特色を發揮するには至らなかつたであらう。しかし、若さと才氣とがとゝこほらない清純な氣をたゞよはせてゐる。

今「散のこり」の中から抄出するに、

年の初めに縫ひて神に奉るつゝみにぬひたる

さほ姫の霞の衣春をへてたちぬふわざもあえまさらなむ

萩

ことさらに衣はすらじ眞萩原分け行くからににほへるものを

秋のうたとて

秋の野はあはれなりけり夕風に尾花亂れて散れるしらつゆ

もちの夜によめる

月見ればおふけなくしもならぬなり知らぬ千里も思ひやられて

或時よめる

おもなくもてらせる月の光かな中なる人やいかゞ見るらむ

かりがね

袖の上におぼえずおつる涙にもすずろに月はやどりぬるかな

ある秋に

岡の邊の松風寒き夕暮をすぐさで落つる初雁の聲

かた山の蔦はふ小道を分け來ればいはほも秋になりにけるかな

などはすぐれた作であるが、師が追悼の文に、

一をみな子ある、名をしづ子といふ。しづ子は、古のしづにあらずして、心の雅び、古へにもとづけり。

しづ子は、古のしづにあらずして、容のまぐはしさ、今にすぐれたり。そのたゞに、心の雅びのみなる

にあらず、文にも、歌にも、古へなり。その容のまぐはしかるのみにあらず、親しきにも、疎さにも、にきびたり。」

とたゝへたのも、うべなりといふべきよみ口である。

かやうに倭文子は將來を矚目さるべき才能を持つてゐたが、天この才女に齢をかさず、佳人薄命のたとへに洩れず、寶曆二年七月、病のために早逝した。歲わづかに廿歲であつた。眞淵は愛する若き才女を先だてたかなしみに、切々の情を吐露してゐる。

ちちのみの　父にもあらず　はゝそはの　母ならなくに　なく子なす　われをしたひて　いつくしみ
おもひつる兒は　初秋の　露に匂へる　眞萩原　ころもするとや　まねくなる　尾花とふとや　ししじ
もの　ひとりいでたち　うらぶれて　野べにいにきと　ききしより　日にけにまてど　うつたへに　こ
ともきこえず　ちちならぬ　われとやとはぬ　ははならぬ　身とてやうとき　こひしきものを

言々句々肺腑より迸り出て、眞情が躍動してゐる。遺稿を「文布」といふ。そは倭文子の名に因んだ命名である。

土岐筑波子　筑波子はもとの名を茂子といつた。師眞淵は古を好む心から「つくば山は山しげ山」の古歌によつてつくば子と名づけ、又しげい子とも呼ばせた。進藤正幹

の養女で、柳營の臣土岐新左衞門頼意の妻となつた。家集一卷は縣門遺稿の中に收めてある。「泊洦筆話」に、

歌はよの子にも立ちまさるばかりなりき。

春のはじめの歌

かぎりなく來れども同じ春なればあかぬ心もかはらざりけり

この歌縣居翁の評に、天暦の頃の女房の口つきなりと評せられき。また、

三つになりける幼子のなくなれるをり

いはけなくいかなるさまにたどりてか死出の山路を獨りこゆらむ

ただごとながら、心のほど思ひやられて、この歌みるたびに、おぼえず涙ぐまるゝになむ。又、

商人を

わたらひの心ぼそさもしられけり糸うる賤のたえずくるには

女の歌、まことにさこそおぼゆれ。

と評してゐる。なほ集中から數首を拔抄すると、

梅を見て

春たちてにほへる花の顏見れば我さへ共にほゝゑまれけり

七日の朝

天の河わたりわたらず夜もすがらおぼつかなくぞながめられける

秋風

吾背子がとき洗ひぎぬもぬはなくに萩の葉そよぎ秋風の吹く

など、いづれもその師の評のごとく「天暦の女房の口つき」である。總じて彼女の歌は、深みとか强さとかいふものは求められないが、平明な表現の中に、女らしい感情が流麗に歌はれてゐる。

よの子の獨身であつたのに對し、筑波子には夫があり、子があり、女として課せられた一通りの經驗は持つてゐた。そして恐らく妻としても典型的の型であつたであらう。「吾が背子が」の歌こそは、彼女の家庭生活から生れた眞實のこもつた聲である。かやうに夫に對し、又その子に對して人一倍の愛を注いだことであらう。しかし、彼女の家庭生活には幸福ばかりが待つてはゐなかつた。いとけない子を先だて、夫にも別れねばならないまがつ日がめぐつて來たのである。

いとけなき子のうせし時

結びつとみそむる程もあらなくにはかなく消えし草の上の露

なき魂のあるを戀しと思ひせば夢路にだにも立ち歸らなむ

をとこにおくれぬる頃

数くとも戀ふとも知らでいかならむ方にのどけく君は住むらむ

みし夢のさめぬ程にし消えもせば今のうつゝに物は思はじ

かくいふ程に、雪のうち散れば

見る程もあらずなりぬる雪ならで消え殘るとも思ひけるかな　―

といふやうな悲しみをうたつてゐる。かく人生の悲哀を嘗め盡した筑波子は、

む　し

秋の夜はねられざりけりあはれともうしとも虫の聲を聞きつゝ

いかなる時にかありけん、月を見て

ともすれば月見る空の曇りつゝおぼつかなくもぬるゝ袖かな

雁

ながめつゝすゞろに物を思ふかな雁なきわたる夕ぐれの空

といふやうなながめがちな淋しい後半生を送つたやうである。

鵜殿餘野子

餘野子は服部南郭の門人鵜殿孟一の妹である。眞淵は南郭と親しく交つたので、その關係からよの子は縣門に入つたのであらう。彼女はまた漢學の才ふかく、漢文をも漢詩をもよくした。紀州家に仕へて年寄となり、瀨川とよばれたので、眞淵はきよい子といふ名を與へた。後剃髮して凉月尼と號した。その歌文集を「佐保川」といふのは、

水上秋月てふことを

故鄕の佐保の河水ながれての世にもかくこそ月はすみけれ

と、奈良の故鄕をしのんだ歌が卷頭に掲げてあるので、集の名に負はせたのである。

「佐保川」は上卷と下卷とは甚だ格調を異にしてゐるが、前者は大體三代集調であり、後者は著しく萬葉風が加味されてゐる。

わが心空にありてやほととぎす君にもおなじ初音告げけむ

物の音もながるゝ水に聲すみて夏のほか行く船のうちかな

等は前者の三代集調であるが、餘野子の特色はその下卷の方に著しいと思ふ。上卷には頓呼法や字餘りを見せ、自由な表現を求めてゐる意向は仄見えるが、なほ型にはまつたところがある。同じ上卷の中でも、先師の一周忌を詠んだ次の歌の如きは、純然たる萬葉調と云つてもよい。

おきつ波きよるありそのこなたなる山の岩根しまける君かも

あら磯に寄する白波しく〳〵にかけて思はゆ君がおもかげ

その際詠んだ長歌も、女流の作としては注目すべき秀逸である。下卷の大半は、「萬葉集」に見える相聞風の歌で、同集の影響が顯著である。

門ちかきいさゝむら竹な刈りそねせこがたなれの駒なづくがに

等は線が太く格調が高い。

又、彼女には贈答の歌等に人情味の豐かな作があり、追弔の歌等の多いことが一特色をなしてゐる。又親や兄弟への愛をうたつてゐる歌にも珍重すべきものがある。

父の八十の賀し侍るに、枝に結びつけてたびまつる

千代の坂越えむためにときる杖はつきもつかずも君がまにまに

母のおもひに侍りける頃

ありし世も逢ふこと難きはゝき木のはゝは行方も知らず惑へる

こは、さとにおり侍る事のいとたまさかなりしを、常に戀ひきこえ給へりし事を、思ひいでていへるなり。おなじ頃、かの住み給へりし方の前なる花ども折りておこせたるに、

ふるさとの花に昔の事とへど答へぬ色はかひなかりけり

とて山吹に結びつけつ。

又のとし、春かしこなる梅の花を見侍りて

梅の花はるや昔の袖の香も誰しのべとて植ゑおきにけむ

ちゞの思ひにて侍る年、やよひばかりに

くさぐの花は咲けどもかぞいろのなきよの春は寂しかりけり

九十近くてうせ給へるを、あえものなど人々聞ゆるよし、あかず悲しうのみおもほえつゝ

千世ませと思ひし君は百年にあまた足らでも別れぬるかな

荷田蒼生子

縣門の女流歌人達と時を同じうして江戸歌壇に活躍し、殊に諸侯の夫人子弟に歌文を教へた才媛に荷田蒼生子があつた。蒼生子は荷田在滿の妹で、早く在滿に従つて江戸に來り、後某氏の妻となつたが、間もなく夫の死にあひ、爾來兄の家に在つて再嫁しなかつた。在滿に和歌、歌學を學び、(伯父春滿にも學んだであらう)後紀州公の女公子に仕へたが、四十九歲の時、仕を辭して淺草に住んだ。その學才を稱せられ、土佐侯・姫路侯・岡侯その他諸侯の夫人女公子に招れて教へた。蒼生子は性質明るく、俊敏で、女丈夫の意氣があつた。

神官の家に生れて終生神を信じ、端嚴身を持したが、女性には珍しい聰明と博識と、女丈夫的意氣とを以て、荷田派の學問の勃興の爲に氣を吐いた。歌人としてよりも、諸侯の子女の教育といふ方面に、より多くの功績を認めるべきである。

歌文集に「松のしづ枝」がある。

あけぬとて名のる鳥の聲の中に山際かすみ春は來にけり

ふりさけて見るものどけし筑波山は山しげ山かすみわたるも

の歌には、自由な句法の驅使の中に一味簡勁の趣が籠つてゐる。次の如きは、いかにも女性らしい哀感の流露を見る歌である。

みだれつゝ物思ふ頃はつねよりもうちまもらるゝ靑柳の絲

見し世には似るべくもあらぬ春ながら月のあはれぞ變らざりける

太田垣蓮月尼

幕末に輩出した女流歌人の中で、多くの人に最も親しみの深いのは、恐らく太田垣蓮月尼であらう。その數奇を極めた一生と、玉の如き人格と、風雅にしてつゝましやかな生活とから生れた淸らかな歌とは、今なほ人々の胸に欽慕の情を以て迎へられてゐる。

蓮月尼の前半生はまことに悲惨なものであつた。尼自筆の履歴に、

ちゝはいなばの國の人、太田垣光古といへり、ゆへありて、みやこ東山にすむ、そのころ文政三年出生、名誠とよぶ。はゝは早うなくなりて、ちゝにはぐくまれて人となる。三十あまりにてつまも子もなくなりて、

つねならぬ世をうきものと三つぐりのひとり殘りて物をこそおもへ

やがて、ちゝのもとにありて、四十あまりの時、父におくれて、

たらちねのおやのこひしきあまりには墓にねをのみなきくらしつゝ

このちかきところにをらばやとおもへど、山の上にて人のすむべきところにもあらねば、なくなくかぐら岡ざきにうつりぬ。もとよりまづしき身にて、せんかたなく、土もて、きびしよ、といふ物つくる。いとてづゝにてかたちふつゝかなり。ゑりたる歌も、たゞすきにてよむとはすれど、むかしより、いとまなくいやしき身にて、よき大人によりてまなぶことをせざりければ、人の口まねにてかたことのみなり。

てすさびのはかなきものをもちいでゝうるまのいちにたつぞわびしき

と書いてある。これは蓮月尼がその晩年、其邊にあり合せた反古の裏に書きとめて置いた自筆の

履歴書といはれる物の文であるが、此の粗笨な記事の中から、蓮月尼の波瀾に富んだ痛ましい前半生の輪廓がかなり鮮明に汲みとれると思ふ。然るに村上素道氏の「蓮月尼全集」中の傳記によると、更にもつと陰慘な彼女の前半生をうかゞふ事が出來るのである。即ち蓮月尼は太田垣光古の實子ではなくて、藤堂某といふさる名門の落胤で、母は當時京都三本木邊に住んでゐた町藝妓であつたらしく、蓮月、即ち誠は寛政三年正月八日、生れ落ちると間もなく襁の上から貰はれて太田垣光古の養女となつたものであるといふ。蓮月はこの間の消息について全く何も知らなかつたであらうか。或は自分の素性に潜んでゐる秘鑰は充分知り乍ら、それを明かにする事を殊更さけてゐたのであらうか。若し果して自分の身の上にからまる一切を知り乍ら、之を口外することを避けて、生涯胸底深く秘めて置いたとするならば、それは蓮月にとつては堪へ難い苦惱であつたに違ひない。兎に角、蓮月尼には生れ落ちる時からかうした宿命的な陰翳があつた。

彼女が十三歳の時、太田垣家の一人息子賢古が死んだので、自然その家の世継となつたが、養母もその年に死に、父一人娘一人の境涯となつた。だが蓮月尼の一生中最も悲慘を極めたものは、彼女の結婚生活であつたらしい。十八歳の時に迎へた養子は無頼漢に近い遊蕩兒で、その爲に家庭内には常に波瀾の絶え間がなかつた。蓮月は同棲八年の後、遂に養父の意見に從ひ、止むなく

夫を離縁しなければならなくなつた。そればかりでなく二人の間に儲けた三人の愛兒さへ、みんな四五歲迄に亡くしてゐる。彼女はその當時の悲しみを、五六十年を隔てた後瑞玉尼母に送つた消息の中で、

「……世の中のならひながら、子の先だちしほどかなしき事はたとへんかたもなく、わたくしも女二人男一人みな〳〵先だたし候へども、七八歲までにてわかれ申候、いまはやう子に相ぞくいたし居候、いかばかりなげき候てもかへらぬことはしりながら、今におき思ひいだしてはなみだをながしおり申候、ぜひなき事とはよく〳〵しりながら、まことにかなしきことに御座候……」

といつて、愛兒に對する悲しい思ひ出に泣き濡れてゐる。夫の放蕩無賴、それから起つたさまざまの家庭悲劇、三人の愛兒の死、夫の離緣——かうした人間悲劇中の最大悲劇を、十八歲から二十五歲迄の最も樂しかるべき時代に演じつゞけて來た彼女の運命は、最も悲慘を極めたものといふべきであらう。

寡婦生活五年の後、再び溫良な養子を迎へたが、一子を擧げた後、これ又不幸にも五年後に病死して了つた。悲慘事又悲慘事、運命の惡戯は何と彼女に執拗につきまとつてゐたことであらう。その俗生活は餘りにもみじめなものであつた。彼女は既に先の夫を離緣した時から覺悟してゐた

事ではあつたらしいが、夫の病が革るに及んで、愈々俗世界に對する望を斷ち、遂に丈なす黑髮を剃り落した。

常ならぬ世はうきものとみつ栗の獨り殘りて物をこそ思へ

これが當時の彼女の感想であつた。

夫を葬つて後間もなく、彼女は年老いた父と共に智恩院の大僧正に就いて得度の式を受けてゐるが、七十に近い老武士たる父、その養女たる三十歳を越えたばかりの美しい寡婦とが、俗世に對する絕望から得度の式を擧げた光景は、淚なしには想像する事は出來ない。父は西心、娘は蓮月、この二人の今道心は、その頃五歳であつた女兒を連れて智恩院內の眞葛庵に住んだが、三年目に、女兒は七歳を一期として世を去つた。浮世の絆を斷ち切つた蓮月尼とはいへ、最後の愛兒の死が與へた悲痛はいかばかりであつたらう。

眞葛庵十年の生活は、蓮月にとつては養父への孝養時代ともいふべきで、或は父を慰める爲に圍棊をしたり、信仰について互に語り合つたりしたらしい。しかし父西心も尼が四十二才の天保三年八月に、七十八歳を一期として亡くなつた。蓮月の步み續けて來た悲慘な運命の路は、こゝに至つて極點に達したのである。

父の死後、尼はいよ〳〵うるさい世間を相手に獨立して行かなくてはならなくなつた。そればかりか、父を失うたことは、同時に庵をも失うたことであつた。「このちかきところにあらばやとおもへども、山の上にて人の住むべきところにもあらねば、なく〳〵かぐら岡ざきにうつりぬ。」と自ら記してゐるやうに、その美しい尼僧姿を生活のために市井の間にさらさねばならなかつた。しかし尼の得意な碁の師匠になることも、和歌の師匠になる事も、男性を相手にしなければならないので斷念して、最後に陶器を造り、それを市井にひさぐことによつて、細々ながら暮して行かうと決心した。

やうやく四十を出たばかりの尼僧姿の世にも美しい孤獨の女性が、手づから雅趣ある陶器を造つて賣り、しかもその陶器には、氣品ある美しい文字で、才氣豐かな和歌が書かれたり彩られたりしてある。かうした事が何で世人の心を惹かずに居らう。蓮月の歌、蓮月の書、蓮月燒の名は忽ち高くなつた。しかしその反面には、尼僧姿の美しいひとり身の蓮月に對する、世上浮薄な男性の好奇心がうるさく注がれてゐた事も想像が出來る。

蓮月が非常に美しかつたと云ふことは、當時よく知られた事實である。それにつけても蓮月が或る男の執拗な求愛を避けるために、自分の齒を折り、その美しい顏を傷けたといふ逸話は人口に

膾炙されてゐるが、それに對して相馬御風氏は、蓮月尼はその天成の美容を傷けなければ、浮薄な男性の誘惑から逃れることの出來ない樣な女性ではない筈である。天與の美を保ちつゝ自らはそれを超越し、ひたすら心の力によつて淸き生活を生き了せ得たであらう、と說いて居られるが、誠に蓮月をよく知る卓見であると思ふ。尙この話が信じ難いことは次のやうな記錄でも分る。

老年に達してからの蓮月尼に逢つた近藤芳樹が、その折の印象をしるした言葉に

「今はむかしおのれみやこにてあひしころは、墨染のころももあらゝかなるすがたながら、猶まゆのあたりうちけぶりて、いかなればかゝるさまにかへてむと、そきすてけむそのかみの、いぶかしきまで麗しき顏なりしを……」

といひ、又野村望東尼が蓮月尼を訪れた時の情況を、京都から弟子の筑紫いそ子に送つた手紙の中にも、

「この日蓮月尼をとひ侍り。たにざく三葉ばかりもらひ歸りしかど、歌思ひ出でず。こゝになければ書いつけ侍らず。いと面白き歌なり。早よはひ七十五なるよしながら、いまだ五十ばかりと見え侍る。いと〳〵うつくしき尼ぞかし。昔はいかに花さきし人ならむと思ひやられ侍る。」

と書いてある。

しかし蓮月はその美貌の爲に兎角世上の風評に上り、いろ〳〵のわづらはしさを感じたことは事實らしい。そのため「屋越の蓮月」と綽名をつけられる迄にしば〳〵轉居したといふ。轉居の最も大きな理由は、所謂俗客の襲來をさける爲であつたといはれるが、多い時には一年に十三度も宿替へしたことがあるとも云はれ、一生涯の中に數十度も引越したらしい。尼は自ら「宿替といふことをあまたたび致すとて人の笑ひければ」と詞書して、

浮雲のこゝにかしこにたゞよふも消えせぬ程のすさびなりけり

とうたひ、屋越屋を以て自任してゐた樣である。

尼となつてからの蓮月の生活は、一衣一鉢の雲水生活のそれの如く、至極簡素なものであつたらしい。その陶器による物質的收入はかなりあつたらしいが、蓮月はそれらの一切を喜捨した。貧しき人々の爲に、又は公共の事業の爲に、凡てを投げ出して顧みなかつた。尼が富岡鐵齋に送つた手紙の中にも、

「……けつかう成大御代にて、實にさしあたりいらぬ物たくはへ候事、むだにて邪魔になり申候。もの事うつり變る世のならひ面白き事にて候。」

といつてゐるが、尼のゆかしい處生觀がうかゞはれると思ふ。

蓮月が幾多浮世の辛酸を經て、漸く生活に徹底し環境に安住し得た頃は、社會は歴史的大變革の時代であり、彼女の住む京都は勤王佐幕の大旋風の眞只中に在つた。尼は當時の實感を詠んで、

世の中騷しかりける頃

夢の世と思ひすつれど胸に手をおきてねし夜の心地こそすれ

戊辰のはじめ事ありし折

あだ味方勝つも負くるも哀なり同じ御國の人とおもへば
うつ人もうたるゝ人も心せよ同じみ國の御民ならずや

伏見よりあなたにて人あまたうたれたりと人の語るを聞きて

聞くまゝに袖こそぬるれ道の邊にさらすかばねは誰が子なるらむ

と歌つてゐる。又黑船來るの噂に當時の民心が妄想狂的に怯えてゐた頃詠んだといふ、

ふり來とも春のあめりか閑かにて世のうるほひにならむとすらむ

の歌は、蓮月が後年の文明開化を豫想してゐるわけで、時代に對する見識の高さを窺ふ事が出來る。又その同胞愛の博さは、當時としては全く驚歎に値するものである。

かやうに蓮月は、變轉極りない一生を送つたのであるが、その晩年の十餘年は、西賀茂の神光

院境内の茶所に、靜かな平和な餘生を送つた。神光院に於ける尼の生活は、

あけたてば埴もてすさび暮れ行けば佛をろがみ思ふことなし

のやうな、全く淸らかな念佛三昧の生活に浸りきつてゐた。かくて明治八年十二月十日の暮方、遂に八十五歲を一期として同じ茶所で歿した。

願はくは後の蓮の花の上に曇らぬ月を見るよしもがな

がその辭世であつた。

蓮月の歌は、その陶器の如く人格の自然の發露されたもので、歌としての技巧よりも、その自然な點に心を引かれる。香川景樹の門下ではなかつたが、京都に住した爲もあつて、桂園派の影響をうけ、流麗な歌風であり、優美な叙景歌が多い。それ故調子は極めてよく調つてゐるといへようが、反面には餘りに平淡に流れ過ぎたといふ謗はまぬかれない。そして、中には多分に才氣を弄び、頭の先で拵へ上げたやうな概念的な歌も少くない。

はら〳〵と落つる木の葉に交り來て栗の實ひとり土に聲あり

山里は松の聲のみきゝなれて風吹かぬ月はさびしかりけり

かばかりの浮世なりけり木枯に落栗拾ひ今日もくらしつ

さしながらひるはくらしつ柴の戸をあけてわが待つ月の影かな

等の歌には、美しく澄みきつた、自然の奥底深く浸りきつてゐる蓮月の姿をしのぶ事が出來る。清澄な自然觀照の見られる歌である。

宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下ぶし

は、最も世に知られてゐる歌であるが、尼の風流な性格の反映を見る事が出來る。しかし、

かりのよを思ひつらねてながむればあまのはらはらちるなみだ哉

きぬたうつ音はからころからころもころもふけゆく遠の山ざと

たづね來し櫻は雪とふる鄕の志賀山でらのはるの夕ぐれ

等の歌は、才氣のあふれた歌ではあるが、多分に才氣を弄んでゐる機智的技巧の歌といふべきである。一體蓮月は誠に多藝才能の人であつた。歌に秀で、書にもすぐれ、繪もよく書き、碁も名手であつた。しかしその歌に於ては、その才能が災して概念的な低調なものに終つてゐる歌が少くない。

しかしとかくの批難はあつても、蓮月は歌人としてよい本質を持つてゐたと思ふ。感受性のつよさ、きめの細さ、想のゆたかさ等、彼女はやはり江戸時代女流歌人の第一人者である。更にそ

の人としての偉さに至つては、稀に見る偉大な存在であつた。石山徂信氏が、

「彼女が若くして遭遇した血の滲む樣な慘劇から逃れて、まことに高く淸い宗教の世界につゝましく身をかくしながら、而もそこから無言の中に現實の社會に力強く働きかけた點に、蓮月の偉大さがあるといへよう。」

といつて居られるが、誠に同感である。

女流歌人

稅所敦子（さいしょあつこ）　敦子は仁孝天皇の文政八年、京都の林氏の女として生れた。幼時より歌を好み、十一歲の時嵯峨の虛空藏尊に參籠して名手たらんことを祈つた。千種有功はこれを聞いて侍女としたと傳へられてゐる。二十歲にして薩摩の藩士稅所篤之に嫁した。その當時の樣子を「今古歌話」には次のやうに記してある。

和歌を能くし、賢婦の名一世に高かりける故敦子刀自、妙齡にして稅所家に嫁し、能く夫を扶け、舅姑に事へ、內政をさ〳〵怠りなかりしが、其姑殊の外心あさましく、僻事のみかまへて、何がな刀自を苦めんとせり。されど刀自は、或はすかしつ、或は慰めつ、只管其心を失はざらんことを力め居けり。或日姑は刀自に向ひ、「お前は豫て聞く歌の名人ぢやさうなが、私の此の下の句に上をつけて見なさい。」とて口吟める、

鬼婆なりと人のいふらむ

是も亦刀自をくるしむる一策なりけり、刀自は「畏りました。」とて、早速、

佛にも勝る心を知らずして

とつけけるに、それより姑打變りて柔和なる人となりけるとぞ。

然るに夫篤之は不幸にして肺患に罹り、敦子が懸命なる看護もその効なく、當時二十八歳の敦子を殘して世を去つた。夫の歿後は薩摩に赴き、專ら姑に仕へ、沐浴着衣の事迄萬事ひとりで世話をし、あらん限りの孝養を盡した。藩主島津齊彬はこれを賞し、召して世子（哲丸）の傅とした。然るに世子は幾くもなく夭死したので、敦子は悲痛の極殉死しようとしたが、姑に留められて辛うじて止つた。

ねぎかけし神てふ神の力もてこの君をだにとゞめかねつや

の歌はこの時の詠である。

その後文久三年藩主久光の養女香蘭院が近衞忠房に嫁するに當つて、これが老女となつた。明治八年、高崎正風の推擧により、權典侍となつて、皇后、皇太后に仕へ、文學和歌の諸務を掌り、更に掌侍に進み、楓の內侍と稱した。晩年暍を病み、明治三十三年二月四日七十六歳で歿し、そ

の日正五位を授けられた。

敦子は歌文をよくしたが、特に歌に秀で、明治初期末から中期にかけて、所謂宮内省派として、高崎正風・小出粲等と共に、その頃の代表的歌人であつた。その人と爲りについては八田知紀が、

「立居ふるまひより物うちいふまで、すべてなよ竹のなよやかなる中にたわまぬ操備はりて、ようい深きことは古の紫式部のながれなるべし。されば若きほどより今の齢にいたるまで、露ばかりもあだなる名うきたる聞えなく、世にめづらしき婦徳をそなへられたるがうへに、ざえのきははた男はづかしきさまでになんありける。おのれこの刀自とはやくより歌の上のむつびあさからず、二なき友とたのみしも、まことは君を思ひ國を思ふ一すぢの眞心のうちあへるによりてなりけり。」

と述べてゐるが、その歌風は高い婦德と宮廷生活から來る優雅貞淑の趣を具へて、靜かに襟を正して讀むべき作が多い。佛教に思を潜めたので、それに關する歌も少くない。總じてその歌風は香川景樹のよき所を承けついで、その派の歌を玉成したものとも云へる。

大君の大御硯になる見れば玉にもまさる石はありけり

雨晴れて虹たちわたる夏山の靑葉が上になくほとゝぎす

有明の月しづかなる窓をあけて萩の上葉の露を見るかな

幕末勤王女流歌人

明治維新と女性

明治維新王政復古の大業は、我が皇國史上未曾有の大變革であつて、二千五百年の國史の淸算とも云ふべきである。この時にあたつて、忠勇義烈な我が國民性の精髓を代表すべき、幾多勤王の志士が輩出したことは、世人のよく知る所であるが、これら義士と立交り、或はその蔭となつて、か弱き婦人の身ながら困苦に堪へ、缺乏を忍び、纖手能く王事國事に盡した女性のあつたことを忘れてはならない。維新の大業は、勤王志士の功に歸すべきことは勿論であるが、その隱れた半面には、女性の力が加つてゐることを見逃すことは出來ない。

信濃國伊那谷の松尾多勢子、若狹小濱の矢部登美子は何れも尊攘派の密偵となり、沈着な行動と燃ゆるが如き熱情とを以て志士のために働いた。近衞家の老女村岡局、筑前福岡の野村望東尼は、尊王派の爲めの連絡係となり、志士の保護者となり隱匿者となつて、大業の完成に盡す處極めて甚大であつた。矢部登美子の如く、志士達の軍裝や炊事を受持つたり、京都三本木の藝妓幾松、後の木戸孝允夫人松子の如く、又松尾多勢子の如く、資金の調達に男子も及ばぬ苦心をした婦人

があり、時には坂本龍馬夫人龍子の如く、砲煙彈雨の亂闘の中に立つて雄々しくも健闘した男まさりの女丈夫もあつた。又琵琶湖畔尾花川の近くに住んだ川瀬幸子の如く、幕吏の手にかゝらぬ先に自刄して、累を他に及ぼさぬことを謀つた沈勇深慮の女丈夫もある。

然し乍ら、かやうに社會の表面に立つて雄々しい働き振りを見せた婦人の外に、勤王志士の蔭になり力となつて、或は之を鼓舞激勵し、或は後顧の憂なからしめて、大業の完成を全からしめた女性の力のあつたことを忘れてはならない。世に「文明の製造者は女なり」の言葉がある。これは偉人の背後、大事業の蔭には必ず良妻があり、賢母があり、まごゝろの女性の存在する所以を述べたものであらうが、維新志士貢獻の半は、彼等の母や妻のものであつたといふとも過言ではあるまい。まことに、女性の眞心こそ男性にとつての救であり、力であり、慰めであり、活力の源泉である。

子を思ふこゝろは春の霞にてたえず棚引く遠近のそら

右の歌は藤田東湖の母堂梅子が、幽閉三年遂に對面の機會の無かつた我子の身上を思うて、春霞によそへてその無限に深き親心を申送つたものである。まことに春霞にもよそへらるべき限りなき母の愛こそ、子にとつては何物にもかへ難き刺戟劑であり、興奮劑であり、身も心も包んで餘り

ある慰安の良剤である。吉田松陰の母杉瀧子は、野山獄中懊惱の結果、餓死を企てた我子松陰を戒めて一書を送つた。その中に「たとへ野山やしきにお出候ても、御無事にさへこれ有候へばせいになり力になり申候。たゞたんりよ御やめ、御ながらへのほどいのり參候。此品わざ〳〵とのへさし送候間、ははにたいし御たへ頼み參候。いくへも〳〵御心御入れかへ、かへす〳〵もいのり參候」と云ひ送つた。この情愛籠めたる訓誡の言葉に、松陰も當初の決心を放棄して、食を採り危機を乘り越えて、彼の天職を果すべく苦鬪を繼續して行つた。まことに松陰の偉大さは同時に母の偉大さでもあつた。又、大橋正順の妻卷子、兒島强介の妻操子のそれぞれ夫に對する慰安の言葉、坂本龍馬の姉とめ子の弟に對する鼓舞の辭など、何れも皆抄からぬ刺戟となり鼓舞となつて、暗々の中に彼等の活動に影響したと思はれる。

野村望東尼

望東尼は初の名をもとといひ、黑田家の世臣浦野重石衞門勝幸の三女として、文化三年福岡城内の廐後に生れた。時宛も露人がしきりに樺太を襲ひ、近藤重藏が利尼島を視察した年である。勝幸は三百石を食み、目付役、詮議奉行等を勤めて令名あり、又東山流生花にも長じてゐた風雅な武士であつた。もと女は長ずるに隨つて容姿美しく、歌を好み、書道、裁縫、刺繡等女の道には何一つ暗いことはなかつた。處女の鑑として一藩の若侍達の

太宰府陶山家藏望東尼木像

懇望の的であつたが、二十四歳の年に、同藩の野村新三郎貞貫の人物を見込んで、自ら父に乞うてその妻になつた。天保三年、京都では勤王の志士頼山陽が血をはいて死んだ年である。

貞貫のもとに嫁いで後は、よくその家を治め、先妻の子をおほしたて、妻たり母たる務をも充分に盡した。しかもその間にかねて好める和歌の道にいそしんで、二十七歳の時夫貞貫と共に福岡の歌人大隈言道の門に入つた。

夫貞貫はかねて勤王の志厚く、同志相集つて「太平記」の輪讀などを行ひ、王政のまことなるを論じ、武家專橫の道ならぬを說きなどしたが、もとより風流の士の事とて、自ら起つて積極的に動くといふ性質でなく、又時期尙早をさとつて、玆に世を遁れて風流三昧に過さんとの望を起し、福岡の郊外なる平尾山に別莊を購ひ、家は長子貞則に讓り、夫妻共に閑居することになつた。もとより同氣相求めし夫妻のことであるから、或は月花に情をのべて吟懷を試み、或は史籍を涉つて國體の尊嚴などの淸話に、夜の更けるを忘れる事も多かつたらうが、その山莊に風月を樂んだ折々の歌は、いかにも情懷の懷しく思はれるもののみである。一二を擧げると、

葺きかふるものとも知らでわが庵の屋根のうねうねおふる姫松

雨晴れて月見る夜半はやり水の音もほどよくながれぬるかな

山莊に共に住むこと十五年、安政六年七月二十八日、五十四歳の時夫は逝つた。その時の歌に、

初秋の風に吹かるゝともし火のかげもこゝろも細る夜半かな

といふのがある。彼女は直ちに剃髪して佛門に入り、その名のもとをさながらとつて望東尼と號した。東を望むとは、明け暮京都のことを忘れぬといふ心からである。

望東尼は夫と共にかねて勤王の志に燃えてゐたのであるが、夫が亡つた頃から國事は益々繁くなつて、彼女の心を刺戟するものが多かつた。卽ち閑居に堪へず、文久元年十一月には和宮御降嫁のことがあつたのに際して京都に上り、皇居を拜み、神武天皇陵を拜して皇祖の偉業をしのんだりした。また湊川で楠公の墓に詣でては、

かしこしとぬかづくうちも我が袖のみなと川みづせきぞかねつる

と詠んだ。

京阪の旅行に於て、望東尼は僧月照を始め諸國の勤王の志士たちと交を結ぶことが出來たが、この旅行に於て見聞遭遇した幾多の刺戟經驗によつて、彼女の勤王の精神は益々燃立つた。

紅の大和錦もいろいろの絲まじへねば綾は織られず

の歌もこの旅行中に詠まれたものであるが、私情を棄てゝたゞ尊王攘夷の大目的に盡くさうとす

る心が、優しい三十一文字となつて現れたのである。

翌年四月彼女は再び故郷に歸つたが、その頃江戸幕府の勢は日に日に衰へ、國內は尊王といひ攘夷と叫んで煮返るやうに騷しくなつてゐた。當時の福岡藩も亦勤王、佐幕の兩派に別れて互に鎬を削つてゐた。今や望東尼の平尾山の山莊は、決して風流の一隱宅ではなかつた。彼女は盛に當時の志士と交際し、彼等を激勵し、彼等のために山莊を貸して、或は密議所となし、宿泊所となして、隱然勤王の士の保護者となつた。風流の友を集めた山莊は今や風雲急にして、勤王黨の密會所となり、潜伏窟と變つたのである。

僧月照が薩摩へ下る途次にもこの山莊に宿つた。殊に平野國臣とは交深く、度々訪はれては多くの贈答をなした。一夜國臣を宿して旅立たせた時の作に、國臣が、

忍びつゝ旅立ちそむる今宵とて山かげふかきやどりをぞする

と歌つたのに和して、

ひとすぢにあかき道ゆくなかやどにかしてうれしき山のあれ庵

をしからぬ命ながかれさくらばな雲居に咲かむ春を見るべく

などと詠んで贈つた。

月照と共にその山莊の客であつた高杉晋作の如きは殊に親しかつた。晋作は吉田松陰門下で、久坂玄瑞と並び稱せられた麒麟兒であつた。長州の藩論も一進一退で、俗論黨が勢を得、文久二年高杉も博多に逃げ出した。尼の愛弟子中村圓太等が馬關から船にのせて連れて來たが、高杉は舟中で「風帆滿腹似多翔　疾走直將至福岡　玄海大洋行欲半　波浪高處見蠻檣」と嘯いてゐた。晋作は當時二十四歳の若冠であつた。やがて最も安全と思はれる平尾山莊に移り、望東尼の世話になつてゐたが、この時給仕してゐたのが、淸子（後の山路淸子）といふ少女で「我もまた同じみ國に生れ來て大和心をしらざらめやは」といふ歌で高杉を驚した人である。尼も亦、

谷深き雪のうちなる梅の花埋れながらも香やはかくるゝ

山口の花ちりぬとも谷の梅のひらく春邊をたへてまたなむ

のやうな歌を贈つて高杉を激勵した。長州の風雲急になつていよ〳〵發つ時、尼は淸子と縫つた羽織襦袢を着せてやつた。そして、

まごゝろをつくしのきぬは國の爲立かへるべきころもでにせよ

の歌を添へた。高杉は感謝の意にたへなかつたとみえ「自愧知君容我狂　山莊留我更多情　浮沈十年杞憂志　不若閑雲野鶴情」の詩を尼に送つてゐる。

慶應元年夏七月、平尾村の松林に鳴く蟬の聲を驚かして、一隊の兵士は蝗のやうに尼の庵を取圍んだ。それは晋作始め數多の志士たちに助力したからであつたが、差當つては太宰府に流されてゐる三條公その他の公卿たちに密かに拜謁したからであつた。三條・壬生・澤・四條・東久世・三條西・錦小路の七人の公卿は、勤王攘夷を唱へた爲に幕府に嫌はれ、都に住みかねて長州へ落ち、そこで隱まはれてゐた。これが歷史に名高い七卿落である。然しその長州も一時俗論黨の天下になつた爲、あはれにも賴む木蔭に雨洩る心地で、病死した錦小路、他國へ走つた澤卿の外五人は、囚人として菅公の昔と同じ太宰府に流された。太宰府は福岡からは同じ國の內のことゝてさう遠くはなかつた。勤王の志の厚い望東尼は、そのことを聞いて庵に落着いてゐられなかつた。彼女は姿を變へて屢々太宰府へ行つて、密かに右の公卿達に拜謁してお慰め申し上げた。それが端なくも洩れ聞えたので、福岡藩の兵士に襲はれたのであつた。望東尼はもう言譯をしなかつた。

浮雲のかゝるもよしや武夫の大和心のかずに入りなば

とばかり口吟んで、從容として縛に就いた。尼の駕籠は搖られて海邊まで擔かれ、そこから小舟に乘せられて、玄海灘の孤島姬島に棄てられた。同時に月形洗藏始め二十餘人の同志は無慚にも斬られてしまつた。尼は我が身のことは忘れて、これ等の人々の死を悲しんだ。そして指の血で

供養の爲に般若心經を書寫した。

おくれゐて書くもかひなし法の文よみがへり來むつてならなくに

と、和歌を認めて密かにその遺族に賜つて慰めた。

姫島は陸路を去る五里の沖中になる小島である。吹く風と磯打つ浪の外ならでは、絕えて訪ふものはなかつた。牢獄は四疊の荒板敷で、まはりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海の見える南の方にのみ小さな窓が明けてあるのみである。圍らしい圍のない孤島の牢屋には、風も雪も浪のしぶきも、洩るが儘に身を濡して、肉も骨も凍りはてるかと思はれた。然し尼は毫も節を屈しなかつた。雨につけ思ふのはたゞ大君のことばかりであつた。そしてその心の跡は和歌になり文になつて、やがて三卷の「姫島日記」になつた。

住みそむるひとやの枕うちつけにさけぶばかりの波の音かな

朝な朝なむかふもやさしかゞみ山あらぬ姿に身はやつれ來て

流れこしうき身忘れてむかへてむいづこも御代の春ぞと思へば

又こゝに住みなむ人よたへ難くうしと思ふは二十日ばかりぞ（牢の柱にかきつく）

一方、高杉晋作は長州に歸つて俗論黨を一蹴し、幕府再度の征長軍をも破つたが、罪無くして囹圄

の月に泣く恩人老尼を考へては、我が身を切られる思ひがした。そしてどうかして之を救ひ出さうと、部下の士六人に命じて、慶應二年九月十六日、朝廷より特赦ありたりとの計を以て、見事に尼を姫島の獄舍より奪ひ出すことが出來た。晉作は先づ下關の邸に尼を入れて、母のやうに大事にかしづいてゐたが、そこは筑前に近いので、更に周防の三田尻に移して一層丁寧にもてなした。しかし晉作その人は間もなく病を得、馬關の客舍に大志を抱いて二十九歲の若さを以て歿した。望東尼は日夜看病に努め、痛惜をもつてこの同志の親友と永訣した。

その後彼女は山口に移つて同志の間に尊敬せられ、比較的安穩の生涯に入り、薩長の聯合軍が討幕に上るめでたい門出を祝つた。それから間もなく病を得て病床に橫たはつた。長州侯からは懇に取扱はれ、同志の士からは熱心に看護せられたが、終に起たず、六十二歲を一期として靜かに瞑目した。時に慶應三年十一月六日、維新の大業のまさに成らうとする時である。

花浦の松の葉しろくおく霜のきゆるもあはれひとさかりかな

これが辭世であつた。

以上は勤王家としての望東尼の一生を略述したのであるが、次に歌人としての望東尼について述べよう。

望東尼が夫と共に大隈言道の門に入つたことは前に述べたが、言道は當時その名こそ多く知られてゐなかつたが、その歌才に於て近世第一流のうちに數へらるべき歌人で、その歌風は輕妙奇抜、一種の新しみがあるものであつた。「我は天保の民なれば天保の歌あるべく」「我は市井の商人なれば商人の歌を詠まむ。」といふのが言道の主張で、形式を排して自由に、空想でなく現實を詠むことを心掛け、清新自由な獨自の歌風を開拓した。望東尼がこの師についたのは、彼女のためにはまことに喜ぶべきことで、彼女は充分に師の歌風の妙味を學び得て、師も亦深く許した。言道が尼の歌集「向陵集」に書いた序文に「おのれ教子あまたなれどまた類ひあることなし。」とほめてゐるところから見れば、尼は言道門下第一であつたらしい。かやうに彼女はその歌才に於て惠まれてゐたが、しかし尼を不滅の大歌人たらしめたのは、單に歌才の發露のみでなく、燃ゆるが如き勤王の至誠を藏してをつた爲である。それ故その歌は、女丈夫としての性格と歌才とが相俟つて、女性らしい細緻な表現の中に熱烈なる勤王精神があらはれてゐる。

武夫の重荷の罪を身一つにおひて輕くもなる命かな

國のためこゝろづくしの武士の命にかはる我身ともがな

武夫のやまと心をより合せ末ひとすぢの大綱にせよ

これらには、いづれも烈々たる勤王精神が吐露されてゐて、望東尼の面目をよく現してゐる歌である。しかし他面、望東尼には、

ひとりゐてつくづく聞けば書間より鳴く虫の音もあまたありけり

あすはまた雨かといひて月の傘仰ぐ面輪にふる時雨かな

川の瀬に流ふ蕪の流れ葉を追ひ争ひてゆく家鴨かな

の如き優れた叙景歌も殘してゐる。この點が、歌人としての望東尼の聲價を、一層大にする所以である。

要するに望東尼は、歌人としても當時の第一流に位するものであつた。

松尾多勢子

勤王女流歌人として、野村望東尼と並び稱せられるものに松尾多勢子がある。多勢子は望東尼程の包擁的な溫情を有してゐなかつたが、信州人特有の質實な中に燒く樣な熱情を有つてゐた。しかもその實行力に於て、當時活躍した尊攘志士の中に伍して、敢へて遜色がなかつたといひ得る程の珍しい婦人である。

多勢子は信濃國伊那郡の片田舍に住める農夫治右衞門の妻であつた。幼時より學を好み、歌書皇典に通じたが、後平田篤胤に私淑し、一度正義の何物たるかを知るに及び、國家を憂へては身

も世もあらぬばかりに思ひつめ、深く勤王の志士と交り、婦人の身の却つて人の油斷もあらうと屢々江戸に出で、窃に幕府の機密を探つてゐた。しかし多勢子が度々の江戸出府は遂に幕吏の疑ふところとなり、一日その在京の時、打手は早くも向はんとした。それを聞いた多勢子は少しも驚かず、自若として鏡に向つて髮を併し初めた。一味の人々は一刻も早く立退きを促したが、多勢子はいつかな聞かず、もはや事玆に至つては詮方ない、追手の來着を待つて潔よく自殺するまでの事、たゞ取亂しては一期の恥辱と、更に着物を着かへようとした。そこへ駈けつけた品川彌次郎、渡邊玄包の二人が無理やりに連れ出し、長州邸にかくまひ、漸く事なきを得た。毛利敬親公は深く多勢子の健氣な志をめで、櫻花をちりばめた短刀を賜つたといふ。

文久二年八月五十三歳の多勢子は、單身信州を出、風雲急なる京に上つた。

旅衣ふりかへれども秋霧の立ちへだてたるふるさとの空

上洛後は平田篤胤の門下と交誼を結び、大原、白川、裏辻の諸卿邸へ出入した。

千重におきし霜だにいまだ白菊のなほなが月の色ぞひさしき

の歌を白川卿に獻じて、おほめに預つたこともある。歌や國學に通じてゐるのを口實にして公卿等に見え、以て志士の意見を傳へ、又朝廷の御意向を漏れ聞いたのである。かやうに公卿、志士間

の連絡をとる事に努めたのであるが、これは京都所司代、京都町奉行、京都守護職の嚴重なる警戒網をくゞり、身命を賭して尊い使命を果したのである。

文久三年二月、三輪田綱一郎等の京都等持院足利三代の木像梟首事件が起つた。多勢子はそれに坐し幕吏の追求を受けたが、長州藩邸に逃れて事なきを得た。長州藩邸では多く時山直八の長屋に厄介になつてゐたが、品川彌次郎や久坂玄瑞等の士も訪ねて來て、懇に慰めて吳れた。然し世は春の盛であるといふのに、また清明な義心を抱き乍らも、身を忍ばせてゐなければならないことを憂欝にも思つた。朝まだき空のけしきのほの〴〵と霞漂ふを見て、

大空ははれわたすとも晴れやらぬ世のうき雲をいかにしてまし

嵐山の櫻花も盛過ぎたと聞いて、

夜半に吹く嵐に花はちりぬともやまと櫻のねはかれめやも

憂憤の情を三十一文字に洩して自ら慰めてゐた。ところが三月十一日、攘夷御祈願のため、孝明天皇が加茂上下兩社に行幸し給ひ、將軍家茂も諸大名を從へて供奉した。この事を傳へ聞いて多勢子は、かねて志願の一端が實現したことを歡んで、

君と臣のみちをたゞすの神垣にいでましの世となるぞかしこき

と詠じて、蔭ながら有難しと額き拜んだ。

かくて三月二十九日には都を後にして歸國した。

古里にかへるもをしき旅衣大内山をあとに殘して

元治元年には筑波山の擧起り、十一月西上軍の伊那を過ぎるや、武田耕雲齋、藤田信等に種々便宜を與へた。

明治元年正月形勢急迫の報至るや、兒孫を率ゐて上京し、有志の間に往來して國事に勤め、二年三月事終るを以て歸鄕し家事に從つた。晩年居を東京に移し、明治二十七年六月十日八十四歲で歿した。同三十六年には正五位を追贈せられた。

詠歌のうち代表的な二三を擧げてみると、

身につもる憂さはわすれて君が代に浪立たぬ日を祈り暮しつ

もののふの赤き心をかたりつゝ明くるや惜しき春の夜のあめ

などは、王事に盡瘁してゐた頃の多勢子の心事をいひあらはしてあます所がない。然るにいよいよ明治維新となつて京に上る時、道すがら鏡山を過ぎて、

鏡山心のくまも晴れにけりたちかへる世の面影を見て

と新政を喜んでゐる。志士の辛苦は報いられて、輝かしい王政復古を迎へ得たのである。

第三章　女流俳人

昔も今も和歌には女流作家がおびたゞしく、その世に傑出した歌も少くない。しかし乍ら、俳句界を見渡すと、閨秀俳人の稀なること實に曉の星の如き有様である。近世平民文學の粋たる俳壇には女流俳人はあまりに少い。しかし此は恐らく俳句そのものゝ性質から來たことであらう。

即ち俳句は諧謔、枯淡、閑寂といふやうな方面の味を本領として來た。それはいふまでもなく男子、倘いへば概して中年以上の男子が好み、且持つところの領域ではあるまいか。從つて、これら枯淡、閑寂を生命とする俳句の世界には、女性の感情は入り難いことは明かなことである。

女流俳人　又一面から見れば、俳句は一種の集團的社交詩である。江戸時代の女性の生活が、集團的社交的生活から餘りにかけ離れてゐたことも、女流俳句界不振の原因の一つに數へられるのである。更に文學上の性質から考へる時、俳句は自然觀照を主としたる客觀的叙事詩である。それに反し、和歌は自己の感情を吐露することを主としたる主觀的抒情詩である。而して、女性が前者に不適

にして後者に得意なるは、その特性より見て亦明かなことである。

以上の諸點より考ふる時、女性に俳人の少いことも、自ら理解することが出來る。しかしながら、傳へられてゐる數少い女流俳人の名は、我々の耳にゆかしくひゞき、多くの逸話を生み、さすがに女らしい感情を帶びた柔い句を示してゐる。

荻原井泉水氏は、嘗つて女流俳人について次のやうに言つてゐる。

「女流の俳人を一作家として見ると、さして秀でた人はないやうであるが、女は女だけに感情の調子が柔くて潤がある。それが枯木に時雨の音を聞くやうな閑寂な趣味を貴んだ昔の俳句の中にあつて、殊更珍らしく寒椿の一二輪を見るやうな氣がする。」と。尙氏の考によれば、女流俳人には二つのタイプがある。一つは弱々しくデリケートで、若くして佳い句を殘して死んで行く人である。千子も三十にならずして死んだらしく、文政年間の花讃女も二十三で死んだ。他の一つは、夫に別れてから孤獨の心を俳句で慰めて、隱遁的に安住したり、又は髮を落して尼になつたりして、心持も男性に近く變つて來る人である。このタイプの人は皆長生をしてゐる。捨女、園女、智月尼、千代女はいづれも六十歲を越え、多代女の如きは九十歲の高齡に達してゐる。

さてこれから、我々が忘れてはならない女流俳人の、幾人かの小傳とその業績とを檢討してみ

よう。

先づ元祿時代にその特色ある作風を示した作家に捨女、園女、羽紅尼、千子、紫白女、智月尼、秋色女、千代女などがある。その後に續いて田女があり、江戸末期の俳壇に最後の光を放つたものに多代女がある。

捨女

捨女は寛永十一年丹波國氷上郡柏原に生れた。幼時より聰敏であつたが、六歳の時、

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

の句を詠んだと傳へられてゐる。この句はもとよりさしたる價値のあるものとも思へないが、いかにも少女らしい纖細な感じと、優婉な趣とがあるので、捨女の少女時代の才華を想はせる句として、人々の口に上つたものと思はれる。長じて國學者であり歌人である北村季吟の門に入つて、敷島の道を學んだが、やがて轉じて宮川松堅に俳諧を學んだ。

ある年のこと、某大守は江戸に參勤交代の道すがら、柏原の里に彼女を訪うて、その才藻を賞し、

柏原に惜しや捨おく露の玉

の一句を賜つたといふ。

年十八歲となるに及んで、繼母の連子である季成と結婚した。季成も亦文雅の嗜みがあつて、妻捨女と同じく季吟、松堅の門に入つて歌俳を學んだ。捨女が永く風雅の道にいそしみ得たのは、この夫の完全なる理解があつたからであらう。かくて同棲二十年、五男一女を儲けたが、延寶二年の秋、夫季成は病歿した。捨女は年と共に寂寥の感を深くしたと見え、數年の後終に剃髮して樣を變へ、妙融尼と號した。初め京都千本に庵を結んで淨土律を修したが、後播磨龍門寺の高僧盤珪禪師に就いて參禪し、名を貞閑と改め深くその道の修業者となつた。彼女の句に人世を歌ひ、悟道を暗示するものゝ詠まれたのはこの頃からであらう。後龍門寺の傍に不徹庵といふ草庵を結び、餘生を俳諧三昧に送り、元祿十一年六十五歲を以て歿した。

捨女は俳道に於ては貞門女六俳仙の隨一とされ、又園女・智月尼・秋色女と共に、元祿の四俳女ともされてゐる。彼女が生れながらにして文學方面の才能をもつてゐたことは勿論であるが、その環境はよくその天資の發展に惠まれて、すく〳〵と伸びて行つたものと思はれる。殊にその夫に風雅の嗜みがあり、一族に文雅の趣を理解するものが多かつたのは、彼女の俳諧のために喜ぶべきことであつた。

彼女の俳句は如何にも女性らしいデリカシイに富んでゐる。そして民衆に容易く理解され易い。謂はゞ平俗な感情と、緣語や懸詞など巧に用ひた洗練された修辭と、悟の道に人を誘ふやうな宗教的のにほひとが、彼女の句々を光あるものにしてゐる。

うきことに馴れて雪間の嫁菜かな

雪の間に生ひ出た若々しい嫁菜、それに柔い同情の眼をむけてゐる所に、すでに女性らしい優しさを覺えるが、そこに若々しい嫁の姿を思ひ合せて、知らない家の人々の間に交つて、心づかひをしつゝ日を過してゆく女性の樣を描いてゐる等、その才華の非凡であることが認られる。

粟の穗やみは數ならぬ女郎花

日ぐらしや捨てゝ置いても暮るゝ日を

山のあらしいかばかりぞや花いかだ

雜煮々や千代のかすかく花がつを

花よりも氣に當りぬる嵐かな

雲路にもちかみちあるや夏の月

等は、いづれも彼女の作風を代表するものである。

のうらんの奥ものゆかし北の梅

の句も貰つた。暖簾の奥の梅がものゆかしいといふ挨拶の句である。こゝで園女は蕉門俳人としてのスタートをきつたのである。

山田時代に於ける園女が一生の思ひ出は、夫と二人して春の大和路を旅したことであらう。

　　　　つばくらにしばしあつかるやどり哉　　　一　有
　　　　ちぎり置つばめとあそべ庭の猫　　　　　園　女

は出發に際しての吟だつた。當麻寺・香具山・奈良・法隆寺と、うらゝかな春光をあびて、二人は樂しい旅を續けた。けれども山田での生活は、あまりおもしろくもなかつたらしい。元祿五年八月には大阪へ移住してゐる。

　　　　難波女に何からとはむ事はじめ

はあけの年の歳旦吟である。

一有はこの頃渭川と改號してゐた。本業の醫者の傍、園女と共に前句附の點者などもしてゐた。夫婦仲のよかつたことは、いつの時いつの場所にもかならず二人連れで、その唱和した連句などは隨處に見出すことが出來る。

鼻紙の間にしほるゝすみれかな

といふ有名な句も、吉野への水いらずの旅での途上吟だつた。

西鶴とも交があつた。

濱荻や當風こもる女文字

これば西鶴が園女の筆蹟をたゝへて、序と共に寄せた句である。

元祿七年秋九月、芭蕉は遠く長崎への行脚を心ひそかに喜びながら、奈良より難波を訪れ、園女亭の招宴にのぞんだ。そして園女の貞淑に感じて、

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

の句を詠んだ。園女の、

紅葉に水をながす朝月

の脇句をうけて、夫の渭川始め諷竹・支考・惟然・洒堂・舍羅・何中なんどの連署によつて一卷は卷かれた。ところが芭蕉はこの時、園女亭で饗應を受けた膳の中の菌にあたつて、大阪に來てから發病し、遂に世を去つたのである。

寒さうな笠さへみればなみだ哉

師を思ふことに厚かつた園女の悲歎と悔恨とはどんなであつたであらう。

夫の渭川が病歿したのは、それから程たゝぬことである。愛し愛された夫に別れた園女は、幾多悲劇の舞臺だつた大阪に留ることは出來なかつた。そしてたゞ一人さみしく江戸さして上つて行つた。寶永の初年のことゝ傳へられる。

江戸では深川に住つた。そして夫の業であつた眼科醫を營むと共に俳諧の點者などしてゐた。江戸へ出たその年か翌年かに前から撰に從つてゐた俳諧集「菊の塵」を出した。江戸では俳諧は其角の指導を仰いだ。享保三年病勝ちにもなつたので、剃髪して智鏡尼と號したが、頭上にわざと十本許りの髮の毛を殘して置いた。こんな所から見ると、晩年には餘程逸脱して女ばなれがしてしまつたやうである。享保十一年六十四歳で歿した。

その辭世の歌は、

秋の月春の曙見し空は夢か現か南無阿彌陀佛

と傳へられてゐる。

園女は趣味性に富んでゐたと見えて、唐風の雄健な書に巧みであつた外、和歌をもよくし詩作をもした。芭蕉の句などから考へると、人妻として貞淑であつたことが知られるが、夫の死後は

よく貞操を守り、俳人の集ひにも絶えて男と同席したことがなかつたと傳へられてゐる。しかし一面、珍しい奇行家であつたやうである。俳友生玉琴風が園女を評した中に「この女昔より世事に疎く、袖下の紅絹を切つて下駄の鼻緒を調へ、文庫の蓋を以て厨の水ながしに用ひる。」等の言葉がある。尚彼女の手になる「雲居和尚に答ふるの書」などにもよくその面目を窺ふことが出來る。

來書の趣拜見申候。不求心不求忘は大道の根元、誰も存する所なり。禪ながら珍しからず。一心源頭に上りての所作、柳は綠、花は紅、唯その儘にて常に句をいひ歌を綴りて遊申候ことに候。無益の口業ならば一切經も無益の口業に候。法臭き事は嫌ひにて、我が平日の行は念佛と句と歌と也。極樂へ行くはよし、地獄へ落つるは目出度し。

和二玉韻一

自己念其不レ覺レ心　清澄己耀一燈心
市中點々有二明鏡一　全識人間清淨心

園女の句については、凉袋が「長春隨筆」の中に「風流の鐵腸、男女の情を忘る。園女が風流の至れる處するにたへたり、大丈夫も及ぶまじ。」といつてゐるが、彼女の作全體から觀て、蕉門

の男性の俳哲に比べては到底追隨し難いことを感ぜしめるけれども、女俳人に通有な理智に墮する傾も比較的强くなく、觀照も女には稀な程度に進んでゐる。纎細であるが纎弱に陷ることが稀で、技巧も洗煉されて居り、女俳人では確に優位を占める特色ある作家である。

小はらめや野分にむかふかゝへ帶

おほた子に髮なぶらるゝ暑さ哉

手をのべて折りゆく春の草木哉

大根に實の入旅の寒さかな

荒馬の師走の牧の寒さかな

駒鳥の聲ころびけり岩の上

などはいづれも佳作であるが、

寢どころへ扇にすゑし螢かな

紅さいた口もわするゝしみづかな

は如何にも女らしい句である。

以上の二人と共に述べるべき人に羽紅尼と千子がある。二人共に句數は少いが、以上の二人と

共に考へられなければならない人達である。

羽紅尼　は凡兆の妻で名をとめといひ、俳集にはとめ、羽紅どちらでも現れてゐる。傳へられる句數の少ないのは、夫凡兆の惡運に連關する所もあらうと思はれる。夫の生前から剃髪して羽紅尼と稱した。芭蕉が嵯峨に滯在してゐた頃、夫婦相携へて來訪したことなどが「嵯峨日記」に見える。事に連つて凡兆が獄に繫るゝや、忍辱して苦節に堪へ、寃の雪がれるを待つて、大阪に移つて隱れ住んだといはれる。

霜やけの手をふいてやる雪まろげ
縫物や着もせでよごす五月雨

などを見ると、誠に良妻賢母であつたらしい。その傳る所の少い句の中でも、—

春雨のあがるや軒になく雀
入相のひゞきの中やほとゝぎす
だまされし星の光や小夜時雨

などは優れた作である。殊に第二句は出色のものであらう。

千子

千子は去來、魯町の妹で、清水氏に嫁して一女を擧げたが、若くして歿したのと、蕉風の俳集のまだ多く出ない元祿元年に歿してしまつたとの爲でもあらう、その句は多く傳つてゐない。貞享三年の秋兄去來が千子を伴つて伊勢參宮した時の「伊勢紀行」の中に十一句あるのが、殆んど唯一の纒つたものである。しかもそれらの句は、殆ど凡てと云つてよい程蕉風の眞諦を得てゐる。女のやさしさはあるが纖弱に陷らず、觀察が行き屆き智巧に落ちてゐない。

小鳥さへ渡らぬほどの深山かな　（鈴鹿山）
萩すゝき山路を出る笠おもし　（同　）
泊り／＼稲する唄もかはりけり　（鈴鹿の關泊）
見る／＼も帆數そひけり霧の海　（二　見）

などの句は、特に澄みきつた彼女の句境を想はせる佳句である。

花にあかぬ憂世男の憎さ哉
大内のかざり拜まん星まつり

などは人口に膾炙してゐるが、それだけやゝ通俗的である。それよりも辭世の句の、」

もえやすく又消えやすき螢哉

は如何にも女らしい辭世句として價値が挑へると思ふ。

智　　月

智月尼は江州大津の傳馬役佐右衛門の妻で、乙州（おとくに）の母である。生國は山城宇佐といひ、若年の頃何れかの御所か御局かに宮仕して歌路といつたともいふが、明かでない。夫には早く死別したが、何時の頃か年次は詳でない。

子の乙州と共に芭蕉の門に學んだのであるが、大阪で歿した芭蕉の遺骸が、川船で大津の乙州の家に屆けられた時に、法衣（芭蕉の好みとあつて特に茶色の布を選んだ）を縫うたのが智月尼であつた。かつて智月尼は芭蕉を訪れて靜かに物語をした後に、記念の句を求めた。その時に芭蕉は、「六十に近き人に形見を乞はれていと力なし。我先に死ぬといふことにや。」と戯れながら書いて與へたことがあつた。しかるに、智月尼が亡き師芭蕉の爲に、茶色の法衣を縫はねばならなくなつたのはその翌年であつた。まさか智月尼は芭蕉の死を豫期したわけではなからうが、不思議な因緣である。芭蕉の歿した後は、尼は常に義仲寺に詣でて追善供養を營み、絶えず香華を手向けたといふことである。

寶永五年に七十餘歳をもつて歿したが、女流ながらも近江蕉門中重きを置かれる人で、一家皆

句に遊び、家も豐かな方で、惟然・路通の如きをも扶助したらしく、性質も慈愛に富む人であつたらしい。

作風については、許六は「智月は一筋見えたり。乙州より遙に勝れたり。然れども、仕習の朝より終焉の曉までの誹諧、五色のうち只一色を染出だせり。これは女の風雅なればなり。かれが風雅の美をいはゞ、生涯の句、ひたすら智月といふ尼の句にして、女の形を能く顯はせり。」(誹諧問答) と云つてゐるが、ほゞ當れる評と云つてよく、なほ理智に落ちる傾があると云へよう。

孫を愛して

麥藁の家してやらん雨蛙

初雪の疊ざはりや椶櫚箒

鶯に手もと休めむながしもと

さぞ小町我も因果な姥櫻

など、何れを見ても許六のいはゆる「ひたすら智月といふ尼の句にして、女の形を能く顯は」したのである。しかし、

山櫻散るや小川の水車

廣庭にゆたかにひらく牡丹かな

なぐられてこぼるゝ罌粟や日のうつり

などは、美しい繪を見る趣である。なほ、

我が年のよるとも知らず花盛り

我がなりもあはれに見ゆる枯野かな

年よれば聲もかるゝぞきりぎりす

などは、美しく咲く花に對して、おとろへ行く我が身のあはれさを思ひ、年の瀨に老のわびしさを感ずるなど、女性ならでは詠み得ない境地である。

秋　色

秋色は江戸小網町（一に堀江町とも）の菓子屋の娘で、大目寒玉（其角の門）に嫁し、初、古著屋であつたが、後蕎麥屋に轉業した。十三歳の時、上野の花見に、淸水堂の後の井戸端の大般若といふ櫻を見て、

井戸端の櫻あぶなし酒の醉

と吟じて、寛永寺の宮の感賞に預り、秋色の號をつけられ、その後件の櫻を誰いふとなく秋色櫻と呼んで來たといふが、柳亭種彥は「恐らく後人この句をつくりて附會說をまうけしなるべし」

（還魂紙料）と否定してゐる。しかし秋色櫻の名は「富士拾遺（寶暦四年刊）にも見えてゐる故、尙一考すべきであらう。

秋色も其角の愛弟子で、その歿した時は、

日々に諸手合せて百合の花

と詠んで悲しんでゐるが、其角の遺稿「類柑子」の跋にも名を連ね、再度に亙つて追善集をも出した。「近世奇跡考」所引の秋色追善集「雨三聲」によれば、多くの子女があつて、長男は俳號を林鳥、次男は紫萬、孫女を富といつたとある。何れも母の趣味を受繼いだものらしい。

彼女には逸話が中々多い。ある時某侯の山莊に招かれたが、彼女の父がその庭園を見たいとて、從僕に扮して連立つたところ、折惡しく雨が降出した故、娘は駕籠で送られることゝなつたが、駕籠舁をだまして、巧に父と入れかはつたといふ話もある。またある時、さる武家へ召され、酒興のたはむれを怒つて、

武士の紅葉にこりず女とは

の句を詠んだといふことなども傳へられてゐる。

享保十年五十七歲を以て歿したが、その辭世の句は、

見し夢のさめても色の杜若

である。その外、

雉子の尾のやさしくさはる菫かな

底白にべにはき殘すつゝじかな

すゞしさや日の落ちかゝる海の上

簾下げて誰が妻ならん涼舟

交りを紫蘇のそめたる小梅かな

などが知られてゐるものであるが、これらの句でも分るやうに、秋色の句は、おとなしいが、一體に平弱で、物の見方も淺い。

紫　白

紫白は肥前基肄郡田代の寺崎一波の妻である。日田の坂本朱拙に俳諧を學び、朱拙の助力によつて俳諧集「菊の道」を撰して元祿十三年に出した。これが女俳人の手に成る俳集の嚆矢で、この事實によつて特に注意されてゐる人であるが、この集には、當時の全國各地の知名なる蕉門俳人を殆ど網羅し、邊陬の地にあつて成されたものとしては、驚異に値するといはれてゐる。

俳句もかなりの數を遺してゐる。

七夕や娘がせゝる雪踏賣

降出しをつくる柳の朝きげん

冬枯の中いそがしや梅の花

等は、女流一般に見られるやうな句であるが、

燕や小袖を洗ふ橋の下

若竹の頭に近しくものみね

白雨やわづかに降て田の黑み

等の如き、率直に詠みとつた句もある。

千代女

千代女は元祿十六年二月、加賀國松任町の福增屋六兵衛といふ表具師の娘として生れた。家はどちらかといふと貧しい方であつた。さうした貧しい町人の家に生れながらも、千代女は幼い頃から妙に文事が好きであつたと傳へられてゐるが、それには彼女の家の業が少からず影響を與へたものと想像される。表具師の子として生れた彼女にとつては、額や掛物や屛風に貼られた書畫に親しむ機會が多かつた。その事が敏感に生れついた彼女の心に、

何等かの感化を與へずには措かなかつたであらう。

千代女が七歳の時に、

初雁やならべて聞くは惜しいこと

といふ句を口ずさんだのを父の六兵衞が聞いて、驚きと悦びのあまり、それを聖興寺の住持のところへ行つて話し、それによつて初めて千代女の天才が認められたといふやうな事も語り傳へられてゐる。これは果して事實であるか、それとも後人の附會であるか分らぬが、彼女が幼少の頃からさうした方面の天才を示したことだけは、兎に角事實であつたらしい。なほ「續近世畸人傳」に載せられてゐる次の話は、千代に關する物語中最も著名なるものになつてゐる。

美濃の俳人盧元坊が行脚して來た時、千代はこれを訪ねて弟子になる事を乞うた。元坊は「時鳥」の題を與へて詠ませたが、千代の示した句は皆氣に入らなかつた。併し彼女は少しも失望せず、熱心に句案する中夜も更けたので、師の坊は眠つてしまつた。その間も句を案じつゞけた彼女は、夜明になつて坊が眼を覺した時、「ほとゝぎすほとゝぎすとて明けにけり」と詠んで示した。盧元坊はこれを見て「是なり是なり」と激賞した。それから千代の名が頓に高くなつたといふのである。しかしこの話もやはり一つの傳説に過ぎないので、すでにこれより以前の「伊達衣」に

「ほとゝぎすほとゝぎすとて寢入りけり」といふ句もあるので、この句によつて後人が千代の作と誤り傳へたものであらうし、盧元坊が始めて此地に俳杖を曳いたのは、彼の北國行脚の紀行「桃の首途」によると、享保十二年、千代二十五歳の年に當るので、益々この逸話の確實性が疑はれて來るわけである。しかしこの傳へによつても、亦彼女が幼少の頃から句を詠む才のあつた事は想像される。

千代女は十二歳の頃から行儀見習のため他家で數年を暮したのである。初め加賀本吉の北潟屋大睡の許に居り、後、金澤堤町坂尻屋珈凉の生家に仕へたとも傳へられる。そしてその仕へた家の主が、みな俳諧を解する人であつた爲に、彼女の俳句に於ける才能はいよ〳〵磨かれていつたのである。

また、女性の生涯に於て最も重要な結婚についても、千代女の場合は餘り明かでなく、近くは千代女未婚說も現れてゐる位である。通說によれば、十八歳の時、金澤の福岡彌八といふ足輕に嫁ぎ、次の年一子をあげ、二十四歳の時夫に死別し、その翌年またこの一人子を失つたので、夫の家を去つて松任の實家に歸つたといふのである。併し文獻的にはこれを證すべき何等の資料もなく、かの、

誰かろか知らねど柿の初ちぎり
起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな
蜻蛉釣今日はどこまで行つたやら
破る子のなくて障子の寒さかな

等の吟も、彼女の作だといふ確證を得難いのみならず、「起きて見つ」の如きは、全く他人の作たることが明かにされた。しかし彼女が結婚したか否かは、尙これから後に出るであらう證據によつて確定せられるであらうが、結婚生活に關する以上の俳句も傳つてゐるのであるから、或る短い期間さうした生活があつたものと見てよからうと思ふ。

彼女の句の初めてものに見えるのは、左の支考の書簡である。享保六年の夏秋の際、支考・露川が相前後して北越に行脚した折、二人は共に千代に會してその奇才に驚き、支考は特に書を裁して、これを鄕友に報じたのである。

珍　事

金澤より三里南に松任と申す所表具屋の娘に、千代と申して美婦生年十七歲、去年歲暮よりふと發句を始め、あたまからふしぎの名人、三越の間是沙汰にて御座候。先月通がけに寄申候處頃日禮に人越候。

附合一折懸御目候。此比題發句入用候事候間、稲妻、杜若と申題二つ遣候處、

行春の尾や其まゝにかきつばた

稲妻の裾をぬらすや水の上

此二句にて外は御察可被成候（下略）

大　毫　様　　　　　　見　龍

見龍は支考の別號である。これで見ると、千代女は十六歳頃から發句をよみはじめて居たのであつて、支考に見出された譯である。

俳壇隨一の宣傳屋支考に見出された事は、千代をして天下に名を成さしめる上には、此上もない好運事であつた。もしもこれが支考でなくして、他の地味なそして宣傳などゝいふ事の嫌ひで、下手な人を師としたならば、加賀の千代の名は或はあのやうに高くはならなかつたかも知れない。しかし一歩進んで考へて見ると、支考を師匠としたことは、千代を有名ならしめるには大いによかつたけれども、第一義的な句作の上に、その事は千代の爲に幸福であつたか否かは疑問である。嘗て荻原井泉水氏も「千代尼は支考からも乙由からも教へられたが、その先生が惡い爲であらう、作品全體としては決して佳いとは云へない。」といつて居られるが、千代女が初め所謂美濃派の閥

祖支考に師事し、その後繼者であつた盧元坊に近づき、更に轉じて所謂伊勢派の麥林舍乙由を師としたといふことは、俳人としての系統の上からは、あまりいゝ歩み方をしたとはいへない。俳諧道の修業に於ては、直接芭蕉の薫陶をうけ、最後までひたすら芭蕉の示した一路を精進した智月尼の方が、同じ女流俳人でも、千代などより遙かにいゝ歩み方を惠まれてゐた。此の點は千代の爲誠に惜しまざるを得ない。

とにかく、千代女は二十二三歲の頃から盛名いよ〳〵高く、多くの俳人達と交遊したが、中にも支考・麥林・希因・盧元坊・也有等の如き當時の大家が少くなかつたことは、いかに彼女が世に認められてゐたかを證するものであらう。彼女は後代に於て騷がれたばかりでなく、在世中動かすべからざる地位と人氣を持續してゐたことは、彼女の六十歲當時、麥水がその著「鶉だち」の序を乞ひ、伊勢派に屬する見風の記念句集「霞形」にも彼女が序文を書いてゐる。又七十二歲の年、蕪村は園女・秋色・智月等女流の句を輯めて、「玉藻集」を出版したが、その序文を彼女に求めてゐることによつても知られる。殊に彼女の生存中に刊行された昣波の「皐月の雨」の左の一節の如きは、彼女の素晴らしい人氣を雄辯に物語るものであらう。

今の俳人きのふ俳諧をきゝけふは人もゆるさぬ上手とはなれり。人の句をきゝ能きは譽ず、あしきを見

出しては納涼の歸るさの道草に人を誘るあり。これ大に俳諧の病なり。人の嗜むべき事なり。素園の句とさへいへば考へずして甘心す。過しころ我句を尼の句にして、

男には末つますべし紅畑

尼が消息の端に書付越したりと咄せば、人人手を打て感心す。更に擬作なりといひがたくて其席を去りぬ。われ名を售にはあらず、素園尼の聲價の售れたるなるべし。

かくて千代女は、

髮を結ぶ手の隙明けて炬燵かな

の詠と共に落髮して素園と號し、晩年に至るまで風雅の名を擅にし、

月も見て我はこの世をかしくかな

の一句を名殘として、七十三年の生涯を安らかに終つたのである。

いま千代女の遺した作品を靜かに味つて見ると、その盛名に比して餘りにも寂寞の感を深うするのである。その名聲のみからいへば、千代女は恐らく芭蕉と比肩すべき地位に居るであらう。而もその實は、彼女の名に比して餘りに虛しいと云はねばならぬ。しかし彼女に芭蕉の深さを求め、蕪村の風韻を尋ねるのは甚だ無理な注文といはねばなるまい。千代がかほどまでに名を知ら

れたについては、女性であるといふ特殊のハンデイキヤツプや、支考等の宣傳も大いにその因をなしたであらうが、しかし又彼女の作品に見るべき所があつたに相違ない。千代女の俳句の特色は、その纖細優雅な女らしさと、輕快潑剌たる才氣と、巧妙圓滑な措辭とであると思ふ。

蝶々や何を夢見て羽づかひ

たんぽゝや折々さます蝶の夢

山吹や柳に水のよどむころ

ともしびの用意や雛の臺所

ゆふがほや物のかくれてうつくしき

月の夜や石に出て鳴くきりぎりす

音添うて雨にしづまる礁かな

これらの句には、いづれにも一貫して女性獨特の情緒のやさしさ、溫かさ、こまやかさが流れてゐる。

富士はまだ水に明るし初かすみ

朝夕の雫のふとる木の芽かな

梅が香や鳥は寢させて夜もすがら
見るうちに月の影減る落葉かな

等は、何れも才氣の侮りがたいものがある。

かやうに拾ひ集めてみると、少からぬ佳句が千代の作中にもあるのであるが、それにしても大體に於て俳人としての千代は、世俗に傳へられてゐるほど秀でた俳人とは認められない。彼女の句の大半はどちらかといふと、才氣が露出し過ぎてゐる。深さがない。「細み」もない。「寂び」に至つては甚だ乏しい。これは前に述べた如く、一つは師匠の惡かつた爲でもあらうが、一つは彼女の天分の然らしむるところであつたらうと思ふ。

千代女は又繪にもかなりすぐれた才能を示してゐる。書に於てもすぐれてゐた。要するに彼女は、稀にみるすぐれた才女であつた。そのすぐれた才女であつた點に於て、千代女はそのかみの清少納言あたりと比較されてもいゝかも知れぬ。

田　女

田女は江戸の人谷口樓川の妻である。當時江戸に於ける江戸座の女點者として名聲を馳せてゐた。子がなかつたのを却つて幸福だと云つて、愛してゐる狆によつて子の情は知られるなどゝ云つてゐるやうな、女としては聊か變つた所もあるが、それでも

蓑子とした雜口とは圓滿であつたらしく、雜口は田女を悼んで終焉記をも書き、その慈恩を記念して句文集「俳諧海山」をも編んでゐる。

田女は女としては素養もあり、擬古文もなか〳〵巧であるが、その作句も可なり多いと共に、作風は穩健で、千代などに比べて品位がある。そして千代とは違つて古典故事を使ふ傾向が著しく、そこに品位の出て來る理由もあると共に、實感を離れて行く弊も生じて來るのである。

紅梅や酒に何焚くみやつこら

よし野たつ田おとらず紅葉〳〵哉

肌隱す女の罪のあつさ哉

老僧の鼾かしましかんこ鳥

木がらしや三千坊の眷のおと

花讃女

花讃女は姓は古川、名を松といつた。幼時より風流の志が深くて、十七八歳の頃から採茶庵萬里に隨つて俳諧を學んだ。後横山萬舊に嫁してからも、つとめて俳諧の道に精進したが、文政十三年三子を殘して、年僅かに二十三で歿したことは、惜しいことであつた。その句集を「袪陀羅尼」といつて文政十三年に刊行した。歿後夫萬舊の手によつて

編まれたもので、諸家の追悼句も共に載せてある。

手折たる草にも蝶のたはれけり

叱られた昔なつかし雛の鼻

稲妻に又見かへるや子の寝顔

冬の月心であるくあすこここ

多代女

江戸末期、文政天保俳壇の横綱として、有髯男子に拮抗して劣らなかつた女流俳人に多代女がある。多代女は姓は市原氏、岩代國須賀川の人である。富商の家に生れ、夫を迎へて三人の子女を擧げたが、三十一歳の時夫に死別し、その悲しみをまぎらすため、舎兄峯辯亭のすゝめるまゝに、雨考の紹介で道彦の門に入り、後、乙二に學んだ。晩年には江戸に出て諸俳家と交つた。慶應元年に九十歳の高齢で歿したが、嘉永六年には自ら「晴霞句集」を編んで刊行してゐる。

空にみち空にきこゆる御忌の鐘

根に雪のはきためてある椿かな

行くもくるもみな春風の堤かな

ありあけの野ずゑに白し春の水

などは注目すべき句であるが、彼女の句は一體に客觀的で引しまつてゐて、少しも危げがない。これほどしつかりした句を作つた人は、女流には誠にめづらしい。しかし一方から云へば、それだけ女らしい點が缺けてゐるともいへる。

生きすぎて我も寒いぞ冬の蠅

これが彼女の辭世の句である。

第四章　女流歷史家

近世女流文學史は、韻文に於てはともかく相當の盛況を呈したが、散文に至つては全く不振であつた。それでも紀行、隨筆はまだ幾分か見るべきものがあつたが、創作に至つては全く萎微沈滯したと云はざるを得ない。然るにこゝに、近世文學史上唯一の天才的女流作家として、歷史物語に萬丈の氣を吐いてゐる者がある。それは「池の藻屑」「月の行方」を以て知られてゐる荒木田麗女である。

荒木田麗女

麗女は從來史論家として知られてゐるが、しかし彼女は決して單なる史論家ではない。實にすぐれた文學者にして、同時に創作家を兼ねた人であつた。この意味に於て、近世女流文學に於ける彼女の位置はかなり高いものである。而も彼女の著作目錄を調べて見ると、歴史物三種七十二卷、物語類五十種二百五十三卷、紀行歌文數十種の多きに達して居り、その遺稿の現存するもののみでも、歴史物二種十七卷、物語類十八種七十餘卷程あつて、優に「源氏物語」の數倍に及んでゐる。かくの如き偉大な精力と深き學才を有してゐた麗女は、如何なる女性であつたらうか。

麗女は享保十七年伊勢國に生れた。父は大神宮の祠官で釜谷權之進といつた。麗女は後に伯父荒木田武遇の養女となつたのである。幼時から讀書を好んだが、父が女子に學問は必要ないと制してきかなかつた。そこで兄武世が「大學」を讀むのを傍に居つて聞き乍ら、これを暗誦して兄を驚かせたといふ。兄は麗女の才を賞讃する餘り、「古今集序」「伊勢物語」など讀ませたが、悉く讀破し、僅か八歲から九歲迄にいろはの手習をもして、「論語」「孟子」等の漢籍迄習つた。

かくの如く嚢中の錐は既に其鋭鋒をあらはし、兄も亦その才能を發揮させる事に努めたにも拘らず、無理解な父母は女子の勉學は無用なる由を說いて麗女が修學を制し、十二歲より裁縫を習

はせたりして、可惜不出世の天才も十分その光を發揮する事が出來なかつた。しかし十三歳の時伯父の養女となつてからは、幸にして伯父は學問好きであつたので、専ら麗女の養育にあたり、十四歳から詩文を教へた。殊に武遇は和歌を好んだので、麗女も亦和歌の師について歌道に精進した。又連歌は兄の勸めによつて十六歳から習ひ始めたが、十七歳の時大阪の西山昌林の門に入つた。かうして伯父の理解ある指導によつて、彼女の學才は益々磨かれて行つたが、彼女が著述に從ふやうになつたのは、慶德如松と結婚してから後のことである。しかも四十歳に近い年頃からであつた。これらについて彼女自身次のやうに言つてゐる。

明和五年の春良人攝津の國に遊行のあと、ことに徒然なれば、宇津保物語取出で、再遍讀したるに、やう〳〵心得るやうなり。誤字と見ゆる處多く、一二の順違へるやうなれば、見るに從ひて押して一二の順を改め見るに、いとよく分り行くやうなり。良人家に歸られて後、かくといへば喜びて、やがて朱して改めらる。夜な〳〵校合をもして、誤字をも改め、目錄系圖をも書きたり。(中略)それより日本紀を始め、我が朝の國史類諸家の記等、又公事の書有職の書の類を見るに、殊に面白く心止むるやうなりしかば、又良人さらに假字國史に似たらんことをも書き出でよと望まるゝにより、池の藻屑を書きたり。

これによつて見れば、彼女の夫は彼女の創作の動機にもなり、指導者ともなつたやうである。女

子に積極的の活動を許さなかつた當時にあつて、妻をかくまで指導し勉强させた彼女の夫は、又新しい思想を有してゐた人に違ない。とにかくこの夫妻共力して精進した事は、實にゆかしい限りである。かくて彼女は溫い夫の理解にめぐまれて、一方には夫の病氣の看護と、洗ふが如き赤貧と戰ひながら筆を運んだが、彼女の代表作「池の藻屑」「月の行方」が成つたのは明和八年四十歲の時で、引續き物語「山の井」二十卷、歷史「笠(かさ)の舍(やどり)」五十五卷を書いた。これらの著述は彼女の名聲を頓に高めた。彥根の龍草廬、野村東皐その他諸家と交り、安永六年には、彥根、京都、難波播磨、紀伊、大和の各地を遊歷した。これらのことは「初午日記」に詳しく記してある。この頃は彼女の得意時代で、その五十の賀には諸國の名家から多くの詩歌を贈られた。小說「野中の清水」の文章假名遣について、本居宣長に難ぜられたが、これを反駁して從はなかつたこともある。彼女は多くの漢學者、詩人、高僧、俳人と親しくしたが、何故か宣長、久老の國學者には近づかなかつた。天明二年五十一歲の年、再び京都、播磨を遊歷し、「後午の日記」を書いてゐる。かくて晚年は連歌に精進し、平和な餘生を送つて文化三年七十五歲の高齡で世を去つた。

消ゆる身や言の葉の露野邊の雪

がその辭世である。

麗女の著作は前述の如く極めて多く、歴史類、物語類、紀行、雜錄を通じてほゞ四百卷に達する。その大部分は物語であるが、麗女の名聲は歴史物語の「池の藻屑」「月の行方」にあるので、純物語の創作家としてよりは、寧ろ史實の描寫に豐麗なる才筆をふるつて詩趣を横溢せしめた點に、彼女の特色があり、不朽の價値があるのである。兩書は三鏡の闕を補つたもので、「今鏡」が高倉・安德兩代を閉き「增鏡」が後醍醐天皇で止んでゐるのを、補ひ且書きついだものである。その他小說、連歌、俳句、漢詩、和歌に見るべきものが多く、書にもすぐれ、畫も亦巧みであつた。平安朝の如く才媛の輩出した女流文學奬勵時代でなく、いはゞ女子抑壓時代に生れて、これ程の才能を發揮したのは實に珍しい天才といふべきであり、且女性にして歴史に筆を染めたのは、前後にその比がないことも一異色である。

第五章　近松の作品に描かれたる女性

近松門左衞門　近松門左衞門は名は信盛、通稱を平馬と呼び、巢林子、平安堂、不移山人と號した。その遠祖は三條三位中將實次より出で、代々武を以て立つたが、彼の父

信義は分れ一家をなし、後浪人して京都に生を終つた。その長子智義は織田信長に仕へ、卅七歳で江戸に歿し、三男伊恒は醫術を修め、岡本百竹（一抱）と稱した。二男は門左衞門であつて、嘗て一條禪閤惠觀に仕へ、この間に古典の素養を得たやうである。後、職を辭して近江の近松寺（唐津の近松寺ともいふ）にて佛學を修めたと推定される。

その文學生活は古淨瑠璃に始り、後京の名優坂田藤十郎の爲に歌舞伎の脚本に筆を執り、一方大阪の竹本座の義太夫と協力し、淨瑠璃の面目を一新して、所謂時代物の諸作を創り、元祿十六年、劃期的作品である「曾根崎心中」を成し、世話物の端緒を開き、以後夥しい時代物世話物を生み出して、近世文學史上、最高峰の一として重ぜられる功績を擧げることが出來た。

近松の作品は時代物と世話物との二つに分れる。

時代物 は昔の歷史傳說を取扱つたもので、材料を歷史上の事件人物にとり、それに奔放なる想像を加へたものである。時代物九十餘篇について、その取扱はれてゐる題材を見るに、古くは素盞嗚尊の大蛇退治のやうな神代を世界としたのを初として「日本武尊吾妻鏡」から「天智天皇」「大織冠」といふ風に奈良時代迄のものが約八篇、續いて平安時代のものが約十三篇、次に源平武將時代から鎌倉時代迄のものは最も多く、時代物總數の約半數を占め

てゐる。次に太平記種が六篇、室町時代が約十二篇、それから外國種として「國姓爺合戰」「釋迦如來誕生會」等が見られる。

又國文學の古典に負ふ處も實に多く、「伊勢物語」「源氏物語」「徒然草」「方丈記」等を始めとし、「平家物語」「源平盛衰記」「太平記」等の軍記物から謠曲は勿論、お伽草子、古淨瑠璃から下つて歌舞伎芝居といふやうに、當時としては手の屆く限り、殆んどあらゆる方面から材料を捕へ來つてゐる。しかも、それら古典をそのまゝそつくり取入れるといふ事は尠く、一度自己の詩囊に貯へ、自己の主觀を濾過した上で、作品中に適宜按配するといふ行き方である。「國姓爺合戰」「曾我會稽山」「出世景清」等は時代物の最もすぐれたものである。

世話物 は時代物と違つて、當時の社會に實際に起つた事件を材料としたもので、一種の社會劇である。世話物は元祿十六年彼が五十一歲の時に最初の作「曾根崎心中」を作つてから、七十歲の享保七年の作「心中宵庚申」に至る迄の二十年間に、二十四篇作つてゐる。量に於ては時代物に比して極めて尠いのであるが、この世話物が近松の藝術的生涯を不朽ならしめてゐる。

さてこの二十四篇の世話淨瑠璃は、その取扱はれてゐる事件の內容は、すべて今日の新聞の三

而種程度のものである。この中の「槍權三重帷子」と「堀川波の鼓」とを除いては、すべて町人社會の出來事を脚色したもので、殊に大阪の町人間に起つたものが多いのである。そして女主人公又は副主人公格の重い人物として遊女の出るものが十三篇に及び、又結果が心中に終るもの、所謂心中物が十一篇あつて、この中遊女との心中が六篇（曾根崎心中、心中重井筒、心中二枚繪草紙、心中刄は氷の朔日、心中天の網島）ある。又心中はしないが、その作中の主人公が遊女に溺れて悲劇に終るものには、爲替金の封印を切つて私消した爲に刑罰に處せられる「冥途の飛脚」があり、海賊の群に投じて悲慘な最後を遂げる「博多小女郎浪枕」があり、大切な刀の中身をすりかへた爲に叔母に自害をさせる「長町女腹切」があり、勘當されて借金の返濟に窮した揚句、金を貸さないといつて貞實な人妻を虐殺する「女殺油地獄」がある。又悲劇的の結果には至らないが、遊女に關係して波瀾葛藤を生むものゝ中には、千三百石取の侍が馬方と迄成下る「丹波與作」があり、大富豪が闕所になる「淀鯉出世瀧德」があり、大富豪の息子が勘當されて落魄する「夕霧阿波鳴門」などがある。その他姦通悲劇に「堀川波鼓」「大經師昔曆」の三曲があり、姑や繼母との折合が惡くて女夫心中するものに、「卯月の紅葉」「卯月の潤色」「心中宵庚申」などがある。

これら世話物に出て來る人物は、時代物に見るやうな、歴史的に著名な英雄豪傑忠臣烈婦ではな

くて、觀客と同じ時代の、極めて平凡な弱い缺陷の多い人々である。それが金と酒と色とに溺れ易い時代に、、その誘惑にかゝり易い境遇に置かれ、その誘惑にかゝり、その風潮に推流されて本能の慾求を遂げようとする。人情を徹底させようとする。しかしそこには世間の義理といふ柵があり、又彼等を陷れようとする惡人もある。こゝに事件は複雜となり、波瀾は多くなる。かうした當時の世相を如實に描き、義理と人情との葛藤に苦しむ當時の人々の姿を、さながらに寫したのが近松の世話淨瑠璃である。

義理と人情

近松は徹底的に義理と人情とに生きた藝術家であるといはれる。

一體近世生活はなか〳〵複雜なものであるが、これを概括的に見ると、義理と人情の生活であつたといへる。義理といふのは、その字義からすれば、人の行ふべき正しき道である。その時代の社會が認めた正しい道である。義理を重んずるとは、畢竟社會に對する道德習慣を尊重するといふことに他ならない。

元來義理といふ觀念は、戰國時代に於ける主從間の情誼に發したものであつて、戰場に於て苦樂を共にする間に主は從を保護し、從は主の知遇に感激し、身命を鴻毛の輕きに置かうとする所に生れたものである。然るに泰平が打續いて武士と町人とが接觸し、武士風の感化が町人の上に

及ぶに從つて、義理の觀念も一般に擴つて行つた。利慾一遍であつた町人も教養を積むにつれて、武士道に對して商人道ともいふべきものを立て、世間に對して恥を思ひ、面目を重んずる風も武士に劣らないやうになつた。近松は世話物に於て町人の義理を描いてゐるが、親子でありながら親子の名乘りをあげないといふ話でも、思ふ男を互に讓り合ふといふ話でも、皆浮世の義理を考へるからである。町人の一分を立てる爲には、戀しい女も斷念し、欲しい金も斷らなければならぬ。世間を憚り外聞を思ふのは、社會的な規範に追隨することであつて、武士的な道義が町人の間に扶殖された結果であるに相違ない。

然るに抽象化された義理の觀念は、往々にして人情の自然と背反する結果を示すに至る。生活が義理を中心として形式化するに從つて、生活の內面に起つて來るのが、義理と人情の葛藤である。社會の是とし規範とする所に從つて生きようとすれば、自己を滿足させることが出來ず、自己を滿足させようとすれば、社會に背かねばならない。社會の規範と、自己の本能欲求及び人情との間に、矛盾が生じ、葛藤が生じ、衝突となるや、そこに義理と人情との葛藤が生じ、それが色々な悲劇の原因となるのである。

近松の生存してゐた元祿時代は、我が國近代の文化史上、さま〲の點で、最も華かな、最も生

氣ある、最も潑溂たる解放の時代であつた。昇平の樂しみに醉ひしれて、滿ち足りた生活の悦に我を忘れ、この世を我が世と觀じ、思ふまゝに望むまゝに生きたのが元祿の世の人々であつた。かうした奔放なる情意の世界は、必然的に社會の規範と衝突するものが多かつた。そこに幾多の悲劇が生れた。

當時の小說、歌舞伎、淨瑠璃等は、いづれもこの義理と人情の葛藤から生じた悲劇的事件を取扱つてゐるが、近松も亦これを主題として、元祿世相を遺憾なく描破した。しかしながら、同じく義理と人情の葛藤を描きながらも、時代物と世話物とでは、その取扱に大きな相違がある。描かれてゐる人物を比較して見れば、兩者を通じて本質的には類型的であり、共通性を有する者が多いのであつて、何れも義理と體面とを重んじてゐる。しかしこれが人情との葛藤を來した場合になると、時代物の武士及びそれをめぐる女性の多くは、人情を殺して節義を生してゐる。卽ち節義のためには、肉身の者迄も犧牲にして身を捧げるのである。時代物の中には、義のために恩愛を捨て、生命をも捨てゝ、主君や夫の爲に殉じようとする可憐な男女が屢々現れて來る。所が世話物、特に心中物に現れた人物の取る道は、その反對である。卽ち義理を人情の犧牲にしてゐる。義理は大切である。しかし人情は時としてより尊く、より深く人間の本質に基づき、より普遍

的永久的である。この人情といふものを、義理との葛藤によつて、一層印象を深くさせるやうに描寫したのが、近松世話物の眞髓であつて、こゝに近松の藝術の永久性があるといはれてゐる。

時代物の女性

時代物に描かれた女性として注意すべきものは少くないが、その代表的のものとして、「國姓爺合戰」に描かれた女性について、義理と人情に苦しむ姿を考察してみよう。

「國姓爺合戰」は近松時代物の代表作の一つで、正德五年彼が六十三歲の時、竹本座で上演したものである。右將軍李蹈天が韃靼に通じて明帝を滅したので、大司馬將軍吳三桂は王を抱いて九仙山に隱れ、皇妹梅檀皇女は日本に漂着する。そこで明の逐臣鄭芝龍が長崎で擧げた一子和唐内及び其母日本人を伴ひて本國に赴き、前妻の女婿甘輝をかたらひ、韃靼王を破つて明朝を再興するといふのがその荒筋である。この作は量が多いのみならず、場面の變化は自由自在で、人物の配合もよく、三年越し十七ケ月興行といふレコード破りの好評を得た作である。この作中で最もよく描かれてゐるのは、和唐内の母と、錦祥女の二人の女性で、夫へのつとめ、父への愛情、繼母への義理、異母弟への親しみ、それらの錯綜した錦祥女の心持は、實に心憎いまでに描きつくされてゐる。

淨瑠璃として最もすぐれた場面は、三段目獅子城の場であるが、金平張の和藤內と甘輝の武士氣質、錦祥女對母親の義理の愁歎等の戲曲的錯綜が如何にも巧に描かれ、舞臺裝置の名案と相俟つて、非常な成功を收めたのである。

千里が竹で武勇をあらはした和藤內親子は、無事に相會して、女婿甘輝の力を借りようと、甘輝が折ふし韃靼王に召されて留守の處へ訪ねつける。甘輝の妻錦祥女は騷ぐ士卒を制して、樓門に上り鄭芝龍老一官に向つて、父とはなつかしい、されど證據を見せて貰ひたいといふ。父は一とせ明を去る時、わが形を繪にして乳母の許に殘して置いたがといへば、その詞がはや證據と、肌につけてゐた繪を取出し、月に映らふ父の顏を柄つきの鏡にうつしてそれを見分け、樓上で嬉し泣きをする。こゝが樓門の場で、情景兼ね備る處。夫の留守に男は入れられぬとあつて、母は自ら進んで縛に就き、錦祥女がいひわけの途を立てゝ城に入る。まもなく甘輝は歸つて珍しい親子の對面、母は辭を盡して賴み、甘輝は力を貸すにしても、妻を刺殺して女の緣に引かれざるを示さうとし、母は之をかばひ、互に義理の立てあひがあつて結局相談が出來ず、さらば紅を流さうと錦祥女が化粧室に入る。母が城に入る時、事が出來れば白粉をといて流し、破れゝば紅を解いて流すと約束をして來たのである。城外の和藤內は岸の邊に立つて紅白何れが流れ來るかと待つ處に、紅の流れ來るを見て、怒つて門內に躍入り、甘輝に向つて摑みかゝる。

錦祥女（鳥居清忠筆）

重の井さ三吉（劇）

人形芝居の紙治内

此時錦祥女は胸を開いて紅の水上を示し、母もその九寸五分は四百餘州を治むる基、此上自分が存らへては初の詞がうそになるとて、それを抜いてわが咽喉につき立て、和藤内が甘輝に擁護せられ、延平王國性爺鄭成功と改名して大將軍となつた姿を見上げて、母と錦祥女とは息を引きとる。

これが第三段の概要であるが、名文としてよく引用される、樓門に於ける錦祥女の言葉は、

「さては誠の父上か、なう懐しや戀しや、母は冥途の苦の下、日本とやらんに父上あるとばかりにて、便を聞かんしるべもなく、東の果と聞くからに、明れば朝日を父ぞと拜み、暮れば世界の圖を開き、是は唐土是は日本、父はこゝにましますよ、と繪圖では近い樣なれど、三千餘里の彼方とや、この世の對面思ひ斷へ、若しや冥途で逢ふこともと、死なぬ先から來世を待ち、歎き暮し泣明し、廿年の夜晝は、我が身さへ辛かりし、よう生きてゐて下さつて、父を拜む有難や。」

實に情理を盡した金玉の文字である。

又甘輝が、義理にからまれていとしの妻を殺さうとする時、錦祥女は喜んで刄に倒れようとするのを、和藤内の母がとめる言葉も、

「なう悲しい事いふ人や、殊に御身は娑婆と冥途に親三人、殘り二人の父母は產落した大恩あり、中に一人の此母は、憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず、今爰で死なせては、日本

の繼母が、三千里隔てたる唐土の繼子を惡んで見殺しに殺せしと、我が身の恥ばかりかは、普く口々に日本人は邪慳なりと國の名を引出すは、我が日本の恥ぞかし。」

といふのであり、その後自ら胸を刺した錦祥女が苦しい息の下からの言葉は、

「母上は日本の國の恥を思召し、殺すまいとなさるれど、我が命を惜しみて親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥と、かうなる上は女に心ひかさるゝ、人の謗はよもあるまじ、なう甘輝殿、親兄弟の味方して、力ともなつて給べ。」

といふ。いづれも實に立派な、貴くも美しい心持の溢れ出たものである。而してこの二人の女性の自害は、唯親戚關係とか夫婦關係とかの「私」の義理のためばかりでなく、「日本の恥」「唐土の恥」をも思ふ愛國の衷情を含んでゐるのであつて、今日もなほ我々の胸を打つものがある。殊に母親は、繼母の日本人が繼娘の支那人を憐んで見殺しにしたといはれる事は、單に自己のみならず、日本國としての恥辱となし、男性的な體面から繼娘の後を追つて自殺するのである。當時の母性として、國家的の意義から死を選ばせた事は、母性の位置の擴大であり、武家の妻として、國際的意義を理解しての結果である。

その他時代物に於ては、母性が義理人情の葛藤に喘ぎ、進退共に谷つた場合には、多く母は自

害することによつて行詰りを打開する。「信州川中島合戰」の勘介の母は、嫁のお勝と娘の唐衣とが斬合ふ白刄二筋に我が身を貫き、勘介に對する母性愛、謙信や婿の山城守への義理の二者を全うするのである。

世話物の女性

世話物の女性として「國姓爺合戰」の錦祥女の母に類似したものに、「丹波與作待夜小室節」の重の井がある。馬子の三吉は、由留木家の息女しらべ姫の乳人重の井の實子で、嘗て千三百石取であつた伊達與作の倅であつた。重の井は我が子と知らず殿中でこの馬子に會ひ、三吉に母と縋られた時、彼女の心中には人情と體面との大きな葛藤があつた。

見れば見るほど我が子の與之助、守袋も覺えあり、飛びついて抱き入れたく氣はせけども、あつあ大事の御奉公、養ひ君の御名の疵、詐つて叱らうか、いや可愛げにさうもなるまい。まあちよつと抱きたい。あゝどうしようと、百千色の憂き涙、双つの眼には保ちかね、咽び沈んでゐたりしが、いや／＼我が子ながらもさかしいもの、詐つて誠とせず、母を心の穢いものとさげすまるゝも情なし、譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと、涙拭うて氣を靜め「こゝへ來い。與之助」と引き寄せて兩手をとり、

今の場合母と呼ばせることが出來ない理由を語つて得心させようと、與作に對する夫婦の愛情も、三吉への母性愛をも犧牲にし、主君への義理のため、飽かぬ別をしたことを涙と共に語つた。

子は生れつき賢くて、聞き分けあるほどなほ泣き入り、「悲しい唄をきゝました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟のことなれば、母様にさへ逢うたらば、父様も出世をなさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。」といへば、ちやつと口おさへ「あゝ勿體ない、その乳兄弟はいはぬこと、姫君様は關東へ養子嫁御にお下り、高いも低いも姫御前は大事のもの、先は他人の世間體、三吉といふ馬追が乳兄弟にあるなどゝ、どう妨げにならうやら、蟻の穴から堤も崩れる。輕いやうで重いこと、ひそ〳〵いうて人も聞く、先づ早う出てくれ。」と泣く〳〵いへば「あゝ母様あんまり遠慮すぎました。先づ言うて見て下され。」「まだいひ居るか、聞分けない。夫のこと、我が子のこと、母に如才があるものか、合點のわるい聞分けない。」と制するうちに奥よりも「お乳の人どこにぞ、御前から召します。」と呼ばはれば「あれ聞きや、人が來る、出てたも、」と手を取つて引き出す。

不便や三吉しく〳〵涙、頬冠して目を隱し、沓見まつべて腰につけ、見すぼらしげな後影、「こりや、ま一度こちら向きや、山川で怪我しやんな、雨風、雪降、夜道には、腹が痛いと作病起し、二日も三日も休んで煩はぬやうにしてたもや、毒なもの喰はずに、腹や痲疹(はしか)の用心しや。可愛のなりや、いたいたしや、千三百石の代取が何の罪ぞ、咎ぞ」と式代の段箱に投伏せて歎きしが、懷中の有合一歩十三服紗に包み「これたしなみに持つて居や」と涙ながらに渡さるゝ、三吉見返り恨めしげに「母でもない、子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ、その一歩もいらぬ、馬方こそすれ、伊達の與作が惣

領ぢや、母樣でもない他人に金貰はう筈がない、えゝ胴慾な母樣、覺えて居さつしやれ。」とわつと泣き出すその有樣、母は魂消え入りて、「養ひ君お家の御恩恩はずば、さて一人子を手放して何の遣らうぞ、奉公の身の淺ましや。」と悶え焦れて歎きける。

と熱湯を呑む思ひに悶えこがれた。しかし結局、「養ひ君お家の御恩を思うて」奉公の身のあさましさをかこちながらも、義理の道を辿つて行くのである。武士的敎養の下に育つた重の井は、人情を殺して義理につかなければならなかつた。そこにいたましい悲劇があつた。

しかし、「女殺油地獄」に描かれた與兵衞の母お澤は、情にもろい典型的の町家の母であつた。不良青年として人も世も指彈する子に、夫や世間に氣兼しつゝも、母としての慈愛の限りをつくしてゐる。入夫で、與兵衞の繼父の德兵衞には、妻としての義理づくから與兵衞を勘當したが、夫の眼をぬすんで時々金品を惠んでゐた。

或る夜――德兵衞は以前の主人の子で、今はなさぬ仲の與兵衞に對する義理からして、女房お澤に隱れて同職なる豐島屋の主婦お吉を訪ねて、勘當した與兵衞に小遣錢を渡してくれと依賴する。するとそこへ女房お澤も、夫德兵衞に對する義理から、與兵衞に惠む金品の依賴に、これ又內密に訪ねて來たが、はからずも夫とパツタリ顏を合せてしまふ。

澤「むゝ又しても與兵衞めがことくやみにか、いかにまゝしい子なればとて、餘りに義理すぎた。眞實の母が追出すからは此方の名の立つことはない。この三百の錢のらめにやるのか、つね〲身をひづめ始末して、あいつにやるは淵へ棄てるも同然、その甘やかしが皆蒔飼、この母はさうではない。さあ勘當と一言口を出るがそれ限り、紙衣(かみこ)着て河へはまらうが、油塗つて火にくばらうが、うぬが三昧、惡人めに氣を奪はれ、女房や娘は何になれ、サア〳〵先へ往なしやれ。」と引立つる袖を振放し「えゝ女房(かゝ)むごいぞや、さうでない。生れ立ちから親はない。子が年寄つて親となる。親の始は皆人の子、子は親の慈悲で立ち、親は我が子の孝で立つ、この德兵衞は果報少く、今生で人は使はずとも、いつでも相果てし時の葬禮には、他人の野送り百人より、兄弟の男子に先輿後輿かゝれて、あつばれ死光りやらうと思うたに、子はありながらそのかひなく、無緣の手にかゝらうより、いつそ行倒れの釋迦荷なひがましでおじやるわ。」と又むせかへるぞあはれなる。「ア與兵衞めばかりが子ではない。兄太兵衞、娘なれどもおかちは此方の子でないか。サアサア早うお先へ、」と押出す。「ハテ往ぬるなら連れ立たう。そなたもおじや。」と引立つる母の袷の懷より、板間へぐわらりと落ちたは何ぞ。綜(ちまき)一束に錢五百「なう情なや恥かし。」と我が身を蔽ひ押隱し、聲を上げ、「德兵衞殿、眞平許して下され。これは內の掛の寄り、與兵衞めにやりたいばかり、私が五百盜んだ。二十年連添ふうち、隔心隔てのあるやうに情ない。たとへあの惡人めが、お談義に聽くやうな殊利槃特の阿房でも、阿闍世太子の鬼子でも、母の身で何の憎からう。いかなる

悪業悪縁が、胎内に宿つてあの通りと思へばふびんさ、可愛さは、父親の一倍なれども、母が可愛い顔しては、隔てた心に、あんまり母があいだてない。强ばかり强うて、いよ〱心が直らぬと、さぞ憎まるゝは必定と、わざと憎い顔して、打つゝたゝいつ追出すの勘當のと、むごうつらう當りしは、繼父の此方に可愛がつてもらひたさ。是も女の廻り智慧、許して下され德兵衛殿、私にかくしてあの錢をやつて下さる志、詞ではけんけんと慳貪いうたれど、心で三度戴きし、何をかくさう、あいつは立派すきもするやつ、取分け祝月。鬢附元結をとゝのへ人交りもしたからう。生れて此の方節句節句、祝儀缺かぬに此の月ばかり、身祝もしてやりたさ、見苦しい此恥辱をさらすも、お吉樣賴んで屆けん爲、まだこの上に根性のなほる藥には、母が生肝煎じて飮ませいといふ醫者あらば、身を八ツ裂きも厭はねども、一生夫の錢金、一文半錢遣へぬ身が、子故の闇に迷はされ盗して顯はれた、恥かしうござる。」

とばかりわつと泣き伏すのであつた。何たる深刻な言葉であらう。「盗みする子は憎からで繩かくる人が怨めしい。」の親心より一入深まつてゐる。

次に、母が幼少の子を愛撫する樣も、作中に屢々描かれてゐる。與兵衛に殺害される豐島屋の女房お吉が、三人の娘を愛撫する樣、特に與兵衛の兇刄に油賣場で倒れる時に、

「今死んでは年はもいかぬ三人の子が流浪する。それが可愛いゝ、死にともない。金もいる程持つてご

ざれ、助けて下され與兵衞樣、」

と歎願する樣もいたましい。

又老年の母が子の愛にあらゆる恥辱を忍ぶ樣は「山崎與次兵衞壽の門松」に描かれてゐる。傾城吾妻を見染めた難波屋與平は、零落した身で如何とも爲し難く懊惱憔悴する。これを見兼ねた七十何歲かの母親は、與平を伴つて吾妻に會ひ、我が家の由緒から伜與平の懊惱を語り、情を商賣にする吾妻から、盃一ついたゞかせて、それで思ひ切らせたいと懇願する。若し母の一命が一夜の傾城代になるならば、直ぐに死んでも見せると叫ぶのは「女殺油地獄」の根生の直る藥に母の生肝が必要ならば、身を八つ裂にされても厭はぬ、とのお澤の心と同一であつて、母性愛の極致であらう。

以上が近松によつて描かれた母親の代表的のものであるが、次に妻について考察して見よう。

一體夫婦の愛は、近松の世話物では妻の側を主とするものが多い。「心中重井筒」のおたつ、「心中天の網島」のおさん「壽の門松」のお菊などはその代表的なもので、いづれにも妻の夫に對する、献身的な人格的な愛がよく表されてゐる。卽ち、不行跡のある夫、自分を裏切つた夫に對して、渾身の愛を捧げ得るのは、夫の人格をよく信じてゐるものでなければ出來難いことで、深く

夫を信じ、夫を愛するものがあればこそ、始めてかうした獻身的な眞心が湧いたので、尊い、美しい、氣高いものを感ぜしめる。例へば「重井筒」のおたつが、夫德兵衞が、遊女お房に迷うて、不都合にも自分の印を盜用して銀を借り、明かに自分を裏切つてゐるにも拘らず、あくまでも養父の前で夫を庇護し、然も夫がお房と情死しようとして家出した時は、終夜探し求めて、遂に見出し得ないで、失望し歎じた言葉に、

「疾くに命はもうない人、淺ましや、悲しやな、女房子のない人ならば殺すまい。死ぬまいと嘸や最後の悔み言。お房が恨みも思ひやる。思へば妾がある故に、人二人殺すなよ。」

と悲しみ悔んでゐるが、此は義理一遍のものでなく、夫を信じ愛してゐる心より出てゐるものである。

しかし妻の眞心の最も強く出てゐるのは「天の網島」のおさんである。

「天の網島」は、近松の六十八歲といふ生活の圓熟期に生れた作で、近松の世話物中戀愛のみでなく、親子、兄弟、夫婦の愛を交へ、更に女同志の義理を加へて人情の諸相を寫し、義理と人情との葛藤の複雜な經路を語つた悲劇で、彼の作風の極致を示したものである。この作は紙屋治兵衞と遊女小春との相思の仲が人の世の義理に妨げられて、遂に二人の死に悲劇の幕を閉づる經過

を巨細にうつし出し、人情と義理の相剋する悲しい人生の一面を描いたものであるが、中でも治兵衛の愛人小春と、その妻おさんの二人の女性を點出して、女性のやさしい胸にやどるやるせなさを如實に傳へ、かすかにゆれる女性心理の微妙な動きをしみ〴〵と味はせるものである。

〔天の網島梗概〕

上の卷は河庄の場である。曾根崎新地紀の國屋の抱へ小春は、三年越の深間、紙屋治兵衛との仲を堰かれて、窶れ果てた姿で今宵は侍の客に河庄へ呼ばれる。治兵衛に張り合ふ太兵衛が、友達連れで、なまいだ坊主に治兵衛の惡口を叩かせながら入り込んだが、小春に撥ねられた上、門口に現れた侍客を治兵衛と誤り、這々の體で逃げ出す。小春は客に問はれて、一旦は治兵衛と最後の約束をしたが、是非死を逃れたいから、それ迄の客になつてくれと賴む。その時の小春は、一方には治兵衛との死を誓ひ、同時に治兵衛の妻おさんから、內密に治兵衛との手を切つてくれといふ義理の賴みを受けてゐたのである。この時治兵衛は、逢ふ瀨を最後の日とする約束から、今宵も格子先に來かゝつたが、偶々この言葉を耳にするや、怒つて障子越しに小春を刺したが、座が遠かつたので、侍のために兩手をくゝられてしまつた。これを面罵したぞめき戾りの太兵衛を逐ひ遣つた侍は、始めて頭巾を脫ぐ。實は治兵衛の兄粉屋の孫右衛門がやつした姿であつた。弟思ひの孫右衛門は、家を外への治兵衛から、どうかして小春を引き放さうとして、深編

笠の武士客に化けて來たのである。小春の變心を憤る弟をたしなめて、互の起請を返さして連れ戻る。小春から孫右衛門の受取つた起請の中には、外に女の文があつた。治兵衛女房から小春に宛てたものであつた。

中の卷は治兵衛の家の場である。炬燵に這入つて物思ひに耽つてゐる治兵衛のやつれた顏を見て、女房おさんが「まだ曾根崎を忘れずか。」と輕い悋氣を起す。兄孫右衛門の盡力で一度家に納つた治兵衛に對して、いろ〳〵とおさんがかき口說くのである。「引起し引立て炬燵のやぐらにつきすゑ、顏つく〴〵と打ながめ、あんまりじや治兵衛殿、」以下の悲痛な詞にはおさんの貞實が遺憾なく寫し出されてゐる。「なかしやんせ〳〵その淚が蜆川へ流れて、小春のくんでのみやらうぞ。」に至つて最高調に達する。治兵衛はもう小春に未練のないことを告白する。けれども戀敵の太兵衛奴に小春が請け出されるのが口惜しい、男が立たぬと失望する。それを聞いたおさんの態度は急に一變する。おさんの眼の前には獨り死を決してゐる小春の姿がはつきりと映つたのである。「小春は死にやるぞや。」のおさんの言葉に、治兵衛は怪訝な顏をするので「小春どのに無心中斧子程もなけれども、二人の手を切らせしは此さんがからくり……」と、おさんは事の次第をば夫治兵衛の前に恥を忍んで打ち明ける。そして小春を殺しては女同士の義理が立たぬから、身請をしてやつてくれと治兵衛に縋りつく。そこで有金の外に衣類を纏めて質に渡さうと企てた。そこへ來合せたのが舅五左衛門で、始終を見てとり、娘おさんを添はせて置けずと、慕ふ子供を拂ひのけて、おさん

を連れて去つた。

下の卷は大和屋の場から道行、大長寺の心中となる。おさんに出て行かれた治兵衛、小春の眞實心を知つた治兵衛の行手には、たゞ一筋道――死があるのみである。小春と諜し合せた治兵衛は、商用のためと稱して、夜更けて獨り歸つて行つた。その跡へ、孫右衛門が甥の勘太郎を丁稚に負はせて、弟の安否を氣遣つて尋ねて來た。すご〳〵歸る兄の姿を物蔭から拜んだ治兵衛は、やがて小春を誘ひ出して足をかぎりに走る。そして網島の大長寺で、晨朝の鐘の音に最後を遂げた。おさんに義理を立て、二人は黑髮を切つて――。

以上が「天の網島」の梗概である。この作品は一口に小春治兵衛といふが、寧ろおさんとの三人の三角關係とも稱すべきものであつて、おさんあるがために他の二人も引立つてくるのである。おさんは堅い義理と溫い人情に生きた最もよき妻として、女性の模範として寫されてゐる。夫治兵衛の內を外への小春通ひをぢつと默認してゐたおさんの心情は察するに餘りあるが、一家の財政も傾き、小春と心中するらしい氣振りを見てとつては、遂に戀敵の小春に對して治兵衛と手を切つてくれと賴み入るのである。おさんは妻として深く夫を信じ愛してゐた上に、夫の放埒な生活を止めなければならない妻としての義理に立つてゐた。それ故恥を忍んで小春に治兵衛と緣を

切つてくれる樣に賴んだのである。自分の夫を橫取りされた者に對して頭を下げて賴み入るとは、よく〳〵恥を忍んでの上のことでなければならぬ。小春はおさんのこの態度に感じ入つたのである。そして治兵衞と緣切ることを誓つたのである。治兵衞と手を切ることは小春にとつては死の宣告にも等しいのであるが、それを決行せんと誓つたのである。言ふまでもなくこれはおさんに對する義理のためである。それ故小春は上の卷の河庄の場の孫右衞門立合の上で、命にもかへ難い治兵衞を欺き、いとしい戀人の口から畜生と罵られ、足蹴にまでされながら、一言もその理由を辯解せず、唯おさんの切なる賴みを容れ、自分の義理を果さうとした。しかし恬然として太兵衞に身請されることは、義理堅い彼女の甘んじ得ることでない。そこで美しい戀に殉ずる女となる爲に殘された道は、死より外にないのであつたから、單身死なうとさへ決心したのである。ここに義理を守る立派な女としての小春の面影がうつされてゐる。それと同樣に、おさんも亦、中の卷紙治の家の場で、夫治兵衞の言葉からふと小春の死を豫覺しては、遂に斷じて言ふまいと決心してゐたこと、卽ちおさんに賴み入つた自分のからくりを、治兵衞の前に恥を忍んで告白してしまふのである。「それなればこの小春死ぬるぞ、ああ悲しや、この人を殺しては女どしの義理立たぬ。まづこなさん早ういて、どうぞ殺して下さるな。」かう治兵衞にすがりついて、おさんは太

兵衞に請出さるゝ前に小春を救つてくれと歎願するのであるが、是いふまでもなくおさんの小春に對する義理である。しかし運命は小春治兵衞を驅つて心中せしめるのであるが、小春は最後迄おさんに義理立をしてゐる。

「私が道々思ふにも、二人が死顏並べて、小春と治兵衞と心中と沙汰あらば、おさんさまより頼みにて殺してくれるな殺すまい、あいさつ切ると取誓せしその文を反古にし、大事の男を唆しての心中は、流石一座流れの勤めの者、義理知らず僞り者と、世の人千人萬人より、おさんさま一人のさげしみ、恨みそねみもさぞと思ひやり、未來の迷ひは是一つ……」

とおさんに對して義理立てしてゐる。

かやうに「天の網島」はおさんと小春との間の女同志の義理の立てあひを根柢にして、その間に叔母や兄の愛の細やかさと妻のまめやかさと、又局面轉換の具に供した妻の父の冷酷さとが巧妙至極に描き出されて、その進行の自然なことは眞に傑作といふに恥ぢないのであるが、殊におさん小春二人のやさしい胸にやどるやるせなさ、義理人情の柵に泣くいたましい姿は、千古の後讀者の涙をしぼるものがある。

戀愛

次に近松の作品に描かれた戀愛について述べてみよう。一言にして言へば近松世話物の男女主人公の戀愛は眞に眞摯熱烈なものであつた。その完全な實現のためには、自己存在の一切を擧げても惜しまないといふほど強く烈しいものであつた。例へば「五十年忌歌念佛」のお夏は「親より子より我身よりいとし殿御のいとほしや。」と淸十郞に對する熱愛の情を示し、「今宮心中」のおきさは「私や其心に打込んで親兄弟も捨てたぞや、在所は生れ故鄕なり、兩親の傍にゐるものが、往きともない筈はない。何のゆかりに大阪に執心はなけれども、此方といふ人に離れるのが悲しさに、お主を欺し親に背き身を狂はす心を、可愛やともいはずに面白さうに拗言、これ死んで見せうか死兼ねはしませぬ。」と二郞兵衞に迫り、「心中刄は氷の朔日」の小かんは「親のことを思ふやら、こなさんのことを思ふやら、心を推して下さんせ……これではすはといふ時に、國へ心が引かされて、未練の出來ないものでもなし、こなさまに逢ひ次第死んでのけうと覺悟をすへ、髮剃は身を離さぬ、これ見さんせ。」と、母親を棄てゝも男につく決心を表してゐる。「卯月の紅葉」のお龜の夫に對するや、「男故なら命も身代も取つて行け。」といふ深い愛を持つてゐる。「曾根崎心中」のお初は、「逢ふに逢はれぬその時は、この世ばかりの約束か、さうした例のないではなし。死ぬるをたかの死出の山。」というてゐる。「長町女腹切」の

お花は、半七と手を切れといふ養父の前に斷然としてこれを拒絶し、「思ふ男に添はれぬからは殺しやく」と身を投出して、棄て鉢になるほどその情には熱が籠つてゐる。「夕霧阿波鳴門」の夕霧は伊左衛門に逢へなくなつて、思ひ迫つて九死の床に就くに至つた女である。いづれを見ても、全身を燃燒させねば已まぬやうな熱烈な愛情を見せてゐる。心と心を許し合つた女の爲には、誠心を捧げた男の爲には、時に親も子も浮世の義理も、命さへも捨てゝ厭はなかつた情熱の人、これが元祿町人の眞の面影である。然し乍ら浮世の生活に於ては、この奔放不羈の感情の生活が、どうしてそのまゝに許されよう。現實の生活は複雜なもので、唯戀愛的熱情、盲目的情熱のみをもつては生きて行けない。金といひ、義理といひ、そこには種々の現實的障害が横たはつてゐる。從つて燃え上る情熱の趣くまゝに何物をも考へない人情の世界は、義理の世界に於ては到底許され得ない。こゝに義理と人情との衝突が生れる。この義理と人情とが衝突し矛盾する時、義理につくべきか、人情に走るべきか、その選擇に迷ひ、遂に死を以て凡てを解決しようとするやうな深刻な苦悶、沈痛な悲劇が生れる。この悲劇を傳へ、哀話を語つたのが近松の世話淨瑠璃であるといふことが出來る。

第六章　西鶴の作品に描かれたる女性

西鶴の作品は、世に知られ、又信ぜらるゝものについて分類すれば、大體に於て好色物、町人物、武家物の三種に分つことが出來る。好色物は當時の町人生活の中、性慾の基礎となつた享樂生活の一面をうつし、町人物は勤儉貯蓄唯一生は富の蓄積に在りとし、營々として働く町人の姿を描き、武家物は主として當時の武士の武勇や節義を寫し乍ら、その間に意志と感情との葛藤を描き、或は人情の機微を穿つてゐる。

今これらの作品を通して、作中に描かれた女性の姿を見ようとするのであるが、西鶴の作品中女性そのものを主人公としてゐる作品は、比較的少い。「五人女」と「一代女」の二つを見出すのみである。無論この二作が彼の女性描寫の全部を盡してゐるものではない。「好色一代男」以下の好色本の數々と、其他の多くの浮世草紙にも、鋭い女性觀察の幾斷面かは認められる。殊に「一代男」以下の男性を主人公とした好色本に於ては、「五人女」や「一代女」には認め難い程の女性々格の多樣が描かれてゐるが、それらは姑く措いて、彼が描いた女が、果してどんなものであつ

たかを端的に知るには、やはり女其物を主人公とした、前記二作によつた方が便宜が多い。

好色一代女は、淪落の女の僞らざる懺悔錄である。堂上家の末流に生まれた美貌の息女が、初戀に懊惱して以來、六十五歳の老を見る迄に、愛慾の惱みと生活苦の爲に、一歩一歩と底知れぬ墮落の淵に落ちて行つた陰慘な好色生活を寫したものである。

京都の貧乏公卿の家に生れた容顔美しき彼女は、宮仕の中に一青年と戀して露はれ、不義は御家の御法度、といふ制裁の下にあはや手討にもならうとしたのを、奥方の御情に命を助かつて追ひ出された。これがその十三歳の時であつた。初戀に破れて、彼女の心臟が傷をうけてから、彼女は先づ藝人の仲間入をして、こゝに墮落沈淪の門は開かれた。十五歳の時某國主の寵妾となつたが間もなく御暇となり、十六歳の時偶々父の債務の爲に身を花柳界に沈むることゝなつて、一時は全盛の太夫となつたが、高家に生まれ、美貌を有したところから心驕慢に流れて次第に全盛は衰へ、天神に下され、空しく太夫全盛の時を追懷しつゝ不快に日を送る内、病にかゝつて容顔衰へ、遂に又一等を下され鹿戀となり、失望より自墮落となりいつか年明けても堅氣にかへらず、私娼の樣なことをなし、次第に糊口の煙を立てかねるやうになつて、益々墮落して人を欺くことを覺えるに至つた。　時堅氣となつたが、習慣性となつてしまつてゐるので、又情の趣くまゝに男に近づき、人を欺いては、生活の細き煙を立てゝ、次第に惡辣な手段を弄する事を覺

え、遂に惣嫁にまで下つて、路傍の人の袖引く乞食の如き身となり、後、羅漢像を見て人生の無常を歎じ、六十五歳になつて遂にこの道を思ひ立つて菩提を願ふ身となつた。――といふのが、「一代女」のごく荒筋である。

かやうに「一代女」は標題の示すやうに、女一代の閲歴には違ひないが、痛ましい淪落の女の懺悔錄の風格が強く、境遇といふ外的生活と、性といふ内部衝動とが經緯して、知らず〳〵人生のどん底へ落ちて行く薄命の女性の哀史である。彼女は人生の第一歩に於て踏迷つた人間であつた。浮華な周圍の空氣はその春の目覺を早からしめた。持つて生れた淫蕩の性格は事毎に刺戟せられて、果敢ない初戀の面影も忘れ果て、花に戲るゝ狂蝶の痴態を敢へてした。もし遊里の情趣に浸潤する事がなかつたならば、あれ程までに肉の歡樂に沈湎はしなかつたであらうが、一度染んだ廓の氣分は容易に拔けられなかつた。彼女がその後、幾度か手に觸れた幸福の鍵を取り逃したのも、この頽廢的性情の投影に外ならなかつた。そこに人間の弱味があり、性の悲哀がある。

以上のやうに「一代女」の一生は、「一代男」のそれの如く性慾の滿足を求むる心が基礎となつてゐるのではあるが、「一代男」が現實生活の情趣を求むる事に狂奔する代りに、「一代女」には生活の苦痛悲哀がある。强烈な媚樂の香と靡爛した官能の匂とに生を託したこの頽廢の人にも、「一

代男」に見えるやうな洒脫な遊戲的な分子は少く、時には懊惱の炎に身悶えする自己觀照の暗愁さへ汲みとられるのである。

又一面から見ると、「一代女」は、女性の淪落生活の一代の描寫であるが、宮仕、藝人の生活、華かな廓の生活、質實な主婦の生活、お針師といふやうに、當時の女性生活の殆んどあらゆる方面を塗る間につらぬく性慾生活が描かれてゐるのである。嚴密な意味でいへば、本書は無論一人の特に選ばれた女を描いたものではない。普遍的な女といふものゝ諸體容を、一人の女の生涯らしい排列に於て描いたものである。女性――特に遊女氣質のあらゆる斷面を「女」といふ一つの概念の中に、綜合的に描き上げたものといふことが出來る。而してこの女性性格の各斷面に、常に絡みついて離れないのが性慾であつた。從つて本書には、女性の情生活のあらゆる隅々の陰翳までが、微妙に描き出されてゐるといふことが出來るのである。

好色五人女　は、西鶴の好色物の傑作と稱せられるものであるが、此の作は當時喧傳せられた巷談街說の中で、若く美しい女性の悲戀、卽ちお夏淸十郎、樽屋おせん、おさん茂右衞門、八百屋お七、おまん源平衞の五つの戀愛事件を主題としたものである。

五人の中、お夏、お七、おまんの三人は未婚の女であり、おせん、おさんの二人は既婚の女で

あるが、そこに描かれた情生活は、「一代女」「一代男」のそれと比較して見る時、かなり趣の違ふ點が見受けられる、後者は主として遊里を中心にし、假設的な人物を配置したものであるが、前者は市井の男女を取扱ひ、且悉く事實に據つたものである。隨つて情生活の現れにも兩者の間に異同が見られるのである。先づ出て來る人物の性格が『五人女』では、いづれも柔和な物堅い生一本な性質を備へてゐる。淸十郎も茂右衞門も吉三郎も皆實直な溫和な男であつた。お夏もおせんもおさんもお七も共に物堅い素直なうぶな女であつた。かやうな男女の關係が「一代男」や「一代女」に現れたやうに赤裸々で放縱である筈がない。思ひを打ち明けるにも世と人を憚るやうないぢらしさがある。然しその戀愛に對する熱烈さに於ては彼等も亦やはり元祿の人々であつた。その性格について片岡良一氏は次のやうに言つてゐる。

この作に描かれた五人の女は、それ〲に果敢な強い性格を持つてゐる。といつて、それは無論所謂男性的な強さと同視さるべきものではない。所謂ヒロイズムの埒内に入れらるべきものでもない。たゞ恐ろしく燃え易い情熱を有つてゐて、然もその燃え易い情熱を、直ちに實行に移し得る强さが添つてゐるのである。だから一面非常に弱いことにもなる。動かされ易い點で――自己をしつかり把握してゐきれない點で弱いとも云へるのだ。たゞ、動かされた後では、挺でも動かぬ强さを見せるのだ。意地だ。意氣地だ。

向ふ見ずの意地つ張りだ。――かういふ強さは一面元祿といふ時代の反映でもある。燃え上る生の力に驅り立てられて、何處迄も進めるだけ進んだのが元祿の時代であり、その時代の人々の相であつた。彼等はたゞ張りと意地とに彼等の全存在をかけて、一往直前、些も他を顧る庇の反省がなかつた。さういふ時代の相が、西鶴作中の女性の性格にも反映してゐるのである。自ら彼等は戀にも果敢であつた。無反省であつた。激しい情熱に任せて、たゞ一向きに突貫したのだつた。だから彼女等の生活には理性がなかつた。思考がなかつた。彼女等の論理はたゞ只管感情の論理であつた――。

と、いみじくも穿つてゐるが、おせんの戀の動機にしても、お七の放火の動機にしても、そこには只焔のやうに渦卷く情熱と、その情熱によつて怪しくも生み出された出鱈目の理窟とがあるばかりである。彼女等は、云はゞ奔騰する情熱によつてのみ一切のことを處理したのである。

武家物の女性　好色物に於て、多くの遊女と戀を追ふに急な女とを描いた西鶴は、武家物に於ては、多くの家庭的な女性を描いた。そこには醜きが故に修養を積んで、夫の戰略武藝の修業を助ける男まさりの女もあつた。身分ある人の孫として、遊女となることの口惜しく、自ら食を斷つて死んだ淸純な乙女もあつた。艱苦のうちに子供を育てゝ敵討をさせた意志の女もあつた。總じて古來の貞女型に屬する女性が多いのであるが、その代表的のものを「武道傳

來記」の中より引いて見よう。

手塚林兵衛といふ武士が、誤解からであつたが、篠原文助といふ者に討たれたので、林兵衛の妻が、未だ乳飲子の一子林太郎を養育して敵を討つといふ話である。

身の悲しさにつけて、つれあひ林兵衛の面影を、現にも忘れはやらず、惡や其文助めを、林太郎成人して討たせ給へと、諸神に大願をかけて心の劍をけづり、利道の一念骨に通りて、此勢ひ、千尺の岩屋に籠り、七重の鐵門を構へたりとも安穩には置かじと、備後を忍び出で、林太郎を抱守りて、夜露汐風をいとはず、磯づたひ行くに。

先づかういふ强い心を持つた烈女、女丈夫が描かれてゐる。敵篠原文助も心ある者であつたので、大いに自分の罪を後悔し、林太郎が十四歳になつた時、進んでその刀に討たれた。處が文助の妻は良人の心を知らず、一途に林太郎母子を恨んで、早速その假宿に切り込んで行つた。その時の林太郎の母親の態度は實に立派なものであつた。即ち互に女同志の勝負であるからと、手助けをしようとする林太郎を制して置いて、見事に文助の女房を引き伏せて後、女を諭して、

「いかに女なればとて道理を聞き分け給へ。夫討たれての恨をいはゞ、自らこそ此方へ申すべけれ、もと林兵衛殿を文助討つて退き給ふを、林太郎が親の敵討てばとて、我等を共恨は不覺なり。文助殿もや

まり給ふ心ざしあらはれ、このたび討たれ給ふ首尾、流石武士の正道なり、討つも討たるゝも前生よりの因果、今もつて何か互に恨はなし、かく手に入れたれば御命取る事やすけれども、さりとは〳〵我は格別の心中、自らを殺し給ふが本意ならば、思ひのまゝにし給へ。」と、心の劍を捨てゝ至極を段々いひ給へば、

と云つてゐる。かくの如く、此の母は唯に烈女であるばかりでなく、理非分別の明かな賢婦人であつたのである。

併し元來極めて現實的であつた西鶴は、かうした理想的道德的な人物を描くには適してゐなかつたやうである。從つて此の種類の諸作は、おほむね不自然と不統一を伴ひ、その描寫は抽象的概念的なものが多い。

第七章　川柳に現れたる女性

川柳は俳諧の前句付から出たもので、皮肉諷刺を主とし、滑稽洒脱の想を以て卑俗の世相を寫したものである。近世の初から行はれてゐたが、明和の頃柄井川柳が附句だけで意味の獨立する

ものを輯めて「柳樽」を世に出してから盛になつた。その形式は俳句と同じく十七字であるけれども、俗語を用ひ、卑近な材料を捉へて人情の弱點を突き、鋭敏な觀察と奇警な用語とは、寸鐵よく人を殺すの概がある。其の滑稽可笑のところ、諷刺のあるところは、江戸人の機智頓才と、樂天洒落の性質とを反映したものである。時には輕薄鄙俚の調がないではないが、之によつて、德川時代の制度、風習、言語、迷信、その他隱れたる社會の事實などを見出し得る點に於て、得難い資料であるといふ事が出來る。しかし、川柳に現れた處を以て、直に江戸時代の一般の世相なりと斷言するのは稍〻早計である。何故ならば、川柳の發生した場所は、江戸も町人階級の一部で、武士も之に加る事はあつても、それは稀で、表面上では武士は「下々の弄ぶ雜俳」といふやうな感じを以て見てゐたからである。それ故一口に民衆文學とは申せ、江戸の一部の通がつてゐる連中から生れた快い人情詩であつて、その見聞は主として敎養の乏しい町人の頭を通し、眼を通して眺めた世相であるといふ事が出來る。從つてこれから述べる川柳子の見た江戸の女性も、さうした町人の眼に映じた女性であり、町家の女が大部分であることはいふまでもない。

少女時代

先づ生ひ立ちから述べて行かう。男女に共通した子供の句は、實に數十首を以て數へる程澤山あるが、その明かに女の子を詠んだものは極めて少い。

雛の酒みんな飲まれて泣いてゐる

虱とる傍で裸で鞠をつき

まゝごとの世帶くづしが甘へて來

ぼんのくぼ結ふ眞似をして泣きやませ

かけて來た程に娘の用はなし

などは極めて幼い女兒である。

ところが

似合つたといはれて娘子をすてる（人形）

蚊帳に蚊を入れる娘の髮が出來

むすめ

などは多少春のめざめに近づいたことを示してゐる。

この頃の女性の修養を推測するに足るやうな句はあまり見當らない。

伊勢物語勿體ないと親父（大神宮と間違へてゐる）

のやうな父母に育てられた普通町家の女性が、多くは無筆同樣であつたらうことは、推測に難くない。

よめぬ字は聞きたし文は見せられず

旣に春の目ざめが起ると、

春なれや娘何かは知れずぢれ

こわいもの見たし娘は封を切り

わが好かぬ男の文は母へ見せ

といふやうな事もあれば、

口說かれて娘團扇を廻してる

口說かれて娘は猫に物をいひ

かゝ樣が叱ると娘初手はいひ

抱いた子に叩かせて見る惚れた人

口說かれてあたりを見るは承知なり

といふやうな事もある。中には親の目をぬすんで戀をする。

箱入にすれば內にて蟲がつき

何やらの仕業か娘かぶりふり

やがて親に感づかれては、

根を押して聞けば娘は泣くばかり
白狀を娘はうばにして貰ひ
伯母が來て娘のなぞをやつと說き
叱られて娘は櫛の齒を數へ

なども出來れば、

お袋に知れて娘は太くなり
出來たこと仕方がないと娘つン
叱られて娘その夜は番がつき

のやうなのも出來る始末である。

結　婚　しかしこんな自由戀愛をしないものは、見合又は許婚などの形式によつて結婚に到達する。貧富の差によつて遲速はあつたが、男は二十歲より二十五歲、女は十六七歲から二十歲位までに結婚するのが普通であつた。一般に仲人がその間の媒酌をし、男は色々な手段を用ひてその女を見、或は物見遊山、神佛參詣等に託して會見したのは今と餘り變

りがない。

見にくるも知れぬと顔へ剃る程

下女をさし置いて娘に茶を出させ

娘に眞白く顏の造作をさせて、茶の給仕をさせるなど仲々洒落れた母親である。

隣へは先づ觀音といつておき

まさか見合に行つて參りますともいへまい。

すりちがふやうに仲人工夫をし

うつむいて茶を喫すのは共二人

かうしてお互に見たり見られたりして、

花を見に出たあくる日に仲人來る

仲人はまことそらごと吹きまくる。

四百づゝ兩方へ賣る仲人口 （嘘八百）

仲人は七百五十ぐらいまで

仲人の無いといふのが中あばた （あるといつたら大あばた）

嫁の年捨鐘ほどはうそをつき（捨鐘は三つ）

こゝで姑、小姑が問題になる。

仲人に聞けば姑は皆佛

姑はぢき死ぬやうに仲人いひ

ふけば飛ぶやうな姿アと仲人いひ

仲人は鬼千疋を殺すなり（小姑を隱す）

世に仲人口といふ言葉さへある程で、兎角彼方にもよいやうに、此方にもよいやうに、嘘八百を等分に使ひ分ける。しかし時には、

倉も隣のだと仲人しめられる

内々探つて見れば、先方の身代なども、仲人の話とは大違ひの貧乏暮し、分限者はそのお隣で、倉もあらうが夫もお隣のでござらうがのと、散々油を絞られて汗だく〳〵のこともあらうが、

花の根を仲人は度々まはしに來

急いては事を仕損ずる。短兵急に引拔かうとしても功をなさぬ。遠廻しに根の周圍を掘り、少しづゝ搖り動かして最後にすぼつと根こぎにし、目出度く花を引拔いて行くのが熟練した仲人のや

り方である。

かうして縁談がまとまつていよ／＼結納となる。

仲人の眼鏡取出す段となり

仲人の酒の肴になる暦

こゝまで漕ぎつければ大丈夫と、前祝の酒の肴に暦を繰りひろげて日取の撰定、

嬉しい日母は襷でかしこまり

母の姿が眼に浮ぶやうだ。

さていよ／＼黄道吉日を選んで輿入の當日となれば、

一生の極彩色は嫁入（よめり）の日

一生に一度我顔見違へる

富士額雪でうづもるはづかしさ

仲をよくしやれと駕籠へ母の聲

箱入娘の富士額に白妙の雪にまがふ丸綿をかぶせて駕籠に乘せ、愈々擔ぎ出す間際まで傍に附いて、舅姑の御機嫌を損ねるなよ、夫とは睦じく暮らせよ、といひ聞かせてゐるのは母である。

蝶二つ雪と霰の中を舞ひ

霰小紋の麻裃を着た花聟と、雪のやうな綿帽子を被つた花嫁との間に、雄蝶雌蝶のお銚子が飛交うて三々九度の盃が濟んで、幾千代の契が結ばれる。かうしてうれし恥しい花嫁時代が來るのである。

花嫁は飯をかぞへるやうに食ひ

細長く嫁の湯漬の音がする

糸を卷くやうに花嫁餅を食ひ

花嫁は口を蕾にして笑ひ

笑ふたび嫁手の甲を口にあて

みんな顔かくすが嫁のおほ笑

花嫁たるもの、氣兼苦勞も亦大なりといふべきである。

嫁と姑

嫁と姑の間は犬と猿に譬へられるほど仲の惡いものとして、昔から傳へられてゐる。その曲直は孰れにあるかは一概にはいへないだらうが、川柳では恐く嫁に肩を持つてゐる。これは例の弱きを助け强きを挫く江戸つ子氣性の發露であらう。

幼くして父母に、嫁して夫に、老いて子に從ふ、所謂三從の教は、家を中心とした封建時代の女性に止むを得ざる强要であつたらうが、これを婦人の立場から見ると、夫に從ふのはまだしも、舅姑の專制治下に奴隷となることは逃れ難い苦痛であつたらう。隨つて當時の家庭に起る悲劇は、夫婦間の愛の問題よりも、姑對嫁の階級鬪爭が多かつた。

いびられに行くが女のさかりなり

末永くいびる盃姑さし

親子盃に幾末長くいびる爲の盃をさゝれては、嫁たるもの堪つたものではないが、いびられるのを承知しながらも、せめて將來を樂しみにして、目をつぶつて嫁いでゆくのが當時の嫁の運命だつたのである。

姪だのに貰うて見ればにくいなり

ひつたくるやうに嫁茶を姑つみ

飯ばかり柔いのに嫁こまり（その他は皆强い）

嫁と名がつけば嫁茶まで憎いとは、

あげ足をとらう〳〵と姑ばゝ

嫁の顔見い〳〵薪を一本減し
母を殺すか嫁出すかと息子せめ
氣に入れば氣に入つたとて氣に入らず

家の中でばかりならまだしも、

嫁の噂を朝顔の垣根ごし
嫁のこと姑身振をしてはなし

朝顔の垣を隔てゝ隣同士の姑が、朝から身振までして、内の嫁の讒訴話、

後世ねがふ餘力に嫁をいびるなり
お持佛をいぢりしまふと嫁になり
看經がすむと居住ひ嫁直し
百八の中五六十嫁のこと

珠數の珠の百八煩惱の中、半分以上は嫁をいびりたいとは呆れたことながら、その鬼の念佛の間こそ嫁の極樂である。

極樂を嫁にもさせる寺參り

寺參り嬉涙を嫁こぼし

ましてや、

　姑の湯治は嫁に相應し

二週か三週の溫泉行きなどは、姑自身の効果よりは、何十倍嫁の保養になるか分らぬ。しかしその留守には鬼千疋の小姑がゐる。

　小姑も見やう見まねにいびるなり

　姑の發句小姑脇をつけ

　小姑女母がかへるとそばへより

嫂の行動を最大漏さず主觀を加へて報告する。しかしこの千匹は何といつても年が若いだけに御し易い。やはり、

　千匹よりも一匹に嫁困り

であらう。

　嫁ある夜姑の死んだ夢を見る

こともあつたかもしれない。姑の方は、

やがて死にますと姑しれた事

とロにはいふが、心の中では、

願はくば嫁の死水とる氣なり

御迎は先づ嫁からと願つとき

である。たま〳〵患ひでもすると、

嫁がのろひ殺しますと姑病み

うは言はひきもきらずに嫁のこと

死相を覺りもう嫁さからはず

に爲ると、意地惡くも、

姑婆死にさうにしてよしにする

そううまくいかぬと姑快氣なり

のやうなことになることが多い。さうかと思ふと、

あつらへたやうに姑頓死する

こともある。かうなつたら嫁の天下だ。

姑の寂滅嫁の爲樂なり

白無垢に素顏で嫁はうれしがり

送り火をおもしろさうに嫁は焚き

は少し穿ち過ぎてゐる。

しかしかうした險惡な間柄でも、可愛い孫が出來ると姑の角も折れることになる。

孫が出來たら食ひさうな婆あ也

であつても、

産れたら抱きあしないと姑婆々

と口癖のやうにいふ黑塚の婆にも增した邪見な姑でも、

初孫い力姑の角を折り

姑の角にぎ〳〵でおつぺしより

孫ができ姑はじめて嫁をほめ

憎い嫁可愛いゝ孫をやたら產み

といふやうになるのである。しかしこれ迄に至る嫁の苦勞も並大抵ではない。これも皆、

うつむいて堪忍袋嫁は縫ひ
三匹の猿を心に嫁は飼ひ
我が胸をさするのも嫁孝のうち
親風を柳に受ける嫁の孝

と、辛抱の努力が實を結んだのである。

しかし、かうした邪見な姑ばかりが世間の全部ではない。如何に缺點を穿ち、人事の隱微を發くを旨とした當時の川柳にも、百に一つは佛性の姑や、仲のよい嫁姑を詠み出したものがないでもない。

いゝ姑嫁の下げ足ばかりとり
いゝ姑嫁と砧の合せもの
こぼれさう水も汲ませぬいゝ姑
仲のよい嫁はお經をよみならひ

といふ姑も少くなかつた。しかしこれも亦嫁の方から、式にぬかりなく仕へるからであつて、これも皆、

嫁の智慧姑の角をかくさせる

のであつて、

今身（こんじん）より佛身に至る迄嫁いびり

するのも、一概に姑の罪にばかり歸せられないのは勿論である。

母親

嫁としての苦難時代を經ていよ〳〵母親となる。

うたゝねの薄着へ母のあつい恩

物差で晝寢の蠅を逐つてやり

針仕事をしてゐる母親の様子が見えるやうである。

よく寢れば寢るとてのぞく枕蚊帳

うたゝねもいつか着てゐる母の慈悲

井戸端へ子の行く夢に母は汗

たゝかれず赤子の顔の蚊の憎さ

添乳してつい洗濯が夢になり

寢てゐても團扇の動く親心

我が子をあふぐ團扇がうつゝに動いてゐるのである。

ゆきたけのあはぬを母はうれしがり

我が子の成長を喜ぶ母親の情である。

二三年縫ひこんでおく母の慾

かうした溫い手に育てられた息子も、いよ〳〵一人前になると、仲々母親の思ひ通りにはゆかない。これも、

すい息子辛い親父に甘い母

母親が餘り甘く育てるからである。

棒ほどのこと針ほどに母かばひ

母親は息子の嘘をたしてやり

盗人を捕へて母は聲をさげ

死なば死にやとこは〳〵母はいひ

母親は叱りすごして我も泣き

有難い親心ではあるが、かうした甘さはともすると、子供の將來を誤る。

どうやらかうやらどら者に母はする

のである。はては母の意見は馬耳東風、

馬の耳蛙のつらに母こまり

今更愚痴をいつてももう遅い。

母親は勿體ないがだましよい

のうちはまだよいとして、

どう見ても親ほど馬鹿なものはなし

に至つては、箸にも棒にもかゝらぬ始末である。

下　女

次に川柳に詠まれた女性の中で、最も飜弄の焦點となつてゐる下女について述べる。下女は食客と共に川柳子に目の敵に狙はれて、見つけ次第に引き摺り出され槍玉にあげられてゐる。これは下女の人格などを餘り尊重しなかつた當時にあつては止むを得ないであらうが、元來が最も川柳的の口調に適合した上、また自然の滑稽に叶うてゐるからであらう。

叱られて下女膳立の賑かさ

山出しの下女割箸を二ぜんつけ

山出しは笑つてやるが指南なり

萬歳を下女ありつたけ笑ふなり

下女の面よく〳〵見れば鼻もあり

下女の鼻無分別なるおきどころ

白粉で下女七難をぬりかくし

第七篇　明治文學を通して見たる女性

第一章　明治時代の概觀

德川三百年泰平の夢は外船の渡來によつてさまされ、やがて國民の自覺を促し、遂に明治維新となつた。德川幕府が學問を奬勵した結果、大義名分の論が次第に喧しくなり、そこへ黑船の騷ぎが始つて尊王論が愈々盛になり、さしも堅牢に組織された德川幕府も、一朝にして瓦解することになつた。正面から幕府を攻撃したのは、儒者や國學者の忠孝論、國體論であり、內部から旗本の性根を腐らせたのは、洒脫本や人情本等が與つて力があつた。してみると、德川幕府は文學を以て興り、文學を以て滅びたといふことが出來る。

さて明治維新はまことに文字通り我が國未曾有の大變革であつた。賴朝が鎌倉に幕府を開いてから七百年の武家政治といはず、なほ遡つて、藤原氏が政治上の實權を握るやうになつてから一千年の歷史は、こゝに全く破られて、王政は再び古に復つた。封建制度は根柢から崩壞し、海外の文化は潮の如くに流れこみ、過去の文化が破壞されると共に、新しい文化が續々と建設され、文學も亦一新した。この間盲目的な模擬追隨も行はれたけれども、大局に於ては、鬱勃たる創造

的精神のもとに、採長補短が見事に成就されたのであつて、旺盛な發展力を有する我が國家國民の特徵を十分に示してゐる。

文學の特色

新しい時代は新しい文化を生み、新しい文化は亦常に新しい文學を生む。明治維新は實に日本文化史上に於ける甦生の春の訪れであつた。卽ち舊幕時代の嚴しい階級制度が廢されて四民平等となつた結果は、あらゆる方面から多數の作家を出すことになり、また外國文學に刺戟されその影響を受けるところから、文學の內容も著しく深化し、その形式も多種多樣となつた。卽ち形式に於ては、自由明快な言文一致體——口語體——が小說評論に用ひられ、後には詩歌の如き韻文迄口語體によるやうになつたのである。

次に文學の展開を考へるに、明治初年より十九年頃迄は、この時代としての啓蒙の一時期であり、それから日露戰爭の頃迄が浪漫主義の一時期で、一時歐米文化に眩惑した國民が漸く自己の實力を自覺し、日本的な文化を創造しようとする意氣を示した時期である。それ以後明治末年頃迄は、徒な空想や憧憬を捨てゝ、人生の現實の姿をありのまゝに見るといふ餘裕を生じて來て、特に人生の醜い半面をも描き出さうとする傾向を取つて來た、所謂自然主義の一時期である。しかしこの自然主義が漸次固定し、機械化して、人生に於ける理想を認め得なかつた爲に、新に新

浪漫主義、新理想主義の運動が生じて、一は消極的に感覺的な享樂の世界に安住し、他は心的、靈的な信念の世界に進んだのであるが、大正期に入ると新現實主義が唱へられて、自然主義が築いた基礎の上に立つて、新に現實を見直さうと努力するに至つた。世界大戰から大正十二年の震災頃迄を轉機として、日本文學は極めて複雜な發展をして今日に及んでゐるのである。

第二章　女流文學の展開

明治時代に於ける女流文學界を見るに、一般の文藝界及思想界の活動發展に伴うて、女流文學も亦著しい發展ぶりを見せるに至つた。

一體女流文學の盛衰は、その時代の時代精神と關係するところが頗る多い。平安時代に於て女流文學が花と咲いたのは、優美華麗を尊び、文藝を偏重する當時の風潮と、藤原氏のとつた宮廷政策にもとづく才媛尊重の時代精神によるところが多い。近世の女子が、專ら家庭の中に於てのみ活動の天地を與へられ、外に文學的活動の自由を與へられなかつたのも、いふまでもなく儒教を中心とした近世の時代精神の影響によるのである。

明治維新以後潮の如く寄せ來つた外國の思想が、我が國の精神文化の向上に力を與へたことはいふ迄もないことであるが、女流文學の興隆も亦、この自由を叫び解放を高調する外來思想に負ふ所が極めて多いのである。

最初に我が國の女性に味方したのは、主としてジョン・スチュアート・ミル一派の唱へた、女性の自由平等と獨立の論であつた。ミルは主として女性の政治上の權利を主張し、完全なる男女同權の基礎の上に社會制度を樹立しなければ、人類全體としての幸福も進歩も見られない。人類の半數なる女性の能力が抑壓制限されてゐるために、人類の全能力の半ばが埋められてゐることは、文化の發達のために悲しむべき損失であると論じた。

これら新思想の影響によつて、德川時代には、家の中にとぢこもつて、そこに使命と生きることの意義とを持たせられ、屈從と束縛とを强ひられて來た女性は、今や新しい自由思想の惠みに浴して、解放される時が來た。女性はその獨立と自由への道程に上ることが出來た。かくて明治時代は、久遠に輝く女性の運命が、漸く開かれんとする黎明期であるといふことが出來るのであるが、かくの如く女性が儒教精神に本づいた束縛から解放されて、人としての活動の自由を取戻すことが出來たことが、明治女性文學發展の一つの大きな理由である。

次に歐米文化の盛な輸入に伴つて、女子教育といふことが、識者間に着目せられるに至つたことも、女流文學發展の上に考へなければならないことの一つである。勿論女子の教育といふことは、徳川時代にも行はれてゐたが、從來の女子教育といへば、女性を男性に隷屬せしめ、家の奴隷たらしめんがための教育以外のものでなかつたが、新教育は之と異り、少くとも女性自身の個性を伸して、新時代に處せしめんとする傾向を多分に含んだものであつた。盲從をのみ強ひられた女性に、自ら見、自ら考へる力を與へんとするものである。かゝる社會の狀勢は、自らにして女性の文學的進出を促すに至つたのである。

明治の初期に、最初に女流文學史上、小說の上でトツプを切つた女性は、中島俊子、文名湘烟女史である。その作「善惡の岐」は、明治二十年八月から「女學雜誌」にのつて、秋出版された。「江戶末期文學の亞流でしかない作だ。」と後日の批評家はけなしたけれども、女流文藝作家として、明治時代が最初にこれを持つたといふ事は、消し去り難い事實である。湘烟は十八歲で文事御用として宮中に奉仕したといふほどの、當時の女學者であつたし、又意力的な性格であつた。「牡丹見て芍藥を見てわれは逝く」といふ辭世の句を殘して三十九歲で世を去つたが、その一生は、修學と、文筆と、政治運動とに捧げつくされた志士的女性の一人であつたやうである。「善惡

の岐」が女流民權家式の生硬な作品であつたにひきかへ、その翌年、明治二十一年七月、坪内逍遙の推薦文附で上梓された、三宅花圃の「藪の鶯」といふ小説は、國文學の優美さと女らしさを以て、湘烟の作よりも好評を博した。

明治二十二年になつて、第三人目として現れたのが、その文名瞎、本名木村榮子であつた。「婦女鑑」といふのが讀賣新聞に發表された。この作こそ、明治女流文學の新スタイルを持つに至つた作である。その梗概は、秀子といふ若い女性がアメリカに渡り、そこで工場を見習ひ、歸朝して築地に工場を設け、工人二十人、下職には貧婦をやとひ、食事は賄つて悦ばせ、傍に廣やかな幼稚園を設け、貧兒の三歳から十歳になるまでを導き敎へ、母親のないものは預つて、一藝を授けるといふ内容の作品で、理想小説であると同時に、現實の人々の生活苦を救はうとする社會小説でもあつた。

以上の三人が、明治時代初期の意味深き存在である。なほ當時、小金井喜美子、竹柏園、秋月、幽芳、花月、葭江などといふ女作家があり、飜譯では、若松賤子の「小公子」が多くの人に讀まれてゐた。

明治二十七年十月、文藝倶樂部が「女流作家號」を編んだ。この作家號に名を並べた女流作家

中有名なのは、樋口一葉、北田薄氷、田澤稲舟、大塚楠緒子の四人である。中にも一葉女史は特にすぐれて、女人中の白眉であつたばかりでなく、男性作家に伍しても、その天才的特質を發揚した。一葉の文壇に出たのは、尾崎紅葉、幸田露伴の全盛期がやゝ過ぎて、反省期に入つた頃であり、觀念小說の勃興せんとする時、二十五歳にして忽ち逝つた。卽ち一葉は紅葉、露伴時代から、柳浪、鏡花時代に移らうとする過渡期に出たことが、特に文壇に注意されたのでもあり、殊に女性作家といふことも、多少當時の批評家に推賞せしむる所以ともなつたであらうが、しかし一葉の「にごりえ」から「たけくらべ」「わかれみち」に至る後期の作品を吟味すれば、一葉のすぐれた作家であることは充分にみとめられる。

明治三十六、七、八、九年、この四五年間は、日露戰爭といふことによつて、日本全國が興奮し切つた年代である。戰前にも、戰後にも、ある大きい力が社會をゆりうごかし、文藝界も亦その時代の波にのつて、大いに活氣を呈した。女流作家としては、野上彌生子、長谷川時雨、岡田八千代、小寺菊子、水野仙子、田村俊子、素木しづ子等の才媛が次々と現れた。野上彌生子は、「ホトヽギス」一派の寫生文の運動の中より中央文壇に登龍し、長谷川時雨、岡田八千代は劇作家として立ち、小寺菊子、水野仙子は自然主義の作家として、前者は德田秋聲に親しみ、後者は

田山花袋の弟子であつた。田村俊子は露伴に師事し、素木しづ子は森田草平の教をうけ、弱々しいしかし人の心をひく女らしい小説を殘した。

次に和歌の方を見るに、明治初期に於ける税所敦子の如きは、桂園派の流れをくむ女流歌人として最も注目すべきであり、新派和歌の勃興に際して起つた與謝野晶子の歌は、明治和歌史の重要な流れをなしてゐる。落合直文の流れから出た中で、浪漫主義的な短歌として、最も華かな存在であつたのは、與謝野鐵幹、晶子兩氏を中心とする明星派の短歌であつたことはいふまでもないが、明星派に晶子がなかつたならば、明星派の勢力は必ずしも華かなものではなかつたかもしれない。あの奔放な情熱と表現とをもつ晶子の歌は、明治時代のみならず、和歌史上の大きな存在となつてゐるのである。

以上を以て明治時代の文學史上の女性の重な動向について述べたのであるが、幾多の女性作家のある中に、一葉、晶子を出したことによつて、明治文學は、女性作家史の上に輝かしき光をなげてゐるのである。

第三章　樋口一葉

樋口一葉は、明治中葉浪漫主義運動に於ける女性尊重の若き時代的雰圍氣の中から生れ出た天才作家である。その生涯は、僅に廿五といふ短いものであり、その文壇的活動も亦、明治廿四年「枯尾花」をものしてから、廿九年に世を終る迄、僅に六年、その作品また僅々廿五篇に過ぎないのであるが、その傑作「ゆく雲」「にごりえ」「十三夜」「たけくらべ」等は、内容外形共に相俟つた渾然たる藝術品であつて、その文學的生命は文學史上永遠に記憶さるべき輝しき存在である。

今一葉の出現せる時代的環境を見るに、我が國開闢以來の大戰日清戰爭は、大勝利を得ることによつて、大いに國民的自覺を促し、延いて個人の自覺を促した。そしてこの時代相を代表して立つたのが高山樗牛で、日本主義の提唱となり、或はニイチェの個人主義に結びついて、美的生活の讃美となつた。この傾向は硯友社一派其の他の文壇にも影響し、深く人間の心理を描かんとするやうになり、川上眉山、泉鏡花の觀念小説となり、更にこの傾向を深めた廣津柳浪の悲慘小説となつた。同じくこの人生の暗い方面を眺め、しかも深い内省と巧妙な描寫とによつて、作者の

個性を明確に發揮した一巾幗作家が、卽ちこの樋口一葉である。

閲歴

一葉、名は夏子、父は則義（のりよし）といひ、甲斐國東山梨郡の人である。一葉は流石に幼より世の常の婦女子と異つたところがあつたらしく、その明治廿六年七月稿の日記「塵の中」によると、七つの時草雙紙を好み、手まりややり羽子をなげうつて讀み耽り、そこに描かれた英雄豪傑の傳や、任俠義人の行爲などの、すべて勇ましく華かなのに、殊更興を覺えたといふことであり、九つばかりの時からは、「我身一生の世の常にて終らむことなげかはしく、あはれくれ竹の一ふしぬけ出でしがなとぞあけくれに」願つてゐたといふことである。それほどであつたが、家が貧しく、小學校すら完うすることが出來ず、家事の手傳ひをしながら、僧あがりの手習師匠について、何くれと學んだに過ぎなかつた。しかし父の則義は、一葉の天分を夙くから認めてゐたらしく、且家事の手傳をしながら「猶夜ごと〳〵文机にむかふ事をすてず」といふ彼女の熱心さに動かされ、「終に萬障を捨てゝ更に學につかしめん」として、和歌の集などをいろ〳〵と買ひ與へ、且知人を介して、彼女を歌人中島歌子の門に入らしめた。彼女時に十五。歌子は號を萩之舍といひ、景樹派の人。その頃高崎正風等と並び稱せられた女流歌人の第一人であつた。一葉が景樹派の和歌をよくしたのはこのためである。

そのうちに一葉は、明治廿二年、大藏省の小官吏であつた父を失つたので、さらでも貧しい生活は一層貧しくなり、彼女は母や妹を養はなければならない立場になつた。親子三人、それも女ばかりの三人になつた一家は、その後三人が三人とも賃仕事をして細々と暮してゐた。その頃の生活について、一葉の生前の親友であつた馬場孤蝶氏は次の如く述べてゐる。「一葉君自身も針仕事を引受けた。しかし負けぬ氣の氣品の高かつた一葉君は、學問で身を立てたいとは常に思つてゐたらしい。それで、同門の花圃田邊龍子君――今の三宅雪嶺氏夫人――が既に文名があつたのなどを見て、小說を書いて見たらといふ考が浮んで來たらしい。邦子君――一葉の妹――が洋服裁縫に通つた先で友人になつた人に、野々宮菊子君といふのがあつたが、この人が半井桃水君の令妹孝子君と友人であつたので、一葉君はその人に賴んで半井君に紹介してもらつて、二十四年四月十五日に桃水君の芝佐久間町の居を訪うた。」これから一葉の作家生活が始つたのであるが、この時彼女は年二十であつた。

一葉は苦しい生活の中に文筆を執り、翌二十五年二月に始めて「闇櫻」の一篇を桃水主宰の雜誌「武藏野」の創刊號に紹介され、續いてその暮には「うもれ木」翌二十六年の春には「曉月夜」が雜誌「都の花」に出て、その頃から漸く女流作家としての文名が擧つて來た。そして、同じく

その頃から、當時の新進たる「文學界」の連中——馬場孤蝶、島崎藤村、平田禿木、戸川秋骨の諸氏——と相知るやうになり、その才筆を「文學界」紙上に揮ひ、二十八年には一代の名作「たけくらべ」を發表し、同年には又「文藝倶樂部」に「にごりえ」「十三夜」等を續々發表して、その文名は尾崎紅葉を壓ずる概があつた。しかも一葉は文筆を執る傍家庭の雜務にもいそしんだもので、二十六年七月に、今までゐた本郷菊坂の家を引拂つて、下谷龍泉寺町大音寺前に移り、荒物や駄菓子の小商を始めるやうになつてからは、その商品の仕入には、商品の箱を背負つて自ら出かけたものであるといふ。一世の天才一葉女史が、箱を背負つて駄菓子の仕入に行く情景は、まことに涙ぐましいものであつたらう。

一葉が「たけくらべ」を書いたのは、明治二十七年から二十八年にかけてゞ、時に二十三——二十四歲であつたことを思ふ時、吾々はその天分の豐かさに驚歎せずにはゐられないのであるが、惜しむべし、二十九年十一月二十三日、二十五歲の若さをもつて、本郷丸山福山町の自邸に逝いた。高山樗牛はその死を惜しんで、「その來ること何ぞ遲かりし、その去ること何ぞ早かりし」といつてゐるが、まことに一葉の一生は、突如として現れ、突如として消えた彗星の如き觀があるのである。しかもその短い間に明治文學史上不滅の足跡を殘してゐる。

作風

一葉の作風を知る前に、その性格や風貌を知つて置くのも無意味ではなからう。そこで、又馬場氏の文を借りることにする。

「一葉君は強度の近視であつた。母君などに隱れて、藏に入つて、金網の窓から入る僅かの光で、假名ばかりの草双紙を讀んだので、眼が近くなつたとは一葉君自身の話であつたが、遺傳だか何だか知らぬけれども、元來視力の弱い人であつたのかと思れることもないでもない。それはとにかく眼鏡はかけてゐなかつた。身體はまづ日本の婦人としては中ぐらゐの大きさであつた。髮は極めて薄かつた。禮儀正しい人であつたからでもあらうが、身をこゞめて坐つてゐるのが常で、退屈すると、髮の毛一二本ほつれたのをいじり、それを見つめながら話をすることがあつた。けれども話がはづんで來ると、肩を搖つて少し反身になつて笑ふことなどもあつた。話は確に上手であつた。創作の中に散見する冷嘲のやうな調子が口にのぼる時が殊に面白かつた。なまめかしいといふ感じを與へる婦人ではなかつた。艶はない、いかにもくすんだ所のある人であつた。娘といふより奥さんといひたいやうな人であつた。當時の普通一般の女を離れて男性の方に一歩變化しかけたやうに感ぜられる婦人であつた。擧作はいかにも上品であつた。どこにも女らしくない所は擧げ得られないに拘らず、どことなく女離れがしてゐるやうに私には感ぜられた。多分は一葉君の氣魄の人を壓する所があつたからであらう。」

この言葉の中には、一葉の性格風貌がかなりはつきり現れてゐるが、一葉の性格にはかなり負けず嫌ひの所があつた。そして當時としては、珍しく個性がはつきりと目ざめてゐる婦人であつた。それ故その藝術上に於ける態度も、終始一貫してたゞ一つであつた。即ちたとひ視野は狹くとも、自己の環境を凝視して、悲哀感をじつと心の底に湛へたまゝ、根氣よく世相の一面を掘り下げて行つて、そこに生の一面を活き〳〵と髣髴させたのである。そしてその背景には、いつも彼女の痛切な體驗がつきまとつてゐた。「意地惡の世」がいつも背景であつた。が一葉は、この世をいかに意地惡に感じても、決して厭世に陷るやうなことはなかつた。そこにはたゞ淋しいあきらめがあるばかりであつた。勝氣な彼女が、強い運命の力の前に立つては、たゞ淋しいあきらめに逃れるより他に道はなかつたであらう。そしてそのあきらめが作品の上に現れてゐるのである。勿論若くして逆境に育つた彼女には、世にすね俗にそむくといふやうな反抗的な氣分があつた。しかしどうもがいても運命の前に忍從するより外はないと悟つた時、彼女は一種の諦めに到達した。けれどもやゝもすれば頭を擡げてくる反抗的氣分をどうすることも出來なかつた。これを抑へてぢつと人生を見つめる時、いつしか彼女の瞼には女らしい諦めの淚が光つた。この胸にせまる苦痛と悲しみとをさながらに打出したのが彼女の小說である。

一葉の文學は大きい文學、高い文學、華かな文學といふことは出來ない。雄大、豪壯、崇高とか、枯淡とかは申せないが、流麗な中に暗愁を含んだ可憐な味は、他に見られない獨特の味はひである。それは唯感情の世界である。彼女の描いた世の中は、意志の世界でもなければ理智の世界でもない。それは唯感情の世界である。殊にその感情の世界は、柔みのある優しさと、愁はしげな悲しさの世界であつた。優しさと悲しさ、そこには大きいとか強いとかいふものはないが、おつとりした、しんみりしたしほらしい感が漂つてゐる。島村抱月が「作の筋は忘れても風情だけは心に殘る作」といつたのは、よく一葉の作風を盡した言葉である。

作　品　一葉の作品は前後二期に分ける事が出來る。前期の作品は、「闇櫻」「うもれ木」「玉襷」「五月雨」などで、概して空想的類型的で技巧の跡が露骨であつた。文章も西鶴の皮相を摸したところが見える。けれどもその中に一點眞實の火が明かに燃えあがつてゐて、少しも輕浮なところはなく、作品を一貫するものは、あく迄も眞面目なものであつた。

後期の作品は、「にごりえ」「たけくらべ」「十三夜」「われから」などで、この四篇は、永久に彼女の作風を代表して不朽の生命を持つものである。これらの諸作には、初期に於ける空想的類型的なところが次第に薄れて、彼女の個性がはつきりと現れてゐる。西鶴の皮相から離れて西鶴の眞

髓を摑まへ、自己の環境を凝視して、澄み切つた心に映つた姿をその儘渾然とした有機體のやうに描き出してゐる。

中でも「たけくらべ」は最も傑作と稱せらるものでゝ廓近くに成長して、比較的早熟な少年少女の微妙な心理の描寫を行つたものである。遊女を姉に持つみどりといふお轉婆の少女が、次第に性に目覺め、戀愛を意識する心理を描き、他に正太郎といふ家も性格も學問もすぐれた少年、長吉といふ家も貧しく智慧もない亂暴な少年、龍華寺の信如といふ一見冷い消極的ではあるが、犯しがたい所のある少年を配して、全篇渾然たる場景を描いてゐる。

「にごりえ」は、ある場末の銘酒屋の女のお力といふ女性の淪落の生涯を描くと共に、このお力のために產をなくし、妻をも去るに至つた源七との悲劇的な家庭を描き、最後にお力と源七との無理心中によつて、兩者を結びつけてゐるのである。

「十三夜」は、身分の相違する家に嫁いだお關といふ女性が、夫の愛のないのに堪へかねて、離緣して歸らうとして、父母に諭されて力なく家に歸る途中、乘つた人力車の車夫は、已が以前の戀人である事を知つて、儘ならぬ世をかこちながら別れて行くといふ構想である。

一葉の作品は、一面に於て、思想的內容が乏しく、素材とするところも偏狹であるとか、その

人生觀の內容に聊も近代的分子を交へず、人生に對しては消極的な古典文學の影響のみが顯著であるとかと、色々な缺點をあげることも出來るが、ともかくある完成を持つた。——深みが足りないとか、小さく纏り過ぎてゐるとかいふ望蜀の念も起るけれども——獨自な藝術境をしつかり握つてゐる點に於て、數多い明治文學の諸星に伍し、靜かな美しいその光を、永遠に放つものとして禮讃することが出來る。

作中の女性

一葉は女性描寫に特異の才筆をふるつた作家である。彼女の描いた作中の人物の大半は女性である。從つてその作中の主人公は殆んどすべて女性がその地位を占めてゐて、男性は皆その添物、道具たるに過ぎないともいふ事が出來る。而もそれらの女性は、皆一葉その人自身の現れであつて、少くともその片影が何處かに必ず潜んでゐるのである。それについて湯池孝氏は次の如く述べて居られる。

一葉は自己に忠實な作家で、自身の經驗を土臺として寫實的に描いた。從つてその取扱つた人生は狹い。薄倖な若い女の哀愁の世界、無自覺な儘に舊習に捲き込まれてゆく明治型の女性の暗涙を含んだ成行に限られてゐる。又その思想も舊套的なあきらめの境地を出てゐない。併しその範圍內に於ては深く見、細かく描いてゐる。可憐な女性の姿を同情のある、如何にも女らしい行屆いた筆で、心理的に描き、その儚い

成行を巧みに暗示してゐる邊、女性描寫にすぐれてゐたと共に、作中の女性はいづれも作者自身の化身である。云々、と。

そしてそこに描かれてゐる女性は、前期の作品に於ては、初心な娘が大部分を占めてゐるが、後期の作品となると、人妻のやうな、既に男を知つてゐる女性が大部分現れて來てゐる。しかし何れにせよ、是等の女性は、大體に於て若い可憐な女性のみである。そしてそれら女性の特長については湯池氏もすでにいはれてゐるやうに、所謂明治型の女性であつて、別に學問があるといふでなし、考がしつかりしてゐるといふのでもなく、概して平凡な、内氣な、舊式な思想に育まれた消極的な女性で、殆んど活動的な生々とした處がない。いはゞ無力の女性ともいふべきもので、その無力の女性が、社會の強い力のために泣く〳〵その環境の中に生活し、遂に悲しむべき結果に達するか、然らずんば辛うじてある種の消極的なあきらめの中に生活することを餘儀なくされるのである。「玉襷」の糸子、「わかれ霜」のお力、「うもれ木」のお蝶、「にごりえ」のお力、「うつせみ」の雪子、「われから」のお町等は前者の例であり、「五月雨」の優子、お八重、「經づくゑ」のおその、「曉月夜」の一重、「雪の日」の珠子、「花ごもり」のお新、「ゆく雲」のお縫、「十三夜」のお關等は後者の例である。

そしてこれらの女性のうち、全然戀愛に關係のないのは「大つもごり」のお峯位のもので、他は殆んど全部戀をもつてゐる女性である。作者は「たま襷」の中で「實直なる人ほど戀は苦し」と云つてゐるが、一葉の作中の人物は、何れも眞摯なるが故に、純情なるが故に、戀の苦しさを身にしみて感ずる人々である。或は義理の柵にほだされ、人情の絆にしばられ、その殆んどすべてが戀を完うし得ずに悶え苦しんでゐる。作中の女性は皆戀愛至上主義たらんとして成らず、常に世間に負けてゐるのである。「曉月夜」の女主人公は「戀は淺ましきもの、果敢なきもの、憎きもの、我が生涯のこのやうに悲しく、人に言はれぬ物を思ふも、淺ましき戀ゆゑぞかし。」といつてゐるが、さういふ儚き戀心、淺ましき戀心は、一葉作中の殆んどすべての女性に共通した悲しき心境である。

第四章　與謝野晶子

閲歴　晶子女史は舊姓を鳳といひ、明治十一年十二月、和泉の堺市に生れ、堺市立女學校を卒業した外別に學歴はない。然し十二歳の頃から國史や國文に關する書

を耽讀し、十五六歲の頃から歌を詠みはじめたといふ。明治三十三年雜誌「明星」の發行されるや、これを主宰する與謝野寬氏の大阪遊歷中に相知り、翌三十四年夏上京し、同年八月新詩社から第一歌集「みだれ髮」を刊行し、俄然一世の歌人として天下に名を成すに至つた。その秋寬氏と結婚して、明治末期に至る迄、その情熱の奔放したやうな絢爛を極めた歌を以て歌壇の中心勢力をなし、小說家の一葉と共に、明治の二才媛としてその名を唄はれた。大正元年、フランス留學中の寬氏の許に行き、歐洲を漫遊して歸朝後、小說に筆を染めたが思はしからず、今は女流教育者として文化學院の學監として若い女性の教育につとめて居られる。

作　風

三十四年八月出版された第一歌集「みだれ髮」は、女史の歌風を說明する好個の標本である。「みだれ髮」は一言にして盡せば、極端なる浪漫主義であるが、これは近代短歌に於ける浪漫主義の出發點であるともいへるし、又考へ方によつては、その最高潮に達したものであるともいへるであらう。この書は鳳晶子の名を以て出版されたのであるが、かの高山樗牛の「美的生活論」が發表されたのが、あたかもこの年この月であつたことは、文學史的に興味ある事實である。

今「みだれ髮」出現前後の歌壇の大勢を見るに、明治二十六年に落合直文の淺香社が創設せら

れ、二十九年には與謝野鐵幹氏の第一歌集「東西南北」が出版せられ、三十二年に佐々木信綱氏の「心の花」が發刊せられ、三十二年に正岡子規の根岸短歌會が初めて開かれ、三十三年に鐵幹氏を中心として東京新詩社が組織せられ、その機關雜誌「明星」が發刊せられた。三十四年には一月に金子薫園氏の「片われ月」二月に佐々木信綱編「竹柏園集」第一編、三月に鐵幹氏の「鐵幹子」四月に同じく鐵幹氏の「紫」七月に服部躬治の「迦具土」といふやうに次々に歌集が出版されてゐる。その後をうけて八月に「みだれ髪」が公にせられたのである。

「片われ月」は溫雅清新なる敍景の世界であつて、明星派の歌風にむしろ對立するところのもの、薫園氏は鐵幹氏と同じく淺香社の出身ではあるけれども、尾上柴舟氏と提携して翌三十五年一月「敍景詩」によつて明星派に對抗するの態度を明示した。「竹柏園集」は新味を願ひながら、革新的色彩が不鮮明で、まだ幾分か舊派的性質を持つてゐた。子規一派は萬葉復歸といひ、寫生といつて明星派とは明かに異つた道を進んでゐた。

かうした狀態の中に「みだれ髪」はあらはれたのである。「みだれ髪」は全篇悉くこれ青春の情熱から出た感激と詠歎とで滿されてゐる。そこに歌はれた戀心は、凡てを燒きつくさねばやまない熱情の奔騰である。近代的神經の鋭さと、既成道德に對する反逆的情感の激しさとが、その間

に閃いてゐる。この大膽な態度は、やゝもすれば作をして官能的妖惑たらしめ、戀愛至上の思想を見せたのである。それ故、「みだれ髪」出版の當時、佐々醒雪はこれを評して「肉の聲」であるといひ、「心の花」は、「一言以て之を掩へば悉く皆是春畫」と罵倒したといふことである。しかしながら一方青年士女の中には大いに共鳴者を得、「美的生活論」の唱へられた當時の時代思潮に觸れるところがあつたから、やがて非常な勢で晶子の名は歌壇に喧傳せられるやうになつた。

やは肌のあつき血汐にふれもせでさびしからずや道を說く君

道を云はず後を思はず名を問はずこゝに戀ひ戀ふ君と我を見る

などは戀愛歌の代表的なものであるが、あく迄も本能的、刹那的、戀愛至上的傾向を示してゐる。

「みだれ髪」の後、「戀ごろも」「舞姬」等十數冊の歌集を公にしたが、そこには一段の進境が見られる。卽ち漸く圓熟を加へ、純主觀的傾向を離れ、著しく客觀的事象の吟詠を增し、渾然たる物人融合の境地にまで達してゐるのである。さはいへ、やはりその基調を貫くものは、女史獨自の情熱である。燃えつくすことを知らぬ情焰である。たゞそれがどことなく沈潜されて、上すべりした調子がすてられ、どこ迄も高雅な韻律を保つて行く點に、その歌境の進步が看取されるの

である。

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みな美しき

ほとゝぎす嵯峨へは一里京へ三里水の淸瀧夜の明けやすき

人かへさず暮れむの春の宵ごこち小琴にもたす亂れ亂れ髮

第八篇　現代の女流作家

大正より昭和へかけての現代の文學は、あらゆる分野にわたつて新しい活動が試みられてゐる。小説界は、ほゞ純粹藝術派と無産派と大衆文學派とに分裂し、その各々がまた幾つかに小さく分裂してゐる。この中藝術的に最も高く評價さるべきは、いふ迄もなく純粹藝術派の文學であるが、大がゝりな規模と複雜な機構とに興味の中心を置いてゐる大衆文學は、時代物に、現代物に、諸讀小説に、それ〴〵優秀な作家が輩出するに及んで、その勢力は殆んど全小説界を壓し、その藝術性に於ても、現在では純粹文學派に肉薄するものも少からず現れるやうになつた。

かうした文壇の情勢の中にあつて、女流作家にあつても、小説に、戯曲に、和歌に、男性作家に伍してその頭角を現してゐる者も少くない。一體女性にして男性と肩を並べて、作家として立つて行くことは、容易なことではない。映畫女優や流行歌などの歌手だと、女でも年少にして有名になれることもあるが、作家の仕事はなか〳〵さうはゆかない。創作は頭腦の仕事である。實力の仕事である。その上不斷の勉强、不斷の精進が必要である。從來の日本の社會は、その制度や生活の條件に於て、女性が作家として仕事をして行く上に、甚だしく無理と困難とに滿ちてゐた。その惡條件に堪へ、克服し、男性作家と肩を並べて、頭腦的にも困難な創作の仕事を續けてゐる者に對しては、先づ多大の尊敬を拂はねばならぬ。

小説家

明治末期の女流作家として、野上彌生子、長谷川時雨、岡田八千代、田村俊子水野仙子、素木しづ子等の諸氏を擧げたが、水野仙子、素木しづ子の二氏は、大正の初に、ごく僅かな閒文壇生活をして、早くこの世を去つた。仙子は病弱、しづ子は松葉杖をつかねばならぬ女性で、さうした身體の薄倖はこの二人の作品に反映して、傷心とか、淋しさとか、慈しむ人生といつた情感が流れてをり、仙子はかなり平面的であつたが、しづ子には心理的描寫の新しさがあつた。

長谷川時雨、野上彌生子、岡田八千代の諸氏は、その活動が今日に迄及んでゐる。長谷川氏は一時創作活動を休止したかに見えてゐたが、「女人藝術」發刊以來、更に捲土重來の意氣を示してゐる。「美人傳」や「春帶記」などを讀んでみると、さすがにその文才と蘊蓄の程がうなづける。女史は下町に育ち、且國文學の古典的な教養を受けた爲に、その作品には純日本的な情操が美しく盛られてゐる。裏に情熱を湛へた女性を描いて、その心情を細やかに寫すところは、女史の得意とする所である。「女人藝術」は昭和八年に休刊されたが、その間に幾多の新進作家を養成した。

野上氏は、我が國の女性作家として、最も長く文壇の生命を續けてゐる作家であり、明治時代から數へるなら、たゞ一人殘された精力的な作家である。女史は極めて寡作主義の作家ではある

が、その創作態度はあく迄愼重で、しかも丹念である。女史はその作家生活を寫生文から出發された爲か、その作品にはいづれもデッサンの確さがある。靜かに澄んだ眼がどこにでもは入りこんでゐる。その精緻な觀察が、どこかイギリス風の健全な道德觀や、時々ブツキツシュになる人生解釋をも適度に肉づけし、また裏づけてゐる。「海神丸」や「大石良雄」に於て、十分幅と厚みとを示した女史は、最近の長篇「眞知子」に於ては、最も新しい女性の一タイプ——革命的思想の影響の下に、自分の生れ、そして育つた世界、ブルジョア世界に反逆する一女性を、的確に精緻に描いてゐる。

兩氏の外に、現代の女流作家としてあぐべきものに、岡本かの子、吉屋信子、宇野千代、林芙美子、中條百合子、平林たい子、窪川稻子、中本たか子等の諸氏を數へることが出來る。

岡本氏は、短歌や女流批評家として出發したが、一兩年は次々と創作を發表してゐた。「鶴は病みき」「母子抒情」等を見ると、その情感の豐かさと、その粘りつこさは、女流作家中優に一方の特色をなす人として注目されてゐたが、昭和十四年二月、溘焉として逝かれたのはまことに痛惜に堪へない。

吉屋信子氏は、今日の女流作家中最も大衆的人氣を持する作家といふべきであらう。その作る

ところは、多くは聖純な通俗家庭小說であり、內容も人物も割合に單調であり、狹隘でもあるが、その構成の間に醸される雰圍氣に、女性らしい情熱と純情とが濃厚である。それは女史のキリスト教的信仰が全體を明るくする爲であらうが、この魅力が婦人雜誌の有力な女流作家として、女史に動かない地位を占めさせてゐる。

宇野千代氏は、大正十年時事新報に短篇小說「脂粉の顏」が當選して以來、家庭生活の瑣事を扱つた小說を多く書いてゐる。林芙美子氏は「放浪記」によつて出發したが、樣々な經歷をもつた作家である。しかしその變化を極めた半生にも拘らず、その情感は生々しく、作品に現れた詩情の淸純さは美しいものである。

中條、窪川、中本、平林の諸氏は左翼作家として一時活躍したが、最近は餘り作品を發表されない。しかし、中條、平林の兩氏は、その創作の才能豐かな點に於て、女流作家中有數の地位を占むべきものであらう。この外現文壇の女流作家として數氏をあげることが出來るが、これらの人々については次の機會に讓ることにする。

なほ昭和七年に歿した三宅やす子女史も注意すべき作家である。「奔流」「金」「第二の反抗」等は苦心の勞作として文壇の注意を惹いた作である。

劇作家

次に劇作家としては、前記岡田八千代女史の外、大村喜代子、木村富子、弘津千代、岡田禎子等の諸氏を擧げることが出來る。長谷川時雨女史も亦戯曲に筆をそめてゐる。

岡田八千代女史は小山内薫氏の令妹であるが、文壇に現れたのは、令兄薫氏に先んじた位で、その作品も夥しい。「黄楊の櫛」はその代表作であらうが、これは家族制度の桎梏の中に呻吟してゐる日本女性の呪咀の聲を描いたもので、古い江戸情緒の雰圍氣の中に、近代的な社會問題が巧に取扱はれてゐる。總じて女史の作品は、その深き教養と理智的な性格によつて、從來の女流作家の、所謂センチメンタリズムから救はれて、思想的主題を取扱つても、破綻を見せてゐない。而も描寫の才と女性的な情緒に惠まれて、夙に一家の風をなしてゐる。

大村嘉代子氏は岡本綺堂氏に師事し、その薫陶を受けた。「たそがれ集」「水調集」等の著書がある。その代表作「みだれ金春」は、藝の尊嚴と遊女の誠を綯ひまぜたもので、どの一場を取つてみても、立派に芝居になつてゐるあたり、歌舞伎の傳統を活した作者の戯曲的手腕の憾さを示してゐる。

木村富子氏は松居松翁氏に師事し、大正十四年二月、處女作「玉菊」を早稻田文學に發表した。

爾來多くの劇作を發表してゐるが、いづれも、舞臺の美しさ、臺詞の洗煉といふ技巧的方面にすぐれた手腕がうかゞはれる。その狙ふ所は思想的方面といふよりは、美しい人情の世界が多いので、その作品は屢々脚光を浴びてゐるのである。

最後に女流歌壇の大勢について一瞥を與へてこの項を終らう。

歌人

先に明治末期に於て、與謝野晶子夫人の華かな活動について述べたが、誠に女史の活動はめざましく、力强いものであつて、その點、明治文壇歌壇を通じての驚異であつたばかりでなく、王朝時代の紫淸兩女を凌ぐ概があつた。鐵幹の「明星」とはいふものゝ、實際は女史が女王として君臨してゐたのである。「明星」は幾多の華かな功績を歌壇に殘して、明治四十一年一度廢刊されたが、この初期にあつて、三閨秀歌人として晶子女史と共に謳はれた人に、山川登美子、茅野雅子の二女史がある。兩氏の活動は到底晶子女史に比すべくもなかつたが、登美子氏は、その優婉、溫雅、淸楚にして悵々なる哀韻を持つた歌調は、晶子女史の情熱、奔放、華麗とよき對照をなしてゐた。しかし淸麗白百合の如き歌を多く殘して早世されたことは哀惜に堪へない。雅子氏は前二者に比すれば、晶子氏程の華麗なく、登美子氏程の哀韻なく、いはゞ平調溫雅な歌風であつた。「明星」は大正十年再刊されたが、後期にあつては、原田琴

子、岡本かの子、原阿佐緒、中原綾子の諸氏が歌壇に盛名をはせた。

「明星」に對して、佐々木信綱博士の竹柏園派も多く女流歌人を養成した。その中にあつて、最も社會的に有名なのは柳原白蓮、九條武子の兩女史である。兩氏の歌があれ程世間に喧傳されたのは、その歌の本質より來たといふよりも、その人の社會的地位、數奇な運命に對する大衆の好奇心といふものに因することが多いであらう。しかし又「文は人なり」の言葉通り、その人となりを反映し、哀嗟沈痛而も宗教味の豐かな所に一般の共鳴を得たのであらう。一體特殊な境遇は、しば〳〵すぐれた歌人を作るものである。萬葉時代の狹野茅上娘子、平家時代の建禮門院右京大夫等がそれであるが、白蓮女史、武子夫人の場合も、數奇な悲劇的運命が、その天賦の歌才を一層磨いたといふことが出來よう。武子夫人が孤棲十年、やる方なき思慕の思ひを遠つ人に馳せられた作には、沈痛極まりなき離愁の思ひがある。大正九年に發刊された「金鈴」はその間の消息をよく物語るものである。しかし、かうした迷ひ、疑ひ、惱みの十年の歲月の後、夫人の心境は遂にあきらめの清い寂光の都に到達した。「無憂華」はその夫人の最後の心境を述べたものである

以上二派の外に「潮音」の四賀光子、「創作」の若山喜志子、「アラヽギ」の今井邦子（最近は

「明日香」を主宰)、久保田不二子、「短歌至上主義」の杉浦翠子「遠つ人」の水町京子等の諸氏が華々しく各流派を立ゝてゐるが、これらの人々の功績を論ずるに未だ相當の歳月を借らなければならない。

なほ女流詩人、俳人に至つては誠に寥々たるものがあるが、中にあつて詩人の深尾須磨子氏、俳人の長谷川かな女氏等はよく男性作家に伍して健闘を續けて居られる。

結語——過去の業績と將來の發展

以上を以て、上下三千載に亙る國文學の上に働ける女流作家、及び國文學の上に描かれたる女性の姿について、その大略を述べたのであるが、一言にして之を言へば、國文學に於ける女性の業績は、決して男性のそれに劣るものでないといふ事が出來ようと思ふ。勿論作家の上から見る時、その數に於て男性作家の多いことは言ふまでもない。殊に中世近世にかけては、女性作家は極めて少かつた。しかし中古に於ては、むしろ女性作家が中心をなしてゐたと言ひ得るのであり、上代や最近世に於ても女性作家は相當に出てゐる。殊に短詩形としての和歌の如きは、何れの時

代にも、相當に多くの女性作家が輩出してゐるのである。もとよりこれらの女性作家も、中古を除いては、文學の主流に立つといふよりは、傍流であることを免れなかつたが、なほその單純ではあるが、純粹な境地は、文學の展開の上に、何物かを與へてゐることは事實である。

之を要するに、か弱いと考へられ、又扱はれてゐた日本女性の文學上に於ける業績は、決して男性に劣らぬのみならず、物語や日記や隨筆等に至つては、平安時代だけにしても、かの「源氏物語」「濱松中納言物語」「蜻蛉日記」「和泉式部日記」「紫式部日記」「成尋阿闍梨母集」「更科日記」「枕草子」等を始め、幾多の傑作が、皆女流の手によつて成つてゐるのである。若し國文學界から、女性の作品を悉く取り棄てゝしまつたならば、紅葉の落ち去つた冬枯の木立の樣に、誠に淋しい世界が殘るであらう。

嘗つて五十嵐力博士は、國文學に於ける女性の地位を次の如くに述べられたことがある。

「フランスの名高い批評家ジュール・ルメートルが現代作家論の中に次の如く言つてゐる。

『これはほんとの假說だが、かりにフランスの文學史から女性の作品を取り除いたとしても、これがために我が文學の歴史的聯絡は少しも斷ち切れぬであらう。又何等目立つほどの空隙をも生ぜぬであらう。從つて、かういふ事をいふのが、女性に對して、禮を失する事には少

しもならぬであらう。』

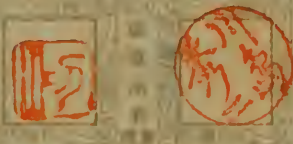
と、これは支那の文學に對しても、英吉利、獨逸の文學に對しても、恐らく同樣に言はれることであらう。が、我が日本の文學は、すつかりこれと事情を異にしてゐる。若し誰かゞ、日本文學について同じ樣な事を言つたとしたら、それは大變な認識不足の、事實を誣ひたものといふべきであらう。女性の作家を除くことによつて、我が文學史は聯絡を斷たれ、大穴を明けられるのである。從つてそれは大いに日本女性を侮辱することになる。何となれば、日本は偉大なる女性作家群を持つて居り、彼等の作品を除外しては、國文學展開の跡を連絡的に辿ることが出來ないからである。」

まことに博士の御說のやうに、「源氏物語」は我が國空前絕後の大小說であり、「枕草子」も同じく空前絕後の名隨筆である。我々は「源氏物語」を除外して、我が小說文學を系統的に說明することは出來ない。「枕草子」なしに、我が隨筆文學の起源發達を說明することは出來ない。又「蜻蛉日記」「和泉式部日記」「紫式部日記」「更級日記」等なしに、我が日記文學の發達を合理的に系統づけることは出來ない。かやうに偉大な女性作家を持つてゐること、その作品を除外すれば、文學史の系統が崩れるやうな女性作家を持つてゐることは、我が國の婦人にとつては、誠に限りなき

喜びと誇でなければならない。宜しく將來の婦人は、かうした過去先輩の輝しき業績について充分の認識を持ち、世界のどの國の婦人達よりも、眼を輝し大手を振つて、祖國文學の研究讀破に、更に新しき文學の創作に、迄邁往精進すべきである。

昭和十四年九月六日印刷
昭和十四年九月九日發行

定價 金三圓二十錢
外地ハ一割增

國文學女性史

著者 川島秀二

東京市神田區駿河臺三丁目六番地
發行者 尾高豐作

東京市淀橋區戸塚町一丁目二二〇番地
印刷者 河田保治

印刷所 明立印刷株式會社

發行所 東京市神田區駿河臺三丁目六番地 刀江書院

電話神田 三一八九 三二七一
振替東京 七三一一八

刀江書院刊行國語・歴史書目

著者	書名	價	送
東條操著	國語學新講	三・五〇	・一四
松岡靜雄著	增補日本古語大辭典（語誌篇）	一五・〇〇	・五七
松岡靜雄著	日本古語大辭典（訓詁篇）	八・〇〇	・三二
小林好日著	日本文法史	二・〇〇	・二二
瀧川政次郎著	日本社會史（補訂普及版）	二・〇〇	・二二
栢崎淺太郎著	歴史教育の基本問題	一・二〇	・一四
淺海正三著	新國史教授法	一・五〇	・一四
中川一男著	歴史學及歴史教育	一・五〇	・一四
田中秀央・黒田正利著	ギリシア文學史	六・八〇	・四五

國語史全十二卷（既刊六卷）

內容見本ハ御一報次第贈呈

東京市目黒区中目黒二ノ四六一

河瀬和子